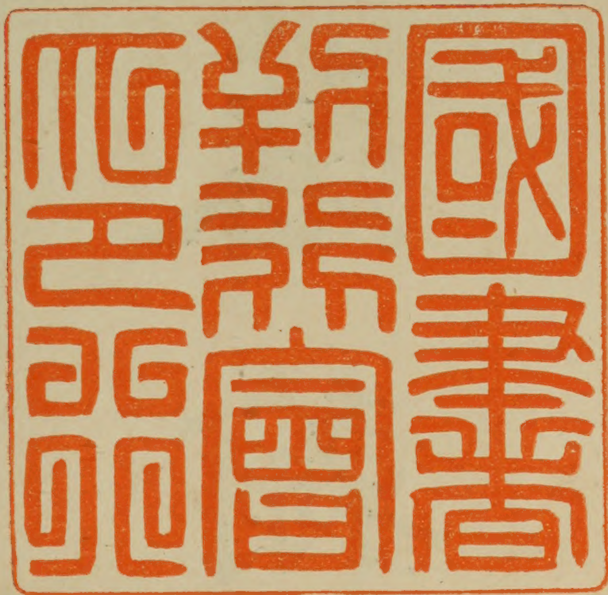
續藩翰譜

續藩翰譜



新井白石全集第二

例言

一、藩翰譜續編は、白石先生の藩翰譜に續きて、上は延寶八年庚申より、下は天明六年丙午まで、百七年間、萬石以上の諸侯の來歷を詳記したる書なり、寛政元年己酉九月、瀨名源五郎、岡田淸助、近藤吉左衞門、秋山松之丞、都筑市之助等、幕府の命を奉じて、此の書の編纂に從事し、後に中神順次、大久保五左衞門、高野孝之助、飯田直次郎、長谷川彌左衞門、屋代太郎、篠本久兵衞等も亦編纂を命ぜらる、文化三年丙寅脫稿、幕府その功を褒賞せり、此の間凡十八年

一本書編纂の顚末に關しては、藩翰譜始末（藤田安藏氏藏本）と題せる書に詳かなり、其の書に、

藩翰譜書續御用之儀最初寛政元年酉九月二十一日瀨名源五郎（奥御右筆組頭格 奥御右筆所詰）

岡田清助（寄合儒者）兩人へ被仰付同日近藤吉左衛門秋山松之丞（奥御右筆）兩人申談じ掛り同様取扱候様對馬守殿被仰聞都筑市之助（奥御右筆）認物仕候様越中守殿被仰聞候段佐藤又八郎申達（源五郎へは對馬守殿御直に被仰渡清助は今晩於御宅被仰渡候）

源五郎ハ病氣にて寛政八年辰十月十二日御役御免清助ハ寛政六年寅十二月廿七日御代官被仰付吉左衛門ハ寛政三年亥十月廿九日組頭被仰付候得共懸りはもとのごとし

一岡田清助助筆として中神順次大久保五左衛門（兩人共御徒）高野孝之助（御鐵炮玉藥同心）飯田直次郎（御徒目付市太郎悴）四人寛政二年戌七月廿二日より出役

一草稿は清助方にて取立事實校訂ハ當所にをいて取調候諸家の系譜誤少からず依之巨細に御記録と校合いたし候には殊外手數懸り候に付寛政五年丑十月廿三日長谷川彌左衛門（奥御右筆）屋代太郎篠木久次郎（後改久兵衛兩人共支配勘定格奥御右筆所詰）増懸り山田主水（後改波多野次郎八）志賀藤四郎、間宮平次郎（三人共表御右筆）手傳いたし候様攝津守殿被仰渡此三人ハ家譜校正を專にいたし彌左衛門太郎久次郎三人は文章潤色を專らにいたし候得との事也

波多野次郎八ハ寛政十二年申六月病死平次郎ハ奥御右筆見習被仰付候付

代山本直次郎寛政五年十二月廿四日より出役同六年四月四日奥見習被仰付候付代稲田喜藏同年閏十一月十七日より出役同人奥見習被仰付候付代中山長之丞同七年九月十一日より出役

藤四郎ハ奥見習被仰付候付藤井清次郎寛政六年寅六月十七日より出役同人奥見習被仰付候付代永田安次郎同七年卯四月三日より出役長之丞安次郎奥見習被仰付候付代船橋久五郎泉本庄左衛門同十一年未八月六日より出役此兩人奥見習被仰付候付代鳥井市十郎中島民次郎西丸同十二年申七月廿五日より出役市十郎奥見習被仰付候付代横山正太郎同年十一月十一日より出役民次郎奥見習被仰付候付代田中龍之助享和二年戌二月八日より出役同人奥見習被仰付候付代三宅内藏助文化二年丑正月廿四日より出役

一波多野次郎八代一人井中清書寫手のため男谷彥四郎丸毛權左衛門寛政十二年申十月廿九日より出役

權左衛門ハ文化元年子二月十日表御右筆吟味役助被仰付

一岡田清助儀寛政六年寅十二月廿七日御代官被仰付候付藩翰譜書續御用全く

ヅ、屋代太郎篠本久兵衛（兩人共御勘定格 奥御右筆所詰）銀十枚ヅ、拜領之同日於新部屋同斷御用相勤候付拜領物被仰付候旨攝津守殿被仰渡（列座無之）男谷彦四郎銀七枚篠本彦次郎銀五枚拜領之同斷ニ付銀子被下候旨被仰渡高野孝之助井上作左衛門銀十枚ヅ、根津淸次郎銀三枚荻野八百吉銀五枚頂戴之同斷御用認物仕候付銀子被下候旨被仰渡日下部銀五枚頂戴之

と見えたり、又、藩翰譜續編幷諸家系圖御用取扱中付寫（大槻如電翁所藏本）と題せる書あり、是れ亦本書編纂に關する始末を記せり、故に本書の卷首に附載せり

一、本書も亦藩翰譜と同じく、謄寫して世に傳へたる本、其の幾百種なるを知らず、寫本愈多くして取捨愈迷ひ、特に年月日、人名、地名、系圖等の相違の如きは、各本悉く異同ありといふも過言にあらざるが如し、今各本を對照して、系圖と傳記との符合せるものを採り、又各本とも合はざるものは、其の文字の下に括弧して註記

せり

一、假字遣送假字等は、或は正しきもあり、或は然らざるもありて、一定せざれども、すべて原本のまゝにしたり

一、本書を此の全集中に加へたるは、藩翰譜の續編として、單に學界の便をはかれるのみ

明治卅八年十一月

藩翰譜續編並諸家系圖

御用取扱申付寫（大槻如電翁藏本）

申渡候書付

寛政十一己未年正月十五日

堀田攝津守

御舊記調之儀是迄調懸り候分並追々出來可致品共引受取扱候樣可被致候

右於御用部屋伊豆守殿申渡書付渡之過而

寛永以來之諸家系圖取扱之儀內願之通被仰付候間右御用可被相勤候堀田豐前守えも被仰付候條其方重立取扱豐前守は差添勤候儀にとの御沙汰に候間得其意可被申談候

右書付を以御同人達之

堀田豐前守

寛永以來之諸家系圖取調御用之儀堀田攝津守重立御用相勤候樣に相達候內願之趣有之候付其方義差添勤候樣にとの御沙汰に候間得其意可被申談候

右於新番所前溜御同人申渡書付渡之

同二月二十八日

申渡候書付

奥御右筆 田中吉藏

青木忠左衛門

右御舊記調御用增掛申渡之

同 間宮平次郎

仲澤辰之助

長谷部周助

右同斷御用聞申渡之

同年二月二十二日

申渡候書付

大目付 池田筑後守

藩翰譜書繼諸家系圖取集候義取扱之

御目付 小長谷和泉守

松平田宮

萬石以下先祖書取集之義取扱之

右今度寛永以來之系圖調に付追々諸向申達義共も有之付大目付も取扱無之候而は難相成候是迄取扱候前書之御用向同樣之義付此度之義も右之面々取扱候樣

藩翰譜續編並諸家系圖

御用取扱申付寫（大槻如電翁藏本）

申渡候書付

寛政十一己未年正月十五日

堀田攝津守

御舊記調之儀是迄調懸り候分並追々出來可致品共引受取扱候樣可被致候

右於御用部屋伊豆守殿申渡書付渡之過而

寛永以來之諸家系圖取扱之儀內願之通被仰付候間右御用可被相勤候堀田豐前守えも被仰付候條其方重立取扱豐前守は差添勤候儀にとの御沙汰に候間得其意可被申談候

右書付を以御同人達之

堀田豐前守

寛永以來之諸家系圖取調御用之儀堀田攝津守重立御用相勤候樣に相達候內願之趣有之候付其方義差添勤候樣にとの御沙汰に候間得其意可被申談候

右於新番所前溜御同人申渡書付渡之

同二月二十八日

申渡候書付

奥御右筆　田中吉藏

青木忠左衛門

右御舊記調御用掛申渡之

同　間宮平次郎

仲澤辰之助

長谷部周助

右同斷御用聞申渡之

同年二月二十二日

申渡候書付

大目付　池田筑後守

藩翰譜書繼諸家系圖取集候義取扱之

御目付　小長谷和泉守

松平田宮

萬石以下先祖書取集之義取扱之

右今度寛永以來之系圖調に付追々諸向申達義共も有之付大目付も取扱無之候而は難相成候是迄取扱候前書之御用向同樣之義付此度之義も右之面々取扱候樣

申渡候

奥御右筆頭　近藤吉左衛門

奥御右筆　神山松之助

布施藏之助

寛永以來之系圖取調御用被　仰付之

奥御右筆　岡本勘左衛門

齋藤吉之助

間宮平次郎

山本直次郎

寛永以來之系圖取調御用分限帳掛ニ而兼可相勤候

右三度攝津守殿申渡之

同年三月朔日

支配勘定格
奥御右筆所詰　屋代太郎

寛永以來之系圖調御用自分より直ニ申付候品も可有之候間右之段申渡可被置候尤宅にも呼爲調可申候間其旨も可被申聞候事

右書付近藤吉左衛門へ攝津守殿申渡之

同月二十六日

向々へ渡候書付

御書院番
水谷伊勢守頭　高林彌藏

御小性組
石河壹岐守組
一郎養父　大久保酉山

新御番
小野飛驒守組
又左衛門養父　木部猶存

小普請組
渡邊平十郎支配　高木善次郎

右寛永以來之系圖調御用被　仰付御用中爲御手當年々銀十五枚被下之

小普請組
戸田中務組
眞八郎養父
大林新次郎
右同斷御用手傳被　仰付之御用中五人扶持被下之
御同心
定間與右エ門組
小田文藏
右同文言三人扶持被下之
支配勘定格
奥御右筆所詰
太郎養子
屋代小太郎
右同文言寛永已來之系圖調御用書物相認可申旨申
渡之
右書付向々へ攝津守殿申渡之
同年四月二十三日
表火之番
後藤新太郎
能勢甚四郎組

御徒
三輪善平
竹田吉十郎組
御徒
松谷安兵衛
近藤三左衞門組
西丸御徒與頭
源次悴
同組御徒見習
日下部銀之助
御徒目付與頭
安左衞門悴
神尾吉之助
御徒目付
政七悴
八木岡大助
右諸家系譜調御用小長谷和泉守松平田宮手附書
役申渡出役中爲御手當御扶持方三人扶持つゝ被
之下
同年七月十五日

向々渡候書付

御勘定
男谷彦四郎

小普請頭
渡邊平十郎支配
丸茂權左衛門

同
室賀壹岐守支配
傳右衛門養子
山岡傳十郎

右寛永以來之系圖調御用相勤候樣可申渡候御用中
爲御手當銀十五枚宛被下之候間其段可被申渡候

細井豐前守組
御徒
望月文之助

近藤吉左衛門組
御徒見習
日下部銀之助

同文言御用手傳候樣可被申渡候御用中御扶持方三
人扶持被下候段も可被申渡候

支配勘定格
奥御右筆所詰
篠本文次郎

右寛永已來之系圖調御用相勤候樣可被申渡候

右文次郎悴
篠本源太郎

右同斷御用御手傳候樣可被申渡候御用中御扶持方
三人扶持被下之候間其段も可被申渡候

右向々支配頭々へ攝津守殿申渡之

清水勤番支配へ
清水表向勤番
吉見儀助

右同文言

右勤番支配へ攝津守殿申渡之

同年八月十四日

稻葉主税組
御徒
辻忠右衛門

右藩翰譜書繼手傳申渡之

大目付へ

萬石以下御目見以上先祖書御用ニ付差出候樣去ル亥年相觸候處今以不差出候向も有之候早々取調當年中ニ可差出候

一先祖書認方之義先達而相達候趣を以去ル午年迄の事跡相認可申候尤其家々の系圖所々有之義斗相認外々廣く不及穿鑿候難相知義も不詳と記し可差出事

但部屋住之面々不及指出事

一類燒等にて書物等燒失いたし先祖之義家傳も不詳候はゝ家の申傳而已を相記不苦候且又品ニ依あらはに他え洩し難き子細も有之義は封書にて頭支配え差出頭支配よりも其儘差出可申事

一文言等必不拘文例ニ假名書にても不苦候都て家之系譜家傳之通不取飾有の儘認可申候頭支配にても先は不及加筆書出之儘差出可申事

一先達先祖書差出候面々は別段差出候ニ不及候間亥年已來去年迄之義相認可差出事

一先祖書之內難相分義等有之節は堀田攝津守并堀田豐前守より直に相尋候義も可有之候尤頭支配有之面々は頭支配迄相尋候事

四月三日

右書付伊豆殿堀田攝津守殿渡之

別紙池田筑後守へ相達候趣

先祖書系譜差出候以後去る午年迄之系譜尙又相調當年中も可被差出候

一代々并部屋住にて病死にても嫡子之分誕生之年月日并出生土地之事

右之分病死之土地法名并葬地且は寺院等の名之事

但儒葬等之分は其儘之事

一右之分妻女之父之俗名姓實名共に認之事

一母は父之本妻に候はゝ右同斷之事

一別腹にて兄弟有之候はゝ其母は後妻か家女かの譯認同腹に候はゝ母は誰に同しと可認候

一家之紋替紋幕之紋之事

但由緒有之分又は故有之改候分も其儘之事

右之分此度可被書出候

一家々之系譜舊記等之義に付御用之品堀田攝津守堀田豐前守より直に相尋候義可有之候此段も爲心得相達置候

右之通池田筑後守より万石以上之面々へ相達候事

文化元甲子年八月四日
松平越前守家來え可申達覺
御家來中之內古來御旗本より御附屬有之候家柄之者系圖一覧いたし度候事
一依田右衛門佐信蕃之子孫も御家中ニ有之趣承及候當時も相續之事ニ候旨系圖舊記等持傳も候はヽ一覧致度候事
依田一名芦田とも申候事
松平越後守家來へ可申達覺
同文言
但依田と申候は無之
松平越前守家來
蠏江善右衛門
松平越後守家來
島田定右衛門
右家來呼出申達
右寫改等に不及持傳之儘不取繕可差出旨申達之
同年九月十二日
何之某え
家來中之內元御家人之筋目のもの有之候はヽ系圖一覧いたし度候事

右留守居呼出之公用人より申達之
都合二十一軒
松平出羽守
松平大和守
松平左兵衛佐
井伊掃部頭
松平越中守
酒井左衛門尉
酒井修理大夫
榊原式部大輔
松平和泉守
松平立丸
奥平大膳大夫
松平下總守
內藤帶刀
松平主殿頭
石川千勝
內藤豐前守
本多中務大輔
松平潤之介
松平讃岐守

藩翰譜續編凡例

一此編は藩翰譜に續て延寶八年より下は天明六年に至る迄百七年の間萬石より上つ方の家譜悉く記す者也藩翰譜は祖先の出所より一世の功業官錄の盛衰に至る迄都て大節を上げて小事を記さず今もまた其例に從ふといへども細子をも殘さじとするは自然の勢なれば彼の例に違ふ事ども少なからざるなり

一諸家の上つれる系圖をもて前編の系圖に繼んとするに合はざるものあり故にいまたてまつる所の家譜及寛永諸家譜に因りて別に備考系圖一編を作りて此編に添へぬ

一姓氏異同は其據なきものに從ふたとへば安部攝津守が如きは前編に安部氏と記し家譜に滋野氏と書す然るに寛永諸家譜に清和源氏滿快流に屬すよりて此編は源氏に改む家譜には清和天皇の皇子貞保親王の後胤にして滋野姓安部氏と記しまた源とも記して一書捽擠せり抑滋野氏の出所を考るに新姓氏錄抄に滋野宿禰は右京神別にて神魂

命五世孫天道根命の後也と見えたり然るに寛永譜眞田が傳には清和天皇の皇子貞秀親王の後滋野の姓をたまふと記せり系圖纂載る所滋野氏の系譜を按るに或は貞秀親王より出といふ二書區々にて一定ならず滿快は貞純親王の孫にしておなじ清和の後胤とは云ながら其流おのづから別也ことに貞秀親王善淵王共に尊卑分脈にも所見なし出所定かならざれば暫く寛永譜に從ふ事玄かり

阿部は前編に阿部氏と記すと雖も此編は寛永譜に據りて安倍と書す（姓氏錄抄及び尊卑分脈を按るに阿部と書せるものは非なり）三宅は前編疑を闕て藤原に從ふ寛永譜藤原支流とす然るに家譜は源氏といふ是斷じて從ふべからず故に此編は藤原とす久世は前編に藤原と記す然るに寛永譜に村上天皇十四代具通より出ると家譜にも源氏といふによりて此編は源氏に改む三浦は家譜に源氏と記すと雖も寛永譜及び前編に於て平氏に從ふ奥平は家譜に村上源氏といふ然れども寛永譜に良文流に屬し前編には又平氏と記す上は今更改むべきにあらず田村は前編に藤原氏とす寛永譜には載ざれば所見なし家譜は坂上氏と書す前編は他姓の子を養ふ故

に氏を改とせる故に藤原と記せし也此編は他姓の子を養ふと雖も氏を改むと云ひ故に坂上に改む一柳久留島は前編に源氏と記す寛永譜及家譜は越智氏といふ故に此編は越智に改む

一家譜の說おほやけの記錄と符合するをもて本傳を作り家譜のみ見えていまだ徵を得ざるものは分注してこれを分つ或は前編に致仕を記して卒年の續編にかゝる類は記錄し顯然たりといへども分注せる事もあり續編の中におけるもまた然り

一延寶八年の後卒せし人は其傳未た全からざるに寄て更に其人より譜を作りて重復をいとはず

一名乘を記す事は家を繼し間に唱へしを譜に記し初名乘しと致仕の後改しは悉く系圖に出しぬ

一此編は嫡流を專らとす家に寄て二男よりおくつかたの子及び女子はみな系圖に出せるのみにてことなる子細なきはあなか

ちに譜に題すことなし

一前編に記す所此編とことなる事あるは其徵せるところ正しからざる事ありしにやよりて其違ふ事をば分注して斷りぬ

藩翰譜續編總目錄

卷之五下

卷之七上

巻之九下

藩翰譜續編總目錄畢

藩翰譜續編卷之一上

近藤吉左衛門等撰集

越前家

越後守光長　附越前守綱昌　出羽守綱近
兵部大輔吉品　附中務大輔昌勝　備中守直賢
上野介進榮　志摩守直丘　若狹守直明
大和守直矩　附主稅頭知清

越前

源秀康

―忠直

―綱賢　徳千代
侍從下野守從四位下
承應二年十二月廿一日叙任
寛文六年十二月廿八日左近衛權少將
延寶二年正月晦日卒四十二歳
法名源剛院大譽通本勇徹

―女子二人　越前守光通室　伊達大膳大夫宗利室

―綱國　萬徳丸
實永見東市正長賴長男
侍從參河守從四位上
延寶三年五月廿三日叙任
天和元年六月廿六日配流備前國福山

光長　仙千代
母
台徳院殿弟三姫君
左近衛權少將越後守從四位下
寛永六年十二月七日叙任
慶安四年十二月五日從三位
右中將
天和元年六月廿六日配流伊豫國松山
貞享四年十月廿四日赦
同年十二月廿五日復任
元祿十年五月六日致仕
寶永四年十一月十七日卒九十三歳
法名慧照院闕心一法

女子二人　高松好仁親王室
九條關白近房公室

長頼　松千代
永見東市正
寛文七年八月廿六日卒三十八歳

長良　熊千代　永見大藏
天和元年六月廿一日配流八丈島
元祿十四年四月五日死七十歳

貞享四年十二月廿七日赦
寶永五年八月十二日薙髪號更山
享保廿年五月五日卒七十四歳
法名更山院馨譽鐵心

宣富　源之助
初矩榮　長矩
實大和守直矩三男
左衛門督從四位下
元祿七年十二月十八日叙任
同八年十二月七日改備前守
同十年十二月十八日侍從
同十二年十二月廿五日左近衛權中將
寶永五年正月廿五日改越後守
享保六年二月七日卒四十四歳
法名源乘院流譽慈海

女子
許嫁松平佐渡守宗元宗元卒
許嫁松平淡路守宗貞

某　淺五郎
享保十一年十一月十一日卒十四歳
法名智圓院境譽了巖玉峯

女子二人
松平山城守信將室
織田出雲守信朝室

某　豐之助
享保元年六月十七日卒七歳

女子　家人　小栗美作正矩妻

長照　又三郎
主税頭知清三男繼淺五郎某
越後守從四位下
享保十六年十二月廿三日叙任
同廿年十月十三日卒十六歳
法名戒善院忍譽稽元精微

長孝　庄次郎
實出羽守宣繼二男
越後守從四位下
元文三年十二月十八日叙任
寬延二年十二月十八日侍從
寶曆十二年壬四月四日卒三十九歳
法名隆照院英譽泰岳語心

女子
實藤堂大學頭倘治女
松平左兵衛督信有室離別
嫁太田原飛驒守康清

康成　仙千代　光丸　初康致
從四位下越後守
明和三年十二月十九日叙任
安永六年十二月十八日侍從

直義　久松
淡路守近貞養子

女子　早世

長賢　司馬五郎
安永五年十二月二日卒廿三歳

長裕　千松
安永四年九月廿一日卒十九歳

長彝　鐵彌　式部

某　仙千代

某　德丸

一世
忠昌

二世
光通

昌勝
仙菊中務少輔從五位下
慶安元年十二月晦日叙任
寛文三年十二月廿八日從四位下改中務大輔
元祿六年七月廿七日卒五十八歲

昌親
兄光通養子履歷見下

三世五世
吉品　福松　辰之助
初昌親　昌明
兵部大輔從五位下慶安四年十二月廿八日叙任　寛文四年十二月廿八日從四位下　延寶二年五月六日爲兄光通嗣　同年十二月晦日侍從　同四年七月廿一日致仕　貞享三年閏三月六日綱昌以狂疾廢吉品再立　元祿九年十二月五日左近衞權少將　寶永七年七月五日致仕正德元年九月十二日卒七十二歲　法名操深院順譽竜山和祥

直堅　權藏
初直興
備中守從五位下
延寶三年十二月十六日叙任
元祿十年正月十七日卒四十二歲
法名法嚴院學峯皈山

直知　岩次郎　內膳
內膳正從五位下
寛永元年三月廿三日叙任
同年十一月九日卒二十歲
法名淨源院學峯圓心

直之　勝十郎　齊宮
圖書
實式部少輔近時二男
信濃守從五位下
寶永六年三月七日叙任改近江守
享保三年六月十日卒三十七歲
法名泰亮院推嚴儼道

女子二人
松平信濃守綱茂室
一人早世

直好　善次郎
實松平小一郎定員長男
兵庫頭從五位下
享保三年十二月十八日叙任
後改河内守
元文四年二月十六日卒廿九歲
法名顯松院紹榮吟座

某　早世

女子三人
山口修理亮重明室
赤松右衛門範上妻
直知養女

女子
實小十郎定員女
岡野織部成常妻

堅房　福次郎
日向守從五位下
寛延二年十二月十八日叙任
安永二年三月二日卒四十歲
法名本立院德風覺源

近榮　内記
松平仁右衛門近富養子

某　久五郎

直經　數馬

女子
實直堅女
直之室

某　德丸
寶曆七年六月十七日卒

女子　早世

直紹　豐太郎
從五位日向守
安永六年十二月十八日叙任

某　錦吉　早世

女子　早世

賴古　辨之助
諏訪左源太賴數養子

直孝　多膳
井上左太夫正峯養子

女子
松平安藝守家人
上田圭水安虎妻

豐信　鎌次郎
佐久間小膳信平養子

女子二人
牛井大和守成英妻離別
嫁松平賴母近周
瀧川源八元鄉妻

某　早世

女子二人

女子　早世

四世
綱昌　仙菊丸
實中務大輔昌勝男　侍從越前守從四位下　延寶五年十一月廿三日叙任　同四年七月廿一日繼家　同八年八月十八日左近衛權少將　貞享三年壬三月六日以狂疾廢吉品再立　元祿十二年二月十一日卒三十九歲　法名清淨院明譽元巖照徹

女子　烏丸內大臣光榮公室

長敎　大藏
家人本多孫太郎長員養子

元重　初昌方長吉　實松平大膳大夫綱廣五男　大監物從四位下　元祿四年十二月十八日叙任　同十一年五月廿九日依病籠居

吉邦　初昌尚昌邦勝千代　伊織　大炊　實中務大輔昌勝六男　大炊頭從四位下　元祿十四年十二月十八日叙任　寶永元年十二月十一日侍從　同七年七月五日繼家　正德四年十二月十八日左近衛權少將改伊豫守　享保六年十一月四日卒四十歳　無嗣以宗昌奉祀　法名昇安院任譽智信本榮

女子　宗矩室

某　伊織
吉邦遺腹子宗昌養之

綱昌　仙菊丸
吉品養子履歷見上

某　鍋千代　早世

女子　諏訪安藝守忠虎室

七世
宗昌　初昌平仙鐵　內匠　內匠頭從五位下　元祿三年十二月廿六日叙任　寶永四年十二月廿三日從四位下改中務大輔　享保六年十二月十一日繼吉邦　同月十八日侍從　同九年四月廿七日卒五十歳　法名豐仙院圓譽照光安住

女子　早世

昌純　菊千代　內記

某　仙之助　早世

女子二人　太田原備前守清信室
松平賴母某妻

昌邦　勝千代
吉品養子履歷見上

昌貴　重千代　釆女
木工

八世
宗矩　千之助
初昌昭
實主稅頭知淸二男
侍從兵部大輔從四位下
享保十一年十二月十二日敘任
同十八年十二月十八日左近衞權少將
寬延二年十月廿一日卒三十七歲
法名德立院廣譽賢提

某　伊織
實吉邦遺服子

九世
重昌　小五郞　於義丸
實德川刑部卿宗尹卿嫡男
左近衞權少將越前守從四位上
寶曆五年六月十二日敘任
同八年三月十八日卒十六歲
法名源隆院俊譽慈照哲雄

十世
重富　仙之助
實宗尹卿三男
從四位上左近衞權少將兼越前守
寶曆十年四月十八日敘任

女子　松平大膳大夫宗廣室

某　千五郎　早世

治好　於義丸
從四位上侍從兼伊豫守
天明三年九月十五日叙任

女子

某　於義丸

女子二人　早世

直政　秀康卿四男松平出羽守祖

綱隆

某　大學
慶安四年四月十日卒

某　辨丸
寛文四年十二月八日卒

某　小次郎
明暦元年四月十八日卒

女子　有馬中務大輔頼元室

綱近　萬助　和綱周
甲斐守従四位下
延寶元年十二月廿一日叙任
同三年六月四日改出羽守
同年十二月廿六日侍従
寶永元年五月晦日致仕
同年六月五日改外記
同六年十一月十五日卒五十一歳
法名隆光院光院光譽道祐

女子
式部少輔近時室

近憲　千松丸

宗衍　幸千代
侍従出羽守従四位下
寛保二年十二月十一日叙任
寶暦五年十二月廿一日左近衛權少将

治郷　鶴太郎　初治好
従四位下侍従佐渡守
明和元年壬十二月廿一日叙任
同四年十一月廿七日改出羽守

某　辨之助

吉透　幸松丸　頼母　初近憲
實出羽守綱隆五男
民部少輔従五位下
元祿十四年十一月十八日叙任
寶永元年六月五日改出羽守
同年十一月十三侍従四位下侍従
同二年九月六日卒三十八歳
法名源林院直譽觀道俊巖

女子二人　一人早世
許嫁松平大膳大夫吉廣卒

宣維　庄五郎　初宣澄
侍従出羽守従四位下
正徳二年二月廿一日叙任
享保九年十二月廿一左近衛權少将
同十六年八月廿七日卒三十四歳
法名善院大譽覺海澄心

某　圓次郎
元祿十五年正月七日卒

女子　早世

某　長次郎
正徳三年七月八日卒

明和四年十一月廿七日致仕改主計頭
安永六年十一月廿八日入道號南海
天明二年十月六日卒五十四歲
法名大隆院仁譽義溫南海

長孝　庄次郎
越後守長德養子

女子
藤堂和泉守高悠室

女子
稻葉丹後守正諶室

衍親　駒次郎

女子
栃木隱岐守正綱室離別

定靜　連三郎
蒔田伊勢守定安養子

女子二人
田村因幡守建顯室
戶田孫十郎光詮妻

近榮 大助
上野介從五位下
承應元年十二月十八日敍任
元祿十五年三月廿三日致仕
享保二年九月十九日卒八十六歲
法名法雲院松隆宗長

近時 大助
式部少輔從五位下
延保三年十一月廿六日敍任
元祿十五年壬八月十八日卒四十四歲
法名滿岸院覺譽正徹了道

女子
實田村因幡守建顯女
遠山內膳正政德室離別
嫁板倉越中守重高

近朝 安次郎兵庫大助 初近信
隼人正從五位下
元祿十五年十二月十八日敍任
後改飛彈守
享保十三年十月十五日卒四十八歲
法名圓德院然譽宗門寬翁

近之 勝十郎 齊宮 初近國
松平內膳正直知養子

某 四方三郎
元祿十一年六月十七日卒

近房 龜之助

女子 早世

近明 龜之助 大藏 玄蕃 初近房
實近時四男
肥前守從五位下
享保十四年十二月十六日敍任
後改式部少輔近江守
寬延二年八月九日致仕號猪寬
寶曆五年四月廿一日卒五十四歲
法名端雲院峯譽猪寬日仁

近輝 多一郎 式部
式部少輔從五位下
寬延二年十二月十八日敍任
寶曆七年五月九日卒二十七歲
法名戒覺院寬譽奇雲映山

近貞 鱗三郎 大藏 初近峰
實近明二男
淡路守從五位下
寶曆七年十二月十八日敍任
安永二年十二月廿三日致仕
改大內記
天明二年九月七日卒五十三歲
法名本源院體譽狸門壽榮

女子八人
丹羽式部少輔氏宗室
二人早世
近藤主殿用叙妻
二人早世
藤懸釆女長種女
一人早世

近哲　氏之助
寶曆五年六月廿五日廿五歲

女子　早世

某　茂之助　早世

近峯　麟三郎

女子
渡邊豊前守信綱室

某　大助　早世

直義　久松　主稅
初長義　近義
實越後守長孝二男
從五位下淡路守
安永二年十一月十六日叙任
後改上野介

女子
實渡邊豊前守信綱女
直義室

某　麟三郎

隆政

女子二人
細川越中守綱利養女
松平庄次郎守信妻

直丘　岩千代　頼母
初直時　直守
實出羽守直政四男
美作守從五位下
延寶七年十二月廿八日叙任
元祿十三年九月朔日改志摩守
正德二年十二月廿八日卒四十八歲
法名法性院連譽直覺

直員　亥之助　求馬　頼母
實新庄主殿直詮二男
彈正少弼從五位下
正德三年五月十六日叙任
後改志摩守
明和二年十一月廿一日致仕
同五年四月十四日卒七十五歲
法名德本院禮譽潤仁性海

直道　辰之助　頼母
大隅守從五位下
明和二年十二月十八日叙任
同四年壬九月廿六日致仕
安永五年十一月十六日卒五十三歲
法名體信院轉譽知道覺阿

女子二人
大久保河內守忠敬室離別
嫁阿部靭負正依離別
戸田孫十郎光知妻

直行　龜之助

直行　龜之助
實直員二男
從五位下兵庫頭
明和五年十二月十八日叙任

女子二人

直基
秀康卿六男松平大和守祖

女子
許嫁堀田右近正親離別

直矩　藤松
大和守從四位下
承應三年十二月廿六日叙任
寬文八年十一月廿七日侍從
元祿八年四月十五日卒五十五歲
法名天祐院鐵船道駕

女子
實越前家人本多内藏助昌氏女
内藤豐前守信良室

某　藤松

女子
實東園權大納言基賢卿女
京極甲斐守高任室

女子二人　共早世

基知　源次郎　又六郎
和泉守從五位下
元祿六年十二月十八日叙任
同八年六月十三日改大和守
同年十二月十八日從四位下
寶永四年十二月廿三日侍從
享保十四年八月十四日卒五十一歲
法名仰高院天性典賢

女子　早世

矩榮　源之助
越後守光長養子

知淸　源五郎　求馬
靭負佐從五位下
正德二年十二月十五日叙任
後改主稅頭
享保六年壬七月十日卒四十歲
法名万大院龍澤英門

明矩　初義知　金之助
實主稅頭知淸嫡男
相摸守從五位下
享保十年十二月十八日叙任
改兵庫頭土佐守
同十四年壬九月五日改大和守
同年十二月十八日從四位下
元文元年三月十一日侍從
寬延元年十一月十七日卒四十五歲
法名正眼院廓然無堅

女子
實知淸女
榊原式部大輔政本室

義知　金之助
後明矩

女子
基知養女

女子　出羽守宗衍室

朝矩　又太郎　嘉太郎　初直賢
大和守従四位下
寛延二年十二月十八日叙任
明和二年十月十五日侍従
同五年六月十三日卒三十四歳
法名靈鷲院招華徹笑

矩道　金次郎　早世

矩豊　萬吉
由良信濃守貞整養子

女子　早世

某　順之助　早世

某　七次郎　早世

知隆　亀之亟
本多淡路守忠尙養子

直恒　千太郎
従四位下大和守
安永六年十二月十八日叙任

矩貞　進之助
土井大炊頭利重養子後歸

矩峯　吉五郎

矩道　要人

昌昭　千次郎
中務少補宗昌養子

長熙　又三郎
繼淺五郎某

女子
津輕出羽守信寧室

女子
秋月山城守種茂室

直良
越前中納言秀康卿七男松平左兵衛督祖

女子
早世

女子
上野介近榮室

某
早世

某
早世

女子
有馬伊豫守豐甎室

女子二人
西洞院正三位信庸公室
津輕土佐守信明室

矩寛
又五郎

女子
早世

結城家系

（此系圖は大和守直基に係るものにして原書には上欄に掲けられしを今こゝに掲く）

天津兒屋根命廿三世
藤原鎌足　正二位內大臣　大職冠
天智天皇六年八月二日始賜藤原姓

不比等　右大臣從二位贈正二位　大政大臣謚淡海公又文忠公

房前　氏長者參議正三位　中將大將賜正一位大政大臣

魚名　河原左大臣

藤成　從四位下伊勢守

豐澤　從四位下備前守

村雄　從四位下河內守

秀鄉　俵藤太從四位上　武藏守

千常　從四位上左衞門督

公脩　內舍人頭

兼光　足利陸奥守

賴行　足利六郎

武行　從五位下

行陸　下野守

宗行　左衞門尉

行政　小山民部下野介

行光　小山四郎左衞門尉

政光　小山四郎　下野介　小山長紹結城初

行義　下河邊庄司

兼助　吾妻權頭上野介

行則　太田壹岐守

- 朝政　小山下野判官從五位下　左衛門尉法名生西嘉貞四年四月晦日卒八十八歲
- 宗政　長沼五郎左衛門　淡路前司
- 朝光　結城十郎左衛門尉　上野介入道日阿　母八田權頭年綱女　治承四年移結城領一萬八千町之於釆地　建長六年二月四日卒八十四歲
  - 朝廣　七郎左衛門尉　上野大藏　後少輔妙藏院
    - 廣綱　上野介從五位下　法名新福寺
    - 祐廣　白川左衛門上野介
    - 時祐　金山五郎左衛門
    - 信朝　平山民部少輔
    - 義廣　小川七左衛門
  - 時光　寒川四郎左衛門
  - 重光　山崎五郎左衛門
  - 朝利　上野十郎稱綱戸
  - 朝俊　平方四郎
- 朝信　吉見次郎

- 時廣　七郎左衛門尉　法名法藏寺　正德二年七月朔日卒五十歲
  - 貞廣　七郎左衛門尉　法名號正中寺　正應廿年十一月三日卒
    - 朝祐　左衛門尉　法名號松福寺月堂寂圓耆士　建武三年四月十八日於多頁濱討死廿九歲
- 宗重　大內彌五郎新左衛門尉　攝津守法名道準
- 盛廣
- 重廣　小萱民部少輔
- 泰親　小田川太郎左衛門　二階堂民部少輔養子
- 直朝　七郎左衛門尉　中務大輔　應永二年四月三日於關舘討死　十九歲　法名號照道寂照
  - 直光　中務大輔應永二年正月十一日卒八十二歲　法名號花藏寺天海聖朝
    - 基光　中務少輔從五位下　法名號廣智寺高岳禪貫

某　三郎駿河守相瀨之祖

滿廣　七郎下野守從五位下　母小山義政姊應永廿三年四月九日卒廿七歲　法名號雲兒聖龍

氏朝　中務大輔嘉吉三年十月六日卒　法名圓通寺藤山隔水

持朝　七郎中務大輔嘉吉元年四月十六日於結城之城戰死　法名號福嚴寺聖雄廿一歲

朝兼　次郎

長朝　左馬助比殿

泰朝　下野守法名聖安寺

成朝　七郎上野介中務大輔　法名巖舟院宗明玄順

氏廣　左衞門佐　文明十年三月十九日卒三十歲　法名號乘圓寺日峯宗元

政朝　七郎左衞門督母小田成治妹　天文四年七月十三日卒六十九歲　法名號宗正寺

政勝　七郎左衞門督母宇都宮　下野守武綱姊　永祿二年八月朔日卒五十六才　安穗守大里膳長

時朝　六郎左衞門督　慶長十九年七月二日卒　法名泰養院宗靜孝善行年八十二歲

秀康

女子　秀康簾中

高朝　下野守小山名代　天正二年十二月廿日卒六十七才

直基　從四位下侍從大和守

越前

○從三位中將源光長は參議忠直の嫡子童名仙千代御母は大相國家の姫君也（勝姫君後大崇院殿と稱す高田殿と世に申せし也）元和元年十一月越前國北の庄に生れ七歳の時父に代りて江戸にまゐりはしめて見參にいり九年の春父忠直事ありし時九歳にて家つかる（越前國七拾五萬石は父忠直豐後の國にうつされ剃髮して一伯と號し萩原又津守といふ所に住居ありしか前編にくはし）その年の秋北の庄に御使（島田治兵衞利正高安九兵衞正次）下されて家の老等に國務の事仰を請て免されぬ仙千代は勝姫君と共に江戸にむかへさせ給ひしはらくかほとは御前にて養なはせ給ふ仙千代成長の後糀町の館にうつる母の姫君には牛込にて宅地給りてすませたまふこれより高田殿と申す寛永元年の春越前國を轉して越後國高田の城にうつり（廿五萬石○伊豫守忠昌に代る後一伯豐後の御料田高田殿化粧田を合て廿五萬石餘を領す前編には此時其四萬石高田殿御領也二萬石と記せり家に傳はる所とは異也）同しき六年十二月七日御所にまゐりて元服し從四位下の左少將に任し御諱字賜はりて越後守光長とそ名のりける（中川卿の御刀を給ふ）慶安三年一伯卒せしかは明る四年の春配所にて生れし男子二人家人になすへきよし仰下され一伯豐後にての所領（五千石）を越後國河原崎の庄にかへてそのふたりにわかち賜はりぬ（松千代三千石熊千代二千石後に永見東市正長賴同大藏長良といふ）おなし年の十二月從三位の加階して右近衞權中將にすゝみ公の御おほえめてたかりけるに年移りて天和元年六月廿六日家人等爭論の事によりて家うしなひ其身は伊豫國松山になかされて松平隱岐守定長にあつけらる（此時は萬俵つけらる光長家うしなひしは家の老小栗美作萩田主馬等か爭論より起れり此美作といふは當家一二のきり人なりしかは一伯豐後にてもうけられし姫を配せられ男子二人をうめり兄は世をはやくし弟を大六といふ美作機要の職に居てよろつ心のままにふるまひしあまりに彼大六を主のよつきとなさん事をはかりしより家人等其黨二つにわかれ確執やむ時なくつひにおほやけの御裁行となりて此度の事には及ひし也美作父子は死をたまひ永見大藏萩田主馬には八丈島になかされ其餘の家人ともおほく配流に處せられしなり）かくて貞享四年十月廿四日光長赦免八月めしかへされあらたに廩米を賜はり（三萬俵）十二月廿五日官爵もとのことくになして元祿十年五月六日嗣子雅榮に家ゆつりて致仕し寶永四年十一月十七日に卒すとし積りて九十三歳光長の嫡子左中將綱賢はさきたちてうせしかは永見東市正長賴の男万德丸を養うて子とす万德丸延寶三年五月十八日見參にいり十一月廿三日元服して御諱字賜ひ綱國と名のる從四位下の侍從兼三河守になる天和元年光長つみ蒙むりし時備後國になかされて水野美作守勝種に預けられ（三萬俵つけられし也）貞享四年同しくゆるされて歸りしかとやまひおほきによりふたゝひこの矩榮を養ひて嗣子とせしなり矩榮は大和守直矩の三男なりはしめ源之助といふ元祿六

年十一月廿八月初見の禮をはりあくる七年の冬從四位下して左衞門督に任し家ゆつられし後侍從にすゝみ十一年正月十四日おほくの地つけられて美作國津山の城を賜ふ十萬石おなしき十二年の冬左少將に任し寶永六年十一月十三日御諱字たまはりて宣富といふ享保六年二月七日津山にありて卒す四拾四歳とそ聞へし嫡子淺五郎時に九歳十一月廿六日家をつきおなしき十年十二月朔日はしめて出仕しいくほとなくて明る年十一月十一日身まかりしなり十四歳淺五郎十七歳にみたすしてうせけれは國除かるへきをこれはさる筋目ある家なれはおほしめさるゝ御旨ありて一族主稅頭知淸か三男又三郎長照に家つかせらるへしとて所領の地の半を賜ひけり津山の城にして五萬石出羽守定淮兵庫頭義知二人にて此事をおほせ下されける長照同き十六年はしめて見えたてまつり十二月從四位下して越後守になり其年の冬身まかりぬ十七歳子なかりしかは出羽守宣矩か二男庄次郎長孝を養ひて家つかす長孝元文元年の十一月初て見參し三年の冬從四位下の越後守になり寛延二年十二月侍從に任し寶暦十二年閏四月四日卒して三十九歳其子越後守はしめ光丸康致後康成おなし年五月父につき明る三年二月十九日はしめて拜謁しその冬從四位下に叙し安永六年十一月侍從にすゝむ廿六歳

○左少將兼越前守源綱昌は兵部大輔昌親の子實は中務大輔昌勝昌親の兄の養子也幼名は仙菊丸寛文八年四月廿三日はしめて見參し延寶三年十一月廿三日元服して御諱の字賜はり備前則房の御刀を給ふ從四位下侍從兼越前守に任しあくる四年の秋家をつく越前國福井四拾七萬石この時父昌親よはひいまた壯なりけれと病痾によりて致仕の事はこふまゝにゆるされしかよろつ後見して政事沙汰すへしと仰下し綱昌年若かりしゆへとそ聞へし時に十六歳おなしき八年の秋左少將にすゝむ後に狂氣のよしその聞えありけれは貞享三年閏三月六日領國こと〳〵くおほやけにめしかへされ更に廩米を賜ふ一万俵元祿十二年二月十一日三十九歳にして身まかりぬ

○左少將兼兵部大輔源吉品はしめ昌親致仕して有けるか綱昌か國除かれし時あらたに所領を賜ひ三十五万石福井の城を賜ひし也これむかしなから家門をおほしめさるとそきこへけるかくて元祿九年の冬左少將に任しおなしき十五年十一月廿五日公の御紋賜はり寶永元

年十月廿八日御諱字賜はりて吉品とあらたむ同七年七月五日致仕し正德元年九月十二日に卒す（七十二歳）吉品初松平大膳大夫綱廣か五男長吉元重をやしなひ嗣子とせしか病多くて家つかすへくもあらさりけれは兄長門守吉就のもとにかへしぬふたゝひ中務大輔昌勝の六男伊織昌邦を養ひて子とす昌邦元祿十四年三月十五日はしめて見え奉り十二月從四位下の大炊頭に任し寶永元年十月廿八日父の兵部大輔とともに御諱の字たまはり吉邦と名のる同しき年の十二月侍從に任し七年の秋父吉品致仕せしかは家を繼享保六年十二月四日所領福井にありて卒す四十歳と聞ゆおなしき十一月一族中務大輔昌平（後宗昌）吉邦の遺領をたまひをのか領をもあはせ領す（二十五萬石おのが所領五萬石をあはせ三十萬石を給ふ）これは吉邦子なかりしかは其身はからさる事の候はむ時は一族主税良知清の二男平次郎（後に宗矩といふ）をして嗣とせん事をこひ申出しかと一族淺五部（越前守の家）いまた幼稚なりしかるに千次郎又幼弱にして吉邦か嗣たらん事おほやけわたくしにつきてしかるへからす昌平は故伊豫守かまさしき孫たるによりて吉邦の請をたまひ千次郎をは昌平か子となし吉邦か女にあはせて嗣にさたむへきよし仰下さる同しき十八日昌平侍從に進みあくる七年三月十三日あらためて宗昌を名のる（御諱の字給ひし也）おなしき九年四月卒す年五十五月十一日千次郎家をつき明る年八月十五日はしめて出仕しおなしき十一年十一月十一日御前にして元服し（青江宗次の御刀を給ふ）御諱の字を賜はりて宗矩と申す四位下侍從兼兵部大輔に任す十八年の冬左少將になされ寛延二年十月廿一日卅七歳にして卒すこれよりさき嗣子の儲せむよしきこえしときに不祥のこともあらんには刑部卿宗尹卿に仰付らるへうもやと大御所（有德院殿の御事）にもおほしゝかと彼卿は辭したまふ趣のありけれは卿の御子の小五郎殿を養ふへきむね仰下されて延享四年小五郎殿嗣子となり（於義丸とあらたむ）寛延二年十二月七日遺領をたまふ同き廿二日於義丸幼稚なれは家老國政に心をつくへし自然心に及はさる事あらんには宗尹卿のむねを伺ふへしと仰下され寶曆五年三月十五日於義丸はしめて拜謁し六月十三日元服し（備後國政康の御刀たまふ）御諱の字賜り從上の四位左近衞少將に叙任し越前守重昌と申せしかおなしき八年の春世をはやくすいまた十七歳にもみたさりしかとさる家なれはにや宗尹卿の

三男仙之助してつかせらる毎事に重昌か時のことくなるへしとの御旨あり仙之助同き十年四月十五日はしめて見參し（これよりさき大奥にはまゐりしなり）同廿八日元服し（相良助廣の御刀を賜ふ）從四位上の左少將に任して越前守をかね御諱の字を賜はりて重富と名のる（十三才）安永九年四月十四日ことしより三年の間としことに黃金一万兩を賜はるへしと仰下さる特旨とそ聞へし嫡子於義丸天明二年正月はしめて見參しあくる三年の秋首服を加へり（十六才）四位の侍從に任し伊豫守治好と名のる（御諱の字及ひ相州直高の御刀を給ふ）

○中務大輔源昌勝は伊豫守忠昌第二の子也童名は仙菊寛永十八年兄の万千代丸とともに大奥にはしめて謁し奉り正德二年十月十九日父の所領をわかち賜り（越前國松岡の城五萬石）慶安元年十二月晦日叙任して中務少輔に任し寛文三年の冬從四位下して大輔になり元祿六年七月廿七日卒す五十八歲長子綱昌は叔父兵部大輔昌親に養はれ二男鍋千代は世をはやくしけれは三男內匠昌平家をつき元祿元年六月十八日はしめてまみえたてまつり三年の冬從五位下に叙し內匠頭に任す同六年七月五日奥詰の衆になされことし九月廿一日遺領をたまひ同十年近侍をとゝめられ寶永四年十二月從四位下中務大輔に叙任し享保六年十二月十一日宗家のよつきとなる（これまでの所領五萬石あはせたり）

○備中守源直賢は越前守光通の子也延寶三年五月十一日はしめて拜謁しその年の冬從五位下に叙し備中守に任すおなしき五年十一月廩米を賜ふ（一萬俵）元祿十年正月十七日四十二歲にて卒す長子岩次郎直知家をつきことし閏二月廿八日はしめて謁し奉り其のゝち御扈從衆になされ寶永元年三月從五位下內膳正に任しその年十一月九日身まかりぬその子勝十郎直之實は式部少輔近時か次男なり父か卒せし年家をつき明年の春はしめて拜謁しおなしき六年三月從五位下に叙し濃信守に任す（後近江守）正德二年五月譜代の列に加はり享保二年二月十六日越後國糸魚川をたまひ（一萬俵稟米をすゝめらる）三年の六月十日卒す年三十七これも子なかりしかは松平小十郎定員か長男善次郎直好を養ひ子とす直好ことし十一月三日家を繼同十一日はしめて見えたてまつり十二月叙爵して兵庫頭になり（後河內守にあらたむ）元文四年二月卒二十九歲其子福次郎堅房家をつき寛延三年の春はしめて謁し奉りおなしき十二月叙爵して日向守に任し安永二年三月二日四十歲にし

て世をさりけれはその子豊太郎直紹閏三月廿六日家をつきおなしき五年十一月十五日はしめて見え奉り（時に十九才）あくるとし十二月叙爵して日向守に任す

○出羽守源綱近は（はしめ綱周）侍従綱隆第四の男にて寛文十二年八月廿五日初めて見參し延寶元年十一月首服を加へ（左安吉の御刀を給ふ）御諱の字をたまひ従四位下甲斐守に敍任し同き三年五月晦日父の遺領を賜ひ（出雲國十八萬六千石）その年の冬侍従になされ寶永元年致仕し男子なかりしかは弟式部少輔吉透（はしめ近憲）を養て家をゆつりおなしき六年十一月十五日松江の城にありて卒す（五十一才）吉透はしめ貞享四年九月六日はしめて拜謁し元祿十四年兄の所領をわかち賜り（私墾田一萬石〇よつきとなりし時綱近に加へたまはる）ことし冬従五位下して民部少輔になり家繼しその十一月御諱字賜り（備前國國光の御刀をたまふ）従四位下の侍従にすゝみあくる二年九月六日身まかり三十八歳とそきゝてし嫡男庄五郎宣維（はしめ宣澄とし八才）十月廿一日父か遺領をたまひ十一月はしめて謁見し（襲封を謝し申せし日也）正徳二年の春元服し（備前貞光の御刀をたまふ）御諱の字を賜り従四位下侍従兼出羽守になり享保元年四月女御入内の事ありし時御使として京にゆき事はてゝ少將にすゝむ（享保五年の秋宣維の室身まかりけれはいつの御旨ありて伏見の宮の姫君を迎まゐらす）同き十六年の秋三十四歳にて卒す嫡子宗衍幼名は幸千代ことし十月十三日わづかに三歳にして家をつくこの時一族の兵部大輔宗矩左兵衛督直純大和守明矩國務の事に心をつくへきよし仰あり元文五年の春はしめて拜謁し寛保二年十二月元服して（廣次の御刀をたまふ）御諱の字を賜はりて四位下侍従兼出羽守になり寶暦五年四月京都の御使をうけたまはり（女御入内の事あり）事終りて後少將に任せらる明和四年十一月致仕し（主計頭にあらたむ）のち入道して南海と號す天明二年十月六日卒す五十四歳其子鶴太郎治卿（初は治好）家をつく明和元年十二月はしめて見參にいり閏十二月元服し（賢行の御刀給ふ）従四位下侍従兼佐渡守に任し（御一字を給ふ事例のことし）四年十一月廿七日父のゆつりをうく（出羽守にあらたむ）

○上野介源近榮（はじめ大助）出羽守直政第二の子也寛永十八年八月初めて見えたてまつり（時に十才）承應元年十二月廿八日叙爵し明暦元年の冬叔父の但馬守直良か婿となり養はれしかそのゝち良直男子もうけしかは寛文六年の夏兄出羽守綱隆かこひもうすによりて領地をわかちたまふ（出雲國廣瀬の地二萬石）天和元年六月廿七日越後守光長か事ありし時その折のはからひよからすとて御氣

色かうむりて籠居しあくる年の春御ゆるしありしかと所領の地半を減せられぬその丶ち貞享三年七月十五日加恩の地を賜ひ五千石元祿七年にいたり又所領加へ賜り一萬石合三萬石おなしき十五年三月廿三日致仕し享年八十六にて享保二年九月十九日に卒すこれよりさき嫡子大助近時延寶元年四月廿八日初て拜謁し同き三年十一月廿六日從五位下式部少輔に叙任し元祿十五年の春家をつきしかことし同八月十八日身まかりぬとし四十四嫡子大助近朝元祿七年四月十五日初て見え奉りおなしき十五年十月十八日遺領を賜ひ十二月十八日從五位下隼人正に任す後飛彈守にあらたむ享保十三年十一月十五日うせぬ四十八歳子ともみな早うせしかは弟齋宮近明はしめ近房を嗣とし十二月廿五日父か遺領をたまはひおなしき十四年の春はしめて拜謁し襲封を謝せし日やそのとしの十二月十六日從五位下肥前守に任す後式部少輔又近江守寛延二年の秋致仕し寶暦五年四月廿一日五十四歳にてうせぬ其子多一郎近輝延享元年五月十五日はしめて見え奉り寛延二年八月九日家をつきこの年の冬從五位下式部少輔に任し寶暦七年五月九日廿七歳にて卒す嗣子なかりしかは同年七月二日弟麟三郎近貞はしめ近峯を子とす近貞遺領を賜はりて同廿八日はしめて謁し奉り十二月十八日叙爵して淡路守になり安永二年の冬致仕し大内記にあらたむ天明五年九月七日卒す五十三歳其子久松直義實は越後守長孝か二男安永二年十月朔日初て見參し父か致仕の日に所領を賜ひ十一月從五位に淡路守に任す二十才野のち上の介に改む

○從五位下志摩守直丘は初直時又直守出羽守直政か四男也これよりさき延寶元年兄右近太夫隆政卒して嗣子なかりしかは所領の地一萬石出羽守綱隆にかへし給りしをことし六月綱隆こひ申すによりて直丘にわかち賜ふ出雲の國神島の地一萬石此月廿一日はしめて見え奉りおなしき七年十二月廿八日叙爵して美作守になり後に志摩守にあらたむ貞享三年八月廿一日大番の頭に補せられ元祿元年五月御側の衆になされ同七年の冬御奏者の事承はる同十二年の春其事ゆりて雁の間に候す正德二年十二月廿八日四十八歳にしてうせぬその子賴母直員實は新庄主殿藤原直詮か二男也ことし二月十二日はしめて見參しあくる三年の二月廿九日父か遺領をたまひ五月十六日從五位の下して彈正少弼に任す寶暦十一年端

午の節大目付の差圖にたかひて祝賀のついてをみたりしかはゑはし出仕をとゝめらる明和二年の冬致仕し同五年の四月十四日よはひ七十五歳にて終をとる其の子辰之助直道元文五年五月朔日はしめて見參し寛延三年七月朔日直道か家人紀伊殿の家老渡邊數馬か從者と路次にていさかひ仕出て直道かものとも疵つく事ありしに其事おほやけに聞えてこれゑかしなから日頃の掟おろそかなるによれりとて父直員と共に出仕をとゝめられしかいくほともなくて事ゆりぬ明和二年十一月廿一日家ゆつられ十二月十八日從五位下大隅守に叙任しあくるひとゝせを經て同き四年閏九月廿六日つかへをかへし安永五年十一月十六日卒す五十三歳嗣子龜之助直行實は彈正少弼直員か二男明和四年二月十六日兄直道に養はれ九月十五日初見の禮をとり父致仕の所領を賜ひあくる年十二月十八日從下の五位して兵庫頭に任す（十五才）

○從四位下侍從兼大和守源直矩は故の侍從直基か寛永十八年越前國大野の城にて生る幼名は藤松といふ八歳なりし慶安元年八月父に後れて家をつく（十五萬石直基ことし六月姫路をたまはりていまた入部をたにせて身のいたはりすてに大事におよひしかはなからん後の事心もとなくやおもひけん遺書して姫路の所領をはすみやかにめしかへさるへきよしを家老の人／＼に申おくり家人等にのこらす父にもはしめて所領かへし奉らんほとは心いれてまもるへきよしをのせて藤松いまたいとけなければ家法を給はらすともなけき訴ふへきなとゆめ／＼おもふへからすもし似合たりし小知をも給はりていへたてんには老とも申あしくする事あるへからすすへての事兄にておはする出羽守殿にたのみまゐらせぬよろつとひまゐらせまた殉死の事はわか常々いひし事をはしりつらんかまへてわかきものともいひもいつへからすいましめよなとくさ／＼にしるしつきてとらせたりいみしき心はへなりかしかくて藤松をちの直政等にともなはれて御所に參りしかは左大臣家御前近くめしすへて父か事をしみのたまはすついてにいまより後は直政をたゝ父とおもへよ直政も藤松をおいとなおもひそとて仰下されしとて御ちなみさる事なから親しうせさせ給ひし御心こそしのひかたけれ）所領播磨國姫路は要害の地なれはとてあくる二年六月越後國村上にうつさる（本多能登守忠茂にかはる）承應三年十四歳にして從四位下の大和守になり寛文七年六月舊領姫路をたふ（榊原熊之助正倫にかはる）同き八年の冬侍從に任す天和元年宗家越前守光長家司爭論の事によりて罪かうむる直矩はこれよりさきその事をたひらけむとせしかと事ゆかてやみしかはおなしき御勘氣蒙りてことし六月籠居す（閉門といふ）明る年二月免しかとも所領の地過半を削られて豐後國日田にうつさる（七萬石）かくて年月ふるほとに貞享三年七月出羽國山形の城賜はりて地くはゝれり（三萬石合せて十萬石）元祿五年七月ふたゝひ陸奥國白川にうさるこの時所領むかしのことくなりぬ（十五萬石）おなしき八年十一月所領にて病にそみられてそのよしして江戸よりまゐりしか

四月十五日つひにたゝすなりぬ（五十五歳）その子又六郎基知は播磨國姫路にして生れたり貞享四年始て見えまゐらせ元祿六年十二月從下の五位して和泉守に任し家督其後大和守になりこの冬從下の四位に陞り寶永四年十二月侍從になる正保二年弟求馬知清に所領わかつ（私墾田一萬石）知淸後に爵賜はり靭負佐になり又主稅頭にあらたむ（下に見えたり）享保十四年八月十四日基知卒す五十一歳子なかりしかはこれよりさき知淸か子兵庫頭義知をよつきとす義知土佐守明矩とあらため家督し其の冬從四位下に叙し元文元年三月京都の御使にさされて侍從に任す（この冬女御入内の事あるへきゆゑなり）寛保元年十一月播磨國姫路にうつる（榊原小平太政永にかはる）寛延元年の十一月十七日所領にうつりうせぬ四十五歳その子喜八郎直賢（後朝矩と改む）はむつの國白川にて生れぬことし十二月父に繼ていまたとしわかゝりしかは正月また所領うつされて上野國前橋をたふ（酒井雅樂頭忠恭にかはる）この冬從下の四位して大和守になり明和二年京師の御使を奉はり侍從に任す（來年若君御元服のゐるへきによつて也）おなしき四年閏九月十五日川越の城をたまふこれは今までの城地前橋は利根川に近くさいつ頃より流れに浸され地形大にかはりけれはいにし寶暦の末に檢使を下されて見せらる事もありきされはさりかたき子細もやありけんことし此所をたまひし也あくる五年にはしめて入部せしか六月十三日川越にして卒す三十四才嫡子千太郎直恒としわつかに七歳にしてつく安永六年九月はしめて出仕し十二月從四位下に敍し大和守に任す

○主稅守源知淸は大和守直矩か四男初め源五郎後に求馬といふ寶永六年十月の始に兄大和守基知に伴ひてはしめて御所にまいり初見の禮をとれり正德二年三月廿五日基知所領の地さきあたふ（私墾田一萬石）十二月には從下の五位して靭負佐になる享保六年閏七月十日卒す四十歳その子三人あり金之助義知長子なれば家をつきて二男千次郎は一族中務大輔宗昌によつきとなり三男又三郎長忠は宗家淺五郎か家をつき義知享保八年九月初見して十年十二月十八日叙爵し相模守になり（後兵庫頭にあらたむ）おなしく十三年六月伯父大和守基知か嗣子となりしかはをのか所領をもあはせたり

○從四位下若狹守源直明は（はしめ昌明）但馬守直良か男寛文七年五月廿八日初めて見え奉りおなしき九年十二月廿五日叙爵して延寶二年の冬加階しおなしき六年

八月廿一日父か遺領を賜ふ（越前國大野五萬石）天和二年の春領地加へて（一萬石合せて六萬石）播磨國明石の城にうつさる元祿十四年十月廿五日その子貞常に家ゆつりて致仕し享保六年四月廿一日身まかりぬ六拾六歳左兵衛佐（後左兵衛督又但馬守）直常幼名を松千代といふこれよりさき元祿三年二月十五日はしめて拜謁しおなしき六年の冬叙爵し寶永四年十二月從四位下にのほり享保十八年の冬侍從にすゝむ寛保三年二月廿日その子若狹守（後左兵衛佐）直純に所領をゆつりて致仕し延享元年五月十日卒すとし六十六直純はしめは虎次郎元文三年二月十五日はしめて拜謁し同き五年の冬叙爵し寛延元年十二月廿一日從下の四位にのほる明和元年三十九歳にてうせぬ嫡子内膳正（後但馬守左兵衛佐左兵衛督致仕若狹守）直泰は寶暦十二年十二月七日はしめて見え奉り同年十二月九日叙任し明和元年五月十日父の遺領をたまひ安永二年の冬從四位下になされ天明四年十月十日三十七歳にしてつかへをかへしてその子虎次郎直之に家をつかしむ直之ことし四月朔日はしめて謁し奉り十二月十六日叙爵して左兵衛佐になり同き六年の夏病にふしていまた嗣なかりしかは弟恒吉直周を子としやしなひ所領讓らん事をこひ申て四月十四日廿三歳にて卒すこの年六月直周に父か遺領を賜りぬ（十四歳）

藩翰譜續編卷之一中

● 尾張家　大納言光友卿　攝津守義行　出雲守義昌
附主計頭通春

● 紀伊家　大納言光貞卿　左京大夫頼純　附内藏頭頼職
附主税頭頼方

● 水戸家　中納言光圀卿　讃岐守頼重　刑部大輔頼元
播磨守頼隆　大炊頭頼雄

● 保科 松平後賜　肥後守正經　保科彈正忠正景

● 松平 越智　右近將監清武

● 田安　中納言宗武卿

● 一橋　中納言宗尹卿

● 清水　參議重好卿

尾張

一世
源義直
簾中春姫淺野紀伊守幸長女　高源院寛永十四年四月廿二日卒

二世
光友　五郎八　初光義
寛永十年十二月廿九日右兵衛督　同十七年二月廿九日參議右近衛權中將　同年七月十一日從三位　承應二年八月十二日正三位權中納言　元祿三年五月四日權大納言　同月十一日從二位　同六年四月廿五日致仕　同十三年十月廿六日薨七十六歳　法名瑞龍院　簾中千代姫君　大猷院殿姫君　靈仙院　元祿十一年十二月十日卒

女子
廣橋大納言忠幸卿室

女子
實光友卿女
松平安藝守綱長室

女子　早世

某　龜太郎
元祿五年正月二日卒

女子　二人
綱友卿養女
但馬守友相室

三世
綱誠　五郎太　初綱義
母
大猷院殿姫君
明暦三年四月九日右兵衛督
寛文三年十一月廿七日從三位
右近衛權中將
元祿四年二月廿六日參議
同六年十二月朔日權中納言
同十三年六月五日薨四十八歳
法名泰心院
簾中新君廣橋忠幸女瑩殊院

女子　早世

四世
吉通　吉郎　五郎太
元祿八年十二月四日右兵衛督
同十二年八月十三日從三位右近衛權中將
同十四年十二月十一日參議
寶永元年十一月廿八日權中納言
正德三年七月廿六日薨二十五歳
法名圓寛院
簾中輔子九條輔實女瑞祥院

女子　早世

六世
繼友　八三郎　通顯
左近衛權少將大隅守
從四位下
正德二年十二月十五日敍任
同三年十二月十五日從三位
左衛近權中將
同四年十一月廿八日參議
同五年十二月朔日權中納言
享保十五年十一月廿七日薨三十九歳
法名晃禪院
簾中安巳君近衛家熈女光雲院

五世
五郎太
正德三年十月十八日逝去三歳
同年十一月三日贈參議從三位
法名眞嚴院

女子
實吉通卿女
九條内大臣幸敦公室

某　八三郎
享保八年四月廿三日卒

七世
宗春　萬五郎　求馬　初通春
實綱誠卿七男
主計頭從五位下
享保元年七月廿二日敍任
同三年十二月十八日從四位下
同十四年十二月十六日侍從
同十六年正月十九日從三位左近衛權中將
同年十一月十二日參議
同十七年二十月朔日權中納言
元文四年正月十三日有故蟄居
明和元年十月八日薨六十九歳
法名章善院

某
寶永二年十二月五日卒十二歲

義孝
攝津守義行養子

通溫
侍從安房守從四位下
正德二年十二月十五日叙任
同四年十二月十八日左近衞權中將
享保五年五月十九日卒三十五歲

通春　萬五郎

女子
元祿十一年三月十八日
常憲殿御養女

女子
寶永五年三月廿七日
常憲院殿御養女

某　源次郎
貞享四年六月廿一日卒

女子三人　共早世

女子
宗勝卿御養女

某　國丸
享保廿年九月九日卒

女子二人　共早世

女子
實出雲守義方女
上杉民部大輔宗房室

某　龍治代
元文二年十二月廿九日卒

女子二人　共早世

某　辨之助
元祿十四年六月五日卒

義行　源次郎
母同上
左近衛權少將攝津守從四位下
寛文六年十二月廿八日叙任
正德五年六月九日致仕
同年八月三日卒六十歳
法名崇巖院廓譽俊月體道

女子
松平大學頭賴元室

義孝　萬三郎
實權中納言綱誠五男
侍從日向守從四位下
寶永五年十二月十八日叙任
享保元年十二月十八日左近衛權少將
同三年十月十一日改攝津守
同十七年五月廿一日卒三十九歳
法名高德院尊譽起岳英隆

武雅　多宮
松平右近將監清武養子

某　萬彌
寛保十七年十月十四日卒

女子
許嫁松平薩摩守宗信卒

治休　熊五郎
明和二年二月十九日右兵衛督
同年十二月十二日從三位左近衛權中將
安永三年六月十四日逝去廿一歳謚孝

治興　慶之助　初隆篤
左近衛權少將兵部大輔
從四位下
安永元年十二月十八日叙任
同三年四月十一日從三位左近衛權中將
同五年七月八日逝廿一歳謚昭

女子
實義敏女
上形彈正大弼治廣室

八世
宗勝　萬彌　初友相友淳義淳
實但馬守友著長男
但馬守從五位下
享保十一年十二月十八日叙任
同十七年十二月十六日從四位下侍從
同十八年十二月十八日左近衞權少將
元文四年正月十三日依臺命繼宗家
同年二月三日從三位權中將
同五年十二月朔日中權納言
寶暦十一年六月廿四日薨五十七歳
謚載

女子
松平安藝守重晟室

賴多　彌門
内藤大和守賴由養子

女子
早世

女子
松平薩摩守賴前室

九世
宗睦　熊五郎
寬保二年十二月四日右兵衞督
延享元年十二月朔日從三位
左近衞權中將
寶暦三年十二月朔日參議
同十一年十二月朔日權中納言
天明元年二月十九日從二位權大納言

女子
實宗春卿女
近衞准三后内前公室

義敏　秀之助
左近衞權少將中務大輔
從四位下
延享三年十二月十八日叙任
明和八年四月晦日卒四十歳
法名蒼龍院明譽興仁德音

某　榮之助
延享四年四月十日卒十四歳

治行　源次郎　初義柄
實中務大輔義敏長男
從四位下侍從兼攝津守
安永三年十二月十八日叙任
同六年正月廿五日從三位
左近衞權中將
天明五年十二月朔日參議

五郎太

女子
宗睦卿養女

義柄　源次郎
從四位下侍從兼攝津守
安永三年十二月十八日叙任
同六年正月廿五日爲宗家嗣

義裕　哲之助　初柄常
繼義柄家
從四位下侍從攝津守
安永六年十二月十八日叙任
同八年十二月十六日左近衞權少將

勝鷹　政之丞
寶暦十一年七月十二日卒十七歳

某　長之助
寛延二年二月廿一日卒

女子二人
九條内大臣道前公室
松平安藝守重敎繼室

政脩　德十郎
内藤能登守政陽養子

女子　早世

女子　早世

某　信之進
元文元年正月十六日卒

女子　早世

勝長　勇之助
從四位下左近衞權少將兼掃部頭
寛延元年十二月廿一日叙任

裕民　富之丞
天明六年九月五日卒十七歳

某　税之助

女子

女子
上杉大炊頭重定室

勝當　幸之丞
從四位下左近衞權少將兼彈正大弼
寛延元年十二月廿一日叙任

某　又之丞
明和八年正月廿六日卒

勝綱　藤馬

勝起　龜彌
家人竹腰山城守正武養子

正國　直之丞
井上山城守正森養子

義昌 太次郎　出雲
初義則
左近衛權少將出雲守
從四位下
寛文六年十二月廿八日叙任
正德三年壬五月廿日卒六十三歳
法名得安院

女子
綱誠卿養女

友重 六郎
元祿十五年十月五日卒三十四歳

女子
實廣橋權大納言忠幸卿女
織田伊豆守信武室

女子
伊藤駿河守祐宗室

某 萬次郎
貞享元年五月九日卒

義方 久太郎　求馬
初義賢
侍從右近將監從四位下
元祿十三年十二月十一日叙任
正德三年十二月三日改出雲守
同四年十二月十八日左近衛權少將
享保六年三月十八日卒三十六歳
法名清晷院

義武 長次郎
初義喬
享保十四年四月廿五日卒四十歳

女子 早世

女子
實櫛笥内大臣隆慶公女
内藤主殿頭政貞室

女子
宗春卿養女

義眞 求馬
侍從式部大輔從四位下
享保十二年十二月廿一日叙任
同十四年五月十日卒十六歳
無嗣家絶
法名善曉院

勝鷹　政之丞
寶曆十一年七月十二日卒十七歳

某　長之助
寛延二年二月廿一日卒

女子二人
九條內大臣道前公室
松平安藝守重敏繼室

政脩　德十郎
內藤能登守政陽養子

女子　早世

女子　早世

某　信之進
元文元年正月十六日卒

女子　早世

勝長　勇之助
從四位下左近衞權少將兼掃部頭
寛延元年十二月廿一日叙任

裕民　富之丞
天明六年九月五日卒十七歳

某　稅之助

女子

女子
上杉大炊頭重定室

勝當　幸之丞
從四位下左近衞權少將兼彈正大弼
寛延元年十二月廿一日叙任

某　又之丞
明和八年正月廿六日卒

勝綱　藤馬

勝起　龜彌
家人竹腰山城守正武養子

正國　直之丞
井上山城守正森養子

義昌　次郎太　出雲　初義則
左近衛權少將出雲守
從四位下
寛文六年十二月廿八日叙任
正徳三年壬五月廿日卒六十三歳
法名得安院

女子
綱誠卿養女

友重　六郎
元祿十五年十月五日卒三十四歳

女子
實廣橋權大納言忠幸卿女
織田伊豆守信武室

女子
伊藤駿河守祐宗室

某　萬次郎
貞享元年五月九日卒

義方　久太郎　求馬　初義賢
侍從右近將監從四位下
元祿十三年十二月十一日叙任
正徳三年十二月三日改出雲守
同四年十二月十八日左近衛權少將
享保六年三月十八日卒三十六歳
法名清寥院

義武　長次郎　初義喬
享保十四年四月廿五日卒四十歳

女子　早世

女子
實櫛笥内大臣隆愛公女
内藤主殿頭政貞室

女子
宗春卿養女

義眞　求馬
侍從式部大輔從四位下
享保十二年十二月廿一日叙任
同十四年五月十日卒十六歳
無嗣家絶
法名善曉院

女子　早世

友相　萬彌
攝津守義孝養子

友著　大藏　初友親
但馬守従五位下
元祿七年十二月十八日叙任
享保三年十二月十八日従四位下
同十一年三月晦日卒四十九歳

女子三人
實共忠幸卿女
有馬中務大輔頼元室
松平紀伊守光晟養女
織田伊豆守信武繼室

東條松平（此系圖は一世義直に係るものにして原書は上欄に掲けられしを今こゝに掲く）

源義春　初長忠甚太郎　右京亮
出雲守長親三男
法名貞巖顯松

家忠　龜千代甚太郎
天正元年八月朔日卒
法名靈岸旭快

忠吉　甚太郎下野守　薩摩守
家康公之五男繼東條家　天正十八年武州忍城賜十萬石　慶長六年尾州清洲ニ移任侍従同十年四月任左近衛權中將叙従三位同十二年三月十一日卒廿八歳法名性高院殿憲空玄白大居士

女子
本多豐後守廣孝室

義直　五郎太丸初義知義利義俊號子敏　徳川右兵衛督　慶長十一年四月廿六日依台命繼東條家　家康公弟九男御母　志水加賀守菅原宗清之女於龜方宗清石清水八幡宮之社人也　慶長六年十二月生伏見城　同八年正月廿八日賜甲斐國　同十年八月五日従四位下右兵衛督叙任　同十二年繼東條於尾州濃州三州之内賜六十萬九千五百石之地　移清州城　同十五年十二月移名護屋城　同十六年二月廿日叙従二位任右近衛權中將　寛永三年七月十九日従二位權大納言叙任　慶安三年五月六日逝去五十一歳諡源敬公　於龜方寛永十九年閏九月六日卒法名相應院殿信譽公安大姉

尾張　附出雲守義呂

○大納言源光友卿は初は光義従二位大納言義直卿の御子童名五郎八殿寛永十年五月廿三日初めて見えたまひその年十二月廿九日元服ありて正宗の御脇差をたまふ御諱の字賜ひ右兵衛督殿と稱すおなしき十七年には二月に參議右中將七月に從三位になさる慶安三年六月より國の事しらせ給ひ正三位の權中納言をへて從二位の大納言にいたり元祿六年四月廿五日菟裘いとなみたまひ十三年十月廿六日七十六歳にてうせたまふ御子權中納言綱誠卿は左大臣家の大猷院殿の御事姫君の御はらなり幼名を五郎太殿と申誕生ありしとし承應元年也十一月廿二日大奥にてはしめて見えたまひ明暦三年四月五日加冠ありて左文字の御刀を賜ふ御諱の字賜ひ父の卿のごとく督殿と申寛文三年從三位右中將に任し參議をかけて權中納言に進み元祿十二年六月五日四十八にてかくれたまふ御子吉郎殿又五郎太殿元祿八年八月廿五日七歳にてはしめて見參あり十二月四日かうむりし則年の御脇差を給ふ御諱の字を賜ひて吉通と申これも督殿と稱す十二年八月三位右中將に任し參議權中納言に父の卿におなし正德三年七月廿六日にうせたまふ廿五歳御子五郎太殿三歳にてつかせ給ひしかいくほどもなくことし十月十八日むなしくならせ給ふいまたかうむりも賜はらさりけれは十一月三日參議從三位を贈らせ給ひ御跡をは御伯父大隅守通顯後繼友卿朝臣そうけつかせ給ひける此朝臣は綱誠卿第三の御子にて幼名を八三郎殿と申正德二年はしめて拜謁ありて十二月十五日從四位下左少將兼大隅守に任し同三年十一月十一日宗家を繼たまひ十二月十五日御諱字賜はり正宗の御刀を給ふ從三位にのほり左中將に轉し參議をへて權中納言にすゝみ享保十五年十一月廿七日世をさりたまふ年三十九此卿も御子なかりしかは御弟主計頭通春朝臣後宗春卿の陸奥國梁川にして所領の地たまひておはせしかことし十一月廿八日御嗣となりたまひ明年正月十九日御諱の字賜はり延壽國資の御刀を賜ふ從三位に叙し左中將に任して參議又權中納言になりたまふしかるにとし頃よからぬふるまひおほかりしかは元文四年正月十三日安藝守吉長大學頭頼貞播磨守頼幸を御使として仰出さるゝむねありこれよりさき仰によりて糀町の邸にうつらるその意趣は襲封の後行跡正しからさるによつて宿老をして申させ給ふ事

有しかと其かひもあらす國政何となく農民困窮するよしほゞその聞へあり去年又左近將監乘邑より竹腰成瀬等の老臣に告てさとすむねありといへとも外には領掌の答ありなから內には改る心もなしかくては國務任しかたけれはすみやかに蟄居せらるへしとの事なりすなはち門戸を閉ておはせしか後には（是年の內也）尾張國にうつりてひそみおはしぬ（明和元年十月八日六十九歳にてうせ給ふ）かかりけれは世をさり給ひても例のことくに弔はせ給ふ御事もあらさりしか天明六年廿三回の時にそ今の大納言宗睦卿父の卿の遺命にかはりてあなかちに申請せたまふにより八月十八日御使ありて番議の料賜はりし也御子二人おはせしかと皆世を早う去給ひしかは御一族なりし但馬守義淳朝臣（後宗勝卿と申）別の仰によりて繼たまふ宗春卿の嗣子といふ事にはあらさりし也元文四年二月三日御一字賜はり（城州國行の御刀をたまふ）從三位左中將に任し明る年權中納言に進み寶暦十一年六月廿四日かくれ給ふ五十七歳御子宗睦卿御幼名は熊五郎殿寛保二年十一月五日はしめて見參し（十一歳）十二月四日元服ありて右兵衞督になり延享元年十二月朔日從三位に叙し左中將に任し參議をかけ權中納言をへて從三位大納言にすゝませ給ふ御子從三位左中將治休卿おなしき治興卿みな世をはやくし給ひしかは御弟中務大輔義敏朝臣の長男從四位下侍從兼攝津守義柄朝臣を御よつきにさためられ安永六年の春御諱字賜りて（備前康元の御刀を給ふ）治行とあらため從三位にのほり左中將にすゝみ天明五年の冬參議に補せらる

○左少將兼攝津守源義行は權大納言光友卿の第二の御子御母は左大臣家の姫君童名は源次郎と申明暦三年十一月誕生ありしかは御使下されて物を賜ふ（安吉の御脇差に產衣そへて）同三年三月廿五日奥の御所にしてはしめて見え奉り寛文五年十一月出仕して同六年從四位下に叙し左少將に任し攝津守をかぬ天和元年八月十三日信濃國にて所領の地を賜ふ（伊奈郡高井郡水藤郡にして三萬石）去かるにその所は山間にして陣屋のいとなみにかたけれはとて元祿十三年三月廿五日美濃國高須の地を賜ひて信濃なる所領の半をこゝに移されたり正德五年六月六十歳にして致仕し八月三日卒す左大臣家のまさしき御外孫にておはせしかは折にふれ事につけて大奥にもめされ又は御使して物賜はりなと御寵愛のさまなみ／＼にも品かはりて何事もはな／＼しくそありけ

る（東照宮の御眷みちを光友卿よりつたへられしといふ）男子二人まて有けれとも皆㓜くてうせぬれは權大納言綱誠卿の第五の御子万三郎義孝を養うて嗣とす、寳永三年五月廿八日はしめて拜謁しおなしき五年從四位下の侍從に任し日向守を兼（後攝津守に改たむ）父の致仕せし日家を繼左少將に轉し享保十七年五月三十九歳にして卒す嗣子はなくて一人の弟ありけるも松平右近將監淸武か嗣となりしかは從弟なりける但馬守友淳を（後義淳と改む義孝の叔父但馬守友廣の長子なり）養子とす義淳父のもとにゐて享保十一年五月廿八日はしめてまみえ奉り十二月叙爵して十七年家を繼從四位下の侍從をへて左少將にすゝみ元文四年宗家をつかれたり恩命ありて三男秀之助義敏して其所領を繼せらる義敏延享三年八月十五日はしめて拜謁しその年從四位下左少將になり中務大輔をかぬ寳曆七年所領の地洪水にて稅額多く減しけるよし聞しめされ黄金貸あたへたまふ（三千兩）同十一年六月七日營中にめされ尾張宰相殿國にゆかせたまへは留守の事とも心をそへて家老等にはからひ申へしとの仰かうむりつ明和八年四月卒す年四十嫡子源次郎義柄ことし六月十三日遺領賜はりて安永三年八月十五日はしめて見參しその冬從四位下侍從兼攝津守になされ同き六年正月廿五日權大納言宗睦卿の嗣とさためられ給ひしほとに家領をは舍弟哲之助義裕して繼せらる義裕ことし三月朔日はしめて見えたてまつり十二月從四位下侍從に任し攝津守をかぬ同き八年左少將に進む（十八歲）

○左近衞權少將源義昌は（はしめ義則）權大納言光友卿の第三子童名は次郎太と申す寛文五年八月十三日初めて見參し御家號ゆるされて明年從四位下左少將兼出雲守になり天和三年八月四日陸奧國梁川にて所領の地賜り（三萬石）正德三年閏五月六十三歲にて卒す其子求馬義方（はしめは久太郎義賢といふ）元祿六年七月朔日はしめて見えおなしき十三年從四位下侍從に任し右近將監を兼て左近大夫と稱す（後出雲守○凡四五位の人の六位相當の官に任したるをは某の大夫と稱する事なりしかるに元祿十四年の二月にいたりて大夫と稱せる事を退て右近將監といひそめしはいかなる譯をしらず）正德三年七月二日遺領を賜ひ左少將になりて享保六年三月卒すとし三十六嫡子求馬義眞ことし五月二日家をつく同十一年五月廿八日はしめて拜謁し十三年從四位下侍從に任し式部大輔をかね五月十六歲にして世を早うし嗣なけれは家絕ぬ

○侍從兼主計頭源通春（後宗春卿）は綱誠卿第七の御子童名

は求馬初は萬五郎享保元年二月十五日拜謁し七月叙爵しておなしき三年從下の四位にのほり同き十四年八月十一日陸奧國梁川にして所領の地賜ひ三萬石そのとし侍從にすゝみ明年十一月廿八日宗家のよつきとなりしか所領の地をはかへし奉りし也

紀伊

源頼宣

簾中加藤清正女
瑤林院寛文六正月廿四日卒

光貞 長福

寛永八年五月三日從五位下
同九年七月七日常陸介
同十七年三月廿九日參議
右近衛權中將
同年七月十一日從三位
寛文八年十二月廿三日權中納言
同九年正月十日正三位
元祿三年五月四日權大納言
同月十一日從二位
同十一年四月廿二日致仕
同十五年五月廿八日薙髮
號對山
寶永二年八月八日薨八十歲
法名清溪院
簾中安宮伏見貞清親王女天莫院

女子二人

一條攝政冬經公室
上杉彈正大弼綱憲室

綱教 長光 長福

寛文十二年五月十八日常陸介
延寶四年十二月廿五日從三位
左近衛權中將
元祿四年三月廿六日參議
同十一年十二月朔日權中納言
寶永二年五月十四日薨四十一歲
法名商林院
簾中鶴姫君常憲院殿姫君
明信院寶永元年四月十二日卒

某 次郎吉

延寶七年七月十八日卒十八歲

女子

佐竹修理大夫義林室

頼職 長七

實光貞卿三男
元祿九年十二月十一日從四位下
左近衛權少將內藏頭
寶永二年九月八日逝廿八歲法名深覺
正德三年十一月九日贈參議從三位

頼職
長七
元祿九年十二月十一日從四位下左近衛權少將内藏頭

頼方
源六
元祿九年十二月十一日從四位下左近衛權少將主税頭

御諱
源六　新之助
初頼方
實光貞卿四男
寶永二年十二月朔日從三位權中將
同三年十一月廿六日叅議
同四年十二月十八日權中納言
享保元年四月晦日入繼大統
簾中眞宮伏見貞敎親王女寬德院

女子
松平相摸守光仲室

女子
松平左兵衛信平室

某
修理
寛永十三年十一月十八日卒

宗直
義大夫
初頼致
實左京大夫頼純五男
享保元年七月五日從三位左近衛權中將
同年十二月十八日叅議
同二年二月朔日權中納言
延享二年十月廿五日權大納言
同月廿三日從三位
寶曆七年七月二日薨七十六歲法名大慧院

某
富千代
享保九年正月五日卒

女子五人
松平播磨守頼濟室
一人早世
丹羽若狹守高庸室
京極二品公仁親王室
松平讃岐守頼貞室

女子三人
共早世

宗將
直松
享保十四年壬九月廿八日常陸介
同十六年十一月十五日從三位
左近衛權中將
元文五年十二月朔日叅議
寶曆七年十二月朔日權中納言
明和二年二月廿六日薨四十六歲
法名菩提心院
簾中富宮伏見貞建親王女淨眼院
後愛君一條兼香公女明悅院

女子二人
細川越中守宗孝室
松平相摸守宗泰室

頼淳
春千代

貞幹　雅之進
內藤播摩守政業養子

某　直松
延享四年六月十四日卒

女子
松平加賀守重教室

重倫　粂之亟　岩千代
寶曆五年十一月廿八日常陸介
同七年十二月朔日從三位左近衛權中將
明和二年十二月十五日參議
同四年十二月朔日權中納言
安永四年二月五日致仕

女子　早世

治貞　春千代　初賴淳
實宗直卿二男
安永四年二月廿二日從三位
參議左近衛權中將
同五年二月十五日權中納言
簾中菊亭三位公言妹

女子四人
一條關白輝良公室三人早世

賴央　孝三郎
在近衛權少將織部正從四位下
寛保元年十二月十九日致仕
寶曆七年六月十七日卒二十九歲

信有　豐松勘解由
松平式部大輔信友養子

治寶　岩千代
實重倫卿三男
天明二年三月七日常陸介
同三年十二月朔日從三位左近衛權中將
簾中種姬君

女子
實重倫卿女
水戶左衛門督治紀朝臣室

―某　門之進
寬延三年正月廿六日卒

―女子
松平越前守重富室

―學文　鐵之亟
內藤丹波守政苗養子

―賴興　千之亟　榮三郎
從四位下左近衞權少將
左近將監
明和二年十一月十八日叙任

―女子　早世

―賴謙　金十郎
左京大夫賴淳養子

―忠功　職之亟
松平下總守忠啓養子

―某　彌之助
明和八年六月十八日卒

―治寶　岩千代

―女子　早世

―某　雅之助
安永三年二月廿五日卒

―女子
治貞卿養女

―女子
許嫁松平佐渡守齊敬

―女子
實賴興女
許嫁義郎賴看

―泰綱　松之助　主水
宗家家人渡邊若狹守直綱養子

女子　尾張宰相治行卿室

爲脩　久米之亟
家人三浦長門守爲恭養子

頼德　唯之進

頼融　釡之助　勘解由

頼朴　久米之丞

頼純　久松
左近衛權少將左京大夫從四位下
承應三年十二月廿九日叙任
正德元年十月七日卒七十一歲
法名源性院顯空日純

頼路　久松　大七郎
侍從豊後守從四位下
延寶三年十二月廿六日叙任
元祿十一年十月十二日卒二十八歲
法名天理院日久廓山

某　大七郎
元祿六年九月十九日卒

頼廉　源之助
天和三年正月三日卒廿歲

女子
井上河内守正本室

頼雄　大之助
侍從山城守從四位下
元祿十二年十二月十八日叙任
後依病籠居
享保三年五月廿九日卒五十一歲
法名本地院守玄日得

女子三人
眞田出羽守信弘室
一人早世
小出信濃守英貞室

頼致　義大夫
侍從玄蕃頭從四位下
寳永三年十二月十九日叙任
正德元年十二月改左京大夫
同二年十二月十五日左近衛權少將
享保元年九月朔日繼宗家

女子三人　共早世

尙峯　五郎左衛門
家人三堀作右衛門知義養子

賴渡　萬吉　左京　初賴安
享保元年五月十六日繼賴致
同三年十二月十八日侍從左京大夫
從四位下
同五年十二月十八日左近衛權少將
元文三年三月十六日卒三十三歲
法名惠日院道明日輝

女子二人

賴邑　久松　左京
侍從從四位下
延享二年壬十二月十六日叙任
同月十七日左京大夫
同四年十二月十九日左近衛權少將
寶曆三年七月廿九日致仕改監物
天明元年壬五月七日卒五十歲
法名智性院道仁日雅

女子二人
植村出羽守家道室
織部正賴央室

賴淳　春千代
實權大納言宗直卿二男
從四位下左近衛權少將修理大夫
寬保元年十二月十九日叙任
延享四年九月廿七日改玄蕃頭
寶曆三年八月四日改左京大夫
安永四年二月三日繼宗家

賴謙　金十郎　玄蕃
實權中納言宗將卿六男從四位下侍從
安永二年十二月十六日叙任
同月十七日式部大輔
同三年二月十八日改玄蕃頭
同四年二月廿四日改左京大夫
同五年十二月十六日左近衛權少將

賴看　義郎

忠顯　敬次郎

女子 許嫁小出對馬守英筠

女子 早世

女子 許嫁松平壹岐守定則

女子

某 友三郎

鶴姫君は延寶二年四月八日白山の別殿にて生れ玉ひ寶永元年四月十二日逝す三縁山増上寺に葬まゐらす法名明信院殿御母は於傳方稱五ノ丸殿小笠安長か女元文五年六月八日卒法名瑞春院殿といふ

紀伊

○權大納言源光貞卿は故大納言頼宣卿第一の御子長福殿と申す六歳にならせ給ひし時寛永八年從五位上に叙し明る年初めて見參しそのとし七月七日御諱字賜ひ元服ありて行平の御脇差を賜ふ常陸介殿と稱す同き十七年參議右近衞權中將に任し從三位に叙し寛文七年五月廿二日國政をしらせ給ひ正三位の權中納言をへて從二位の大納言にいたり元祿十一年四月廿二日御子參議綱敎卿に國ゆつりて對山殿と申す寶永二年八月八日八十歳にしてかくれ給ふ敎綱卿御童名長光殿又長福殿と申せし也寛文十年正月十日大奥にて拜謁あり來國俊の御脇差をたまふ十二年五月十八日首服を加へ御諱字賜はり父の卿の如く介殿とそ申しける延寶四年從三位左近衞權中將に任しそのゝち御聟きみと定められたまい貞享二年二月廿五日鶴姫君常憲院殿の姫君をむかへ入まいらせらる元祿四年權中將にて參議に補し國ゆつられ給ひてやかて權中納言に進み寶永二年五月十四日世をさり給ふ四十一歳此卿御子なかりけれは御舍弟內藏頭頼職朝臣四位の少將にて丹生の地領しておはせしに譜外に見ゆ御家を繼しめられしか九月八日廿八にてうせたまひぬ紀伊殿と申せしは百日にもたらさりけりされは此朝臣治國の日定て爵位も淺くおはせしをゝしみいたませたまひけるにや正德三年十一月九日に至りて參議從三位をそ贈り參らせられける御第頼方卿も地を領し譜下に見ゆ四位の少將にて主稅頭殿と申しておはせしを頼職卿の嗣として十月六日遺領をまいらせらる十二月朔日御諱の字賜り吉宗卿と申す正宗の御刀を賜ふ左近衞權中將從三位になり給ひ參議權中納言を經享保元年四月大統を繼せ給ひけれは御領をは支族左京大夫頼致朝臣を以てつかしめらる頼致朝臣七月五日御諱字賜はりて宗直卿と申す豐後國行平の御刀をたまふ從三位左中將に任し參議權中納言を經て從二位權大納言にいたり御年七十六寶暦七年七月二日にかくれ給ふ御子あまたあり長は中納言宗將卿次玄蕃頭頼淳次は織部正頼央其又次は左兵衞督信有卿と申て式部大輔藤原信友の嗣其次は因幡守貞幹とて內藤播磨守藤原政業か嗣也宗將卿御童名直松殿享保十四年閏九月朔日はしめて見えたまひ九月廿八日元服御諱字以下世世の例の如し常陸介殿と稱し同き十六年從三位左中將叙任しのち參議になり父の

卿うせ給ひし時御領をつかせ給ひやかて權中納言にうつり明和二年二月廿六日にうせ給ふ四十六歲此卿も多くの御子もちおはしけり男女凡十六人とそきこへし長子直松殿は世を早うしたまひけれは次の中將重倫卿繼たまふ此卿岩千代殿とて はしめ粂之丞 寶曆五年十一月朔日はしめて拜謁し給ひ廿八日首服加へられて常陸介殿と稱す 御諱字以下世々の例のごとし 七年從三位左中將國政をしらせ給ひて後參議に補し權中納言にうつり安永四年御勞はりのことさふらふとて國政の事は辭したまひて前中納言殿と申す 時に三十歲 御子なをいとけなくおはすとて支族左京大夫賴淳朝臣を嗣となし給ふやかて御諱字賜はり改めて治貞卿と稱せらる 寺江次直の御刀を賜ふ 從三位の參議左中將になり明る年權中納言に任し給ふ 御年四十一歲 次のとし重倫卿の御子活寶卿を養はせたまひ天明二年二月十八日治寶卿初見三月首服を加へられ御諱字賜はり 備前康光の御脇差をたまふ 常陸介殿と申翌年從三位左中將に任せらる

○從四位下左少將兼左京大夫源賴純は權大納言賴宣卿第三の御子也正保二年九月十四日五歲にて大奥に參りけるに御手つから行光の御短刀を給ひぬ 慶安元年三月三日はしめて出仕ありしといふ 承應二年の冬叙任して寬文十年十二月十八日伊豫國西條の地を賜ふ 三萬石 正德元年七月七日七十一にして卒す第五男玄蕃頭 後左京太夫 賴致家をつく庶兄主水泰綱は渡邊若狹守直綱に養はれ嫡子豐後守賴路源之助賴廉共に父に先たち次の山城守賴雄は病者なりけれは此賴致よつきとはなりけり元祿十三年九月朔日はしめて見參し寶永三年從四位下侍從になりて頭を兼遺領たまはりて後左少將にすゝみ享保元年御相續の御事ありし時其御諱を賜はりて紀伊殿にうつりもとの領地は弟左京賴渡して領せしめらる賴渡其三年に從四位下侍從に任し大夫を兼後左少將に至り元文三年三月十六日三十三歲にして卒す其子賴邑七歲にて遺領たまひ延享二年五月朔日はしめて見え奉り冬從四位侍從兼左京大夫に任し左少將にうつり寶曆三年七月廿九日家讓て致仕し監物と稱し天明元年閏五月七日卒す年五十その嗣賴淳實は宗直卿第二の男寬保元年九月朔日拜謁やかて從四位下の少將兼修理大夫 後玄蕃頭また左京太夫 になり家繼て後宗家重倫卿のゆつりをうけ給ひ跡をは其子玄蕃頭 後左京太夫 賴謙に繼せらる賴謙實は宗將卿の六男也いぬる安永二年九月は

しめて見え奉り從四位下侍從に任し式部大輔を兼家繼く明る年左少將に任す（廿歳）

○從四位下左少將兼内藏頭源賴職は大納言光貞卿第三の御子初めは長七と申す元祿九年四月十四日はしめて拜謁あり冬敍位任官十年四月廿五日常憲院殿はしめて紀伊殿にいたらせ給ひし時地賜りて越前國丹生を領し（三萬石）寶永二年六月十九日宗家の嗣となりて所領の地かへしまいらす

○從四位左少將兼主稅頭源賴方朝臣は（有德院殿の御事）大納言光貞卿の第四の御子にて新之助殿（はしめ源六殿）と申元祿九年初めて見參ありやかて敍任したまひ十年御兄賴職とおなしく越前丹生の地賜はらせ給ひ（三萬石）寶永二年賴職卿の御嗣として紀伊殿になり給ひ丹生の地はかへし奉らせたまひぬ

水戶

源頼房

頼重 竹丸 右京
侍從右京大夫從四位下寛永十七年四月朔日叙任　明曆二年十二月十五日從四位上左近衞權少將　寛文二年正月廿七日改讃岐守
延寶元年二月十九日致仕同月十八日號源英　元祿二年四月十三日卒七十四歳法名龍雲院大譽孤峯源英

某 鍋千代
天和元年六月廿六日卒

女子
實筑後守頼道女

某 巖麻呂
貞享元年十月十七日卒

吉孚 菊千代
元祿八年十二月四日左衞門督
同八年十二月五日正四位下右近衞權少將
同十五年五月十五日權中將
寶永元年十二月廿八日從三位
同六年十月十二日逝廿五歳
諡恭
簾中八重姬君常憲院殿姬君
隨性院延享三年六月十七日

女子
宗堯卿室

女子 早世

女子
松殿右大將通昭公室

某 龜丸 早世

女子
家人 太田主水資政妻

女子

女子
大猷院殿御養女

光圀　長丸　千代松
寬永十二年七月六日從四位下左衞門督
同十七年三月廿九日右近衞權中將
同年七月十一日從三位
寬文二年十二月廿一日叅議
元祿三年十月十四日致仕
同月十五日權中納言
同十三年十二月六日薨七十三歲

綱方　松千代　初賴世　右京
實讃岐守賴重長男
寬文二年十二月廿二日左衞門督
同月廿七日正四位下左近衞權少將
同十年正月廿二日逝二十五歲
謚請

賴常　鶴松
讃岐守賴重養子

綱條　釆女
實讃岐守賴重男
寬文十一年六月六日釆女正
同年十二月廿五日正四位下左近衞權少將
元祿二年十二月十五日右近衞權中將
同六年十二月朔日叅議從三位
寶永二年十二月二日權中納言

某　豐麿
元祿九年六月廿七日卒

女子二人　共早世

某　金松
元祿九年八月廿八日卒

某　直松
元祿八年四月十二日卒

女子
實今出川右大臣公矩公女
播磨守賴明室

某　友千代
寶永二年九月十二日卒

宗堯　輕丸　鶴千代
實讃岐守賴豐長男
享保元年十二月十八日正四位下左近衞權少將
同三年十二月朔日從三位權中將
同五年十二月朔日叅議
同十五年四月七日薨廿六歲
謚成

謚義

享保三年九月十一日薨
六十四歳
謚肅
簾中李君今出川公矩公女
本性院

簾中美代姫君吉孚卿女
泰受院

女子　號清山
鎌倉英勝寺
宗家家人酒井周防守忠治女

宗翰　鶴千代
元文元年四月十三日正四位下左近衛權少將
同二年十二月五日從三位左近衛權中將
同五年十二月朔日參議
明和二年二月廿日薨三十九歳
謚良

治保　英之允　鶴千代
寶曆十二年壬四月廿八日左衛門督
同十三年十二月十五日正四位下左近衛權少將
明和二年十二月十五日從三位左近衛權中將
同五年十二月朔日參議

某　直之允
寶曆九年六月廿一日卒

某　勝五郎
寶曆四年九月廿三日卒

女子
讃岐守賴起室

治紀　鶴千代
天明五年四月十九日左衛門督

女子

頼順　輕麿　主稅　初翰鄰
侍從大藏大輔從四位下
延享四年十二月十九日叙任
明和元年十一月十一日改上總介
同六年六月十一日改飛彈守
安永五年七月六日卒四十八歲

女子
大學頭頼亮室

頼圖　熊之助　鐵藏　主稅
實宗翰卿五男

女子
頼圖室

某
寶曆十三年八月十四日卒

女子
松平攝津守義裕室

某
寶曆六年三月十一日卒

頼圖　熊之助
飛彈守頼順養子

頼救　熊十郎
大炊頭頼多養子

女子
二條右大臣治孝公室

女子　號清薰　鎌倉英勝寺
實大炊頭頼多女

女子
今出川大納言種實卿室

女子
常陸國磐船願入寺遍雄室

保受　左膳
天明五年十一月廿九日卒二十五歲

保富　釆女
松平左門頼脩養子

女子　號清月　鎌倉英勝寺

信敬　大膳　初信德
家人中山備前守政信養子

綱方　松千代
光圀卿養子

賴常　鶴松　鶴千代　兵部　右京
實中納言光圀卿長男
侍從右京太夫從四位下
寛文五年十二月廿七日叙任
延寶元年二月廿八日改讃岐守
天和三年三月廿五日左近衞權少將
寶永元年二月十一日致仕
同年三月四日改新五郎
同年四月三日卒五十三歳
謚節

宗堯　輕麿
綱條卿養子

女子
實正親町權大納言實重卿女
中川内膳正久忠室

某　幸吉　幸千代
正德五年八月五日卒

賴泰　輕人　右衞門
元祿十一年二月二日卒十一歳

賴豐　輕千代　修理　式部
實圖書賴候男
侍從讃岐守從四位下
寶永元年三月四日叙任
同五年三月廿八日左近衞權少將
享保元年十月廿一日權中將
同月廿二日從四位上
同廿年十月廿日卒五十六歳
法名萬林院廓譽了然

女子
許嫁榊原遠江守政祐政祐卒
許嫁久我右大臣道兄公

賴治　萬次郎
侍從修理大夫從四位下
享保十一年十二月十八日叙任
同十六年十二月廿日卒廿歳
法名華德院曜譽心鏡悼柏泊了

女子　號清玉
鎌倉英勝寺

某
享保十九年八月五日卒十歳

賴桓　龜之助　式部
實志摩忠燕長男
侍從讃岐守從四位下
享保廿年十二月十六日叙任
元文四年九月十六日卒二十歳
法名恭岳登譽安然源德

女子四人
賴桓室
樋口三位基康卿室
松平肥後守客眞室

綱條　釆女
光圀卿養子

賴剛　賴母靫負
元祿十二年二月十四日卒四十三歲

賴侯　圖書

女子三人
實中納言賴房卿女
細川越中守綱利室
有馬玄蕃頭賴利室
鷹司前關白兼照公室

賴芳　帶刀

女子
與正寺僧正圖起室

賴恭　帶刀　大助
實大學頭賴貞三男
侍從讚岐守從四位下
元文四年十二月十六日叙任
延享三年壬十二月十五日左近衞權少將
寶曆十年四月廿六日權中將
同年五月九日從四位上
明和八年七月十八日卒六十一歲

賴豐　輕千代

賴熙　志摩

賴眞　輕千代　右京
侍從兵部大輔從四位下
寶曆七年十二月十八日叙任
明和八年九月改讚岐守
安永二年正月十五日左近衞權少將
同九年十二月十日卒三十八歲
法名瑞麟院惟學義源德定

許嫁阿部伊豫守正治卒

女子
水戸長松院養女
許嫁近衞左大臣同前公卒

賴桓　龜之助
賴豐養子

女子　早世

賴起　鼎之助　帶刀
實賴恭四男
從四位侍從兼讚岐守
安永九年六月廿八日右近衞權少將

法名台岳院明譽山槐光源穆

―賴昌　大膳

―女子三人
松平右近將監武寛室
酒井雅樂頭忠以室
小笠原佐渡守長堯室

―賴周　大藏

―女子
戸澤能登守正產室
正產卒嫁堀左京亮直敎

―賴裕　主計

―賴儀　雄丸
實賴眞男

―女子
許嫁松平加賀守重熈重熈卒
嫁德大寺大納言公成卿

―某　大助　早世

―某　幸三郎　早世

―女子
許嫁松平大隅守資尹資尹
卒嫁宗對馬守義暢

―賴起　鼎之助

―女子二人
堀田相摸守正順室
一人早世

―女子
號清夢
鎌倉英勝寺附弟

―女子
許嫁酒井靭負佐忠進卒

―賴儀　雄丸

賴元　兒麿　中務　丹波　刑部
侍從刑部大輔從四位下
正保三年十二月晦日叙任
元祿六年四月廿八日卒六十五

女子
相馬彈正少弼昌胤室

賴貞　大學
大學頭從四位下
延寶四年十二月廿六日叙任
元祿六年十二月十九日侍從
元文五年十一月廿一日左近衞權少將
寬保三年十月廿八日致仕剃髮
號直指
延享元年八月三日卒八十一歲
謚莊

忠國　小次郎　平八郎　初政義　政武
本多中務大輔政長養子

女子二人
松平志摩守直丘室
松平中務大輔宗昌室

女子二人
小笠原山城守長信室
細川山城守興生室

賴尙　丹波
丹波守從四位下
享保三年十二月十八日叙任
同九年三月廿六日依病籠居
同年四月二日改宮内
寶曆八年四月七日卒五十七歲
法名淨心院淸譽惠光徹山

賴寬　雄次郎　一學　主稅　賴母
若狹守從四位下
享保九年十二月十八日叙任
寬保三年十月廿八日改大學頭
同年十二月廿一日侍從
寶曆十二年十月廿八日卒六十一歲
謚頤

女子
堀丹波守直堯室

賴恭　帶刀　大助　初賴輔
讃岐守賴桓養子

賴愛　武之介 内匠 主膳
寶永三年正月十二日卒三十歳

某　小三郎
元祿十一年十月朔日卒十一歳

定賢　左門 初賴儀　賴軌
松平越中守定儀養子

賴濟　貞五郎 初賴守
播磨守賴幸養子

女子
松平中務少輔義敏室

賴羆　寛之助
元文二年五月十四日卒

賴篤　富五郎
延享四年三月廿四日卒

賴亮　德之進 初賴種
從四位下美作守
寶曆七年十二月十八日叙任
同十二年十一月十一日改式部大輔
同十三年十二月廿四日改大學頭
明和元年壬十二月十八日侍從

賴愼　榮之丞　敏丸

女子

賴融　千次郎

賴紀　音三郎

女子　共早世

頼賛　貞五郎
寶曆元年八月晦日卒

某　忠松
明和七年八月晦日卒

頼利　千丸　河内　求馬　數馬

女子二人
宗家家人白井忠左衛門信胤妻
保田越前守某妻

頼道　仙之助　靭負

女子　堀田宮内一之妻

頼雄　藤吉郎　門之亟　豐後　學
大炊頭從五位下
天和二年十二月廿七日敘任
元祿十年五月十四日卒六十八歲
法名一法院融山圓公

頼道　千之助　靭負
實求馬頼利男
筑後守從五位下
元祿十年十二月十八日敘任
享保四年八月二日致仕
同六年六月三日卒六十五歲
法名性禪院定譽歸眞道意

女子二人
綱條卿養女
一人早世

頼慶　友之助　將監
靭負佐從五位下
享保三年十二月十八日敘任
寬保二年正月六日卒六十四歲
法名登龍院功譽松山壽承

女子
宗家家人
白井忠左衛門信胤養女

頼泰　左近　左門

賴以　出雲　伊織

女子　早世

賴多　千之助　喜八郎
淡路守従五位下
寛保二年十二月十八日叙任
寶暦二年十二月十六日改大炊頭
明和三年十一月廿日卒四十五歳
法名惠高院道譽快安智嵓

女子
家人山野邊土佐守義賢妻

房時　聟　主殿
權之助

女子
本多出雲守正利室

某　源之助
延享三年五月廿七日卒

賴治　鐵丸
明和三年正月十七日卒十七歳

賴救　熊十郎
實參議宗翰卿六男
大炊頭従五位下
安永元年十二月十八日叙任

女子
賴救室

女子
宗翰卿養女

賴敬　信之助　一學

某　金次郎

女子

某　次郎
寶永三年八月十四日卒

某　豐後
正德四年五月廿九日卒

女子　共早世

頼賛　貞五郎
寶暦元年八月晦日卒

某　忠松
明和七年八月晦日卒

頼利　千丸　河内
求馬　數馬

女子二人
宗家家人
白井忠左衛門信胤妻
保田越前守某妻

頼道　仙之助　靭負

女子　堀田宮内一之妻

頼雄　藤吉郎　門之亟
豐後　學
大炊頭従五位下
天和二年十二月廿七日叙任
元祿十年五月十四日卒六十八歳
法名一法院融山圓公

頼道　千之助　靭負
實求馬頼利男
筑後守従五位下
元祿十年十二月十八日叙任
享保四年八月二日致仕
同六年六月三日卒六十五歳
法名性禪院定譽蹄眞道意

女子二人
綱條卿養女
一人早世

頼慶　友之助　將監
靭負佐従五位下
享保三年十二月十八日叙任
寛保二年正月六日卒六十四歳
法名登龍院功譽松山壽承

女子
宗家家人
白井忠左衛門信胤養女

頼泰　左近　左門

頼以 出雲 伊織

某 次郎
寶永三年八月十四日卒

某 豐後
正德四年五月廿九日卒

女子 早世

頼多 千之助 喜八郎
淡路守從五位下
寛保二年十二月十八日叙任
寶曆二年十二月十六日改大炊頭
明和三年十一月廿日卒四十五歲
法名惠高院道譽快安智嗣

某 源之助
延享三年五月廿七日卒

頼洽 鐵丸
明和三年正月十七日卒十七歲

頼救 熊十郎
實參議宗翰卿六男
大炊頭從五位下
安永元年十二月十八日叙任

頼敬 信之助 一學

某 金次郎

女子

女子
頼救室

女子
宗翰鄉養女

女子
家人山野邊土佐守義賢妻

房時 犍之助 主殿

女子
本多出雲守正利室

―重義　仙千代　孫三郎　武藏

家人雜賀孫市重次養子

―女子八人

讃岐守賴重養女

一人早世

家人眞水集人景信妻

一人早世

家人宇津宮下野守隆綱妻

家人酒井周防守忠治妻

家人伊藤玄蕃友次妻

實家人田代梅渡某女

家人鈴木石見守改妻

八重姫君は延享三年六月十七日逝したまふ東叡山に葬りまゐらせ隨性院殿と申す

水戸

○中納言源光圀卿は故中納言頼房卿第三の御子童名長丸殿（又千代松殿）と申す寛永十一年御とし七歳にて初めて見えまゐらせられ十三年七月六日御諱字賜はらせ給ひ元服ありて（行光の御脇差をたまふ）左衞門督殿と申すおなしき十七年右近衞權中將に任せられやかて從三位に叙したまひ寛文元年八月十九日國政をゑらせられてのち參議に補したまふ元祿三年十月國ゆつりて權中納言にいたり十三年十二月六日常陸國久慈郡西山の山莊にておはらせ給ひぬ御とし七十三歳（此卿御母は家の女房ゆゑ在て常陸の國水戸の城下三木仁兵衞元次か家に生れ給てのち御父頼房卿御嗣いまたさだまらさりしかは家の老中山備前守信吉うち〳〵左大臣家の大猷院殿の御事　仰かうむりて水戸にくたりしか御子多くおはす中に此卿を世にすくれたまへるよしかへり申けるに御嗣にはならせたまひけるしかるに兄をおき奉りて父の御嗣を繼せられし事を深く耻ちたまひ父の卿かくれたまひし時終に兄の頼重朝臣の子をとりて嗣となしたまふ此事は第一の御宿志にてありしと聞ゆ後瑞龍山に壽像いとなみ給ひし時みつから碑形をゑらひたまふその父の弟に養兄之子爲嗣義在之以襲封先生之宿志於是乎足矣とそしるされける）御子左少將綱方朝臣實は中納言殿の庶兄讃岐守頼重朝臣の嫡子（廿三歳）にて御父にさきたち給ひしかは其御舍弟采女殿御嗣子にさたまり寛文十一年六月六日はしめて拜謁ありて采女正殿と稱すそのとしの冬首服を加へ（備前友成の御脇差をたまふ）正四位下左近衞權少將に叙任ありて御諱字賜はり綱條朝臣と申す國ゆつられたまひて權中將に任し其後從三位にのほり參議を經て權中納言にすゝみ享保三年九月十一日御年六十四歳にてかくれさせたまひぬ御子菊千代殿四位の少將より三位の中將にならせたまふ元祿十一年八重姫君を（常憲院殿の御養君實は鷹司前關白房輔公の姫君）むかへ入まゐらせられしか廿五歳にて寶永六年の十月十二日うせたまひ餘の御子たちあまたおはせしにみな世を早うしたまひしかは御支族讃岐守頼豐朝臣の長子にて輕麿と申せしをやしなはせ給ひ（御嗣にさたまりてのちは鶴千代殿と申す）正德四年の夏はしめて見參に入まゐらせられ享保元年十二月十八日加冠ありて（來國光の御脇差をたまふ）御諱字賜ひ宗堯朝臣と申す正四位下に叙せられ右近衞權少將に任し父の卿かくれたまうて御あとをつかれ從三位にのほり權中將にすゝみ中ひとゝせおきて參議をかねたまひしか十五年四月七日廿六歳にて世をさり給ふ御嫡子宗翰卿童名は鶴千代殿三歳にて繼給ひおなしき十九年正月廿三日大奥にてはしめて見えまゐらせられ元文元年四月かうむりして御諱の字たまひ（行光の御脇差をたまふ）正下の

四位の左中將に叙任あり明るとしの冬從三位して左中將に任しやかて參議になりたまふ御年三十九歳にして明和三年二月廿日かくれさせたまひぬ此卿御子おほくおはします長はいまの宰相治保卿次は松平大炊頭賴救その次は釆女保福と申して支族松平左門賴修にやしなはれ又次はかの家の老中山備前守信敬なり治保卿寶曆十二年十二月十五日見參ゑたまうて(御とし十二歳)やかて御諱字賜はらせ給ひ加冠ありて(信國の御脇差をたまふ)左衛門督殿と申す明年十二月正四位下して左近衛權少將に任し明和三年の春國ゑらせたまうて後從三位の權中將にて參議をかね給ふ御嫡子鶴千代殿天明五年の春拜謁し給ひ四月十九日御元服(京國吉の御脇差をたまふ)御諱字賜はり治紀朝臣と申父の卿のことく督殿と申す

○左少將兼讃岐守源賴重は中納言賴房卿の長子なりしかとゆゑ有て嗣とし給はす初め右京大夫と申て寛永十五年十二月廿八日初て見參し明る十六年の七月十三日所領賜ひ(常陸國下館の城五萬石)十七年四月從四位下に叙し侍從に任し同しき十九年二月廿八日讃岐國高松の城賜はりてうつる(十二萬石)明曆二年の冬四位の少將にのほり寛文二年の春の讃岐守になり延寶元年二月十九日致仕して源英と號し元祿八年に至りて四月十三日七十四歳にして卒すその子賴常幼名は鶴松實は中納言光圀卿の御子なり寛文四年二月廿六日はしめて見參に入あくるとしの冬從四位下の侍從に任して右京大夫を兼延寶元年家讓られて讃岐守になり天和三年の春御使として京都にゆき(立后立坊の事なり)事はてゝ左近衛の少將にすゝむ元祿十一年の夏弟靫負賴剛に所領をわかちしか(私墾田五百石)明年の春賴剛身まかりて嗣の子なかりしかはその所領はかへし賜はりぬ寶永元年の春致仕し四月三日卒す五十三歳その子式部賴豐實は舍弟圖書賴候の子寶永元年の春はしめて見え奉り二月十一日家つきて溜詰になりやかて從四位侍從兼讃岐守になり五年の春京都の御使して(立后立坊の事なり)少將に任せられ享保元年の秋將軍宣下ありし時又京師の御使して中將にすゝみ從上に加階して其年の十月廿日五十六歳にして卒す長子宗堯卿は宗家の嗣にさたまり二男某は世を早うし三男修理賴治廿歳にて父に先たつてうせしかは支族志摩守賴澂の長男龜之助賴桓を養ひて嗣とすことし八月廿八日賴桓はしめて見參に入

父卒して封をつき溜詰になりて後從四位下の侍從に任して讃岐守を兼元文四年九月十六日廿歲にてうせぬその子大助賴恭實は大學頭賴貞か二男おなしき十八日遺領賜りて十一月十五日はしめて謁見し（襲封を謝し申せし日なり）やかて四位侍從兼讃岐守になり延享三年の冬將軍宣下の御使にて京都にのほりしかは少將にすゝみ寶曆十年の春御轉任によりてふたゝひ御使には中將になりて程なく四位の上階をゆるされぬ六十に一とつ餘て明和八年の七月十八日にうせぬ嫡子右京賴眞寶曆七年十月はしめて見參し十二月從四位下の侍從に任し兵部大輔を兼明和八年八月家繼く後讃岐守になり安永元年の冬京師の御使の仰かうふりてのほりしかは（女御入内の事なり）少將に任せられおなしき九年十二月十日三十八歲にて卒すその子帶刀賴起實は賴眞か弟四月廿七日遺領たまはりて（時に三十二歲）後從四位の侍從に任し兼讃岐守になり天明二年の夏若君御元服御官位によりて御使にさされて京都にのほり右近衞の少將に任す子なきによりて故讃岐守賴眞か二男雄丸賴儀を養ひて嗣子とす

○侍從兼刑部大輔源賴元は中納言賴房卿の四男なり童名兒麿と申す寬永廿年五月十八日はしめて見參し正保三年の冬從四位にして侍從に任し刑部大輔を兼寬文元年九月廿六日光圀卿地を割てわかちあたへらる（常陸國額田二萬石）元祿六年四月廿八日六十五歲にして卒す嫡子大學賴貞寬文十二年四月廿三日はしめて謁見し延寶四年の冬從四位下の大學頭になり父卒せし年の六月家繼く後侍從に任し元祿十三年九月廿五日常憲院殿はしめて水戶館にならせたまひし時御前にめして所領の地を賜ふ（陸奧田村郡のうち守山常陸の茨城行方鹿島三郡の內すへて二萬石○はしめわかたれたる所領の地此時宗家にかへしぬ）元文四年四月廿一日尾張中納言宗春卿蟄居せられし時安藝守吉長播磨守賴幸とともに御使して仰のむねをつたふ同しき五年の冬左近衞權少將にすゝみ寬保三年十月廿八日致仕して直指と號して年積りて八十一延享元年八月三日に卒す長子丹波守賴尙は病によりて廢し二男賴母賴寬を嗣とす賴寬享保九年四月廿八日はしめて見え奉り十二月從四位下若狹守に叙任し寬保三年の冬家讓られて大學頭になりやかて侍從に任し寶曆十三年十月廿八日六十一歲にしてうせぬ子ともふたり世をはやうせしかは三男美作守賴亮（はしめ賴種）父につくこれよりさき寶曆六年

四月朔日はしめて謁見し（十三歳）七年の冬從四位下の守になり（後大學頭）明和元年閏十二月侍從にすゝむ嫡子敏丸賴愼天明五年の冬はしめて見參にいる

○侍從兼播磨守源賴隆は（はしめ賴安）中納言源賴房卿の五男童名は右近寛永廿年五月十八日初めて謁見し正保三年の冬從四位下の侍從に任して播磨守を兼寛文元年九月廿六日光圀卿所領の地わかちあたへらる（常陸國保內二萬石）元祿十三年九月廿五日賴貞とともに所領の地賜はり（陸奧國岩瀨郡のうち長沼常陸國新沼茨城行方三郡の內すへて二萬石これもはしめの領地は宗家にかへす）寶永二年九月廿八日致仕しおなしき四年十一月晦日七十九歳にして卒す長子右近大夫賴方二男肥後守賴寧父に先たちてうせしかは三男外記賴如嗣となり元祿四年の秋はめして見參し十二月從四位下の能登守になり寶永二年の秋家繼くその年の冬侍從に任し同き四年十二月七日三十五歳にて卒すその子掃部賴明實は松平安房守賴福（賴房卿の孫）か子五年の春遺領たまはりて十二月從四位下大膳大夫に叙任し（後播磨守）明年の冬侍從になり享保十八年九月六日四十三歳にてうせぬ長子織部賴永享保十六年二月十五日はしめて拜謁し十二月從四位にして掃部頭になり（のち播磨守）十八年の冬家つきて後侍從に進み廿年八月廿五日廿三歳にて身まかる子なかりしかは弟源吉賴幸をやしなひて家繼しむ賴幸つきて從四位下の播磨守になり元文元年の冬侍從に任す廿四歳にて寛保二年六月廿七日に卒すその子貞五郎賴濟實は大學頭賴貞か五男八月十三日遺領を賜はりて十二月從四位下の播磨守に任し明る三年の冬侍從にすゝむ天明四年五月廿九日六十に五つ餘りてうせしかは嫡子雅樂頭賴前父につくこれよりさき寶曆八年の春はしめて見參しその年の冬從四位下してことし十二月侍從に任す（四十二歳）

○大炊頭源賴雄は中納言賴房卿の七男天和元年八月廿八日初めて見參すあくる二年二月常陸の國の內にして所領賜はり（茨城郡宍戸一萬石）その年の冬叙爵して元祿十年五月十四日六十八歳にして卒す子なかりしかは兄なる賴利の子靱負賴道を養ひて嗣とす賴道貞享四年十月十五日はしめてまみえたてまつり父卒せし年の七月家繼くのち從五位下筑後守に叙任し正德元年の秋譜弟の衆になさる享保四年の秋致仕し同六年六月三日卒すとし六十五長子將監賴慶寶永三年十二月廿八日はしめて見參し享保三年の冬從五位にして靱負

佐に任し明年の八月二日家ゆつられて寛保二年正月六日六十四歳にてうせぬその子喜八郎頼多家をつくはしめ寛文五年二月十五日見參し家つきし年の冬從五位下の淡路守になり後大炊頭明和三年十一月廿日四十五歳にして卒す男子二人みな世を早うしけれは參議宗翰卿の六男熊十郎頼救を養ひて子とし家繼す頼救安永元年十二月從五位下に叙して大炊頭に任す十七歳その子一學頼敬

藩翰譜續編卷之一下

保科

源正直

正光

正之

某　幸松
寛永五年六月廿七日卒

正頼　虎菊
侍従長門守従四位下
承應三年十二月廿五日叙任
明暦三年二月朔日卒十八歳
號岩彦靈社

女子　早世

正邦　久千代
寛永五年十二月廿五日卒十三歳

某　春之助早世

正甫　重五郎
侍従大膳大夫従四位下
正徳二年十二月十五日叙任
享保十三年二月廿三日卒三十一歳
法名紹稱院圓林日芳

某　榮之丞早世

女子　早世

正房　徳千代早世

女子
上杉播磨守綱勝室

女子　早世

某　將監　早世

女子　早世

正經　大之助
侍從筑前守從四位
萬治二年十二月廿七日叙任
天和元年二月十九日致任
同年三月十五日號致休
同年十月三日卒三十六歳
法名鳳翔院宜山休公

女子四人
松平加賀守綱純室
稻葉丹後正道室
二人早世

正容
實正之六男
侍從肥後守從四位下
天和元年十二月廿七日叙任
貞享四年五月廿五日左近衞權少將
元祿九年十一月十一日賜御家號
正德二年十二月六日正四位下權中將
享保十六年九月十日卒六十二歳
號德翁靈神

女子　早世

某　萬吉　早世

女子
許嫁松平隱岐守定喬向早世

某　政五郎　早世

容貞　長菊
侍從肥後守從四位下
享保廿年十二月十六日叙任
元文五年十二月十六日左近衞權少將
寬延三年九月廿七日卒三十二歳
號土常靈神

女子
松平加賀守宗辰室

容章　隆七
從五位下靭負佐
延享二年十月十八日叙任

正純　新助
東市正從五位下
寛文四年十二月廿八日叙任
同十一年七月廿日卒廿一歳
號石彦靈社

女子　早世

正容　重四郎

女子

容詮　專之助

女子二人
共容頌養女

容頌　龜五郎
初容綏　容淸
從四位下侍從肥後守
寶曆六年十二月十八日叙任
同十年四月廿六日左近衞權少將
明和二年十月十五日權中將
安永七年十二月十六日正四位下

容詮　專之助
實靭負容章男
侍從駿河守從四位下
天明五年六月十七日卒三十九歳
法名宣明院圓通義覺

女子　早世

某　富五郎　早世

容德　金之助

容將　爲之助

貞歷　喜十郎　早世

女子　早世

女子　稲葉美濃守正弘室

正貞

女子二人　實共容章女
加藤遠江守泰候室
大村信濃守純愼室

正景　甚四郎
越前守從五位下
萬治元年壬十二月晦日叙任

某　宮之助
明曆三年五月八日卒

女子一人
九鬼大隈守隆常室
戸田備中守氏胤室

某　甚四郎
寛文九年十月十九日卒

某　甚太郎
寛文七年七月十三日卒

正賢　喜三郎　正祥
兵部少輔從五位下
延寶七年十二月廿八日叙任

正英

延寶五年七月七日改彈正忠
貞享三年十月廿五日致仕號歸元
元祿十三年五月十六日卒八十五歲
法名恭岳院眞譽歸元

實小出大和守吉英三男
今保科辨三郎正恒祖

延寶七十年十二月廿八日敍任
正德四年十二月廿二日卒四十九歲
法名保國院雄巖昌英

女子　水野刑部忠富妻

正殷　豐次郎　主膳

享保三年十一月廿二日致仕
元文三年三月廿一日卒四十二歲
法名觀號院微山宗悟

某　勝之助

元祿十年五月九日卒

女子　早世

正昭　喜三郎

某　直次郎　喜三郎

延享元年九月七日卒

正壽　喜三郎　初正紹

實正賢三男
彈正忠從五位下
享保三年十二月十八日敍任
元文四年五月廿九日卒三十六歲
法名靈仙院洛譽玄道

正富　直次郎

徒五位下越前守
延享四年十二月十九日敍任
明和七年七月五日致仕
安永七年七月四日號桂山

女子

實正賢女
青山備前守幸覃妻

女子

實正賢女
保科甚四郎正勝妻

女子二人　共早世

某　鍋次郎
寶永五年十月四日卒

女子二人
共正般養女

正率　秀太郎　式部
從五位下彈正忠
明和七年十二月十六日叙任

正德　甚四郎

某　秀五郎
天明元年八月二日卒

女子　早世

女子二人

女子
松平筑後守親貞妻離別
嫁本多勝三郎忠直

某　文之助　德之助
寶曆七年七月廿七日卒

隆晃　安太郎
九鬼式部少輔隆貞養子

女子　早世

女子　武田河内守信親妻離別

清定　百五郎　斥鐵　大關伊織清宣養子

直儀　壽五郎　錸吉　源衞右門　左京　黑田源右衞門直賢養子

某　熊五郎　安永四年三月十一日卒

女子　早世

某　政五郎　安永八年三月十七日卒

清和源氏（此の系圖は正直に係る系圖にして原書には上欄に掲けられしをこゝに掲く）

井上掃部介賴季末葉

正則　保科甚四郎　彈正忠　筑前守

正俊　甚四郎　彈正忠　筑前守　武田家屬　生涯之勇戰八十三度　自身之高名三十七度　搶彈正是也

正直

保科　後賜松平

○筑前守源正經は左中將正之第四の男也長門守正頼をはしめ兄みな世を早うしけれは正經嗣となり万治元年九月晦日はしめて見參し明る二年の冬従四位下の侍従に任し筑前守を兼寛文九年四月ゆつりをうけ（陸奥國會津二十三萬石）天和元年二月身のいたはりにより致仕し弟重四郎に家ゆつりてみつからは致休とあらたむことし十月三十六歳にて身まかりぬ重四郎正容これより先延寶六年の冬はしめて拜謁家つきし年の十二月従四位下の侍従に任し肥後守を兼貞享四年の春御即位のとき京師の御使にさされ事はてゝ後少將に進み元祿九年十二月十一日正容御家號をゆるされ保科をあらためて松平と稱へおなしき十五年十一月には家の紋も公の御物にたかふ所なく用ふへしと仰下され正容おほち左中將正之一たひ保科の家に養はれしより二世のほとはさて置たりしを此御時にかく御一門のなみになされける親しのみこゝろいたりふかくこそかくて寶永五年の秋嫡子久千代を公の御むこかねになされて姫君（行姫君と申す）にあはせまゐらせらるへしとの御事なりしにいくほともなく久千代世をはやうす正德二年の冬正容正四位下の中將になるこれ文照院殿の御遺命と聞ゆあくる三年の春有章院殿御かうふりはしめありしかは正容仰によりて理髪の役に候す享保十六年九月十日所領會津にてうせぬ六十二歳なり正容子ともあまたあり長子久千代二男春之助うせて後三男重五郎正甫よつきとなり寶永七年閏八月はしてめ見えまゐらせ正德二年の冬従下四位の侍従兼大膳大夫に任せしか享保十二年二月卅一歳にて父に先たち其餘の子ともみな世を早うしけれは八男長菊容貞家を繼享保廿年二月はしめて拜謁しその冬従四位下侍従に叙任し肥後守をかぬ元文五年十二月あけなは御元服の事あるへきにより理髪の役の仰をかうむりて少將にすゝみ京師の御使をもうけたまはれり寛延三年九月廿七日卅二歳にして卒すその子龜五郎容頌ことし十一月遺領賜はり寶暦六年の秋はしめて見參に入（十六歳）そのとしの冬従四位下侍従兼肥後守になりおなしき十年の春京師の御使を奉はり（將軍家大納言家ともに任すの事あり）事はてゝ少將になされ孝恭院殿御元服あられ前の年に先その御役をさためられけるとき容頌理髪の

役の仰かうふりて中將にすゝむ明和二年十月五日なり安永七年の冬には正下の四位に叙せらるこれは年頃怠りなくおほやけのつとめ家の先途をきはめたれは年なをいかゝといへともかくはなされたり特恩とそきこへし其子專之助容詮實は靫負佐容章容章は正容か九男にて延享二年の春はしめて拜謁しその後帝鑑の間に候して叙爵し天明五年閏十月卒す五十九歲か子なり安永九年十一月はしめて拜謁し從四位下侍從兼駿河守になり天明五年六月十七日三十九歲にて父に先たちてうせけれは其子金之助容德嗣となる

○彈正忠正景は保科と稱す故彈正忠正貞か長子也万治元年の冬從五位下越前守に任し寛文元年十二月十六日父におくれて家をつき上總國飯野一萬五千石弟主水正英に所領をわかつ二千石○初め禪正忠正貞故ありて兄の肥後守正光の家をたちのきて伊勢國長島におもむき松平隱岐守定勝につきて年ころなけき申むれありてほといやしきものゝはらに甚四郎正景をまうけたりと流談せし折なれはいにつけて行わかれぬかくて寛永六年正貞御家人にめしくはへられ同き十六年に小出大和守藤原吉定か三男主水正英を養ひて嗣子とすそのゝち八年を經て甚四郎正景かありかをとひ得たりしかはおのかもとによひとりぬこれを年頃いやしきさまにて生たちたれは心さまもしりかたくて肥後守正之かもとにたのみやりていまた公には申さゝりしか一とせ正貞大坂の城番にてのほりし時に甚四郎正景か事聞しめししられゐるよしにてやかてめしいてゝ見えまゐらせほとなく爵たまはりけるにそ正貞もよろこひにたへすよつきとし家督をゆつりて主水正英には所領わかちしなり延寶五年七月大坂城の定番になされ加恩の地賜はる五千石合○二萬石丹波國天田郡の内貞享三年八月職を辭しその冬致仕して歸元と號す年積て八十五元祿十三年五月十六日卒す其子喜三郎正賢はしめは正詳延寶四年の春はしめて見參に入りおなしき七年の冬從五位下兵部少輔に任し父致仕して家を繼元祿三年八月奧詰になされしかあくる四年ゆるされたり正德四年とし四十九歲にて卒す其子豐次郎正殷寶永六年四月はしめて拜謁し正德五年二月十六日父か遺領をたまひしも身多病なりけれは享保三年の冬致仕し元文三年三月四十二歲にしてみまかりぬ男子なかりけれは舍弟喜三郎正壽享保二年二月はしめて見參し明る三年十二月に叙爵して彈正忠に任し元文二年七月大坂の城番を奉はりおなしき四年五月廿九日彼地にして卒すとし三十六歲嫡子直次郎正富ことし七月廿六日父か遺領を賜ひ延享四年九月はしめて見參にいりその年の冬從五位下越前守に叙任し明和七年の秋致仕し三十五歲安永七年剃髮して桂山と號す其子式部正率明和五年五月はしめて拜謁し時に十七歲父かゆつりをうけて從五位下彈正忠になる

松平 越智

源清武 熊之助 平四郎 玄蕃 民部
初吉忠 清宜 初爲越智與右衛門喜清養子 稱越智

母 文照院殿

下總守從五位下 元祿十五年十二月十八日叙任 寶永四年正月十一日賜御家號改出羽守 同年十二月廿三日從四位下 同六年十二月十八日侍從 正德二年二月六日改兵部大輔 同三年十二月十九日改右近將監 享保九年九月十六日卒六十二歲 法名本覺院養意日學

清方 初清行

內藏頭從五位下
正德元年六月四日叙任
享保九年正月廿四日卒二十八歲

女子二人 共早世

武雅 新之助 多宮 內記
初行高

實松平攝津守義行二男
肥前守從五位下
享保九年十二月十八日叙任
同十三年七月廿八日卒廿六歲
法名顯德院恭齊

某 萬橘

武元（チカ） 源之進
初モト

實松平播磨守賴明三男
右近將監從五位下
享保十四年十二月十六日叙任
延享二年五月廿八日改主計頭
同三年五月十五日改右近將監
同年九月朔日從四位下
同四年七月廿一日侍從
安永八年七月廿五日卒六十七歲
法名天超院勇山

某　熊之助

某　孝次郎

女子四人　松平豊後守忠泰室　一人早世　松平和泉守乘完室　安藤對馬守信成室

某　早世

武寛　久五郎　主計頭從五位下　明和五年十二月十八日叙任　安永八年九月十九日改右近將監　天明四年三月廿六日卒三十一歳　法名大隆院恒山

　女子　早世

　武厚　久五郎

　女子二人

元起　榮之進　戸田釆女正氏英養子

女子四人　松平伊賀守忠濟室　森山城守忠興室　久世隱岐守廣敦室　溝口伯耆守直堅室

松平 越智

○右近將監源清武は甲府殿（清揚院殿の御事）の第二の御子母は田中氏にして（おほちの方と申す長昌院殿の御事）文照院殿の御同母弟にてそありける（清武甲府殿の家人越智與右衛門喜清か家に生れしはらく喜清を父としける事は甲府殿あまた清水の御館におはせしに天樹院殿にみやつかへせし松坂の局かもとにありし女房御寵有て寛文二年虎松君（文照院殿の御事）をもうけさせたまひぬあくる年の二月此女房またたゝならぬ身となりつれは二條家（光平卿）の姫君入輿あるへきに定まりしかは天樹院殿松坂の局をひそかにはからせたまひて虎松君をは甲府殿のおとな新見備中守にあつけたまひ女房には局か猶子越智與右衛門喜清にあづけられんとありしに喜清さうなくもうけかはす局してよくこしらへさせたるに喜清さらは御子と申たしかなるしるしの文給はらんといふにそ新見備中守證状かきて備前重光の守刀にそへて遣しぬ喜清やかておのか家にむかへいたはりかしつきけるに月みちて十月二十日男子をうめりこれすなはち清武なりうち〳〵甲府殿に申けれは熊之助と名つけ給ふこの女房はそのひよりいたはりなやみてあくる年の二月廿八日むなしくなりぬ長昌院殿と申せしは此御事也清武延寶七年五月なとこゝになりて平四郎と改（後又玄蕃民部等に改む）おなしき八年五月廿八日與右衛門喜清死して家絶ぬもと三百石を領せしか度々しる處加へられて二千石にいたりしなり）元祿十五年十二月叙爵して下總守に任し（後出羽守式部大輔右近將監にあらたむ）寶永元年十二月甲府殿（文照院殿の御事）西城にうつらせたまひしかは同き十三日清武もめされて寄合衆となり二年二月七日采地を賜はり（もとの領二千石に加恩の地を合て四千石武藏相摸國のうちにてあておこなはる）三年正月九日また所領の地多く加へられ（一萬石）四年正月十一日家號くたされて松平と稱しまた上野國舘林の城地を賜はり（二萬四千石）この冬從四位下に叙す五年六月九日城築へき料として黃金（五千兩）をたまふその餘ものゝくなとおほく賜はれり六年十二月侍從に任しあくる七年正月十一日また地加へらる（一萬石）正德二年十二月文照院殿の遺命によりて所領おほく加へられて（合せて五萬四千石）ことし六十二歲にて享保九年九月十六日卒す息男內藏頭清方父にさきたちてうせけれは松平攝津守義行の（尾張殿の庶流○三家の支族のうちをよつきになすへしとの御旨ありしなり）二男內記武雅を養ひて嗣とす武雅ことし四月十五日はしめて見えたてまつり十月廿九日父につき十二月十八日叙爵して肥前守に任し十三年七月廿八日廿六歲にて卒すその子万橘某は早世しけれは松平播磨守賴明か（水戸殿の庶流）三男源之進武元して家つかす武元家繼し時陸奧國棚倉にうつり（太田備中守資晴にかはる）十四年の冬從五位下の右近將監に叙任す（後主計頭又右近將監に改む）元文四年九月朔日御奏者の事をうけたまはり延享元年五月十五日寺社奉行をかぬ三年五月十五日宿老になされ浚明院殿いまた大納言にておはしませしにつけまゐらせらるやかて從四位下に叙しまた舘林の城にうつる（太田備中守資俊にかはる）四年七月侍從に任

し九月三日本城の衆にくはゝりぬ明和六年十二月朔日所領加へられ七百石をくはへ合せて六萬千石安永八年七月廿五日卒す六十七歳武元はしめて仕へ奉りしよりこゝに至て五十餘年執政の期三十年にあまれり慶長のむかしより在職の任かくのことく久しかりしはいとまれなりこれゑかしなから讓厚忠誠なりしかは上々の御おほえも他にこへ世の人もよく服從しけるかゆゑなるへしその子主計頭後右近少監武寛明和五年初見叙爵し安永八年九月家を繼九年八月十七日御奏者の事を奉はり天明四年三月廿六日卒す三十一歳嫡子久五郎武厚年二歳にて五月十九日家をつく

田安

源宗武　小次郎

亨保十四年九月廿七日從三位右近衞權中將右衞門督　延享二年十一月二日參議　明和五年五月十五日權中納言　同八年六月四日薨五十七歲贈大納言法名然然院

―小次郎

寶曆三年十二月八日卒九歲法名考慈院

―英菊

寶曆五年八月十二日卒　法名瑞光院

―友菊　早世

寶曆三年四月七日卒　法名本寂院

―乙菊　早世

寶曆三年四月十七日卒　法名瓊樹院

―治泰　壽丸

明和元年十一月十五日大藏卿　同二年十二月十五日從三位左近衞權中將　安永三年九月八日薨二十二歲　法名商尙院天明三年六月四日贈參議

―定國　豊丸

松平隱岐守定靜養子

定信　賢丸
松平越中守定邦養子

女子　延姫初誠姫
許嫁松平藤次郎早世　寶曆九年五月十一日卒　法名惠學院

女子　裕姫　早世
寛保三年十一月十六日卒　法名隨緣院

女子　淑姫
松平信濃守重茂室

女子　貞姫後雅姫又仲姫
松平相摸守重寛室　安永六年六月二日卒　法名聖諦院

女子　節姫
松平大膳大夫治元室

女子　脩姫
酒井左衛門尉忠徳室

女子　種姫
浚明院殿御養女　紀伊中將治寶卿室

女子　定姫
松平伊豫守治好室

田安

○贈大納言源宗武卿は有徳院殿いまた紀伊殿におはしませし時正徳五年十一月廿七日赤坂の邸にて生れたまふ第二の御子にて御童名は松平小次郎殿と申す明る年有徳院殿大統をうけさせ給ひしかは其年十月小次郎殿をも御所に迎へ給ふ十五歳にて元服あり御諱の字を賜せられて宗武と申すこの日官途の御定めありて從三位右近衛權中將になり右衛門督をかね徳川を稱し給ふまた田安門の內なる地に邸宅作りてまゐらせられ享保十六年の秋わたましあり同き廿年近衞准后（家久公）の姫君をむかへたまふ延享二年十月御弟宗尹卿とともに參議をかけ（中將もとのことし）次のとし九月また宗尹卿とともに領地賜はりてさるへき國々のうちあまた所をくたし給ふ（五萬石）明和五年の夏中納言にすゝみたまひておなしき八年六月四日かくれたまふ御よはひ五十七にそおはしけるこの時權大納言をおくられたり公達あまた世を早うしたまひ第五の御子從三位中將治泰卿領地賜りたまふ御弟豊丸殿は松平隱岐守定靜か家をつき賢丸殿は松平越中守定鄰かよつきとなりたまふ姫君もあまたおはす第七の姫君は浚明院殿御所にかしつき申されて紀伊中將にあはせまゐらせたり其餘の姫君もみなさるへき家々にそおはしける治泰卿御童名は壽丸殿と申明和元年の十一月元服ありて御諱字賜はり徳川大藏卿殿と申す同二年の冬從三位の左中將に叙爵ありて安永三年九月八日二十二歳にて世をはやうし給ひぬほとへて參議をおくらる御子もおはせさりしかは領地公にかへしいれらるへかりしをなほ思しめすところありしにや御內の人々ありしことく候へしとおきてさせ給ひてよろつのつかさ御舘の番つかうまつれり

一橋

源宗尹 小五郎

享保廿年九月廿三日從三位左近衞權中將　延亨二年十一月二日參議　明和元年十二月廿二日薨四十四歲　法名覺子院　同七年十月十四日　贈權中納言　簾中俊姬　一條關白兼香公女　寬延二年七月十二日逝法名深達院

- 重昌 小五郎
  松平兵部大輔宗矩養子
- 女子
  松平薩摩守重豪室　明和六年九月十二日卒　法名慈照院
- 某 仙之助　小五郎
  寶曆二年十一月九日卒　法名眞性院
- 重富 仙之助
  寶曆八年三月廿一日繼越前家
- 治濟 豐之助
  寶曆十二年十二月朔日　民部卿明和元年十一月十一日　從三位左近衞權中將　天明元年十二月五日參議
- 高滿 隼之助
  松平筑前守繼高養子

鎌三郎
安永二年五月廿四日卒十七歳　法名信相院

金次郎
明和四年正月十四日卒　法名如雲院

御名

女子　早世

治國　力之助
天明六年五月十日刑部卿

長暠　雅之助
松平筑前守治高養子

雄之助
安永八年六月十二日

慶之丞

好之助

女子
許嫁德川五郎太　早世

女子

龜之助

女子

一橋

○贈中納言源宗尹卿は有德院殿第四の御子童名松平小五郎殿享保六年閏七月十六日生れ給ふ十五歳にして元服し御諱字たまはりて宗尹と名のるその日從三位左近衞權中將に任し德川刑部卿殿と稱しまゐらす元文四年一橋の內に邸宅賜はらせたまひ寬保元年十一月にうつり住給へりこれよりさき一條大閤兼房公の姬君をむかへまゐらせらるへき定ありてわたましありし次の年むかへられたまふそのゝち御兄宗武卿におなしく參議になりまた領地十萬石賜り給ふ明和元年十二月廿二日御年四十四にしてうせたまひぬおなしき七年權中納言をおくらる此卿は御子おほくおはす第一小五郎殿松平兵部大輔宗矩かよつきとなりて世を早うせられしかは次の御子仙之助殿にて其家つかせられ第四の御子豐之助殿に領地をまゐらせらる其次は隼之助殿松平筑前守繼高かよつきとなりたまへり豐之助殿は寶曆元年十一月七日一橋の舘に生れたまふ十二歳にて元服し御諱の字賜はり治濟卿と申すこれより德川民部卿と稱し申すやかて從三位左近衞權中將になり父の卿うせたまひし後其領地さなから賜はりその後參議になりたまへりこの卿は京極上總宮公仁親王の姬宮をむかへ申されしかと此姬宮いくほともなくうせたまふ

清水

源重好 萬次郎

寶暦九年十二月廿七日從三位左近衞權中將宮內卿　天明元年十二月五日參議

清水

○參議源重好卿は惇信院殿第二の御子也延享二年二月十五日西の御所にて生れ給ふ童名は松平萬次郎殿と申す寶暦九年御年十五にて元服あり御諱字賜ひて重好と御名を進らせらるこの日從三位左近衞權中將に任し宮內卿をかね德川を稱し給ふこれよりさき清水門のうちに邸宅つくりてまいらせられしかはことし十二月にうつり住せたまふ同十二年五月領地十萬石賜はり明る年の冬伏見宮貞定親王の姫宮をむかへらる天明元年十二月治濟卿ともに參議になりたまへり

藩翰譜續編卷之二上

松平　形原

源信利

信庸　九十郎　初政信　信慈
實駿河守典信三男
豐前守延五位下
延寶八年八月十八日叙任
元祿六年六月廿一日改紀伊守
同十年四月十九日從四位下侍從
享保二年五月十日卒五十二歲
法名亮清院功譽乾英

女子
實下野守庸倫女
金森出雲守賴門室離別
後嫁中山備前守政信

信岑　九十郎　又七郎
佐渡守從五位下
寶永七年十二月廿三日叙任
享保二年七月朔日改紀伊守
寶曆六年十二月十八日從四位下
同十三年十一月廿日卒六十八歲
法名宏源院周譽道惠

庸倫　豐三郎　監物　宮內
伯耆守從五位下
後信濃守下野守
寶曆十一年二月廿四日卒
今松平友三郎庸孝祖

康親　三五郎　早世

信直　豐五郎　又七郎
實下野守庸倫長男
從五位下佐渡守
寬延元年十二月廿一日叙任
明和元年正月十六日改紀伊守
天明元年壬五月廿七日致仕改主計頭
同二年三月十五日號隻峯

女子
實下野守庸倫女
本多淡路守忠弘室

女子
紀伊守信峯養女

信直　豐五郎

女子

種辰　政彌　藤五郎　彌門
戸田備後守重澄養子

女子
許嫁藤堂佐渡守高陣離別
後嫁南部甲斐守廣信

女子
許嫁森川飛驒守重能重能
卒後嫁永井伊賀守直陣

晃珍（クワウチン）
聖護院宮院室
住心院權僧正

女子
許嫁松平丹波守光慈光慈
卒後三宅備前守廣高

某　友三郎

女子
信峯養女

信嵩　己之助　助十郎　箕之助
松平下野守信治養子

某　金十郎　早世

女子三人
松平豐前守勝全室
一人早世
溝口相摸守直舊室

信道　又七郎
從五位下釆女正
安永七年十二月十六日叙任
同八年四月五日改若狹守
天明元年壬五月十六日改紀伊守

女子　早世

道宜　金次郎

女子　早世

信成　豐五郎　主水
內藏允
松平淡路信傳養子

女子
太田熊五郎資承妻

光弘　十五郎　中務
戸田但馬守光邦養子

重敎　叶
彦坂九兵衛忠德養子

利和　幸十郎　縫殿助
六左衛門
巨勢六左衛門至親養子

直義　順吉

成久　多門　內匠
牧野內記資成養子

女子　早世

直溫　泰次郎　兵庫

源興嗣　庄太郎　又七郎　佐渡守　從五位下
（此系圖形原松平に係るもの原書上欄に掲けたるを今こゝに掲く）
和泉守信光五男
三河國居干形原鄕故稱形原松平
法名號玉峯院信譽光忠

貞嗣　兵部太郎　又七郎　兵部少輔從五位下
法名號信月順阿喜白

貞谷　和尙號侍考

親忠　彌太郎　又七郎　佐渡守　從五位下
法名號西岸淨光

忠治
法名號林譽道怡

女子　松平內藏介安房妻

家廣　左太郎　又七郎　紀伊守
法名號孝道白

忠要　松平三平次

忠次　松平九郎次郎

家忠　左太郎　又七郎　紀伊守
母水野惣右衞門忠重姊
法名號月桂淨雲

女子五人
鳥居彥右衞門元忠妻
石川筑後守妻
千賀孫兵衞妻
小笠原安房守妻
松平八兵衞養祖母

家房　新助　勘右衞門　右京進

家嗣　又七郎　紀伊守

家房　勘兵衞

政成　次右衞門

政房　孫右衞門

康信　又康北　新助

家信　又七郎　紀伊守從四位下
寛永十五年正月十四日卒七十歲
法名常立院上譽大信

女子

康信　又七郎若狹守從四位下
母太田備中守資次女
天和二年六月十三日卒八十二歲
法名號大安院德譽道怕別峯

秀勝　助七郎

松平　形原（カタハラ）

○紀伊守源信庸は駿河守典信か三男也延寶四年の冬の頃兄主膳正信利やまひに罹りてあやうきに年わかヽりしにいまた繼たらん者なかりしかは十一月十九日信庸を養うて子とす其廿八日に信利つひに身まかりぬ（十九歳）明る五年二月六日遺領のこらす信庸にたまはる（丹波國笹山五萬石）おなしき九日はしめて拜謁し（襲封を謝せし日也）八年八月叙爵して豐前守に任す（のち紀伊守）元祿七年正月十八日奥詰になされおなしき九年十月朔日御近習の列にくはへらる明る十年四月十九日所司代になされ加階して侍從にすヽむ寶永三年の春江戸にまゐりその秋ふたヽひ御暇給はりし時職務の料として廩米をたまふ（一萬俵）正德四年九月六日執政に補せらる享保元年三月五日病によりて職ゆるされあくる二年の五月五十二歳にて終りぬ嫡子紀伊守信岑又七郎と申せし時寶永七年四月廿八日はしめて見參にいりその冬從五位下佐渡守に叙任す（のち紀伊守にあらたむ）享保二年六月廿七日父か遺領を賜ひおなしき廿年六月廿二日御奏者の事を奉はり寺社奉行を兼ぬ元文四年三月四日病によりて寺社の奉行をゆるさる（御奏者は元のことし）寛延元年八月三日所領丹波國笹山を轉して同國龜山にうつさる（青山因幡守忠朝にかはる）寶暦六年の冬從四位下に叙して御奏者をゆるさるおなしき十三年十一月卒すとし六十八嗣なけれはかねて舍弟下野守庸倫か長子豐五郎信直を子とし養ふ信直寛延元年四月十五日拜謁し其冬叙爵して佐渡守に任す（後紀伊守にあらたむ）寶暦十三年十一月廿八日父の遺領を賜ひ天明元年閏五月病によりて致仕す（主年頭に改む時に六十一歳）嫡子紀伊守信道これよりさき安永七年十月朔日はしめてまみえまゐらせその冬從五位下に叙して采女正に任し（後若狹守又紀伊守となる）天明元年父致仕の日家をつく（二十歳）

松平　深溝

源忠利

好房　右近
大炊頭從五位下
寛文二年十二月廿七日叙任
同九年六月廿二日卒二十一歳
法名源祐

忠倫　左門
右京亮從五位下
延寶二年十二月十七日叙任
貞享二年依病籠居
享保三年八月廿日卒六十二歳
法名源心

女子
實松平外記忠實女
渡邊安藝守綱高室

某　國千代　早世

某　九八郎　早世

女子
許嫁南部大膳亮利幹　早世

女子
土岐丹後守頼稔室

某　又八郎　早世

忠英　豐次郎　早世

女子　早世

女子
實稻垣藤九郎重武女
堀遠江守直恒室

忠救　七郎大夫　内記
實家人松平勘解由次章二男

忠房　五郎八
主殿頭從五位下
寛永十二年十一月晦日叙任
天和三年十二月四日從四位下
元祿十一年四月十八日致仕改大炊頭
同十三年十月朔日卒八十二歳
法名源通

忠季　五郎七
慶安元年六月三日卒廿三歳

女子
木下伊賀守俊治室

女子
實松平彦兵衞忠治女
岡部次郎助長頁室

忠雄　甚之丞
實松平理兵衞伊行二男
阿波守從五位下
元祿四年十二月廿六日叙任
同十一年四月廿八日改主殿頭
享保十七年十二月十六日從四位下
同廿年十二月二日致仕改大炊介
元文元年二月七日卒六十四歳
法名源恭

女子
實松平日向守勘敬女
松平玄蕃頭勝尹室

飛驒守從五位下
享保十三年十二月廿一日叙任
同十九年十月十五日卒三十三歳
法名源功

忠俔　圖書　初忠頁
實家人松平勘ヶ由次章四男
主殿頭從五位下
享保廿年十二月十六日叙任
元文三年三月廿日卒三十二歳
法名源證

忠刻　八十郎　主殿
初貞永
實松平日向守勘敏長男
主殿頭從五位下
元文三年十二月十八日叙任
寛延二年五月十日卒三十四歲
法名源誰

女子
實飛驒守忠救女
土井伊豫守利信室

忠祇　吉十郎
主殿頭從五位下
寶曆元年十二月十八日叙任
同十二年九月晦日致仕
同年十二月十八日改大炊介

忠恕　八十之助　將監
實主殿頭忠刻二男
主殿頭從五位下
寶曆十二年十二月十八日叙任
後改大和守飛驒守主殿頭

女子
鳥居伊賀守忠貴室

忠恕　將監

忠孝　直三郎
松平五郎左衞門忠冥養子

忠睦　中務

忠馮　秀太郎　又八郎

忠邦　內記
大久保山城守忠喜養子早世

女子　許嫁梅溪少將道同早世

忠成　八五郎　大久保山城守忠喜養子

職喬　左京

女子　梅溪少將道同室通同卒後嫁植村出羽守家長

保朝　保五郎　秋元壹岐守茂明養子

某　辰之丞

女子　松平山城守信古室

忠堯　織之助　松平惣兵衛忠明養子

女子

忠良　雄五郎

某　友之丞

源忠景　和泉守信光男　大炊介　（此系圖原書には源忠利の上欄に掲く）

忠定　大炊介　住三州岩津　享保四年四月九日卒法名源参

好景　大炊介　住三州深津　永祿四年四月十五日於善明堤討死四十四歳法名源秀

伊忠　主殿介　天正三年九月廿一日於鳶巣討死三十九歳法名源斤

家忠　主殿介　慶長三年八月朔日於伏見討死四十六歳法名源慶

忠利

松平　深溝（フカミゾ）

○主殿頭源忠房は故主殿頭忠利か長男也元和九年大
相國家左大臣家御上洛ありし時父か居城三河の國吉
田において五歳にして初めて見え奉り九歳の時に江
戸に候し寛永九年八月十一日父か遺領を賜はりて三
河の國苅屋の城にうつさる（三萬石水野隼人正忠淸にかはる）おなしき十
一年御上洛の時七月四日三河の國池鯉鮒にして饗膳
を捧け又供奉の列にくはゝる明る年十一月晦日叙爵
し（これまて五郎八といひしなり）慶安二年二月廿八日おほくの地くは
へられて（一萬五千九百石餘加へられ合て四萬四千九百石餘）丹波の國福智山の城に
移り（稻葉淡路守通尊にかはる）寛文九年六月八日肥前國島原の城に
加恩の地そへて賜ふ（二萬石すへて六萬五千九百石餘）天和三年十二月從
下の四位にのほり貞享二年九月晦日詰衆になされ元
祿十一年四月十八日その子阿波守忠雄に家を讓り致
仕して大炊頭にあらたむおなしき十三年十月朔日卒
す（八十二歳）忠雄實は一族理兵衞伊行か二男なりはしめ忠
房か長子大炊頭好房は父にさき立てうせぬ二男右京
亮忠倫を嗣子にさためられしも多病なるによりて忠
雄をやしなうて嗣となせし也忠雄はしめは甚之丞と
いふ元祿四年九月はしめて見えまゐらせそのとしの
冬從五位下阿波守に叙任しあくる五年十月廿九日奥
詰になされおなしき七年の冬奥詰をゆるさる家つき
て主殿頭にあらたむ享保十七年の冬從四位下にのほ
り同廿年十二月致仕して（大炊頭にあらたむ）元文元年二月七日
六十四歳にしてうせぬ男子三人みな世をはやうしけ
れは一族の家人勘解由次章か子忠救を嗣子とす忠救
叙爵して飛彈守に任しけるかこれも早世しけれはそ
の弟圖書忠俔を嗣とす忠俔享保廿年六月朔日はしめ
て見參にいりことし十二月二日家をつきおなしき十
六日從五位下主殿頭に叙任し元文三年三月廿日卒す
とし三十二歳子なかりけれは一族日向守勘敏か長男
八十郎忠刻よつきとなりてことし五月廿七日家をつ
きその年叙爵して主殿頭になり延享四年七月十一日
御奏者の事をうけ給はり寛延二年年三十四歳にてう
せぬ其子吉十郎忠祇七月十三日家を繼廿三日所領轉
せられて下野國宇都宮の城にうつさる（戸田伊賀守忠締にかはる）寶
曆元年十二月十五日はしめて見參しこの年從五位下
主殿頭になる十二年の秋身虚弱なれはとて舍弟將監
忠恕を子とし養ひて家をゆつりその身は致仕して大

炊介にあらたむ廿七歳忠恕ことし九月朔日はしめて拜謁し晦日家繼て主殿頭に任す時に廿三歳　安永三年六月八日舊領たるによりてふたゝひ肥前國島原にかへしうつさる戸田因幡守忠寛にかはる

松平　能見

源重勝

重忠

英親　長門　初直次　重頼
東市正從五位下
寛永廿年十二月廿九日叙任
元祿五年十二月四日致仕
同八年五月二日號宗閑
寶永三年三月十日卒八十三歳
法名瑞龍院天雷宗閑

女子
一柳大監物直興室離別

重長　修理　圖書
元祿三年十一月廿四日卒六十三歳
今松平八三郎勝政祖

重直

重榮　千勝　主馬　初直之　重賓　重賢
志摩守從五位下
萬治三年十二月十八日叙任　後改丹後守
寶永五年十一月廿二日致仕　又日向守
同七年七月十日剃髪號淨山
享保五年二月十八日卒七十五歳
法名靈覺院高傑叟淨山

重興　織部　源五郎

女子二人
實一柳大監物直興女
竹腰山城守正時室
實丹後守重直女
織田對馬守長救室

女子
新庄主殿直詮室

重休　傳三郎　市三郎　初重成
民部少輔從五位下
寶永二年十一月十九日叙任　後改豐前守
後改豐前守
正德五年八月十日卒廿五歳
法名龍溪院狐巖貞松

直政　宮内　織部
兵庫頭從五位下
慶安四年八月十六日敍任
元祿十一年四月八日卒六十八歲
至孫民部武卿有罪家絕

親純　吉五郎　初重友
實新庄主殿直詮八男
東市正從五位下
享保二年十一月廿一日敍任
元文四年二月十六日卒三十七歲
法名心源院大光宗圓

女子二人

政方　主水　五郎左衞門
元祿十三年八月七日卒
今松平八郎右衞門正融祖

女子
英親養女

親盈　千之助
從五位下東市正
寬保二年十二月十八日敍任
後改對馬守又但馬守
明和四年八月十四日致仕

親章　安五郎　內記
松平圖書勝房養子

女子
關播磨守政富室

某　惠之助　早世

女子二人
佐竹壹岐守義祐室
木下淡路守利劇室

親貞　千之助　雄之助　初親榮
筑後守從五位下
明和五年十二月十八日敍任
天明五年五月廿三日致仕

親賢　民之助

親寶　豊三郎　房之助

女子二人
水野對馬守忠實室
牧野內膳正康陸室

親安　織之助

女子　早世

女子　早世

某　雅之助

親賢　民之助
實對馬守親盈二男

女子二人
一人早世

某　直之助

勝隆

重隆　三四郎
寛永三年七月十日卒十八歳

勝廣　傳五郎
實淡路守重長嫡男
美濃守從五位下
寛永元年十二月六日一日作廿叙任
同十二年六月依病籠居
寛文十二年十二月廿二日卒五十九歳
法名昭松院正譽順宅覺友

重宗　傳三郎
但馬守從五位下
延寳七年十二月廿八日叙任
天和元年十月九日卒十八歳
法名常照院靈譽意白

女子
實淡路守重長女
品川式部大輔高如妻

忠勝　宮内　傳三郎　初重治
實品川式部大輔高如嫡子
宮内少輔從五位下
明暦三年十二月廿七日叙任
寛文二年十月八日改出雲守
同九年十二月廿六日改山城守
天和元年十一月廿六日改修理亮
貞享元年十一月十日配流陸奥國會津
同二年八月二日死四十四歳
法名松統院住譽安山心連

伊氏　彦五郎　豐前守　内膳　釆女
品川式部大輔高如養子

勝秀　團之助
共父被罪配流大和國郡山
貞享三年六月廿五日赦
今松平傳三郎勝典家

信方　小三郎　初重安
共兄勝秀配流大和國郡山
共勝秀赦後繼品川小五郎範增

女子　早世

女子
實大隅守重利女
伊東甚太郎長治妻

勝制　忠次郎　忠左衛門
實勝廣男忠勝爲舍弟分釆地
元文二年八月四日卒九十歳
今松平忠左衛門勝武祖

源光親　次郎右衛門尉　仕三州能見
和泉守信光十男
（此の系圖は原書には源重勝の上欄にあり）

親友　圖書

重親　傳七郎　次郎右衛門尉
永祿元年五月十日卒　法名心空淨舜

重長　阿知波右衛門尉

重吉　次郎右衛門尉
天正八年八月廿七日卒八十七歲
法名淨夕

親吉　傳一郎

重貞　半彌

重勝

松平

能見（ノウミ）　附　修理亮　忠勝

○市正源英親は はしめ直次また重頼 丹後守重直か嫡男也寛永廿年三月廿六日父か遺領をたまはりて 豊後の國龍王の地三萬七千石のうち三萬二千石をたまふ 舍弟二人に所領をわかつ 修理重長三千石宮内直政二千石 ことし敘爵して正保二年正月十一日豊後國木付城にうつり 小笠原壹岐守忠和にかはる 元祿五年十二月四日致仕す 後宗閑と號し寶永三年三月十日卒す八十三歳 嫡子日向守重榮 はしめ直之又重實重賢といふ 明暦二年二月はしめて見參にいり万治三年の冬從五位下に叙し志摩守に任す 後丹後守又日向守に改む 父英親致仕の時家をつき元祿七年十一月廿八日御奏者の事を奉はり同しき九年十月朔日寺社の奉行をかぬ十五年閏八月十九日ゆるされて鴈の間に候す寶永五年致仕し 後入道して浄山と號す 享保五年二月十八日卒すとし七十五歳その子豊前守重休元祿十四年十月十五日はしめて拜謁し寶永二年の冬叙爵して民部少輔に任し 後豊前守にあらたむ おなしき五年父の讓りをうけ正德五年八月十日身まかりぬ廿五歳子なかりしかは外姪新庄吉五郎藤原親純を嗣とす親純ことし十月二日遺領賜はりおなしき十五日はしめて見參にいり 家つきし事を謝し申せし也 享保二年の冬市正に任し元文四年二月とし三十七歳にてうせぬその子對馬守親盈四月九日父が遺領を賜りて帝鑑の間に列なる寬保元年十一月朔日はしめて拜謁しあくる二年叙爵して市正になる 後對馬守又但馬守 明和四年八月十四日致仕す 時に四十一歳 嫡子雄之助親貞ことし四月朔日はしめて見參にいり父致仕の日その所領を賜ひおなしき五年の冬從五位下筑後守に任す天明五年致仕す三十五歳身病痾によりてなり其子民之助親賢實は親盈か次男也この年四月十一日兄親貞か嗣とすおなしき廿八日はしめて見え奉り五月廿三日家をつく 時に年三十歳 おなしき十二月叙爵して駿河守に任す

○修理亮源忠勝は出雲守勝隆か子實は品川式部大輔高如か嫡男也明暦三年の冬叙爵して宮内少輔に任し 後修理亮にあらたむ 寬文二年九月晦日父かゆつりをうく 上總國佐貫の地一萬五千石 おなしき十年四月十三日御奏者の事を奉はり延寶六年寺社の奉行をかぬ天和元年十一月廿八日病によりその職を辭すしかるに貞享元年十一月十日御けしきにたかふ事ありて所領の地收上せられ保科肥後守正信にめしあつけらる 陸奥の國會津若松の地に蟄居す忠勝か罪かうむりし事いかなるゆゑともさたかならす然とも先に奉行職にもかそへられて上の事も辨へなから下さまのものとともにみたりなる消息して御けしきかうむりし

と聞へし三男闈之助勝秀四男小三郎信方も嫡男但馬守重宗は早世し二男彦五郎某はさきに品川式部大輔弘氏にやしなはる松平日向守信之にあつけられて家たえぬ貞享二年八月二日忠勝會津の地にしてうせぬとし四十五明る三年六月廿五日闈之助勝秀をめしてふたゝび御家人となされ五百石をたまふ

松平 大給

源乗正

乗勝 ― 親乗 ― 眞乗

家乗 ― 乗壽

乗高 源次郎 後乗守 忠尙
松平下總守忠弘養子

乗久 源次郎
宮内少輔從五位下
正保三年十二月晦日叙任
承應三年十二月十四日改和泉守
貞享三年七月十七日卒五十四歲
法名源正院圓超英徳

乗重 八助 藤藏
元祿二年十二月四日卒廿三歲無嗣
家絶

女子二人

乗春 主水
主水正從五位下
天和二年十二月廿七日叙任
貞享三年九月十八日改和泉守
元祿三年九月五日卒三十七歲
法名受晃院廓月徹心

安乗 三五郎

明乗 四郎五郎

乗邑 源次郎 初乗益
和泉守從五位下
元祿十二年十二月廿一日叙任
享保七年七月十二日左近將監
同八年十二月十五日從四位下
同九年十二月九日侍從
延享二年十月十日致仕
同三年四月十六日卒六十一歲
法名源壽院月心英忠

乗興 小三郎
刑部少輔 内匠頭
今松平信濃守乗森祖

女子二人
松平舍人近苗妻
松平左門乘邑妻

乘利　宮之進
松平宮內少輔忠尙養子

乘盈　才藏　初正相　靭負
稻葉備前守正親養子

意乘　源次郎
正德六年八月朔日卒五歲

女子
牧野豐前守治成室

乘門　民部

乘淸　伊織

好乘　是七郎　源藏
壹岐守從五位下
正德四年九月廿五日卒五十三歲
至孫龜藏影乘無嗣家絕

某　早世

女子三人
牧野備後守貞長室
酒井備前守忠鄉室
永井山城守尙忠室

乘孝　初之助　源次郎
主水正從五位下
寶曆八年十二月十八日叙任
明和三年七月十七日卒三十三歲
法名光雲院自照得忠

乘住　小四郎
元祿九年九月廿八日卒八歲
無嗣家絕

女子

乘里　萬吉　早世

乘包　留之助　小三郎　後忠曉
玄蕃頭
松平宮內少輔忠尙養子

女子
許嫁土屋佐次郎泰興早世

女子二人
諏訪因幡守忠肅室
松平左源次乘渡妻

女子
實永井山城守尙忠女
許嫁牧野直五郎次成

乘祐　源次郎
主水正從五位下
享保十三年十二月廿一日叙任
同十五年七月十一日改和泉守
明和元年六月廿一日從四位下
同六年九月四日卒五十五歲
法名瑞源院德蓮順理

乘蘊　永之助
松平能登守乘賢養子

女子
岡部美濃守長富室

乘富　彌三郎　內藏

女子

乘溥　興之助　孫七
圖書頭從五位下
元文二年八月廿八日叙任
延享九年七月十六日卒二十三歲
無嗣家絕

乘用　龜之助　早世

乘房　千之助　早世

乘完　恒三郎　源次郎
從五位下左衞門佐
明和五年十二月十八日叙任
同六年十月廿八日改和泉守

乘顯　周之進　齋宮
後貞相
西鄉筑前守貞總養子

乘厚　彥彌

乘賀　安平　哲吉
後守淳
松平兵部義峯養子

女子一人
三浦備後守矩次室
岡部熊三郎盛貞妻

女子
實松平攝津守忠恒女
井上河內守岑有室

女子　早世

乘寬　源次郎

乘紘　悌五郎　早世

女子

乘應　潤之助

女子
小笠原主膳長矩養女

―女子

―某　淺彌　早世

―乘常　稱利見　左百
土井大炊頭利里養子

―女子
松平長門守近儔室

―乘時　文作　後忠順
松平大膳亮忠香養子

―女子二人
岩城伊豫守隆恕室
許嫁松平又七郎信通

―乘峯　小新次

―乘政　助十郎　稱石川
美作守從五位下
慶安四年八月十六日叙任
承應二年改能登守
寛文三年復改美作守
貞享元年十月十七日卒四十八歲
法名瑞祥院感巖道應

―乘員　千之助
明曆三年十月十四日卒無嗣家絶

―某　宗五郎　早世

―女子
松平安房守信孝室

―乘紀　吉十郎
美作守從五位下
元祿二年十二月廿七日叙任
同十四年八月朔日改能登守
同十六年六月廿二日復本氏改兵庫頭
享保元年十二月廿五日卒四十三歲
法名龍玄院覺巖悟心

―女子　早世

―玄綱　岩之助　舍人
朽木土佐守植治養子

―乘賢　吉十郎
能登守從五位下
寶永四年十二月廿二日叙任
享保廿年十二月十五日從四位下
元文元年十二月十五日侍從
延享三年五月八日卒五十四歲
法名建仙院智翁道貫

―某　吉三郎　千次郎　早世

―女子　早世

女子四人
增山彈正忠利澄室
松平内匠頭乘親室
小笠原大和守長宣室
後松平内匠頭乘親繼室
堀周防守親貞室

某　龜之助　早世

女子二人
知久監物賴久養女
二人早世

建英　鉛之助　要人
水谷出羽守勝英養子

致乘　老之助　仲
豐前守從五位下
今松平善之丞乘集祖

女子一人
阿部因幡守正鎭室
松平主水義彛養女

某　田宮　早世

女子
松平縫殿頭乘盈室

女子
許嫁松平安房守信嵩
信嵩卒嫁本多肥後守忠辰

某　吉十郎
享保六年正月十六日卒三歳

乘恒　厚之助
飛驒守從五位下
元文三年十二月十八日叙任
同二年十一月五日卒十七歳
法名大音院玄山淨覺

乘國　永之助
明和七年十一月廿日卒九歳

女子
許嫁土井大炊頭利延早世

乘蘊　永之助
實左近將監乘邑三男
寛保元年十二月十九日叙任
美濃守從五位下
延享三年六月晦日改能登守
安永四年壬十二月十一日從四位下
天明元年四月廿二日致仕
同三年七月六日卒六十八歳
法名大叟院禮節仁讓

乘遠　唯次郎　彌平　早世

乘保　慥五郎
實朽木土佐守玄綱五男
明和八年十二月十八日叙任
從五位下河內守
天明二年九月十六日改能登守

乘衡　熊藏

女子

女子　早世

乘友　慥五郎

女子　早世

女子

女子
實松平豐前守致乘女
乘蘊室早世

某　政之助　早世

眞次　三郎次郎　左近　縫殿頭　從五位下　元和元年叙任
正保三年九月十四日卒七十歳　法名香林院徹景淸曉

乘眞　友之助　左近
實內藤石見守信廣二男
寛永九年十二月六日叙任
左近大夫從五位下

今松平志摩守乘辰祖

乘次 左七郎
縫殿頭從五位下
寛文二年十二月廿七日叙任
貞享四年八月朔日卒五十六歲
法名乘次院覺譽遙本

女子四人
乘貞室

乘成 右近
石見守從五位下
寛文十二年十二月廿八日叙任
延寶八年改玄蕃頭
貞享四年十二月改縫殿頭
元祿十六年十月十日卒四十六歲
法名本樹院高譽性央圓山

女子
赤井五郎作忠廣妻

貞乘 求馬 早世

女子二人
桑山志摩守元稠妻
酒井下總守忠隆妻

女子
實畠山飛驒守義重女
本多牛兵衛正種妻

乘眞 牛次郎 縫殿助
實本多牛兵衛正種男
縫殿頭從五位下
寳永六年三月七日叙任
享保元年七月九日卒三十一歲
法名眞巖院締譽涼月永休

乘賢 左七郎 早世

某 伊織 早世

某 左門 早世

女子

乘統 銀次郎
安永五年七月廿七日卒十八歲

盈乘　牛平　縫殿助
初乘盈
縫殿頭從五位下
享保十五年十一月十八日叙任
寛保二年五月廿一日卒二十七歲
法名光顯院皎譽超然清英

女子　早世

乘穩　銀次郎　縫殿助
初乘穀　乘祇
石見守從五位下
寶曆五年十二月十八日叙任
天明二年十一月廿一日致仕
同三年四月九日卒四十五歲
法名還乘院德譽運應與然

乘睦　銀之助　早世

女子　早世

乘友　欽次郎　縫殿助
兵部少輔從五位下
天明二年十二月十八日叙任

女子二人
一人早世
青山美濃守幸賢妻

乘詮　中務
渡邊飛驒守綱通養子

女子三人
一人早世

乘尹　龜三郎

乘尹　龜三郎
實乘穩四男

女子二人

親清　近正　一生

成重　忠昭

女子
植村右衛門佐家敬室

某　虎之助　早世

女子
近貞室

某　五左衛門　早世

某　龜之丞　早世

女子
內藤大和守賴卿室

近貞　初松峯　兵庫　內記
實三宅備前守康雄二男
主膳正從五位下
正德二年十二月十九日叙任

女子
三宅備前守康雄室

某　主税
延寶元年八月十五日卒十一歲

近禎　巳之助　初昭貞　昭周　近治
筑前守從五位下
延寶七年十二月廿八日叙任
同八年改右近將監

近陣　虎之助　大藏　主膳　初昭重
筑前守從五位下
萬治三年十二月廿八日叙任
寬文九年十二月改對馬守

寶永二年十二月十一日致仕號如元
享保四年十二月十日卒八十二歳
法名證眞院頓譽圓意如元

女子一人
中根大隅守正延妻
岡部市正豐明妻

近鎭　大學頭
今松平主計近峯祖

近良　仁右衛門
今松平仁右衛門近昭祖

女子

女子
土岐伊豫守頼興室

近形　大藏　五左衛門
初近房
主膳正從五位下
元文二年十二月十六日叙任
明和七年七月廿一日致仕

元祿十一年五月六日改阿波守
寶永二年十一月十三日改對馬守
享保七年五月廿六日改相模守
同十年八月廿四日卒六十一歳
法名大智院雲譽德水如眞

女子
實岡部市正豐明女
皆川宮内廣達妻

近苗　舍人　市之丞
今松平伊勢守近言祖

女子

近儔　秀之助　五左衛門
從五位下長門守

享保十七年九月二日改對馬守
延享二年九月十八日致仕
寶曆七年五月十三日卒六十九歳
法名雲晴院現譽德翁智山

女子
實市之丞近苗女
大岡越前守忠宣室

近賢　秀之助

女子

安永二年六月十日卒五十一歳
法名観光院照譽然雁壽玄

酒井大學忠崇室

女子
松平市之亟近朝妻

近平 慶次郎

政道 帯刀
三宅備前守康尙養子

近義 欣彌

女子

女子 早世

女子

女子
松平伯耆守定齊室

女子
堀田主膳一敦妻離別嫁
興津傳一郎忠映

某 榮三郎 早世

某 朝之助 早世

某 岩吉 早世

女子
加藤近江守泰官妻

女子 早世

女子
許嫁大岡將監忠像離別
嫁阿部駿河守正賚

左京亮親忠嫡男
源乘尤 源太郎 加賀守
從五位下住三州荻生 法名宗忠

（此系圖は原書には源乘正の上にあり）

乘正

松平　大給（オギウ）

○和泉守源乘久は故和泉守乘壽か長男也正保元年十二月はしめて見え奉りおなしき三年の冬從五位下して宮内少輔に任しのち和泉守にあらたむ承應三年家をつき（上野の國舘林の城五萬五千石）弟石川能登守乘政に所領を分つ（五千石○乘政か傳は下に見へたり）寛文元年閏八月三日地くはへられて下總の國佐倉の城にうつる（六萬石堀田上野介正信にかはる）延寶六年の春ふたゝひ加恩の地賜はりて肥前の國唐津の城にうつされ（七萬石大久保加賀守忠利にかはる）貞享三年卒す（七月十七日五十四歳）嫡子源次郎乘高叙爵して宮内太輔と申せしか松平下總守忠弘に養はれしかは二男主水乘春父につき（六萬八千石）舎弟等に地をさきてあたふ（源藏好乘に私墾田を合て三千石藤藏乘重に私墾田二千八百石）乘春これよりさき寛文五年五月はしめて謁し奉り天和二年の冬從五位下主水正に叙任したり（のちに和泉守）元祿三年三十七歳にして身まかりけれは（九月五日）嫡子源次郎乘邑ことし十一月十日家つきて（六萬石）これも弟二人に所領わかつ（小三郎乘興五千石小四郎乘佐三千石）明る四年二月九日所領の地轉せらる志摩國鳥羽の城にうつさる（大井周防守利道にかはる）おなしき八年四月朔日十歳にしてはしめて謁し奉り十二年の冬從五位下に叙し和泉守に任す（後左近將監にあらたむ）寶永七年正月廿六日伊勢の國龜山の城にうつる（板倉主水正重秋にかはる）正德二年八月三日御氣色かうふりて逼塞せしか十月に至りて事ゆりぬ（一族松平左衞門乘包か家人高木某主人をうらむるゆゑありしにや乘邑か事を親族ともにあしくいひなしけれはうちにて異見をくはへけれと乘邑かつて聞いれずかゝりしかは乘邑をはしめみないきとほりて中たかひぬ此事公にもうつたへけるほとに乘邑をめして糺明せり然れとも行狀させるふしもあらさりけりしかるに一族こそりて高木一人かこと葉を信しその慮實もとひ極さるは卒爾の至りなりとてあるひは逼塞しあるひは御前の出仕をとゝめらる乘邑も一たひは所領の地收上せらると也）其後享保二年の冬山城國淀の城にうつされ（松平丹波守光豐にかはる）おなしき七年六月三日所領にありしに宿老の人々仰をつたへてことしの春まて大坂の城の守りすへきよしを下知しけれはかしこにおもむきてかりに城代の事をとりしにあくる八年四月江戸にめして連署の衆にくはへられ五月朔日下總の國佐倉の城をたまふ（稻葉丹後守正知にかはる）こととし從四位下して明る年侍從になりぬ乘邑職にあること十五年とり申ほとの事はこゝろにかなはすといふ事なく夙夜の勞をつみて延享二年の春は所領の地もくはゝりぬ（一萬石）當時の宿老なれは世の人の心よせも重かりけるにことし御代あらたまりてけれは十月九日職止られ剩へ邸宅をも一日のうちにめし收られて明る十日致仕せしめられ息男和泉守

乘祐して家つかせられしかさきに賜はりし所領はめしかへされてわつかに本領安堵しけり（乘邑としころよろつ心にまかせてふるまふよしきこえけれは大御所うち／＼いましめさせ賜ふとありけれどとかくあらたむる心もなかりしかはかゝることにおよひたりとそ）乘邑いくほともなくてあくる三年身まかりぬ（四月十六日六十一歳）乘祐いまた源次郎と申せし時享保九年九月朔日まみえ奉りおなしき十三年從五位下して主水正になり父の乘邑御勘當ありしとき御所に出る事をとゝめられしか閏十二月ゆるされてけれは十三日にそ家つきしかしこまりを申けるかくて延保三年の春出羽國山形の城にうつり（堀田相摸守正亮にかはる）寶暦十年正月御奏者の事をうけ給はりやかて寺社の奉行を兼たり明和元年六月廿一日大坂の城代になされ從四位下に叙せられ三河國西尾の城にうつさる（三浦志摩守明次にかはる）年の九月四日五十五歳にして大坂の城にてうせぬ長子某早世し次男主水正乘孝も明和三年父にさきたち三男四男も亦世を早うしけれは五男恒三郎乘完家を繼き明和三年六月朔日はしめて拜謁しことし叙任して左衞門佐に任し（後に和泉守）天明元年四月廿一日御奏者の衆にくはへらる（時に廿九歳）

○美作守源乘政は和泉守乘壽か二男にて石川と稱す（ことは前編に見えたり）正保三年の夏初めて拜謁し若君につけらる（時に八歳）慶安四年八月叙爵し承應元年六月小性になり能登守にあらたむ（後又美作守）ことしはしめて廩米をたまふ千俵おなしき三年の春父か遺領をわかち賜ふ（五千石は乘政にたまひし廩米はこの時弟千之助乘員にたまひしなり）寛文三年四月七日御小性組の番頭になりて御小性をも兼たり此時職務の料にあらたに廩米を賜はる（千俵）おなしき十二年四月御側衆になされ延寶七年七月十日とし頃の奉公の勞を賞せられて少老の職にあけられ加恩の地を賜ひ（五千石合て一萬石）これより万石の列になる天和元年の秋ふたゝひ地ましくはへられ（二千石）明る二年の春信濃國小諸の城を賜ひ（二萬石西尾隱岐守忠成にかはる）少老の職をあらためて御奏者の事をうけ給はりしか貞享元年身まかりぬ（十月十七日四十八歳）その子吉十郎乘紀十二月十二日家をつきおなしき十九日はしめて謁し奉り元祿二年の冬從五位下美作守に叙任し（後能登守兵庫頭）おなしき六年十一月奥に候せしか明る年の冬止られぬ十五年九月所領の地轉せられて美濃國岩村の城にうつり（丹羽勘助氏彥にかはる）十二月十五日御奏者になり明る十六年石川をあらためて松平兵庫頭と稱す正德二年八月一族左門乘包か事に坐して之はしかほと御

前の出仕を止められたり享保元年十二月廿五日四十三歳にして卒し嫡子吉十郎乘賢あくる年の春遺領を賜り弟仲致乘に所領をわかつ（私墾田二千石）乘賢これよりさき寶永二年五月初見の禮をとりおなしき四年十二月敍爵して能登守に任し享保四年の春御奏者になり八年の春少老の職にうつり翌年十一月若君につけられ職にある事年を經ておなしき廿年五月廿三日西城の宿老にすゝみ所領の地くはへらる（一萬石）この冬從四位下して明る年侍從に任し延享二年御代改たまりし時本城の衆になりあくる三年五月八日卒す（五十四歳）其子飛彈守乘恒先達てうせけれは左近將監乘邑か三男永之助乘溫を養ひてよつきとす乘蘊寛保元年四月朔日初て拜謁し同年十二月從五位下美濃守に任し後能登守家つきし後寶曆十二年の冬御奏者事をうけたまはり安永四年閏十二月從四位下に敍すおなしき九年の秋病によりて職を辭し天明元年の夏致仕しおなしき三年七月六日六十八歳にて終りぬ乘蘊男子三人ありしか二人は世を早うし三男熊藏乘衡いとけなきより多病にして家つかすへうもあらさりけれは朽木土佐守玄綱か五男慥五郎乘保を養ひて嗣子とす乘保明和八年三月十五日始て拜謁しその年の冬從五位下河內守に任し（後能登守）父かゆつりをうけて天明四年五月十五日御奏者番の事をうけたまはる

○縫殿頭源乘次は加賀守乘元より五代左近眞乘の二男縫殿助眞次か子也（眞次は慶長二年の夏武藏上野の賊徒等十三人上野國飯塚といふ所に楯籠りしを行むかひてうちやふり悉く討とりぬ同しき十八年駿河にまゐりて奉仕せん事をこふによりて大相國家につけらるやかて江府にまゐりて初めて見參にいりその年大坂の兵おこりしかは御陣の御供にしたかふ元和元年大坂の軍ふたゝひおこりし時正月七日のたゝかひに首ふたつ切て獻すことし步行衆の頭になされ上野の國にて釆地賜はり千石敍爵し寛永四年大番の頭となりて所領加へられしか二千石先祖舊領の地なれはとて三河の國大給を賜ひおなしき九年こたひ加恩ありしにも四千石ゆかりあれはとて同國定助の地を賜り領すすへて七千石正保三年九月十四日七十歳にてうせぬ眞次はしめて男子なかりしかは內藤石見守藤原信廣か二男左近大夫乘眞を養うて子とし後に乘次をまうけしかはその終にむことする時所領七千石を三人の子ともに分ちあたへん事をこひ申せし也）乘次いまた左七郎と申せし時寛永十五年八月朔日はしめて謁見し正保三年十一月父か遺領をたまふ（所領の內四千石乘次三千石を左近太夫乘光にわかちたまふ）寛文二年三月御扈從組の番頭になりその年の冬敍爵して縫殿頭に任しおなしき九年七月八日御書院の番頭にうつり十二年の冬大番の頭に轉し天和元年九月十四日御留守居になりあくる二年の夏釆地くはへらる（七千石これは今まで職事の料として賜はりしところ也）貞享元年二月大坂の定番となりおほくの地ましくはへられて万石の衆とつ

らなり（一萬六千石）おなしき四年八月朔日大坂において卒す（五十六歳）嫡子右近乘成寛文八年三月朔日はしめて見參し十二年の冬從五位下して石見守に任す（後玄蕃頭又縫殿頭）父卒せし年の秋家つきて元祿七年八月廿八日大坂城の守りを命せられ十六年十月十日そこにてうせぬとし四十六その子半次郎乘眞實は本多半衞藤原正種の子十二月九日家繼て寶永六年の春從五位下の縫殿頭になり享保元年七月五日三十一歳にて卒す長子半平盈乘（はしめ乘盈）九月五日遺領をたまふおなしき十年四月廿八日始て出仕し十五年の冬從五位下縫殿頭に叙任し寛保二年卒す（五月廿一日廿七歳）長男縫殿助乘穩（はしめ乘穀又乘祗）そのとし七月家をつき寶暦五年の冬叙爵して石見守に任し明和五年五月大番の頭になり安永八年三月病によりて職を辭し天明二年の冬致仕してあくる三年四月九日四十五歳にして失ぬ其子欽次郎乘友（兄乘統早世なり）安永七年閏七月朔日始て見參し天明二年十一月廿一日家讓られて後從五位下の兵部少輔に任す（時に廿二歳）

松平　大給（オキウ）

○對馬守源近陣（初め昭重）左近將監忠昭か嫡子（慶安九年三月七日初めて見參にいる）万治三年十二月廿八日從五位下して筑前守任し後（對馬守にあらたむ）延寶四年三月廿七日家をつき（豊後國厨内城二萬石餘）弟二人に所領をわかつ（大學頭近鎭に私墾田を合て千五百石仁右衞門近貞に開發の田千石をわかつ前編大學頭近鎭を主計頭明利と記し近貞を照政としるす）貞享二年の夏御奏者の事をうけたまはり元祿二年六月廿二日ゆるされて雁の間の詰衆となる寶永二年十二月十一日致仕し享保四年十二月十日卒す年八十二その子巳之助近禎（延寶三年七月十八日始て見へ奉る）七年の冬叙爵して筑前守になり父か致仕の日家を繼おなしき五年閏正月五日御奏者の衆にくはへられ正德元年の冬寺社の奉行を兼ぬ三年閏五月七日弟舍人近苗に廩米をわかつ（五百俵）享保十年八月廿四日六十一歳にして卒す男子三人みな世を早うしけれは三宅備前守康雄か二男内記近貞（はしめ昭峯）をやしなひてよつきとす近貞正德二年二月廿一日はしめて謁見し十二月從五位下主膳正に叙任し（のち對馬守）延享二年の秋致仕して寶暦七年五月十三日六十九歳にしてうせぬ長子五左衞門近形元文二年三月廿一日はしめて拜謁し從五位下して主膳正になり延享三年九月十八日家をつく寶暦十一年の冬御勘當の事ありて逼塞せしかあくる年の二月ゆるされたり（これは豊後の國の御料の地と近形か所領のさかひを道造るとて百姓等爭論に）

及ふ事ありておほやけの御裁判に及ふしかるにはしめ近形此訴訟を聞なからおろそかにして家人等か沙汰する所にまかせしによりてあやまれる事ともありし故也　明和七年七月廿一日致仕して安永二年六月十日五十一歳にして卒す長男五左衞門近儔明和七年の春はしめて見ゑ奉り家譲られてのちおなしき八年の冬従五位下長門守に任す時に十八歳

藩翰譜續編卷之二下

松平 瀧脇

源乘淸 源四郎 右京亮殿御子
大永六年三月十九日卒 法名應覺院谷譽響天

乘遠 龜井防三郎大夫
出雲守
弘治二年三月廿九日戰死
法名如海

正乘 久大夫
弘治三年正月五日卒
法名寂圓性空

乘高
出雲守
今松平監物乘備祖

乘定 久助

正秀 助十郎
天正十二年六月廿日戰死
法名卽源院心譽重面

正勝 助十郎
元和元年五月七日戰死
法名淨心院急安淸養

重信 助十郎 初勝信
實松平紀伊守乘信二男
丹後守從五位下
正保二年十二月晦日叙任 延寶元年四月朔日卒七十四歲
法名源保院雲譽了白

正吉　小大夫
寛文三年九月三日卒
今松平織部正方祖

女子　重信室

信吉　半之丞
明暦三年五月廿九日卒

昭信　内藏允
實松平若狹守康信二男
山城守從五位下
萬治二年十二月廿八日敍任
寛文二年二月十三日卒
法名蘇褐院陽譽賢超

親信　杢助

女子　早世

某　大藏
延寶七年六月二日卒

女子　早世

女子
實戸田和泉守重恒女
竹中主膳重榮妻

女子一人
土屋權十郎重吉妻
昭信室

親信　杢助
實昭信男
石見守從五位下
寛文九年十二月敍任
同十一年五月廿四日卒
法名眞光院鐵譽玄澄

某　助十郎
元祿十五年九月十四日卒

某
元祿十五年十一月廿一日卒

女子　早世

女子
實竹中主膳重榮女
松平外記忠根妻

女子
戸田玄蕃忠任妻

某
實松平紀伊守信庸二男
六角堂住心院附弟

信孝 大藏 助十郎
實松平駿河守典信二男
但馬守從五位下
天和元年十二月廿七日叙任
貞享二年十月廿一日改安房守
元祿三年十月十八日卒三十六歲
法名源松院尊譽一法樹廓

信治 宮内 助十郎
實戸田和泉守重恒二男
下野守從五位下
元祿五年十二月廿九日叙任
享保九年三月廿九日卒五十二歲
法名圓明院證譽光清淨龍

信嵩 箕之助 助十郎
實松平紀伊守信庸六男
安房守從五位下
享保九年十二月廿八日叙任
同十六年七月廿七日卒二十六歲
法名昭眞院皎譽義卓曉山

昌信 箕之助 源之助 助十郎
初信濤 信澄
內匠頭從五位下
延享元年十二月十六日叙任
寶曆元年八月十三日改安房守
明和八年六月廿七日卒四十四歲
法名樗伽院靜譽圓入正觀

女子
戸田藤五郎種貞妻離別
嫁戸田主膳氏任

信義 左近 助十郎
實堀丹波守直堯二男
從五位下丹後守
明和八年十二月十八日叙任
天明元年九月廿日改豊後守
同六年八月廿一日改丹後守

女子三人
信義妻
二人早世

女子

某 寛之進

某 益之助

松平　瀧脇（タキワキ）　號世良田

○安房守源信孝（はしめ但馬守）は右京亮殿（親忠公の御事也）の御子源四郎乗清より六代の孫丹後守重信かよつき實は松平駿河守典信か二男也初め乗清參河國加茂郡瀧脇の城に住しけれは瀧脇の松平とは申けり大永六年の春乗清卒してその子出雲守乗遠つき弘治二年三月戰死す乗遠男子三人ありてともに東照宮につかへ奉る長子久太夫正乗別に七ヶ村の地を賜はりてしか父にさきたちて卒せしゆへその子助十郎正秀祖父につき（正秀兄久助乗定は家人山田の謀反によりて瀧脇の城を落したりといふ）天正十二年六月戰死すその子助十郎正勝水野隼人正忠清にやしなはれ御書院の番衆になり元和元年五月七日大坂の戰ひにうち死す正勝男子なかりしかは松平紀伊守家信か二男助十郎重信を嗣とし正勝かむすめに合せて家つかせられ（千二百石上總國山邊常陸國江戸崎等の地也）　重信寛永十六年五月御小性組の組頭になり正保二年九月御書院の番頭にうつりおなしき十二月従五位下丹後守に叙任し慶安元年の冬大番の頭に轉し明暦二年駿府の城代になされ加恩の地を賜はる（三千八百石すへて五千石）　そのヽち寛文九年七月廿三日職ゆりて延寶元年に卒す（四月朔日七十四歳○重信か嫡子半之丞信吉世を早うしけれは松平若狹守康信か二男内藏頭昭信を養ひて子とす萬治二年昭信中奥の御小性になり従五位下して山城守になりしこれも世を早うしけれは孫杢助親信もまた中奥の御小性になり従五位下の石見守に任しけるかおなしき十一年に卒せしといふ）　その子助十郎に遺領を賜ふこれ安房守信孝也寛文十二年二月廿一日はしめて拜謁し天和元年十月御小性組の番頭になされ叙爵して但馬守に任しあくる二年の秋采地をくはへられ（千石）　貞享元年三月御書院の番頭にうつり元禄五年十一月御側衆になり翌年五月少老の職にうつり地くはへられて（四千石をくはへすへて一萬石）　はしめて諸侯の列となるおなしき三年の秋やまひによりて職を辭しいくほとなくて卒す（十月十八日三十六歳）　よつきなけれは戸田和泉守藤原重恒か次男宮内信治を養ひて嗣子とす信治ことし十二月十二日遺領を賜ひおなしき十五日はしめて見參し（この日家つきし事を謝し奉りし日也）　四年八月奥詰にくはへられ明る年十月十八日御小性になり従五位下下野守に叙任す十五年の春うちのつかへをゆりて外樣に候し寶永元年所領駿河國にてあらたに居所をいとなむ（これは元禄十一年に武藏上野の地五千石を領してこヽにうつされしなり）　享保三年正月十一日大番の頭に補せられおなしき八年十一月廿八日所勞によつて職をときあくる九年三月五十二歳にして卒すその子助十郎信

嵩實は松平紀伊守信庸か六男也ことし閏四月廿二日遺領をたまひやかて初見の禮をとり（襲封の事を謝せし日なり）この冬從五位下して安房守に任しおなしき十六年七月廿六歳にして卒すその子助十郎昌信おなしき九月家をつき寛保三年十一月十五日はしめて謁し奉り延享元年十二月從五位下内匠頭に叙任し（後安房守にあらたむ）明和八年卒す（六月廿七日四十四歳）昌信女子のみありて男子なかりけれは堀丹後守藤原直堯か二男右近信義にむすめ配せてよつきとなす信義明和五年の夏はしめてまみえ奉りおなしき八年八月遺領を賜ひ十二月十八日從五位下丹波守に叙任す（三十歳○のち豊後守又丹後守にあらたむ）

松平　櫻井

源忠重

女子　織田上野介信勝室

忠倶　萬助　初忠政　忠樹　忠親
遠江守從五位下
正保三年十二月晦日叙任
元祿九年五月廿六日卒六十四歲
法名深正院然淨梵道慧

忠繼　辰千代　與一郎　初忠貞　忠保
筑後守從五位下
寛文五年十二月廿七日叙任
元祿七年十二月十八日依病籠居
正德五年七月廿一日卒六十四歲
法名圓成院幅譽泰應

某　八郎

某　小次郎

忠敏　與一郎　萬助　內膳　初忠樹
元祿八年二月十二日爲祖父忠倶嗣
同年十二月七日卒二十四歲
法名心淨院道譽寂然道法

女子三人
永井能登守直圓室
菅沼織部定易妻
一人早世

忠喬　勝千代　與七郎　初倶武
遠江守從五位下
元祿九年十二月廿二日叙任
寛延三年十二月十八日從四位下
寶暦元年三月廿日致仕改石見守
同六年二月五日卒七十五歲
法名靈臺院信譽無隨道融

女子二人
實共織田上野介信勝女
水野土佐守重上室
喜連川左兵衛督昭氏妻

女子
實水野土佐守重立女
田中安藝守定賢妻

女子三人
喜連川左兵衛督茂氏妻
許嫁青山下野守俊春離別
嫁毛利但馬守廣豐
松平市正親純室

某　勝千代
正德三年五月廿五日卒

女子　早世

忠名　龜三郎　與七郎
初忠貞
兵庫頭（大膳亮）從五位下
享保十三年十二月廿一日叙任
寶曆元年三月廿一日改遠江守
明和三年十一月（十二月）廿六日卒五十三歲
法名德雲院寬譽仁岳道樹

女子
脇坂中務少輔安弘室

某　與七郎
寬保三年十一月廿八日卒四歲

明堯　千菊　萬助　孫太郎
初忠徹
加藤佐渡守明熈養子

忠告　戌千代　與一
初忠昆
大膳亮從五位下
寶曆七年十二月十八日叙任
明和四年二月廿一日改遠江守

某　戌千代
明和五年十二月七日卒三歲

女子　早世

忠寶　鐵丸　鐵之丞　與一
大膳亮從五位下
天明四年十二月十六日叙任

女子六人
三宅備前守康高室
許嫁安部攝津守信平卒
二人早世
安部攝津守信平室離別
嫁松平内匠頭信之
飛鳥井從三位雅重卿室

女子三人
一人早世
水野日向守勝紀室
實菅沼織部正定用女
本堂大藏親房妻

女子
相馬讃岐守祥胤室

忠恕　將監

女子　共早世

某　銀菊

忠進　隼人

某　外見松一　早世

女子

女子

利和　龜丸　初忠與
土井美濃守利見養子

女子二人
相良壹岐守長泰室
一人早世

忠義　民之丞　左膳　初忠頭

出雲守長親次男（此の系圖は原書には源忠重の上欄に在り）

源信定　與一郎　内膳正從五位下
住三州櫻井
天文七年十二月廿七日卒　法名道喜

清定　與一郎　内膳正　後改家重
天文十二年十月三日卒

女子四人
松平大炊介忠定室
松平上野介某室
松平源次郎近乘室
水野下野守信光室

家次　後忠次　與一郎　監物
永祿元年六月廿七日卒
法名信淨貞公

忠正　與一郎　天正五年七月廿日卒
法名華岳道春　室德川廣忠卿女

忠吉　與次郎　天正十年六月廿四日卒
法名一兵道隣

忠久　與七郎　子孫松平美濃守
吉保ニ仕

家度　與一郎

信吉　勘四郎　安房守　伊豆守
母廣忠卿女

忠頼　左馬允　母上同
慶長十四年九月横死

忠重　與一郎　大膳亮

忠直　淡路守

忠勝　長七郎

忠久　五郎右衛門　因幡守
隼人正

忠好　左京進

忠利　壹岐守

女子　木村右衛門大夫延俊室

松平　櫻井（サクラヰ）

○遠江守源忠倶（はしめ忠政忠樹忠親といふ）大膳亮忠重か嫡男寛永十六年三月三日家つきし時遠江國掛川の城を轉し信濃國飯山の城にうつさる（四萬石佐久間三五郎勝長に代る）ことし七月九日初めて見えたてまつり（時に六歳）正保三年十二月叙任し元祿八年大坂の城の守にかはり明る九年五月廿六日大坂にありて卒す六十四歳嫡子筑後守忠繼は病によりて籠居し嫡孫内膳忠敏祖父の嗣となりしか先たちてうせけれはその弟與七郎忠喬にことし七月廿五日祖父の遺領を賜はりおなしき十二月叙爵して遠江守に任す寶永三年正月廿八日遠江の國掛川の城にうつり正德元年二月十一日また攝津の國尼ヶ崎の城にうつる（青山播磨守重明にかはる）寛延三年の冬從四位下に叙し寶曆元年三月廿日致仕しおなしき六年二月五日卒す七十五歳とそ聞えし嫡子兵庫頭忠名（はしめ忠貞）幼名は與七郎享保十一年八月十五日はしめて見參しおなしき十三年叙爵して大膳亮に任し（のち遠江守）寶曆元年家を繼明和三年に卒す（十一月(十二月)二十六日五十三才）嫡男與七郎は早世し二男孫太郎（後加藤伊勢守明堯といふ）加藤佐渡守藤原明凞にやしなはれしかは三男與一忠吉（はしめ忠見）よつきとなる寶曆七年初見叙爵して大膳亮に任し（のち遠江守）明和四年二月廿日家をつき（時に廿六歳）その子與一忠寶天明四年初見して從五位下大膳亮に任す

松平 藤井

源信吉

忠國

信久 勘四郎
伯耆守從五位下
寛永廿年十二月廿九日敘任
承應元年四月八日卒廿四歳
法名玄融院淸雲淨安

女子五人
戸田釆女正氏定室
植村出羽守家智室
許嫁遠藤右衞門佐常春卒
二人早世

信之 次郎四郎
日向守從五位下
承應二年十二月廿八日敘任
貞享二年十二月廿六日從四位下
同三年七月廿二日卒五十六歳
法名萬昌院窓譽江月圓榮

忠之 彦四郎
日向守從五位下
元祿元年十二月廿五日敘任
同六年十一月廿五日依病籠居
同八年四月十二日死廿二歳
法名淨修院行譽定高

信重 三之助 勘助
志摩守從五位下
今松平官次郎信忠祖

信通 二郎四郎 齋宮
中務少輔從五位下
元祿七年十二月十八日敘任
寶永四年二月廿二日改山城守
正德四年九月七日改大隅守
同五年四月廿九日改越中守
享保七年九月廿二日卒四十七歳
法名凉應院感譽道義

某 次郎四郎
寶永四年十二月二日卒二歳

長恒 勝千代 勘九郎
享保十七年十二月十二日致仕
安永八年三月廿日卒六十四歳
法名瑞陸院灌譽澄水玉山

信親　一學
圖書頭
松平伊賀守忠晴養子後婦
天和元年九月十七日卒

女子
加藤周防守明治室

女子五人
內藤右京大夫義央室
松浦肥前守鎭信室
保科越前守正景室
酒井伊豫守忠興室
本多備前守忠將室

慈俊
近江國多賀別當尊勝院

女子二人
京八幡田中善法寺僧正要淸妻
松平伊賀守忠昭室

女子　早世

信將　冬松　左門
實松平太四郞忠隆嫡男
安房守從五位下
享保十七年十二月廿八日敍任
後改山城守
寶曆十一年十一月十四日卒四十五歲
法名淸安院順譽和光圓瑞

信亨　冬松　勘四郞
山城守從五位下
寶曆十二年十二月十八日敍任
後改大藏少輔

女子三人
二人早世
實松平大四郞忠隆女
四辻少將公亨室

忠融　小傳次
安永五年十一月卅日卒廿二歲

信古　虎丸　壽丸　勘四郎

信恭　齋宮

女子　許嫁三室戸大藏大輔能光早世

某

信愛　盤丸

女子二人

忠晴

忠俊　刑部少輔從五位下
正保三年十二月十三日卒
法名霜峯院泰雄俊微

某　與八郎　早世

某　辨之丞　早世

女子二人　廣橋侍從兼賴室
一人早世

忠昭　千太郎　內藏允　權佐
玄蕃頭從五位下
寬文八年十二月廿七日叙任
同九年六月十一日改伊賀守
天和三年壬五月四日卒四十歲（四十五歲）
法名普光院勇徹齊秀

忠周

忠周　與十郎
實忠晴三男
阿波守從五位下
延寶七年十二月（十一月）廿八日叙任
天和二年七月三日改伊賀守
寶永二年十二月二日從四位下
寶永三年十二月十五日侍從
享保十三年四月晦日卒六十八歲
法名歡喜院月閑圓心

某　己之助　早世

某　權之丞　早世

某　春千代　早世

忠隆　靭負

女子二人
廣橋權大納言兼廣卿室
一人早世

某　菊松　早世

忠愛　新十郎
左衛門佐從五位下
正德四年十二月十八日叙任
享保十三年六月廿一日改伊賀守
寬延二年八月二日致仕改大內記
寶曆八年三月六日卒五十九歲
法名歡艮院泰巖哲道

女子
戶川內藏助安聰妻

女子二人
實本多因幡守忠能女早世
實天野傳右衛門清行女

女子
戶川內藏助安聰後妻

某　鐵次郎
伯光寺門跡院家常樂寺

女子

某　三之助　早世

忠容　善十郎
民部少輔從五位下
今松平大炊忠明祖

忠陣　藤井監物

女子
八幡田中法印光淸妻

忠弘　藤井右衛門

女子五人

忠順　新十郎
內膳正從五位下
寛保元年十二月十九日叙任
寛延二年八月四日改伊賀守
天明三年二月八日卒五十八歳
法名大量院智悔德實

女子

忠濟　幸之助
從五位下左衛門佐
明和六年十二月廿八日叙任

女子　早世

某　爲三郎

某　幸之助

女子二人
家人
藤井源之丞忠徹妻
一人早世

忠方　直次郎

信敏　安次郎　式部　內匠
豐後守近江守
松平主膳信成養子

女子
板倉備前守勝曉室

某　熊之丞　早世

女子　早世

某　鐵之助　早世

女子
廣橋儀同三司勝種養女

女子
許嫁戸田能登守忠翰早世

某　鐵五郎　早世

女子
戸田能登守忠翰室

忠修　中務

信交　源八郎
信敏養子

某　龜次郎

女子

-忠成　藤井兵庫

-某　千之助　早世

-女子三人
一人早世
竹谷權右中辨某室
藤井監物忠陣養女

-某　磯次郎

-女子

（此系圖原書には源信吉の上欄にあり）

源利長　兵四郎　勘解由左衛門尉
住三州藤井
出雲守長親四男
天文九年六月六日於安祥戰死
法名道有

信一　勘四郎　伊豆守
慶長七年卒法名道雄

信吉　勘四郎　安房守　伊豆守

松平　藤井（フヂヰ）

附日向守信之

○日向守源信之は山城守忠國か二男兄の伯耆守信久承應元年父にさきたちてうせしかは信之嗣となりて同しき二年十二月叙爵し万治二年四月十八日父か遺領を賜ひ（播磨の國明石の城七萬石の内六萬五千石）舍弟志摩守信重に所領をわかつ（五千石）延寶七年六月二十七日領地加へられて大和國郡山にうつる（一萬五千石をくはへ合て八萬石本多中務大輔政氏にかはる）天和二年十一月二十六日雁の間の衆となり貞享二年六月十日連署の職にあけられ二十二日加恩ありて下總の國古河の城にうつさる（合て九萬石堀田下總守正仲にかはる）ことしの冬從四位下に叙し同しき三年七月二十二日卒す五十六歳嫡子彥四郎忠之八月二十九日家つきて弟次郎四郎信通に所領わかつ（一萬石）元祿元年叙爵して日向守に任すかくて同六年忠之狂氣しけれは十一月二十五日所領沒收せられ舍弟信通にめしあつけられて家たえぬ

○越中守源信通は日向守信之か二男貞享三年八月二十五日父か遺領わかち賜ふ（大和國のうち一萬石）同しき四年七月十三日はしめて見えたてまつり元祿六年兄忠之か家絕しとき別の儀をもつて所領くはへられ備中の國廣瀨にうつさる（忠之所領沒收の日也○新地二萬石合て三萬石）おなしき七年十二月叙爵して中務少輔に任し（後山城守大隅守越中守にあらたむ）十年九月十五日出羽國上の山の城地をたまふ享保七年大坂の城の守りにくはゝり今年九月二十二日に卒す四十七歳その子勘九郎長恒（長恒實は二男也長男は早世す）に十一月十八日遺領をたまふ長恒つねに多病にして出仕もかなはさりけれは一族太四郎忠隆か子冬松信將をやしなひて嗣とし同き十七年十二月十二日十七歳にて致仕す（致仕ののちは上の山にくたりすみ安永八年三月廿日六十四歳にて卒す）信將（養はれし後は左門とあらたむ）家つきし日帝鑑の間の列になされ叙爵して安房守に任し（後山城守にあらたむ）寶永十一年大坂の城の守に加はりことし十一月十四日かしこにて卒す四十五歳其子勘四郎信亨十二月二十四日家を繼十二年の冬叙爵して山城守に任す（時に十七歳後大藏少輔に改む）

○伊賀守源忠昭は故伊賀守忠晴か次男也（長男刑部少輔忠俊は早世し）寛文七年閏二月九日父のゆつりを受て（丹後の國龜山の城三萬八千石）明る八年の冬叙爵して玄蕃頭に任し（後伊賀守にあらたむ）天和三年に卒す（閏五月四日四十五歳（四十歳））其子與十郎忠周實は忠晴か三男（去る寛文七年忠昭家つきし日忠周嗣子となりしといふ）延寶二年七月十八日初めて見參し同しき七年十一月（十二月）叙爵して阿波守に任

但馬の國出石の城は元和五年小出大和守英直封せられその子播磨守英長同久千代まで三世領せし也

し後に伊賀守天和三年六月二十九日家をつき貞享二年六月二十一日少老の職にあけられ七月二十一日昵近衆にうつりおなしき三年正月二十一日加恩ありて武藏の國岩槻の城にうつる（一萬石本領を合て四萬八千石戸田山城守昌敬にかはる）元祿二年三月二十二日御けしきにたかふ事ありて昵近をとゝめられ暫しは出仕もせて有しか十二月九日雁の間の列になり三年を經て四年五月十八日又奥詰となる十年二月十一日但馬國出石の城にうつり寶永二年九月二十一日御側御用人となるこの年の冬從四位下に叙しおなしき三年正月二十八日信濃國上田の城に移る（仙石越前守政明にかはる）四月朔日所領くはへられて（一萬石合せて五萬八千石）ことし十二月侍從に任すおなしき五年二月二十一日邸宅に渡御の事あり（此時則重の御刀ならひに鞍を置ける御馬を賜ひ嫡子新十郎忠愛ならひに家人等七人拜謁し奉る）六年の春御代あらたまりしかは正月十七日忠周職とけて雁の間に候す享保二年九月二十七日京都の所司代に補せられおなしき九年十二月十五日宿老になり十三年四月晦日六十八歳にして卒す嫡子新十郎忠愛正德三年十二月十一日はしめて拜謁しおなしき四年の冬叙爵して左衞門佐に任し（後伊賀守）享保十三年四月日光山にまうてさせ賜ひしとき供奉しつかうまつりてかりに御奏者の事を承りぬことし六月十五日父か遺領をたまひ舍弟善十郎忠容に所領をわかつ（五千石）おなしき十六年六月廿八日御奏者となり延享四年十一月二十二日やまひによりてこれを辭し寛延二年八月二日致仕して大内記にあらため寶暦八年三月六日卒す五十九歳その子新十郎忠順寛保元年の冬初見叙爵して內膳正に任し（後伊賀守）寛延二年家を繼寶暦十三年七月朔日御奏者の事を承はり明和元年二月十五日寺社奉行をかぬ安永四年八月二十五日少老の職に移り天明三年二月八日卒す（五十八歳）その子幸之助忠濟明和六年十二月はしめて見え奉り從五位下に叙し左衞門佐に任す父か卒せし年の四月十四日家つきて伊賀守にあらたむ（時に三十三歳）

松平 長澤

源正綱

信綱

正信 主膳 初隆綱
備前守從五位下
慶安元年十二月晦日叙任
元祿三年四月廿七日致仕
同五年十一月廿六日卒七十三歲
法名流芳院月洲道雪

某 長四郎
萬治元年十月十六日卒

正久 一學 初則綱
彈正忠從五位下
延寶元年十二月廿八日叙任
寶永五年壬正月晦日改備前守
享保五年五月六日卒六十二歲
法名圓光院通玄道機

某 喜内 早世

某 源大夫 早世

某 仙千代 早世

正貞 主膳
織部正從五位下
元祿九年十二月廿二日叙任
寶永二年壬四月九日改河內守
同年九月廿五日改備中守
延享三年十二月廿日改備前守
寬延二年正月廿九日卒六十八歲
法名雲興院龍峰玄門

女子二人 共早世

某 長次郎 早世

正基　小大膳 大膳　萬次郎 内記　監物 織部正
今松平監物正喬祖

女子八人
土屋伊豫守頼直室離別
嫁日野又市郎資救
堀周防守親貞室
一人早世
松平玄蕃頭乘成室
屋代左衞門志和妻
本多因幡守忠能室
一人早世
松平帶刀爲政妻

女子二人
正貞養女
一人早世

正佐　數馬
今松平内藏助正名祖

某　末之進　早世

女子　早世

某　萬作　早世

女子　早世

正武　甕助　内藏助
數馬正佐養子

正方　友吉 求馬　大藏
松平右近正德養子

久端　一學　初正恭
伊豫守從五位下
享保十五年十二月十八日叙任
寛延元年十月六日卒三十歳
法名本覺院圓性宗鑑

正温　已之助　金彌　祝盈
實伊豆守信祝三男
信濃守從五位下
寛延元年十二月廿八日叙任
同二年二月廿七日改備前守
明和四年九月廿五日致仕改彈正忠
天明二年十一月二日卒五十八歳
法名圓理院頓譽壽齡

女子
實正端女
正温室

某　一學　早世

女子　早世

正升　元吉
從五位下織部正
寳曆七年十二月八日叙任
明和四年九月廿五日改備前守

女子　早世

道信　熊次郎
本庄大和守道堅養子

資承　富次郎
松平大隅守資尹養子

女子　早世

信讓　駿河守
松平駿河守信暲養子

正道　岩次郎

女子
永井伊賀守直舊室

女子

女子二人
一人早世
勝田安藝守光忠養女

某　猪之助　早世

正恒 兎毛

女子二人 近藤石見守周知妻
松平信濃守乗森妻

某 熊之助 早世

某 辨吉 早世

某 恒五郎 早世

女子 早世

女子

輝綱

一世
信興 釆女 治綱 基綱 信衡 與衡
美濃守従五位下
慶安四年八月十六日叙任
明暦三年九月廿八日改因幡守
元禄三年十二月廿六日従四位下侍従
同十四年壬八月十二日卒六十二歳

某 釆女 早世

某 萬菊 早世

某 三之亟 早世

某 藤左衛門 早世

女子二人　共早世

興一　靫負
實伊勢守信定男
能登守從五位下
天和二年十二月四日叙任
貞享四年依病歸之其家

某　主殿　早世

女子　早世

某　惣左衛門　早世

女子
酒井左衛門尉忠義室

某　勘解由　早世

女子　早世

女子二人
許嫁松浦壹岐守有信卒
許嫁本多紀伊守正珍卒

信輝　龜千代　齋宮助　初晴綱
伊豆守從五位下
寛文十二年十二月廿八日叙任
元祿六年六月十八日致仕剃髮號宗見
享保十年六月十八日卒六十六歲
法名仲龍院天遊宗見

某　鶴千代　早世

女子二人　共早世

信祝　龜千代　初信高
甲斐守從五位下
元祿十年十二月十八日叙任
後改伊豆守
享保十四年二月二日從四位下
同十五年十二月十五日侍從
延享元年四月十八日卒六十二歲
法名萬松院泰叟道雲

某　稱大河內翁之丞　早世

女子二人
右京大夫輝高繼室
松平對馬守信直繼室

女子二人

女子
許嫁戸川内膳逵但卒

直之　彥四郎
安藤彥四郎直元養子

信復　泉四郎
左衞門佐從五位下
享保十八年十二月十八日叙任
延享元年六月十日改伊豆守
明和五年九月廿二日卒五十歲
法名謙光院大叟文存

女子二人
京極佐渡守高定室
溝口出雲守正溫室

久貞　祝之丞
中川山城守久慶養子

祝盈　巳之助　後正溫
備前守正貞養子

女子四人
松平對馬守信直室
右京大夫輝高室
家人北原某妻
一人早世

女子三人
秋田信濃守千季室
一人早世
加納遠江守久周室

信明　春之丞
從五位下伊豆守
安永六年十二月十八日叙任

女子
某　早世
女子

女子三人
松浦壹岐守清室
黑田和泉守直英室
永井日向守直進室

信武　房次郎

信禮　音之助
甲斐守從五位下
寶曆元年十二月十八日叙任
明和五年十二月十七日改伊豆守
同七年六月廿日卒三十四歲
法名慈雲院仁峯宗恕

女子二人
池田内匠頭政香室
鍋島帶刀直谿妻

信正　辰五郎

道揚　音次郎
本庄大和守道信養子

某　壬次　早世

胤富　主膳
遠藤下野守胤忠養子

女子
大久保能登守教和養女

二世
輝貞　萬千代　酒之丞
初氏綱
右京亮從五位下
元祿二年十二月七日叙任
同四年九月廿五日繼信輿
同七年十二月九日從四位下改右京大夫
同十四年十二月十一日侍從
延享二年十二月十一日致仕
同四年九月十四日卒八十二歲

某
主稅　早世

女子
早世

三世
輝規　老之助　大學　仲
初政直　政長　政方
實伊勢守信定三男
攝津守從五位下
正德五年十二月廿五日叙任
享保三年九月十七日改因幡守
延享二年壬十二月從四位下
同四年十二月十五日改右京大夫
寬延二年二月九日致仕
同年六月薙髮號休愼
寶曆六年二月十一日卒七十五歲

女子
實松平美濃守吉保女
松平豐後守資剩室

女子
早世

四世
輝高　長十郎
佐渡守從五位下
延享三年壬十二月十六叙任
同四年十一月十五日改因幡守
寶曆元年正月十五日改右京亮
同二年四月七日從四位下改右京大夫
同六年五月七日侍從
天明元年九月廿五日卒五十六歲

女子
三浦備後守明次室

輝行　長藏　長十郎
下野守從五位下
寶曆十三年十二月十八日叙任
安永四年六月四日卒三十三歳

某　長十郎　早世

五世
輝和　長三郎　酒之丞
美濃守從五位下
安永四年壬十一月十一日叙任
天明元年十一月廿三日改右京亮

女子
松平甲斐守保光室

輝延　仲

（此次の系圖は原書には源正綱の上欄にあり）

清和天皇　貞純親王　經基王

滿仲　多田　賴光　攝津守　賴國　美濃守

頼綱　参河守
　仲政　兵庫頭　下野守
　　頼政　従三位　兵庫頭　治承四年五月十六日於宇治平等院自害　七十五歳　法名改運
　　頼行

兼綱　源大夫判官　父同時討死
　顯綱　大河内源太　父兼綱討死之時顯綱三歳　其母懷而于尾州中島來又移于三州額田郡大河内仕足利義氏　寛喜年中卒
　　政顯　太郎　杢助　領寺津江原兩郷　弘安年中卒法名圓通

行重　杢三郎　法名行室
　宗綱　彌三郎　暦應年中卒　法名觀成
　　貞綱　孫太郎　應永四年正月七日卒　法名寶岩

光將　大膳亮　但馬守　應永廿九年卒六十六歳　法名貞昌
　國綱　五郎三郎　但馬守
　　光綱　五郎三郎　但馬守　文明元年七月十八日三州吉良庄東條合戰於山王山討死　法名三山是信

直綱　五郎三郎
　信政　五郎三郎　大藏少輔　法名紹泉貞育
　　信貞　孫太郎　法名宗宜心刀

秀綱
金兵衛母小見頓齋女
仕神君賜遠州榛原地後號休心
元和四年九月十二日卒六十歲

久綱
大河內金兵衛尉

正綱
松平右衛門大夫依
台命和泉入道信光之舍弟備中
守久親之後胤長澤松平甚右衛
門正次ノ嗣子トナル

元禄十五年稲垣對馬守大多喜に封せられたり明る十六年正久稲垣重房にかはりこゝには封せられしなるへし

松平　長澤（ナカサハ）

○備前守源正信は（はしめ隆綱）右衛門大夫正綱か二男也兄の佐渡守利綱うせけれは正信世繼となれり（家譜に正信いとけなき時大和國を拝し奉るといふ）慶安元年七月二十日家をつき（相摸國甘縄二萬石）弟紀伊守秀綱に所領わかつ（私墾田をくはへて三千石○前編には正綱卒せし時佐渡守利綱備前守隆綱に所領をわかち賜り佐渡守利綱卒して備前守隆綱つくとしるす家譜を見るに利綱は正保元年六月父にさきたちてうせたり）ことし十二月叙爵して萬治二年二月廿一日御奏者の事をうけたまはり（貞享三年十月九日これを辭す）元祿三年四月廿七日致仕しおなしき五年卒す（十一月廿六日七十三歳）長男長四郎世を早うしけれは二男學正久（はしめ則綱）をよつきとす正久寛文八年二月朔日はしめて見えたてまつり延寶元年の冬從五位下に敍し彈正忠に任す（後備前守にあらたむ）父か致仕せし日家をつき舍弟萬治郎正基に采地をあたふ（私墾田三千石）ことし十二月御奏者の衆に加はりおなしき七年二月十九日少老にうつるしかれとも其職にたへさりしかはおなしき五年三月十八日もとのことく御奏者の衆になさるおなしき十六年二月十日上總國大多喜の城地をたまふ寶永三年十一月二十六日西城に移され享保五年五月六日六十二歳にして卒すその子主膳正貞元祿七年四月十四日はしめて謁し奉り九年の冬叙爵して織部正になり享保五年の六月二十七日家つきて舍弟數馬正佐に所領わかつ（私墾田三千石）おなしき十五年三月十五日御奏者の事をうけたまはり寛延二年の春卒す（正月二十九日とし六十八）その子伊豫守久端は父にさきたちてうせぬ外に男子なけれは一族伊豆守信祝か三男金彌祝盈（のち正温）を養うてよつきとす祝盈寛延元年十二月十二日はしめて見え奉り叙爵して信濃守に任し家つきて後備前守になり明和四年九月二十五日致仕し天明二年十二月二日五十八歳にして卒す其子織部正正升寶暦七年三月十五日初見の禮をはり（時に十八歳）この冬叙爵し家つきて備前守にあらたむ

○伊豆守源信輝は甲斐守輝總か四男也舍兄等みな世を早うしけれは信輝嗣となり寛文八年三月朔日九歳にしてはしめて見え奉りおなしき十二年二月九日父か遺領を賜ひ（武藏國川越の城七萬石）弟萬千代輝貞に所領わかつ（五千石）このとしの冬叙爵して元祿七年正月七日川越を轉して下總の國古河の城を賜ふ寶暦六年六月十八日致仕し（後入道して宗見と號す）享保十年の夏六十六歳にして卒す嫡男龜千代信祝元祿六年九月朔日初めて見え奉り同しき

貞享二年松平日向守信之古河の城へ封せられたりしか松平信輝日向守信之にかはると見へたり

十年の冬叙爵して甲斐守に任し（後伊賀守）父か致仕の日家をつき正徳二年七月十二日三河の國吉田の城に移る（牧野大學成英にかはる）同しき四年九月六日御奏者の事をうけ給はり享保十四年二月三日大坂の城代になりて從下の四位にのほり所領をも轉せられて遠江國濱松の城を賜ふ（松平豐後守資剩に代る）あくる十五年執政の職に補せられこの冬侍從に任し職にある事十五年にして延享元年四月十八日身まかるとし六十二信祝　男子五人あり長男は伊豆守信復なり二男は修理大夫久貞（中川飛彈守源久乘か嗣となる）三男備前守正濕（備前守正貞にやしなはる）　四男は翁之助某世を早うす五男は彥四郎直之といふ（安藤彥四郎藤原直元か家をつく）　信復享保十八年六月廿八日はしめて西御所に謁し奉り從下の五位して左衛門佐に任す（後伊豆守）父か卒せし年の六月四日遺領をたまひ寛延三年十月十五日吉田の城にかへし移され（松平豐後守資剩に代る）明和五年の秋年五十にして卒しこれも男子あまたもちたり長男は伊豆守信禮二男は辰五郎信正三男は山城守道揚（本庄大和守藤原道信かよつきと成）　四男壬次某は早世す五男は主膳胤富也（遠藤下野守平胤忠か家をつく）　信禮寶曆元年正月十五日はしめて見參しその年の冬叙爵し明和五年の十一月十六日家をつきあくる六年十月朔日御奏者となり同しき七年六月二十日三十四歲にして卒すその子春之丞信明ことし七月十二日父か遺領を賜ふ安永六年三月十九日（十八歲）從五位下の伊豆守に任し天明四年七月二十四日御奏者になさる

○因幡守源信興は伊豆守信綱か五男初めは采女といふ寛永十八年八月竹千代君（嚴有院殿の御事）生れさせ給ひしかは譜第の人々の子弟等をめして御内の衆になさる采女信興もこのうちにありて慶安四年六月十三日御小性となり從下の五位して美濃守に任し承應元年十一月七日廩米千俵を給ふ万治三年十一月二十五日御小性組の番頭に加はる近侍の事もとの如し又廩米をも增し賜り（千俵）寛文二年四月父か所領分ちたまふ（私墾田五千石此時に廩米をも采地に加へられ合せて七千石）　おなしき七年正月二十五日御側衆となり延寶七年七月十日少老の職にあけられて所領をくはへらる（五千石すへて一萬二千石）　これより万石の衆につらなる事を得たり天和二年二月十九日御奏者の衆になされこの時常陸の國土浦の城賜はりてまし封せらる（五千石これよりさき五月賜る所を合せて二萬二千石）　貞享四年十月十三日大坂の城代に補せられ食邑もまた加はり（一萬石）　元祿三年十二月二十六日京都の所司代にうつり從下の四位して侍

從に任すかの地にある事いまた二年にもたらてあくる年の閏八月十二日にうせぬ六十二歳信興子なかりしかは兄の伊勢守信定か子靫負興一をこひとりて世嗣とせしに多病なりけれは奉公の事かなふへからすとて父のもとにかへしやりぬ此後いかなる所存ありしにやまた嗣子やしなふ事なくをはりに望ても望申す者もあらさりしかはこの家すくに絶ぬへかりしに甥の右京亮輝貞をめして信興の所領賜はり家つかせらる三萬二千石これおほやけの特旨にいつる所とすと聞えき右京亮輝貞は甲斐守輝綱か六男にてはしめは万千代といふ寛文十二年父か遺領をわかち賜はり五千石延寶三年十月はしめて出仕し元祿元年五月二十二日中奥の御小性にめしくはへられ二年五月十八日御側衆になりて此時廿五歳はかりにやこの冬叙爵し明の春加恩の地をたまふ二千石四年九月叔父信興か家つきて此時みつからの所領はのそかれたりおなしき五年十二月二十一日下野國壬生にうつる三浦壹岐守近次にかはるあくれは六年正月七日近習の衆に加はりおなしき七年の秋柳澤出羽守保明に亞てめしつかはるへしと仰下され所領の地をましくはへられ一萬石十二月に從四位下して大夫になる八年五月十日常憲院殿はしめて輝貞か邸にわたらせ給ふ御氣色殊にうるはしく終日御遊興ありこの日上野國高崎に所領うつされて安藤對馬守重貞にかはる地をくはゝりぬ一萬石しかりし後は御成たび〳〵ありし恩遇他にことなり十四年の冬侍從にすゝみ又所領もしは〳〵ましくはへられぬ合て七萬二千石寶永二年御代改まりし時輝貞職ゆるされて雁の間祇候の衆となるこの年東叡山に常憲院殿のみたま屋つくられたり輝貞としころの渥恩に報ひ奉らむためのそみ申て工役の事をうけ給り沙汰す明る七年五月二十三日所領の地をあらためて越後國村上にうつる本多監物忠隆にかはるこのゝち御代ふたゝひあらたまり有德院殿大統うけつき給ひし初おほしめす所や有けん享保二年正月十一日輝貞黑書院に候して拜謁すへきよし仰下され七月十一日所領をも高崎に加へて賜はる間部越前守隆廣に代ることし九月にはことなる仰ありて宿老の事祇候の所まて參る事をゆるさるこれより御前にまゐる時は宿老に准せられたりおなしき十五年七月十一日宿老の列になさるよしおほしめす所あれはとて連署の事に及はすたゝ謀議の職とそなれり延寶三年九月有德院殿御辭職の後輝貞致仕して嗣子因幡守輝規

に家をゆつり同しき四年九月にうせぬ八十二歳とそきこゆ輝貞元祿の御時にしられ參らせて家繼しかはその殊遇をかしこまりおもふ事大かたならすされは常憲院殿かくれさせ給ひてよりは日ことに東叡山の御廟にまうて拜し奉る事四十餘年嚴寒盛暑といへとも怠らす又その御代には行屠の事をふかくいましめられ鳥獸の肉をきらはせ給ひし事をおもひておのか身終まてくらふ事なし享保のはしめ鷹の鳥を賜りしをも辭しまゐらせけれは執物の人もおなしく賜はる所あるに輝貞には鮎の鮓なとかへて賜はれり輝貞よはひすてに八旬におもむきてもなをいたはる所もあらす致仕ののち小石川の別邸にうつりすみけり來りてとふ人には子孫といへとも服をあらためてむかへいれ上座をゆつりて公の起居の事とひまゐらせてそのゝちにわたくしの事には及ひけりとそ

因幡守輝規は伊勢守信貞か三男にていまた大學と申せし時輝貞か嗣子となり正德五年三月はしめて見參し叙爵して攝津守に任し後因幡守又右京大夫に任す　延享二年輝貞かゆつりをうけて家を繼ことし從四位下に叙し寛延二年二月致仕入道して休愼と號す寶曆六年二月十一日七十五歳にて卒すその子右京大夫輝高元文九年初見して延享二年從五位下の佐渡守になり後因幡守又右京大夫に改　家讓られて後寛延二年十一月十八日御奏者の衆にくはゝり寶曆元年正月十五日寺社奉行をかぬあくる年の四月七日大阪の城代をうけ給り從四位下して右京大夫になる六年五月京都の所司代に補せられて侍從にすゝむ八年十月十八日宿老になさる十年五月六日西城に參りて大御所につかへまゐらせあくる十一年大御所かくれさせ給ひしのち又本城に候して十二月ふたゝひ連署の事をうけたまはるかくて夙夜の勞としつもりしかは安永八年十二月十五日所領の地をましくはへらる一萬石　天明元年九月二十五日卒す五十七歳なり嫡子下野守輝行さきたちてうせけれは二男酒之丞輝和安永四年の冬初見叙爵して美濃守に任し父におくれて家を繼き三十五歳　天明三年九月御奏者の事うけたはりて明る四年四月廿二日寺社の奉行を兼ぬ

藩翰譜續編卷之三

●水野　美作守勝種　隼人正忠直
　　　肥前守忠位　右衛門大夫忠春

●松平 久松　附 佐渡守康尙　隱岐守定直
　　　附 主計頭定章　越中守定重
　　　駿河守定陣　大藏少輔勝以

●增山　兵部少輔利順

●松平 鷹司　越前守信淸

●本庄　宮內少輔道章
　　　松平因幡守宗資　附 松平內膳正宗長

水野

源忠政

忠守　忠元　忠善

忠重

勝成

勝俊　勝貞

女子二人　勧修寺大納言經廣卿室
一人早世

勝種　民部
初勝愛
美作守從五位下
延寶三年十二月廿六日叙任
元祿十年八月廿二日卒三十七歳
法名萬輝院忠嶽全功

勝峯　松之丞
元祿十一年五月五日卒二歳
法名庸德院天含了中

勝長　數馬
繼松之丞勝岑
隱岐守從五位下
元祿十二年十二月十一日叙任
同十六年十二月廿二日卒廿五歳
法名仁侍院智順了勇

勝忠

勝岑　右近　左兵衛
元祿六年九月二日卒五十六歲
今水野若狹守忠通祖

勝直　數馬
備前守從五位下
延寶六年十二月廿八日叙任
寶永二年七月廿日致仕
同三年六月廿六日卒五十六歲
今水野筑前守勝羨祖

忠明　孫大夫
水野孫大夫吉政養子

勝政　内膳
勝長養子

勝彦　主殿
備前守從五位下
享保十七年十二月十六日叙任
元文五年十二月三日卒五十五歲

勝政　内膳
實備前守勝直二男
攝津守從五位下
元祿十五年十一月三日叙任改日向守
元文元年十一月十八日致仕改攝津守
延享三年七月廿六日卒六十七歲
法名郭了院諦然道聖

女子七人
大田飛驒守佚清室
二人早世
植村土佐守直朝室
生駒主膳親賓妻
松平河内守直好室離別

勝庸　鍋三郎　六左衛門
下野守從五位下
享保十九年十一月十八日叙任
元文元年十一月十八日改日向守
寛永二年十月十日卒三十二歲
法名隆德院天雲慈恩

勝前　市藏
實勝政二男
日向守從五位下
寛延二年十一月廿八日叙任
寶曆十二年四月六日致仕改攝津守
同年九月廿日卒四十歲
法名圓德院修齊智護

勝盛　市之丞　內膳
元文四年八月四日卒

勝前　市藏

勝珍　粂三郎
延享元年八月八日卒

女子
實植村土佐守恒朝女
林肥後守忠篤妻

勝起　鍋五郎　六左衞門
下野守從五位下
寶曆十二年十二月十八日叙任
同十三年四月六日改日向守
天明二年四月十二日卒三十九歲
法名保德院仁雄英智

勝剛　鷹之丞　藤十郎
實中川修理大夫久貞三男
從五位下日向守
天明三年十二月十八日叙任

女子二人

勝盈　市藏　斧次郎

勝房　金三郎
井上兵左衛門正盈養子

忠清

忠職

忠直　鍋之助
中務少輔從五位下
寛文六年十二月廿八日叙任
後改隼人正
正德三年五月廿八日卒六十二歲
法名賢德院大譽道主全提

女子
許嫁片桐長十郎貞胡早世

忠周　惣兵衛
出羽守從五位下
貞享四年十二月廿五日叙任
元祿四年五月十八日改中務少輔
正德三年六月廿二日改出羽守
享保三年十月廿八日卒四十六歲
法名賀德院清譽淨祐元阿

忠高　刑部
水野長門守忠顯養子

女子二人
石川下野守勝之室
小笠原駿河守信辰室

女子三人
土屋左京亮啓道室
龜井能登守茲長室離別
嫁土屋但馬守陸盈

忠幹　惣兵衛
初忠茂
日向守從五位下
正德八年十二月廿一日叙任
享保八年五月十日卒廿五歲
法名德本院仁譽仁光

忠恒　爲千代

女子
許嫁米倉丹後守保武早世

忠房　内藏之丞
肥前守忠任養子

忠照　宮內
今水野午之助忠繼祖

種春　民部
內藤權右衞門雅元養子

女子
板倉出雲守重信室

忠賢　十兵衞
水野刑部忠富養子

忠泰　登之助
鍋島內匠長行養子

元陣　增之助
水野右近元朝養子

忠恒　爲千代　主計　修理
實忠周二男
隼人正從五位下
享保八年十二月十八日敍任
同十年七月廿八日依狂疾收所領
元文四年六月十八日卒三十九歲
法名慈雲院愍擧休通諫性

忠穀　卯之助　惣兵衛　大内藏
初忠年　忠永
繼隼人正忠恒
出羽守從五位下
元文元年十二月十六日叙任
寛保二年八月廿四日卒二十六歳
法名敬善院仁譽慈博端心

女子
小笠原靱負長輝妻

副忠　内記
鍋島内匠長行養子

忠友　卯之助　惣兵衛
豐後守從五位下
延享四年十二月十九日叙任
明和六年八月十八日改出羽守
安永六年四月廿一日從四位下
天明元年十一月十五日侍從

女子三人
中根主水正正柏妻
水野勝五郎忠隣妻
牧野傳藏成如妻

忠德　金彌
實田沼主殿頭意次男
中務少輔從五位下
安永四年壬十一月十一日叙任
天明六年九月五日歸

女子
青山大膳亮堯完室

女子

某　富五郎　早世

忠福　官次郎
松平源八郎信交養子

忠增　長吉　權兵衛　周防守從五位下　明曆三年十二月廿七日叙任
元祿七年七月六日卒七十歲　法名覺了院法譽性運

某　權吉　早世

女子
忠定室

某　長之助

女子　早世

女子六人
松平美濃守勝房室
一人早世
內田出羽守正昌室
二人早世
酒井飛驒守忠香室

忠寬　權兵衛
近江守從五位下
元文三年十二月十八日叙任
寬保三年七月廿六日卒廿歲
法名寂靜院反譽其心無者

忠位 左近　宮内　初忠明　忠房
肥前守從五位下
寛文九年十二月廿五日叙任
正德三年七月十九日卒九十九歳
法名惠雲院潤譽含洪

女子二人
一人早世
實南條與兵衞宗俊女
柴田三左衞門勝富妻

忠房 三之丞　內藏允　初忠休
實隼人正忠直二男
周防守從五位下
正德元年九月十二日叙任
同二年正月十六日卒廿歳
法名松巖院吟譽雪溪

忠定 吉之助　伊織
實松平越前守定重九男
壹岐守從五位下
正德三年十二月十五日叙任
寛文元年六月廿六日卒五十八歳
法名大圓院鏡譽智天家光

忠廉 織之助

女子四人
實松平主計頭定章女
忠寛室忠寛卒後忠定養
嫁酒井織部忠雄
許嫁花房孫左衞門正倫早世
水野左京亮老高妻
內藤城五郎正興妻

忠見 吉次郎
肥前守從五位下
延享元年十二月十六日叙任後改壹岐守
安永四年八月十九日卒四十六歳
法名法從院本譽常自寂湛

女子 早世

忠廉　織之助
實忠廣嫡男
肥前守從五位下
寶曆七年十二月十八日叙任
同九年四月九日卒十七歲
法名照圓院寂譽心光雲閑

女子一人
加藤佐渡守明陳室
内田伊勢守正純室

忠韶　尙三郎　初ヨシ
從五位下壹岐守
安永八年十二月十六日叙任

正僖　市十郎　主計　專助
杉浦出雲守正勝養子

忠晋　鶴吉　左京
水野河内守忠敞養子

忠厚　辰藏

女子

女子
京極飛驒守高仲室
松平和泉守乘久室

忠春 權五郎 初元春
右衛門大夫從五位下
承應三年十二月廿八日叙任
元祿五年十月十五日卒五十二歲
法名通霄院本充宗慧

女子三人
丹羽式部少輔氏純室
水野信濃守元知室
片桐主膳正貞房室

某 彌平次
承應五年七月廿日卒

女子
牧野遠江守康道室離別

忠直 權五郎
延寶四年正月十日卒

忠盈 釆之丞 織部
豐前守從五位下
延寶六年十二月廿八日叙任
元祿十二年八月四日卒三十八歲
法名大雲院鐵船道駕

某 政之助
寛文五年八月廿七日卒

女子二人 共早世

忠之 齋宮

女子 早世

忠之 齋宮 主水 求馬
實忠春四男
初水野淸吉忠近養子
大監物從五位下
元祿十二年十二月十八日叙任
後改和泉守
正德四年九月六日從四位下侍從
享保十五年七月六日致仕號祥山(岳)
同十六年三月十八日卒六十三歲
法名高隆院祥岳元室

女子 早世

某　造酒之助
萬治二年十月廿九日卒

某　内匠
延寶七年正月十八日卒

春隆　豊次郎　外記
水野土佐守豐上養子後歸
享保二年五月五日卒

女子　早世

某　齋宮
元祿三年正月廿四日卒

女子
京極加賀守高榮室

女子

忠輝　清吉　織部
初忠篤
右衞門大夫從五位下
寛永二年十一月十九日叙任
正德三年四月十三日改右衞門佐
享保十四年九月廿七日改監物
元文二年七月二日卒四十七歲
法名陽德院機山長輝

忠辰　織部
初忠欣
大監物從五位下
元文二年十二月十六日叙任
寶曆二年三月廿二日致仕
同年八月十八日卒三十一歲
法名大照院圓覺維鏡

忠任　長十郎
實水野平十郎守滿二男
從五位下織部正
寶曆元年十二月廿八日叙任
同九年壬九月九日改和泉守
安永四年九月廿二日致仕

女子

某　清次郎
元祿十年四月廿七日卒

女子　早世

忠剛　助三郎　兵庫
寶曆四年壬二月十日卒

忠觀　又四郎　玄蕃
延寶三年八月四日卒廿歳

女子二人
一人早世
阿部能登守正敏室

女子
忠任室

女子二人
忠任養女
許嫁本多友助忠薰早世

忠雄　源之丞　早世

忠鼎　式部
實松平但馬守宗恒二男
從五位下左近將監
明和四年十二月十六日敍任

女子二人
實忠辰女
忠鼎室
一人早世

某　恒次郎　早世

忠光　織之助
式部少輔從五位下
天明二年十二月十八日敍任

女子
水野山城守貞利室離別
嫁片桐主膳正直影

某　粂次郎
安永六年八月十四日卒

某　爲三郎
安永年月日卒

忠令　安次郎
女子
某　直松
女子二人
某　榮三郎
某　正之助
女子
某　豐三郎

水野

○美作守源勝種は（はしめは勝慶）日向守勝貞か子也寛文三年二月三日父か遺領をたまはり（肥後國福山の城十萬千石餘）同しき八年九月五日はしめて見え奉り延寳三年十二月叙爵し元祿十年の秋三十七歳にして卒すその子松之丞勝峯いまた襁褓のうちにありなから家つかせられしにあくる年の五月五日としわつかに二歳にしてうせけれは世の大法にまかせて所領の地上にをさめられぬさかれともその家舊勳あることをおほしけれは一族備前守勝直（勝直は若狹守勝忠か男日向守勝成か孫なり）か長子數馬勝長して家つかせられ能登の國西谷の地をたまはりぬ（一萬石）數馬勝長元祿十二年八月二日御小性の並にめしくはへられしかやかてまことの御小性になり叙爵して隱岐守に任すおなしき十四年正月十一日所領の地くはへ給ひ（三千石）十六年正月九日また地くはゝりて（五千石合せて一萬八千石）下總國結城の城をさへ賜はりしにいくほともなくて十二月二十二日にうせぬことし二十五歳なりけれと子なかりけれは弟攝津守勝政を嗣とす勝政は備前守勝直か二男なり（元祿十四年三月四日はしめて見參し十五年の九月御小性となり叙爵して攝津守に任す）寳永元年二月十日兄か家をつくこののちに昵近にさふらひしか身いたはる所おほかりけれは四年五月二十五日辭し申せしに依事ゆりて帝鑑の間の衆になり元文元年十一月致仕し延享二年の秋六十一歳にして身まかりぬその子下野守勝庸享保十八年五月二十八日初見の禮をはり明る十九年の冬叙爵し父かゆつりをうけてのち寛延二年十月十日卒す三十二歳勝庸子なくして弟市藏勝前を子とし養ふ元文二年九月はしめて拜謁し寛延二年の十二月三日父につき叙爵して日向守に任す寳暦十二年の夏致仕して嫡子六左衛門勝起寳暦十二年九月十五日はしめて見え奉り叙爵して下野守に任し家つきて後日向守になる天明三年にうせて（四月十八日三十九歳）よつきなかりけれは中川修理大夫源久貞か三男藤十郎勝剛をやしなひて子とす勝剛六月七日家つきて十二月從五位下日向守に任す（時に二十三歳○勝起二人の弟あり勝盈勝房といひしか勝盈は病者にて家つかすへうもあらす勝房はさきに井上吉右衛門正盈にやしなはれしかは久貞か三男をやしなひしなり）

○隼人正源忠直は出羽守忠職か嫡男也万治二年十一月十三日初めて謁し奉り寛文六年十二月從五位下中務少輔に任しおなしき八年八月二十一日父か遺領を

たまひ（信濃の國松本の城七萬石）正德三年の夏六十二歲にて卒す嫡
子總兵衞忠周天和三年二月十八日はしめて見參し貞
享四年の冬叙爵して出羽守に任し元祿四年五月十八
日奥詰の衆につらなりて中務少輔にあらたむおなし
き十月三日御小性となりてわつかに五十日はかりに
して近侍をゆり鴈の間詰衆の子供の列にさふらはせ
らる正德三年六月二十七日父に繼遺領を賜はり（弟宮内忠照に廩米千俵をわかつ○この日また出羽守にあらたむ）享保三年十月二十八日卒す四
十六歲嫡男總兵衞忠幹寶永六年七月朔日はしめて謁
し奉り正德三年十二月從五位下日向守に叙爵し享保
三年十一月二十日家つきておなしき八年の夏二十五
歲にして世を早うし忠幹子なかりけれは弟修理忠恒
嗣となり七月五日家を襲（忠恒これよりさき享保四年二月二十八日はしめて謁し奉りし也）十
二月從五位下の隼人正に叙任す同き十年七月二十八
日忠恒かしこまり申す事ありて御所にまたのほりぬ
事はてゝおまへよりしりそく時俄に心狂ひて腰刀を
拔毛利主水師就を一刀きりしにかたはらにありし戶
田右近將監氏房いそき忠恒を押とゝめたり師就も刀
ぬきあはせたりしを長田某（三右衞門目付なり）はしりより押へ
たてゝ事しつまりぬ（おまへ近き廊にての事なれは人々いかに周章したりけんこの時目付なりし酒井賴

母にはおくれたる振舞ありしとて所領を改易せられしとぞ）さて忠恒を糺明せられしに心
みたれてせし事なれは答へ申すむねもなく又師就
忠恒もかねてあひしれるにもあらすけふはしめて
參會せしかは宿意を存すへきいはれなかりしにより
て忠恒をはまつ秋元伊賀守喬房にあつけられ師就は
いたはりて家にかへされしに日を經て疵もたひらか
になりぬとて宗家長門守吉元うち〳〵申事ともあり
しかは八月二十七日忠恒か所領收公せられ故中務少
輔忠直か九男卯之助忠穀にわつかの采地（七千石）賜は
りて其家をつかせらる（又宮内忠照か分たれし廩米を采地してあて行はれたり）忠恒を
はゆるされて忠穀かもとに籠居せしむへしと仰下さ
れ（元文四年六月二十八日三十九歲にて死）卯之助忠穀後に惣兵衞とあらため
元文元年火消の役に成しかまた御書院番の頭に轉し
從五位下して出羽守に任すおなしき四年の春大番の
頭にうつり寬保二年大坂の城の守にあたりてかの地
にうせぬ（八月二十四日年三十六）其子惣兵衞忠友はこれよりさき若
君（俊明院殿の御事）の御方にみやつかへせしか（御伽の衆といふ）父か
家つきてのち寬保三年（延享四年）御小性になり叙爵
して豐後守に任す寶曆八年の冬御小性組番頭に準せ
られこれよりしきりに家おこして十年四月朔日御側

衆になり此年本城にうつらせ給ひしに供奉して明和二年正月二十八日松平因幡守康郷とおなしく奉公の勞を賞せられて所領加へらる 千石 同き五年十一月五日少老の職に擧られ地もくはへらる 五千石合て一萬三千石 近く侍ふ事もとのことしまた財用の事をうけ給はり沙汰す 職務しけきによりて用番の事を執事のそかれたり 明る年の八月出羽守にあらため安永六年四月二十五日御側御用人になり從四位下に叙しまた所領をもくはへ給はりて城もちになさる 七千石合せて二萬石 十一月六日駿河國沼津の地を宛行はれ城築へきよし仰下され明る年の十二月黄金三千兩を賜ひて城築の事をたすけられ天明元年九月十八日宿老に準せられて又加恩の地あり 五千石 これよりしてまた財賦の事をもすへつかさとれりことし侍從に任し同き五年正月二十九日連署の衆となりしかは地をもくはへられたり 五千石すへて三萬石なり時に五十四歳

○肥前守源忠位は周防守忠增か嫡男にして隼人正忠清か孫なり周防守忠增は竹千代君 嚴有院殿の御事 につかへ奉り慶安三年九月八日御徒頭となり廩米を賜はる 五百俵 そのゝち御小性組番頭にうつりて從五位下の周防守に任す万治二年十二月二十三日兄出羽守忠職か所領をわかち賜はる 五千石信濃國松本私墾田なり かくて御書院の番頭を歷て大番の頭にすゝみ寛文五年三月十八日職俸を賜ふ 二千俵 同き十一年九月朔日つみかうふりて職止められ門とちて籠居す これは白書院の拜賀におまへちかく伺候すへき番頭のともから目付のさしひきにたかひて遲かりしかはかされてとく／＼ともよほしけるに忠僧上座に居たりしか元來はらあしくやありけんまゐらんするほとにはまゐるなりさのみ口入にあづかるへきなとはしたなくいひけれは目付もこらへぬおのこにてやなれ私の事にあらす申すへきやうあれはこそ申べきなれとてやかて事のよしをうつたへけれはかゝる事は目付のはからひにしたかはさるへきや忠增か所爲つかさたちけるものには似つかはしからすきはめたる非法にこそとてつみかうむれりとなん 事ゆりて後ち寄合に列ねらる延寶六年ふたゝひ大番の頭に補せられ天和二年五月二十一日職料を本祿にくはへてその地を賜ふ 二千石丹後國にてたまふ 元祿五年六月十日奥詰になされ同き七年卒す 七月六日七十歳 忠位寛文三年十一月二十五日はしめて拜謁し 後中奥の御小性になさるといふ おなしき九年の冬叙爵し元祿七年八月晦日父か遺領賜はり同き九年の夏御側衆になり寶永二年八月二十七日西城に勤仕しおなしき六年御代あらたまりて後本城につかへ奉る正德元年九月二十日大坂の定番となり所領加へられて 五千石すへて一萬二千石攝津國にして地をたまふ 大名になされおなしき三年の秋に五十九にして大坂にて卒す九月十六日その子壹岐守忠定に遺領を賜はる忠定實は松平越中守定重の九男にて伊織とい

安房の國安房の郡北條の地に居所をかまへしはこの時そなるへし

ひたるなりはしめ忠位男子二人ありしかとみな世を早うせしかは一族隼人正忠直か三男内藏允忠房を嗣とす忠房寶永三年十月朔日初めて見え奉り正徳元年叙爵して周防守となり是も父に先たちけれは（二十歳）この忠定を子とせしなり忠定正徳二年七月朔日はしめて拜謁しその冬叙爵して家つき菊の間の縁頬に候す享保四年大番の頭に補せられおなしき八年三月六日少老となりおなしき十年十月十八日所領の地を轉せらる（安房上總丹波等の國にして賜はる也）おなしき廿年六月五日西城にうつり地くはへられ（三千石）延享二年二月十五日今の清水宰相殿生れさせ給ひし時事さらなる仰に依て萬次郎殿と申す御名まゐらせ宮參せさせ玉ひし時邸宅に入らせ玉ひ髪置せさせ玉ひし時も御白髪奉り寛文元年の夏五十八歳にして卒す長子なりし權兵衛忠寛元文元年九月十五日初見の禮をはり同しき三年の冬從五位下近江守に任し寛保三年の七月世をはやうしけれは二男吉次郎忠見嗣となり同しき九月十三日拜謁し延享元年從五位下肥前守に叙任し（後に壹岐守にあらたむ）父卒せし時の八月十九日遺領を賜はる明る二年の秋大番の頭となり寶暦七年三月十五日御奏者の事をうけたまはり八年九月二十八日西城の少老になり十年本城にゑたかひ奉り安永四年の秋身まかるとし四十六その子壹岐守忠韶はしめ父の忠見兄忠寛か子織之助忠廉をやしなひて子とす初見叙爵して肥前守になりしか寶暦九年に世を早うしけれは忠韶よつきとなり忠見か卒せし年の十月十六日その遺領を賜ふ（時に十四歳）おなしき八年の冬初見叙爵し天明四年三月十二日大番の頭に補せらる

○右衛門大夫源忠春は監物忠善の嫡男也慶安四年十一月二十三日初めて見え奉り承應三年の冬叙爵延寶四年十月二十五日父か遺領を賜ひ（五萬石三河國岡崎の城）天和元年二月十六日御奏者の事をうけたまはり寺社奉行をかぬ貞享元年四月十三日かりに大坂の城代を命せられしかほとなく土屋相模守政直城代となりしかは忠春江戸にまゐり明る二年五月二十一日職を止られ元祿五年卒す（十月十五日五十二歳）その子織部忠盈延寶六年六月九日初めて謁し奉りその冬從五位下の豊前守に任し元祿五年十二月十一日父か遺領をたまひ同しき九年十月朔日奥詰になり十二年の秋三十八歳にして身まかる男子なかりけれは弟主水忠之を嗣とす（忠之はしめ一族清吉忠近にやし

なはれ御使番より新番頭になる忠之このとし九月二十七日家をつき同き十二月叙爵して大監物に任す のち和泉守 寶永二年の春御奏者の事をうけたまはり正德元年十二月二十三日少老の職に移り同しき四年九月六日所司代にすゝみ從四位下の侍從に任し享保二年九月二十七日執政に轉し同き十年七月十八日所領の地加へらる 一萬石 十五年二月十一日忠之近ころいたはる所ありて記憶なとうすくなれり重き職にありて思はさるあやまちあらんもはかりかたけれはとて職ゆるさる此仰をは左近將監乘邑うけ給はりて傳へたりかくて又御まへにめして年頃の勞をねきらはせ給ひて義景の御はかせを給はる此後心閑に老をやしなふへしなとかたしけなき仰ことありけるとそ忠之やかて致仕入道して祥岳とあらためけるかいく程なくて明る十六年の春六十三歳にして卒す其子織部忠輝寶永元年十月二十八日はしめて見參しおなしき二年の冬從五位下右衛門大夫に任し正德四年九月七日詰衆の席につらなり家つきてのち元文二年七月二日四十七歳にして終るその子織部忠辰おなしき九月二日遺領を賜り十八日はしめて拜し奉る 襲討のかしこまり申せし日なり ことしの冬叙爵して大監物に任し寶暦二年三月二十二日致仕して其子忠任に家をゆつり八月十八日三十一歳にして世を辭す長十郎忠任實は一族平十郎守滿か二男なり寶暦元年十二月廿八日はしめて拜謁し從五位下織部正に任しおなしき十二年九月晦日肥前國唐津の城にうつり 土井大炊頭利定にかはる 安永四年九月致仕す 時に四十一歳 忠任子なかりしかは松平但馬守宗恒か二男式部忠鼎を養てよつきとす忠鼎明和四年十一月朔日初めて見え奉り 時に二十四歳 やかて叙爵し父か致仕せし日家つく同しき八年八月十二日御奏者の事をうけたまはる嫡子織之助忠光天明五年の秋初見の禮をはり從下の五位して式部少輔に任す

松平　久松

源俊勝

康元

忠良

忠憲

康尙　數馬　初良尙

繼忠憲
佐渡守從五位下
萬治元年壬十二月廿七日叙任
貞享二年十月七日致任剃髮
號全入
元祿九年二月七日卒七十四歲
法名少林院敎外全入

某　主稅　早世

忠充　勝千代　數馬

信濃守從五位下
寬文六年(七年)十二月廿八日叙任
後改長門守監物佐渡守
元祿十五年八月廿一日依狂疾收所領
享保十四年十二月四日死七十九歲
法名永圓院道臺覺窮

良重　主水

女子
松平出羽守綱貴室

康顯　又四郎

康郷　造酒丞

某　圍右衞門

女子二人
植村大膳政行妻
酒井數馬忠帳妻

定員　小十郎
松平左大夫定卓養子

康俊　源三郎　初勝俊
元祿三年三月賜御家號御諱字
天正十四年四月三日卒三十五歲
法名善照院泉月澄淸

女子
松平與一郎忠政室忠政卒
嫁松平與次郎忠吉後適保科彈正忠政直

女子一人
松平玄蕃頭家淸室
松平丹波守康長室

勝就　源三郎
攝津守從五位下
萬治元年壬十二月廿七日叙任
後改備中守
寛文九年七月廿六日卒四十八歲
法名法運院雄山宗英

某　市太郎　早世

勝政　源二郎
實水野藤次郎忠分五男
豐前守從五位下
慶長八年三月叙任
寛永十二年六月十日卒六十三歲
法名松月院休室道能

女子
勝政室

勝義　源三郎
因幡守從五位下
寛永元年十二月廿八日叙任
同十二年十二月九日改豐前守
寛文十年十一月十七日卒六十九歲
法名英雄院節山道雄

女子一人
紀伊家人
久野丹波守宗成妻
宮城主勝正豐嗣妻

勝易　兵部　半左衛門
豊前守從五位下
寛文十一年十二月廿八日叙任
延保八年五月廿四日卒五十八歳
法名慈明院梅室道雨

女子二人
實勝就女
川口茂右衛門重富妻
神尾市右衛門元清妻

知義　平三郎
土屋忠兵衛友貞養子

女子
岡野十右衛門忠豊妻

勝光　小左衛門　織部
今松平織部勝壽祖

勝直　市郎右エ門
元祿六年六月四日卒無嗣家絶

勝忠　平十郎
今松平源太郎勝方祖

女子
篠山甚右衛門資門妻

女子
東本願寺家司
粟津右近元隔妻

勝秀　七之助　守右衛門
元祿三年正月廿一日卒

女子
大藏少輔勝以養女

勝久　權十郎　宇右衛門
享保十一年十二月廿六日卒

女子
松田孫四郎妻離別

勝尹　權十郎

清眞　源之助
木村宗右衛門清治養子

某　小次郎　早世

勝以　權之助

勝以　權之助　半左衛門
實勝義九男
甲斐守從五位下
延寶四年十一月廿六日叙任
元祿六年七月朔日改豐前守
寶永四年七月十二日改大藏少輔

某　權太郎　早世

勝房　源三郎
美濃守從五位下
享保元年十二月十八日叙任
元文元年四月六日致仕
延享三年十二月晦日卒四十二歳
法名德光院隨巖道音

勝尹　權七郎　源三郎
初勝延
實宇右衛門勝久男
玄蕃頭從五位下
元文元年十一月十六日叙任
延享元年十一月六日改大藏少輔
寶暦元年二月五日改豐前守

享保十三年二月十四日卒六十八歲
法名德芳院興巖道盛

明和五年三月廿九日卒五十六歲
法名德現院禪巖道悅

女子二人
實篠園宰相久季卿女
神保左京義滿妻
實宇右衞門勝秀女
水野藤四郞亘勝妻

女子
本多內膳正忠興室

勝全　源三郞

勝從　源三郞　早世

勝升　長次郞

正方　萬吉
村上三十郞正親養子

全好　卯之助

尹方　權之助
久松安兵衞

某　龜吉　早世

女子三人
一人早世
安藤帶刀次猷妻
脇坂甚兵衞安崇妻

信門　初喜左衞門
舘河久五郞時信養子

定勝

定行
定頼
定長

定直　鍋之助　萬之助
實美作守定時長子
淡路守從五位下
延寶二年十二月廿七日叙任
同五年四月六日改隱岐守
同年壬十二月廿六日從四位下
寶永元年十二月十一日侍從
享保五年十月廿五日卒六十一歲
法名大龜院歡譽喜廣

定仲　萬之助
元祿四年五月十日卒

某　鍋之助
元祿十一年四月十四日卒

定英　百助　刑部　主膳
飛驒守從五位下
寶永七年十二月十八日叙任
享保五年十二月廿八日改隱岐守
同七年十二月十八日從四位下
同十八年五月廿一日卒三十八歲
法名大樂院葵譽尊勝成然

定章　辰之丞　源之助　監物

定喬　百助
山城守從五位下
享保十五年十二月廿五日叙任
後改隱岐守
元文元年十二月十六日從四位下
延享四年正月十五日(十一日)侍從
寶曆十三年三月廿一日卒四十八歲
法名顯德院順譽和光慈觀

定功　直次郎

女子
水野遠江守忠寛室

定靜　源之助　監物

備中守從五位下
享保六年十一月十八日叙任
後改主計
延享四年八月三日歲四十八歲
法名龍泉院大譽晧雲光巖

某　善三郎
寛永六年五月廿日卒

女子
實京極內匠高全女
阿部伊勢守正襲室

繼宗家

女子二人
松平左衞門定秀妻
溝口彈正直寛妻

定紀　內記
寶曆十二年五月廿一日卒

女子二人　共早世

定功　直次郎
實隱岐守定英次男
隱岐守從五位下
明和元年十一月十三日叙任
同二年二月十一日卒三十三歲

定靜　源之助　監物
實主計頭定章長男
備中守從五位下
延享四年十二月十九日叙任
明和二年四月改隱岐守

某　源之助
寶曆十二年十月廿五日卒

某　熊太郎

定國　豊丸
實田安中納言宗武卿六男
從四位下中務大輔
安永元年十二月十八日叙任
同八年八月改隱岐守

女子
定功養女
法名光輝院最譽繼專一圓

定綱

女子
實定高女爲定靜養女
同三年十二月十九日從四位下
同七年十二月二日侍從
安永八年七月十四日卒五十一歳
法名岱岳院約譽親月光圓

定良

某
萬吉　早世

某
大次郎　早世

某
勝次郎　早世

定富　内膳
依病籠居
貞享三年十月十日卒十五歳

女子六人
實定喬女
定國室
松平河内守定春室
松平紀伊守信通室
太田釆女正資武室
秋元攝津守修朝室
一人早世
同年十一月六日侍從

女子
早世

某
早世

女子
早世

定重　萬吉
實隱岐守延賴二男
越中守從五位下
明暦三年十二月十七日叙任
元祿元年十二月廿五日從四位下
正德二年九月七日致任
享保二年十月廿七日卒七十四歲
法名圓鏡院照譽定信智法

定達　豐松　豐五郎
因幡守從五位下
元祿四年十二月廿六日叙任
享保二年九月十日卒四十二歲
法名齊西院寂譽天安道法

女子
松平薩摩守吉貴室

定輝　豐五郎
日向守從五位下
享保三年十二月十八日叙任
同七年九月廿日改越中守
同十年十月朔日卒二十二歲
無嗣子以三郎助定儀奉祀
法名玄壽院松譽月峯了如

女子二人
堀田相摸守正亮室
松平土佐守豐常室豐常卒
定儀養女定堅室

定倫　千之丞　早世
享保七年卒

女子

某

女子

定儀　三郎助
繼定輝
越中守從五位下
享保十年十二月十八日叙任
同十二年九月廿五日卒四十八歲
法名大超院崇譽到休貞法

某　元助　早世

某　政七　早世

忠定　吉之助
水野肥前守忠任養子

定弘　順之丞
元祿十五年八月廿一日卒十七歲

女子二人
松平下總守忠雅室
五島佐渡守盛暢室盛暢卒
嫁本多若狹守芳助

定泰　熊次郎
享保四年九月十四日卒十歲

定賢　左門
實松平大學頭賴貞二男
越中守從五位下
享保十二年十二月十八日叙任
寬延二年十二月十八日從四位下
明和七年七月十二日卒六十二歲
法名俊德院無譽鎭岩仁讓

女子
實定達女
定賢室

女子
酒井修理大夫忠用室

女子二人
一人早世
松平美作守崇信室崇信卒
嫁京極加賀守高榮

俊平　六彌
柳生備前守俊芳養子

定利　竹次郎
寶永二年八月十九日卒十一歳

定邦　粂次郎
從五位下河内守
寛保三年十二月十八日叙任
寶暦十年十二月四日改近江守
明和七年九月四日改越中守
安永二年十二月十六日從四位下
天明三年十二月六日致仕
同月十九日改木工頭

定信　賢丸
實田安中納言宗武卿七男
上總介從五位下
安永四年壬十二月十五日叙任
天明三年十月十九日改越中守
同年十二月十八日從四位下

女子二人

某　賢之助　早世

女子三人
定信室
二人早世

女子
眞田伊豆守幸豐室

某　粂五郎　早世

定房

定時

定直　鍋之助
隱岐守定長養子

女子　實肥前守定經女　松平伊賀守忠周室

定陳　岩松　初定眞
駿河守從五位下
延寶八年八月十八日叙任
元祿十五年九月六日卒三十六歲
法名本智院躰譽性安實忠

定道　千勝
伊豫守從五位下
後中務少輔
今松平侶之丞定能祖

定基　岩松
美作守從五位下
元祿十三年十二月十六日叙任
享保十七年二月二日致仕
後改勘解由將監
寶曆元年七月十三日卒七十四歲
法名本國院天譽相覺實仙

定鄕　左膳
實中務少輔定道長男
筑後守從五位下
享保八年十二月十八日叙任
寶曆十三年四月十九日卒六十二歲
法名心老院明譽普徧常照

女子　定鄕室

某　老之助　早世

某　大三郎　早世

女子三人　池田大隅守輝廉室輝廉卒嫁渡邊丹後守登綱
松平豐前守重休室重休卒爲渡邊丹後守登綱繼室
家人服部伊織正令妻

某　豐之丞　早世

女子　早世

女子　有馬左衞門佐允純室

定溫　左膳
主水正從五位下
元文三年十二月十八日叙任
寶曆四年八月廿五日改駿河守
同十二年四月廿五日卒三十九歲
法名端雲院英譽泰山了雄

某　岩之丞　早世

定休　吉十郎　初定峯
從五位下内膳正
明和三年十二月十九日叙任
天明三年十一月七日改駿河守

女子
遠山遠江守友隨室

某　常次郎　早世

女子
堀田豊前守正敦室

定剛　吉十郎

某　金之助　早世

定規　政吉

女子
脇坂淡路守安房室

女子　早世

某　鶴次郎

某　才次郎
服部監物貞久養子

女子二人

某　千之助

某　筍次郎　早世

松平 久松

附 佐渡守康尙　主計頭定章

○佐渡守源康尙（初は貞尙）は甲斐守忠良か子なり初めは數馬といふ正保四年の秋兄因幡守忠憲身まかりて嗣なかりしかはあくる慶安元年閏正月所領信濃國小諸の地（四萬千石）をは收公せられぬ此時數馬康尙を召して下野の國那須の地を（一萬石）たまはりその家をつかせらるあくる二年二月伊勢國長島の城を賜はりてうつる（はしめ甲斐守忠良美濃國大垣の地五萬石を領す寛永元年忠良卒して嗣子因幡守忠憲家をつき大垣より信濃の國小諸にうつり所領のうち五千石をわかちて庶兄采女忠利にあたふ正保四年八月十三日忠憲廿八歳にしてうせけれは佐渡守康尙つく前編にしるす所異同なけれは爰におなし）萬治元年の冬叙爵し貞享二年十月七日致仕入道して奎入と號す元祿九年二月七日卒す七十四歳其子勝千代忠充これよりさき寛文七年（十六年）十二月叙爵して信濃守に任す家讓られてのち佐渡守に改む元祿十五年の秋いかなる故かありけん俄に家司三人まて腹きらせ其子ともまても切てすつ支族等驚き打よりて仔細をとふに別の譯ありともきこえすたゝものにくるひたるさまなれは其事のやうすつふさに上に申しつたへしかは八月二十一日所領長島の地を收公せられしか支族等申すにまかせて忠充か子二人に采地賜はりてわつかにその家名をつかせられけり（長子又四郎康顯に五千石二男造酒丞康郷に千石）

○隱岐守源定直は故隱岐守定長の子實は美作守定時か長子なり延寶二年二月七日初めて見參しおなしき四月七日遺領を賜ふ（十五萬石伊豫國松山）この年の冬從五位下淡路守に任し同き五年閏十二月從下の四位にのほり寛永元年の冬侍從に任せらるこれは明年の春大納言家（文照院殿の御事）御兼任あるへきによつて京都の御使にさゝれしかゆゑなり享保五年十月二十五日六十一歳にうて卒すその子主膳定英寶永七年十二月從五位下飛驒守に任し（後隱岐守にあらたむ○寶永五年七月十八日初めて拜謁せしといふ）享保五年十二月十一日家繼く弟監物定章に所領わかつ（私墾田一萬石）同き七年の冬從四位下に昇りおなしき十七年十二月十九日定英罪かうむりて出仕をとめらるこれはことし四國九州に蝗つき出て田實をくひ盡しけれは餓死するもののおほかりけりしかるに松山の地殊に其難にあふもの他に越けれとも定英これを救ふたくはへなかりしかは上よりそ賑給せさせ給ひける土地餓莩多きはこれか主たるものその罪のかれさる所なれは定英つひに御咎かうふりけり明る十八年四月十九日事ゆり

ていくほとなくて終りぬ五月二十一日なり（三十八歳）嫡子山城守定喬享保十一年八月二十八日初めて謁し奉り同き十五年の冬敍爵し父卒せし年七月六日その遺領を賜りて隱岐守に改め元文元年十二月從下の四位に敍し延享四年正月十二日（十五日）京都の御使にさゝれて侍從に進む（桃園院の立坊の御時なり）寶曆六年七月西城にして姫君生れさせたまひし時かねての仰によりて篦刀の役にまゐれり同しき八月十五日溜詰となり十一年八月又姫君生れさせ給ひしかは定喬蟇目をそ射たりける同き十三年の春身まかる四十八歳定喬男子なかりしかは弟直次郎定功嗣となりことし五月十六日遺領を賜ひ六月朔日はしめて見參し（家つきし事を謝せし日なり）明和元年十一月從五位下隱岐守に任し明る二年の二月十一日三十三歳にして卒すこれもよつきなかりけれは同き十三日從弟備中守定靜して家繼せらる（主計頭定章の傳に見えたり）定靜おなしき三年の冬從四位下に敍し七年の十二月二日京都の御使奉りて侍從に任す（明年夏御卽位あるによつてなり）明る八年六月二十三日溜詰となり安永八年の秋五十一歳にして卒す男子みな世を早うしけれは田安中納言殿（宗武卿）第六の御子豐丸をやしなうて子とす豐丸明和八年八月十五日はしめて見えまゐらせ（時に十五歳）安永元年十二月從四位下の中務大夫に任し定國といふ（後隱岐守にあらたむ）溜詰となりやかて侍從に任し天明五年四月七日一族小十郎某に廩米をわかつ（千俵）これより小十郎もとより采地二千石にてありけれは今千俵を合せて三千石となし似合ひの公役をも奉はらせん事を望み申せしにそことゆりけり

○主計頭源定章は侍從定直第四の子隱岐守定英か弟なり正德三年三月朔日初見の禮をはり享保五年十二月十一日父の遺領分ち賜はる（私墾田一萬石）六年の冬從五位下備中守に敍任し（後主計頭にあらたむ）延享三年十二月十五日大番の頭となりあくる四年卒す（八月三日二條の城の守にありて卒す四十八歳）その子監物定靜寛保三年十月朔日はしめて見參し父卒せし年十月四日遺領を賜りて十二月敍爵し明和二年の夏宗家隱岐守定功家をつく（所領の地は公にをさめられたり）

○越中守源定重は攝津守定良か子實は隱岐守定賴か三男也明曆三年十月二日定良か遺領を賜はり（伊勢國桑名の城十一萬石○前編寛永十年大垣の城賜はりし時六萬石としるす十一年十一月桑名にうつる時領地の高をしるさす年たかへり桑名にうつりしは十二年七月廿八日の事にて領地くはへ賜りて十一萬石となりしなり）同き五日はしめて見

參す（家つきし事を謝せし日なり）ことし叙爵し元祿元年十二月從四位下にのほる明る二年三月奥詰の衆に列しおなしき十五年七月十一日又帝鑑の間につらなる寶永七年閏八月十五日伊勢の國桑名の城をあらためて越後國高田の城にうつる（戸田能登守忠英にかはる）正德二年九月七日致仕し年つもりて七十四享保二年の冬卒す（定重は豪毅果斷人に任してうたかはさる德ありかつて桑名の城にありしか居城等初めて諸士の居宅にいたるまてことく〳〵く燒うせしかは公より黄金一萬兩をかし賜はりし時城廓武器まつたくとも家人等かまつしからんには恩をかうふりたるかひなしとて彼黄金をみな家人等に分ちあたへやりて城廓及ひ武器の備へありしよりもまさりて作り出せしといふ）其子豐五郎定達兄四人ありけるか或は世早うしあるひは病者なれは家達嗣となり貞享二年三月朔日はしめて見え奉り元祿四年の冬從五位下因幡守に任し家つきし日弟三郎助定儀に廩米をわかつ（三千俵）享保三年の秋四十二歳にして卒す嫡子定輝父につき同き十二月從下の五位して日向守に任し同き十年十月朔日廿二歳（廿一歳）にして身まかり未た嗣なかりけれは同き十一日叔父三郎助定儀して家繼せらる（定儀は寄合衆にてありしなり）定儀ことしの冬叙爵して越中守に任し十二年の秋年四十八歳にして卒す定儀男子二人みな世を早うしけれは松平大學頭頼貞の三男左門定賢を養て子とす定賢享保十一年十二月廿八日はしめて見參しあくる十二年十一月十八日遺領をたまひ從下の五位して越中守に任し寛保元年十一月朔日越後の國高田を轉して陸奥の國白川の城を賜ふ（松平大和守明矩にかはる）寛延二年十二月從四位下にのほり明和七年卒す（七月十二日六十二歳）其子粂次郎定邦寛保三年十二月十五日はしめて見え奉りやかて從五位下の河内守に任し父卒せし年の八月二十七日家つきて安永二年の冬從四位下に昇り天明三年十月十六日致仕して杢頭にあらたむ（時に五十六歳）其子賢丸定信實は田安中納言殿（宗武卿）第七の御子なり定邦男子なきにより養ひて世つきとなし安永四年閏十二月朔日はしめて謁し奉り日あらすして從五位下上總介に任し（時に十五歳）父か致仕の日家をつき十九日越中守に改め十二月從下の四位にのほる

○駿河守源定陳は（初は定眞といふ）美作守定時の二男なり兄の定直延寶二年正月廿一日隱岐守定長のよつきとなりしかは定陳同き四年十月二十五日父の遺領を賜はる（伊豫國今春三萬五千石）弟千勝定道に所領わかつ（五千石）同しき十一月十五日はしめて見參し（家つきしを謝せし日なり）八年の秋叙爵して元祿六年七月五日奥詰となり明年正月二十三日ゆるされ同しき十五年の九月三十六歳にして身まかり

嫡子岩松定基元祿十一年二月十五日初めて謁し奉り同しき十三年の冬叙爵して美作守に任し父卒せし年十一月十日家つきて釆女正にあらため寶永元年十一月十一日奥詰の衆となりあくる二年十一月十三日ゆるされて享保十七年の春致仕す（所領伊豫國にて七十四歳にて寶暦九年七月十三日今春の城に卒す）定基子なきによつて中務少輔定道の長子左膳定郷を嗣とす定郷享保八年八月九日はしめて見え奉り十二月叙爵して筑後守に任しおなしき十七年二月二日家を繼く定郷男子二人あり嫡子は左膳定溫といふ次は幼なくしてうせぬ定溫元文三年の冬叙爵して主水正に任しのち駿河守になりしか寶暦十二年の冬父に先たちて卒す其子吉十郎定休世孫なれはとてよつきにさたむへかりしに定郷六十にあまりける身にてありなからいかにおもひたかへしにやなにとなくうちすきて明る十三年の二月公に申たりけれは御氣色あしくなりて嗣の事は聞しめし入れしかとも其おこたりをいましめさせ給ひてしはしかほと出仕をとゝめられ四月十二日事とけて十九日定郷うせにけりされと嗣定りしのちなれは六月十四日事ゆゑなく定休して家繼せらる定休明和三年六月朔日はしめて拜謁し十二月叙爵して内膳正に任す（十五歳）其子定剛天明六年四月朔日見え奉る

松平　久松

○大藏少輔源勝政は豐前守勝義か第九の男豐前守勝易か弟なり此家の先祖源三郎康俊と申すは（初は勝俊といふ）久松佐渡守藤原俊勝か二男御母は大方殿と申す（傳通院殿の御事）東照宮異父同母の御弟にて御家號御諱字を賜ひ松平源三郎康俊と名乘る（此時より藤原をあらためて源氏とはなりしなるへし）康俊はしめ駿河の今川上總介氏實かもとに質子となり十六年を經て元祿十一年武田入道駿府にうち入今川か領國を奪ひし時康俊をもとらへて甲府にかへりぬ元龜元年の冬康俊ひそかに甲府を遁れいてゝ三河にかへりけれに東照宮斜ならす悅はせ給ひて御はかせをそたひたりける（一文字の刀に當麻のうち刀）かくて天正十一年正月遠江の國久能の城を賜ふ（一萬石の地宛行はれたりしかれとも康俊甲府をのかれ出し時山路の雪を踏わけしかは足の腹をそんしこゝへ落て戰場のはたらきかなひかたかりしかは常に家にこもり居たまふ）同しき十四年四月二日（三日）卒す（三十五歳）康俊男子なかりしかは女子一人ありしを大方殿とてやしない給ひ水野藤次郎忠分か五男源三郎勝政にあはせ康俊かよつきにとのた

下總の國香取の郡多古に館かまへしは大名に列て時の事なるへし

まひしかともえはしはえる所もなかりしに文祿元年二月はしめて勝政に采地をたまふ（千五百石）その年朝鮮の事起り東照宮肥前國名護屋におもむかせたまひしに勝政供奉して慶長七年十月采地加へられ（千石）八年の春従五位下して豐前守に任し大阪前後の戰ひにも馳向ひ元和二年ふたゝひ地くはへらる（五千五百石近江の國にしてたまはる）おなしき五年八月大番の頭に補せられ寛永十年二月八日駿府の城代にうつり加恩の地をたまふ（三千石都て八千石）又寄騎の衆を附らる（寄騎七十人足輕五十人）同き十二年六月十日駿府にてうせぬ（六十三歳）その子因幡守勝義家つきて寛文十年卒す勝義か嫡子攝津守勝就は先たちて世をはやうせしかは二男豐前守勝易父につき弟二人に所領をはかつ（五百石つゝ）勝易御書院番の組頭に成番頭を經て大番の頭にいたり後駿府の城代となり（此時采地二千石をくはへられすへて九千石となる）延寶八年卒す男子なかりしかは舍弟權之助勝以よつきしなり寛文九年八月十九日はしめて見え奉り延寶四年の冬叙爵して甲斐守に任す（後豐前守又大藏少輔）おなしき八年九月七日家をつきて御側小性より火消の役を經て御小性組の番頭にうつり御書院の番頭に轉し寶永四年七月十三日家千代君の御傳になされ十二月十五日御側衆となり正德三年八月三日大坂の城番にうつり加恩の地賜はりて大名に列す（三千石合せて一萬二千石上總下總下野の國の内）大坂にある事十三年にして享保十年三月六日病によりて職を辭し同き十三年二月十四日六十八歲にして卒す二男源三郎勝房正德三年九月十五日はしめて拜謁し享保元年十二月從五位下美濃守に叙爵し十三年四月五日父か遺領をたまふ勝房男子なかりしかは一族宇右衛門勝久か子權七郎勝尹（はしめ勝延）を養うて子とし（勝尹に俸祿そのときのそかれたり）元文元年四月六日家ゆつりて致仕し延享三年卒（十二月晦日四十二歲）勝尹享保十四年十二月朔日はしめて見えまゐらせ家つきし年叙爵して玄番頭に任し延享二年二月九日大番の頭に補せられおなしき四年の五月病して職とけたり明和五年三月二十九日五十六歲にして卒す嫡子源三郎勝全おなしき五月二十四日遺領をたまひ（時に十九歲）十二月從五位下の羽前守に任す

増山

藤原正利

正彌　仙福　兵部　初利順　宗堯　政祇　正祇
實那須遠江守資祇長男
兵部少輔從五位下
寛文四年十二月廿八日叙任
寶永元年五月廿日卒五十二歳
法名常觀院本澗了覺

女子
津輕越中守信政室

正任　大助　内記　初正忠
對馬守從五位下
元祿十年十二月十八日叙任
後改河内守
寛保二年四月七日致仕
延享元年七月三日卒六十六歳
法名大空院覺月明圓

正元　大學
今増山龜吉正富祖

英庸　酒之丞
小出外記英陳養子

女子二人
松平内匠頭乘輿室離別
遠藤下野守胤親室離別
嫁平野權平長曉

政照　帶刀

正武　政次郎
彈正少弼從五位下
享保四年十二月十八日叙任
延享四年六月十一日卒四十三歳
法名常住院妙山了眞

女子
本多肥後守忠方室

正篤　熊五郎　早世

正賛　千五郎　初正順　正孝
實毛利甲斐守匡廣九男
對馬守從五位下
延享三年十二月十八日叙任
安永五年四月五日卒五十一歳
法名相巖院深達覺眞

女子　早世
實本多肥前守忠辰女

正賢　千之丞　勇之丞
從五位下河内守
明和八年十二月十八日叙任

某　勇之丞

女子二人

正邦　鐵之進　早世

某　安之助　早世

政雍　幾之丞
甲斐守從五位下
白須甲斐守政堅養子

英俊　外記
小出外記持能養子

正聽　熊吉　早世

定慮　藤十郎
松平大隅守延得養子

定謐　千五郎
松平小十郎定胤養子

女子四人
高木修理貞成妻
酒井因幡守忠救妻
増山大三郎正備妻
佐藤兵庫信顯妻

女子

正彌伊勢國長島の地へ轉せしは元祿十五年九月也貞享四年にして終りぬおなしき十五年とかかれしは間違なるへし

増山

○兵部少輔藤原正彌は彈正少弼正利か子實は那須遠江守資祇（前篇には資國に作る）か男なり寛文二年の秋正利卒して嗣なかりしかは九月廿二日正彌して其家つかせられ遺領の地をたまふ（三河國西尾の城二萬石○遠江守資祇は正利か弟正彌は正利か姪なり）同き九月二十六日はしめて謁し奉り（家つきし事を謝奉し日なり）詰衆の列に加へらる（正彌をさなかりしかは所領の地に江原千右衛門渡邊孫三郎を下されてよろつの事とも沙汰せさせ給ふ）同き三年七月十一日常陸國下舘の城にうつさる其用途として金五千兩をたまふ（此地にうつされし事は正彌の父那須遠江守資祇所領烏山に近けれは正彌か所領のおきてをも資祇の老ともはからへとの御こゝろなりし且此所の租税西尾よりはおとりぬと聞えしかはその餘分の地をなん三千石にあまるはかりあて行はれけるとそ）明る四年の冬叙爵して兵部少輔に任す貞享四年那須與一資高罪かうむりて所領沒收せられし時正彌も出仕をとゝめらるあけの三月事ゆりけれと五月四日雁の間祇候の列を除かれて外樣になりぬおなしき十五年九月朔日伊勢國長島の城にうつり（松平監物良富にかはる）寶永元年の夏五十二歳にして卒す其子內記正任家をつき舍弟大學正元に廩米をわかつ（千俵○寄合衆に加へらる）正任元祿三年十月二十八日はしめて見參し同き十年十二月從下の五位して對馬守に任す（後河內守にあらたむ）父卒せし年の七月十一日遺領賜はり享保八年三月二十五日御奏者の事をうけたまはり寛保元年にいたりしか身のいたはりにより辭し申てゆるされぬ明る二年四月七日致仕し嫡子政次郎正武に家をゆつり延享元年身まかる（七月三日六十六歳）正武享保元年七月五日はしめてまみえたてまつりおなしき四年十二月從五位下の彈正少弼に任す家繼くのち御奏者の事を奉はりしか延享四年の夏うせぬ（六月十一日四十三歳）其子對馬守正贇實は毛利甲斐守大江匡廣か九男延享三年九月朔日はしめて見參しこの年叙爵しておなしき四年八月五日正武か遺領を賜ふ明和二年十月二十八日御奏者となり安永五年正月二十八日これを辭しその年の夏卒す（四月五日）嫡子河內守正賢明和八年二月十五日初見叙爵し（年五十一時に十八歳）父か卒せし年の五月晦日家をつく

松平 鷹司

藤原信房 鷹司前關白大政大臣　二條關白晴良公二男繼鷹司家
明暦二年十二月十五日薨九十六歲

信尚 左大臣從一位
元和七年十一月九日薨三十一歲

女子 比丘尼御所
宗鏡院

信尊 大僧正
南都大乘院門跡

覺定 大僧正
醍醐三寶院門跡

本理院殿

信平
承應三年三月十日賜御家號
稱左兵衞督
同年十二月十五日從四位下
左近衞權少將
元祿四年七月廿八日卒五十四歲
法名覺性院圓潤淨融

信正 福千代
侍從近江守從四位下
延寶四年十二月廿六日叙任
元祿三年七月改左兵衞督
同四年十一月廿(十)五日卒二十一歲
法名溫恭院法嵒純貞

信淸 仁十郎
侍從越前守從四位下
元祿十六年十一月廿一日叙任
享保九年五月十九日卒三十六歲
法名玄德院性山道崇

女子五人
播磨本德寺室
一人早世
比丘尼御所慈受院
西本願寺室
播磨本德寺室

信友 龜丸
侍從中務大輔從四位下
享保十二年十二月十八日叙任
寛保三年八月改越前守
寶曆元年六月改式部大輔
同十年二月七日卒四十九歳
法名端琳院義山了空

女子
許嫁伊達紀伊守村信卒

女子
松平薩摩守綱貴室

重致 寅吉
竹中久五郎重常養子

某 峯丸 早世

信有 豐松 勘解田
實紀伊大納言宗直卿四男
從四位下侍從兼民部大輔
寶曆十年七月十八日叙任
同十三年十二月改左兵衛佐
明和七年九月改左兵衛督
同十二月四日致仕改兵部大輔

信明 友之進

女子 早世

某 千代次郎 早世

女子 早世

信明 友之進
實信友男
大炊頭從四位下
明和四年十二月十八日叙任
同七年九月改式部大輔
同八年十二月十八日侍從
安永四年九月十九日卒三十一歳
法名廣大院智照瑟觀

信成 豐松

某 早世

某　吉十郎　早世

某　辰五郎

某　繁次

女子　早世

信成　豊松　榮松
實信有男
從四位下侍從兼左兵衛佐
天明三年十二月十八日叙任
同四年十二月改左兵衛督

信充　千之丞

信充　千之丞
實信明男

上野國多胡の郡矢田の地に居所をかまへしは此時の事なるへし

松平 鷹司

○越前守藤原信清は侍從信正の嫡男左少將信平朝臣の孫也信平朝臣は鷹司大閤信房公の御事の四男にして本理院殿大猷院殿の御臺所なりの御弟なりしかは慶安三年召しに應して江戸にまゐり十月十六日はしめて見參し同き十一月十二日廩米を賜はり千俵に二百人扶持紀伊殿頼定公の御事の御娘にそひまゐらす承應三年三月十日御家號をゆるされて松平左兵衛督と名のり俸米を加へられ三千俵この冬從下の四位して少將に任し延寳二年九月はしめて采地を賜ふ七千石〇この時廩米を賜はりたり元祿二年七月五十四歳にして卒す嫡子福千代信正寛文十二年閏六月九日はしめて見參し延寳四年の冬四位の侍從して近江守をかねて後に左衛門督元祿二年十二月家をつき一とせをへたてゝおなしき四年卒す十一月十(廿)五日三十一歳其子仁十郎すなはち越前守信清なりことし十二月いとけなくして家をつき同き十二年の春初めて見えたてまつり十六年の冬從四位下の侍從に任し寶永六年四月六日加恩の地賜はりてはしめて大名につらなり三千石を加へられてすへて一萬石上野上總の國の内を領す享保九年五月三十六歳にして卒すその子龜丸信友遺領を賜ひおなしき十二年八月初見の禮をはりやかて從四位下の侍從に叙任して中務大輔を兼後越前守又式部大輔寶暦十年三月卒す四十九歳其子峯丸世を早うし二男友之進信明もいと虚弱の身なりしかは紀伊大納言殿宗直卿の四男勘解由信有を養ひて家つかす信有このとし從四位下侍從兼民部大輔に叙任し後左兵衛佐又左兵衛督明和八年十二月致仕す四十一歳信有男子なかりしかは弟の友之進信明は今はひととなりて身もすこやかにおほやけ私の勤にもたふへかりけれは養うて子とす信明明和三年四月はしめて見參にいり翌年從四位下大炊頭に叙任し父か致仕の日家をつきやかて侍從にすゝみ安永四年九月卒す三十一歳男子なけれは信有の男榮松信成に遺領を賜ふ信成天明三年四月はしめて見え奉り同き十二月從四位下侍從して左兵衛佐を兼時に十七歳又左兵衛督にあらたむ

本庄　一統賜松平

藤原宗正

太郎兵衛　閑院左大臣冬嗣十五代太郎家長始稱本庄家長七代大夫判官宗成其子左馬介將軍義滿賜諱字列官領家政右衛門尉滿宗六代孫左馬介宗成男寬永十六年八月廿九日卒六十二歲法名成應院信譽入西

宗利

女子
忠輝卿家人松平左門好平妻

道芳　初稱北小路宮內少輔
宮內少輔從五位下
承應三年正月十四日敘任
寬文八年六月廿日卒六十五歲
法名淨雲院到譽西岸右舟

女子二人
初二條家人大宮大藏大輔
復重妻後嫁山科宗賀入道
佐野喜兵衛公當妻

桂昌院殿

某　藤五郎
承應二年九月朔日卒

女子二人
佐野信濃守勝重妻
因幡守宗資室

道高　平七郎　初道孝
元祿十年五月十六日卒四十六歲
法名廣源院運譽道高英達

某　源之丞
寬文二年五月五日卒十七歲

某　熊之助
寬文六年七月廿七日卒六歲

女子四人
因幡守宗資養女
松平駿河守信望妻
石川久大夫重治妻
一人早世

道章　太郎吉　織部
和泉守從五位下
元祿十二年十二月十八日叙任
同十六年八月廿二日改宮內少輔
享保十年七月廿七日卒四十三歲
法名威音院淚岳喜鰵

某　彥太郎
佐野信濃守勝由養子

道矩　久太郎　織部
大和守從五位下
享保十年十二月十八日叙任
延享二年九月八日卒三十七歲

女子二人
道矩養女
酒井三之丞忠清妻

某　久米次郎
享保十二年五月十三日卒四歲

女子
道矩養女

道倫　金三郎
實松平登之助信晴三男(二男)
和泉守從五位下
延享二年壬十二月十八日叙任
寶曆六年五月廿日卒三十七歲
法名騰嶽院含譽遊法義空

女子三人
一人早世
許嫁道堅早世
一人早世

女子二人
實共道章妻
酒井玄蕃忠修妻
道倫室

道堅 左膳

實牧野内膳正康周二男
大和守從五位下
寶曆六年十二月十八日叙任
同十年四月廿六日卒廿八歲
法名眞淨院寂譽澄海寛龜

道信 熊次郎

實松平備前守正溫二男
大和守從五位下
明和元年十一月十三日叙任
同三年十二月十八日卒十九歲
法名德林院對譽仙巖義然

道揚 音次郎

實松平伊豆守信復(慶)二男
山城守從五位下
明和五年十一月十八日叙任
同八年十月十八日卒十九歲
法名淨恭院榮譽覺壽道岸

女子 許嫁道信早世

道利 佐三郎

實松平對馬守信直二男
從五位下伊勢守
明和八年十二月十八日叙任

道昌 時之助

宗資 平四郎　次郎左衞門

因幡守從五位下　貞享元年十一月九日叙任　元祿三年十二月廿五日從四位下　同七年十二月廿三日侍從　同十二年八月十六日卒七十一歲　法名安養寺本譽貞覺圓心

願敬 初名九市郎　南都南井院住侶彌勤院

某　千太郎
貞享元年五月八日卒

宗彌　次郎吉　兵庫　初宗信　宗芳
日向守從五位下
元祿十三年正月十五日敍任
寶永二年三月廿二日賜御家號　改美作守　後主稅頭
正德九年十一月廿六日卒二十七歲
法名淨鉢院覺譽哲雄廓然

資順　孫太郎

宗長　豐五郎　兵庫　初宗春
兵庫頭從五位下
元祿十三年十一月廿七日敍任
寶永二年三月廿二日賜御家號
改內膳正
同六年十一月廿日卒二十三歲
法名圓敎院寶譽高岳義天

宗胡　三四郎
實資俊六男
正德九年十一月廿五日卒八歲
家絕
法名澄光院性譽圓水覺池

女子二人
一人早世
許嫁鳥井丹波守忠利早世

資順　孫太郎
實宗彌男
壹岐守從五位下
享保十五年十二月廿五日敍任
延享三年六月十日卒三十五歲
法名實相院淸譽湛然即淨

某　本庄三之助　早世

常勝　村上權藏
今村上三郎左衛門常福祖

資俊　辰之助　太郎兵衛　太郎三郎
初宗利（俊）
安藝守從五位下
元祿四年十二月十八日叙任
同十四年十二月十八日從四位下
同十五年二月十九日侍從
寶永二年三月廿二日賜御家號
改豐後守　後伯耆守
享保八年七月十四日卒六十四歲
法名源德院靜譽善澄義海

女子四人
松平攝津守義孝室
一人早世
鳥井丹波守忠利室
一人早世

某　長吉
富田甲斐守知鄉養子早世

宗胡　三四郎

女子　早世

資訓　捨五郎　主膳
初宗惇　資淳
實佐野信濃守勝由二男
圖書頭從五位下
正德三年二月十八日叙任後改豐後守
寬延元年十二月廿一日從四位下
同二年十月十五日侍從
寶曆二年三月廿六日卒五十三歲
法名大隆院興譽休岳寂然

知德　主膳
富田甲斐守知鄉養子

女子三人　共資訓養女

女子　早世

女子
加藤佐渡守明照室

某　早世

某　捨五郎　早世

資昌　豐之助　留之助
寶曆十一年十一月廿二日致仕
同十二年十月十八日卒十九歲
法名眞巖院宋譽大廓覺然

女子三人
實知資順女
富田八十郎知貞妻
松平玄蕃頭忠福室
松平備前守正升室

女子三人
六角越前守廣治妻
興津能登守忠同妻
大澤播磨守基賢妻

女子
松平伊豫守泰恭室

某　岩之助　早世

知鄉　早斐守
富田主膳知義養子

康重　伊彌吉　大藏
牧野遠江守康道養子

女子　實平七郎道高女
大澤越中守基彌妻

資尹　定八郎
實酒井左衛門尉忠寄（七男）
大隅守從五位下
寶暦十一年二月十八日叙任
明和二年七月廿二日卒二十歳
法名俊德院乾譽慈秀和順

資承　富次郎
實松平備前守正溫三男
豐後守從五位下
明和二年十二月十八日叙任
後改伊豫守　伯耆守

資統　太郎三郎

女子二人　共早世

宗允　富次郎　本藏

女子

本庄 幷松平

附 内膳正宗長

○宮内少輔藤原道章は故宮内少輔道芳の孫也道芳は二條家の家人にてはしめは北小路宮内少輔といふ徳松君（常憲院殿の御事）の御母桂昌院の御方の兄なりしかは御家人になされり（道芳か父太郎兵衛宗正は閑院左大臣冬嗣の後裔なり家の譜に左府十五世の孫太郎兵衛家長始て本庄と稱す家長か七世の孫太夫判官宗成其子左馬介勝家室町家に仕ふ滿宗より又七世にして太郎兵衛宗政にいたると云ふ宗正か子三人あり道芳か兄は宮内少輔道芳にて弟は次郎左衛門宗資後に因幡守これなり道芳ははしめ二條太閤につかふ慶安元年の夏太閤下野國日光山にまうて事はてゝ江戸にまゐり給ひしか道芳をくせられしかは大閤にこはせ給ひてすくにとゝめられたりこの時に北小路を改めて本庄と稱す）慶安元年七月徳松君につきまゐらせられて廩米を賜はり（千俵）また宅地をも賜はれり（鷹匠町といふ所なりいまの小川町也此時西城を修造せられて古き殿造の品々をして道芳に賜はりて家つくりぬ）おなしき四年十二月采地宛行はれ（二千石）徳松君右馬頭にならせ給ひ上野國館林を賜はらせ給ひしかは館林殿衆とはなれり承應三年正月従五位下宮内少輔に叙任す（二條家にありし時に四位の諸太夫にてありしか御家人になされし時爵官をときて宮内と稱せしかこの時改めて叙爵せし也）寛文元年閏八月また所領まし加へられ（二千石）同き四年奉公の事ゆりて八年六月六十五歳にして身罷れりその子平七郎道高家つきて館林の申次の衆と也延寶八年本城に扈従と成元祿十年の夏うせぬ其子織部すなはち道章なり父の遺跡を賜はり（四千石）十二年十月中奥の御小姓になり叙爵して和泉守に任し十六年近侍にうつりて宮内少輔にあらたむ寶永二年五月には所領あらたに加られて萬石になされおなしき六年御代あらたまりしかは近侍をゆるされ（これより菊の間縁頰祗候の衆となれり）享保十年七月四十三歳にして卒す其子織部道矩父につきとし叙爵して大和守に任し元文元年大番の頭を奉はり延享二年九月うせぬ（三十七歳とそ）子なかりしかは松平登之助信晴の二男（三男）金三郎道倫をよつきとす道倫ことし十一月遺領を賜はりて閏十二月従下の五位して和泉守になる寶暦六年五月三十七歳にして卒すこれも子なきにより牧野内膳正源康周二男左膳道堅して家つかす道堅やかて叙爵して大和守になり同しき九年の秋大坂の城の守りになされ十年四月そこにて病てうせぬ二十八歳道堅いまた子なかりしゆへ大阪におもむく時松平備前守源正濕か二男熊次郎道信をかりよつきして上に申おきたりしかは此年六月道信に遺領を賜ふ明和元年の九月道信はしめて出仕し十一月従五位下大和守になるしかるにおなしき三年世を早うして（十九歳）よつきなかりしかは明和四年三月松平伊豆守源信慶（復）か二男

音次部道揚して家繼せらるおなしき五年十一月に道揚叙爵して山城守に任しけるか同しき八年十月十九歳にてうせぬこれによりて松平對馬守源信直の二男佐三郎道利嗣になり十二月遺領賜はりて從五位下伊勢守に任し時に十八歳 安永九年十月大番の頭となる

○因幡守藤原宗賚は桂昌院の御方の弟なりはしめ次郎左衛門と申せし時舘林殿の御家人となされ廩米を賜ふ五百俵 寛文八年に公の拜謁をもゆるされたり舘林の申次の衆たりしといふ 延寳八年舘林殿御代つかせ給ひしかは明る天和元年三月五日所領の地宛おこなはる廩米を止めて二千石を給ふ 同き三年にも地加へられ貞享元年の冬從五位下の因幡守になり元祿元年正月ふたゝひ所領をましたまはりて万石に滿てられたりあけの年十一月また地加はり二萬石 三年十二月從下の四位にのほる五年十一月十一日はしめてその第に御成の事あり桂昌院殿も渡りたまふこの日常陸國笠間の城に所領あまたそへて賜はる二萬石加へられ合せて四萬石 これより後は年こと月ことにならせ給ふ事しは〱にて桂昌院殿もいつもいたり給へり同き七年四月所領又かはりて一萬石 とし十二月侍從になる年つもりて七十一歳おなしき十二年八月うせぬ

宗賚男女の子ともあまたあり嫡子太郎兵衛宗俊(利)後に賚俊にあらたむ 次は世を早うす次は甲斐守知郷富田の家をつき次は周防守康重牧野かよつきとなる太郎兵衛宗俊おさなき頃は德松殿浄德院殿の御事 の御方に祇候し父の宗賚か万石の列になりし後元祿四年の冬叙爵して安藝守に任し家繼く後同き十四年從四位下し明る十五年桂昌院殿の御使を奉はり一位にならせ給ひしなり 京都にのほるとて侍從に任すことし九月その家にならせ給ひし時所領加へられて二萬石合せて七萬石と成 遠江國濱松にうつる青山下野守忠定にかはる 寳永二年三月二十三日御所大納言家とともに三の丸殿にいたらせ給ひ賚俊ならひに一族等をめして賚俊に御家號をゆるされ松平豐後守にあらためその日日向守宗信を松平美作守に兵庫頭宗春を松平内膳正になされけるしかのみならす一族姻戚の輩九人まてみな所領をまし加へられたり本庄因幡守道章六千石富田甲斐守知郷五千石佐野信濃守勝由二千石大澤右衛門督基隆同越中守基族六角主殿廣豐興津能登守忠同佐野豐前守直行戸田中務大輔氏卓に千石つゝ これはこの月常憲院殿右府にすゝませたまひ文照院殿大納言の宣旨かうむらせ給ひしかはその慶賀によりてとそうけたまはることし六月三の丸殿うせたまひしか御遺言の事ありしと聞えて賚俊か三男内膳

正宗長に新恩の地をたまふ二萬石　資後享保八年七月十四日六十四歳にて卒すその子美作守宗彌内膳正宗長にはみな先たちて卒す家つかすへき子なかりしかは佐野信濃守藤原勝由かすゑの子捨五郎といふを養ひて家つかすやかて初見敍爵して圖書頭に任し宗惇と名のる後資惇また資訓に改む享保八年家をつきおなしき十四年三河の國吉田の城にうつり松平伊豆守信親にかはる　寛保元年四月十二日御奏者の衆となり寛延元年十二月從四位下にのほり明る二年十月十五日京都の所司代に補せられ侍從に任すこの時又遠江國濱松にかへし封せられ松平伊豆守信後にかはる　寶暦二年三月二十六日京都にて卒す五十三歳はしめ資訓美作守宗彌かわすれかたみのありしをよつきとし孫太郎資順といふ叙爵して壹岐守になりしかいくほとなくして世を早うせしかはおのか子留之助資昌をよつきとなす資昌ことし五月十二日としはつかに九歳にして父か遺領をたまふ同き八年十二月二十七日丹後國宮津にうつさる青山大膳亮幸道にかはる　同き十一年資昌すてに十八歳におよひしか年頃やみふしてさま／＼醫療を加ふれともさらにしるしあらすかくては公の勤かなひかたしいまた子ともなけれは人の子をとりて家ゆつらんとするにすへていとけなくして家つきしものゝ上に見參もせすして嗣子やしなはんと申せしためしもなけれはそれもかなひかたく今はたゝ資昌に身のいとまたひて所領の地を公にめし收めらるへうもやさむらふへきあふき願はくは憐愍のお沙汰によりて嗣子やしなふ事をゆるされんには資昌はいふにおよはす一族家人ともに至るまて深くかしこまり致すへくと親族等うちよりてわりなくなけき申けるに事よく聞し召入られてしかるへき嗣子やしなふへしと仰下されけるそかたしけなきこれしかしなから其父羽前守資訓か所司の職につかふまつりし勞をもおほし召すゆゑとそきこえしかゝりしかはやかて酒井左衞門尉源忠奇か四男（七男）定八郎資尹をこひとりてよつきとし資昌家ゆつりて致仕す十二年正月十八日卒す十八歳　定八郎資尹家つくのち從五位大隅守に任し明和二年七月二十歳にてうせぬいまた子あらさりけれは松平備前守源正溫か三男富次郎資承して家つかす資承ことし叙爵して豐後守に任し時に十七歳　安永五年正月二十九日御奏者の衆となり天明四年四月寺社奉行をかぬことし六月資承所領のうち私墾の地を

さきて村上三郎右衛門常福にあたふこれそのちなみあるかゆゑなり（常福か先祖村上權藏常勝といひしは豊後守宗資か庶子にてありしといふ）

○內膳正藤原宗長は（松平と稱す）因幡守資俊か三男也元祿十三年十一月中奥の御小性にめし加へられて從五位下して兵庫頭になる（時に十四歳なり○三の丸殿より米五百俵を賜はり費用にあてられたりまた十六歳におよひし時に輿肩して御所のうちに入る事をゆるされしなり）寶永二年三月二十三日松平の稱號をゆるされて內膳正にあらため十月四日越前の國丹生郡にて新に所領の地をたまふ（二萬石事上に詳なり）同き六年十一月二十日二十三歳にて卒す子なかりしゆへ舍弟三四郎宗胡に遺領をたまふゑかるに正德元年十一月二十六日八歳にて世を早うしければ家絶たり

藩翰譜續編巻之四上

酒井

左衛門尉忠義（タヽヨシ）　石見守忠豫（タヽヤス）

中務大輔忠國（タヽクニ）　肥後守忠英（タヽヒデ）

本多

附 出雲守政利（マサトシ）　下野守忠平（タヽヒラ）

長門守忠利（タヽトシ）　彈正少弼忠晴（タヽハル）

附 淡路守忠周（タヽチカ）

本多

越前守利長（トシナカ）

本多

兵部少輔康將（ヤスマサ）　伊豫守忠恒（タヽツネ）

本多

豐前守正貫（マサツラ）

井伊

伯耆守直武（ナホタケ）　掃部頭直興（ナホオキ）

榊原

式部大輔政倫（マサトモ）

酒井

源忠勝

忠當

女子

忠義 小五郎 初忠治
左衛門尉從五位下
万治元年壬十二月廿七日叙任
寛文二年十二月廿七日從四位下
天和元年十一月七日卒三十八歲
法名長壽院英譽法安養世

女子 早世

女子

忠眞 小五郎
左衛門尉從五位下
貞享二年十二月廿八日叙任
元祿元年十二月廿二日從四位下
正德元年十月十二日改左衛門佐
享保四年七月廿七日改左衛門尉
同十年四月朔日侍從
同十六年八月廿八日卒六十一歲
法名泥洹院到譽泰仁勇叟

女子四人 二人早世
松平日向守忠之室後嫁植村土佐守正朝　松平飛驒守利直室

女子
實松平飛驒守利直女
松平內藏頭清方室

忠辰 小五郎
寶永六年正月十九日卒十歲

忠寄 次郎吉 主計
實石見守忠稼二男
攝津守從五位下
享保五年十二月十八日叙任
同十六年二月廿五日改左衛門尉
同十八年十二月十八日從四位下
元文五年十二月十六日侍從
明和三年三月晦日卒六十三歲
法名雲光院實譽德本泰心

女子　實松平左衛門大夫正綱女
堀肥前守直輝室

某　主計
享保十四年九月廿七日卒六歲

女子
松平下總守忠利室

忠溫　建五郎
攝津守從五位下
延享三年十二月十八日叙任
明和三年五月廿三日改左衛門尉
同四年正月十六日卒三十六歲
法名淸光院安譽淨德榮徹

忠德　豐太郎
攝津守從五位下
明和三年十一月十九日叙任
同四年三月九日改左衛門尉
安永二年十二月十六日從四位下

女子

某　安次郎
寬保二年五月三日卒十歲

忠順　熊藏　豐前　一學　大炊

女子二人
許嫁市橋韶之介長昭
許嫁坪內鐵太郎定儀

壽朝　仙三郞
植村土佐守恒朝養子

女子

康件　萬之介
本多下總守康政養子

忠久　幸次郎　主水
寶暦十年十月廿三日卒十九歳

女子　早世

資尹　定八郎
松平富之介資昌養子

女子

忠恒

忠英　八之介　主膳
享保十七年七月廿六日依病籠居
元文元年十月九日卒三十六歳
法名隆明院卽譽古巖退仲

忠寄　次郎吉　主計
左衞門尉忠眞養子

某　猪之助　早世

女子三人
遠藤但馬守胤親室
二人早世

忠禮　春之丞

女子

忠質　駒五郎

忠鄕　竹之介　兵庫

忠起　龜之介

忠豫　大介　初忠宗
石見守從五位下
延寶三年十二月廿六日叙任
享保十七年十一月廿五日致仕
同廿年十二月十六日卒七十九歳
法名詠境院勝譽紹清遊圓

忠休　主殿　織部
實忠德家人酒井圖書直隆男
山城守從五位下
享保十七年十二月十六日叙任
後改石見守

女子　早世

忠郷　兵庫
實主膳忠英長忠
寛延二年十月十九日卒十六歳
法名保監院統譽天寧雄哲

忠起　龜之介　初忠躬
實忠英二男
山城守從五位下
寛延三年十二月十八日叙任
明和四年六月九日卒三十三歳
法名磬德院映譽同貞普明

忠夷（ヒデ）　龜五郎　彌一郎

某　次郎四郎　早世

某　龜次郎

女子

忠體　貞之介　内藏丞　主膳　大膳
水野越中守忠恭養子

女子
小堀豐後守政芳妻政芳卒
嫁小堀式部政孝

忠崇　粂次郎
大學頭從五位下
明和四年十二月十六日叙任

女子
實忠起女

女子二人　共早世

某
粂次郎　早世

女子

酒井

○左衛門尉源忠義（初は忠治）攝津守忠當の嫡子なり承應元年八月十五日始めて謁し奉り（九歳）万治元年閏十二月敍爵し同しき三年四月五日父か遺領を賜ひ（出羽の國鶴岡の城十五萬石）寛文二年從四位下になさる天和元年に卒す（十一月七日三十八歳）嫡子小五郎忠眞延寶八年二月朔日始めて見え奉り天和二年二月九日家繼く一族牛之助忠高に所領わかつ（私墾田五千石）忠眞いまた幼稚なりとて保科主税阿部八之丞等を所領の地に下さる（國目付といふ）貞享二年の冬敍爵して左衛門尉に任し元祿元年從四位下にのほり同しき六年正月二十八日奥詰に成り十一月十一日御側御用人になされ職に有事すてに二旬にして病によりてゆるされ同しき七年六月九日再ひ奥詰に成り明る八年七月曾祖宮内少輔忠勝か八男吉左衛門忠興に廩米を分つ（千石）おなしき十五年六月六日奥詰を止て七月二十六日罪蒙りて閉門す（是より先に出雲守政利つみありて庄内に流され忠眞にめし預られけりしかるに多くの家人とものうちかゝろきはまてもつき從ひて從者二人ありしに政利心あらくしてきつくせめ使ひけれは從者ともたへかねて江戸にまゐり訴へし事有り糺明せられしにけにも筋なき事とも多かり忠眞預り人として年ころいましむる心もなくうち過けるかおこたりによりてかくはあるよしなり政利は水野監物忠之かもとにわたされておひ／＼きひしくおしこめて置れけり）其後罪ゆりて出仕し年月移りて享保十年四月若君（惇信院殿の御事）御元服の儀ありし時京都の御使を奉りて侍從に任す同しき十六年八月二十八日六十一歳にして卒す其子主計忠寄實は石見守忠豫か二男享保五年正月十五日はしめて拜謁し十二月敍爵して攝津守に任し（後左衛門尉にあらたむ）同十六年十月十二日家つきて十八年從四位下にのほり元文五年十二月十六日明年の春大納言家（惇信院殿の御事）御兼任若君（後明院殿の行事）御元服あるへきによりて京都の御使奉りし時侍從に任す寛延二年九月二十八日宿老の職になさる寶暦六年七月二十一日西城にて姫君（千代姫君と申す）御誕生の砌り蟇目の事を役す明和元年五月十六日年頃の病によりて職を辭しけるか中一年をへたてゝ三年三月晦日六十三歳にて卒す嫡子攝津守忠溫延享三年五月十五日見え奉りことし敍爵して明和三年五月十八日父につきて左衛門尉になりしかおなしき四年の春卒す（正月十六日三十六歳）其子豐太郎忠徳其年九月十五日はしめて謁せり十二月從五位下して攝津守に任しことし二月二十九日家をつき安永二年從四位下に敍す（十九歳）

○石見守源忠豫（初は忠宗）は大學頭忠恒（前編には忠敬に作る）か子なり

延寶三年十月六日父か遺領を賜ひ 出羽出雲等二萬石 同しき十五日はしめて謁し奉り 襲封のかしこまりを申せし日なり 此年叙爵して家を治る事五十八年にして享保十七年致仕す 同廿年十二月十六日卒す七十九歳 忠豫か長子主膳忠英は病によりて籠居しけれは支族圖書直隆か男織部忠休を養ひて子とし同年九月十五日忠休初めて見え奉り十一月二十五日家つきて從五位下山城守に任し 後石見守に改む 延享四年三月十一日御奏者の事をうけたまはり寛延元年閏十月朔日寺社奉行を兼同しき二年七月六日西城の小老職に轉し寶暦十一年大御所かくれさせ給ひて後八月三日職免されて雁の間に列す同しき十五日ふたゝひ小老の職に補し安永八年十二月十五日所領加へられて 五千石合て二萬五千石 松山の地に城築くへき由仰下され其の子久米次郎忠崇明和四年閏九月朔日はしめて拜謁し十二月叙爵して大學頭に任す 十七歳 忠休はしめ主膳忠英か籠居の後まうけたりし子兵庫忠郷をやしなひて世嗣とせり寛延二年十月うせけれは其弟龜之助忠起を世嗣とし明る三年七月二十八日はしめて見參にいり叙爵して山城守になるこれも明和四年六月九日三十三歳にて卒しけれは忠崇を嗣とせしなり

本多

一世
藤原忠勝

二世
忠政

三世
政朝

四世
政長

五世
忠國　小次郎　平八郎
初政武
實松平刑部大輔賴元二男
中務大輔從五位下
延寶七年十二月廿八日叙任
天和三年十二月四日從四位下
元祿十年二月九日侍從
寶永元年二(三)月廿一日卒三十九歲
法名德崇院靈譽知天眞英

女子二人　共早世

某　平八郎
元祿四年六月五日卒

某　龜次郎
元祿十年六月廿七日卒

八世
忠孝　吉十郎
寶永六年九月十三日卒十二歲
以監物忠良奉祀
法名冷光院玉山昭樹

某　早世

七世
忠良　權次郎　監物
初忠隆
寶永六年九月廿一日繼忠孝
中務大輔從五位下
寶永六年十二月十八日叙任
同七年十二月十五日從四位下
正德元年六月朔日侍從
寶曆元年七月十五日卒六十二歲
法名自覺院了譽海全性

女子　早世

政信

忠英　才兵衛　初政貞
實内記政勝三男
肥前守從五位下
寛文二年十二月廿六日叙任
後改肥後守
享保三年六月廿四日卒七十二歳
法名雲靈院

女子
實出雲守政利女
福原刑部資義妻

女子二人
米津出羽守政容室
一人早世

忠方　平七郎
肥後守從五位下
享保六年十二月十八日叙任
同十六年五月十六日卒二十五歳
法名深高院

女子　早世

政成　八十八

女子　早世

忠強　五郎八　玄恭
本多淡路守忠貞養子

女子二人　一人早世　水野監物忠辰室

某　釜三郎
享保十七年正月廿四日卒

女子　許嫁戸澤上總介正勝卒

忠敞　清之助
美濃守從五位下
寬保元年十二月十九日叙任
寶曆六年五月十九日改中務大輔
同九年七月十日卒三十三歲
法名禪龜院凉譽知海義幡

忠亮　鎌之助　內膳
寶曆二年七月八日卒廿四歲

某　鐵之助　早世

忠寬　辨之助　兵部

忠盈　久米之介　平八郎
實眞田彈正忠信弘六男
中務大輔從五位下
寶曆九年十二月七日叙任
明和四年閏九月十六日卒三十六歲
法名元德院仁譽知興永崇

女子三人
忠盈室
一人早世
植村出羽守家久室家久卒
嫁三浦志摩守前次

忠丘　幾久松

忠肅　幾久松　平八郎
初忠丘
實忠敞男
中務大輔從五位下
安永元年十二月十八日叙任
同六年五月八日卒十九歲
法名德本院超譽常倫諦量

某　八十吉　早世

忠典　長之進

忠興 長之進
實忠盈男
從五位下中務大輔
安永六年十二月十八日叙任

忠辰 八十八 才兵衛
初政成
實忠英二男
肥前守從五位下
享保十六年十二月廿三日叙任
寛延三年十一月廿四日卒四十歳
法名締原院

忠堯 權次郎
大和守從五位下
寶曆二年二月十六日叙任
同十二(二)年二月廿五日卒廿五歳
法名廣善院

女子四人
一人早世
增山彈正少弼正武養女
忠堯養女
一人早世

忠可 久彌 監物
實有馬日向守爲純四男
從五位下肥後守
寶曆十二年十二月十八日叙任

女子
實忠辰女
忠可室

忠居 權次郎

女子
太田攝津守資順室

某 久彌 早世

忠義

女子四人　金森長門守賴直室　毛利和泉守光廣室　一人早世　井上中務大輔正任室

忠平　唐之介　一作虎
下野守從五位下
承應元年十二月廿八日叙任
元祿六年十二月十八日從四位下
同八年十月十五日卒六十四歲
法名高秀院英譽一室性純

忠常　萬之介
實能登守忠義六男
能登守從正位下
延寶五年閏十二月廿六日叙任
寶永四年十二月廿三日從四位下
同六年四月十七日卒四十九歲
法名泰讓院眞譽有儀

忠直　大藏
實彈正少弼忠淸長男
越中守從五位下
元祿十五年十二月十八日叙任
寶永六年十二月十二日改信濃守
享保二年五月八日卒四十八歲
法名遷仙院顯忠日直

女子
實忠義女
水野豐前守忠盈室

女子　早世

某　政之助

女子二人　共早世

女子
戶田彥六妻

忠村　萬之介
享保七年十月朔日卒十三歲
法名玉巖院雲光智照

忠道　勝之助

女子三人
土井淡路守利康室
米倉丹後守保敎室
一人　早世

某
忠次郎　早世

忠如　時之介
彈正少弼忠直養子

忠烈　喜十郎
享保八年四月三日繼忠村
同年十一月廿七日卒十二歲
無嗣家絕
法名桂岳院淸貞自香

忠利　一學
山城守從五位下
寬文二年十二月廿七日敍任
天和元年五月八日卒長門守
元祿十三年五月八日卒六十七歲
法名本覺院玲性石

忠寄　千之介　一學
實忠義七男
元祿三年十一月廿三日卒二十九歲

女子
忠次室
能登守忠常養女

忠次　幸之介　兵庫
初匡英
實毛利甲斐守綱元二男
山城守從五位下
寶永四年十二月廿三日敍任
正德元年十一月廿日卒三十二歲
法名高德院貞山玄廉

女子二人
一人　早世
井上河內守正之室

忠央　兵庫
兵庫頭從五位下
享保七年十二月十八日敍任
寬延二年八月廿三日改長門守
寶曆八年十月廿九日配流美作國津山
明和五年正月十九日赦

忠雄　武次郎　早世

女子　實信濃守忠直女　土井淡路守利康室

女子　早世

忠由　兵庫　實有馬左兵衛佐壽純三男　兵庫頭從五位下　寶曆三年十二月廿八日叙任　同八年十月廿九日改易　明和三年四月廿五日赦

忠以　勘兵衛

忠晴　吉左衛門

忠周　酒之丞　初忠當　淡路守從五位下

延寳三年十二月廿五日叙任
貞享四年五月十四日被削所領
正德二年七月五日卒七十一歳
法名瑞龍院提山元起
今本多酒之丞忠昶祖

女子五人
一人早世
松平左京太夫賴純室
松平飛驒賴利明室
石川若狹守總茛室
松平右京亮忠鄕室

忠晴 吉左衞門
實忠義男
彈正少弼從五位下
寬文四年十二月廿八日叙任
正德五年四月十二日卒七十五歳
法名淸凉院道麟祥岳

忠常 萬之助

忠寄
忠利養子

女子
忠平養女

忠直 大藏
能登守忠常養子

忠通 勝之助
彈正少弼從五位下
享保四年十二月十八日叙任
同六年七月二日卒十七歳
法名桂光院月喬淨昌

忠如　時之助
實忠直五男
讃岐守從五位下
享保十一年十二月廿六日叙任
同十三年十月六日改越中守
寶暦四年八月廿九日致仕
同六年四月三日號沖翁
安永二年十月十四日卒六十二歳
法名葆直沖院翁玄宜

忠籌　雄之進　大藏
從五位下彈正少弼
安永二年十二月十八日叙任

某　隈五郎　官次郎
寛保二年七月廿八日卒

女子二人
山口兵部弘倉室
一人早世

忠貫　健之丞　八郎
明和六年五月廿九日卒

女子

女子

忠雄
天明五年三月十三日依病籠居

忠武

某　正之丞

女子

忠滿　熊之介
後信忠
松浦左京信豊養子

忠堅　斧三郎
本多榮之進忠保養子

女子
家人荒木九兵衛由政妻

忠順　定六郎
初正道

忠純　藤七郎
初正直

某 酒造之丞
天明六年七月十一日卒

女子

忠朝

政勝

勝行 八郎兵衛
慶安三年六月十一日卒十六歳家絶

政利 彈正左衛門
出雲守從五位下
明暦元年十二月廿九日叙任
元祿六年六月十三日配流出羽

政眞 内匠
元祿六年六月十三日配流伊豫國小松
同八年五月十日死十七歳

女子二人
稲原刑部資義室
中務大輔忠貞室

忠英 才兵衛
監物政信養子

某 又四郎 早世

藤原忠勝の子孫のわかれわかれ家々多きか中萬石以上の封祿を賜ふ家七家なり嫡家は今の中務大輔忠朝か家にして忠勝より六世忠孝迄十五萬石を領せしに忠孝十二歳にして卒けれ共異なる筋の家なれはとて十萬石を削られ五萬石の祿を支族忠英か長子忠良に賜ひ其家をつかせられたり其子忠儆父かゆつりをうけし

本多

附　出雲守政利　下野守忠平　長野守忠利　淡路守忠周

○中務大輔藤原忠國は水戸家の支族刑部大輔源賴元の二男なりはしめは平八郎政武といふ延寶七年故の中務大輔政長卒して子なかりしかは仰によりて忠國世嗣と成り六月二十六日家をつき此時大和國郡山を改めて陸奥國福島に移さる（三萬石を加ふすへて十五萬石城をは此時新に築しなり）ことし冬叙爵す天和二年二月十六日播磨國姫路の城に移さる（松平大和守直智にかはる○姫路は先祖忠政の舊領なり）同しき三年從四位下に叙し元祿十年京都の御使をうけたまはりて侍從に任す（女御入内の事によりてなり）寶永元年三月（一月）二十一日三十九歳にして姫路の城に卒す其子吉十郎忠孝家を繼に未たいとけなかりしかは（時に七歳）五月二十八日姫路を改めて越後國村上に移さる（榊原式部少輔政倫にかはる）同しき六年忠孝十一歳の歳に及けると雖も病によりてふし居たりしかやう／＼重りぬ此よし聞しめされて支族彈正少弼忠晴をめして忠孝たとひいかなる事あるともすちとなる家なれはよつきの事はおほしめす處あり一族家人とも心にかくる事なくして醫藥の功をつくすへしと仰下されけりかたしけなきと也かくて九月十三日忠孝終にうせけれはあけの日支族肥後守忠英か長子監物忠良をして家繼せられ所領の地減せられて（五萬石）村上の城をはありしとく賜はりぬ忠良ことし叙爵して中務大輔に任し明る七年の五月三河國苅屋に移る（阿部民部良直にかはる）九月二十一日忠良昵近にさむらふへき由仰蒙り（家譜に御側御用人となりて四位の座になりしといふ）十二月從四位下に叙し正德元年侍從に任す（宿老の座なみに補せられしといふ）明十二年五月十六日下總國古河に移る（松平伊豆守信親にかはる）享保元年御代あらたまりけれは五月十六日職ゆるされたり（家の譜に享保五年三月末の七日御所小松川といふ所にならせ給ひしにひるのほと日本橋のあたりより火出て町々やけひろこりぬけふかへらせたまふへき道にさへ有けれは忠良嚴命の事を奉はり家人ともあまたくして兩國橋といふこなたの大路に非常をいましめ候ひたりしか御所は御船に奉りて淺草川をくたらせらるへし此處にや御船よせんなといひさわく程に火に追はれつる雜人はら老たるわかきにさきたちて橋をわたらんとつとひけるに警護のものくさ／＼にとめて通さゝりしを忠良見かねてしひてとめたらんには多くの人々はいたつらになりぬへしと何ともあれわたくしの計ひにてとほさん事かなひかたしとてうけかはす忠良いかにたゝわか計ひにまかせらるへし後のあやまちになりぬとも忠良罪かうむるへきそといひて橋をとほしけれはつとひしものともからうしてにけのひぬ御船もいと遠くよせられたるなり河岸にて此よし能／＼御覽せられしにあけの日忠良きのふのはからひよくしたりとの御氣しきを蒙りそはなにはかりの事にもあられとよろしきはからひなるへし）同しき十九年六月六日宿老に補せらる明の年閏三月大納言家に附られしに程なく五月二十三日又連署の衆になる元文三年十一月十五日御旗御馬しるしを西城にまゐらせ賜ひしかは忠良御使を奉り

に男子なかりしかは眞田彈正忠信か六男忠盈をとりて家をつかす忠盈其家の血脉なれは忠徹か男忠肅に家をゆつりしに嗣子なかりけれは忠盈か男忠興に家をゆつる是も嗣なくして紀州の左京太夫賴謙朝臣の二男忠朝をして家をつかしむ此に於て先祖忠勝か血脉はたえたり又忠勝の曾祖監物政信の家は今の肥後守忠政は政信より五世忠堯までは忠勝の

ぬ是はかねて忠良か沙汰としてつくりたてし所なりとそかくて延享三年六月朔日職ゆるされ（鴈の間に候すへきよし命せらる）寶暦元年七月十五日年六十二にして卒す嫡子釜三郎世を早うしけれは二男清之助忠敞よつきとなり元文四年九月十五日拜謁し寛保元年十四歳にて叙爵して美濃守に任し（後中務大輔にあらたむ）父かうせし年の九月三日家をつく寶暦九年五月十五日石見國濱田に移り（松平周防守康福にかはる）ことし七月十日三十三歳にて卒す男子なかりしかは眞田彈正忠信弘か六男久米の介忠盈を女にあはせて八月二日家つかす忠盈名を改め十二月七日從五位に叙して中務大輔に任す明和四年閏九月十九日年三十六歳にして濱田城に卒す初め忠盈か家つきし時忠敞かおもひものたゝならすして有しか月みちて男子を生めり幾久松といふまさしき筋目なれは忠盈おほやけに申て嗣子とし平八郎忠肅と名のることとし五月二十五日忠肅家つきて明和六年十一月十八日三河國岡崎にうつる（松平周防守康福にかはる）同しき八年六月朔日初て見え奉り安永元年の冬從五位下中務大輔になり同しき六年五月八日卒す十九歳いまた子なかりけれは忠盈か三男長之進忠興をよつきとす忠興七月九日家つきて八月朔日はしめて見參し十二月從五位下して中務大輔に任す

○肥後守藤原忠英は内記政勝か三男なり從弟監物政信子なかりしかは末期にやしなはれてよつきとなす寛文二年六月十三日遺跡を賜ひ（大和國の内三萬石）同しき十九日はしめて見參し此年叙爵して肥前守に任す（後肥後守にあらたむ）延寶七年六月廿六日播磨國完粟郡山崎にうつる元祿二年五月十一日大番の頭となり寶永四年十二月九日職ゆるされ享保三年六月二十四日七十二歳にして卒す長子監物忠良は吉十郎忠孝か家をつきしかは二男平七郎忠方して家つかしむ忠方享保三年二月二十八日はしめて見え奉りおなしき年八月十八日父か遺領賜はり六年の冬從五位下の肥後守になりおなしき十六年五月十六日所領山崎にて卒す子なきによりて弟才兵衞忠辰を嗣とす忠辰ことし七月十九日家つきて二十八日はしめて拜謁し此冬從五位下肥前守に叙任し寛延三年十一月二十四日卒す（四十歳）嫡子權次郎忠堯十二月二十六日父につき寶暦二年十二月朔日見參し從五位下大和守に任す同しき十一（二）年卒して（二月二十五日二十五歳）子なかりしかは有馬日向守孝純か四男監物

血脉たりしに忠堯男子なくして有馬日向宗孝純か二男忠可を養うて嗣にす其子忠居其子忠孝にして有馬か血脉なり忠勝の血脉には非ず父忠勝の二男忠朝の家六萬石を賜ひ播磨の國明石に封せられしに其孫出雲守政利政事に善らぬ事有て五萬石を削られ僅か一萬石の所領と成しに猶も心改られすして配所に處せられ家絶ぬる由也直勝の孫能登守忠義の家は十

忠可を嗣とすことゝし四月二十七日忠可遺領賜はり五月十五日初て謁をとり二十一歳明る十二年叙爵して肥後守に任す

○出雲守藤原政利は内記政勝か二男也明暦元年十二月叙爵し寛文十一年十二月二十三日父か遺領分ち賜りて（大和國の内六萬石）延寶七年六月二十六日播磨國明石の城を賜ふ（松平日向守信元にかはる）天和二年三月二十二日領地の政事よろしからすとて城地ともに沒收せられ陸奥國岩瀬の地にてあらたに所領を給ふ（一萬石）されと改る心もなくて猶も非法のふるまひとも有しかは元祿六年六月十三日罪蒙りて息男内匠正眞ともに配流せらる（政利は出羽の國に流されて酒井左衛門尉忠直に預られ子内匠忠眞は伊豫の國に流され一柳兵部少輔藤原直治に預らる○政利あしさまの事ともありしゆゑ追々めし遣ひし女をきりて捨し事させる罪もなかりしかとも甚御氣色あしくて忽ちかゝる事に及ひし也）かゝりし後も政利心あらためす配處まてつきそひつる家人等をつかふにも非道の事とも多かりしかは是狂氣の致す處なりとて水野監物忠之に預けられ堅固に押こめおけと嚴命下りつきそひし家人等も主の事訴し科に寄て遠流に處せられしなり（政利寶永四年配所にて死す六十七歳とそ聞えし）

○下野守藤原忠平は能登守忠義か嫡男承應元年の冬叙爵せり忠義子供多かりしかは寛文五年十一月致仕せし時に嫡子なれは忠平に家つかせて（陸奥の國白川の城に十萬石）次男一學忠利三男勘兵衛忠以（一萬石つゝ）四男吉左衛門忠晴五男酒之丞忠當に（二千五百石つゝ）所領のうちさきあたへたり忠平家つきし後天和元年七月二十七日下野國宇都宮にうつり（松平下總守忠郷にかはる）地も加はり貞享二年の夏又大和國郡山にうつさる（松平日向守信定にかはる）元祿六年の冬従四位下に叙しおなしき八年の十月十五日卒す歳六十四子なかりしかは弟万之助忠常を嗣とす忠常は是より先延寶五年八月九日はしめて見え奉りそのとしの冬叙爵して能登守に任す家繼し後寶永四年の冬従下の四位にのほり年四十九にして同しき六年四月十七日卒す其子越中守忠直忠常か兄彈正少弼忠晴か長男なり元祿十五年の冬叙爵す然るに忠常年四十にあまるまて男子なかりしかは忠晴にこひてよつきとす忠常卒せし年の六月六日家をつき信濃守に改め享保二年五月四十五歳にて卒す長子政之助は世を早うし二男勝之助政通は祖父忠晴か嗣となり三男忠次郎もうせけれは四男萬之助忠村いとけなくして家をつくおなしき七年の春はしめて拜謁しこの冬十三歳にて世を早うし嗣子なかりしかは特旨にて舍弟喜十郎忠烈に

一萬石を賜りて奥の白川大和の郡山城を賜ひしに忠義か五世萬之助忠村十三歳にして卒しすれは所領の半は剝られ五萬石を喜十郎忠烈に賜りしに是も十二歳にて卒し家絶たり又忠義か二男長門守忠利父か所領を分ち一萬石領せしか男子なく毛利甲斐守綱元か二男忠次を養ひ嗣とす其子忠央か時に罪蒙り配流せられ家絶ぬ其後つみ免され忠央か養子兵

所領のうち五万石をたまはるしかるに八年の冬忠烈十三歳にしてうせけれは守に家たえたり

○長門守藤原忠利は能登守忠義か二男也寛文二年十一月父か所領を分ち賜り 陸奥國白川領一萬石 次の月五日かしこまり申せし時初めて見え奉り叙爵して山城守に任す 後長門守にあらたむ 同しき十年の夏御奏者の事をうけたまはり翌年の春寺社の奉行をかぬ延寶四年の冬病によりて寺社奉行の事をゆるされ天和元年の秋所領轉せられて三河國擧母に移る元祿十三年五月八日卒す歳六十七男子なかりけれは毛利甲斐守大江綱元か二男幸之介忠次を養ひてよつきとす忠次家繼し後寶永四年從五位下山城守に任し正徳元年の冬三十二歳にして卒す嫡子兵庫忠央父につき享保三年二月十五日はしめて謁見しおなしき七年叙爵して兵庫頭に任し 後長門守にあらたむ 寛保二年六月大番の頭となり延寶二年の春これを辭し寛保二年二月八日遠江國相良にうつり此秋御奏者の衆にくはゝりて寺社の奉行を兼たり寶暦八年三月二十八日西城の少老に轉せしか金森兵部少輔頼錦か事によりてこの年十月二十八日罪蒙りて所領沒收せられて松平越後守長孝に召あつけらる 忠央美作の國津山にありて年を經て明和五年の春罪ゆるされしかは江戸にかへりしなり 息男兵庫忠由實は有馬左兵衛佐壽純か三男寶暦三年の冬初見叙爵して兵庫頭に成しか早世し同八年の冬父忠央配流せられけれは忠由も又罪蒙りぬ 改易といふ明和三年四月御ゆるし有しなり

○彈正少弼藤原忠晴は越中守忠以か養子實は弟にて能登守忠義か四男也寛文二年十二月二十五日父か致仕せるとき兄弟おの／＼所領の地を分ちたり 忠以は陸奥の國瀬川にして一萬石忠晴は同國白川の地二千五百石 同しき四年兄忠以卒せしかは七月二十八日忠晴家つきて十二月叙爵し天和元年七月三河國伊保に移る元祿五年六月二十七日大番の頭となり同しき十五年六月十日御奏者の事をうけたまはり寺社の奉行をかぬ寶永二年十二月三日加恩の地を賜はり 七千石 同しき七年遠江國相良に所領を移され正徳三年の夏忠晴病にかゝりて職務にたへさりしかは辭し申て職免され同しき五年四月十二日卒す七十五歳嫡子越中守忠直能登守忠常に嗣子と成しかは忠直か第一の子勝之助忠通を養ひとりて家繼かしむ忠通此年六月六日祖父につき享保四年叙爵して彈正少弼に任す同しき六年世を早うす 七月二日十七歳 其子時之助忠如實は忠直か第五の子なりこの年閏七月二十一日

庫忠由に寛文年中五百石の采地をたまふ又忠義の五男淡路守忠周は父か所領をわかち五千石の加恩をかうむり一萬石となり大名列になりしか幾程もなくて加恩の地を除かれ元の五千石の采△

家つきて同しき十一年八月二十八日はしめて見參し十二月從五位下して讃岐守に任し後越中守にあらたむ延享三年九月二十五日陸奥國泉を賜はりてうつる寶曆四年の秋致仕し安永二年十月二十四日卒す年六十二嫡子雄之進忠籌ことし七月はしめて見え奉り父かゆつりをうけて家をつき十二月從下の五位して彈正少弼に任す時に十六歳

○淡路守藤原忠周は能登守忠義か五男なり天文五年父か致仕せし時兄吉左衞門忠晴と同しく所領を分ち賜り陸奥國の内私墾田二千五百石 同しき四年の秋忠晴兄越中守忠以か世繼となりしかは忠晴か采地二千五百石は忠周にくはへ賜りぬすへて五千石 延寶三年御書院の番頭になりその年叙爵すおなしき五年の春大番の頭と轉し天和元年九月采地を三河國兄助にうつされあくる二年四月加恩の地を給ひ二千石丹波の國の内 同しき三年の春寺社の奉行になされふたゝひ地加へられて三千石すへて一萬石 万石の衆となりしに貞享四年五月十四日職にかなはすして職とゝめられてめしこめらる逼塞といふ此時加恩の地をはけつられ本領の五千石にかへりて寄合の衆と成

△地となりぬ御當家にして井伊本多酒井榊原とて今の世まてもいひもてはやす家の本多の家に限り先祖の血脈もたえ又血脈も微かになりし事は本意なき事にあらすや其うへ支族の人々もよつきなく或罪蒙り家絶しもあり又祿けつられ大名の列を除かれし事有り故忠勝千載の後の不幸といつゝへし其中に今越中守忠誠か家計り忠晴か采地封祿もまして先祖の血脈相續し父の忠幾か執政の職につらなり五千石の加恩を蒙り城主の格に至りし事せめての幸ならんかしかし人みな天恩の恭きか故なり

本多

藤原忠利

某 彦次郎 早世

女子二人
伊藤若狹守長江室
一人早世

某 豐次郎 早世

女子
松平河内守直好室

某 彦左衞門 早世

利長 石見
越前守從五位下
正保三年十二月晦日叙任
元祿五年十二月十六日卒五十八歲
法名廣德院仁譽峯山道勇

助芳 印之介 靭負 新左衞門
初利久
實彦八郎助久二男
若狹守從五位下
元祿十四年十二月十八日叙任
享保十年四月十四(五)日卒六十三歲
法名本立院豊譽光山道義

康明 直三郎 猪三郎
豐後守從五位下
享保十年十二月十八日叙任
同十五年八月十日卒廿一歲
法名靈光院千譽一法道山

助久　內膳　彥八郞
今本多平八郞助阜祖

某　彥次郞　早世

某　彌太郞　早世

某　豐後　早世

某　織女　早世

女子
太田攝津守資次室

女子二人
一人早世
菅沼主水定英妻

利明　式部
依母氏稱井上後復本氏今本多榮次郞紀文祖

女子
本多彥兵衞龜時妻

某　左近　早世

利政　源右衞門
今本多兵部利寬祖

利義　傳左衞門
寬文四年五月十三日卒二十歲

助有　土井熊三郞

女子
加納求馬久武妻

助有　熊五郞　靭負
實助芳四男

助盈　左門
初利爲
實本多左京利記男

助之　新太郞　左門
若狹守從五位下

伊勢守従五位下
享保十五年十二月十八日叙任
元文二年九月廿一日卒廿四歳
法名大濱院照譽普山道榮

相模守従五位下
元文二年十二月十六日叙任
安永三年二月五日卒五十七歳
法名仁宗院興譽德山通務
○寳暦十一年武鑑年錄作豐後守
○明和七年武鑑年錄作伊豫守

寳暦三年十二月十八日叙任
明和八年十一月十一日卒三十四歳
法名豐安院崇譽讓山道興

女子四人
松平日向守直紹室
松平彈正義貫室
朽木隱岐守昌綱室
織田萬吉信味妻

某 土井熊次郡 早世

助佳 乙次郡

某 繁吉 早世

女子
許嫁本多平八郎明阜

助交 雄之介

助受 左門 彥三郡 初助富
豐後守従五位下
天明二年十二月十九日叙任

女子 早世

女子
本多彥兵衛道福妻

本多

○越前守藤原利長は伊勢守忠利か嫡男也正保二年閏五月二十六日家をつく（五萬石）此時弟二人に地をわかつ（内膳助久に四千石井上式部利明に二千五百石）利長末たいとけなかりしかは明る月の二十七日三河國岡崎より遠江國横須賀の城にうつさる（井上河内守正利にかはる）同しき三年の冬叙爵す（十二歳）その後利長身の行ひたゝしからす領地の治めもあしかりしかは其年つひに公にきこえ天和二年二月二十二日領の地こと／＼く沒收せらる然れとも譜代舊功の子孫たるに宥せられて出羽の國村上郡にして懸命の地（一萬石）宛行たり元祿五年十一月身まかりぬ（五十八歳といふ）子なかりしかはこれよりさき一族彦八郎助久か二男靱負助芳を子とし養ふ助芳元祿元年九月はしめて見え奉る同き六年二月十八日家をつく十二年六月所領の地を越後の國糸魚川にうつされ十四年十二月叙爵して若狹守に任す享保二年二月十一日信濃の國飯山の城を賜はり地も多くくはへられて（一萬石）また城もちとなる事を得たり同しき九年八月四日領邑のうちを割てうつしかへらるこれは先に加へたりし地筑摩川に近くして洪水のうれひにたへす年々の所入すくなくして公のつとめといひ士民の養ひといひかた／＼合期立かたしとてやう／＼歎き申せしによりて也（凡五十八ケ村を下され外にも地ともこめられてすへて三萬五千石領せしとそ）同しき十年四月十五（四）日六十三歳にしてうせぬ嫡子猪三郎康明六月九日家をつき此冬從五位して豐後守になりおなしき十五年八月卒す歳二十一男子なかりけれは弟靱負助有を嗣とす助有十月九日家をつき叙爵して伊勢守に任し元文二年九月歳二十四にして身まかり其子左門助盈實は一族左京利記か嫡子也十一月十六日家をつき十二月從五位下相模守になる明和五年七日朔日御奏者の事を奉り安永三年二月五日歳五十七にして身まかりぬ長子左門助之は寶曆三年四月二十六日初めて見え奉りこの冬叙爵して若狹守に任し明和八年十一月十日三十四歳にて父に先立てうせけれは嫡孫左門助受（初は助富）よつきとなり助盈か卒せし年の三月二十四日家をつき安永九年五月朔日はしめて謁し奉り天明二年叙爵して豐後守に任す（十九歳）

本多

藤原俊次

女子

康長 内膳
縫殿頭從五位下
寛永十七年十二月廿九日叙任
萬治元年十二月廿四日
法名法性院一峯道現

女子
立花飛驒守鑑虎室

康慶 千之介

女子
加藤越中守明英室

女子
牧野大和守元成室

康將
兵部少輔從五位下
萬治二年十二月廿八日叙任
延寳七年六月十八日致仕號覺翁
元祿四年正月七日卒七十歳
法名了義院別岸覺翁

忠顯　右京　大藏　初俊士
元祿十一年九月十八日卒

忠隆　式部　初俊勝
土佐守從五位下　延寶六年七月十三日卒

俊正　伊賀　平助
元祿十三年八月十四日卒

永朝　名和三彌　爲家人

仍時　鈴木源四郡　爲家人

忠利　五郡右衞門
本多將監景次養子

守之　金之助　爲家人

女子四人
伊勢外宮神職春木太夫孝光妻　伊丹周岸妻　家人本多次郎右衞門道國妻　細川玄蕃頭興英室

鎭俊　立花三左衞門
正德六年八月三日死

忠英　治部
本多主馬俊春養子

康慶 千之介
實康長男
隱岐守從五位下
寛文四年十二月廿八日叙任
正德四年三月四日致仕
享保三年十一月十日卒七十二歳
法名曉雲院泰源直英

女子二人
甘露寺大納言方長卿室
康慶室
松平筑後守忠繼室

康命 萬次郎 初康明 康程
下總守從五位下
貞享四年十二月廿九日叙任
享保四年十一月晦日卒四十八歳
法名通性院心巖權山

女子二人 共早世

某 彈之介 早世

某 安之介 早世

女子三人 共早世

某 萬菊丸 早世

俊普 大介

康敏 大介 主膳 實俊普
實康慶五男
主膳正從五位下
享保五年十二月廿七日叙任
延享四年八月廿四日卒五十三歳
法名大籟院晴光了然

女子二人 共早世

某 龜次郎 早世

慶隆 靭負
牧野駿河守忠辰養子

慶文 大吉 刑部 早世

女子四人
二人早世
相馬讃岐守尊胤室
青山大膳亮幸侶室

某　岩次郎　早世

某　彦七郎　早世

女子二人
本多播磨守忠敞室
一人早世

某　八三郎　早世

忠董　大介　縫殿　初康年　康信
縫殿頭從五位下
寶暦十一年十一月十八日叙任
同十二年八月十三日改伊勢守
明和元年十月十八日依病籠居

女子
永井飛驒守直珍室

康桓　兵部　初忠邦

康政　將監　初忠五郎

康伴　萬之介　初忠矩

實伊勢守忠統長男
丹後守従五位下
享保十三年十二月廿一日叙任
後改下總守隱岐守
明和二年正月廿五日致仕
同六年六月十八日卒五十五歳
法名謙德院退翁宗温

女子四人
二人早世
實康政女
飛鳥井右衛門督雅威室
一人早世

康匡　政吉
主膳正従五位下
安永五年十二月十六日叙任
天明元年十二月廿日卒廿六歳
法名龍香院瑞心正道

實忠統九男
下總守従五位下
明和元年壬十二月廿八日叙任
同二年十月晦日卒二十一歳
法名德性院心寛自然

女子四人
康政養女
京極周防守高備室
二人早世

康完　千吉
實忠薫長男
隱岐守従五位下
天明五年十二月十八日叙任

實酒井左衛門尉忠寄四男
隱岐守従五位下
明和三年十二月十九日致任
同八年八月廿九日卒三十二歳
法名通香院道峰宗感

女子二人
實康桓女
康伴室

某

女子
吉田侍従良達室

女子二人
一人早世
吉田神祇權大副兼雅室

康桓　恒彌
主膳正康敏養子

信胤　源十郎
小笠原能登守信成養子

女子　早世

某　仙千代
元祿十二年五月廿一日卒十歲

忠篤　彌三郎　兵部
兵部少輔從五位下
元文二年十二月廿六日叙任
延享四年八月廿日卒廿八歲
法名德風院馨譽諄孝義圓

忠興　彌三郎

女子
忠永養女

忠榮　菊次郎　左京
本多播磨守忠敞養子

女子
藤堂肥後守良由妻

忠恒　團七郎　織部
伊豫守從五位下
延寶七年十二月廿八日叙任
寶永元年十一月十日卒四十八歲
法名松巖院心譽寒月淨圓

忠統　恒彌　初忠良　兵部
伊豫守從五位下
寶永四年十二月廿三日叙任
寬延三年十月十九日致仕號拙翁
寶曆七年二月廿九日卒六十七歲
法名長德院淨譽拙翁圓徹

女子
藤堂肥後守良端妻

女子二人　共早世

忠永　留之介　靱負　內膳
從五位下丹後守
延享四年十二月十九日叙任
寶曆十年十月十三日致仕
號隨翁

某　金次郎
享保十七年八月八日卒

女子二人
藤堂肥後守良端養女
松平豐後守信敏妻

忠明　源之介

忠國　菊次郎　內記
本多左門俊方養子

女子
本多能登守忠經室

康政
隱岐守康桓養子

忠興　彌三郎　內膳
實忠篤嫡男
內膳正從五位下
寶曆八年十二月十八日叙任
後改丹後守
明和三年七月十(廿)五日卒廿五歲
法隆德院興譽仁岳道雲

忠京　駒之助
實忠永三男
伊豫守從五位下
明和八年十二月十八日叙任

女子二人
實忠篤女
渡邊半藏綱道妻
松平外記忠峯妻

忠賢　勝彌
寶曆十二年八月廿九日卒十二歲

忠京　駒之介

正識　笑彌　織部
酒井樂雅頭家人
內藤半左衞門正英養子

某 初五郎 主計
安永三年六月十七日卒十八歳

知一 内膳 多賀又兵衛
爲家人

忠憲 甲馬

忠建 官十郎

本多

○兵部少輔藤原康將は下總守俊次か二男なり寛永十二年正月十一日初めて見え奉り（兄縫殿頭康長萬治元年世を早うしければ康將世つきと成しなり）万治二年十二月叙爵し寛文四年九月十一日父の俊次かゆつりをうけ（近江國膳所の城七萬石）延寶七年六月十八日致仕す（元祿四年正月七日七十歳膳所にありて卒す）康將兄康長か嫡子千之助康慶を養ひて家つかせおのれか子織部忠恒に所領を分つ（一萬石）康慶万治二年十二月二十二日初めて見え奉り寛文四年十二月叙爵し隱岐守に成り父致仕せし日家つく（六萬石）正德四年三月四日致仕し（享保三年十一月十日膳所にありて卒す七十二歳）嫡子万治郎康命に家をゆつり五男大助俊普に祿をわかつ（千俵）康命天和三年閏五月五日はしめて拜謁し貞享四年の冬從五位下に叙し下總守に任し元祿五年七月二十九日奥詰になり十四年五月十五日ゆるされて享保四年卒す（十一月晦日四十八歳）子なかりしかは弟主膳康敏（初は俊普）を養て子とす康敏正德四年三月七日はしめて見えたてまつり享保四年に遺領をたまひあくる五年の冬從五位下主膳正に任し延享四年卒す（八月廿四日五十三歳）其子兵部康桓實は伊豫守忠統か長子なり忠統か許にありし時享保十三年九月二十八日はしめて拜謁し叙爵して丹後守に任し元文元年四月康敏に養れて延享四年十月二十八日家をつき明和二年の春致仕す（同六年六月十八日卒すとし五十五なり）其子縫殿助忠董寶曆十一年四月朔日初て見參し從五位下して縫殿頭に任せしか病によりて家つかすへうもなきによりて弟なれは伊豫守忠統か九男將監康政をよつきとす康政明和元年閏十二月二十一日はしめて見え奉り從五位下下總守に任し同しき二年正月二十五日家つきしかいくほともなくてうせぬ（十月晦日二十一歳）子なかりしかは酒井左衞門尉源忠寄か四男万之助康伴をもて嗣とす康伴ことし十一月十一日遺領を賜り翌年二月十五日初て拜し奉り（家つきし事を謝し申せし日なり）十二月叙爵して隱岐守になり同しき八年卒す（八月二十九日三十二歳）其子政吉康匡ことし十月廿九日遺領を賜ふされと病多かりければ公に見え奉らす六年をへて安永五年の十月十五日初めて見參しことし叙爵して主膳正に任し天明元年の冬うせて（十二月二十日二十六歳）よつきなかりけれは縫殿頭忠董か子千吉康完して家つかす康完天明五年十月朔日はしめて出仕して十二月叙爵して隱岐守に任す（十七歳）

○伊豫守藤原忠恒は兵部少輔康將か二男なり延寶三年八月二十一日はしめて見へ奉り同しき七年二月十八日父か領地をわかち賜り（遠江河内國のうちにて一萬石）このとし叙爵し寶永元年十一月十日卒四十八にして身まかりぬ其子兵部忠統（はしめ忠貞）元祿十四年七月二十八日はしめて見參し父かうせし明る月の二十三日家をつき寶永四年十二月二十三日御扈從となり叙爵して伊豫守に任す同しき六年御所かくれさせ給しにより二月二十一日近侍をゆりて雁の間に詰衆とかはり享保四年九月三日大番の頭となりおなしき八年五月二十五日病によりて職とゞめ帝鑑の間に侍りぬ其後病おこたりけれは明るとしの十二月二十三日仰奉りて御奏者となり寺社の奉行を兼たり十年六月十一日少老に轉しおなしき十七年四月朔日伊勢國神戸を給てうつる忠統職にある事二十年に及ひ夙夜の勞おほかりけれは延享二年所領の地（五千石）加へられ神戸にうつらしめ城もちになされける寛延三年の秋病によりて職辭せん事を申せしにはしめはゆるさせ給はさりけれともさい／＼申て十月二日事よくゆりけれはやかて其子內膳忠永に家をゆつる（拙翁と號し寶曆七年二月十九日六十七歲にして卒○忠統學を好みみつから揖蘭と號し書三卷をあらはし揖蘭子となつく又揖蘭集あり）五男內膳忠永（長子恒彌康桓は主膳康敏かよつきにして二男源十郎信胤は小笠原能登守信成か子となりたれは三男源三郎忠篤をよつきと定め元文二年はしめて見ゑ奉り叙爵して兵部少輔に任せしか先たつて卒し四男右京忠榮は播磨守忠敵か嗣となせしかは五男に家をつかせしなり）延享四年十二月朔日初て見へ奉り叙爵して丹後守に任す寛文三年十一月父につきて寶曆十年十月致仕す（時に三十七歲後隨翁と稱す）其子內膳忠興實は兄忠篤か子なり寶曆八年九月十五日はしめて謁し奉りこのとしの冬叙爵して內膳正になり（後丹後守）明和三年卒す（七月二十（十）五日二十五歲）子なかりけれは弟駒之介忠京を子として家つかせ忠京このとし九月七日家つきて同しき六年五月十五日初めて見參し八年十二月從五位下伊豫守に任す（時に十九歲）

本多

藤原正直

正永　武兵衛　三彌
豐前守從五位下
寛文八年十二月廿七日叙任
天和元年五月改紀伊守
元祿九年十月三日改伯耆守
寶永元年十二月朔日從四位下侍從
正德元年五月十九日卒六十七歲
法名信行院充山

女子二人
松平縫殿頭乘次室
榊原大膳正元政妻

正方　三左衛門
元祿五年十二月十一日卒四十六歲

女子二人　高木主水正正陳室
一人早世

正武　次郎右衛門　三彌
實榊原大膳久政二男
遠江守從五位下
元祿九年十二月廿二日叙任
享保六年二月廿一日卒五十七歲
法名勇猛院英山日雄

女子二人
正武室
大久保佐渡守常春室

某　源十郞　早世

正矩　右京

正矩　右京　左內　宮內
實三左衛門正方男
豐前守從五位下
正德三年十二月廿一日叙任
享保十七年八月七日改伯耆守
同廿年八月十七日卒五十五歲
法名興隆院泰蟬

某　松次郞　早世

某　辰之介　早世

某　鐵之介　早世

女子四人

某　三之丞

某　内藏介　早世

某　勝之介　早世

正珍
紀伊守從五位下
享保十年十二月十八日叙任
延享三年十月廿五日改伯耆守
同年十二月十五日從四位下
同四年七月廿一日侍從
安永二年五月廿二日致仕
天明六年八月廿七日卒七十七歳
法名克享院受明

女子　早世

正堅　龜五郎
紀伊守從五位下
寛延三年十二月十八日叙任
寶暦七年七月廿日卒廿二歳
法名祇承院彰信

女子二人
戸田因幡守忠寛室
實黒田大和守直純女
松平伊豆守信禮室

正供　孝吉　三彌
紀伊守從五位下
寶暦十一年十二月十八日叙任
安永六年六月十日卒三十二歳
法名普現院皆遵

某　勝吉

女子
大村河内守純富室

女子　早世

正溫　孝之介　三彌
伯耆守從五位下
天明二年十二月十八日叙任

女子　早世

直純　黒田豐前守直邦養子
女子　早世
某　吉三郎　早世
女子　許嫁金森若狹守賴錦卒
女子
某　留七郎
女子
親睦　監物　生駒主膳親賢養子

女子　大久保伊豆守忠綱室
某　善次　早世
正敬　内膳
女子　分部左京亮光實室
某　榮松
女子

沼田城は天和二年まて眞田彈正忠信成に封せられしにおなしきとし信成領地沒收せられ城をこほたれたりしかれは寶永の此時にふたゝひ城をきつきしなるへし

本多

○伯耆守藤原正永は故の伯耆守正直か嫡子にて三彌正重か曾孫也正重男子二人世を早うしけれは外孫なれは長坂太郎左衛門尉源重侚か子源十郎正貫を養ひて嗣とす正貫慶長十年十三歳にして見參してのち正重か遺領を賜ふ 八千石下總國香取葛飾相馬三郡地といふ〇家に傳ふる處も遺領ありし年月日をしるす又正重は一萬石餘の地を領せしか正貫か時にいたりてかく減せられし事いかなるゆゑにや詳ならすといふ〇前編には此ころ上方の大名死するとき多くは遺言して所領たてまつるならはし也とそすへて正重か遺言してかくは減せられしといひ又實はしからす上野介正統かはからひしてかく減せられしともいふ〇案するに續年祿も元和三年十二月正貫家つきて五千石賜はりしと見えたり家の譜には寛永二年十二月十一日八千石の御朱印を賜ふとしるすつきに襲封ののち加恩ありしなるへし 寛永九年六月二十一日寄騎の士二十五騎足輕の衆百人を屬せらる 鐵炮百人組の頭といふ 叙爵して豐前守になり十二年十一月十日御書院の番頭になりおなしき十九年閏九月五日大番の頭にうつり寛文四年二月晦日致仕す 同十二年十二月朔日八十歳にして卒す 嫡子三彌正直寛永四年七月十日はしめて見え奉り 時に十歳 萬治元年の冬從五位下伯耆守に叙任し家つきて後寛文八年二月二十一日大番の頭となり延寶五年卒す 五月十五日六十歳 其子すなはち正永なり はしめ武兵衛後に三彌といふ 寛文八年の冬叙爵して豐前守に任し 後紀伊守伯耆守にあらたむ承應三年六月七日初て見參せり 延寶五年七月十二日家つきて 七千石 弟三左衛門正方に采地をわかつ 千石 天和元年正月十一日御書院の番頭になり五月二十六日大番の頭に轉しあくる二年九月二十八日加恩の地を賜ふ 千石 元祿元年十二月十四日ふたゝひ地くはへられて大名に列し寺社の奉行をかぬ 千石くはへられてすへて一萬石 おなしき九年十月朔日少老の職にうつり十四年の春所領加へらる 五千石 十六年またまし封せられて 五千石 上野國沼田城を賜はり寶永元年九月二十七日宿老の職に補し所領くはへらる 一萬石 やかて四位の侍從にすすみ甲府殿御養君にならせたまふ時西城に屬せられ同しき二年十一月十八日地ましたまはり 一萬石合て四萬石 正德元年四月二日病ひによりて職辭しけるか月を越へて卒す 五月十九日六十七歳 正永男子なかりしかは榊原大膳源久政か二男次郎左衛門正武を養ひて子とす 正永か甥也 正武元祿六年十二月二十八日はしめて見え奉りおなしき九年の冬從五位下遠江守に任す正德元年七月五日家つきて享保六年卒す 二月二十一日五十七歳 其嗣宮內正矩實は三左衛門正方嫡男なりはしめ父か家つきて御書院番の頭たりしか正德三年八月正武おほやけに申してよつきとし 此時采地千石は公にかへしいれたり すなはち從下の五位に叙せら

れ豐前守に任す（伯耆守にあらたむ）享保六年四月遺領たまはり同しき八年九月十八日御奏者となり十五年七月二十八日駿河國田中の城にうつり（土岐丹後守頼稔にかはる）同しき廿年卒す（八月十七日五十五歳）其子三彌正珍享保十年八月十五日はしめて拜謁し從五位下紀伊守に任し（後伯耆守にあらたむ）父卒せし年十月十一日遺領をたまひ元文二年十一月十二日御奏者の事を奉り四年の春寺社奉行を兼ぬ延享三年十月二十五日宿老に補せられて從四位下に叙し四年の秋侍從に任す寶暦八年九月二日職を止られ十月二十九日逼塞すこれは正珍職にありし日金森兵部少輔頼錦か事にあつかりし事のありしゆゑとそ聞えける翌年春ゆるされて出仕す正珍か長子紀伊守正堅は先達てうせけれは次男三彌正供をよつきとして寶暦十一年十一月公の見參にいり叙爵し紀伊守になる安永三年九月正珍致仕して正供に家をゆつり天明六年八月二十七日七十七歳にして身まかりぬ紀伊守正供父につきて後安永六年六月十日三十二歳にしてうせけれは其子三彌正溫八月五日家をつき天明二年六月はしめて出仕し叙爵して伯耆守に任す（十九歳）

井伊

藤原直政

直勝

直好

直武 菊千代 萬千代
伯耆守從五位下
寛文四年十二月廿八日叙任
元祿七年十一月十二日致仕
同十年六月卒四十八歲
法名原忠院高節元義

女子
小笠原大膳信秀妻

直朝 菊千代 萬千代 兵部
初直舊
兵部少輔從五位下
元祿七年十二月十八日叙任
寶永六年二月八日改伯耆守
正德五年七月十五日卒三十六歲
法名温良院恭德宜謙

直堅 辨之進 早世

女子
早世

直矩 辨之丞 萬千代
實掃部頭直該四男
兵部少輔從五位下
寶永六年三月七日叙任
享保十六年三月廿七日致仕
寛保二年二月十九日卒四十九歲
法名光輿院花岳强桃

直陽　甲千代　萬千代
丹後守從五位下
享保十六年十二月廿三日叙任
同十七年十月四日卒十九歲
法名凌霄院松巖淨秀

直員　喜久次　初直寬
實直該木俣多宮守喜嫡男
伯耆守從五位下
享保十八年十二月十八日叙任
同廿年四月五日卒廿一歲
法名靈機院俊巖宗英

直存　伊勢之介
實松平下總守忠雅五男
伊賀守從五位下
享保十八年十二月十六日叙任
延享二年五月十二日改兵部少輔
寶曆十年九月廿日卒四十三歲
法名桂岳院徹心道馨

直粥　伊之介
延享二年五月十二日卒八歲

女子
掃部頭直幸室

直郡　恒次郎　內膳
寶曆十年十二月廿六日卒二十一歲
法名覺了院靈巖宗心

女子二人
掃部頭直幸養女
一人早世

直朗
實直存二男
兵部少輔從五位下
寶曆十三年十二月九日叙任

某　萬千代
安永九年十二月廿七日卒

女子　早世

直廣　外記
實掃部頭直秀九男
和泉守從五位下
天明五年十二月十八日叙任

女子二人

直朗　力三太

直頼　初次郎

女子二人
一人早世
小出伊勢守英常室

二世
直孝

某

某

四世　七世
直該　吉十郎　玄蕃
初直興　直治　後直興
實直時長男
侍從玄蕃頭從四位下
寛文十一年三月廿八日叙任
延寶八年九月六日改掃部頭
同年十月左近衛權少將
元祿十四年三月五日致仕
同年十二月改右衛門大夫
寶永七年五月剃髮號覺翁軒
同年十月五日直恒卒無嗣十一月十三日
直該再立復改掃部頭
正德元年十月朔日正四位上左中將
同四年二月廿三日再致仕改右衛門督
同五年十二月號全翁
享保二年四月廿日卒六十二歲
法名長壽院覺翁知性

三世
直澄

某　岩丸
貞享三年壬三月廿九日卒十歲

女子二人
伯耆直明室
阿部豐後守正喬室

五世
直通　龜十郎　兵介
侍從掃部頭從四位下
元祿十四年十二月十八日叙任
寶永六年七月朔日左近衛權少將
同七年七月廿六日卒二十二歲
法名光照院天興義空

直恒　安之介

女子
轉法輪大納言公充卿室

六世
直恒　安之介
實直該三男
主計頭從五位下
寶永三年十二月廿二日叙任
同七年八月廿三日從四位下侍從
改掃部頭
同年十月五日卒十八歲
法名圓成院德巖道隣

女子
實直時女
阿部豐後守正武室

直矩　辨之助
伯耆守直朝養家

女子二人
家人松平倉之介康弘妻
家人印貝木工保重妻

直惟　金藏
侍從備中守從四位下
正德元年十月十八日叙任
同五年四月十一日左近衞權少將
改掃部頭
享保十年二月四日左中將
同廿年五月九日致仕
同月十一日改左兵衞督
元文元年六月四日卒四十歲
法名泰源院海印指光

女子
家人木俣多宮守吉妻

直定　又五郎

直定　又五郎
實直該六男
因幡守從五位下
正德三年三月七日叙任
享保十九年十月廿一日從四位下侍從
同廿年五月十三日改掃部
同年十二月四日左近衞權少將
元文五年十二月十六日左中將
寶曆四年六月十九日致仕
同月廿一日改主殿頭
同年八月廿九日直提卒無嗣子
九月四日直該再立後改掃部頭
同五年七月廿五日仕致改大監物
同十年二月八日卒六十一歲
法名天祥院泰山定公

直禔　年之介

女子二人
家人印貝久太夫介感重妻
近江國長濱大通寺妻

直英　民部

女子
家人木俣多宮守融妻

十世
直諟　金之助
實直惟二男
侍從備中守從五位下
寬保元年十二月十九日叙任
寶曆四年六月廿二日改掃部頭
同年八月廿九日卒二十八歲
法名見性院觀利了因

直賢　虎之助
因幡守從五位下
寬保元年十二月十九日叙任
同二年十月廿六日卒廿歲

女子一人
實共直惟女
阿部豐後守正尹室
松平伊賀守忠順室

女子
松平越後守康光室

直尙　章藏
明和五年五月三日卒十三歲

直寧　篤之介　早世

女子　二人
實松平木工頭宗鎭女
轉法輪大納言實起卿室
實兵部少輔直存女
秋元但馬守永朝室

直峯　卯之次郎　早世

女子
轉法輪大納言季晴卿室

直幸　民部　初直英
實直雅三男
從四位下侍從兼玄蕃頭
寶曆四年十一月十八日叙任
同五年七月廿七日改掃部頭
同十年十一月朔日左近衞權少將
同十三年九月七日從四位上
明和二年十月十五日中將
安永七年正月廿三日正四位上

直富　豐吉　初豐直
從四位下侍從兼玄蕃頭
安永四年壬十二月十一日叙任
同九年十月廿八日左近衞權少將

女子
立花丹後守鑑門室

某　仙之允　早世

某　正介　早世

直中　庭五郎

直專　順介
眞田右京太夫幸弘養子

女子四人
許嫁酒井千熊早世
實小出主税英笏典
立花丹後守鑑門繼室
松平肥前守治茂室
近江國長濱大通寺養女

某　又介
近江國長濱大通寺養子

直廣　外記
兵部少輔直朗養子

女子
松平阿波守治昭室

直軌　銀之助

直明　武之助

女子
實兵部少輔直朗女
許嫁酒井千熊千熊卒
許嫁松平敏丸

女子二人
酒井徳太郎忠道室
松平主計頭忠滿室

直容　勇吉

女子
許嫁佛光寺厚若　早世

某　錦之介

某　惠之介

女子二人

某　宋之介

某　重吉　早世

井伊

○伯耆守藤原直武は矢部少輔直好か子萬治元年九月に初めて謁見し寛文四年の冬叙爵し同しき十二年の春父の遺領をたまふ遠江國掛川三萬五千石元祿七年十一月嫡子萬千代直朝に家をゆつり同しき十年六月八日卒す四十八歳兵部少輔直朝元祿三年午の冬はしめてまみえ奉り父につきし年叙爵しておなしき九年八月六日奥詰衆に加へられしか病によりてわつかに月をこえてゆるされたり寶永元年いとまたまはりて處領にかへりぬ明の年病にふして參るへきかきりすくれともまゐらすそのやうあしくや聞へけん十一月に及ひて御使を大目付仙石丹波守御目付駒木根長兵衛下されて病のやう見せられしにかへり參て直朝狂疾を發しさふらふと申せしかは所領の地を除かるゑかれとも舊功の家たるゆゑ一族の掃部頭直通か弟に辨之丞とて十三歳なりしを召て越後國與板の地一萬石を賜り家つかせらるる直朝は正德五年まてなからへて三十六歳にてうせぬ辨之丞直矩寶永三年六月二十八日家つきしかしこまりを申せしときはしめて見え奉りし同き六年の春從五位下兵部少輔に任す享保十六年二月二十七日嫡子萬千代直陽に家ゆつり寛保二年二月四十九歳にて身まかりぬ直陽これより先に享保十三年はしめて見參して家つきし年の十二月叙爵し丹波守に任すあけの年十月十四日卒す十九歳なり子なかりしかは實父の掃部頭直該の家人木俣多宮守喜か子喜久次直員を後とせん事を申おきたりこれは直該か外甥なれはかくは申せしなりすなはち直員に遺領給はり謁見しおなしき十八年叙爵して伯耆守に任せしか中一とせをへておなしき二十年の四月二十一歳にてうせしかは松平下總守源忠雅か五男なりし伊勢之介直孝を養ひて嗣とす直孝おなし年の五月家つきて從五位下伊賀守となり後に兵部少輔にあらたむ寶暦十年九月病してうせぬ四十三歳なり子內膳直郡直孝か第二の子なり寶暦八年に初見の禮終りて父卒せし年の十一月家つきしか月を經て卒せしかは弟の力三太直朗直孝の第三の子なり家をつく寶暦十三年七月初て見え奉り叙爵して兵部少輔になり時に十七歳明和七年御奏者衆にくはへられ天明元年九月將軍家西城におはしませし時少老に補せられ御代つかせ給ひしに本城の衆につらなる萬千代早世するにより掃部頭直幸か末男外記直廣

を養うて子とす天明五年五月十五日はしめて謁すこの年叙爵して和泉守に任す

○左中將兼掃部頭藤原直該は（はしめは直興又直治）故少將直澄か兄の内匠頭直時か子なり父直時世を早うせしかは叔父の直澄の許にひとゝなりて寛文四年の夏はしめて公に見え奉りぬ直澄子なかりしにより直興をもて嗣とせん事を日ころうたへ申せしかはおなしき十一年三月二十七日おまへにめしてこふ所をゆるされあけの日從四位下の侍從になされ玄蕃頭を兼たり延寶四年直澄卒しけれは十月二十三日家をつく（近江國彦根三十萬石）御代改りて同しき八年將軍の宣旨蒙らせたまひしかは御使にさゝれて京師におもむきしとき仰によりて掃部頭にあらため申て左近衞權少將に任す元祿改元のこと日光山の　東照宮を修造せらるへしとて直興奉行すへしと仰下されしかはかの山におもむきて監臨たること三年に及ひ三年七月土木の功をなす事を得たり其勞を賞せられて此月十一日國俊の御刀たまふ直興元老の子孫たれは思召しよる所ありしにやおなしき八年の頃より人數をくはへらるゝこともありて十年六月十三日に大老の職になされしか中二とせをへたてゝ十三年の三月二日職ゆるさるこれは病によりて辭し申せしなりかくてあくる十四年の春其子兵介直通かいまた十三歳なるに家つかせておのれは彦根にかへり左衞門太夫直治とあらためて老を養なひ居たり直通は直興か第二の子なり元祿十一年の五月十歳にて初見の禮おはり父に繼し年の十二月從四位下の侍從に任し掃部頭を兼ぬ寶永六年御使（將軍宣下の事有しなり）をうけたまはり京師にのほりし時左少將に任す明る七年の七月二十六日彦根にありて卒す二十二歳子なかりしかは弟の直恒して家つかしむ直恒は直興第三の子にて安之助といひし時寶永三年四月兄直通にともなはれて謁見しけれはやかて從下の五位になされ主計頭に任す兄につきし時從四位下の侍從にすゝむ（時に掃部頭にあらたむ）家つきしよりわつか五十日にたらす病にふして十月五日終にたゝすなりぬ十八歳とそ聞えし直恒いまはに及しとき弟金藏直惟して家つかせんことを申せしかといまた十五にたらさりしかは父の右衞門太夫直治かそのころは入道して覺翁と號せしを彦根よりめして我家政をしれと仰せ下されけり此時秋元但馬守喬朝を御使にてかたしけなき事

ども仰下されければ直治いなみ申さんに詞なく病をしのひて出仕したりけり明る二年二月大老の職になり候へとて直該と改め名のり加階して正四位左中將に任すおほやけの御覺はよかりけれとも身にいたはり多くしてつかうまつることの心まゝならす過行にまた大喪の御事さへおはしましければ年ころの病も此歎にそひしにや正德四年の春に成て再ひ致仕して又彦根にかへりけり此ときあらためて右衛門督直興と名のり後また入道して全翁と號し享保二年四月二十日六十二歳にて身まかりぬ直該子ともあまたあり長子岩丸は世を早うし次は直通次は直恒四男兵部少輔直矩は伯耆守直朝か家つきしかは備中守直惟して家つかせ六男因幡守直定に所領わかつ（私墾田一萬石）備中守直惟正德元年にはしめて出仕して從四位下侍從に叙任し同しき四年家をつき五年　東照宮石曲の御祭禮行はれし時公の御代參として日光山におもむきこの時左少將に轉し掃部頭にあらたむ享保十年四月若君かうむりそめ御座しませしに直惟加冠の役仰せかうむりしにより左中將にすゝむ子ともいとけなければ弟の因幡守直定をよつきとし家ゆつり左兵衛督と改らため元文元年六月彦根に返て卒す四十歳因幡守直定正德三年に初見叙爵して父か遺領わかち給はりし後享保十七年八月七日御奏者のことうけ給り同しき十九年に兄かよつきとなりし時（其所領一萬石は直惟にかへし付らる）從四位下侍從になり明る二十年五月十九日家つきて掃部頭にあらたむ御使（御卽位なりしゆゑなり）にて京都にゆきし時左少將に任し元文二年の秋竹千代君（俊明院殿の御事）はしめて神まうてせさせ給ひしかは正保のかしこきためしによりて直定か第にわたらせたまふおなしき五年の十二月御所にめして左中將になさるこれは竹千代君御元服の時加冠にまゐらすへきためなりあくる寛保元年の秋にその禮を行はれける寶曆四年の秋直定致仕して彦根に歸り主殿頭にあらたむ其子虎之助直賢いとけなければ始の金之助直禔を嗣子とす直禔は直惟か子なり元文二年八月おち直定かよつきたらんことをゆるされはしめて見參し寛保元年從四位下侍從備中守に任し家つきて掃部頭にあらたむ其ころより心地わつらひて八月の末つかた命あやうかりしかは伊達遠江守藤原村侯か弟伊織を養ひて家つかせんことを乞申せしに他の族なれはとてゆるされすあけの日直

諟うせけれはやかて主殿頭直定を召してまた家の事ゑらせらる（又掃部頭になる）この家二代まてかくありしことためしすなきことなるへし直定この年故の直惟か末の子に民部直英と申せしを子としてあけの年家つかせて其身は大監物とあらため彦根に菟裘の地もとめたりしかおなしき十年六十一歳にて身まかりぬ民部直英（後に直幸にあらたむ）寶暦四年十一月直定か嗣となり初て見參し從四位下して侍從に任し玄蕃頭をかぬ（時に二十六歳）五年七月二十五日家つき掃部頭にあらたむ同しき十年御使（將軍宣下ありしゆゑなり）にて都に上りし時左近衞權少將に任す十三（五）年九月六日若君（孝恭院殿の御事）山王の社に參らせ給ひし時さき〳〵の例の如く直英か第にわたらせ給ふ次の日御所にまゐりて謝し申せしに御氣色殊にうるはしくして四位の上階をゆるさる明る二年の冬若君御元服あらんとき加冠の役仰かうむりて左中將に轉すかくて安永七年の春直幸よはひ五旬に及しかは事に仰下さるゝ旨ありて正四位上になり天明四年十一月大老となりその子豐吉豐直冬（のち直富）安永四年十一月十五日初てまみえ奉りし其年の冬從四位下侍從兼玄蕃頭に任し同しき御轉任ありて京都の御使勤めし時少將にすゝむ

榊原

源政房

女子　松平阿波守綱通室　後嫁松平攝津守義行

政倫　熊之介
式部大輔從五位下
延寶五年閏十二月廿八日敘任
天和三年二月廿七日卒十九歲
法名昇安院任譽知眞本英

政邦　虎之助
實榊原伊織勝直男
式部大輔從五位下
元祿二年十一月廿七日敘任
同五年十二月十八日從四位下
正德元年正月十二日侍從
享保十一年十一月十四日卒五十二歲
法名泰正院警譽頁巖德英

某　孫七郎　早世

政祐　圖書　小平太
遠江守從五位下
享保四年十二月十八日敘任
同十二年正月九日改式部大輔
同十五年八月廿八日從四位下
同十七年八月廿九日卒廿八歲
法名宏巖院正譽祐充泰門

女子
南部修理大夫利視室

某　靫負

女子五人
青山因幡守忠朝室
一人早世
酒井雅樂頭忠知室
一人早世
水野日向守勝庸室

政岑　賴母　初勝岑
實榊原伊織勝治男
式部大輔從五位下
享保十七年十二月十六日叙任
元文元年十二月六日從四位下
寬保元年十月十三日致仕
同三年二月廿九日卒三十一歲
法名善敎院厭譽離憶榮欣

女子　早世

女子
大久保加賀守忠吉室

政永　小平太
從五位下式部大輔
寬延三年十二月十八日叙任
寶曆四年十二月十八日從四位下
天明四年十二月十六日侍從

某　富次郎　早世

勝行　大介

勝定　豐三郎　早世

女子二人
家人榊原丹波長之妻
一人早世

女子　早世

某　小四郎

政敦　小平太
從五位下兵部大輔
明和七年十二月十六日叙任

政晨　熊之介　早世

政億　圖書

女子
松平筑前守治之室

政成　虎之介

某　久米之介　早世

女子二人　共早世

某　政之介

職序　左衛門
榊原庄五郎職武養子

某　吉十郎　早世

長續　榮之丞
稻垣攝津守長以養子

女子
喜連川左兵衛督彰氏妻

某　鐵之介

某　萬吉

某　千松

政令　小平太

某　孝五郎

榊原

○式部大輔源政倫は刑部大輔政房か嫡子也寛文七年六月十五日歳わつかに三歳にして家をつき播磨の國姫路より越後の國村上に移り（本領十五萬石松平大和守直矩にかはる）おなしき十二年五月十八日にはしめて見へ奉つり延寶五年叙爵し天和三年に卒す（二月廿七日十九歳）子なかりければ一族伊織勝直か子虎之助政邦して家嗣かす政邦元祿二年従五位下の式部大輔と成同しき五年従四位下に叙し寶永元年ふたゝひ播磨の姫路に移り（本多吉十郎忠孝にかはる）正德元年正月侍従に任す是は京都の御使に依てなり（御即位御元服の事也）享保十一年十一月十四日五十二歳にして卒す嫡子圖書政祐正德四年初めて謁し奉り享保四年従五位下遠江守に任し父か亡し年の十二月二十五日家をつき十五年の秋従四位下に叙しおなしき十七年に身まかりぬ（八月二十九日二十八歳）子なかりしかは一族頼母政岑を子として家つかす政岑か家つきしは十月の十三日なりこの日いまゝてしる所の地（千石）は公に収めらることし叙爵して式部大輔に任し元文元年従四位下に叙すしかるに政岑としころ行跡たゝしからぬ事ともおほかりけれは寛保元年十月十三日ことさらに姫路よりめし出されて御勘氣かうむれりこのとき家すてに絶えかゝりしかとも曩祖康政の舊功をおほしめしけるによりて其子小平太政永に本領をたまはりて家つかせらる然れとも今までの居邸をは收公せられまた所領をもうつさるへき由仰下されけり十一月越後の國高田を賜ひぬ（松平越中守定堅にかはる）政岑是より蟄居の身となりしかは高田にくたりて籠りぬおなしき三年の二月三十一歳にしてうせにけり政永か家つきし初父のことによりてしはしかうちひそみて有りけるにやかて事ゆりて寛延三年朔日はしめて見え奉り叙爵して式部大輔になり寶暦四年従四位下して天明四年十二月侍従に任す（時に四十歳）嫡子小平太政敦明和六年六月朔日はしめて謁し奉り（時に十五歳）同き七年従五位下の兵部大輔に任す

藩翰譜續編卷之四中

● 大久保
加賀守忠朝　長門守敎寛
伊豆守忠高

● 石川
主殿頭憲之　若狹守總良

● 鳥井
左京亮忠則

● 內藤
左京大夫義泰　主殿頭政亮
丹波守政親　豐前守弌信
和泉守勝忠　上野介正勝
大和守重賴

● 植村
右衞門佐家貞

● 安部
丹波守信之

● 渡邊
越中守方綱

大久保

藤原忠員

忠也

忠隣

忠常

忠職

某 新十郎
承應二年正月四日卒四歳

忠倫 七郎右衛門
寛文二年十月十三日卒八歳

女子 早世

季之 宇津主水
萬治四年正月廿六日卒廿六歳

忠朝
實右京亮教隆二男出羽守從五位下　慶安四年八月十六日叙任　延寶五年七月廿五日改加賀守　同年閏十二月廿六日從四位下
同八年八月十八日侍從　元祿十年十月十六日致仕　寶永二年九月廿二日改杢頭　同六年正月廿二日剃髮號杢入道　正德二年
九月廿五日卒八十一歲　法名松慶院實邦了圓

女子　早世

某　大藏
貞享二年二月十日卒

女子　忠朝養女

某　熊五郎
貞享四年七月九日卒

某　幸麿
元祿五年七月朔日卒

忠增　大藏　大内藏
安藝守從五位下
寛文十年十一月廿八日叙任
貞享四年十二月十八日改隱岐守
元祿十三年十二月廿一日從四位下
寶永二年九月廿二日改加賀守
同年十二月二日侍從
正德三年七月廿五日卒五十八歲
法名心觀院大空了道

忠方　傳吉郎
大藏少輔從五位下
寶永三年十二月十九日叙任
正德三年九月十三日改加賀守
享保六年十二月十八日從四位下
同十七年十月廿三日卒四十一歲
法名現成院圓山了知

女子　早世

忠興　傳吉郎
出羽守從五位下
享保十三年十二月十八日叙任
寶曆九年十二月七日從四位下
同月十三日改大藏大輔
同十三年九月十日致仕
同月十二日改大炊頭
明和元年十月廿九日卒五十一歲
法名大雲院仙巖了潤

教賢 圖書
石川近江守總茂養子

女子 早世

教保 三浦七郎 宇津采女 初歸美
采女正從五位下
今大久保能登守敎知祖

某 萬吉
元祿十五年八月三日卒

教達 大學
宇津出雲守敎信養子

忠紀 外記
寶曆九年八月廿四日卒

女子
許嫁松平主殿頭忠長忠長卒
嫁石川內膳正總候

忠章 帶刀
天明六年九月九日卒

忠由 萬次郎 牛次郎
大藏少輔從五位下
寬延三年十二月廿八日叙任
寶曆六年二月十一日改安藝守
同十三年九月十二日改大藏少輔
明和元年十二月廿日改加賀守
同六年十月八日卒三十四歲
法名光輪院天岳不空

忠顯 直次郞 七郎右衞門
加賀守從五位下
安永三年十一月十八日叙任

忠彥 彌市
能登守敎知養子後歸

忠眞 秀次郎 新十郎

女子

忠厚　新五郎
明和九年八月十九日卒

女子二人
野宮中將定知室
油小路權中將隆彭室離別
嫁上杉駿河守勝定

敎寛　帶刀
長門守從五位下
元祿五年十二月十八日叙任
享保十五年十一月廿七日叙任
同十六年二月十一日剃髪號休隱
元文二年十二月十日卒八十一歳
法名虎山院武秋崇勇

女子

敎端　帶刀
筑後守從五位下
寶永三年十二月十九日叙任
寛保二年八月晦日卒五十六歳
法名眞常院智生相坐

女子
花房大膳職朝室

某　團之助　早世

女子

某　久太郎　早世

女子
朽木監物朝綱妻

敎起　直之丞
長門守從五位下
寛延二年十二月十八日叙任
寶曆五年二月八日卒二十三歳
法名高峻院仁榮義敦

敎信 宇津大學　初敎房
出雲守從五位下
今宇津權五郎敎綱祖

女子
實加賀守忠增女
松平因幡守寛達室

女子 早世

某 子次郎　早世

女子二人 伊藤若狹守室
一人早世

某 藤之助　早世

敎平 江七兵衞

女子二人 大久保右京亮敎明室
一人早世

敎倫 吉之丞
長門守從五位下
明和四年十二月十二日叙任
安永二年五月九日卒廿三歲
法名觀達院本寂一相

某 熊次郎　早世

敎翅 金藏
實大久保遠江守敎道嫡男
從五位下中務少輔
天明二年十二月十八日叙任
同五年九月十九日改長門守

女子

某 岩丸

女子二人

忠爲　彦十郎　權右衞門尉　元祿二年卒六十三歲　法名日宗
今大久保彌五郎忠常祖

正信　權右衞門

忠知　源三郎　源左衞門　左馬允　從五位下　寛永十三年十二月廿九日敍任
正保元年十一月廿四日卒五十三歲　法名由信院教窓日通

忠貞　彦十郎　豐前守
今大久保彦兵衞忠溫祖

忠重　彦兵衞尉

某　源三郎
寛文三年十月十九日卒

女子二人　青山藤右衞門幸豐妻
稻垣長門守重房室

女子

女子

女子　早世

忠高 市十郎
山城守從五位下
寛文二年十二月廿七日叙任
天和元年(延寶四年)十一月十六日改佐渡守
元祿三年十一月六日改但馬守(伊豆守)
同十二年九月十六日致仕
同十三年八月廿六日剃髮
號道無
同十五年四月廿五日卒五十四歳
法名嶺翁院相巖道無

忠久 源四郎
後忠信
貞享三年七月九日致仕
享保七年七月廿四日卒八十八歳
今大久保源四郎忠養祖

女子三人
牧野半右衛門忠淸妻
安藤喜右衛重尙妻
大久保豐前守忠隣室

女子 早世

常春 平八郎 市十郎 修理
初忠富 忠丘 忠春
山城守從五位下
寶永六年三月七日叙任
正德四年九月六日改信濃守(佐渡守)
享保十三年三月朔日從四位下
同年九月九日卒五十四歳
法名高門院圓樞妙機

忠位 平十郎 民部 隼人
初忠長 忠恒
今大久保大膳忠著祖

忠胤 市十郎
伊豆守從五位下
享保十年十二月十八日叙任
同十五年七月十六日改山城守
寶曆九年五月三日致仕
安永八年八月二日卒七十歳
法名仕讓院義山徹忠

某 萬次郎 早世

忠篤 傳三郎 修理
元文二年九月十三日卒十八歳
今大久保又左衛門忠直祖

女子 早世

某　市十郎
元文二年十月六日卒

女子　實安藤大和守信周女
戸澤上總介正勝室

女子二人　一人早世
阿部因幡守正興室

女子

忠郷　源八郎
佐渡守從五位下
寶曆八年十二月廿八日叙任
明和四年七月改伊豆守
同六年二月十日卒二十七歳
法名源性院専相澄清

忠喜　藤五郎

女子二人　許嫁建部内匠頭正賀離別
一人早世

女子

忠喜　藤五郎　左近
實忠胤三男
從五位下伊豆守
明和六年十二月十八日叙任

某　千之介
天明三年正月八日卒八歳

忠邦　内記
實松平主殿頭忠恕二男

女子　忠邦室

女子四人

忠定　主税　織部　熊之助
大久保下野守忠恕養子後歸

女子
大久保平次郎忠寛妻

大久保

○加賀守藤原忠朝は右京亮教澄か第二子也寛永十八年に若君（嚴有院殿の御事）生れさせたまひしかは御扈從にめしくはへられ（寛永十八年の十月のことゝそ）慶安四年叙爵して出羽守に任し萬治三年の冬御扈從組の頭に轉し寛文六年十二月はしめて采地を賜はりしか（三千石○これよりさきに廩米二千俵をたまひしなり）故加賀守忠職子なかりしかはおなしき十年の春こふによりてその嗣となりその夏家つきて（肥前國唐津の國八萬三千石）延寶五年七月二十五日宿老の職にすゝみ加賀守にあらたむこの年の冬に從四位下して明れは六年正月二十三日下總國佐倉の城にうつり封せらる（松平和泉守乘久にかはる）おなしき八年地くはへらる（一萬石）ことしの秋侍從に任し貞享三年相模國小田原にうつり（稲葉丹後守正通にかはる）又地ましくはへられ（十萬三千石となる）元祿七年二月晦日常憲院殿忠朝か第にはしめてならせたまふ（このころ宿老の第にときゝならせたまふことありしなり）この年又所領の地加はる（二萬石）おなしき九年九月優侍の仰ありて月番をゆるされ明る十年の夏奉書の加判にも及はさるよし仰くたされ又のとし二月のそみこふまゝに職ゆるされて十月十六日家ゆつりぬ忠朝子とも三人あり長子隱岐守忠增を家督とし次男長門守教寛三男宇津出雲守教信に所領わかつ（私墾田六千石を教寛に三千石を教信にたまふ）忠朝かゝりし後も折にふれて御所にまゐるときはその老病に侵されて乘輿して入ことをゆるされたりその時の恩遇おもひしるへし正德二年九月二十五日八十一歲にておはりぬ隱岐守忠增初は安藝守と申す寛文八年にはしめて見え奉り同しき十年の冬叙爵して鴈の間に候す天和元年八月御奏者となりおなしき三年の冬新恩の地を賜ふ（一萬石）ほとなく寺社奉行をかね貞享四年の十二月十八日に少老の職にうつる父は宿老子は少老たりし事ためしすくなかるへし去かるにわつかに十月にもたゝすして元祿元年の八月病によりて職ゆるされおなしき十一年父につきて十三年從四位下に叙し寶永三年九月二十一日宿老となり加賀守にあらためそのとし侍從に任し正德三年の秋病により職とけて身まかりぬ五十八歲忠增子あまたあり長子およひ次男三男は世をはやうし四男大藏少輔忠方家をつく五男圖書教賢は石川近江守總義にやしなはれ六男采女教保に所領をわかち（六千石）七男義吉は早世し八男大學教達は叔父の宇津出雲守教信

か嗣となり忠方家つきて後加賀守にあらため享保六年十二月從四位下しておなしき十七年卒す四十一歳その子出羽守忠興父かありし時初見叙爵し家つきて帝鑑の間に候しのち寶暦九年の冬從四位下に叙し大藏大輔になるおなしき十三年長子安藝守忠由に家ゆつりてみつからは大炊頭といふ明のとし十月二十九日五十一歳にしてうせぬ忠由寛延三年はしめて見えたてまつり叙爵して大藏少輔に任し後安藝守にあらため家ゆつられて又大藏少輔になり後には加賀守になりぬ明和六年十月八日三十四歳にて卒す其子直次郎忠顯家つきて七郎右衛門とあらたむいとけなけれは出仕せすして安永三年の冬にいたりてはしめて見參し叙爵して加賀守に任す（時に二十歳）

○長門守藤原敎寛は加賀守忠朝か次男也延寶三年六月はしめて見えたてまつり天和改元の春中奥の御扈從にめしくはへらる元祿五年四月十四日御扈從組の頭となりて廩米をたまふ（三千俵内千俵は政料なり）ことし從下の五位して長門守に任しおなしき十一年七月廩米をとゝめて采地を賜ふ（一千石安房の國長狹郡のうち）その十月父忠朝致仕して所領わかちたれは（駿河の國のうち私墾田六千石）はしめたまはる所をは除かれたり明のとし正月御書院番の頭を經て閏九月御側衆となる寶永三年の春西城につけられておなしき三年十月十五日同じ殿の少老に撰まれ所領の地くはへらる（五千石）これよりはしめて萬石の列とはなりぬ享保三年の春ふたゝひ地くはへられ（五千石合せて一萬六千石を領す）おなしき八年の冬職ゆるさるはしめ中奥の衆となりしよりいまにおよんて拜謁四十三年かうち少老たる事十九年なりされは職ゆりし日ことに雁の間の列になされまた景安の御刀をそ賜はりけるこれより八年を經て十五年の冬致仕して所領を嫡子筑後守敎端にゆつる（一萬三千石）四男江七兵衛敎平に地をわかち（三千石）入道して休穂と稱す敎寛少老たりし日に小五郎殿（一橋）生れさせたまひし時仰によりておさな名をまゐらせたりかゝりけれはその宮參りの折も敎寛か第にいこはせたまひしなり致仕の事告申すとてかの御方に掛幅をまゐらす元文二年十二月敎寛うせけれは中將殿（小五郎殿の御事）よりとむらはせたまひて物賜はりしもありかたき志たしみとそ聞えし敎寛うせし年八十一歳なり筑後守敎端は寶永二年四月見參して明のとし叙爵す家つきて後寛保二年八月五十六歳にておはりぬ

嫡子國之助次男久太郎ともに早世せしかは三男貞之丞敎起して家つかしむ敎起寛延二年の春はしめて出仕し十二月十八日從五位下に叙し長門守に任す寶暦五年二月八日二十三歳にてうせぬその子長門守敎倫父につきし時歳いまたいとけなけれは出仕せす明和四年閏九月にそはしめて謁見しけることし叙爵して安永二年五月これも二十三歳にてうせぬ子なかりしかは支族の遠江守敎道か嫡子金藏敎翅嗣となりことし七月家つきて天明元年の冬はしめて見參し（十七歳）あくる二年の十二月叙爵して中務少輔になりのち長門守にあらたむ

○伊賀守藤原忠高は權右衛門忠爲か孫にして左馬允忠知か子也おほち忠爲は平右衛門忠員か第六の子にて七郎右衛門忠世治右衛門土佐守か弟なりされは兄とおなしく德川殿につかへ奉りて爰かしこの戰に手柄せしこととともおほかりき忠知はこの二男にて源三郎といひし時はしめて見え奉り近侍をゆるされ次第に登庸せられて後には御書院番の頭となり所領二千石を領しけるか正保元年の冬駿府城守に在て卒しける忠高これよりさき寛永九年にはしめて謁したてまつり御書院番となり後中奥の御扈從にうつる父か卒せし年の十二月家をつき（千五百石）弟源四郎忠久に采地をわかつ（五百石）慶安三年の秋御扈從組の番頭となり明暦三年十月新番の頭に轉し寛文二年十月御扈從組の番頭となり（俸米千俵くはへらる）叙爵して山城守に任し同しき九年御書院番の頭を經て延寶四年（天和元年）二月御留守居に進み佐渡守に改む天和三年七月六日御側衆となる其間たひ／＼地加へられ（延寶七年より凡三度）貞享三年十一月又くはへ賜はる所（千五百石）を合せてはしめて萬石の家となる元祿元年の春知足院足營の事を掌りて沙汰せしに麁略のこととともありしかは明る二年の七月その怠慢をせめられてつひに職と〻められ閉門せらる一とせ餘りしてゆるされぬ（後伊豆守（但馬守）にあらたむ）同しき十二年子息に家をゆつり入道して十五年の四月身まかりぬその子佐渡守常春いまた市十郎と申せし時元祿元年に初めてまみえたてまつり家つきし後寶永六年三月叙爵して山城守に任し後佐渡守（信濃守）にあらたむ正德元年御側衆と也おなしき三年八月小老の職に補せられ御代あらたまりし後享保三年三月地くはへられ（三千石）おなしき十年十月下野國烏山の城を賜はり地を

烏山の城は元祿十五年九月稻葉對馬守重昌封せられその子和泉守重賢に至る享保十年十月十八日重賢志摩國烏羽の城へうつされけれはそのあとへ常春封せられしなり

もくはへられ（五千石加へられ合せて一萬石）十三年五月七日宿老の職にすゝみ所領もまたくはゝりぬ（一萬石）その七月には從四位下に叙せられしかやかて病にふしてうせぬとし五十四と聞えし長子伊豆守忠胤家つきて弟傳三郎忠篤して所領わかちあたふ（私墾田二千石）忠胤は享保十年はしめて見參し叙爵して伊豆守に任し家つきて後山城守にあらたむ寶暦九年致仕してその子佐渡守忠鄕に家つかす（忠胤は長生して安永八年の秋七十歳にしてうせたり）忠鄕は庶子にて寶暦五年によつきにさためられおなしき八年初て叙爵し家譲られてのち伊豆守にあらため明和六年二月廿七歳にして卒す子なかりけれは弟左近忠喜つく後叙爵して伊豆守に任す（廿五歳）

石川

源忠總

廉勝

昌能　宗十郎
日向守從五位下
寛文十一年十二月廿八日叙任
天和二年四月廿五日卒二十五歳
法名登圓院日頂

勝之　千勝　宗十郎
下野守從五位下
元祿二年十二月廿六日叙任
寶永三年正月廿七日卒三十二歳
法名法性院空山日住

總慶　石之助

女子
近江守總茂室

憲之　守十郎　初昌勝
主殿頭從五位下
承應元年十二月廿九日叙任
元祿十一年十二月廿八日從四位下
寶永三年二月廿五日致仕
號泰惠
同四年七月十一日卒七十四歳
法名方圓院泰惠日周

義孝　主税　初昌信
越前守從五位下
元祿六年十二月十八月叙任
寶永二年二月廿八日改主殿頭
同七年九月廿日卒五十二歳
法名義孝院日意

總慶　石之介　宗十郎
實勝之男
主殿頭從五位下
享保三年十二月十八日叙任
明和元年六月晦日卒六十一歳
法名總慶院厚仁日有

女子二人
若狹守總眞室
九鬼內匠頭隆常室

女子　松平播磨守賴濟室

總英　吟次郎　宗十郎
下野守從五位下
寶曆五年十二月十八日叙任
同九年閏七月廿一日卒廿三歲
法名天眞院明月日念

女子
酒井大和守忠大室

總堯　吉六
左近將監從五位下
寶曆十年七月十八日叙任
明和元年八月廿三日改主殿頭
同年十一月十四日卒廿一歲
法名泰敬院大禮日定

勝明　宮內　式部　早世

女子二人
酒井備後守忠純室離別
米倉丹後守昌照室

總純　吟次郎

總純　吟次郎　宗十郎
實總英嫡男
日向守從五位下
安永二年十二月十六日叙任
同五年五月十三日卒十九歲
法名總純院圓月日耀

總博　內記　宗十郎
實石川阿波守總恒二男
從五位下日向守
安永六年十二月十八日叙任

女子
總博室　早世

女子
若狹守總彈室
花園孝丸秀久室

總師　孝之助　宗十郎

某　柔

女子

某

總長

某　友次郎
寶永五年六月六日卒

總良　傳太郎　內膳
若狹守從五位下
萬治三年十二月廿八日敍任
貞享二年六月廿九日卒四十四歲
法名本性院日顯

直淸　圖書
加々爪甲斐守直澄養子

女子
齋藤美作守三堅妻三堅卒
嫁菅谷八郎兵衞照政

總茂　主水　內膳
近江守從五位下
元祿九年十二月九日敍任
享保十年十二月廿八日從四位下
享保十八年九月十六日卒六十三歲
法名大機院圓巖玄懸

忠明　大久保右近
今石川十左門總彬祖

女子
近藤澄助德用妻

總孝　權太郎　內膳
主水正從五位下
寶曆十一年十二月十八月敍任
明和六年七月朔日卒二十四歲
法名正法院日顯

總賢　元三郎
寶曆十三年十二月十三日卒十八歲

總陽　六三郎　圖書　內膳
實大久保加賀守忠增五男
播磨守從五位下
正德三年十二月廿一日敍任
元文五年十月七日致仕
延享元年四月十日卒五十二歲
法名淸德院淨譽圓愼

總候　寅之丞　內膳
實大久保縫殿總比二男
內膳正從五位下
元文元年十二月十六日叙任
後改若狹守
明和七年八月廿日卒五十三歲
法名正行院支名日題

總彈　吉之丞　內膳
從五位下近江守
明和八年十二月廿八日叙任
後改若狹守

某　濤之助　早世

總般　善之介　中務

女子四人
土方近江守雄邦室
水野對馬守忠實室離別
許嫁横瀨駿河守貞巨離別
石川左門總彬妻

石川

○主殿頭源憲之（はしめ昌勝）は彈正大弼廉勝か嫡子也廉勝父にさきたちてうせけれは憲之に祖父主殿頭忠總か遺領をたまふ（慶安四年四月四日の事なり忠總か遺領七萬石なりしか此時伊勢國龜山にうつされて五萬石を賜ふ兄弟に所領わかたれしことは前編に見えたり）憲之寛永二十年の夏十歳にてはしめて見え奉りのち叙爵して主殿頭に任す寛文九年地くはへられて山城國淀にうつり（一萬石合せて六萬石龜井右近大夫尙證にかはる）元祿十一年の冬從四位下にのほり寶永三年二月二十五日病を得て致仕しおなしき四年七月十一日七十四歳にて卒す嫡子日向守昌能嫡孫下野守勝之ともに先たちて世をはやうしけれは二男主税義孝（はしめ昌信）を嗣とす義孝延寶二年はしめてまみえ奉り元祿元年の夏中奧御扈從となり同六年の冬從五位下越前守に任す（後主殿頭にあらたむ）父か致仕せし日家をつき寶永七年の秋五十二歳にして卒す子なかりしかは下野守勝之か子宗十郎總慶をやしなひてよつきとす總慶家つきて正德元年二月十五日備中國松山にうつる（安藤右京進重行にかはる）おなしき三年四月十歳にてはしめて見え奉り享保三年の冬叙爵して主殿頭に任し延享改元の春伊勢國龜山の城にうつる（板倉周防守勝證にかはる）明和元年の夏六十一歳にて卒す長男下野守總英父に先たちて卒しけれは二男吉六總堯家をつく總堯寶曆十年三月はしめてまみえ奉り七月從五位下左近將監に任し（後主殿頭にあらたむ）家つきしとしの冬二十一歳にしてうせけれは兄下野守總英か子宗十郎總純をして家つかせられたりこれは祖父總慶こひ申せしによりてなり安永二年八月はしめて見參しその年の十二月日向守に任し五年の夏十九歳にて世を早うすいまた子なかりしかは一族阿波守總恒か二男内記總傳をやしなひて子としことし七月九日遺領をたまひ（家つきし恩を謝し申せし日也）おなしき二十八日はしめて見えたてまつり明年の冬叙爵して日向守に任す十九歳

その子宗十郎總師

○若狹守源總良は播磨守總長か嫡男萬治三年の冬叙爵し寛文元年十二月二十六日父か遺領を賜ひ（伊勢國神戸の地二萬石）貞享二年の夏四十四歳にして卒すその子内膳總茂父につき弟右近忠明に所領わかつ（三千石）元祿九年の十月奧詰衆にくはへられしか次の日御扈從になされこのとしの冬叙爵して近江守に任しおなしき十年二月鴈の間に候し寶永五年の春御奏者の事をうけたま

はり正德四年寺社奉行をかねたりそのゝち享保二年九月二十九日少老の職に補せられおなしき十年の夏西城に候し此冬御側御用人にうつりて從四位下に昇るおなしき十七年常陸國下舘の城賜はりて黑田豐前守直重に代る地をましくはへらる三千石おくられ合せて二萬石あくるとし行年六十三歲にして卒す其子播磨守總陽つく實は大久保加賀守藤原忠增か五男なりこれよりさき正德三年の四月はしめて謁し奉り叙爵して家つきし後元文五年病に寄て致仕す延享元年四月十日五十二歲にて卒す嗣子なかりしかは大久保縫殿總比か三男內膳總候を養て家をゆつる總候元文元年の春始て謁し奉りことしの冬叙爵して內膳正に任しのち若狹守に改む明和七年八月二十日卒す年五十三歲子三人ありしか嫡男二男ともに早世しけれは三男內膳總彈家を繼同き十月十三日遺領たまはり明る八年四月はしめて見參しその冬從五位下近江守に任す時に十六歲後若狹守に改む

鳥居

平忠春

某 彦千代 早世

某 富太郎 早世

某 熊次郎 早世

女子三人

女子
牧野備後守成興室成興卒
松平薩摩守吉貴養女

忠瞭 熊千代 右近
初忠利
實忠則五男
丹波守從五位下
寶永二年十二月十九日叙任
享保廿(十八)年四月廿七日卒五十五歳
法名大徹院德岩淨證

某 七三郎 早世

忠英 釆女
初忠救
播磨守從五位下
貞享二年十二月廿八日叙任
後改伊賀守
正德六年三月廿一日卒五十二歳
法名淨泉院桃巖徹源

忠則ノリ 彦右衞門
初忠常
兵部少輔從五位下
寛文二年十二月廿七日叙任
後改左京亮
元祿三年七月廿三日卒四十四歳
法名諦了院大高幽關

忠辰　彦三郎　宮内
長門守從五位下

女子一人
山内次郎太夫一俊妻
新庄土佐守直堅室

忠虎　彦五郎　早世

女子二人
松平左太夫直昌妻
鳥居久太夫成勝妻

忠雄　靭負
揖斐五左衛門政豐養子

女子
知久伊左衛門昌直妻離別
嫁春日左衛門義陣離別

女子　島津但馬守忠雅室

女子

某　元千代
池上本門寺弟子玄昇院

某　虎千代　早世

忠瞭（アキラ）　熊千代

某　龜千代

女子二人

某　大次郎　早世

忠意　熊千代　初忠胤　忠厚
從五位下伊賀守
享保十九年十二月十八日叙任
後改丹波守
天明元年九月十八日從四位下
同二年三月七日侍從

忠翰　主水
大久保伊勢守佳忠養子

女子

忠亮　民部

女子二人

忠求　豐丸　新太郎　初忠高
從五位下播磨守
寶暦五年十二月十八日叙任

女子

定恒　式部
坪内惣兵衞定孝養子

某　熊藏

忠計　内藏介

忠見　兵庫

元恭　縫殿介
竹中主膳元儔養子

女子
高木主水正正弼室

女子

忠貴　虎丸　新太郎

女子三人

某　八十之進
竹村權左衞門嘉品養子

某　粂之介　早世

某　源藏　早世

女子二人
花房大膳職雍妻
花房因幡守正城養女

忠溫（アツ）　主計

女子

某　千豐　早世

女子
織田筑前守秀綿室離別
嫁土屋山城守業直

安昶　隼人
戸川内藏介安照養子

忠寄　伊織

忠良　主稅
家人鳥居帶刀某養子

某　政之進

鳥居

○左京亮平忠則は主膳正忠春（はしめ忠定）か嫡男也萬治二年十二月二十六日はしめて拜謁し寛文二年の冬叙爵して兵部少輔に任し（後左京亮にあらたむ）おなしき三年十月九日父か遺領をたまふ（信濃國高遠の城三萬二千石）その丶ち元祿二年の夏馬場先の御門守りし時番の侍高坂某狂氣しけるにやある夜ふといて丶平岡和泉守（御扈從）か家の窓より内をのそきけれは家人等あやしみ捕へて奉行所に訴ふしかるに此事鳥居かかたには聊もしらす高坂か行衞こ丶かしこたつねもとめしにかくとつけたりその夜守りのものとも皆奉行所にめしよせ糺問せられんとてまつ禁獄せらる忠則も御勘氣かうむりて逼塞せしかほとなくその秋に身まかりぬとし四十四かくて高坂拷問におよふといへともとかく陳して申むね分明ならすあまつさへおのれと舌喰切て死しけれは忠則常に非道のことありしによりかゝる事も出來るなるへしかれといひこれといひそのつみかろからされは所領の地をこと／＼く除かるへしといへともそのかみ功勞ありし家の一旦に絶えむ事をあはれませ給ひその子伊賀守忠英に能登國下村にてあらたに領地賜はりて（一萬石）高遠の城をは收公せらる忠英これよりさき貞享二年の秋初て謁し奉りその冬叙爵して播磨守に任し（後伊賀守にあらたむ）元祿八年の夏地くはへられて近江國水口の城を賜ふ（一萬石合せて二萬石となる）寶永二年の秋御奏者の事を奉り寺社の奉行を兼たり正德元年六月二十七日少老の職に轉し二年春ふたゝひ地くはへられて下野國壬生の城にうつり（一萬石くはへられて三萬石となる○加藤佐渡守明英にかはる）おなしき六年三月二十一日五十一歳にして卒す弟丹波守忠瞭家をつく元祿十七年五月はしめてまみえ奉り寶永二年の冬叙爵し丹波守に任し家つきてのち享保十八（廿）年四月二十七日五十五歳にして卒す其子伊賀守忠高享保十八年の秋初めて拜謁しあくるとしの冬叙爵して父にわかれし夏家をつき延享四年五月御奏者の事を奉はり寶暦二年の夏寺社奉行をかねおなしき十年三月二十二日少老の職にうつりことしの冬より大御所につかへ奉りしか明年の夏大御所薨したまひて職ゆるされぬしかるに次の年再ひ御奏者となりて寺社奉行を兼たり此冬又西城の初老に轉して若君（孝恭院殿の御）事に附られたり安永八年若君かくれさせたまひけれ

は本城の少老の末につらなりてその職掌はなくてありしか一年をへたてゝ天明元年の閏五月十一日さらに少老になりて九月十八日西城の宿老にすゝみ四品に昇りおなしき二年の春侍從に任す時に六十六歲その子新太郎忠永寶暦五年十月朔日はしめて見え奉りおなしき十二月叙爵して播磨守になる

内藤

藤原義清

清長

家長

信成

政長

忠興

女子二人
本堂源七郎榮親妻
土方河內守雄次室

義邦 彌右衞門 早世

義英 五郎七郎
下野守從五位下
寬文十年十二月廿八日叙任
後依病籠居
享保十八年九月十四日卒七十九歲
法名光顯院徹山

政樹 豊松

信政 鍋千代 齋宮
松平近江守信周養子

義泰 萬菊 初賴長　義槪
左京亮從五位下
寛永十三年十二月十九日叙任
貞享元年十二月廿五日從四位下
改左京大夫
同二年九月十九日卒六十七歳
法名華鈴院風山

女子三人
小出備前守英安室
岡部美濃守宣就室

義孝 藤丸
能登守從五位下
貞享元年十二月廿五日叙任
正德二年十二月十日卒四十五歳
法名冬玄院義山

女子
實山角藤兵衛勝平女
平岡市十郎賴重妻

女子 小角主水有相妻

政堯
左京亮從五位下
寶曆二年十二月十六日叙任
同四年二月十六日卒十九歳
法名德彰院瓊山

女子二人
松平紀伊守信峰繼室
松平播磨守賴永室

義覺 藤丸　賴母
依病籠居
享保三年十一月廿五日卒二十二歳

義稠 小一郎
右京亮從五位下
正德三年三月七日叙任
享保三年五月廿九日卒二十歳
法名郭寒院圓山

女子
松平紀伊守信峰室

政樹 豐松　式部

實下野守義英長男
備後守從五位下
享保三年十二月十八日敍任
寶曆六年十月廿一日致仕
剃髮號兼山
明和三年九月廿四日卒六十四歲
法名嚴正院兼山

美興 千之介　早世

東市正

政亮 稱遠山百介　主殿　一有介字

主殿頭從五位下
寬文十年十一月廿八日敍任
元祿六年十一月七日卒六十九歲
法名覺性院圓心光山

女子一人

實西尾豐後守喜敎女
堀式部少輔直景室
實東市正美興女
諏訪因幡守忠晴室

政陽 億介

實山城守政重三男
能登守從五位下
寶曆四年十二月十八日敍任
明和七年十月廿九日致仕
天明元年閏五月廿四日卒四十五歲
法名愿敬院法山

政德 三八郎　求馬

實堀主計頭貞行二男
內膳正從五位下
元祿三年十二月廿六日敍任
同十六年五月十三日卒三十歲
法名泰巖院龍光雲山

女子

實品川權大夫高寬女

政脩 德十郎

實尾張中納言宗勝卿十四男
備後守從五位下
明和七年十二月十六日敍任

女子 政脩室

政韶 五郎松　金一郎

政峻 幾千藏

政貞 長十郎　主殿

實土方民部雄賀二男
元祿十六年七月廿七日復本氏
主殿頭從五位下
寶永六年三月七日敍任
享保七年四月廿三日卒三十九歲
法名智光院泰仁勇山

政醇　銀一郎　初令政　政盈
播磨守從五位下
享保十二年十二月十八日叙任
寛保元年九月五日卒三十一歳
法名不照院風航故山

政業　銀一郎　初亮長
從五位下播磨守
寶曆六年十二月六日叙任
同十一年十一月廿四日致仕
安永三年四月十一日號葛山

貞幹　雅之進
實紀伊大納言宗直卿六男
主殿頭從五位下
寶曆十一年十二月十八日叙任
明和六年八月十五日改伊賀守
同八年五月廿三日改因幡守
安永七年六月廿三日卒三十三歳
法名德本院有峰慤山

政勝　百介　早世

女子二人
實共土方民部雄賀妻
一人早世
齋藤右近三武妻後嫁
前田隱岐守玄長

女子二人
一人早世
前田隱岐守玄長養女

政爲　銀一郎　初正親
安永七年六月廿日依病籠居

政廣　雅之進

某　政吉　早世

政偏　岩三郎　新三郎

女子　長谷川岩吉勝宗妻

政晴

某　大學　早世

某　縫殿介　早世

女子　北條左京氏朝室

政親　金一郎　右近　初政直
右京大夫從五位下
萬治元年閏十二月廿七日敍任
元祿三年七月十一日改丹波守
同九年十一月六日卒五十二歲
法名德大院門譽總持賢山

政森　金一郎
山城守從五位下
元祿十四年十二月十一日敍任
正德四年九月七日改丹波守
享保十八年四月六日致仕
剃髮號向山
元文三年五月十二日卒五十五歲
法名總持院大譽得法向山

某

政里　三郎　金一郎
山城守從五位下
享保十五年十二月十八日敍任
延享三年四月晦日卒二十九歲
法名大信院單譽候道典山

女子
太田原備前守建淸室
建淸卒嫁佐竹壹岐守義通

政則　圭馬　靫負
延享三年十月廿七日卒

政苗（シウ）　金一郎
丹波守從五位下
寶曆七年十二月十八日叙任
明和三年十一月廿六日致仕
安永二年七月十一日剃髮號獨山

政陽　億介
備後守政樹養子

某　富五郎　早世

女子　早世

某　金一郎　早世

學文　鐵之助
初政養
實紀伊中納言宗將卿四男
山城守從五位下
明和三年十二月十九日叙任
安永四年二月廿三日改丹波守
天明元年九月十八日改右近將監

某　大吉　早世

政平　秀三郎　式部

女子二人
今井彥次郎好用妻離別
嫁曾根內匠長解
神谷大和守長俊養女

某 幸五郎 早世

女子 阿部遠江正守元室

信正

信照

信良

女子 岡部播磨守正敦室

信貞 藤太郎
寛文十三年三月四日卒十四歳
法名忠休

式信 市之介 初信勝
實内藤伊勢守信光二男
紀伊守從五位下
延寶元年十二月十五日從四位下
正德二年二月十五日侍從
享保十年二月十八日致仕
同十五年十一月十一日七十三歳
法名超岳

信輝 彌十郎 初信季
實豐前守長信二男
豐前守從五位下
元祿八年十二月十八日叙任
寶永六年九月十九日改伊豫守
享保十年二月十九日改紀伊守
同年十月廿五日卒四十五歳
法名淨眼

女子二人 共早世

信積 彌十郎
享保十六年三月十六日卒十八歳
法名淨徹

女子 早世

女子
實式信女
相馬因幡守德胤室

信興 孫三郎
紀伊守從五位下
元文元年十二月十六日叙任
寶曆十一年五月廿五日致仕
明和元年閏十二月廿八日改大膳亮
同八年八月三日剃髮號昌山
安永九年五月五日卒六十一歳
法名道溫

女子
實堀市正周女
諏訪主殿賴秋妻

女子二人
內藤越前守信明室
一人早世

信輝　彌十郎

信旭（アキラ）　貞五郎　三左衞門
豐前守從五位下
寶曆八年十二月十八日叙任
同十二年六月十七日卒七十歲
法名了義

信盛　勝之介
內藤兵庫信之養子

秀孝　兵部
中坊美作守秀廣養子

高長　內匠
京極主膳正高之養子

女子　早世

某　豐松　早世

信凭　富丸
實信興二男
紀伊守從五位下
明和元年閏十二月廿八日叙任
天明元年正月十九日卒三十四歲
法名道崇

女子
水野日向守勝前室

女子　早世

某　早世

女子
信輝養女

信庸　越前守
內藤越前守信明養子

女子
堀幸之助親幸室

信敦　德丸

女子二人

某　龜千代　早世

女子　早世

信凭　富丸

女子二人　阿部駿河守正賀室　松平兵庫頭直行室

賴尙　勇之助　內藤大和守賴由養子

女子　早世

某　鄙松　早世

女子二人　共早世

忠鄉

忠政

清成

清次

長賴　長五郎　主殿　初信行　實安部丹波守　土佐守從五位下　元祿十三年十二月廿一日叙任　同十六年二月九日歸之其家

清政

正勝

女子二人
一人早世
高木播磨守正府室正府卒
嫁片桐大膳彌紀離別
嫁松平紀伊守信峯離別

清行　貞之丞
實米津周防守由賢三男
若狹守從五位下
寶永元年正月十六日卒廿四歲
法名德本院諦道將去達貞

某　松之介
寬文十二年六月十日卒三歲

重賴　彌三郎
若狹守從五位下
寬文二年十二月廿七日叙任
貞享元年十二月十一日改伊賀守
同二年六月廿五日改大和守
同四年十月廿一日從四位下侍從
元祿三年十一月廿七日卒六十三歲
法名無著院然譽常光伊空

女子
水野備中守守政室

清枝　半右衞門　初守興（重興）　清長
實水野備中守重政二男
丹波守從五位下
貞享二年十二月廿八日叙任
元祿十四年正月十三日改駿河守
正德四年四月十六日卒七十歲
法名愼護院牧譽好開靜宗

女子二人
森川下野守高重室
一人早世

賴郷　吉十郎　彌三郎
伊賀守從五位下
享保元年七月廿二日叙任
同十年十二月二日改大和守
同廿年二月廿七日卒三十五歲
法名眞如院德譽純仁性空

女子
朽木土佐守玄綱室

賴由 左京 和尙彈 賴貞
實永井伊豆守尙敝六男
大和守從五位下
元文元年十二月十六日叙任
安永五年二月五日致仕
同九年五月廿八日卒七十二歲
法名源隆院興譽慤山道翁

某 吉十郎
寳曆八年七月十三日卒五歲

賴寛 德五郎 彌三郎
實下總守正敬二男
丹波守從五位下
寳曆九年十二月十日叙任
同十年十二月四日卒廿三歲
法名得定院

賴多 彌門
實尾張中納言宗勝卿十一男
駿河守從五位下
寳曆十一年十二月十八日叙任
明和八年十一月十八日卒三十一歲
法名善至院誠譽過光觀柔

賴倚 勇之介
實紀伊守信興三男
伊賀守從五位下
安永元年十二月十八日叙任
同十一年(五年)十月廿五日卒廿五歲
法名道雲院寛譽梁山道仙

長好 鐵之進

女子
細川能登守利庸室

長好 鐵之進
實賴多男

女子二人

女子

忠重

忠政

忠次　甚十郎
志摩守從五位下
萬治二年十二月廿八日叙任
後依病籠居
寶永元年五月廿五日卒六十歲
法名凉性院因心

女子
板倉隱岐守重常養女

忠勝　五郎七郎
和泉守從五位下
寬文十年十二月廿八日叙任
延寶八年六月廿七日切腹二十七歲家絕
法名淨那院直心

忠知　彌虎之介　伊織
享保二年正月廿三日卒五十六歲
今內藤甚十郎惠溫祖

女子四人
戸田肥後守氏周室
安部攝津守信友室
菅沼伊賀守定當室
淺野釆女正長友室

正次　仁左衛門　式部少輔從五位下　寛永十九年四月十八日叙任
寛文十年八月六日卒六十九歳　法名善樹院法譽清傅

正勝　平八郎
實內藤仁左衛門(三郎兵衛)正隆長男
上野介從五位下
寛文二年十二月廿九日叙任
元祿七年八月七日卒五十三歳
法名凉心院圓譽照應

女子一人
正勝室
小栗莊次郎正重妻

正友　仁左衛門
式部少輔從五位下
元祿六年十二月十八日叙任
正德元年八月十七日卒四十九歳
法名瑞雲院光譽英龍

正能　長三郎
元祿十四年九月四日卒十四歳

正敬　式部　仁左衛門
下總守從五位下
享保四年十二月十八日叙任
延享三年八月十三日卒四十二歳
法名從義院晶譽映心

正直　平八郎
今內藤斧七郎正番祖

女子一人
久世三四郎廣寛妻離別
一人早世

正弼　仁左衛門
美濃守從五位下
延享三年十二月十八日叙任
明和七年閏六月十八日卒四十歲
法名天眼院明譽了義

正壽　式部
明和六年六月十二日卒十六歲

正興　秀之介
從五位下志摩守
安永元年十二月十八日叙任

某　秀之介　早世

女子

賴寛　德五郎　彌三郎
大和守賴由養子

此時より陸奥の國岩前郡湯長谷の地に居所をかまえしなるへし

內藤　附和泉守忠勝

○左京太夫藤原義泰（前編茂胤にしるす）は帯刀忠興か子也寛永五年はしめて見參しおなしき十三年十二月從五位下左京亮に叙任し寛文十年忠興致仕して家をつく（陸奥國岩城平の城七萬石）弟主殿政亮に所領をわかつ（一萬石）貞享元年の冬從四位下になされ左京太夫にあらたむ明る年九月十九日六十七歳にして卒す嫡子彌右衛門義邦早世せしかは二男五郎七郎義英を嗣とはなしけり義英寛文十年の冬初見叙爵して下野守に任せしかその丶ち病によりて蟄居し三男藤丸義孝を嗣とす（前編に義英か男としるす家譜には義泰か三男にて義英か男は政樹信政のほか見えす）義孝天和三年の春始めて見え奉り貞享元年十二月叙爵して能登守に任し二年十一月家つきて正德二年十二月十日卒し四十五歳嫡子賴母義覺は多病なるによつて二男小一郎義稠おなしき二十七日家つきて翌年の春見參し從五位して右京亮に任し享保三年五月二十九日所領にありて卒す二十歳子なかりしかは豊政政樹を養ふて嗣とし　ことし七月遺領をたまひおなしき月二十八日はしめて見參し（家つきしことを謝せし日なり）やかて叙爵して備後守に任し延享四年三月日向國延岡の城賜はりて移る（牧野備後守貞道にかはる）長男左京亮政堯世を早ふしけれは一族山城守政里か次男億助政陽を養ひて家つかしむ寶曆四年の冬はしめて見へ奉り從五位下能登守に叙任し明和七年致仕し天明元年閏五月二十四日四十五歳にて卒すその子德十郎政脩實は尾張中納言殿（宗勝卿）の第十四男なり明和七年政陽おのか女にあはせて嗣としおなしき八月はしめて拜謁し此冬家つきて從五位下備後守に叙任す（時に十九歳）

○主殿頭藤原政亮は帯刀忠興か三男也ゆへありて遠山と稱す寛永十一年はしめて見え奉り寛文十年十一月忠興か致仕せし時所領の地をわかち賜る（陸奥國の內一萬石）おなし月二十八日叙爵し天和元年七月大番の頭となり翌年の夏加恩の地を賜ふ（二千石）貞享四年の秋大坂の定番になされ又地を增賜はる（三千石〇元祿六年十一月七日大坂にて卒す六十九歳）其嗣內膳正政德實は堀主計頭直行か二男なり元祿二年の秋はしめて見へ奉りあくる年の冬叙爵しおなしき七年の春家をつき十六年五月十三日三十一歳にして卒すその子主殿頭政貞實は土方民部源雄賀か二男なりことしの春始て拜謁し奉り年の秋家をつくこれ

上野國安中の城は元和元年五月板倉伊豫守重形に賜り又嗣子伊豆守重綱に至はりしか元祿十五年陸奥國泉の城へ轉せられけれは内藤政森重綱に代りしなり

三河國擧母の地は天和元年本多長門守忠利にたまひ其嗣忠次其子忠英に至り領しけるに寛保二年遠

より遠山をあらため内藤と稱す寶永六年三月叙爵し享保七年四月二十三日三十九歳にして卒す銀一郎政醇父につき十年の春はしめて拜謁し十二年の冬從五位下に叙し播磨守に任す寛保元年所領にありて卒す三十一歳其子銀一郎政業ことし十一月家をつき この時帝鑑の間に候すへき旨仰下さる 寶暦五年の冬始めて見えたてまつりあくるとしの十二月從五位下播磨守になりおなしき十一年致仕して雅之進貞幹に家をゆつり安永三年葛山と號す貞幹實は紀伊大納言殿 宗直卿 の六男なり寶暦十一年の秋はしめて謁し奉り叙爵して主殿頭に任し安永七年六月二十三日三十三歳にして卒すその子雅之進政廣つく 時に九歳

○丹波守藤原政親 はしめ政包 は兵部大輔政晴か遺腹の子也正保三年二月二十八日遺領を賜ひ 二萬石 承應三年五月十五日はしめて拜謁し萬治元年の冬叙爵して右京太夫といふ 寛文八年十一月朔日陸奥の國高槻より同國泉に遷ると云 貞享元年十一月二十七日御奏者になり元祿三年七月朔日少老の職にうつり 丹波守にあらたむ おなしき七年四月病によつて職を辭し雁の間に列し三年を經て五十二歳にして卒す其子金一郎政森元祿六年十一月十五日はしめて見參しおなしき九年十二月二十七日家をつき十四年の秋奥詰となりことし十一月御扈從になされ從五位下山城守に叙任す 後丹波守にあらたむ おなしき十五年七月四日上野の國安中にうつされ寶永二年正月五日城主となり安中の地に新に城をきつく享保四年正月十一日御奏者の事を奉はり勤仕する事十三年にして病にかゝり六月三日辭して帝鑑の間に列しおなしき十八年四月六日致仕す 入道して向山と號し元文三年五月十二日卒す五十五歳 その子山城守政里享保十二年九月二十八日初てまみえ奉りおなしき十五年の秋叙爵して父か致仕せし日家つきて延享三年卒す 九月晦日 二十九歳 嫡子金一郎政苗そのとし六月二十三日遺領を賜ひ寛延二年二月六日安中の城をあらためて三河國擧母に移され此地に城築くへしと黄金四千兩を賜はる寶暦七年六月朔日始めて見參し十二月從五位下丹波守になり明和三年十一月二十六日致仕し安永二年七月十一日入道して獨山と號す 時に三十三歳 嫡子金一郎早世しけれは紀伊中納言殿 宗將卿 の四男鐵之丞學文 初は政養 を嗣とす學文明和二年六月朔日始て拜謁し奉り明年家つきて 十六歳 從五位下山城守に叙任す 後丹波守また右近將監に改む 居城擧母の地は水災のうれひあるにより安永九年十一

江國相良地へ轉せられしかはそれの跡を内藤政苗にたまはりしなるへし

月十三日こふ所をゆるされて同國樹木臺に城をうつす

内藤

○豐前守藤原弌信（初め紀伊守信勝といふ）は一族伊勢守信光か二男にして延寶元年豐前守信良に養はれことし十二月叙爵しおなしき二年家をつき（陸奥の國棚倉の城五萬石餘太田備中守資近にかはる）寶永二年の夏駿河の國田中の城にうつる　正德二年五月大坂の城代になされ從下の四位にのほりて豐前守にあらたむ（所領田中をは轉せられしなり）　享保三年八月城代をゆるされしとき城地たまふへかりしにしかるへき所もあらす又新城築く事も容易ならすとておなしき五年の秋に至りて越後の國村上の城をはたまはりける（間部越前守詮房にかはる）　おなしき十年の春致仕し十五年十一月十一日卒す七十三歲其嗣彌十郞信輝實は弌信か弟なり（信賢か二男）　元祿七年の夏初めてまみえたてまつり翌年の冬從下の五位に叙し豐前守に任し享保十年二月十八日家をつきおなし年の冬所領にありて卒す四十五歲その子彌十郞信積は正德四年の冬はしめて謁し奉り享保六年の春十八歲にして世をはやうしけれは二男孫三郞信興を嗣とす同き十年の冬家をつき元文元年の春はしめて見え奉りその冬叙爵して紀伊守に任し寶曆十一年の夏致仕入道して昌山と號す（安永九年五月五日六十一歲にして卒す）　その子三左衛門信旭寶曆八年十二月初見の禮をはり叙爵して豐前守に任しおなしき十一年家つきしかと明るとし十九歲にして所領にありて卒す六月十七日と聞えし世つきなかりしかは弟富丸信凭を養ひて子とす信凭明和元年の冬始めて見へ奉り叙爵して天明元年正月十九日三十四歲にして卒すその子德丸わつか五歲にして家をつく

内藤

○大和守藤原重頼は百助正勝か嫡子也寛永七年としわつかに二歲にして父か遺領賜はりしかは所領おほく減せらる（安房の國の内五千石此時までは二萬石を領しけるか重頼幼弱なりしとて所領こと〳〵く返し奉るといふ）

○前編に正勝か家つきし時外祖父板倉重家のはからひによつて正勝微祿にて終るとしるせり家譜を見るに重頼家つきし時わつかに二歲なりけれは一族に相はかりて遺領二萬石の内一萬五千石を返し奉るといふ清家は重頼か爲には外祖正勝かためには舅なり又清次清政正勝（清成か三男）と傳へて正勝は元和八年釆地二千石を賜はり寛永三年兄修理亮清政か遺領三萬石の内一萬石わかち賜りおなしき六年二十二歲にして卒すと見えたり

○前編清政一代と記す　同き十二年三月二十八日はしめて

信濃國高崎の城は寛永十三年鳥居主膳正忠壽に封せられしに其子左京亮忠則に代り領しけりしに元祿二年忠

拜謁し火消の役を經て御書院番頭にうつり從五位下に叙し若狹守に任し（後伊賀守また大和守にあらたむ）寛永八年大番の頭に補せられ延寶四年の春御側衆となり同しき八年御代あらたまりし後若君（德松君の御事）に附られて采地を加へ賜はる天和三年病によりて職ゆるされしか貞享元年十二月十日小老の職に補せられ所領くはへ賜はりてふたゝひ大名とはなりたり（五千石合せて一萬三千石）おなしき二年九月二十七日大坂の城代となされ多くの地をくはへらる（二萬石都て三萬三千石攝津河内の國〳〵にてたまふ）おなしき四年仰によりて江戸にまいり十月廿一日所司代にすゝみ從四位下して侍從に任し元祿三年京都にありて卒す（十一月二十七日六十六歲）男子なかりしかは外甥水野半右衞門源清枝（はしめ重興（守興）備中守重政か二男也）を養ひて嗣とす清枝天和二年三月二十一日初めて見參し貞享二年十二月叙爵して丹波守に任し（後駿河守にあらたむ）元祿三年十二月二十九日父か遺領をたまひおなしき四年二月九日信濃國高遠の城賜はりまた鴈の間の衆となるおなしき八年十二月二十二日御奏者の事を奉はりしか十年八月十三日免され正德四年七十歲にて卒すその子吉十郎頼郷つくはしめ清枝男子なかりしかは安部丹波守源信峯の三男長五郎信行

（のち長頼）を養ひて子とし叙爵して土佐守に任せしか行跡よろしからすとて安部か家にかへしてまた米津周防守由賢か三男貞之丞清行を子とす清行寶永元年從五位下若狹守になり父にさきたちて死しけるゆゑ頼郷世繼となりて（清枝清行を養ひし後に頼郷をもうけしゆへ清行を世繼と定めたりしか正德三年清行失けれは又おのか嗣とはなしけるなり）正保三年十一月十三日はしめて見へ奉り父か卒せし年六月九日家をつきそのゝち叙爵して伊賀守に任し享保九年三月十八日御奏者になり十三年八月十一日やまひによりて職を辭しおなしき廿年二月二十七日卒す三十五歲その子大和守頼由（はしめは尙彈又頼眞といふ）實は永井伊豆守大江尙敞か六男なりおなしき閏三月二十日又遺領を賜はり二十八日襲封の恩を謝し奉り初めて拜謁す元文元年十二月叙爵し延享三年十一月十五日御奏者の事を奉はり安永四年九月二十四日に職をゆるされ同しき五年二月五日致仕し同九年卒す（五月廿八日七十二歲）長子吉十郎幼くして死し外に男子なかりければ下總守正敞か二男德五郎頼寛を養ひて子とす頼寛叙爵して丹後守に任せしにこれも世を早うしければ（寶曆十年十二月四日卒す）尾張殿（宗將卿の御事）の第十一男彌門頼多を嗣にし寶曆十一年五月十五日はしめて見參してやかて

則つみかうむりその子伊賀守忠英に新に一萬石を賜はり能登國下村へ轉せられしかはその嗣に內藤清枝封せられたり

敘爵して駿河守に任しけるかこれも又先たちて卒しけれは（明和八年十一月十八日）一族紀伊守信興か三男勇之助頼尙を世つきとす頼尙安永元年九月十五日始て謁見しおなしき十二月敘爵して伊賀守に任し父か致仕の日家つきて此年（安永十一年）十月二十五日卒す二十五歳その子鐵之丞長好實は駿河守頼多か子なりことし十二月二十日遺領をたまふ（時に八歳）

○和泉守藤原忠勝は飛驒守忠政の二男也兄の忠次やまひおほくして身退きぬれは忠勝世繼となり寛文十年の冬敘爵し延寶元年九月十一日父か遺領を賜ふ（志摩伊勢常陸三河等の內にして三萬三千石餘）弟虎之助忠知に所領をわかつ（二千石）同き八年嚴有院殿隱れさせたまひ御葬の事終りて增上寺にして御法會行はれし時仰かうふりて警衞して在しに六月二十六日のことなりしか俄に心狂ひたりしにやその時の奉行たりし永井信濃守尙長を殺害したれはその座にありあふ人々忠勝をはとりすくめたりあくる二十七日青龍寺にして死を賜はり所領の地をはめしおさめらる（時に二十七歳）

○上野介藤原正勝は式部少輔正次か子實は三郎兵衞（仁左衞門）正隆か男也正次は仁兵衞忠政か四男にて元和六年の冬始めて見へ奉り御書院の番衆となり（廩米三百俵を賜ふ）寛永十年常陸の國にして始めて采地を賜ふ（五百石）同き十八年竹千代君の（嚴有院殿の御事）御傅となり翌年左大臣家日光山に詣させ給ひし時若君の御使を奉はるとて從五位下の式部少輔に任せらる其後しは〱采地加へられて（合せて二千五百石となり）萬治元年の冬年老ぬるをもつて職ゆるされ（職ゆるされしといへとも嚴有院殿幼稚の御時よりしたしくつかへ參らせしゆへ御いつくしみ深くして常に昵近せしとそ）寛文四年武藏國松山の地を加へらる（二千五百石あはせて五千石）同しき十年卒す（六十九歳）正勝萬治四年中奥御扈從になり其後御扈從に移り別に廩米を賜ふ（五百俵）家つきて後御扈從組の番頭となり天和三年の夏役料をもて采地に加へ賜はる（千石なり合せて六千石）貞享二年の秋御書院の番頭にうつりそのゝち御留守居となり元祿六年十一月二十八日地數多加へられて大名に列し（一萬石加へられて合せて一萬六千石）定番となりて大坂におもむきしか明る七年の秋かしこにて身まかりぬそのとしの十月六日嫡子式部少輔正友に遺領賜はる正友はこれよりさき延寶二年七月十八日はしめて見へ奉り元祿六年に敘爵せり同しき十六年の冬大坂の定番となり此職にある事九年にしてこれも又大坂にて卒すその子仁左衞門正敬正德

元年十月十三日家つきて一萬五千石舍弟平八郎正直に所領はかつ千石享保二年にはしめて拜謁し四年の冬從五位下下總守に任し延享三年の秋うせぬ嫡子仁左衛門正弼こその五月はしめて見參しことし十月六日遺領賜はり十二月叙爵して美濃守となり明和七年閏六月十八日四十歳にして卒す二男志摩守正興八月十三日家をつく嫡子式部正壽早世せしなり安永元年十二月始て拜謁して叙爵す時に十七歳

植村

源家政

女子三人
安部丹波守信之室
三宅半七郎重吉妻
中根日向守正勝妻

家俊　新六郎　早世

某　八介　早世

家貞　右衛門　初家吉
右衛門佐從五位下
寛永十三年十二月廿九日叙任
貞享四年八月廿五日致仕
元祿三年四月十四日卒七十二歳
法名奉祥院一條空顯

女子
井上兵庫頭利明室

政成　三郎兵衛

女子
堀飛騨守直良室

家言　萬之介　初家知
出羽守從五位下
延寶六年十二月廿八日叙任
元祿九年三月十八日卒三十六歳
法名高性院當山素玄

政明　外記
今植村多宮政恒祖

政澄　次郎三郎　主殿
今植村隼人正智祖

家敬　九郎八

家敬　九郎八　新六郎　初家隆　家合
實三郎兵衛政成男
右衛門佐從五位下
元祿九年十二月廿八日叙任
後改出羽守
享保十六年八月廿一日卒五十三歳
法名正善院仁岳道義

女子
九鬼丹後守隆祇室

某　新六郎　早世

某　稻之助　早世

家包　初政之
實內記政廣嫡男
刑部少輔從五位下
享保十四年十二月十八日叙任
後改出羽守
元文三年八月十三日卒廿九歲
法名隨緣院實應性遍

女子一人
板倉攝津寺勝興室
柳澤伊賀守保單室

家道　三藏

女子
板倉攝津守勝興繼室

家道　三藏
實家敬四男
出羽守從五位下
延享二年十月十八日叙任
明和四年三月十八日卅八歲
法名寺覺院觀道性應

女子二人
大村彈正少弼純保室
蒔田伊賀守定德室

家久　九郎八　新六郎
出羽守從五位下
明和八年十二月十八日叙任
安永七年十二月二日卒二十七歲
法名諦觀院頓悟宗圓

家長　熊五郎　熊之助　兵部
繼家利
兵部少輔從五位下
天明五年十二月十八日叙任

義行　肥前守
佐野兵庫頭德行養子

女子
愛宕三位道直卿室

家利　六三郎

某　要之助　早世

女子　三浦長門守爲修室

某　隼人　早世

家利　六三郎
實家道四男
出羽守從五位下
安永八年十二月十六日叙任
後改右衞門佐
天明五年八月廿四日卒二十七歳
法名利岸院觀山道勇

女子二人

某　鐵壹千

政春　市丞　大膳
志摩守從五位下
寛文六年十二月廿九日叙任
同十一年五月十五日卒五十一歳
法名曉覺院正譽宗哲

政行　大膳
貞享五年六月三日卒廿七歳
法名爽源院鳳譽芳玄

女子
佐野豐前守直行妻

女子

政勝　内匠
寶永四年六月廿日卒二十五歳
法名本妙院壽玄月義

女子
諏訪甚四郎頼寛妻

行長　萬次郎

女子
佐野吉之丞信行妻

政廣　萬次郎　内記
初行長
實政行二男
享保廿年八月廿五日卒四十一歳
法名輝光院廓譽紫雲

家包　刑部

女子
脇坂主計安繁妻

女子

某　市十郎　早世

某　主馬

植村

○右衞門左源家貞は出羽守家政か三男也二兒新六郎家後八助某ともに早世す寛永七年二月はしめて見參し十三年の冬叙爵して右衞門佐に任す慶安三年十一月父か遺領を賜はりて二萬五千石大和國高取の城萬治元年弟志摩守政春に地をわかつ貞享四年八月二十五日致仕す元祿三年四月十四日卒すとし七十二歳其三千石子出羽守家言つく兄三郎兵衞政成引こもりて身を終る延寶元年四月十八日始て見へ奉り六年叙爵し家つきし日弟二人に地をわかつ外記政明千石次郎三郎政隆五百石元祿九年三月十八日とし三十六にて卒す新六郎家敬家をつく實は兄三郎兵衞政成か子なりことし五月二十八日はしめて見えたてまつり家つきし事を謝し奉りし日なりその冬従五位下右衞門佐に任し後出羽守にあらたむ享保十六年八月二十一日卒す五十三歳その嗣出羽守家包實は内記政廣か子にてはしめ政廣か家をつき後享保十四年四月家敬か嗣子となり二十八日はしめて見へ奉りそのとしの冬叙爵して刑部少輔に任し後出羽守父うせし年の十月十六日家をつき元文三年八月十三日二十九歳にして卒す嗣子出羽守家道まことは家敬か子なり家敬か子早世して嗣子なかりけれは家包を養ひて子とせし後家敬又男子もうけしを家包の子にして家つかせしなり十月七日家をつき延享二年四月二十八日はしめて謁し奉り十月十八日叙爵し明和四年三月十八日に卒し三十八なり子出羽守家久五月十一日父につくあくる年の三月朔日にはしめて見へ奉り八年に叙爵して安永七年十二月二日二十七歳にて卒すその弟六三郎家利明る年二月四日家をつき四月十五日はしめて謁し奉りその年の冬従五位下出羽守に任し後右衞門佐にあらたむ天明四年五月十五日御奏者となり五年八月二十四日卒すとし二十七子なかりしかは家道か二男兵部家長を世繼とす家長九月六日家つきて十一月朔日はしめて見參し家つきしことを謝せし日なり叙爵して兵部少輔に任す三十二歳

安部

源信盛

- 信之　彌一郎
  丹波守從五位下
  寛永九年十二月六日叙任
  延寶六年四月三日致仕
  天和三年七月廿八日卒八十歳
  法名性實元忠
  - 信孝　平三郎　早世
  - 貞信　内藏丞　一作允
    今安部八五郎信農祖
  - 信政　彌五右衛門
    今安部又四郎信門祖
  - 信義　主膳　初信秀
    今安部熊五郎信口祖

- 信友　彌一郎
  攝津守從五位下
  寛文八年十月廿七日叙任
  元祿十四年三月八日卒六十四歳
  法名徹應宗澄
  - 信厚　助九郎
    丹後守從五位下
    元祿五年十二月二日叙任
    今安部助九郎信尹祖
  - 信世　伊織　主計
  - 信治　勝之助
  - 女子四人
    松平久馬政武妻
    松平主税忠明妻
    小濱孫三郎廣隆妻
    秋鹿長兵衛道重妻

- 信峯　彌一郎
  丹波守從五位下
  貞享三年十一月廿六日叙任
  寶永三年五月廿一日卒四十八歳
  法名仁峯義寛
  - 信方　小十郎
    今安部左京信旨祖
  - 女子　早世
  - 信興　小三郎
    逸見八左衛門義寛養子
  - 一信　又四郎
    安部主水信美養子
  - 女子
    信賢養女

信重　內匠
依病籠居

信直　彌平次
子孫斷絕

女子四人
小出與平次有宗室
向井右衞門直宗妻
服部木工助某妻
仙石右近久信妻

某　小平次　早世

信賢　彌一郎　初信明　信治
攝津守從五位下
寶永六年三月七日叙任
享保八年二月七日卒三十九歲
法名春嶺宗融

信行　長五郎
內藤丹後守淸養養子

信平　鐵十郎　多宮
攝津守從五位下
享保十六年十二月廿三日叙任
寬延三年四月五日卒四十一歲
法名竺巖院頁心

女子　早世

某　岩次郎　早世

信允　安三郎　彌一郎
實安部小十郎信興二男
丹波守從五位下
寬延三年十二月十八日叙任
後改攝津守
天明二年九月十一日致仕
改主水正後剃髮

女子　早世

信政　縫殿
今安部平吉信富祖

女子
松平半左衛門忠盈妻

女子
實信友女
中根大隅守正利妻

信昌　友四郎
安部采女信典養子

信亨　彌一郎
丹波守從五位下
安永四年閏十二月十一日叙任
後改采女正攝津守

信榮　大之丞　半兵衛
初正房
日向半兵衛正武養子

某　彌一郎　早世

女子二人

某　金彌　早世

―女子四人
柳澤信濃守里之室
石川孝太郎正勳室
松平主馬康休妻
安部兵部信盈養女

―信武 乙次郎 後通碩
稻葉多宮通濟養子

―女子

―信淸 和三郎

―女子二人
一人早世
安部左京信旨養女

安部

○丹波守源信之は攝津守信盛か嫡子母は保科彈正忠正直か女にして德川殿の御姪女也寛永九年の冬叙爵し寛文三年三月六日父致仕して家をつく（武藏の國岡部一萬七千二百石餘）此時弟二人に地を分つ（主膳信秀千石彌平治信直千石）同き八年八月十八日大坂の城の定番となり三河國にして所領の地まし加へられ（三千石合せて二萬二千石餘）延寶五年六月二十二日病氣によりて職を辭し明る年の四月三日嫡子攝津守信友に家をゆつりて致仕す（天和三年七月二十八日八十歳にして卒す）二男助九郎信厚に所領を分つ（私墾田千石）信友寛文八年叙爵し天和二年正月十一日大番の頭となり四月丹波の國にして加恩の地をたまふ（二千石合二萬五千二百石餘）貞享三年八月六日定番となりて大坂の城にゆき爰にある事十六年元祿十四年三月八日にうせぬとし六十四嫡子丹波守信峯延寶三年二月二十八日初て見參し貞享三年叙爵して父かうせし年六月二十九日に家をつき弟小十郎信方に地をわかつ（二千石）寶永三年五月二十一日とし四十八にして卒す七月二十七日嫡子攝津守信賢家つきて二男縫殿信政に采地を分ちあたふ（私墾田千石）信賢これよりさき元祿十年四月二十八日はしめて見え奉り寶永六年の三月七日叙爵して享保八年二月七日卒すとし三十九嫡子多宮信平四月二日父につきおなしき十六年十月二十六日はしめて見參し叙爵して攝津守に任し寛延二年四月五日四十一歳にして卒すその子彌一郎信充實は支族小十郎信興か二男なり三月二十九日に家繼てその年從五位下丹波守に任し（後攝津守にあらたむ）明和八年七月七日大坂城の定番となり天明元年九月二十九日病によりて職を辭しあくる年九月十一日致仕す（五十五歳）彌一郎信亨父につく信亨はしめ安永四年閏十二月朔日初めて見參にいり叙爵して丹波守に任す（時に十八歳○後攝津守采女正にあらたむ）

渡邊

源吉綱

- 近綱　半彌
  慶安四年八月十日卒十八歲
  法名空心
- 利綱　半平　半丞　早世
- 方綱　半介　初正綱
  越中守從五位下
  萬治二年十二月廿七日叙任
  延寶八年二月朔日卒四十二歲
  法名道閑
  - 豐綱　大學
    寬文九年六月廿六日卒
  - 某　半介　早世
  - 某　勝千代　早世
  - 基綱　半次郎　主殿
    實渡邊藤藏長綱嫡男
    備中守從五位下
    元祿十四年四月四日叙任
    享保十三年七月廿一日卒六十四歲
    法名廣宣
    - 登綱　源七郎
      駿河守從五位下
      寶永五年十二月十八日叙任
      後改丹波守越中守
      明和四年九月十日致仕
      同年十月廿日卒七十四歲
      法名道臺
    - 女子二人
      戶田孫七郎光言妻
      一人早世
  - 女子四人
    基綱室
    三人早世
- 則綱　半六　早世
- 女子二人
  內藤八之丞信元妻
  山田金兵衞慶紀妻

允綱　源十郎　右近　大進
依病籠居
明和五年七月八日卒四十七歲
法名淨覺

女子
許嫁酒井織部忠雄卒

某　多十郎　早世

女子三人
高木求馬允貞妻
一人早世
祇園別當執行大塔院行顯室

某　半五郎　早世

女子
近江國野洲郡錦織寺良慈上人妻

某　源藏
寶曆六年六月十五日卒

女子二人
一人早世
松平淡路守近貞養女

某　半次郎　早世

女子
尾張家々人志水甲斐守忠榮妻離別
嫁酒井織部忠雄離別

弘長　右近
山口伊豆守弘豐養子

女子二人
長谷川喜內勝清妻
一人早世

信綱　源三郎　主殿
豊前守從五位下
明和四年十二月十六日叙任
安永元年正月廿二日（二月廿六日）卒四十六（五）歳法名道現

某　鐵之介　早世

朝綱　左膳　早世

女子　早世

伊綱　龜松　源十郎
從五位下丹後守
安永三年十二月十八日叙任
天明三年四月十八日致仕
同年七月九日改中務少輔

女子
中根内膳正寧妻

豪（ヒデ）綱　金彌

俊綱　爲治　早世

女子
松平求馬正愛妻離別

某　源三郎　早世

女子　早世

豪綱　金彌
實信綱三男
越中守從五位下
天明三年十二月十八日叙任
同四年五月十一日改駿河守

女子

信男　權之丞
松平仙橘信名養子

女子
渡邊主計房綱妻

某　鶴吉　早世

春綱　仲之進

亮綱　瀧五郎

某　彌三郎

某　綾次郎

渡邊

○越中守源方綱（はしめ正綱）は丹後守吉綱か三男也承應三年六月八日十五歳にしてはしめて見參し萬治二年叙爵して寛文八年八月二十一日父か遺領をたまふ（和泉河内近江國にて一萬三千石餘）父吉綱は定番として大坂の城にありて終りしなり方綱延寶八年（二月朔日）四十二歳にて卒す男子三人ありしか皆早世してつくへき子なかりしかは叔父藤藏長綱か嫡子主殿基綱して家つかす基綱元祿十四年二月十八日大坂城の定番となり四月四日從五位下備中守に叙任して享保十三年七月二十一日卒す任にある事二十八年とし六十四歳なり（享保十三年基綱多年の勤勞賞せられて稟米三千俵をたまふかゝるためし未すくなしとそ）其子源七郎登綱九月十六日家をつくはしめ寶永五年九月二十八日見參しその冬叙爵して駿河守になり明和四年九月十日とし七十四歳にて致仕し月を越て卒す嫡子左近充綱は病者なりけれは二男源三郎信綱をよつきとす信綱延寶二年三月二十五日はしめて見え奉り家繼く後叙爵して豐前守になり安永元年に卒す（二月廿六日（正月廿二日）四十五（六）歳）其子源十郎伊綱三月二十四日に遺領をたまひおなしき二年十二月朔日はしめて見へ奉り三年從五位下の丹後守に任し天明三年四月十八日致仕す（二十七歳）子なかりけれは弟金彌豪綱を嗣とす豪綱ことし三月はしめて謁したてまつり後從五位下に叙し越中守に任す（時に廿五歳）（後駿河守）

藩翰譜續編卷之四下

● 戶田 賜松平 丹波守光永

● 戶田 山城守忠昌 大炊頭忠利

● 戶田 肥後守氏西 淡路守氏成

● 牧野 駿河守忠辰 內膳正康成

● 牧野 備後守成貞

● 牧野 因幡守富成

● 松平 松井 周防守康官

● 三宅 土佐守康勝

● 土岐 山城守頼殷

● 高木 肥前守正長

戸田 一統稱松平

藤原政光

康光

宜光

重貞

忠重

康長

康直

光重

女子二人 堀左京亮直利室離別 一人早世

光永 幸松　孫四郎
長門守從五位下
明暦二年十二月廿六日叙任
寛文八年九月廿九日改丹波守
元祿十年十二月十八日從四位下
寶永二年二月廿九日卒六十三歲
法名光永院逸山道秀

光熈 千虎　孫四郎
河内守從五位下　元祿元年十二月廿六日叙任　寶永二年四月廿一日改丹波守
享保二年九月四日卒四十四歲　法名寶雲院德翁良恭

女子

光澄　由松　孫十郎
今戸田孫十郎光智祖

某　槌松

女子
安藤對馬守重治室

光規　幾松　戸田孫之允　內記　大膳
播摩守從五位下
寶永四年十二月廿二日叙任
正德六年閏二月十九日卒三十九歲
法名光規院明山孤天

光慈　三之介
實光照三男

光賢　千代松　孫七郎　內藏介
今戸田內藏介光爲祖

女子三人
一人早世
家人戸田大介冬房妻
實光照女
許嫁戸田靭負光輝早世

女子三人　光永養女　共早世

某　太郎松　仙太郎　虎之介

女子　早世

某　龜四郎

光慈　三之介　孫四郎
初光規養子
丹波守從五位下
享保十年十二月十八月叙任
同十七年八月十二日卒廿一歲
法名泰心院穆堂艮泰

光雄　織之介
實光照五男
丹波守從五位下
享保十七年十二月八日叙任
寶曆六年十一月朔日卒四十一歲
法名萬彭守松巖元盛

光德　豊松　從次郎
近江守從五位下
寬延二年十二月十八日叙任
寶曆六年閏十一月廿二日改丹波守
同九年正月八日卒廿四歲
法名寶春院洞外義仙

女子二人
一人早世
許嫁二條中將實彥　實彥卒
嫁今城權中納言定種卿
實光院女
菅沼織部正永用妻

光孝　内藏介
戸田孫七郎光言養子

女子
家人戸田十五郎照敎妻

光雄　鐵之助

女子
青山大膳亮幸道室　離別
嫁建部内匠頭長敷

光和　萬五郎　唯吉
實光雄六男
丹波守從五位下
寶曆九年十二月七日叙任
安永三年十二月九日致仕
同月廿二日改伊勢守
同四年七月廿二日卒　三十二歳
法名恭量院義範勇見

光悌　慶十郎
實光雄八男
丹波守從五位下
安永三年十二月廿八日致仕
天明元年九月十九日改若狹守
同六年六月廿一日卒　三十五歳
法名大覺院則道了規

某　仙勝　早世

某　早世

光延　貞五郎
一柳内膳直枚養子

女子

光悌

某　金三郎　孫三郎
安永五年七月廿一日卒

光行　牛之介
實戸田内藏介光爲二男

女子
許嫁光行

女子
許嫁牧野山城守福成
福成卒
嫁秋月山城守種德

女子二人
家人戸田十五郎悌親妻
家人野々小四郎右衛門悌義妻

女子

光壯　榮松

忠政

忠次

尊次

喬知　甚九郎
秋元越中守富朝養女

忠能

忠昌　主膳一有正字
初忠治
實三郎左衛門忠繼男
伊賀守從五位下
萬治元年閏十二月廿七日叙任
延寶四年七月廿三日從四位下
侍從改越前守
天和元年五月十九日改山城守
元祿十二年九月七日卒六十八歲
法名松原院法雲龍澤

忠眞　甚十郎　主膳
日向守從五位下
寬文五年十二月廿七日叙任
後改能登守
寶永七年十二月十八日從四位下
正德四年九月六日改山城守
同年十月廿一日侍從
享保十四年十月廿八日卒七十九歲
法名大龍院恭霄忠眞

某　早世

女子二人
松平遠江守忠高室
松平備中守正貞室

女子二人
實共三郎左衞門忠繼女
久世大和守廣之室
水野下野守忠重室

女子
實九鬼半右衞門某女
蒔田權佐定行妻

忠久　鐵三郎　彦六
實忠眞六男
享保十三年八月八日卒二十一歲

某　將監　早世

某　早世

忠章　大和守
今戸田下總守忠諏祖

女子二人
實秋元但馬守喬知女
酒井左衞門尉忠眞室
實忠章女
松平主計頭忠雅室

忠恒　三左衞門
爲家人

某　甚十郎　早世

某　與四郎　早世

女子　早世

某　大之介　早世

忠余　彦四郎
實大和守忠章長男
日向守従五位下
元祿六年十二月十二日叙任
後改越前守
延享三年八月十六日卒五十八歳
法名瑞麟院忠山玄功

某　虎五郎　早世

忠久　鐵三郎　彦六

女子三人　共早世

喬求　彦七
秋元但馬守喬房養子

女子四人
松平市正親盈室
安藤對馬守信尹室
岩城伊豫守隆光室
一人早世

忠盈　慶次郎　初忠辰　忠傍
日向守従五位下
延享元年十二月十六日叙任
後改能登守
寶暦四年七月廿五日致仕
改伊賀守
天明元年七月廿八日卒五十二歳
法名勸善院德巖全行

某　平之丞

女子二人　青山左兵衛佐忠高妻
一人早世

忠寛　嘉十郎

某　直太郎　早世

忞寛　嘉十郎
實忠余五男
因幡守従五位下
寶暦四年十二月十八日叙任
天明二年九月十日従四位下
同四年二月十一日侍従

忠與　慶次郎　三郎右衛門

俊胤 庄左衛門
木下大和守俊季養子

忠翰 秀太郎
從五位下能登守
安永七年十二月十六日叙任

女子 二人
實忠盈女
大炊頭忠喬室
實木下左衛門佐俊胤女
堀三十郎直方室

忠舜 嘉十郎

忠繼 一作次
三郎左衛門
寛永十七年二月三日卒四十四歳
法名不白院孤信玄峯

忠昌 主膳
因幡守忠能養子

忠勝 宗三郎
貞享三年十一月廿九日卒

女子二人　共忠能養女

忠利　一作時　九十郎　三郎左衛門　八郎兵衛
長門守從五位下
天和三年三月四日叙任
寶永六年改大炊頭
同年二月十八日從四位下
同五年六月廿九日致仕
正德二年七月廿四日卒七十六歲
法名方廣院德翁全隆

隆欽　伊勢守
松平甚三郎行隆養子

忠義　兵庫
吉五郎忠春祖忠春早世家絕

忠囿　十郎兵衛　初忠厚　支蕃
大隅守從五位下
寶永二年十二月十九日叙任
享保十七年五月二日卒六十四歲
法名直室院𡧃翁全策

女子二人
戸田三郎兵衛忠常妻
實忠勝女
戸田備後守重隆妻

昌邦　千次郎
天野勘左衛門昌章養子

忠一　大市郎
窪田肥前守忠任養子

忠位　文五郎　支蕃
出雲守從五位下
享保十年十二月十八日叙任
元文元年九月四日卒卅九歲
法名行候院脉甫全强

輝昌　十郎兵衛　早世

女子六人
一人早世
實水野左門忠欽女
竹中丹後守元敏妻
小堀和泉政峯室
許嫁島田十郎兵衛政之
一人早世
蒔田權佐定央妻離別

某　力之介

忠褒　三郎兵衛
戸田八郎左衞門忠雄養子

女子三人
一人早世
牧野傳藏成範妻
許嫁戸田久介勝久

某　九萬八　早世

忠則　半四郎
戸田庄右衞門忠誠養女

某　大八　早世

某　八十之介

某　庄八

常之　新六郎
遠藤新六郎常就養子

女子
山口喜左衞門直安養女

忠知　幸十郎

忠如　支藩
大隅守從五位下
明和六年十二月十八日叙任
同八年九月二日卒廿七歲
法名常機院信岸倉栗

某　九十郎　早世

女子二人
安藤織部定意妻
德山内藏助賴福妻

某　龍丸　早世

女子二人
川口文介恒久妻
河野善十郎道成妻

某　大三郎　早世
某　大四郎　早世
忠春　吉五郎
戸田登忠諸養子

忠皎　孫十郎
戸田彌十郎忠僑養子
忠喬　千五郎　初忠仲　玄蕃
從五位下大炊頭
安永九年十二月十八日叙任
某　金三郎　早世
女子　早世

忠言　玄蕃
大炊頭從五位下
寛保二年十二月十八日叙任
明和二年三月六日改長門守
安永三年十二月十四日卒四十八歳
法名雲源院龍堂全活
某　八郎
忠有　八藏　後號芳山
女子
忠貫　喜右衛門
戸田市五郎忠盈養子

松平　二連木　戸田

○丹波守藤原光永は故丹波守光重か男也明暦二年三月はしめて見參し其年の冬叙爵して長門守に任し寛文八年九月家をつき（美濃國加納の城六萬石）舍弟等に所領をわかつ（孫十郎光澄孫七郎光賢ともに五千石宛）元祿十年從四位下にのほり寶永二年に卒す六十三歳その子孫四郎光照これよりさき叙爵して河内守になる（のち丹波守）ことし四月十五日父につくこの日弟內記光規に廩米をわかつ（三千俵○光規は中奥御小性をつとめ後には播磨守になれり）正德元年二月十五日山城の國淀の城にうつされて（石川石之助總慶にかはる）享保二年九月卒すとし四十四長子虎之助次男龜四郎ともに早世しけれは三男孫四郎光慈家をつく（光慈は光規か嗣となりて家をつきけるを男子なかりしかはこひかへせしなり）いまたいとけなかりしかは又所領うつされて志摩國鳥羽の城をたまふ（板倉近江守重治にかはる）おなしき八年はしめてつかへ奉り同しき十年にかさねて改封せられて信州松本にうつることし十二月叙爵して丹波守に任し同十七年八月十二日二十一歳にして卒す男子なかりしかは弟織之助光雄を養て子とす光雄ことし十月五日兄か家繼く十二月丹波守に任し寶暦六年十一月朔日四十一歳にしてうせぬ其子近江守光德閏十一月二十二日父に繼く丹波守になり同き九年の春卒す二十四歳男子なかりけれは弟唯吉光和を子とす光和ことし三月四日家つきて從五位下丹波守に任し明和四年十月十二日御奏者の事を奉れり安永九年の秋病によりてゆるされけれはよつて弟慶十郎光悌を嗣とし同き三年家讓りて伊勢守に任せしか明のとし三十二歳にて身まかりぬ光悌安永三年十一月九日家繼く後叙爵して丹波守に任し（後若狹守にあらたむ）天明六年の夏卒す三十五歳男子一人ありしか早世しけれは一族の戸田內藏助光爲か次男牛之助光行をおのか女に配せて繼とす光行今年八月光悌か遺領をたふ（時に二十一歳）

戸田　田原

○山城守藤原忠昌は三郎左衛門忠繼か長子にておちの因幡守忠能か嗣となり正保四年家をつく（三河國田原の城にて一萬石）万治元年の冬從下の五位して伊賀守になり寛文四年地を加へられて肥後國富岡の城を賜はりてうつる（二萬千石）おなしき十一年正月二十五日御奏者となりて寺社奉行を兼たり（この時肥後富岡の地をあらためて關東の內にして所領をたまふ城地はいまた賜はらてあり）

けるなり○これまで賜はりし富岡の城はことしこぼたれたりといふ延寶四年四月三日京都の所司代にすゝみ又所領の地くわへらる一萬石從四位下して侍從に任し越前守になる關東の領地を五畿内にて轉し賜はりしとなりおなしき七年職俸をたまふ一萬俵天和元年三月江戸にまいりし時また地增賜はる一萬石この日職俸はとゝめらるその年十一月に宿老の職にうつり山城守になる明の春所領增封せられて一萬石武州岩槻の城をたまふ貞享三年正月下總國佐倉の城にうつり大久保加賀守忠朝にかはる赤地くはへられり一萬石元祿六年の冬忠昌の第に成せたまふへきむね仰出されて明る七年の三月二十五日常憲院殿はしめていたらせ給ひ賜はるところ數々にてさゝけものもまたすくなからすあけの月二十一日重ねて所領の地加へらる一萬石忠昌一身の寵異なるのみならす嫡子能登守忠眞もこれよりさき貞享二年七月御奏者の衆にくはへられやかて寺社奉行をかぬ所領の地一萬石及ひ第宅をさへ別に賜はりてとり〴〵つかへまいらせしといと有かたき事共なりかくて忠昌よはい古稀にちかくて六十八歳元祿十二年の秋病にふしたりしか九月七日に終りぬ全終とそ申すへき閏九月にあとの事御沙汰ありて其遺領を嫡子忠眞二男忠章にわかち賜ふ七萬千石のうち忠眞六萬七千八百五十石忠章三千百五十石に私墾田を合せて七千石○忠眞もこれ迄に別に賜はりし一萬石はおほやけに納し也忠眞家繼この日兩職をゆるされて雁の間の詰衆となりおなしき十四年越後の國高田の城にうつされ稻葉丹後守正道にかはる寶永七年に又下野國宇都宮にあらためて封せらる阿部對馬守正邦にかはることし從四位下になりて正德四年九月六日に宿老の職に補せられ山城守にあらたむ侍從にすゝみ享保三年三月所領加へられ一萬石おなしき八年正月朔日連書の事を許さるこれよりのちは出仕をも心にまかすへきよし仰下されて同しき十四年十月七十九歳にて卒す男子なかりけれは弟の大和守忠章か子彥四郞忠余を嗣として元祿十五年にはしめてまみえ參らせ明の年從五位下日向守に叙任し家繼く次の年御奏者の事を奉はり延享三年八月卒す五十八歳その子能登守忠盈は忠余か二男なり忠余はしめ父の忠眞か子彥六忠久を嗣としてをのか子の彥六をは秋元但馬守喬房か嗣子とせしなり忠久世を早うしけれは忠盈して家つかす忠盈寬保三年五月十五日はしめて見え奉り延享元年十二月叙爵して日向守に任し同三年十月十六日遺領を賜ひ寬延二年七月二十三日肥前國島原にうつりしか松平吉十郞忠祇にかはるいたはるところありしかは寶

暦四年の夏弟嘉十郎忠寛を嗣とし七月家讓りて伊賀守にあらため天明元年七月卒す（五十二歳）忠寛兄に養はれし年六月朔日はしめて拜謁し家繼く從五位下因幡守に叙任し明和七年十二月御奏者となり安永三年所領うつされて宇都宮にかへり封せらる（松平主殿頭忠恕にかはる）おなしき五年六月五日寺社奉行をかぬ天明二年九月十日大坂城代に補せられしかこの時從四位下して同しき四年京都所司代に移りしかは侍從に任せられたり（四十七歳）嫡子秀太郎忠翰安永七年に初見叙爵して能登守に任す

○大炊頭藤原忠利は三郎左衞門忠繼か子也忠繼は因幡守忠能か弟にて寛永の御時御小性組に召くはへられぬ（廩米二百俵をたまふ）その長子忠昌は兄の忠能か家つかせしかは二男忠利に其家をはゆつりける忠利はしめ八郎兵衞といふ延寶八年二月歩行衆の頭となりその年目付の役にうつりて天和二年に正月十一日伏見奉行となされしとき采地千石をくはへたまはり（これよりさき廩米四百俵を賜りしなり）あけの年從五位下長門守に任す貞享三年御小性組の頭となり元祿二年七月甲府殿の執事に進せられしそのときあらたに采地をたまはり（五千石）元の祿（六千百石）は三男兵庫忠義に賜はりぬおなしき十六年には甲府殿より地くはへられ（三千石）寶永元年甲府殿西城にいらせたまひしかは忠利したかひまいらせて御側衆になりあけのとし地くはへたまはりてはしめて万石の家となる（三千石をくはへ合せて一萬千石）あまつさへこのとし從四位下にさへ叙せられしか又の年十月近侍をゆるされて雁の間の衆につらなるおなしき五年六月致仕し正德二年七月廿四日行年七十六にてうせぬ長子長次郎世を早うし二男は他に養はれ三男兵庫忠義はさきに舊知たまはりしかは四男玄蕃忠囿に家つかす忠囿これよりさき貞享元年十月十三日はしめてまみえたてまつり寶永二年の冬叙爵して大隅守に任し父につく雁の間に候す享保十年五月九日大坂の定番となりて十七年の夏そこにてうせぬ六十四歳なりき忠囿男女の子とも二十三人あり嫡子玄蕃忠位父か定番となりし年從五位下出雲守に任し十七年の閏九月十五日家つく元文元年九月四日卒すその子玄蕃頭忠言ことし十歳にして父につき寛保二年初見叙爵して大炊頭に任す（後長門守）寛延二年の冬大坂の定番をうけたまはりあけのとしよりかの城を守りて十四年を經て明和元年六月

御奏者の事をうけたまはり安永三年十二月十四日四十八歳にて終れり忠言も男女の子とも十四人まてありしに嫡子大隅守忠如をはしめとし男子六人世を早うしけれはする〻の子千五郎忠喬を嗣とす父につきて玄蕃といふおなしき九年はしめて見參し叙爵して大炊頭になる時に十七歳

戸田

藤原氏鐵

―氏信

―氏西 アキ 新三郎 初氏包
但馬守從五位下
慶安四年十二月廿八日叙任
明暦元年十二月廿六日改左門
天和三年十二月四日從四位下
改肥後守
貞享元年六月七日卒五十八歳
法名高稱院淸譽江白

―信言 三郎左衞門

―氏晴 一作春 山三郎
攝津守從五位下
慶安四年八月十六日叙任
寛文十二年九月二日卒家絕

―氏定 伊賀 新二（次）郎
釆女正從五位下
寛文十一年十二月廿八日叙任
元祿十三年十二月廿一日從四位下
享保八年四月廿三日致仕
同十八年七月廿三日卒七十七歳
法名靈臺院端譽松巖

―氏成 彈正
右近太夫氏利養子

―某 新次郎 早世

―女子 早世

―氏長 伊賀 左門
伊賀守從五位下
元祿十四年十二月十八日叙任
享保十年十二月十八日改伊勢守
同十七年十二月十八日從四位下
同廿年八月十日卒四十九歳
法名享澤院乾奏徹元

―定浩 十三郎 主計 主水 內膳正 近江守
今戸田內膳氏貟祖

―某 松之丞

女子二人
一人早世
遠藤備前守常友室

氏親 一作利 三四郎 内藏允 三太郎

氏廣 主税
今戸田主税氏昌祖

信等 内記
爲家人

氏方 式部
爲家人

女子三人
板倉隱岐守重常室
高木權右衛門貞長妻
一人早世

女子二人
一人早世
松平山城守信將室離別

女子二人
一人早世
松平下野守輝行室

女子四人
水野隼人正忠恒室離別
太田備中守資晴室
二人早世

氏房 豐五郎
淡路守氏成養子

女子
實定浩女
遠藤備前守胤將室

女子三人
一人早世
實戸田大藏氏永女
戸田内膳氏淮妻
一人早世

氏辰　鐵丸　早世

氏英　徳次郎
釆女正從五位下
寛保三年十二月廿一日叙任
明和五年四月三日卒四十歳
法名崇直德譽與善

英敦　豐三郎　早世

氏經　新吉
淡路守從五位下
元和七年五月廿七日叙任
寛文十二年十二月廿三日致仕
天和元年七月廿日卒七十五歳
法名泰久院源譽本貞

某　孫藏　早世

氏敎　榮之進
實松平右近將監武元五男
從五位下釆女正
明和五年十二月十八日叙任

女子二人
一人早世
氏敎室
板倉左近將監勝政室

氏利　杢之介
右近大夫從五位下
萬治元年閏十二月晦日叙任
元祿元年七月十日致仕號如雪
同十一年七月十三日卒六十二歳
法名休岸院恍譽如雪

某　金八郎

女子　早世

女子三人

女子二人
許嫁稻葉對馬守正明早世
實近江守定浩女
稻葉越前守正明繼室

氏成　彈正

實肥後守氏西二男
淡路守從五位下
元祿十四年十一月十八日叙任
享保四年五月三日卒六十一歲
法名泰眞院高譽丹山

氏房　豐五郎　右近

實釆女正氏定五男
右近將監從五位下
享保四年十二月十八日叙任
延享元年二月廿五日改淡路守
寶暦九年十月廿三日卒五十六歲
法名興梁院開譽雅翁

氏之　豐五郎

河内守從五位下
寛延二年十二月十八日叙任
寶暦十年十二月四日改淡路守
明和八年正月七日卒二十八歲
法名顯樂院寛譽碑應

女子

戸田土佐守正胤妻

胤親　數馬

女子

五島近江守盛運室

氏養　豐太郎

淡路守從五位下
安永四年閏十二月十八日叙任
天明五年四月廿九日卒二十八歲
法名眞成院傳譽鼓運

氏興　豐太郎

女子

女子
稲葉備前守正令室離別
嫁松平兵部正受離別
嫁堀田内膳正貫

之昌
音五郎　早世

女子
氏敎家人
戸田帶刀信辰妻

戸田

○肥後守藤原氏西は始は氏包逸閑入道氏信か子也寛永十五年六月はしめて公に參りて慶安四年の冬從五位下に叙し但馬守に任し寛文十一年七月十九日父氏信に家ゆつらる美濃國大垣の城十萬石○氏信公につかへし日の事は前編に詳なり老を告し後は大垣に在り天和元年十一月八十三歳にて終りぬ氏西家つきて延寶二年の春所領の地をさきて二千石弟主税氏廣にあたふ天和三年十二月四日氏西從四位下にのほり肥後守にあらたむ貞享元年六月卒す五十八歳嫡子新次(二)郎氏定寛文七年九月五日初めて見へ奉り同十一年叙爵して采女正になり父か卒せし年八月二十日家をつき元祿元年七月所領のうち私墾田をわかちて弟彈正氏成に與ふ二千石○氏成は氏族右近太夫氏利嗣となりて在しなり同き十三年從四位下に叙し享保八年四月嫡子伊勢守氏長に家譲りて大垣に居るおなしき十八年七月七十七歳にして終りぬ氏長は元祿十年閏二月はしめて見へ奉りおなしき十四年從五位下伊賀守に叙任し享保十七年十月二十三日弟主水定浩に廩米をわかつ五千俵その年二月從下の四位にのぼりておなしき廿年の秋大垣の城にてうせぬ年四十九その子德次郎氏英七歳にて家をつき元文五年十一月はしめて見參し寛保三年十二月叙爵して采女正になり寶曆八年七月二十八日御奏者の衆にくはへられおなしき十年御代あらたまりて諸大名に賜はる領地の御書の事を沙汰しければ事はてゝ後貞綱の御刀を賜ふ明和五年大垣にありて病を得たりしに家繼すへき子なかりしかは松平右近將監武元か第五の子榮之進氏敎をむすめにあはせて嗣とせん事を申おきてうせぬ年四十歳榮之進氏敎ことし六月十三日家をつく時に年十五叙爵して采女正になる

○淡路守藤原氏成は右近太夫氏利か嗣子にて實は肥後守氏西か次男也はしめは彈正といふ父か家に在し日延寶二年二月七日まみえ奉り貞享元年二月氏利か嗣となる氏利か父氏經はしめ新吉と申せしとき大相國家に仕へ奉り別に采地賜はり三河國額田郡野山村七百石叙爵して淡路守になる寛永十年采地まし加へられ百七十石同十四年肥後國島原の一揆原おこりて氏鐵彼地にむかひし時氏經も父に玄たかひて向ひ明曆元年二月氏鐵入道常閑うせたりしに遺言によりてその所領をわかちゆつられ四百石みつからの采地に合せて六千四百石○はしめ左門氏鐵致仕せし時其所領十萬石を嫡子左門氏信にゆつり外に間

田の地ありしをおのか老を養ふ料とす氏鐵死にのぞんでその地を分ちて三男淡路守氏經六男三郎四郎氏好に四千石つゝ孫の三五郎氏親に三千石をあたへたるなり万治元年閏十二月大番の頭に也て寛文八年正月職ゆるされ同き十二年十一（二）月十四日（廿三日）右近太夫氏利に家讓り氏利明暦の初め初見し万治元年冬叙爵し元祿元年七月十日致仕して此氏成に傳へたる時にそ此家大名には列りける是は采女正氏定か所領の地をさきあたへ（三千石）氏利か采地の私墾田（千石）をあはせて万石になしたる也氏成おなしき十四年十二月叙爵し享保四年五月三日うせぬ六十一歳子なかりけれは兄の采女正氏定か五男右近氏房を嗣とす氏房ことし家つく從五位下右近將監になる同き十年七月二十八日御所に參りし時水野隼人正忠恒俄に心くるはしくなりさしそへをぬきて毛利主水師就に手おはせたり氏房折よくそこにありけれはこれをおしとゝむ忠恒姻家なれはとて仰せによりてその私第をまもる（くはしき事は忠恒か譜に見へたり）同しき十三年四月朔日大番の頭となり元文二年十一月十二日御奏者の事をうけたまはり延享元年十一月二十三日西城の少老に補せられ淡路守になる御代改りしとき俊明院殿につけられてありしかことし西城につかへ奉る事十五年にして寶暦八年三月十八日病によりて職を辭しあくる年の十月つゐにむなしくなりぬ年五十六その子河内守（のち淡路守）武之寛延二年四月はしめて見へ奉り十二月叙爵し家つくのち寶暦十一年六月大番の頭となり明和七年三月職ゆるされ豐太郎氏養ことし三月父につく安永四年四月二十八日はしめて拜謁し閏十二月從五位下淡路守になり天明五年四月二十八歳にして卒す

其子豐太郎氏興つく（とし七歳）

牧野

源康成

忠成

光成

忠辰　老之介　初忠卿
駿河守從五位下
延寶七年十二月廿八日叙任
享保六年八月廿五日致仕
號成喜
同七年八月六日卒五十八歲
法名大海院朗然成喜日觀

忠成

某　勝三郎　早世

女子二人　共早世

忠壽　源次郎　靱負
實本多隱岐守康度六男
阿波守從五位下
寶永七年十二月六日叙任
享保六年十一月四日改備前守
同廿年十月二日卒四十一歲
法名得雄院本譽祥瑞成慧

某

忠周　政五郎　老之介　後忠執
民部少輔從五位下
享保十八年十二月十八日叙任
延享三年四月四日致仕
安永元年六月廿八日卒五十四歲
法名寛凉院調譽隱風自然

某　鶴千代　早世

女子　安藤對馬守重行室

忠敬　兵部　老之介
實備後守貞通長男
駿河守從五位下
寛保三年十二月廿一日叙任
寛延元年六月廿九日卒廿歳
法名誠諦院起譽常信天然

女子
實忠壽女
忠敬室

女子二人
實共備後守貞通女
牧野半右衛門忠知妻
堀川兵部大輔廣福女

忠利　吉五郎
實備後守貞通八男
駿河守從五位下
寛延元年十二月廿一日叙任
寶暦五年七月廿四日卒廿四歳
法名紹隆院功譽勳成俊雄

女子　早世

女子二人
本多隱岐守康植室
忠周養女

忠寛　新三郎
實備後守貞通十男
駿河守從五位下
寶暦五年十二月十八日叙任
明和二(三)年六月晦日卒三十一歳
法名徳壽院植譽本成義典

女子二人
許嫁伊達武市郎村賢
早世
太田備後守資愛室

忠精　新次郎
備前守從五位下
安永四年閏十二月十一日叙任

忠義　直次郎
有馬兵庫頭氏恕養子

康成　内膳　初武成
内膳正從五位下
明曆三年十二月晦日卒四十一歲
法名馨香院登譽恭安

某

某

女子

康道　新三郎
遠江守從五位下
寛文四年十二月十八日叙任
元祿二年七月三日致仕
號覺翁
享保五年五月廿六日卒七十一歲
法名浩德院冷譽一山覺翁

女子三人
飛彈守忠成室離別
嫁六郷阿波守政信
稻垣安藝守重定室

某　三吉　早世

女子
水野隱岐守重孟室

康澄　新三郎
貞享元年十一月十六日卒十六歲

康重　伊彌吉　大藏
實本庄因幡守宗資五男
周防守從五位下
元祿九年十二月廿二日叙任
享保七年十一月廿八日卒四十六歲
法名眞性院覺譽自然歡翁

康周　大藏（內膳）
內膳正從五位下
享保六年十二月六日叙任
寶曆八年正月八日卒五十三歲
法名眞諦院照譽覺了除雲

廣安　釆女
六角主殿廣豊養子

某　傳治郎　早世

康德　外記

女子二人
柳生備前守俊峯室離別
嫁水野數馬忠之忠之死嫁
大島雲四郎義苗
小笠原左京定政妻

康滿　大助
遠江守從五位下
寬延二年十二月十八日叙任
天明四年十月廿二日致仕

女子
水野出羽守忠友室

道堅　左膳
本庄和泉守通徧養子

女子二人
小堀和泉守政彌室離別
阿部靭負政依妻

明親　豊吉
富田八十郎知直養子

康那　內藏
坐光寺喜兵衛爲忠養子後歸

康陛　豊松
從五位下內膳正
明和六年十二月十八日叙任

女子
松平駿河守信睦室
信睦卒
嫁淺野隼人長政

滿運　新十郎
大井新十郎滿濟養子

女子二人
牧野傳藏成如養女
大島幾之介義珍妻離別

長芳　左近
神保喜內長光養子

康隆　數馬
金森六左衛門可端養子

康儔

女子

成儀　一作儀成
帯刀美濃守従五位下　正保元年十二月廿五日叙任　明暦三年九月廿三日改越中守
万治三年三月五日卒五十五歳　法名要津院壁立純鐵

成長　帯刀
寛文十一年十月十九日有罪收橥地
元祿五年五月十二日死六十一歳

成時　宗右衛門　兵部
初直達
實黒田信濃守直相二男
美濃守従五位下
天和三年十二月四日叙任
貞享四年九月廿七日卒廿五歳
法名功泰院機應郎全

正房　富之丞
細井金左衛門正利養子

康濟　帯刀

女子二人
諏訪鐵之介頼保妻
大屋右京朗矩妻

成貞　兵部　藏人
初成恒
備後守從五位下
寛文十年十二月廿八日叙任
天和元年十二月十一日從四位下
貞享二年十二月廿六日侍從
元祿八年十一月廿九日致仕
寶永六年正月剃髪號大夢
正德二年六月五日卒七十九歳
法名東光院長威虎雪

女子三人
松前八左衛門泰衛妻
永井左兵衛時之妻
筒井左次衛門政勝妻

成春　秀壽丸　式部
實家人大戸半彌吉房嫡男
備前守從五位下
元祿十年十二月十五日叙任
同十四年十二月六日從四位下
寶永四年三月廿六日卒廿六歳
法名心了院本源惠覺

女子二人
永井十郎左衛門貞清妻
成時室
實小谷權兵衛某女
戸田淡路守氏成室

貞通　幸之介
初貞倶
享保四年五月十九日繼成央
越中守從五位下
享保六年十二月十八日叙任
寛保二年六月朔日從四位下侍從改備後守
寛延二年九月十八日卒四十三歳
法名乾德院大元全議

女子　實家人大戸玄蕃正勝女
六郷伊賀守政晴室

成央　七之介　大學
備後守從五位下
正德三年三月七日叙任
享保四年五月十八日卒二十一歳
無嗣叔父貞通紹封
法名靈光院不昧方徹

成福　新次郎
享保四年四月十七日卒十五歳

某　長三郎　早世

女子　早世

某　大藏　早世

忠敬　兵部
民部少輔忠周養子

貞降　富五郎
寛保元年九月廿一日早世

貞長　道五郎
越中守從五位下
延享二年十月十八日叙任
安永六年九月十五日從四位下
天明元年閏五月十一日侍從

女子四人
奥平大膳大夫昌敦室
松平左兵衞督直純室
本多中務大輔出敝室
松浦織部正致室

某　幸三郎　早世

女子　早世

女子二人
稻葉能登守弘通室
秋元但馬守永朝室

貞喜　幸之介
兵部少輔從五位下
安永三年十二月十八日叙任

某　直三郎　早世

某　幾五郎　早世

忠善　榮次郎
西尾隱岐守忠移養子

貞休　熊五郎

女子二人
許嫁本多隱岐守庸光
許嫁間部若狹守詮照

女子

貞爲　幸之介

某　政之丞　早世

女子
稻葉能登守泰道室

某　幾之介　早世

某　市太郎　早世

忠利　吉五郎
駿河守忠敬養子

忠丘　新之丞　主膳
大久保主膳正忠貞養子

忠寛　新三郎
駿河守廣利養子

某　長吉　早世

貞恒　主水

忠義　豐三郎
松平與次右衛門忠英養子

女子二人
一人早世
遠江守康滿室

通英　新藏

通亮　佐四郎　早世

女子三人
一人早世
菅沼織部正定庸妻
駿河守忠寛養女

光胖　萬藏　七內
戸田肥前守政友養子

忠勸　專藏　庄九郎
松平對馬守忠鄉養子

女子二人
一人早世
駿河守忠寛養女

牧野

○駿河守源忠辰は飛驒守忠成か嫡男也寛文十年二月八日六歳にして初めて見參し延寶二年七月父か遺領を賜はり（越後國長岡の城七萬四千石餘）同しき七年叙爵す天和三年九月十一日雁の間祇候の衆となりて元祿二年三月二十二日より奥に候すおなしき八年いさゝか闕怠の事有しかは奥にまいる事をとゝめられ享保六年八月五十七歳にして致仕し明る七年の秋うせぬその子阿波守忠壽實は本多隱岐守藤原康度か六男なりしをこれよりさき子として養ふ忠壽は寶永七年七月朔日公に見へたてまつり從五位下阿波守に叙任す家繼く後享保八年九月より御奏者の事をうけたまはりおなしき十四年にいたりしにいたはるところありしかは其事を辭し申ておなしき二十年十月二日卒す四十一歳其子式部少輔忠周家を繼忠周これよりさき享保十八年十一月十五日はしめてまみへ奉りその冬叙爵せしなりことし十一月二十五日父の遺領たまひ延享三年にいたりて致仕す（忠周致仕の後に廿七年を經て安永元年五十四歳にて卒す）はしめ忠周子なかりしかは一族備後守貞通か長子兵部忠敬を妹にあはせて嗣とす忠敬寛保元年九月朔日はしめて謁見しおなしき三年冬從五位下駿河守になりことし延享三年四月四日父の家をつく寛延元年の夏身わつらひて心地死ぬへう覺えけれは弟吉五郎忠利を子として家つかせむ事を申置て終にうせぬ二十歳とそきこへし忠利は備後守貞通か八男なりことし八月晦日忠敬か遺領賜はり叙爵して駿河守に任し寶暦五年卒す（七月二十四日二十四歳）これも子なかりけれはその弟新三郎忠寛につかせらる忠寛は忠道か十男なりことし從五位下の駿河守になりて明和三(二)年六月三十一歳にて卒す嫡男新次郎忠精七歳にて父につき安永元年五月十五日はしめて見えたてまつりおなしき四年の冬叙爵して備前守に任し天明元年四月二十一日御奏者の事をうけたまはる

○内膳正源康成（初は内膳武成）駿河守忠成か二男寛永十一年五月二十一日忠成か所領の内をわかち讓られ（一萬石）明暦三年九月越後國與板にうつり（家に傳ふるところかくのことし忠成か譜に越後國三島郡のうち新田一萬石を分かちあたふといふ寛文四年四月五日康成か子新三郎康道に賜はる所領の御書には蒲原郡十七ヶ村三島郡十三ヶ村合せて一萬石とのせられけりこれに據れは三島郡のみにはあらす又與板村といふは三島郡の内にありしからははしめより與板をも領せしにや明暦三年にうつりしといふは居所をかまへしといふなるへし）このとし卒す（十二月晦日四十一歳）○

こゝにいふ一萬石の加恩の地を合せて一萬三千石を知行すといへるは成貞父成儀か遺領を

康成か初見叙爵の年月詳ならす　その子新三郎康道明る萬治元年二月二十七日父か遺領を賜はり寛文四年十二月叙爵して遠江守に任し元祿二年七月致仕して覺翁とあらため享保五年五月二十六日七十一歳にしてうせぬ其子新三郎康澄世を早うしけれは本庄因幡守藤原宗資か五男大藏康重を嗣とす康重元祿元年嗣となり其としはしめて見參して雁の間の衆につらなり家繼く後元祿九年十二月叙爵して周防守に任すおなしき十九年信濃國に小諸の城賜はりて地をもくはへられたり 五千石 このとし十月雁の間の詰衆となりて寶永二年十月五日より奥に候したりしか明のとし五月奥詰を免され享保七年十一月二十八日四十六歳にして卒す長子內膳(大藏)正康周享保五年十一月九日初めて拜謁し享保六年叙爵して父卒せし年家繼く寶曆八年正月八日卒す 五十三歳 其子大助康滿寛延元年十二月朔日初見おなしき二年從五位下に叙し遠江守に任し家繼く後同十二年十二月御奏者の役をうけたまはり天明四年十月致仕し 時に五十三歳 その子內膳正康陛つく 三十五歳 康陛は明曆五年十月十五日初めて見へ奉る同六年叙爵せり

○侍從兼備後守源成貞は越中守成儀か次男也 寛永諸家譜に成儀を儀武成貞を成次としろす 父成儀は右馬允康成か三男にて寛永五年御書院の番衆になりまた御小性組にうつる おなしき十八年組頭 家に傳ふる所は大相國家の御時御小性組の衆にめしくはへられて采地五百石をたまふといふ になりて正保元年十二月十六日御書院の番頭にすゝみ五位賜はりて美濃守に任す 後に越中守にあらたむ 慶安元年三月十四日采地あまた加へ賜はり 四千五百石を加へ合せて五千石 德松君の御傅になさるその子二人あり兄は帶刀成長弟はこの成貞にて兵部と申せしなり万治三年三月五日成儀五十五歳にてうせけれは七月三日その遺領をわかちて帶刀成長と成貞にたまはりぬ 成長に三千石成貞に二千石○帶刀成長は寄合衆にありしか寛文十一年十月十九日罪ありて所帶を改易せらる 成貞これより右馬頭殿 すなはち德松殿の事 の眤近衆となりあくる寛文元年右馬頭殿館林を賜はらせたまひし時地くはへられおなしき八年には公の見參をもゆるされて十年三月二十一日藩邸の老となり所領まし加へられ 三千石 その冬叙爵して備後守に任し延寶八年館林殿大統をうけさせ給ひしかはこれより次第に出頭して恩寵かくへつに給はり十月には所領の地あまた加へ賜はりて 一萬石を加へ合せて一萬三千石 万石の籍に列なる明の年十二月十一日職すゝめられ 御側御用人と申せしなり 從下の四位にのほる年かへりて正月二十一日又地く

わかちし時二千石の采地を知りたりそれに寛文十年三月にたまひし三千石の加恩の地を合すれは五千石の所帯なり又此時一萬石の恩賜を加ふれは一萬五千石なりしかれは寛文十年の恩賜千石にて三千石にはあらさるなるへしさなくては此後延寶九年正月おなしき十年九月元祿元年四月三度に一萬石つゝの加恩の地と寶永二年五月成貞か嗣の成吉に賜ひし七千

はゝり二萬石その明の年九月にも又所領まし加へられて二萬石下總國關宿の城をたまふ成貞藩邸よりの耆老としてさこそ賴しく思召人には有けめとあらはれたる事きこへすして僅か四年か程にかくまて登庸せられし事有かたき恩遇とこそ申へけれ貞享二年十二月には侍從にすゝみて宿老の座なみに定らる元祿元年私第に御成の事仰下されていまし所を經營し四月二十一日にそ常憲院殿はしめてわたらせ給ひけるむかし大猷院殿井伊酒井か許又堀田加賀守か家にならせ給ひしのちはいまたうけたまはらぬ大儀なれはあるしもことに引つくろいたる御傳もうけたまはりしにや太刀馬等のさゝけものはさらなり又かつけもの數數なりとうちにも御土器御前に參りて成貞に賜はりしとき所領の地二万石を引出ものにそ賜はりしこののち年ことにわたらせ給はすといふ事なくまた御臺所三丸殿五丸殿姫君の御方にいらせ給ふ事いくたひといふ事をしらすされは成貞か妻も奧方に參ることを許されて時につけたる賜りものなとおほかりけり成貞かく時めきたる身となれはいつしか齡ふりてけれはいたはる所おほくて元祿六年の春の頃より出仕

心にまかせさりしかは折にふれて致仕の事申してけれともゆるさせたまはすしかれともとかくなけき申けれはおなしき八年十一月廿九日心にまかすへきよし仰下されて養子式部成春に所領をゆつるこの後も懇にとはせたまふ事たえすある時は物たまはりあるときは御所にめして饗寵を給ふ事しは〳〵なり寶永六年常憲院殿かくれさせたまひしかはそのかなしみにたへすやありけむ忽入道して大夢と號しけるか正德二年六月五日身罷りぬ年七十九にてそありける成貞はしめ子なきによりて黒田信濃守直相か次男宗右衛門直經を養ふへきよし仰下されて兵部成時と名のらせやかて從五位下の美濃守になりしか貞享四年うせけれは家人大戸半彌か子式部成春を嗣とすこれよりさきうち〳〵より望申てゆるされしかは牧野式部と名のらせしといふ元祿六年四月十八日私第にならせたまひし時こふまゝに成春やしなふへき旨仰下されて御手つから御刀備前茂景を賜ふ同き八年成貞か致仕の日家繼く雁の間の詰衆に加へられ同十年正月十五日叙爵して備前守に任す同き十四年從四位下にのほり寶永二年十月晦日領地ましくはへられて七千石合せて八萬石を領す三河國吉田の城にうつり久世大和守重之にかはる同き

石の地を合せて八萬石を知ると記せし所に合せ不審なり

四年三月二十六歳にして卒すその子七之助成央父に繼く大學とあらたむ正德二年七月十二日日向國延岡の城にうつさる 三浦壹岐守明敬にかはる 同しき三年三月七日叙爵して備後守に任す享保四年五月十六日二十一歳にして世を早うす子なかりしかは大夢入道か老後にもうけたる子幸之助貞倶をして家つかせらるおなしき六年十二月叙爵して越中守に任し貞通とあらため名のる十九年六月二十八日御奏者の衆となり其年五月寺社奉行を兼ぬ寛保二年六月朔日京都の所司代に補せられ從四位下の侍從に叙し備後守にあらたむ延享四年三月所領の地を轉し常陸國笠間の城にうつさる 内藤備後守政樹にかはる 寛延二年九月京に在て卒す四十三歳貞通男女の子とも三十人あり嫡子兵部忠敬は宗家民部少輔忠周か家をつく次男富五郎貞隆は世を早うす三男道五郎貞長をよつきとしその餘はみな他にやしなはれぬ貞長延享二年八月十一日はしめて謁見し十一月十八日叙爵して越中守に任す父におくれし年の十一月家つきて寶暦五年六月二十三日御奏者の事を奉り明和六年八月二十六日寺社の奉行を兼安永六年九月十五日大坂の城代になりて從下の四位にのほり天明元年閏五月十一日に京都の所司代に轉して侍從に任す同き四年五月に宿老の職に補せらる 時に五十四歳なり 其子幸之助貞喜安永三年十二月朔日はじめて見え奉り十二月十八日叙爵して兵部少輔に任す

牧野

源親成

富成　大吉　主殿
實内匠頭信成八男
因幡守從五位下
正保二年四月廿一日叙任
元祿六年八月六日卒六十歲
法名覺樹院心譽清涼芳山

女子
建部丹後守政長室政長卒
嫁土岐伊豫守賴殷

英成　長太郎
實村越伊豫守直成長男
佐渡守從五位下
貞享二年十二月廿八日叙任
後改讚岐守因幡守河内守
享保九年十二月十五日從四位下侍從
元文二年十月二日致仕
同年十月四日號曉山
寛保元年九月十九日卒七十一歲
法名德樹院一譽曉覺宗山

女子一人
實建部丹波守政長女
九鬼大隅守隆常室
實村越伊豫守直成女
遠藤右衞門佐常春室
常春卒後嫁久永内記信豐

女子
酒井下野守忠吉室

良成　主殿　早世

明成　直次郎　兵部
豐前守從五位下
享保三年十二月廿八日叙任
後改因幡守
寛延三年十月七日卒四十七歲
法名源照院光譽郭然幸道

知成　修理

女子
藤堂左京大夫和忠室

秀成　四郎五郎　左京
中坊萬五郎秀豐養子

孝成　牧野半三郎勝成養子

立成　長吉　茂介
村越織部昭成養子

德成　牧太　平三郎
孝成養子

女子
南部主税信傳室

資成　求五郎　內匠
德成養子

則成　龜次郎
讃岐守從五位下
明和七年十二月十六日叙任
安永二年八月七日依病籠居

女子
一柳兵部少輔賴恭室
離別嫁松平求馬正愛

信彌　五郎吉　主殿
市部主税政庸養子

女子
細川玄蕃頭興虎室

長成　主計

女子　早世

女子二人
有馬出羽守純珍養女
小濱伊勢守壽隆妻

公成　橘五郎　大學
後直賢
高力若狹守長行養子

惟成　直次郎
豐前守從五位下
寛保二年十二月十八日叙任
天明三年七月廿三日卒五十六歳
法名嶺松院信響操貞忠山

女子二人
松平主膳正近房妻
一人早世

韶成　内記

武成　直五郎
安永四年正月十七日卒廿三歳

女子二人
有馬左京則明妻
川口久介恒久妻

福成　鐵五郎
山城守從五位下
天明元年十二月十六日叙任
同三年五月十日卒廿三歳

滿成　鐵三郎

宣成　虎次郎
從五位下
天明三年十二月廿八日叙任

尙成　安次郎

尹成　民三郎

女子
實牧野丹後守美成女
松平信濃守繁森妻

女子

某　直太郎

女子

女子二人
牧野丹後守美成妻
前田隱岐守淸長妻

房成 長太郎 茂介
村越大七郎與成養子

牧野

○因幡守源富成は佐渡守親成か嗣實は内匠頭信成か八男也寛永の頃御小性に召くはへられて正保二年に叙爵して因幡守に任す兄の佐渡守親成子なかりしかは明暦元年正月十九日公に申てよつきとす延寶元年九月二十九日家つく（丹後國田邊の城三萬五千石）天和元年八月十六日御奏者の事を奉り元祿六年八月六十六歳にして卒す富成も子なかりけれは弟の村越伊豫守直成か長子長太郎英成を嗣子とす英成天和元年公に見えたてまつり貞享二年の冬叙爵して佐渡守に任し元祿五年十月廿九日奥詰衆に加へられしか明の年正月二十八日ゆるされたり此とし十月二日家つく正德四年九月六日御奏者の事を奉り享保三年八月四日寺社奉行をかぬおなしき九年十二月十五日京都の所司代に補せられ從四位下の侍從にすゝみおなしき十九年三月御所に參りしかいたはる所ありてしかはそのよし申て六月六日職ゆるされかくて元文二年十月二日その子因幡守明成に家ゆつりをのれは曉寛と改めて田邊に歸り寛保元年九月七十一歳にして終りぬ因幡守明成は英成か二男なりしか兄主殿良成世を早うせしかは嗣となり享保二年四月二十一日はしめて見參し明の年十二月從下の五位して豊前守になり（後因幡守）父に繼く寛延三年十月卒す四十七歳嫡子豊前守惟成これよりさき寛保元年四月十三日初見同き二年の冬叙爵し家つく後明和五年七月朔日御奏者の衆となり安永六年九月十五日寺社奉行の職を兼天明三年七月卒す年五十六長子讃岐守則成は病者なり二男直五郎武成は世を早うし三男山城守福成も先ちてうせけれは五男虎次郎宣成を嗣とす宣成ことし九月十六日家をつきて十二月從五位下佐渡守に叙任す（時に廿歳）

松平 松井

源康映

―某 萬千代丸 早世

―女子
脇坂中務少輔安致室離別

―某 七丸 早世

―康官 松千代丸 初康長 康賛 康程
主計頭従五位下
寛文十一年十二月廿八日叙任
延寶三年二月廿五日改周防守
寶永三年正月廿七日叙任
改彈正少弼號優山
享保十二年四月九日卒七十一歳
法名泰嶺院相譽寂道系閑

―康員(貞) 仙次郎 源之丞 初康將(轉) 康倫
釆女正従五位下
元祿六年十二月十八日叙任
後改和泉守備中守周防守
寶永六年九月十八日致仕
改伊勢守
正徳三年四月廿一日卒三十五歳
法名泰巖院安譽智性春道

―康房 次郎 内記
實康官二男
信濃守従五位下
寶永三年十二月十九日叙任
同六年二月五日卒廿四歳

―女子
康豊養女

―康豊 傳十郎 式部 丹下
實松平金七郎康郷長男
周防守従五位下
寶永六年十二月十八日叙任
享保廿年十二月五日卒五十一歳
法名盛徳院政譽興仁仁荐加

康明　主水
貞享二年四月廿四日卒廿四歳無嗣家籠

康致　一學
村瀨伊左衞門重矩養子

女子二人
實康房女
一人早世
實松平金七郎康卿女
松平內匠頭康詮室

女子二人
內藤大和守賴由室離別
一人早世

康房　次郎四郎

女子
許嫁溝口伯耆守重元早世

女子三人　共早世

某　辨之介　早世

康勝　房次郎　早世

康福 彌三郎 圖之助
周防守從五位下
元文元年十二月十六日叙任
寶曆十年八月十九日從四位下
同十二年十二月廿一日侍從

康定 吉五郎
實前田出羽守房長三男
初松平彌左衛門康瑞養子
左京亮從五位下

女子四人
康定室
田沼大和守意知室
松平河内守乘保室
許嫁石川吟次郎總純早世

某 早世

某 早世

某 圖之助

女子

女子

松平

松井

○周防守源康官は藤の周防守康映か三男也兄とも世を早うせしかはよつきとなりて寛文五年の六月十四日はしめてまみえ奉りおなしき十一年に叙爵して主計頭になる延寶三年二月二十五日父に繼て（石見國濱田の城五萬石餘）周防守になり弟主水康明に所領をわかつ（私墾田二千石○康明貞享二年にうせて嗣なかりけれは家絶たり）寛永二年正月二十七日致仕して彈正少弼にあらたむ（後優山と稱す）享保十二年四月九日七十一歳にて卒す嫡子備中守康貞（員）元祿二年三月朔日初めて見參し同しき六年の冬從五位下采女正に叙任し（和泉守備中守にあらたむ）寶永二年家ついてのち（因幡守になる）其身いたはる所おほかりしかはことし七月弟內記康房を嗣とし九月公にまみえまゐらせやかておのか代りし所領に下らせ明の年信濃守になりたりしか寶永六年の春世を早うしけれはことし八月支族松平金七郎康郷か子丹下康豐をやしなひ九月身のいとま申て伊勢守にあらため正德三年四月にうせぬ三十五歳康豐家つく從五位下周防守になり享保二十年の十二月五日に年五十一にして卒す其子康福圖之助と申せしなりあくる元文元年二月八日父につき十二月叙爵して周防守になる寛延二年十二月十八日御奏者の衆にくはへられ寶暦九年正月十五日寺社の事をかぬこの日下總國古河の城にうつされたり（本多中務大輔忠政にかはる○濱田の城はそのかみおきておかせたまふ由緒ありて同國津和野の龜井とかはり／＼所領におかしめらる今康福寺社奉行となりてはこゝにのみ候するゆへ所領加へ賜はりし也）八月大坂の城代になり從下の四位にのほりおなしき月ふたゝひ所領の地うつされて三河國岡崎の城をたまふ（水野和泉守忠恒にかはる）十二月宿老の職にうつり若君（孝恭院殿の御事）につけらるこの時侍從にすゝみ明の年十二月より連署の事をも兼て又の年五月には本城の衆になり石見國は年ころの本領なりしにより內々望み申せしかは明和六年十一月十八日濱田の城に返し封せらる（本多平八郎忠肅にかはる）養子左京亮康定して龜井とかはる／＼所領に參るへきよし仰下されぬ康福鹽梅の職にある事年つもりしかは天明五年正月二十九日所領ましくはへらる（一萬石）左京亮康定實は前田出羽守房長か子にて康福か支族松平彌助康滿か嗣となり家つきてありしか康福にやしなはる（康定か廩米は收公せらる）明和五年十二月初見叙爵して同き七年濱田にゆき夫より年をへたてゝいとまたまふ事父康福におなし

三宅

源康盛

康勝 隼人 一有正字
能登守從五位下
寬文二年十二月廿七日叙任
延寶七年八月廿三日改土佐守
貞享四年八月九日卒六十歳
法名海巖院源徹高岡

女子二人
伊藤主膳正祐豐室
內藤三之介忠吉室

女子
太田隱岐守資良室

康雄 六郎太郎總左衛門 初康歡
出羽守從五位下
延寶二年十二月廿七日叙任
元祿九年十一月十九日改備前守
享保十一年十月六日卒六十八歳
法名道巖院源光俊明

某 隼人 早世

女子 早世

康德 勝之介 惣右衛門 初康利
能登守從五位下
元祿十年二月十八日叙任
享保十一年十二月五日改備後守
延享三年八月九日致仕
寶暦三年十二月三日卒七十一歳
法名泰巖院源恭良性

近貞 兵部
松平相摸守近禎養子

女子 早世

康高　藤太郎　惣右衛門
備前守從五位下
享保十一年十二月十六日叙任
寶曆五年八月廿八日致仕
剃髮號了明

貞高　大膳
松平備後守信綿養子

德久　左京　早世

女子
堀長門守直寛室

某　藤太郎
寛保元年七月廿五日卒

康壽　孫次郎
寶曆四年閏二月十六日卒

康之　瀧三郎　帶刀　惣右衛門
實松平對馬守近貞二男
出羽守從五位下
寶曆五年十二月十八日叙任
安永九年十一月廿九日致仕
○後改備後守

女子四人
康之室
中島主水勝明妻離別
一人早世
大久保藤右衛門忠直室

某　斧一郎
明和四年二月三日卒

女子三人
許嫁松平備中守近言早世
三宅頎太郎康哉妻
大森勇三郎頼猶妻

某　市五郎　早世

康武　久熊　惣右衛門
備前守從五位下
安永九年十二月廿八日叙任
天明五年九月廿一日卒廿三歲
法名節巖院源譽義堅

康邦　鎌吉

某　政八郎

高友　圖書

道經　帶刀

女子
榊原甲斐守長艮養女

康邦 鎌吉 帶刀
實康之四男
從五位下能登守
天明五年十二月十八日叙任

女子

三宅

○土佐守藤原康勝は大膳亮康盛の嫡子明暦四年二月二十七日遺領賜はり（三州加茂郡擧母常州新沼郡等一萬石餘）寛文二年叙爵して能登守に任し（のち土佐守にあらたむ）同しき四年五月九日田原の城賜はりてうつる貞享四年大坂城の守りにかはりかの地に在て卒す（六十歳）嫡子備前守康雄は惣右衛門と申せし時寛文八年十月十一日はしめて見參し延寶二年十二月従五位下出羽守に叙任し父卒せし年十月十一日遺領をたまひ元祿九年十月奥詰に加へらるまた御扈従になり（備前守に改む）あくる十年近侍の奉公ゆりて鴈の間の詰衆となり同しき十二年御奏者の事を奉り寶永元年十月寺社奉行をかぬ同七年九月病により職を辭し享保十一年十月六日所領の地に在て卒す年六十八嫡子能登守康德つく康德元祿八年五月朔日始てまみえ奉り同十年の冬叙爵し（後備後守に改む）延享二年八月九日その子備前守康高に家譲り所領にかへり老やしなふて七十一歳にて失せぬ（寶暦三年十二月三日）康高は享保十年十一月二十八日始て拜謁し同十一年の冬叙爵し家つくのち寶暦五年八月致仕入道して了閑とあらたむ（時に四十六歳）其子二人ともおさなくて先たちけれは伯父松平對馬守近貞（康德か弟なり）か二男帶刀康之を女にあはせて家つかす康之其年初見叙爵して出羽守に任し父か致仕の日家つきて安永九年十一月その子惣右衛門康武に家ゆつり（康之年五十二）康武ことし五月十五日初見十一月家つく十二月従五位下備前守に叙任し天明五年九月二十三歳にてうせぬ弟帶刀康邦兄か子となりてことし十二月十二日その遺領を賜ひ十二月叙爵して能登守に任す（時に廿歳）

土岐

源頼行

女子　田中大隅守定格妻

頼長　左京亮從五位下　萬治三年十二月廿八日叙任後依病籠居
元祿七年五月十日卒　法名高林院恭亮紹安

頼殷　兵部　初頼隆
丹後守從五位下
寛文七年十二月廿八日叙任
後改伊豫守
元祿十四年十月廿八日從四位下
正德三年七月六日致仕
享保七年九月廿二日卒八十一歲
法名官成院俊巖紹英

頼稔　内匠　兵部　初頼俊
丹後守從五位下
寶永六年三月七日叙任
享保十五年七月十一日從四位下
同十九年六月六日侍從
延享元年九月十二日卒五十歲
法名乾光院直巖道如

頼淵　儀八郎　兵部　初頼直
伊豫守從五位下
享保十八年十二月十八日
寶曆五年三月廿五日卒三十七歲
法名端巖院淵侯義絕

女子　小堀和泉守政恒室

頼鄕　帶刀　大和守
今土岐主税頼香祖

定興　彥十郎　早世

頼賢　右近　早世

女子二人

女子

某　庄三郎　早世

某　藤丸　早世

女子

某　熊丸　早世

某　頼母　早世

女子二人

女子

女子二人　松平周防守康福室　加藤遠江守泰溫室

定則　孫四郎　早世

定經　千之介　頼母

女子二人　木下大和守俊泰室　織田丹後守輔宣室

頼相　藤次郎　明和元年八月晦日卒

女子

女子　井上河内守正定室

定經　千之介　賴母
實賴稔五男
美濃守從五位下
寶曆五年十二月十一日叙任
天明元年閏五月十一日從四位下
同二年八月廿日卒五十五歲
法名乾隆院元德道亨

女子二人

定富　三之丞　老之助
實定經五男

賴寛　千之介
伊豫守從五位下
安永九年十二月十八日叙任
天明二年十一月十九日卒十九歲
法名景雲院龍川義登

女子

定吉　正吉

某　稻五郎　早世

女子四人

定富　三之丞

某　榮五郎　早世

定吉　正吉
實定經三男
美濃守從五位下
天明三年十二月十八日叙任
同六年九月廿日卒廿一歲
法名靈德院心嶽宗印

定峰　英之介

定考　久馬

女子

土岐

○伊豫守源頼殷は山城守頼行か第二の子にして嚴有院殿に仕へ奉り御扈從となり寛文七年の冬叙爵し同十二年四月九日御扈從組の頭になされて御扈從をもかねたりしか兄の左京亮頼長病者なりけれは延寶六年五月父か嗣となりて番頭および御小姓をゆるされ八月十六日父致仕して家をつく 出羽國上山の城二萬五千石○頼行事は前編にみへたり家ゆつりて後貞享元年七十七歳にてうせぬ 元祿三年十二月御奏者の事うけたまはり明れは四年正月二十一日大坂の城代に補せられ所領をまし加へられて地を攝津河内越前等の内に移したまふ 一萬石を加へ合せて三萬五千石 おなしき十四年九月江戸にまいりし時從下の四位にのほり階をすゝめられて京都所司代に準せらるかくて年すてに七旬にあまりいたはる所さへ多かりけれは正德二年の春致仕の事申たりしに皆川山城守を御使として望のことく職ゆるされ駿河國田中の城をは賜はりぬあけの年家讓りて所領の地にかへり享保七年八十一歳にして卒すその子丹後守頼稔はしめ兵部と申せし時寛永五年四月十五日はしめてまみへたてまつりおなしき六年三月七日叙爵して正德三年七月六日父かゆつりをうけて家をつく享保六年七月弟帶刀頼郷に廩米をわかつ 三千俵○頼郷正德二年見へ奉り此とき寄合衆となる おなしき八年三月二十五日御奏者の事を奉はり同き十三年七月寺社奉行をかぬ十五年七月十一日大坂の城代となり從四位下に叙す十九年京都の所司代に遷りて侍從に任す 頼稔所司たりしか治務のいみしかりしはさらなり和歌の道にも心をよせていとまあるおり／＼は公家の人々にも參會してふるき草紙物語なとにある在五中將の事かたり出てさるしとけなき事をさへいましむる人もあらさりし世のさまをおもふになにゝつけても今の世こそものむつかしけれなときこへけれは頼稔うちわらひて業平はさしも王孫たりし身のかく境垣にのほり復周を望むふるまひせられしこそ淺ましけれ其よにはいかてさるいたつらをもいましむることなくて候ひけん丹後守かくて候はんにはさる人もありなんにはいかなるやんことなき方にもおはせ手のものとともしてとりこめて其罪に申定むるにそこそ候へといひけれはあなおそろしの所司代にておはすとそ人々ひそみあいにけるとそ 寛保二年六月朔日連署の衆に列りて上野國沼田の地賜はりて城きつく延享元年九月病にふしけれは職ととめん事を申せしかともゆるされすして同き十二日にそ卒しける享年五十歳とそ聞えしその子伊豫守頼煕はしめは兵部頼直享保十五年八月初見おなしき十八年叙爵す父か卒せし年の十月家をつき寶曆二年御奏者の衆になり同き五年三月卒す三十七歳男子なかりしかは弟頼母定經を子とす定經は丹後守頼稔か五男なりことし五月十八日家をつき十二月叙爵して美

濃守に任し明和元年二月十五日御奏者の事をうけたまはり六月二十一日寺社奉行をかぬ天明元年閏五月大坂の城代となりて四位にのほりことし大坂にゆきし明る年の八月五十五歳にてかの地にうせぬその子信濃守頼寛十月十六日遺領を賜はりて十一月早世す男子なかりしかは終に臨て弟正吉定吉を養ひて子とす定吉ことし十二月家つきて明の年從五位下美濃守に任しおなしき六年九月二十日これも世を早うす時に二十一歳その弟老之助定富つく時に十歳

高木

源正盛

正豐 勘解由 初正長
肥前守從五位下
延寶四年十二月廿六日叙任
天和元年五月十二日卒廿歳
法名峰寧院堅譽意仙

正陳 大學
實主水正正盛二男
主水正從五位下
元祿二年十二月廿七日叙任
寬保元年二月五日卒七十七歳
法名元亨院乾譽學黄性久

女子
脇坂市正安利室

正陳 大學

正吉 主水
板倉筑後守重直養子

正府 大學
播磨守從五位下
正德元年六月十一日叙任
享保四年十月五日卒廿四歳
法名誠審院豪譽賢英

女子
谷出羽守衛衡室

正幸　靱負
板倉出雲守重泰養子

正恒　鐵之介
實板倉筑前守重行二男
若狹守從五位下
享保十五年十二月十八日叙任
寬保三年六月四日卒三十一歲
法名源法院圓譽知覺道應

女子一人
永井大藏尙堯妻
服部中保弘妻

女子
實脇坂市正安村女
戸田備後守重澄室

正剛　勇次郎
實松平玄蕃頭忠福二男

女子
正剛室

正弼　熊次郎　主水
主水正從五位下
寶曆七年十二月十八日叙任
安永九年九月廿七日卒四十歲
法名奉了院賢譽見然覺翁

正直　元之介
實酒井遠江守忠興四男
主水正從五位下
安永九年十二月十八日叙任
天明元年五月廿六日卒廿六歲
法名圓淨院英譽義光亮純

女子
正直室

高木

○肥前守源正豐は主水正正盛か嫡男也寛文十年四月十八日父か遺領をたまひ（河内國丹南一萬石）延寶四年叙爵して天和元年卒す（五月十二日二十四歳）男子なかりけれは舍弟正陳を子として家つかす正陳元祿二年五月十四日大番の頭となり從五位下主水正に任し正德元年正月十一日御奏者の事をうけたまはる元文元年十月十五日老を告く職を辭しつるかゆるしなくて寛保元年二月五日七十七歳にて卒す嫡子播磨守正府先立てうせぬ二男靱負正幸は板倉出雲守重泰か嗣となりしかは板倉筑後守重行か次男鐵之助正恒を養て家つかす正恒享保十三年二月二十八日はしめて見參し同き十五年叙爵して若狹守になり寛保三年六月四日卒す年三十一嫡子熊次郎正弼家つく寶暦七年三月朔日はしめて拜謁し從五位下主水正に任し明和元年九月十五日大番の頭となり安永九年九月二十七日歳四十にして卒す男子なかりけれは酒井遠江守忠興か四男元之助正直にをのか女あはせて子とす正直これよりさき安永九年十二月二十一日はしめて拜謁しことし十一月遺領賜はり從五位下主水正に叙任す明の年五月二十六歳にして世を早うしこれも子なかりしかは松平玄蕃頭忠福か二男勇次郎正剛を嗣とす正剛六月二十一日その遺領をたまふ（時に九歳）

藩翰譜續編卷之五上

●酒井

雅樂頭忠清　　縫殿頭忠交カタ

下野守忠寛ヒロ　　附日向守忠能

修理大夫忠直　　左京亮忠稠

大和守忠國

●土井

周防守利益　　兵庫頭利長

能登守利房

●阿部

備中守正邦　　伊豫守正春

播磨守正能

●靑山

和泉守忠雄　　大膳亮幸利

酒井

源正親

重忠

忠世

忠行

忠清　熊之助　與四郎　河内守從五位下　寛永十五年十二月十六日叙任　同十八年九月朔日從四位下　同廿年七月十六日侍從　慶安四年十月十五日左近衛權少將雅樂頭　天和元年二月廿七日致仕　同年五月十九日卒五十八歲　法名天昌院長月源成

某　萬千代　實忠清四男　天和元年十二月十日配流武藏國河越　貞享五年五月廿七日死十四歲

忠能　萬千代　日向守從五位下　寛永十八年十二月晦日叙任　天和元年十二月十日配流近江國彥根　元祿三年四月十九日赦　寶永二年五月廿二日卒七十八歲　今酒井八十之丞忠善祖

忠佳　玄蕃　日向守　初忠紀　忠周　實酒井下總守忠英二男

女子　藤堂和泉守高久室

忠擧　與四郎　初忠明
河内守從五位下
寛文元年十二月廿七日叙任
同五年十二月廿七日從四位下
同十年十二月廿九日侍從
元祿十一年二月十八日改雅樂頭
寶永二年二月十五日左近衞權少將
同四年十一月七日致仕稱勘解由
享保五年十一月十三日卒七十三歳
法名成林院諄亘源信

某　早世

女子六人
二人早世
松平讃岐守賴常室
水野美作守勝種室
中川因幡守久通室
加藤遠江守泰恒室

忠相　與四郎　初忠匡　忠貞
內匠頭從五位下
天和三年十二月四日叙任
元祿十四年十二月十八日從四位下
寶永四年十一月十日改雅樂頭
同五年正月十五日卒四十二歳
法名永昌院光運源穆

女子三人
京極備中守高豐室
二人早世

某　與十郎　早世

某　金次郎　早世

某　元右衞門　早世

女子二人　松平甲斐守吉里室
一人早世

女子

親愛　熊之助　與四郎　初忠貞
雅樂頭從五位下
寶永五年十二月十八日叙任
同六年十二月十八日從四位下
享保五年四月十三日致仕
同十八年三月晦日卒四十歳
法名大乘院柏標源樹

女子　早世

某　辰之助　早世

某　團之助　早世

某　辨之助　早世

某　彦五郎　早世

女子一人
一人早世
實京極備中守高豐女
松平伊豆守信稅室

親本　外記　與四郎
初忠虎　忠丘
實飛驒守忠菊嫡子
阿波守從五位下
享保四年十二月十八日叙任
同六年十二月十八日從四位下
同月廿三日改雅樂頭
同十三年二月廿一日侍從
同十六年九月四日卒廿七歲
法名豪雲院明應源光

忠恭　直之助　刑部
初忠知
實忠菊四男
雅樂頭從五位下
享保十六年十二月廿三日叙任
同十七年十二月十六日從四位下
延享元年五月朔日侍從
寶曆十二年十二月廿八日左近衛權少將
安永元年七月十三日卒六十三歲
法名古岳院忠峯源頤

女子　風早中納言公雄卿室

某　濶次　早世

忠得　徳太郎　河内守従四位下　寶暦二年十二月十八日叙任
同五年二月十九日卒十八歳　法名後素院認了源得

忠宜　二郎四郎　阿波守従四位下　寶暦五年十二月十八日叙任
同十一年七月二日卒三十二歳　法名承穆院義道源空

忠仰　直之助　初忠望
備前守従五位下
寛延二年十二月十八日叙任
寶暦十一年十二月十八日従四位下
明和四年八月廿日卒三十三歳
法名護徳院雲龍源仰

女子
松平内藏頭治政室

忠温　三郎助
下野守忠告養子

女子四人
井伊掃部頭直禔室
土井能登守利貞室
二人早世

忠以　直之助　徳太郎
従四位下河内守
明和六年十二月十八日叙任
安永元年九月六日改雅樂頭
同九年四月二日侍従

女子二人
戸澤主計頭正良室
一人早世

忠因　前次　榮八

某　乙吉　早世

忠道　徳太郎

以翼　直之助

以寧　龜之助

女子　早世
實下野守忠告女

忠啓　沖五郎
酒井下總守忠雄養子

某　六藏　早世

女子　早世

某　登　早世

女子二人
播磨守忠節室
一人早世

某　盛之助
安永六年八月四日卒

忠交　盛之助　左京
從五位下縫殿頭
明和七年十二月十六日叙任

女子

忠補

某

女子二人
本多伊豫守忠宗室
一人早世

某　虎象　早世

某　菊次　早世

女子四人
實讃岐守忠用女
越前守忠鄰室
二人早世
牧野佐渡守宣成室

某　主馬　早世

女子
許嫁仙石鐵之介久道

女子二人　共早世

忠寛　岩千代
下野守從五位下
延寶六年十二月廿八日叙任
元祿十六年十一月八日卒二十八歳
法名顯岸院雄安泰英

女子三人
松平紀伊守信庸室
一人早世

女子二人　共早世

忠告　森之助　監物
實西尾隱岐守忠成五男
信濃守從五位下
寶永四年十二月廿三日叙任
後改下野守
寶曆十二年六月廿六日致仕
明和四年七月十九日卒七十五歳
法名天戒院彌山觀高

忠儔　與八郎　監物
近江守從位位下
延享四年十二月十九日叙任
寛延三年七月晦日卒三十八歳
法名海藏院湖月亮珊

女子
忠告養女

忠増　隆之助

某　八之亟　早世

忠温　三郎助
實雅樂頭忠恭四男
駿河守從五位下
寶曆元年十二月廿八日叙任

女子
實忠衛女
忠温室

某　萬千代
日向守忠能養子

女子
雅樂頭忠以養女

女子　藤堂和泉守高久室

女子　早世

某　三郎助　早世

女子　內藤豊前守信義室

忠哲　春司　與八郎

某　與八郎

忠直　時司
高力修理直道養子

忠意　朝司　早世

忠利

忠勝

女子
建部丹波守政長室

女子
朝倉越後守宣親妻離別
嫁松平若狹守康信

女子
高木左兵衛正直妻

女子
松平左近太夫康政室

女子
堀田加賀守正盛室

忠朝　隼人
備後守從五位下
寛永八年十二月廿八日叙任
慶安二年九月依病籠居
寛文二年三月廿四日卒四十四歳
法名用運院獨立東山

某　鍋　早世

某　隼人　早世

女子二人　一人早世
修理大夫忠直養女

某　與十郎　早世

女子　修理大夫忠直家人
青山一學景英妻

忠國　勝之助
初忠榮
越前守從五位下
寛文八年十二月廿七日叙任
後改大和守
天和三年正月十一日卒三十三歳
法名諍修院厚安忠國

忠胤　勝之助
初忠純　隼人
備後守從五位下
寶永六年三月七日叙任
正德二年七月廿日卒三十四歳
法名輝巖院巨山淨林

女子
家人都築外記秀政妻

忠經　民部　早世

女子
井伊兵部少輔直好室

重政　主殿介　後可一
青木甲斐守重種養子

忠雄　權佐
今酒井吉十郞忠盈祖

女子　早世

爲重　將監
忠直家人野々口丹波爲勝養子

某　綾之助　早世

女子
松平隱岐守定賴養女

定安　左內
松平主計頭定盛養子

忠成　新次郞
今酒井近江守忠賴祖

忠篤　右近
越前守從五位下

忠大　大助　初忠昭
大和守從五位下

忠算　辰之助
室曆五年五月一日卒

忠鄰　勝次郞
從五位下大和守

享保二年十二月廿一日叙任
元文二年五月十三日卒二十九歳
法名潜龍院洞雲覺睦

女子三人 共早世

寛保三年十二月廿一日叙任
寶曆六年三月廿四日卒卅一歳
法名紹隆院雄山興英

女子三人
二人早世
關山城守政盛室

寶曆十三年十二月九日叙任
後改越前守

忠義 綾之助 主計

女子二人
土井左門利豊妻
島津又吉郎久道妻

忠和 熊次郎

女子二人

女子 實忠義女
横瀬中務貞樹妻

忠直 靫負 修理大夫従五位下 正保元年十二月晦日叙任 明暦二年十二月廿七日従四位下 延寶元年十一月廿八日侍従
天和二年七月十日卒五十三歳 法名勇巖院獨立空山

女子 實備後守朝女
龜井伊豫守政直室

忠隆　千熊丸
靭負佐從五位下
寛文五年十二月廿七日叙任
貞享元年十二月廿五日從四位下
改遠江守
同三年閏三月廿一日卒卅六歳
法名高重院情巖通徹

忠道　金十郎
享保五年正月九日卒

忠龍　粂次郎　早世

忠存　初二郎　與七郎
備後守從五位下
享保十八年十二月十八日叙任
元文五年八月廿二日卒廿二歳

忠囿　千熊　與七郎
靭負佐從五位下
貞享元年十二月廿五日叙任
寶永元年十二月十一日從四位下
同三年九月八日卒卅七歳
法名寶光院崑山道琳

女子三人
松平長門守吉就室
島津淡路守惟久室
一人早世

忠用　金之助　一學
實忠音四男
修理大夫從五位下
元文五年十二月廿一日叙任

忠音　助次郎　一學
實右京亮忠稠二男
修理太夫從五位下
寶永三年十二月十九日叙任
享保七年正月三日從四位下
同八年正月十八日改隱岐守
同十三年十二月十五日侍從
同廿年五月十八日卒四十六歳
法名靈苗院曇華道瑞

女子二人
一人早世
森河紀伊守浚孝室

某　一學
寛延三年十月五日卒

忠與　竹之助
實忠音五男
遠江守從五位下
寶曆八年十二月十八日叙任

法名實相院締覺圓成

|忠用　千之助

|忠與　竹之助

|某　直五郎

|忠順　安之助　備中守
酒井左京忠厚養子

|某　秀之助　早世

|某　駒之助　早世

|忠旨　直江　主膳　主水
有馬阿波守則雄養子後歸

延享四年十二月廿三日從四位下
改讃岐守
寶曆二年四月七日侍從
同七年三月七日致仕
同年十二月改左京大夫
同八年七月號靈岳
安永四年九月廿七日卒五十六歲
法名靈岳院大機道乘

|某　千熊
天明四年七月廿日卒十四歲

同十二年六月十八日卒四十二歲
法名樹德院康山成功

|女子二人
加藤遠江守泰武室
雅樂頭忠恭養女

|某　早世

|女子
家人酒井圖書忠實妻

|某　忠之進　早世

忠貫　藤太郎
從五位下修理太夫
寶曆十三年十二月九日叙任
天明二年十二月十八日從四位下

胤相　三郎七　又次郎
遠藤下野守胤忠養子

景範　三次郎
船越式部景順養子

正直　元之助
高木主水正正弼養子

忠進　八之助　與七郎
實飛驒守忠恭七男

女子　早世

女子
三浦肥後守使次妻

忠丘　外記
雅樂頭親愛養子

某　源七　早世

女子
許嫁宇津釆女正敬保早世

忠稠　仙千代　右京　初忠登
右京亮従五位下
寛文十二年十二月廿八日叙任
宝永三年六月二日卒五十四歳
法名憺徳院節綾祖幾

女子
秋田信濃守輝孝室

忠興　内記
伊豫守忠興養子

舎政　求馬介
家人江見太兵衛盛政養子

女子
家人深揃九郎右衛門季秋妻

忠垠
今酒井内藏介忠迢祖

直卿　左内
爲家人

忠菊　縫殿
飛驒守従五位下
寶永六年四月十五日叙任
享保七年二月六日卒四十四歳
法名徳雲院海晏淨清

女子　早世

女子
家人加藤善右衛門正甫養女

忠音　一學
靭負佐忠圓養子

忠位　内膳
壹岐守忠興養子

行快　幼名　季麿
祇園社務寶樹院附方

忠武　富之助
右京亮従五位下
享保七年十二月十八日叙任
同十五年七月廿二日改佐渡守
同十六年八月廿一日卒二十四歳
法名天祭院一運元利

忠知　刑部
雅樂頭親季養子

女子　早世

某　竹五部

某　由之助

女子
實三浦肥後守使次女
宇津釆女正教保室

忠敬　平次
宗家々人酒井伊織忠礼養子

忠香

女子五人
家人田中茂兵衛常行妻
毛利日向守元賢室離別
嫁植村出羽守家言
高木內膳正純妻離別
家人酒野伊織忠祖妻
家人三浦三左衛門義職妻

忠恕　仙之丞　寛延二年九月十六日依病籠居
同四年四月十九日卒十四歲

女子　內藤美濃守正弼室

忠節　忠三郎縫殿　從五位下播磨守寶曆八年十二月十八日叙任
安永三年五月四日依病籠居

忠孝　兵庫
水谷左京亮勝久養子

女子四人
水野河內守忠敝室
許嫁酒井一太郎忠勝卒
一人早世
實忠貫家人酒井伊織忠敝女
服部主水貞德妻

女子二人

忠香　松之丞
實忠菊八男
從五位下播磨守
享保十七年十二月十六日叙任
延享二年九月十二日改飛驒守

忠言　豐之助
相模守從五位下
安永三年十二月十八日叙任

女子
許嫁桑山縫殿貞國離別
嫁淺野佐渡守長富

女子
酒井三之丞忠記妻

女子
許嫁風早中將實秋離別
嫁瀧川長門守利雍

某　隼之助
山名圖書義安養子

忠貞　松之助
酒井秀之丞忠幸養子

女子
酒井藏人忠貞室

忠進　八之助
修理太夫忠貫養子

忠明　豐之助　右京

女子

某　歡之介　早世

某　專三郎

酒井

○左少將兼雅樂頭源忠清は阿波守忠行か第一の子故の雅樂頭忠世か孫也寛永七年の春兩御所（台徳院殿 大猷院殿）忠世か家に渡らせたまふ事ありしに忠清とし七歲にて見えたてまつりおなしき十年初見の禮をはり十四年の正月四日家をつく（上野國厩橋の城十萬石）其弟日向守忠能に所領をわかち賜はる（二萬二千五百石又忠行襲封前に賜はりたる三萬石は返し奉るといふ）十五年の十一月御奏者の衆にくわへられ十二月叙爵して河内守に任し十八年八月三日若君（嚴有院殿の御事）御誕生ましませし時蟇目の役に候しおなしとしの秋從四位下して廿年の七月侍從に任せらる慶安二年の夏若君忠清か邸にいらせたまふ事ありてもの賜ふ事妻子におよふ献れるものも又すくなからすこれは日光山にはしめてまうでさせたまふ御かといてのためときこへし四年の秋將軍宣下の御使にさゝれて京都におもむき事はてゝ少將に任し仰ありて雅樂頭にあらため承應二年閏六月重事には連署すへきよし仰をうけ寛文三年二月八日所領の地も加へられ（三萬石）おなしき六年の三月連署の事をゆるされ（大老の職になされしと家譜にしるす）延寶八年四月ふたゝひ加恩あり（二萬石賜り十五萬石）その年御代あらたまりて十二月九日職ゆるされ天和元年の春致仕す（五月十九日五十八歲にて卒す）

嫡男左近衛少將兼雅樂頭忠擧（初め忠明）明暦二年の正月二十二日はしめて謁見し寛文元年の冬從五位下河内守に叙任し四年の九月御奏者の衆に加へられて又の年の冬從四位下にのほり八年十二月二十七日あらたに所領の地を賜はり中ひとゝせをへたてゝ侍從になる父致仕せしかは家つきて（十二萬石）弟の下野守忠寛に所領をわかつ（二萬石）そのとし六月二十九日出仕とゝめらるゝ事ありて十二月の十七日に御ゆるしありこれはさいつころ越後守光長か家士訴の事父忠清執政の職にありてさたせしやうよろしからすとの御とかめと聞えし貞享四年の春寺社の奉行をかね元祿二年の秋病によりて兩職を辭しおなしき十一年の二月大留守居に補せられ雅樂頭にあらたむ十二年二月十五日ゆるされて溜詰に准せられ寶永二年京都の御使奉はりて左近衛の少將にすゝみ（御轉任の事によりてなり）おなしき四年の秋私墾の田をもて本領くわへ賜はる（二萬石總て十五萬石）その年の冬致仕して勘解由といふ享保五年をはりをとる七十三歲その子與四郎忠相（初忠匡又忠貞）延寶四年の春はし

めて見えたてまつり天和三年叙爵して内匠頭に任し元祿十四年從四位に叙し寶永四年の十一月家つく雅樂頭になりあくる十五年の春四十二歳にして身まかるその嫡子與四郎親愛（初め忠良）寶永三年二月十五日初て見えたてまつり父におくれし年の二月九日家をつき十二月從五位下雅樂頭になりおなしき六年從四位下に叙し享保五年の四月致仕して十八年の春四十歳にて卒すその子外記親本は（初忠虎又忠丘）一族飛彈守忠菊か嫡子にて親愛にやしなはれ享保元年八月五日はしめて見え奉りおなしき四年叙爵して阿波守に任し父か致仕せし年家をつく六年の冬從四位下になされて雅樂頭にあらたむ十三年の春侍從に任せしかことし立坊ありけれは京都の御使奉はりしによりてなりかくていまた壯年にもたらすして身まかり（十六年九月二十七歳）嗣子なかりけれは弟の刑部忠恭を子としていへつかす左少將忠恭は（初め忠知）飛彈守忠菊第四の子にて家をつきてその年の十月初見の禮をはりしは十一月の朔日なりおなしき十二月從五位下の雅樂頭に任し十七年の冬從四位下にのほり元文五年の夏大坂の城代となり延享元年の五月朔日宿老の職にすゝみ侍從になされて西城につけらる明るとしの九月老中の上座たるへきよし仰をかうむる寛延二年の正月十五日溜詰につらなる播磨國姫路の城にうつさる（松平大和守朝矩にかはる）寶暦十二年京師の御使にさゝれて少將になる（御即位ありしによりてなり）安永元年の秋卒す（六十三歳）これよりさきその子河内守忠得阿波守忠宜備前守忠仰みな世をはやうしけれは忠仰の嫡子德太郎忠以をもつて家をつかしむ忠以明和四年五月朔日はしめて見え奉り閏九月二十日祖父の嗣となり六年從四位下河内守に叙任す祖父沒せし年の八月二十七日家つきて雅樂頭になり安永九年の夏京都の御使して（御即位御元服の事あり）侍從に任し天明五年の四月溜詰となる（三十一歳）

○縫殿頭源忠交は雅樂頭忠恭第八の子寶暦十三年九月六日若君（孝恭院殿の御事）初めて山王の社にまうてさせたまひし時騎馬にて供奉す（時に十一歳）明和七年閏六月二十三日父か廩米をわかち賜はりて帝鑑の間の衆につらなり十二月叙爵して縫殿頭になる

○下野守源忠寛は左少將忠清か第二の子延寶三年七月二十六日初見同しき六年叙爵し天和元年二月二十七日父か所領を分ち賜はり（上野國伊勢崎二萬石）元祿十六年十一

月三十八歳にて卒すその子監物忠告實は西尾隱岐守忠成か五男寶永元年二月九日家つきて同き四年從五位下の信濃守に任し（後下野守にあらたむ）寶暦元年の秋御奏者の事を奉はりおなしき八年の六月職を辭して十二年致仕し明和四年の秋七十五歳にして卒すこれよりさき嫡子近江守忠儔身まかりけれは雅樂頭忠恭か四男駿河守忠溫をやしなひてよつきとす忠溫寶暦元年十二月はしめて見え奉りて叙爵しのち父忠告致仕せし時家をつく（十七歳）嫡子與八郎忠哲天明六年四月十五日はしめて拜謁す

○日向守源忠能は阿波守忠行第二の子寛永四年の春父か遺領を分ち賜はり（上野武藏兩國の内二萬二千五百石餘）十六年七月九日はしめて見え奉り十八年の冬叙爵して二十年七月二十三日若君（嚴有院殿の御事）につけられ御奏者の衆に加へられ寛文二年の六月四日所領をそへられて（三萬石）信濃國小諸の城を賜はり（青山因幡守宗俊にかはる）延寶七年の秋職をゆるされて所領くわゝり（一萬石）駿河國田中の城にうつさる（西尾隱岐守忠成にかはる）天和元年十二月十日罪かうむりて所領沒收せられ近江國彦根に配流し井伊掃部頭直興にあつけられこれは兄忠清か嫡子雅樂頭忠擧御とかめをかうむりし時忠能は籠居の身にて憚なく江戸にまいる條御とかめあり且は所領のおさめもよろしからすと聞しめされたるによりてなりその子万千代（實は忠清か末子）むさしの國川越になかされて松平伊豆守信輝にあつけられぬ（忠能配所にある事十年元祿三年罪ゆるされて江戸にかへりおなしき八月五日廩米二千俵たまはり十五年十二月三千石くはへられて五千石の釆地をたまひ寶永二年五月二十二日七十八歳にて死す萬千代は貞享五年五月二十七日十四歳にて配所にて死す）

○修理大夫源忠直は讃岐守忠勝か四男也（長男備後守忠朝は少老になりしか職ゆるされて籠居す二男民部忠繼世を早うし三男主殿重政は青木甲斐守重種にやしなはる）寛永十八年八月九日十二歳にしてはしめて謁し奉りこれは若君につけまいらせらるへきためとそ聞えし（ことし十二月嚴有院殿の御小性になる）正保元年二月五日本城に出仕すへき旨仰をかうむり同き十二月叙爵して修理大夫と稱す明暦二年五月二十六日父忠勝か牛込の別邸にならせられし時恩遇あさからすかす〳〵の賜りものありさゝけものもまた多かりき忠勝よはひ既にかたむきぬれは重職にたへさるむねかねてこひ申せしかこの時御ゆるしかうふりて致仕し忠直所に領賜はりぬ（若狹國小濱の城十二萬三千五百石餘）この年の十二月從四位下に叙し寛文八年六月十三日甥勝之助忠國に地を割てあたふ（一萬石）同十年忠直年四

十一歳にして致仕をこふといへともいまた老衰にもあらされは病をはともかくもやしなひてよとて御ゆるしなかりしかは仰いなみ奉るへくもあらすして年所をふるほとに延寶元年の冬侍從にすゝみぬこれよりさき忠直にめしあつけられし堀田上野介正信小濱の城をのかれ出て京にのほる事江戸よりきこへけるによりて同五年の六月十五日御勘氣かうむり門戸さしこめてありけるかその年の十二月御ゆるしかうふりぬ天和二年の七月十日五十三歳にして卒し嫡子忠隆童名千熊丸六歳の時明暦二年の正月初見の禮をはり寛文五年の冬從五位下靱負佐に任し天和元年八月御奏者の事を奉はり二年九月二十九日家つく弟等に所領わかつ（右京亮忠周一萬石數馬忠服私墾田三千石）貞享元年從四位下の遠江守に任し職ゆるされておなしき三年卒しぬ（閏三月廿一日三十六歳）その子靱負佐忠囿延寶八年十月二十六日はしめて謁し奉り貞享元年の冬叙爵し父卒せし年の五月二十七日に家つく寶永元年從四位下に叙しおなしき三年九月八日卒す三十七歳子なかりしかは叔父右京亮忠禂か二男一學忠音を養ひて子とす忠音十月二十九日家をつき十二月叙爵して修理太夫に任し享保三年八月

四日御奏者の事を奉はり寺社の奉行をかねたりおなしき七年正月三日病によつて兩職をゆるされぬれとも從四位下にのほりあくる八年正月十五日大坂の城代となり（讃岐守にあらたむ）同き九年の春城下に火あやまつて有し時に沙汰せし事のさまきこしめして奉書賜り賞せらるおなしき十三年十月宿老の職にすゝみ侍從に任し二十年五月十八日卒す四十六歳長子金十郎忠通次男粂次郎忠龍ともに世を早うしけれは三男與七郎忠存嗣となる忠存これよりさき享保十八年五月二十八日はしめて見え奉り十二月從五位下備後守に任し父卒せし年の七月三日家をつき寛文五年の秋二十二歳にて身まかりぬ世つきなかりけれは弟一學忠用を子とす忠用はこれよりさき竹千代君山王の社にまうてさせたまふとき騎馬の供奉を奉はりしによりて拜謁をゆるされたり兄か家つきし年の冬叙爵して修理太夫に任す延享四年三月十一日御奏者の事を奉はりおなしき六月朔日寺社奉行をかぬ十二月二十三日大坂の城代となりて從下の四位にのほり讃岐守になり寶暦二年四月七日所司代にすゝみ侍從に任しおなしき六年四月職ゆるされ明る七年の春致仕し安永四

年九月二十七日五十六歳にて終りぬこれもよつきなかりけれは弟宮内忠興を養ひて家つかす忠興これよりさき忠用とともにはしめて謁し奉り（忠用もともに騎馬にて供奉せし）なり兄か家つく後寳暦八年の冬叙爵して遠江守に任し十二年卒す（六月十八日四十二歳）長子藤太郎忠貫五月四日父につきおなしき十三年の冬從五位下に叙し修理太夫に任し天明二年十二月十八日從四位下に叙す（時に三十六歳）

○右京亮源忠稠（初め忠光）は修理太夫忠直か次男寛文十二年の冬叙爵し天和二年九月廿九日父か所領を分たる（越前國敦賀の地一萬石）貞享四年八月十一日大番の頭に補せられ元祿十五年閏八月二十九日其職にたへすとて去りそきけり寳永三年の夏五十四歳にして卒す嫡子縫殿忠菊家をつく忠菊さきに元祿二年の秋はしめて謁したてまつり父卒せし年の秋家つきて寳永六年の夏從五位下飛驒守に任し正德四年三月朔日大番の頭となり享保二年の六月病によりて職を辭し七年二月六日卒す四十四歳嫡子外記忠丘は雅樂頭親愛か嗣となり二男源七いとけなくして身まかりけれは三男富之助忠武よつきとなる忠武享保元年九月朔日はしめて謁し奉り七年の春家をつきそのとしの冬叙爵して右京亮になる（後佐渡守にあらたむ）おなしき十六年八月二十一日二十四歳にして身まかりぬいまた子なかりしかは弟松之丞忠香を嗣として遺領をたまひ十月二十六日初て謁し奉り十七年の冬從五位下播摩守に任し（後飛驒守にあらたむ）延享二年九月二十日大番の頭となり寳暦八年七月二十八日御奏者の事を奉はりおなしき十一年の七月二十二日寺社の奉行を兼たり明和二年八月二十一日少老の職にうつりて若君に屬して安永八年の春孝恭院殿薨御の後本城にうつりて鳥居丹波守忠意とひとしく少老の末にありしか天明元年閏五月十一日ふたゝひ西城の少老になり（時に六十七歳）おなしき四年五月十日又本城にめさる忠香男子あまたあり嫡子仙之丞忠恕病によりて籠居せしかは次男縫殿忠節をよつきとし寳暦八年叙爵して播磨守に任すこれも多病にしてよつきとせす三男兵庫忠孝は水谷左京亮勝久に養はれたれは四男豐之助忠言を世つきとす忠言寳暦十三年九月朔日はしめて謁し奉り安永三年の冬從五位下相摸守に任す（十七歳）

○大和守忠國は（初め忠榮）備後守忠朝か四男也寛文八年六月十三日叔父修理太夫忠直地を割て與ふ（安房國平郡越前國敦賀の内）

にして一萬石　次の日初見の禮をはりこの年の冬叙爵して越前守に任す延寶八年十二月九日大番の頭となり天和元年の十一月二十九日御奏者にうつり寺社の奉行をかぬおなしき二年八月十一日所領加へ賜ふ五千石あくる三年卒す五月十一日三十三歳　その子隼人忠胤はじめ忠純　父につき一萬二千石　弟新次郎忠成に所領をわかつ三千石　忠胤勝之助と申せし時貞享四年九月六日はしめて謁し奉り寶永六年の春從五位下の備後守に任し正徳二年卒す七月二十日三十四歳　嫡子右近忠篤同年九月十三日家をつきおなしき五年十月十五日はしめて謁し奉り享保二年の冬叙爵して越前守に任し元文二年卒す五月十三日　三十五歳その子六助忠大はじめ忠昭　同年七月十日家つく寛保二年四月十八日初て謁し奉り明るとしの冬從五位下大和守に任し寛延元年十一月二十五日大番の頭になり寶暦三年十月十九日職を辭し六年春卒す三月二十四日三十一歳　嫡子辰之助忠算世を早うしけれは二男勝次郎忠鄰父につきおなしき十三年七月朔日はしめて謁し奉りこの年冬從五位下大和守に任す十七歳○のち越前守にあらたむ

土井

源利勝

利隆

利重

利益　小左衛門
周防守從五位下
寛文二年十一月廿七日叙任
延寶三年五月晦日織帶刀利久
寶永五年十二月十八日從四位下
正德三年閏五月廿五日卒六十四歲
法名諦然院廓譽高岸德雄

利久

女子
酒井靱負佐忠囿室

利實　宮內
出雲守從五位下
寶永九年十二月十一日叙任
後改大炊頭
元文元年十一月廿六日卒四十七歲
法名寶眞院明譽勇仁崇知

利純　內膳

利武　宮內
出雲守從五位下
享保十三年十二月廿一日叙任
同十八年六月十日卒二十歲
法名泰壽院生譽卽明廓然

利延　辨之助
實土井備前守利淸嫡男
大炊頭從五位下
元文二年十二月十六日叙任
延享元年七月十八日卒廿五歲
法名諦了院眞譽寂照湛然

女子　戸田伊賀守氏長室

正博　藤五郎　數馬
稻葉下野守正能養子

女子　土井備前守利淸室

利里　幾之助　左門
實備前守利淸二男
大炊頭從五位下
延享元年十二月十六日敍任
明和六年八月十八日從四位下侍從
安永六年八月十四日卒五十六歲
法名廣智院勇譽仁翁理玄

利剛　吉十郎　甚三郎
實久世若狹守廣武三男
遠江守從五位下
明和二年十二月十八日敍任
安永二年四月廿日卒四十歲
法名演德院乘譽全臺寬剛

女子二人　共利里養女

利建　秀三郎
實松平大和守朝矩二男
因幡守從五位下
安永三年十二月十八日敍任
同四年十月廿五日依病籠居

利見　才吉　甚三郎
實松平和泉守乘紹九男
美濃守從五位下
安永四年閏十二月十一日敍任
同六年十月廿七日卒廿歲
法名善了院禎譽諦岳義山

利和　龜丸　主膳
實松平遠江守忠名四男
大炊頭從五位下
安永七年十二月十六日敍任

女子二人
實利剛女
許嫁兵庫頭利制離別
嫁青山下野守忠裕
豐前守利國室利國卒
嫁本多伊豫守忠京離別
嫁五島近江守盛運

某　鶴太郎
安永九年五月廿二日卒

女子　早世

利行　龜丸
天明六年八月十二日卒

利廣　他宮　甚三郎

女子二人

女子　早世

利長 八助
兵庫頭従五位下
享保三年十一月晦日叙任
天和元年四月十三日致仕
元祿九年七月廿七日卒六十六歳
法名泰源院然譽英翁俊義

利意 縫殿助　式部
初利忠
實稻葉美濃守正則七男
式部少輔従五位下
延寶六年十二月廿八日叙任
寶曆元年十月十日改山城守
正德四年九月七日改伊豫守
享保元年閏四月廿七日卒六十一歳
法名靈應院謙室義靜

女子 安藤帯刀重利妻

某 榮丸　早世

女子 小出伊勢守英勝室

某 嘉傳次　早世

某 勝千代　早世

某 縫殿介　早世

女子 二人共早世

利庸 安三郎
初利計
實三浦肥後守便次六男
淡路守従五位下
享保二年十二月廿一日叙任
同十九年四月廿一日卒三十二歳
法名淨覺院體譽顯照善立

利置　藤六郎
實松平陸奥守宗村六男
左京亮從五位下
明和二年十二月十八日叙任
同三年正月十九日卒十七歳
法名應聲院郎譽現到寬然

女子
酒井播磨守忠節室

利德　藤三郎　淡路
實松平陸奥守宗村三男
山城守從五位下
明和三年十二月廿八日叙任

女子　早世

利制　鐵藏
從五位下兵庫頭
天明三年十二月十八日叙任

利信　八介
伊豫守從五位下
元文五年十二月廿一日叙任
明和元年五月三日改大隅守
同四年八月十八日致仕
同八年二月廿四日卒四十九歳
法名鳳德院朔譽訒輝悟心

利紀　五郎左衛門
後忠宜
松平監物忠賢養子

女子
大久保長門守敎紀室

利房　七之介
能登守從五位下
正保三年十二月晦日叙任
延寶七年十二月廿八日從四位下
同八年八月十八日侍從
天和三年五月廿五日卒五十三歳
法名隆興院譽眞凉山道空

女子
酒井右京亮忠稠室

利知　內記　初利治
甲斐守從五位下
元祿元年十二月廿五日叙任
寬保三年四月九日致仕
延享二年二月八日卒七十二歳
法名寶岸院實譽道慶輝山

利良　左門　初利親
信濃守利眞養子

女子二人
實利隆女
織田監物秀親室
實利貞女
內藤和泉守忠勝室

女子
許嫁酒井佐渡守忠武忠武卒
嫁酒井伊豆守久端

利寬　己之助
伊賀守從五位下
享保十七年十二月十八日叙任
延享三年八月十八日卒二十九歳
法名全性院淨譽義海德岡

女子
大炊頭利里室

利貞　岩之助
從五位下能登守
寶曆五年十二月十八日叙任

利邦　音之丞　早世

某　岩之助　早世

利賓　熊次郎

女子二人

志摩の國高月の城は寶永十一年內藤志摩守忠重封せられしより其息飛驒守忠種その子志摩守忠次其子和泉守忠勝こゝを領しけるに延寶八年忠勝つみかうむり家たへしかはその跡へ封せられしと見へたり

土井

○周防守源利益は遠江守利隆か二男大炊頭利重か弟也萬治元年九月七日父か所領分ち賜はり（一萬石）寛文二年の冬從五位下周防守に任すしかるに宗家帶刀利久世を早うし嗣なくして家絶けるを祖父利勝か奉公の勳勞をおほしめし延寶三年利益に多くの地加へられて彼家を繼せらる（七萬石下總國古河の城にうつる）天和元年二月二十五日志摩國鳥羽の城賜りてうつりぬ三年の春御奏者となり元祿四年二月九日肥前の唐津にうつさる（松平和泉守正宗にかはる）同しき十年五月職ゆるされて寶永五年の冬從四位下に叙し正德三年閏五月六十四歲にして卒す其子宮內利實元祿十三年十一月十五日はしめて見え奉り寶永九年叙爵して出雲守に任す（後に大炊頭）父かうせし年の七月十二日遺領を賜はり元文元年の冬年四十七にして卒す嫡男宮內利武享保十年の夏はしめて謁し奉り十三年十二月從五位下出雲守になりしか父に先たちてうせけれは一族備前守利清か嫡子辨之助利延を養ひてよつきとす利延元文元年十二月十七日家つきて明る年正月はしめて見えたてまつり（襲封を謝申せし日なり）十二月從五位下大炊頭に任し延享元年七月十八日卒す二十五歲子なかりしかは弟左門利里を世嗣とす利里寬保三年の春はしめて見參し利延卒せし年の九月二十三日遺領を賜ひ叙爵して大炊頭になる寶曆九年六月二十三日御奏者の事をうけたまはり十二年九月晦日祖先の舊領下總の國古河の城にかへりうつる（松平周防守康福にかはる）あくる年の二月十八日寺社奉行をかぬ職にある事七年にして明和六年八月十八日所司代になりて從四位下侍從にすゝむ安永六年八月京にてうせぬ五十六歲利里はしめ久世若狹守藤原廣武か三男甚三郎利剛を養ひて子とす明和二年七月朔日はしめてまみへ奉り從五位下遠江守になりしか身まかりけれは松平大和守朝矩か二男秀三郎を子とし安永三年初見叙爵して因幡守利建といふしかるに病多くして家つかすやうもあらされは公に申て兄かもとにかへしけりかさねて松平和泉守乘裕か九男甚三郎利見を養ひて嗣とす利見あくる四年の冬はしめてまみへたてまつりことし從五位下美濃守に任すおなしき六年十月四日家つきてその月の二十七日に卒しぬとし二十歲これも子なかりけれは松平遠江守忠名か四男主膳利

三河國西尾の城は萬治二年增山彈正少弼に封せられしその嗣兵部少輔正儀も居たりしか寛文二年下總國舘へうつされけるかその跡へ土井利長封せられしなるへし

和して家つかしむ利和ことし十二月二十八日はしめて見えたてまつり明くる七年の冬従五位下大炊頭に任す八年八月御奏者となり天明六年三月二十四日寺社奉行をかねたり（時に二十八歳）

○兵庫頭源利長は大炊頭利勝か三男也正保元年九月朔日父か所領をわかちあたへられ（一萬石）おなしき三年十二月晦日叙爵し万治元年九月七日姪の利重家繼し時所領をわかたる（一萬石）寛文三年七月十一日三河國西尾の城をたまひ地をも加へらる（三千石合せて二萬三千石）天和元年四月十三日致仕す（元祿九年四月二十七日六十六歳にて卒す）その子縫殿介利意實は稲葉美濃守越智正則か七男なり延寶三年五月十八日初めて謁したてまつりおなしき六年十二月従五位下式部少輔に任し（後山城守伊豫守にあらたむ）父利長致仕の日家つきて寶永元年十月九日御奏者となり正徳三年の春寺社奉行をかねたり享保九年閏四月十一日病によりて職を辭せしかその月の二十七日六十一歳にして卒すその子安三郎利庸實は三浦肥後守平便次か六男なり享保元年九月朔日はしめて見えたてまつりおなしき二年叙爵し淡路守になり父かうせし年六月二十二日遺領をたもふ同しき十九年四月二十一日三十二歳にして卒す嫡子八助利信六月十五日家をつき元文四年の二月はしめて見へたてまつり明る年の冬叙爵し伊豫守に任し（のち大隅守）延享四年二月十一日三河國苅屋の城にうつり（三浦志摩守義次にかはる）明和四年八月十八日致仕しおなしき八年の春卒す四十九歳利信はしめ松平陸奥守藤原宗村か六男藤六郎利置を養ひて子とし明和二年十一月朔日はしめて謁したてまつり叙爵して左京亮になりけるかおなしき三年の春さきたちてうせしかは又宗村か三男淡路利徳を嗣とす利徳明和三年十二月十五日はしめて謁し奉り叙爵して山城守に任し（十九歳）父致仕せし日家をつく嫡子織藏利制天明三年十月十五日はしめて謁したてまつり同き年叙爵して兵庫頭に任す（時に十六歳）

○能登守源利房は大炊頭利勝か四男也寛永十六年四月八日左大臣家利勝か病をとはせたまふとてその家にわたらせたまひし時利房九歳にて初めて謁し奉る同しき十八年八月九日より若君（嚴有院殿の御事）に奉仕し正保元年九月朔日父か遺領をわかちたまふ（一萬石下野國足利の地）兄利隆かのそみ申によりておなしき三年の冬従五位下能登守に任し萬治元年九月二日宗家利重家つきし

時また利房に所領をわかつ一萬石 寛文元年六月十四日御奏者となりおなしき三年八月十六日少老の職にうつり同しき十年五月地をくはへ賜ふ五千石 延寶七年七月十日執政に補せられふたゝひ地ましくはへらる下總常陸下野等の地一萬五千石合せて四萬石 おなしき十二月從四位下に叙し同き八年八月侍從にすゝみしか天和元年の三月病によりて職ゆるされ同しき二年三月十六日越前國大野の城を賜はりて移り明年卒す五月廿五日五十三歳 その子内記利知十歳にして六月二十九日遺領をたまひ七月十一日はしめて見へたてまつり家つきしことを謝し申せし也 元祿元年十二月叙爵して甲斐守に任す享保七年十一月二十八日御奏者となり寛保元年四月九日職を辭しおなしき三年致仕して延享二年二月八日七十二歳にして卒す 伊賀守利寛つゝく利寛享保十四年二月二十八日初めて拜謁し十七年十二月叙爵し延享三年卒す八月十八日二十九歳 その子岩之助利貞その年十月十八日七歳にて家を繼寶曆五年九月朔日はしめて見え奉り十二月十八日叙爵して能登守に任す

阿部

安倍正勝

正次

定高

重次

正邦 作十郎 初正盛
對馬守從五位下
寛文十一年十二月廿八日叙任
元祿十三年十二月廿四日從四位下
正德元年五月十四日改備中守
同五年正月廿七日卒五十八歳
法名長生院尋譽曜海踞岸

某 長十郎
元祿九年七月二日卒

某 鐵藏
寳永四年九月十二日卒

正福 富之介 初正本
伊勢守從五位下
正德四年十二月十二日叙任
延享二年十一月廿三日從四位下
明和六年十月十日七十歳
法名德輪院碩譽祐全壽山

女子三人
土井大炊頭利實室
丹羽左京太夫秀延室
井伊兵部少輔直矩室

正容 隼人
今阿部靭負正依祖

女子
六郷伊賀守政長室

正表　丑之介　富之介
寶曆五年八月十日卒

正固　百之介
豊前守從五位下
寶曆七年十二月十八日叙任
明和四年六月十四日卒二十五歲
法名顯示院峰譽登巖如見

正倫　運之介　主計
備中守從五位下
明和四年十二月十六日叙任
後改伊勢守

正右　富之助
伊豫守從五位下
元文三年十二月十八日叙任
寶曆十年十二月三日從四位下侍從
明和六年七月十二日卒四十一歲
法名酉閣院樓譽純方練契

忠雄
酒井越中守忠立養子

由恒　攝津守
米津周防守由閭養子

女子
許嫁豊後守正織離別

正精　運之助

女子
松平源次郎乘寬室

女子
稻葉定之助正備室

某　重之介　早世

正興　増五郎
因幡守正領養子

女子
六郷兵庫頭政森室

正至　斧三郎　早世

女子
諏訪安藝守忠厚室離別
嫁柳澤伊賀守信有

某　吉兵衞
寛文三年七月朔日卒

女子　早世

某　梅千代　源太郎
依病籠居

女子三人
保科兵部少輔正賢室
二人早世

某　權之介

某　六之丞

某　端七郎　早世

女子
青山鶴之介幸孝室

女子
實報貢正依女
酒井大内記忠求妻

女子
三浦剛之介毗次室

某　勝三郎
延享元年五月廿五日卒

女子三人
正興室
一人早世
森川金右衞門氏壽妻

某　千五郎　民部　早世

女子　早世

正春 長松 初稱三浦吉兵衞利重
因幡守從五位下
承應二年十二月廿八日叙任
萬治二年四月十八日復本氏
改伊豫守
寶永六年四月廿五日致仕
享保元年六月八日卒八十歳
法名芳園院覺山了眞

女子三人
松平隱岐守定行養女
淺岡出羽守國孝妻
松平對馬守近陣室

正賀 惣太郎
實正鎭四男
駿河守從五位下
寶曆十二年十二月十八日叙任
安永九年十月廿四日卒三十五歳
法名大空院圓岸自性

正鎭 民部 初正良
民部少輔從五位下
正德三年三月七日叙任後改因幡守
寶曆元年十一月四日卒五十三歳
法名了義院卽峰玄性

某 平八郎　早世

某 留十郎　早世

正長 豫三郎
今阿部隱岐守正保祖

正實 房五郎 初正修
實豐後守正元五男
因幡守從五位下
天明元年十二月十六日叙任
後改兵部少輔

正興 増五郎 初正之
實伊勢守正福四男
山城守從五位下
寛延二年十二月十八日叙任後改因幡守
明和元年三月十一日卒三十二歳
法名淨慧院覺峰理玄

正賀 惣太郎

某 貞次郎　早世

女子
戸田但馬守光邦室

某 又吉　早世

女子　阿部隱岐守正保室

某　英五郎　早世

忠吉

某　大和
寛永六年五月七日卒

正能　德千代　市正　初正今
實修理亮正澄長男
播摩守從五位下
承應元年十二月廿八日叙任
延寶元年十二月廿八日從四位下
同五年七月四日致仕
貞享二年四月十三日卒五十九歲
法名建德院養拙

女子　早世

女子　實隱岐守正保女　許嫁正實

忠秋

正武　善七郎
美作守從五位下
寛文三年十二月廿八日叙任
天和元年三月廿六日改豐後守
同年四月十八日從四位下
同年十二月十日侍從
寶永元年九月十七日卒五十六歲
法名德巖院皓山

正方　七郎　志摩守　初正貞
今阿部大學正章祖

正喬　善七郎
出羽守從五位下
貞享三年十二月廿六日叙任
元祿九年十一月十五日改飛驒守
寶永六年十二月十八日從四位下
正德元年四月十一日改豐後守
同年六月朔日侍從
寛延元年七月廿九日致仕
同三年七月廿六日卒七十九歲
法名俊德院徹貞

某　金介　早世

正房　長吉郎　兵庫　遠江守
今阿部越前守正朗祖

正員　鶴之介　主稅　伯耆守
今阿部淸之丞正包祖

女子
松平周防守康賛室

女子
奥平大膳大夫昌春室

正秋　善七郎
備前守從五位下
正德四年十二月十八日叙任
享保十年二月五日依病籠居
同十四年七月三日卒三十歳
法名堅操院義幹

正乘　主水
元文三年正月十日卒三十八歳

女子二人
松平肥後守正容室
松平河内守光昭室

正晴　次郎七　美濃守

正元　帯刀

正府　志摩守
阿部志摩守正方養子

正陳　寛次郎　織部
實豐後守正元三男
天明元年六月六日卒三十四歳
法名德池院凉空

正直 主馬 初正乘
隱岐守從五位下
享保十年十二月十八日叙任
同十八年六月晦日卒三十一歲
法名乘裕院彰信

女子
許嫁正元早世

某 圖書 早世

女子
實遠江守正房女
間部下總守詮吉室

正允 帶刀 初正尹 正國
實美濃守正晴嫡男
能登守從五位下
享保十八年十二月十八日叙任
同廿年五月廿三日改飛驒守
寶曆九年十二月七日從四位下
明和元年六月廿一日侍從
同六年八月十八日改豐後守
安永九年十一月廿四日卒六十五歲
法名寶國院了脫

女子
實正晴女
井伊伊賀守直孝室

正敏 滿之進 織部
實豐後守正喬六男
從五位下能登守
寬延二年十二月十八日叙任
天明元年十二月十六日從四位下

某 帶刀 早世

女子二人
松平丹波守光德室
松平肥後守容頌室

正陳 寬次郎

女子
松平若狹守光悌室

女子
許嫁牧野讃岐守則成離別
嫁森對馬守俊紹

女子
內藤志摩守正興室

正識 兵庫
美濃守從五位下
天明二年十二月十八日叙任

女子

正良 杢三郎
阿部越前守正朗養子

正敏　滿之進

某　鐵之助　早世

某　要之丞　早世

政民　恭三郎　淡路守
白須甲斐守政賢養子

女子二人
奥平大膳大夫昌鹿室

正實　房五郎
駿河守正賀養子

宮津の城は寛永七年十一月永井右近大夫尚綱に封せられしより七萬五千石その子信濃守尚長にいたるしかるに延寳八年五月嚴有院殿薨せられ東叡山に葬りまいらせしに増上寺においても御作善の

阿部

○備中守安倍正邦は（初對馬守正盛）故備中守定高か嫡男也いとけなくして父にわかれ叔父伊豫守正春かもとにて人となれり はしめ作十郎と稱せし 時寛文元年八月二十六日はしめて見えたてまつりおなしき十一年十二月正春のそみこふによりて父か本領岩槻の城をたまはり（九萬八千石餘）この月叙爵して 對馬守に任す 天和元年二月二十五日丹後國宮津の城にうつされ元祿十年二月十一日また下野國宇都宮を賜ふ（此時十萬石にいたる○奥平大膳大夫昌成にかはる） 同しき十三年十二月從四位下に叙し寳永七年閏八月十五日備後國福山の城にうつり（松平下總守忠雅にかはる） 正德五年の春五十八歳にして卒しぬその子富之助正福をことしの五月廿八日はしめて見え奉り去年十二月叙爵して伊勢守に任しことし三月家つきし時父か遺言によりて弟隼人正容に俸米をあたふ（五千石内證わけといふ） 延享二年十一月十一日大坂の 城代となりて 從四位下に叙し四年十二月城代をゆるされて寛延元年致仕し明和六年の冬七十歳にして卒す嫡男伊豫守正右家をつくこれよりさき元文三年二月二十八日はしめてまみへ奉りことしの冬叙爵して寳永二年四月御奏者となりおなしき六年五月七日寺社奉行を兼ねたりおなしき十年所司代に補せられ從四位下の侍從に任す明和元年五月朔日西城の執政にうつりあくる二年十二月二十二日本城の執政となり同しき六年七月十二日四十六歳にして卒すこれよりさき長男富之助正表世を早うしけれは二男百之助正固を嗣とす 正固叙爵して豐前守といひしかこれも父にさきたちてうせけれは三男主計正倫 家をつく 正倫は明和四年閏九月朔日初めて 見參しその 冬叙爵して 備中守になり（時に二十五歳後伊勢守） 父か卒せし年家を繼き安永三年二月十一日御奏者となり八年 四月二十三 日寺社奉行をかねたり

○伊豫守安倍正春は對馬守重次か二男也はしめは三浦吉兵衛利重と申す（前編重長に作る○いとけなくして嚴有院殿の御扈從となれりといふされとその年月を詳かにせす正春三浦と名のりしことは兄重次外祖父三浦監物重成か養ひとなりて台德院殿につかへ奉り叙爵して山城守になるそののち重成男子をもふけしかは父正次かもとにかへるされと家名は猶三浦と稱せしなり前編に正春して三浦か家つかせしとしるせしはあやまれり） 慶安四年八月十四日兄備中守定高襲封のとき父か領地のうちの私墾田を分かち賜はる（一萬五千石） 承應二年因幡守になり萬治二年兄備中守卒してのち

御事ありて信濃守尙長內藤和泉守忠勝して警衞の事承りかゝりける處に尙長忠勝へ對しかねて非禮の振舞すこふる多かりけれは忍ひかたくして尙長を切害しそのみもつひに清龍寺へ入て腹切りたり此とき宮津の封缺たりしに依て對馬守正邦をこゝに封せられしなるへし

姪作十郎正德幼弱なるにより兄の家をつきおのか所領を合せ領して阿部伊豫守にあらたむ其のち正成成人しけれは寛文十一年十二月所領かへしゆつりてもとのことく上總國大多喜を領す明る年の夏大多喜の舊壘に城築くへきよし仰かうむり城もちの列になる元祿十五年九月七日三河國苅屋にうつり稻垣對馬守重富にかはる　寶永六年四月致仕して享保元年六月八日卒しぬ年八十歳その子民部正鎭はしめ正貞　寶永四年の二月十日はしめて謁し奉り父か致仕せしとき家をつきおなしき七年の五月二十三日上總國佐貫の地たまはりて城を築く　正德三年の春從五位下民部少輔に任しあくる四年四月十一日弟豫三郎正長に廩米をあたふ二千俵内わけといふ　正鎭男子二人世を早うしけれは延享三年の春一族伊勢守正福か四男淸五郎を養てそのか女にあはせ嗣とし寶曆元年の冬五十三歳にして卒す增五郎正之後正興にあらたむ　寛延二年十二月はしめて謁し奉りその年叙爵して山城守に任す後因幡守になる　父か卒せし年の十二月遺領をたまひ寶曆十年の夏年ころの病おこり奉公の事かなひかたけれは弟惣太郎正鎭か正之をやしなひし後にもうけし子にて幼弱なれはさたせす年すきしに事ゆへなくおひたちしかははしめて公にも申せしなり　を嗣子とす明和元年三月十一日三十二歳にして卒しぬ總太郎正賀これよりさき寶曆十二年十二月七日はしめて謁し奉り從五位下駿河守に任し父か卒せし年の五月家をつく子なきによりて安永八年の冬豐後守正元か五男房五郎を養ひてよつきとす　正賀明る九年十月三十五歳にして身まかりぬ房五郎正實初め正修　ことし四月朔日初めて謁し奉り十二月二十七日父につき天明元年の冬從五位下因幡守に任す時に十八歳

○豐後守安倍正武は播磨守正能か嫡男也明曆三年十二月十九日はしめて見へまいらせ時に九歳　寛文三年の冬叙爵して美作守に任す　延寶五年七月四日　父正能致仕して家を正武にゆつり武藏國忍の城八萬石　次男等に所領わかつ七三郎正方五千石長吉郎正房三千石鶴之助正貞二千石○播磨守正時は貞享二年四月十五日卒す五十九歳といふ其餘は前編に見へたり　正武同しき八年閏八月十一日御奏者の事をうけたまはり寺社奉行をかぬ　天和元年三月二十六日宿老の職に補せられて豐後守にあらため四月從四位下して十二月侍從になる貞享十一年正月二十一日所領の地を加へ賜り攝津の國川邊郡一萬石　元祿七年三月十日常憲院殿正武か邸にわたらせたまひあくるとし四月かさねて地加へらる一萬石くはゝりてすへて十萬石　正武職にある事凡そ二十

四年 寶永元年九月十七日年五十六にて卒す（此の人良實にして才幹ありと聞ゆ常憲院殿御代しらせたまひしはしめ越後守光長か家人等爭論の事を御みつからきかせ給ひしことありけれはことさらにおもたいしき儀にて大廣間のおまへに出させたまへは三家の御方をはしめ譜代の御家人等に至るまてみなまいりつとひたる所にめしいてゝたつねとはせ給ふ御旨をの傳へ彼家人等か申所を御尋に入奉ることとなれは申つきの人才辯ありて進退にならへる者ならすはいかに其の任にたふへきしかるに人おほきか中にこの正武をさゝれたるにて其の人となるよししらるへきことにやそれは延寶八年の冬の事なりあくる年の三月には執政の職になされたるとかいふ時のいちしるしきふるまひよりして殊におほしよるところもおはせませしなるへし）嫡子飛驒守正喬おさな名は善十郎といひしなり延寶八年十二月十一日はしめて謁し奉り貞享三年の冬叙爵して出羽守に任し（後飛驒守にあらたむ）元祿十二年三月二十八日御奏者と成りおなしき年閏九月二十八日寺社奉行をかぬ此時所領をも別に賜へり（一萬石）父かうせぬるとしの十月家繼く（十萬石○さきに賜はる一萬石はかへしいれ奉る）弟次郎七正晴に地を分つ（私墾田五千石）この時御奏者幷に寺社の職をゆるされて雁の間祗候の列となる寶永六年十二月從下の四位して正德元年四月十一日宿老に補せられ（此時豐後守にあらたむ）侍從に任す享保二年九月十九日職をゆるされ寛延元年七月二十九日致仕し三年七月二十六日卒す七十九歳嗣子帶刀正元實は美濃守正晴か子なり（美濃守は次郎七とまうせし子なり正元か世にいたりて宗家の世繼と成たれはその所領の地はおほやけにかへし奉りぬ○正喬か長子備前守正秋は病者なりけれは三男隱岐守を嗣とせしにそれも享保十八年の夏うせたりけり）享保十八年七月二十八日はしめて見參し十二月從五位下能登守に任し（後飛驒守またた豐後守）父か致仕の日家ゆつられ寛延二年七月廿三日御奏者の事をうけたまはり寶曆九年職をゆりて從四位に昇りおなしき十二年十二月九日大坂の城代になり明和元年六月二十一日所司代にうつり侍從に任すおなしき六年八月十八日西城の宿老に補す安永八年孝恭院甍御ののち四月十六日本城にうつりて末座にかはり明る九年七月六日連署の列となり十一月廿四日年六十五にして卒す正元これよりさき正喬六男滿之進正敏を養て子とし寛延二年五月始めて見參にいれしかは（時に十九歳）その冬從下の五位に叙して能登守になさる家つきて後天明元年四月二十一日御奏者となり十二月從下の四位し四年五月二十一日大坂の城代となる正敏はしめ弟織部正陳（豐後守正元か二男なり）を子とせしか天明元年に先たちてうせけれはをのか子兵庫正識を嗣に定む二年七月朔日正識見參しやかて叙爵し美作守に任す

青山

藤原忠成

忠俊

宗俊

某　忠丸　早世

女子　實稲葉民部少輔一通女　本多上佐守忠隆室

忠貴　左衞門　初正俊　忠義
實因幡守宗俊五男
筑後守從五位下
元祿二年十二月十七日叙任
正德三年閏五月十二日卒五十六歳
法名本光院頓室紹圓

女子四人　三人早世
伊達左京亮宗春室

某　豐丸　早世

女子　九鬼萬之介隆直室離別

某　犬松　早世

女子　詐嫁安部彌一郎信常早世

某　岩五郎　早世

女子四人　共早世

某　伊織　早世

女子二人　家人青山主水貞信妻
青山備前守秘成養女

女子　早世

忠重　冬松　喜大夫
實因幡守宗俊二男
下野守從五位下
天和三年十二月四日叙任
正德四年九月廿六日改因幡守
享保七年六月十八日致仕號清休
同年十月十八日卒六十九歲
法名眞正院清休義泉

某　喜太郎　早世

俊春　冬之介　初宗忠　俊重
下野守從五位下
正德四年十二月十八日叙任
享保七年六月廿二日改因幡守
同十五年七月十八日卒三十一歲
法名玉雲院榮嶽紹通

某　辰之助　早世

忠雄　伊勢千代　初忠親
和泉守從五位下
寛文三年十二月廿八日叙任
貞享三(二)年八月八日卒廿五歲
法名俊松院廣巖紹潤

忠重　冬松

貞俊　民之介　因幡守
寛文七年三月十七日卒十七歲

忠義　左衞門

女子　永井信濃守尙長室再嫁
牛井驢庵成明離別

某　藤吉

某　鶴之介　早世

忠朝　七二郞　刑部
初幸賢　忠知
實播磨守幸督二男
伯耆守從五位下
享保十五年十二月十八日叙任
延享二年十月廿五日改因幡守
寶曆八年十一月廿八日從四位下
同十年七月十五日卒五十三歲
法名隆興院眞空紹觀

忠高　秀五郞
初正幸
實大膳亮幸秀七男
下野守從五位下
寶曆四年十二月十八日叙任
天明元年六月廿四日致仕
同五年十二月十一日改左兵衛佐

女子　早世

某　冬次郞　早世

女子
岡部美濃守長備室

忠講　春橘
伯耆守從五位下
安永九年十二月十八日叙任
天明五年七月十八日卒二十一歲
法名岱嶽院知觀紹勇

女子
牧野備前守忠精室

忠裕　久之介

女子二人
松平内藏助正邦養女
許嫁青山内記成久離別
嫁松平帶刀信彌

忠裕 久之介
實忠高三男
下野守從五位下
天明五年十二月十八日叙任

幸成

幸利 石之助
大膳亮從五位下
寛永十年十二月廿九日叙任
貞享元年八月二日卒六十九歳
法名成覺院一法道山

幸通 左近 喜右衛門
丹後守
今青山吉九郎幸發祖

幸方 内記 藤右衛門
信濃守
今青山恒次郎幸堅祖

幸隆 藤藏
今青山丹下幸延吉五郎幸飽等祖

幸實 虎介
大藏少輔從五位下
承應三年十二月廿八日叙任
延寳八年十一月依病籠居
寳永二年六月十七日卒六十八歳
法名凉巖院徹秀光山

女子
松平因幡守信興室

幸督 石之助 藤七
初幸明
播磨守從五位下
天和二年十二月廿七日叙任
寳永七年閏八月十八日卒四十六歳
法名泰源院光鑑雲英

幸澄 兵部
近江守 駿河守

幸能 鐵之介
實幸督三男
享保九年閏四月廿七日自殺家絶

女子二人
下野忠重室
内田右京正藤妻

女子二人　堀美作守親昌室　水谷左京亮勝宗室

女子　松平伯耆守信久室信久卒　嫁山口平兵衛重直

某　金次郎
享保八年八月九日卒

某　藤七郎
享保十二年九月十二日卒

幸篤　伊織
播磨守従五位下
寛保元年十二月十九日叙任
延享元年五月依病籠居
安永七年七月廿五日卒五十四歳
法名寛光院慈雲耀山

幸秀　藤次郎　初幸侶　成英　又幸侶
大膳亮従五位下
寳永七年十二月十八日叙任
延享元年九月八日卒四十九歳
法名覺樹院了雄忠山

幸通　鎌次郎　主計
大膳亮従五位下
延享元年十二月十六日叙任
寳暦十年六月改大藏少輔
同十三年十二月改大和守
安永四年十二月十一日致仕
同八年十月晦日卒五十五歳
法名歡喜院義天喬山

某　仙次郎
寳暦十三年六月十日卒十七歳

某　吉五郎　早世

幸完　式部
大膳亮従五位下
明和七年十二月十六日叙任

女子
秋田山城守淸秀室

―忠朝　七三郎

―幸能　織之介

―某　鵜之助

―女子二人

―某　卯之助　早世

―幸充　貞五郎　主水
寶曆七年十月廿一日卒

―忠高　秀五郎
因幡守忠朝養子

―女子
相馬因幡守恕胤室

―幸弼　龜三郎
寶曆十年三月廿日卒十八歲

―幸卓　主税

―幸賢　恒次郎　美濃守
青山百助幸充養子

―幸渡　力五郎

―女子
青山玄九郎幸堅妻

青山

○和泉守藤原忠雄は（初忠親といふ）因幡守宗俊か子也明暦二年九月十九日はしめて謁し奉り寛文三年叙爵し和泉守に任し延寶七年四月九日父か遺領を賜ふ（遠江國濱松の城五萬石）嗣なかりけれは弟喜大夫忠重をやしなひて子とし貞享二(三)年の秋卒す三十五歳忠重これよりさき寛文二年十二月十一日初見の禮をはり天和二年の冬従五位下下野守に任し（のち因幡守）父かうせし年の十月十日家をつきて元祿六年十一月七日奥詰の衆に加はりしかあくる七年の二月二十七日ゆるされぬおなしき十五年九月七日丹波國龜山の城にうつり（井上大和守正春にかはる）享保七年の夏致仕して清休と號しその年の冬六十九歳にして身まかりぬ男子なかりけれは弟左衞門忠貴を子とす忠貴寛文八年はしめて謁し奉り元祿二年十二月叙爵して筑後守に任せしか正徳三年閏五月十二日父にさきたちて卒しけれはそのゝちまうけたる息男冬之助俊春（初宗忠後重）をよつきとすおなしき四年九月十五日はしめて謁し奉り従五位下下野守に任し（のち因幡守）父か致仕せしとき家をつき享保十五年七月十八日三十一歳にして卒す其子刑部忠朝（初忠賢又忠知）實は支族播磨守幸督か二男なり享保十年九月朔日はしめて謁し奉り家繼し年の十二月従五位下伯耆守に任す（のち因幡守）延享元年七月朔日御奏者の事を奉り寛延元年八月寺社奉行をかねたりこの年八月三日龜山を轉して同國篠山の城にうつされ（松平紀伊守信峯にかはる）寶暦八年十一月二十八日大坂の城代となり従四位下に叙しおなしき十年七月十五日五十三歳にして卒す子なかりしかは同族大膳亮幸秀か七男秀五郎忠高（初め正幸）をやしなひてよつきとす寶暦四年の秋はしめて謁し奉りこの冬叙爵して下野守になり父か卒せし年の九月八日家つきしか身いたはるところおほく奉公に堪かたけれは天明元年の夏四十八歳にて致仕す（後右兵衞佐にあらたむ）其子伯耆守忠講家をつく安永九年八月二十二日はしめて謁し奉りことし叙爵し父につきて後天明五年七月二十一歳にして卒すいまた子なかりけれは弟久之助忠裕をよつきとす忠裕九月十日家つきて従五位下下野守に任す（十七歳）

○大膳亮藤原幸利は大藏少輔幸成か長子寛永十年の冬叙爵し同しき二十年三月二十六日父か遺領をたま

ひ（攝津國尼か崎の城五萬石）六月七日所領の地を舍弟等にわかちあたふ（左近幸通に三千石内記幸方に二千石藤藏幸隆に千石此内四千石は私墾田なり）萬治二年二月二十一日御奏者の事を奉はりしか寛文八年十月二十一日ゆるされて貞享元年の秋卒す（六十九歳）嫡子大藏少輔重實病者なるにより孫の藤七幸督をよつきとす幸督延寶六年五月十日はしめて見えたてまつり天和二年從五位下播磨守に任し祖父か死せし年の九月家をつき貞享三年十一月二十七日御奏者となり元祿七年八月十九日弟兵部幸隆に所領わかつ（新田二千石）おなしき十二年十月十三日寺社奉行をかぬ此職にある事四年にして同十五年六月五日ゆるさるこれは所領尼か崎は大坂に近く要害の地なれは久しく江戸にありてその城を空くすへからすとの御旨かうむり寶永七年の秋尼か崎の城に卒しぬ四十六歳その子藤次郎幸秀つく幸秀寶永四年八月十二日まみえ奉り家つきし年の十二月十八日從五位下して大膳亮になる正德元年二月十一日信濃國飯山の城にうつり（永井伊豆守尙昌にかはる）享保二年二月十一日丹後國宮津の城にうつる（奥平大膳大夫昌春にかはる）延享元年九月身まかれり（四十九歳）嫡子金次郎次男藤七郎世を早うし三男播磨守幸篤は多病なりしかは四男主計幸道を嗣とす幸道はしめ元文二年の九月十八日初見の禮をはり父におくれし年遺領を賜はり從下の五位して大膳亮に任し（後大藏少輔又大和守）寶曆八年十二月二十七日美濃國郡上にうつり安永四年十二月致仕して其の子大膳亮幸完に家をゆつりおなしき八年卒す五十五歳幸完明和六年十二月朔日はしめて見えたてまつり次のとし叙爵し（十九歳）家つきし後安永八年八月二日御奏者の事をうけたまはる

藩翰譜續編卷之五下

● 永井
信濃守尙長
伊豆守尙敬

● 安藤
近江守直種
對馬守重博
隱岐守重常
伊豫守重形

● 板倉
越中守重宣
內膳正重種

● 井上
中務少輔正任
遠江守正長
筑後守正敞

● 森川
出羽守重信

● 久世
大和守重之

● 稻垣
信濃守重昭
安藝守重定

● 西尾
隱岐守忠成

● 三浦
志摩守安次

● 米津
伊勢守政武

永井

大江直勝

尚政

尚征

尚房 大膳　越中守　從五位下　承應三年十二月廿八日叙任
寛文五年七月十九日卒　廿九歳　法名永明院透雲徹参

女子 早世

某 萬助　早世

女子三人 市正直時室
增山兵部少輔利順室
有馬宮内則故妻

尚長 傳三郎　土佐守　從五位下　寛文八年十二月廿八日叙任　延寶三年十二月八日　改信濃守
同八年十一月廿六日　爲内藤和泉守忠勝被害　二十七歳　法名霄空院天永尚長

女子　有馬宮内則故後妻

尙仍　龜之助
市正直時養子

女子二人　家人中村小兵衞光慶妻
高部伊豫守忠弘妻

某　傳勝　早世

直圓　萬之丞　大膳
初眞貞　直好　靭負
延寶八年八月七日繼尙長
能登守從五位下
元祿十四年十二月十八日敍任
寶永七年十一月三日致仕
元文元年五月八日卒六十六歲
法名法雲院花顏誼圓

女子　早世

直泰　豊熊
近江守直種養子

直亮　直之助
初直恒
播磨守從五位下
寶永七(六)年十二月十八日敍任
元文二年六月廿七日卒四十五歲
法名淸節院直心一指

女子二人　共早世

某　政之丞　早世

某　千次郞　早世

女子　早世

某　金十郞　早世

直國　金彌
初直艮
信濃守從五位下
寬保元年十二月十九日敍任
明和二年二月四日卒四十三歲
法名岱雲院顯功英岳

某　多宮

直孝　傳八郎
寶暦二年七月廿六日卒

直温　大膳　傳八郎
信濃守從五位下
明和二年十二月十八日叙任

女子四人
一人早世
松浦豐後守矩室
本庄近江守道昌室
永井大之丞直高妻

直方　鐵次郎

直期（サネ）　文九郎
備後守直實養子

女子三人
二人早世
家人稻垣玄泉某養女
一人早世

直度　大之助
享保廿年二月二日卒

女子
永井宮內直賢妻

直敎　大七郎
寛保二年十一月廿七日卒

直次　五郎二郎
寛延元年八月十八日卒

正邑　松之丞
增山大學正元養子

女子二人
一人早世
大澤隼人基房妻

直寛　平次郎
妻木伊左衞門頼勝養子

女子　堀田孫七一暾妻

直道　直次郎　永井百助直羽養子

直閑　直三郎　高井隼之助實員養子

元暢　長田熊五郎　前田新八郎定訣養子

女子

尙庸

女子

直敬　大學　初尙富
伊賀守從五位下
延寶五年閏十二月廿六日叙任
寶永二年九月廿二日改伊豆守
正德元年六月三日卒四十八歲
法名正功院傑眞寬英

女子　諏訪出雲守忠尋室忠尋卒嫁新庄駿河守直祐

尙平　左衞門　大學
伊賀守從五位下
正德元年七月晦日叙任
同四年八月廿九日卒十八歲
法名享德院元英自性

直陳　主馬　初尙英　眞信
實伊豆守直敬三男
伊豆守從五位下
正德四年十二月十八日叙任後改伊賀守
寶曆十二年八月七日致仕
同年十一月廿六日卒六十四歲
法名賢覺院機雲觀忠

尚昌 刑部
今永井主水尚喜祖

定盈 藤十郎
松平數馬定知養子

女子 早世

乘善 十三郎
淺草大護院

某 萬次郎

女子 早世

某 伊織 早世

女子二人 一人早世
小笠原左衛門佐信胤室離別　嫁松平式部近輝
後嫁大久保彦兵衛忠烈

尚只 長之助
永井伊豫守直右養子

女子
土方丹後守豊義室

直陳 主馬

某 小四郎 早世

尚方 勘解由
今永井勘解由尚友祖

尚趡(ヨシ) 左京
内藤大和守賴卿養子

尙俶（ヨシ）主馬
若狹守從五位下
元文五年十二月廿一日敍任
寶曆六年十月四日卒三十歲
法名受德院泰應英淳

女子　松平對馬守親盈室

尙志（ユキ）增次郎　兵部
山城守從五位下
寶曆六年十二月十八日敍任
同十一年九月八日卒廿八歲
法名寬良院英粲泰忠

尙備（ミツ）保之助　玄蕃
實勘解由尙方二男
伊賀守從五位下
寶曆十三年十二月九日敍任
明和六年七月十八日卒廿七歲
法名高岳院凌雲義堅

直淸

女子二人　伊賀守直備室
榊原甲斐守長良妻

女子　松平和泉守乘完養女

直舊（ヒサ）大學
從五位下伊賀守
天明四年十二月十六日敍任

直憙（ヨシ）龜之丞
太田主水正資厚養子

直義

直弼　永井友吉

直時

直種 龜之助　民部　初尙仍　直只　直賢
實右近大夫直征四男
日向守從五位下
延保五(三)年閏十二月廿六日叙任
後改近江守
元祿八年四月廿二日卒三十八歲
法名眞淨院月溪宗印

女子二人 共早世

直期 サネ 文九郎
實能登守直圓五男
飛驒守從五位下
享保二年十二月廿一日叙任
寬延元年正月十六日致仕
寶曆八年十二月十八日改左京亮
明和二年四月廿二日卒六十三歲
法名三徑院菊隱宗芳

直達 豐熊　初直泰
實能登守直圓嫡男
日向守從五位下
元祿十六年十二月廿一日叙任
寶永三年七月晦日卒十八歲
法名高松院節溪宗貞

女子 直達室

直英 傳之助

直行 流之助
近江守從五位下
延享元年十二月十六日叙任
寶曆八年四月廿二日卒二十九歲
法名本眞院月洞宗廓

女子三人
保科越前守正富室
飛鳥井大納言雅重卿室
水野筑後守忠興室

嚳空 京都相國寺塔頭養春院

直英 傳之助
實直種二男
備後守從五位下
寶永六年四月廿五日叙任
正德五年正月十七日卒廿一歲
法名天眞院月江宗閑

女子
河野中納言公繩卿室

直珍 虎之助　數馬
實直期三男
飛驒守從五位下
寶曆八年十二月十八日叙任
明和七年十一月十七日卒二十九歲
法名圓乘院諦空宗賢

—直珍（ヨシ）　虎之助

—成融（ミチ）　主税
牧野傳藏成如養子

—清英　英次郎　初重固
石谷大助清鄰養子

—次因　吉之助　帶刀
安藤帶刀次由養子

—重光　岩之助

—女子二人
信濃守直溫室
伊澤內記方守妻

—直進　虎之助
從五位下日向守
安永七年十二月十六日叙任

—某　虎之助

—忠昶（アキ）　酒之丞
本多斧三郎忠堅養子

—女子

—女子
本多孝之助正德妻離別
嫁六鄕佐渡守政武

永井

○信濃守大江尚長は右近大夫尚往か三男也嫡男越中守尚房二男萬助ともに世を早うしけれは尚長をよつきとす尚長寛文六年五月二十七日はしめて謁し奉りおなしき八年の冬従五位下土佐守に任し（のち信濃守にあらたむ）延寶二年八月十日父か遺領をたまふ（丹後國宮津の城七萬三千六百石餘）同しき七年十一月朔日御奏者の事を奉はりあくる年御代あらたまりて増上寺において御法會行なはれし時尚長及ひ内藤和泉守忠勝その事をあつかり日ことにまふて六月二十六日かしこにて忠勝かために害せられたれは（内藤か傳あはせ見るへし）所領の地除かれぬしかるに尚長弟あるよし御聴に達しけれはこの年の八月七日弟万之丞直圓（初め直重直好）にあらたに大和國にて所領賜はり（一萬石）九月二十七日はしめて謁し奉る元祿十四年の冬従五位下能登守に任し寶永七年の冬病に因て致仕し年六十六にして元文元年五月八日病に身まかりぬ嫡子豊熊直泰は近江守直種に養はれて二男直之助直亮世繼となり寶永六（七）年十月二十八日はしめて謁し奉り父かゆつりをうけて家をつき叙爵して播磨守に任す享保八年三月朔日大番の頭となりおなしき十三年六月十一日職を辭し十七年閏五月四日大坂の城の定番を奉はり元文二年の六月二十七日彼地にありて卒す年四十五長男金十郎さきたちてうせけれは二男金彌直國をよつきとす直國ことし八月二十七日遺領を賜はり明る年の十月朔日はしめて謁し奉り寛保元年十二月叙爵して信濃守になり明和二年二月四日卒す四十三歳嫡子傳八郎世を早うしけれは二男大膳直溫家をつく直溫はしめて明和元年閏十二月十五日はしめて謁し奉り父かうせし年の三月二十五日遺領をたまふことし叙爵して信濃守に任し天明元年七月十三日大番の頭となる（三十五歳）

○伊豆守大江尚敬（はしめ伊賀守尚富）は伊賀守尚庸か嫡男也延寶二年八月十日はしめて謁したてまつりおなしき五年五月十九日父か遺領を賜ひ（三萬石山城河内攝津の内）ことし叙爵して伊賀守に任す貞享二年九月十四日御奏者の事を奉り四年十月二十一日下野國烏山の城を賜はりて移る元祿七年十一月十五日寺社奉行をかねたり同しき十五年九月朔日赤穂の城にうつりて所領ましくはへらる（三千石）寶永元年十月朔日少老の職に補せられ三

年の正月二十八日信濃國飯山の城にうつり（松平遠江守忠喬に代る）十月五日西城の少老になり正德元年二月十一日また武藏國岩槻の城にうつる（小笠原山城守長信にかはる）年四十八歳にして卒す嫡子大學尙平寶永四年二月二十八日はしめて謁し奉り正德元年七月二十五日家つきて弟等に所領を分つ（主馬尙貞に所領の内千石新田五百石岩之丞尙方に新田千石）ことし叙爵して伊賀守に任し四年八月二十九日年十八にしてうせぬいまた子なかりしかは弟主馬直陳（はしめ直英直信）して家つかす直陳これよりさき所領分たれし年の七月二十六日はしめて謁し奉り兄か卒せし年の十月二十一日家をつき（そのか采地千五百石は返したてまつりぬ）十二月従五位下に叙し伊豆守に任す（のち伊賀守）元文四年九月朔日御奏者の事を奉はる寶暦六年の夏岩槻を轉せられて美濃國加納の城にうつる（安藤對馬守信友にかはる）同しき九年の七月六日病によりて御奏者の事ゆるされ嫡子若狹守尙俶二男山城守尙志ともにさきたちてうせしかは尙俶か女のありけるを弟勘解由尙方か二男玄蕃にあはせて嗣とし同しき十二年の秋致仕す（ことし十一月廿六日六十五歳にて卒す）玄蕃尙備ことし六月朔日はしめて謁し奉り家つきて明る十二年の冬叙爵して伊賀守に任し明和五年大坂の城の守に行しかかしこにてあくるとしの七月十八日二十七歳にして卒す嫡子大學正舊ことし九月十六日家つき天明六年二月十五日はしめて謁し奉り十二月叙爵して伊賀守になる（十七歳）

○近江守大江直種（初忠仍直只又直賢といふ）は右近大夫尙德か四男也（前編二男に作るはあやまり也）市正直時にやしなはれて延寶三（五）年五月二十六日はしめて謁し奉りことしの冬叙爵して日向守に任し（後遠江守にあらたむ）おなしき八年閏八月十九日家ゆつらる（攝津國高槻の城三萬六千石）元祿八年の夏病にふし日を經ていたはり候ひけるかいまた家つかすへき子なかりしかは一族能登守直圓か嫡男豐熊を子ことし年三十八にして四月二十二日ついに起すなりぬ豐熊直達（初め直奉）ことし六月十九日家をつきおなしき十二年九月十五日はしめて謁し奉り十六年の冬叙爵して日向守に任す寶永三年七月晦日十八歳にして世を早うしけれは近江守直隆か遺服の子傳之助直英してよつきとし九月二十五日直達か家つかせらる直英おなしき二十八日はしめて見へたてまつり（襲封の事を謝し奉りし也）六年の夏従五位下備後守に任す正德五年の春二十一歳にして卒すこれも子なかりしかは能登守直圓か五

男文九郎を養ひ子とす文九郎直期その年の三月十八日父か遺領をたまひ四月朔日家つきし事を謝し申してはしめて拜謁し享保二年の冬敍爵して飛彈守に任し延享五年の春致仕す 左京亮にあらたむ明和二年四月二十二日卒す六十三歳 長子流之助直行これよりさき延享元年はしめて見えたてまつり敍爵して近江守に任す父かゆつりをうけしのち寶暦八年歳二十九にして卒すその子虎之助直珍つく直珍實は弟なりおなしき年七月朔日はしめて謁し奉り 襲封を謝せし日なり ことしの冬從五位下飛驒守に任し明和七年十一月十七日うせぬ 二十九歳 嫡子虎之助直進あくる年の正月十六日家つきて安永七年二月十五日はしめて拜謁しことしの冬從五位下日向守に任す 十八歳

安藤

藤原重長

某　松千代　早世

女子二人　共早世

信易　八豊　政藏　初信全　信員
享保十一年正月廿二日卒十四歳

女子二人
實長島道仙秀房女
大和守信周室
實京極若狹守高成女
大久保山城守忠胤室

重之

重博　伊勢千代　主稅　初重貞　重治　重孝
對馬守從五位下
承應三年十二月廿八日叙任
元祿十一年八月九日卒五十九歳
法名定惠院不溫覺晦

女子
實藤堂大學頭高治女
井伊伯耆守直武室

女子
小出大和守英益室

信友　政藏　初重與　重行　信賢
長門守從五位下
貞享二年十二月廿八日叙任
寶永六年十一月十三日改右京進
正德元年十一月十一日改右京亮
享保三年八月四日從四位下
同月八日改對馬守
同七年十二月十五日侍從
同十七年七月廿五日卒六十二歳
法名龍德院賢譽濤哲

女子
酒井下野守忠寬室

信周　勝之助　主膳
實安藤壹岐守重常嫡男
大和守從五位下
享保九年十二月十八日叙任
同十二年六月七日卒四十一歳
法名敞曠院臻譽義雲

女子
實信周女
藤堂大膳亮高豊室

女子二人
一人早世
安藤內藏助信名妻

信尹　彥九郎　與三郎
對馬守從五位下
享保十七年十二月十六日叙任
寶曆五年二月有命致仕
同九年十二月十六日改大和守
明和七年十二月晦日卒五十四歲
法名興德院義譽仁護

女子
大久保山城守忠胤養女

女子二人
上杉駿河守勝承室
中山勘解由直寛妻

某　吉五郎　早世

信成　勝藏　初信明
從五位下對馬守
寶曆九年十二月十六日叙任

女子
中川勘三郎忠英妻

次猷（ノリ）　勝之助　帶刀　初信祥
安藤帶刀寛長養子

次姿（カタ）　七太郎　小膳　初信子
安藤九郎左衛門信憲養子

女子　早世

信敬（ユキ）　祐次郎　圖書
天明五年十一月十一日依病籠居

信馨　林三郎　勝藏

信邦　金之丞

安藤

○對馬守藤原重博は右京進重長か嫡孫也父式部少輔重之は寛永十八年の冬世をはやうしけれは重博よつきとなり慶安六年十一月二十八日はしめて見えたてまつり承應三年の冬叙爵し明暦三年十一月二十一日重長か遺領たまはり（上野國高崎の城六萬石）叔父等に所領をわかつ（內藏助重好に五千石彦八郎重常に千六百石）寛文四年二月晦日御奏者のことを奉はり延寶四年七月二十五日身のいたはりしによりて職を辭す元祿八年五月朔日所領の地を加へられて（五千石）備中國松山の城にうつさるおなしき十一年の秋卒す五十九歳その子政藏信也（初重興重行信賢）天和元年十月二十八日はしめて見へ奉り貞享二年從五位下の長門守に任し（後右京進右京亮對馬守にあらたむ）父か世をさりし年の十月三日遺領をたまひ寶永元年十月九日御奏者の事をうけたまはりおなしき三年十一月二十六日松平彈正忠正久松平宮內少輔忠尙と同しく西城の御奏者となる御代あらたまりて後おなしき六年十一月二十三日寺社奉行をかぬ正德元年十二月十五日備中國を轉せられ美濃國加納の城を賜はりてうつる（松平丹波守光豐にがはる）（城下の地六萬石近江國蒲生郡のうちにて五千石を賜ひしなり）おなしき三年三月十二日病により職とかん事をこひしかは寺社奉行はゆるされ御奏者は元の如く享保二年十月五日仰をうけてふたたひ寺社奉行をかぬあくる三年八月四日大坂の城代になされ從四位下に叙しおなしき七年五月二十一日執政の職に補せられてこの冬侍從に任す九年十一月十五日若君（惇信院殿の御事）につけられ御料の御刀を賜ふ（了戒）同しき十七年七月二十五日六十二歳にして卒す（この家はしめは源氏と稱す信友か時にみけしき蒙りて藤原にはなりてけり是は一とせ京師六孫王の社を修造せし時清和源氏一統の始社なれはその首裔たらんものは經營の費用をおほせらるへきにて一萬石以上家々の譜狀を檢せられしに信友も源氏と稱し來れりといへともそのすちたしかならすおほくは藤原にもやとそんすかゝるついてをもて上裁をあふき侍らはやと申しけれは公にもいふかしきすちにおほしめし信友さおもはんにはさらに異儀なからんとのたまひけれはやかて改せめてしなり信友か祖の弟に帶刀正次といひしは紀伊殿につかへ參らせしか藤原氏と稱せしかは兄弟の家にてことなるへきやうもなく家號も安藤にて源氏と稱せんは事たかひたれは公にもいふかしくのたまいし也）長男松千代二男政藏信易世を早うしけれは支族壹岐守重常か子大和守信周を養ひて子とす是れも父にさきたちてうせぬされと信周に一子あり與三郎信尹といふ信尹ことし九月十二日祖父か家をつき二十八日初めて見參にいり（家つきしことを謝し奉りし日なり）叙爵して對馬守に任す（後大和守）しかるに信尹年ころ身の行ひたゝしからす家中のおきてもあしかりしかは家人

等いきとおりて公に一紙の訴狀をさゝけ主人か僻事をそ訴へける申ところいつはりならねは信尹をも推問せられなは罪のほと斗りかたかりしに寛宥の御沙汰して寶暦五年二月四日御勘當ありて致仕籠居の身となりその子勝藏信明に家つかせ所領の地を削られて六萬五千石の内五萬石を給ふ明る六年の五月二十一日陸奥國磐城の平にうつさる信尹これより信成かもとにひそみいて明和七年の冬五十四歳にてうせぬ信成家つきしころはいまた成童にもたらさりしかは寶暦九年にいたりて十二月朔日はしめて見參し十七歳從下の五位して對馬守に任す安永三年十二月二十二日御奏者の事を奉はり天明元年閏五月十一日寺社の奉行をかぬ同しき四年四月十五日少老の職に補せられその子祐次郎信敬多病にして籠居し二男勝藏信馨よつきとなり同しき六年六月朔日はしめて見へ奉る

板倉

源勝重

重宗

重郷

女子

許嫁松平伊豫守綱政卒

重常　新十郎

隱岐守從五位下
萬治元年閏十二月廿七日叙任
元祿元年二月十六日致仕
同月廿一日薙髮號悠山
同年八月七日卒四十六歲
法名天祐院南室悠山

女子

女子二人

大田攝津守資直室
酒井帶刀忠親妻

重冬　岩之助　新十郎

實東市正重大嫡男
周防守從五位下
貞享三年十二月廿六日叙任
寶永六年三月廿三日卒三十八歲
法名德雲院利山源貞

女子

許嫁戸田日向守忠余卒
板倉帶刀勝音妻

重治　新十郎

近江守從五位下
正德元年六月四日叙任
享保九年三月廿五日卒二十八歲
法名鐵心院悟雲源旨

女子　堀田豊前守正休室

某　三十郎　早世

女子　實松平駿河守典信女　內藤志摩守忠次室離別　嫁中山東市正信行

女子　松平中務少輔信通室離別

女子

女子二人　一人早世　主水正勝志室

女子

勝元　次郎三郎　兵部　求馬　初勝賢

女子二人

某　早世

女子　板倉佐渡守勝清室

女子　早世

某　熊一郎　寶曆十二年閏四月十九日卒

女子　早世　山內攝津守豊泰室

某　早世

勝澄　新平　新十郎　初重矩
相模守從五位下
享保十七年十二月十六日叙任
元文二年三月廿一日改周防守
寶暦元年九月廿二日致仕
同年十一月十一日剃髪號源承
明和六年五月四日卒五十四歳
法名圓乘院無山源承

女子
實佐渡守勝信女
太田攝津守資俊室

勝武　左門　新十郎　初勝久
美濃守從五位下
寛延二年十二月十八日叙任
明和六年五月晦日卒三十五歳
法名天光院普照源海

女子

光邦　熊五郎　玄蕃　中務　初勝邦

女子四人
二人早世
前田大和守利尙室
堀靱負直泰室

勝從　利之丞

女子　早世

勝行　安之丞
兵庫勝信養子

某　吉之丞　早世

勝從　利之丞　隼人　初勝滿
實勝澄三男
隱岐守從五位下
明和六年十二月十八日叙任
安永六年六月廿八日改日向守
同七年二月十四日卒二十九歳
法名康長院英山源哲

勝政　鐵次郎

某　榮太郎　早世

勝峯　萬三郎　兵部　監物

某　松之丞　早世

忠郁（ミケ）　岩之丞　半十郎　半左衛門　初勝壽　忠尊
伊奈半左衛門忠敬養子

勝房　織之丞
澁川左京

女子三人
巨勢求女助利喬妻
菅沼新八郎定前妻
本多修理忠盈妻

勝政　鐵次郎　左近
實勝澄五男
從五位下左近將監
安永八年十二月十六日叙任

女子

某　新十郎

重形　次郎右衞門
伊豫守從五位下
寛文三年十二月廿八日叙任
貞享三年七月廿六日卒六十四歳
法名大圓院機外源用

女子三人
建部内匠頭政宇室
神保主膳元茂妻
堀長門守直矩室

某　龜丸
寛文十年二月廿五日卒

某　帶刀　早世

重同　百助　靭負
實神保主膳元茂三男
伊豫守從五位下
元祿十二年十二月十一日叙任
享保二年六月九日卒三十九歳
法名祥額院峯源瑞

女子二人
建部丹波守政民室
杇木和泉守直綱室

勝淸　百助　初重淸
伊豫守從五位下
享保五年十二月十八日叙任
同廿年六月五日改佐渡守
寶曆十年四月朔日從四位下
明和四年十二月二日侍從
安永九年六月廿八日卒七十五歳
法名泰圓院壽山源翁

女子
板倉修理勝丘妻

女子　周防守勝澄養妹

勝曉　百助
從五位下伊勢守
寛保元年十二月十九日叙任

某　鐸次郎
明和三年四月十八日卒

勝意（アキ）　延次郎　百助
實勝淸六男
伊豫守從五位下
天明五年十二月十八日叙任

女子
本多河内守忠武室

氏興　彌五郎
北條新藏氏應養子

女子
水野壹岐守忠見室

正久　他十郎　齋宮
內藤甚右衛門正爲養子

女子　早世

親房　大藏
本堂源之助榮親養子

重昌

重矩

重良 長吉 左京
周防守從五位下
萬治二年十二月廿八日叙任
後改伯耆守依病籠居
元祿十年十月十七日卒六十歳
法名惠林院空山源長

重宣 三十郎 左京 初重相
初板倉筑後守重直養子
越中守從五位下
延寶六年十二月廿八日叙任
貞享元年八月廿一日卒廿一歳
法名安養院泰翁源山

重高 熊之丞 頼母 初重淸
實小出信濃守英和二男
越中守從五位下
寶永六年三月七日叙任
正德三年二月十日卒四十八歳
法名淨泰院德巖源芳

某 熊太郎
寶永二年六月廿二日卒

昌信 豊次郎 右近 初重宇
讃岐守從五位下
正德二年十二月十八日叙任
享保十三年十月九日改右衞門佐
同十四年閏九月廿一日改因幡守
同十五年四月廿七日卒三十七歳
法名永宵院雙山源夢

女子
內藤下總守正敬室

勝興 右近
攝津守從五位下
元文五年十二月廿一日叙任
天明四年三月九日致仕

女子二人
堀大膳亮直著室
石川阿波守總恒室

勝志 ユキ 鶴吉 主水
主水正從五位下
天明四年十二月十六日叙任
同五年二月廿九日卒四十一歳
法名永光院一山源珪

勝紀 慶次郎

女子二人
大久保長門守教倫室
永井左門尙綱妻

勝職　隼次郎　六左衞門
後至親
巨勢伊豆守至忠養子

勝喜　利次郎

女子

某　老之助
明和八年五月十二日卒

勝喜　利次郎
實勝興男
從五位下主水佑
天明五年十二月十七日叙任

某　春之進

女子

重澄　久米之助　新右衛門

重種　辨之助　六左衛門　初重道
兵庫頭從五位下
寛文元年十二月廿八日叙任
同三年十月二日改石見守
延寶八年九月廿一日改內膳正
同年十二月廿八日從四位下
天和三年五月十八日致仕
元祿五年五月十二日號玄眞
寶永二年九月十九日卒六十五歳
法名了空院實山源眞

女子一人
高木主水正正盛室
松平對馬守昭重室

某　辰之助
加藤織部正直泰養子早世

女子四人
實小笠原左衛門佐敬信女
中院前內大臣道茂公室
實高木主水正正盛女
脇坂市正安村室
相馬出羽守貞胤室
內膳正重種養女

重寛　千次郎　式部　初重長　重知
甲斐守從五位下
貞享二年十二月廿八日叙任
享保二年八月三日致仕
同五年十二月十八日改將監
同六年閏七月十一日卒五十三歳
法名實崇院義峯源卓

女子　早世

女子
實重矩女
相良志摩守賴福室

重泰　千之助　初重信
出雲守從五位下
寶永二年十二月十九日叙任
享保三年閏十月廿四日卒三十八歳
法名大通院了雲源智

女子　早世

勝里　靭負　式部　初重房
實高木主水正正陳二男
甲斐守從五位下
享保五年十二月十八日叙任
寛保三年七月廿一日卒三十八歲
法名眞空院徹參源慧

女子二人
一人早世
龜井因幡守玆滿室玆滿卒
嫁小出信濃守英知

勝行　安之丞　藏人
實周防守勝澄四男
備中守從五位下
明和五年十二月十八日叙任
安永二年八月十六日卒廿二歲
無嗣以勝矩奉祀
法名寬亭院廓然源明

勝承ツク　式部
內膳正從五位下
寬延二年十二月十八日叙任
明和三年三月廿一日卒三十一歲
法名玄泰院寬通源通

勝任　富之助

方綱　鍋三郞
渡邊圖書頭定綱養子

女子二人
一人早世
松平主稅勝延妻

勝矩　定五郞
安永二年八月廿一日繼勝行
河內守從五位下
安永二年十二月十六日叙任
同四年十二月廿七日卒三十四歲
法名桃溪院仙翁源齡

勝任　富之助　兵庫
實勝里二男
明和三年七月七日卒三十一歲
法名諦公院宗心源洞

女子
勝任養女

某　新次郞　早世

勝長　伊三郞
從五位下內膳正
安永九年十一月十八日叙任

女子
加藤出雲守泰賢室

女子
實勝承女
一柳土佐守末英室

女子
土井大炊頭利和室

勝延 延次郎

某 千次郎

女子

勝幹（モト） 熊吉

勝友 銀次郎

板倉

○隱岐守源重常は阿波守重鄕か嫡男 承應三年閏七月六日初めて拜謁す 萬治元年叙爵し寛文二年二月十八日父につき 下總國關宿の城四萬五千石 同しき九年二月二十五日加恩の地賜はりて 五千石 伊勢國龜山の城にうつり 石川主殿頭忠勝にかはる 元祿元年二月十六日致仕して悠山と號す 同年八月七日 四十六歲にして卒すその子新十郞重冬は一族市正重大か嫡男なり延寶八年十二月十一日はしめて謁し奉り貞享三年從五位下周防守に任し重常か致仕の日ゆつりをうく元祿三年八月二十八日 奧詰となりしか あくる四年七月二十六日ゆるされぬ寶永五年閏正月十五日御奏者の事をうけたまはり同しき六年卒す 三月二十三日三十八歲 嫡子近江守重治家つきてことし五月二十八日はしめて見え奉り 家繼し事を謝せし日なり 明る年の正月二十六日志磨國鳥羽にうつり 松平和泉守乘邑にかはる 正德元年 叙爵して 享保二年十一月朔日ふゝひ伊勢國龜山の 城にうつさる 松平和泉守乘邑にかはる 九年三月二十五日うせぬ年二十八その子新十郞勝隆閏四月十八日家をつきおなしき十七年八月二十八日初めて謁し奉りことしの冬叙爵して相模守に任し 後周防守にあらたむ 延享元年の春備中國松山城に移る 石川主殿頭總慶にかはる 寶曆元年九月致仕して源承と號し明和六年五月四日五十四歲にして身まかりぬ長男新十郞勝武 はしめ勝久 家をつく勝武これよりさき寛延二年十二月朔日はしめて拜謁し同月叙爵して美濃守になり明和元年二月十五日御奏者の列に加はりおなしき五年の秋病により職ゆるされ明年五月晦日三十五歲にして卒す子なかりけれは弟隼人勝從をよつきとす勝從七月二十三日家つきておなしき二十八日はしめて謁したてまつりことしの冬叙爵して隱岐守に任し のち日向守にあらたむ 安永七年二月十四日二十九歲にして卒すこれも子なかりしかは弟左近勝政して家つかしむ勝政この月二十七日兄のあとをつき四月二十八日家つきしことを謝したてまつるとてはしめて拜謁す明る年の冬叙爵して左近將監に任し 二十二歲 後周防守 天明四年五月十五日御奏者の事をうけたまはる

○伊豫守源重形は周防守重宗か二男なり左大臣家に 大猷院殿の御事 仕へ奉り正保元年六月二十二日はしめて采地をたまふ 下野都賀郡の地にて千石 御代あらためて寛文九年十二月十三日兄重鄕に所領わかち賜ふ 攝津國下島郡五千石私墾田四千石采地に合せ

て一萬石となるおなしき三年の冬叙爵し十二年三月二十九日大番の頭に補せられ天和元年五月二十一日加恩の地賜はりて五千石上野國安中の地にうつされ大番の頭はゆるされぬ同しき三年二月二日寺社奏行になされしかあくる貞享元年七月病によりてこれを辭しおなしき三年七月二十六日卒す六十四歳重形男子三人ともに世を早うしけれは神保主膳惟家元義か二男百助重同をやしなひてよつきとすことし九月二十五日遺領賜はりて十月朔日はしめて拜謁し襲封を謝せし日なり元祿十一年十月二日御小性となりあくるとし十一月叙爵して伊豫守に任し同しき十四年四月六日昵近をゆるされて菊の間緣頰に候す明る十五年七月陸奥國泉にうつさる享保二年六月九日三十九歳にして世をさりけれはその子百助勝清はしめ重清八月三日家つきて同しき七日はしめて見え奉り家繼し事を謝し奉りし日なり五年の冬従五位伊豫守になりのち佐渡守十四年六月二十八日大番の頭に補せられ十七年八月七日御奏者の事をうけたまはり同しき二十年五月二日寺社奉行をかねて六月五日少老の職に移る延享三年九月二十五日遠江國相良を賜はりて移り寛延元年十一月十五日領地まし加へられて五千石餘合せて二萬石城主になされあくるとしの二月六日上野國安中の城を賜ふ内藤丹波守正首にかはる寶暦十年四月朔日御側御用人となり従四位下に叙し明和四年七月朔日宿老の職にすゝみ西城につかふ加恩の地賜はりて一萬石そへて三萬石侍従に任す中一年を經て六年の八月十八日本城の宿老となる勝清はしめ大番の頭に補せられしより公につかへ奉る事凡五十二年としつもりて七十五安永九年六月二十八日身まかりぬその子伊勢守勝曉寛保九年六月朔日はしめて見へたてまつりことし叙爵し安永五年四月日光山に御詣ありける時權に御奏者のことをうけたまはりて御供に候し父か卒せし年の八月十四日家をつき天明三年九月朔日御奏者の衆に加はりぬ時に五十七歳子なかりしかはこれよりさき安永九年弟延次郎勝意を養ひて子とす勝意天明四年十一月五日はしめて拜謁しあくる年二月叙爵して伊豫守に任す三十一歳

○越中守源重宣は初は重相伯耆守重良か嫡男内膳正重矩か嫡孫也父重良病多くしてこもり居りけれは叔父重種家をつく重宣は父のもとにひとゝなりて延寶五年三月十八日はしめて拜謁し明る六年叙爵して越中守

に任し天和三年五月十八日叔父重種致仕してその所領をわかち賜はり（二萬石信濃上總兩國のうち）貞享元年卒す（八月十一日年二十一歲）重宣子なかりしかは小出信濃守藤原英知か三男熊之助重高を養ひて子とす重高（はしめ重衛）ことし十月十九日遺領をたまひおなしき二十七日はしめて拜謁し元祿十二年二月四日備中國賀陽郡庭瀬にうつる寶永六年叙爵して越中守に任し正德三年十二月十日卒す四十八歲嫡子熊太郞世を早うしけれは二男右近昌信（はじめは重宇）嗣となる昌信去年六月二十八日はしめて見えたてまつりことしの四月十九日家をつきあくる年叙爵して讃岐守に任し（後右衛門佐また因幡守）享保十五年四月二十七日身まかりぬ年三十一その子攝津守勝興六月二十一日家つく元文二年閏十一月朔日はしめて拜謁しおなしき五年の冬叙爵し天明四年致仕す（六十三歲）嫡子主水勝志父につくこれよりさき寶曆十二年の九月朔日はしめて見え奉り家つきし年從五位下主水正に任し明る年十二月二十九日四十一歲にして卒すその子藏之助いとけなかりしか身まかりけれは弟利次郞勝嘉に家つかす勝嘉四月二十四日兄の遺領をたまひ同じき二十八日はしめて拜謁し（家繼し事を謝し奉りし日なり）ことしの冬叙爵して主水佐に任す（二十一歲）

○內膳正源重種（初は重近）は故內膳正重矩か三男也兄左京重良叙爵して周防守（のち佐渡守）に任せしに身つねにいたはる事多くて家つかすへうあらさりけれは重種嗣となりぬ重種未た六左衛門と申せし時明曆二年八月五日はしめて見へたてまつり寬文元年の冬從五位下兵庫頭に任し（後石見守又內膳正）延寶元年の七月八日家をつき（下野國烏山の城五萬石）おなしき五年六月廿一日御奏者の事をうけたまりて寺社奉行をかねたり八年九月廿一日宿老の職にすゝみ從四位下に叙し明る天和元年二月二十五日西城に屬られ所領加へらる（一萬石合て六萬石）武藏國岩槻の城にうつり（阿部備中守正邦にかはる）いくほともなくして御氣色にたかひ職とゝめられ籠居したり明る二年二月十日所領岩槻の城六萬石を收公せられ信濃國埴科郡坂本にて充行はれ（五萬石）なを籠居のさまにてゐたりしか同き三年にいたりて重種所領の地を公にかへしいれて身のいとまたまはらむ事をなけき申けれは重種には致仕の事をゆるされ所領を父祖の功勞をおほしめさるるによりてその子重寬と兄の子越中守重宣とにわかち賜はれり（重寬三萬石重宣二萬石）重種これより入道して玄眞と號

し老を養ひて寶永二年九月十九日六十五歳にして終りぬ千次郎重寛（初重長又重知）は天和元年九月廿九日はしめて見へたてまつれり父か所領わかち賜はりし後貞享二年十二月二十八日從五位下して甲斐守に任し元祿十五年十二月二十一日陸奥國福島にうつり城築てふたゝひ城もちとなる享保二年八月三日致仕しおなしき六年閏七月十七日五十三歳にて卒す其子千之助重泰これよりさき元祿十六年五月朔日初て謁し奉り寶永六年の冬叙爵して出雲守に任し父かゆつりをうけて家つきしあくる享保三年の閏十月二十四日卒す二十八歳子なかりけれは高木主水正正陳か二男靱負勝里を子としやしなふ勝里（初は重房）ことし十二月家繼ておなしき五年從五位下甲斐守になり寛保三年にうせぬ（七月十一日三十八歳）嫡男式部勝承九月二十日家繼て寛延三年六月朔日はしめて拜謁しことしの冬叙爵して內膳正に任し明和二年三月二十一日卒すとし三十一子なくして弟兵庫勝任を嗣とす勝任兄か家繼て六月朔日はしめて見へ奉り（家繼し事を謝し奉りし日也）明る三年七月七日三十一歳にしてうせぬまた子なかりけれは周防守勝澄か四男藏人勝行を養ひて八月二十九日家つかす勝行おなしき五年十二月朔日はしめて見へたてまつり從五位下備中守に任す安永元年大坂城の守りにあたりて翌年その任はててかへるさ八月六日尾張國起の驛にて卒す二十一歳これも世つきなりしかは同しき二十一日佐渡守勝淸か五男定五郎勝矩をして家つかせける勝矩十一月朔日はしめて拜謁し（襲封を謝せし日也）十二月叙爵して河內守に任し四年十二月二十九日三十四歳にして卒す長子新次郎世を早うしけれは二男伊三郎勝長をよつきとす同五年正月二十五日勝長家繼て九年十一月十八日はしめて見えたてまつりことし從五位下內膳正に任す（時に廿歳）

井上

源清秀

正就

正利

女子二人

松平三郎兵衛秀綱妻
植村右衛門佐家貞室

正任

大學　相摸守從五位下　慶安四年十二月廿八日叙任　後改中務少輔　元祿六年九月二日致仕　同十三年十二月十六日卒七十一歲　法名源正院了覺月任

某

主稅助　早世

某

兵部　早世

某

五郎　早世

正信　左兵衛

女子三人　青山大藏少輔幸實室　森州出羽守重信室　小出伊豫守吉侚室

正興　松之丞（助）　左門
今井幸八郎正章祖

正幸　大學
出雲守從五位下
寬文九年十二月廿五日敍任
元祿二年七月依病籠居
正德四年九月廿八日卒
法名性學院休山日榮

正岑　己之助　民部
大和守從四位下
元祿三年十二月廿六日敍任
寶永二年九月廿二日改河內守
同年十二月二日從四位下
同三年十二月十五日侍從
享保七年五月十七日卒七十歲
法名泰豐院亘覺知方日成

正善　主膳　早世家絕

正富　友之助　右近　實井上賴母正晴二男（長男）　土佐守從五位下
元祿十五年十二月十八日敍任　寶永元（七）年九月十二日歸之其家

女子
實正幸女
松平信濃守康房房康房卒
嫁本多淡路守忠員

正之　繁之助　民部
初正仲　正如
實酒井隱岐守可安長男
攝津守從五位下
寶永七年十二月十八日敍任
享保七年七月九日改河內守
元文二年九月十七日卒四十二歲
法名耕雲院顯明日耀

正經　民部
初正賢　利容　正燕
河內守從五位下
元文四年十二月十六日敍任
寶永六年五月七日從四位下
同八年十一月廿八日侍從
同十二年三月廿三日改大和守
明和三年五月晦日卒四十二歲
法名保光院善得登龍日門

某　己之助
寶暦元年七月廿七日卒

正定　鐵之進
初岑有
河内守從五位下
明和六年十二月十八日叙任
天明六年三月廿日卒三十三歳
法名善隆院義房日詠

正方　銀之助　早世

正峯　橘之助
遠江守正意養子

女子二人

女子　早世

正甫　武三郎

女子
許嫁土井大炊頭利延

女子
森和泉守可保室

實本多和泉守忠强女
大關兵庫頭忠喜室
松平伊豆守信明室

正長 主税 内記
初正方
遠江守從五位下
元祿十一年十二月廿五日叙任
享保五年十二月四日卒六十七歲
法名本義院正長日休

正矩 酒之丞
實井上賴母正晴三男
伊勢守從五位下
正德五年十二月十八日叙任
享保五年十月十三日卒三十歲
法名靈光院融玄日清

女子
正矩室

正敦 久之丞 内記
實井上主水正式二男
遠江守從五位下
享保六年十二月十八日叙任
寶曆三年六月廿日卒四十七歲
法名圓府院義天一相日如

女子
實正矩女
正敦室

女子二人
正長養女
正敦養女

女子
實正矩女
五島淡路守盛道室

正賀 久之丞 内記
備後守從五位下
寬延元年十二月廿一日叙任
同三年五月十七日卒廿歲
法名諦聽院顯成日念

正辰 藏人
實金森兵部少輔賴錦二男
遠江守從五位下
寶曆三年十二月十八日叙任
同十年五月廿七日卒二十五歲
法名義應院勸孚日了

正意　主税
遠江守從五位下
安永三(二)年十二月十八日叙任
天明四年二月十七日卒廿六歳
法名義智院彰山日輝

某　庄左衞門
八木又左衞門某養子

女子二人　金森飛驒守頼業室
一人早世

重遠　式部
酒井權兵衞重知養子

正照　權之助　早世

女子　松平伊豆守信輝室

某　宮内　早世

女子　丹羽和泉守氏音室

正峯　橘之助
初正房
實大和守正經四男
遠江守從五位下
天明四年十二月十八日叙任

正廣　一三郎

正皐　菊彌

政重――政次――正清

政蔽（アキラ）　宮内
筑後守從五位下
延寶四年十二月廿六日叙任
享保元年三月朔日卒五十六歳
法名玄悟院義山日登

政式　猪之助
今井上圖書政賢祖

女子二人
坪內惣兵衛定重妻
野々山彈右衛門元易妻

政鄰　監物
筑後守從五位下
享保元年七月廿二日叙任
同十六年八月七日致仕
寬保三年閏四月八日卒五十二歳

女子
久保賴母勝政養女

忠卿　大藏
酒井新次郎忠成養子

女子
鳥居一學成昭妻

正豐　兵部依病籠居

政森　宮内
實政蔽六男
山城守從五位下
享保十六（五）年十二月廿三日叙任
寶曆十年十二月七日致仕

政經　多宮
大河内又十郎政眞養子

某　忠次郎　早世

正森　宮内

女子
大澤下野守基清養妹

某　龜丸　早世

某　久菊　早世

女子　菅沼長吉定賢妻離別　嫁久永內記章温

某　六之助　早世

女子　井上圖書正富妻離別

正國　直之丞
實尾張中納言宗勝卿十男
筑後守從五位下
寶曆十年十二月十八日叙任

正紀　芳次郎
實竹腰山城守勝紀二男

女子三人
正紀室
一人早世

女子二人
正國室
井上修理正乘妻離別

井上

○中務少輔源正任は河内守正利か嫡男也寛永十六年閏十一月朔日はしめて拝謁し慶安四年十二月二十八日叙爵して相摸守に任す 後中務少輔にあらたむ 寛文九年六月十五日父につき 常陸國笠間の城五萬石○弟等に所領をわかつ事は前編に見へたり但松之助(丞)正興を左門に作る 九月七日御奏者の事を承はり延寶二年六月五日罪かうふりて閉門す この日松平兵部大輔か家人等見へ奉りし時それか名を披露申せしか或は主人の名或は家士の名両度まて申落ぬ正任さきにも職事につきてあやまりありて蟄居しけるにいまた麁忽のふるまひありけれはかくは御勘當ありしなり あくる三年にいたりて事ゆりたり元祿五年十一月十二日美濃國郡上にうつりあくる年九月二日致仕す同き十三年十二月十六日卒す年七十一嫡子大學正幸これよりさき寛文九年の冬叙爵して出雲守と申せしか多病なるによりて元祿二年二男民部正岑 はしめ正通 をよつきにさため十二月二十八日はしめて謁し奉りあくる三年の冬従五位下大和守に任しおなしき六年父かゆつりをうけ 四萬七千石 弟主税正長に采地をわかつ 三千石 八年十二月二十二日御奏者となり明る年十月朔日寺社奉行をかぬ十年六月十日丹波國龜山の城にうつされ 久世出雲守重之にかはる おなしき十二年十月六日少老の職となる

同十五年九月朔日所領まし加へられて 三千石 常陸國下舘の城にうつさる 五萬石増山兵部少輔利順にかはる しかるに彼所は土地せはきよし聞しめしておなしき二十八日同國笠間の城にあらためらる 本庄因幡守宗賢にかはる 寶永二年九月二十一日宿老の職にすゝみ二十二日仰ありて河内守にあらたむことし十二月従四位下に叙しあくる年の冬侍従に任す享保三年の冬また所領の地まし加へらる 一萬石合せて六萬石 おなしき七年五月十七日七十歳にして身まかりぬ正岑子なかりしかは元祿十三年の六月支族井上頼母正晴か長子(一男)右近正富をこひとりてよつきとしおなしき十五年見參にいれ叙爵して土佐守になさるしかるに寶永七(元)年に至り故ありて父の正晴か許にかへしやりぬかくて又酒井隠岐守源可安か長子民部正之を子としやしなひ寶永三年二月十五日はしめて見え奉りぬ同しき七年の十二月叙爵して攝津守に任す 後河内守にあらたむ 正岑かうせし年の七月三日正之家つきて享保九年三月十八日御奏者の事を奉はり十三年七月六日寺社奉行をかぬ元文二年九月十七日四十二にして卒す長男民部正經 はしめは正賢利容正燕 ことし四月十五日はしめて見えたてまつり十一月十一日父につき

おなしき四年十二月叙爵して河内守に任す後大和守にあらたむ延享四年十一月十九日陸奥國磐城平にうつり内藤備後守政樹にかはる寶暦二年八月十五日御奏者の事を承はりあくる三年三月二十八日寺社の奉行をかぬ同き六年五月七日大坂の城代となりて從四位下に叙す所領陸奥國はほと遠かれはとて攝津河內播磨近江四ヶ國のうちにて便宜の地をあておこなはるおなしき八年十一月二十八日所司代に補せらる侍從にすゝみ十二月二十七日遠江國濱松の城をたまふ松平富之助資高にかはる十年十二月三日宿老の職にうつりおなしき十三年三月十三日病によりて職を辭し明和三年五月晦日四十二歳にして卒すその子鐵之進正定初は岑有ことし七月十六日家をつきおなしき六年三月朔日はしめて見えたてまつりことしの冬叙爵して河內守に任す安永三年十二月二十二日御奏者となり天明元年閏五月二十一日寺社奉行をかぬおなしき六年三月二十日卒す三十三歳その子民三郎正甫つく十二歳

○遠江守源正長は初め安方中務少輔正任か三男也元祿六年九月二日父か所領をわかたれ美濃國の內三千石あくる七年閏五月七日中奥の御小性となる八月二十八日御使番にうつりおなしき十一年十一月四日甲府館につけられて家老職となり新恩の地を賜ふ四千石ことし十二月從五位下に叙す寶永元年甲府殿御養君にならせたまひしかは正長も扈從して十二月五日西城の御側衆となり明る二年の正月七日加恩の地を賜ふ三千石はしめの四千石に甲府にてくはへ賜りし地を合て八千石正長はしめ甲府にまいりし頃は子なかりしに元祿十二年一族賴母正晴か二男酒之丞正矩をやしなひて子とせん事を申けれは七月五日こふことをゆるされ正長はしめの領知三千石を正矩にたひて御家人にくはへらるしかるに正長はからすもまた御家人になりしかは正矩をよつきにさためてけりかかりしかは正矩か所領三千石は公にかへしいれ奉るへかりしに舊領なれはとて正長に賜はりて今まて領せし地のうちにて三千石を除かれたり正德二年十二月二十五日故御所文照院殿の御事の御遺命ありしとて加恩の地を賜はり二千石を加へて合せて一萬石大名の列となるおなしき五年二月十八日御奏者の事を奉はり寺社の奉行をもかぬ享保元年九月二十八日病によりて兩職ともにゆるされて鴈の間の詰衆となりおなしき五年十二月十四日六十七歳にして卒す嗣子正矩正德五年叙爵して伊勢守に任せしか正長に二月はかり先たちてうせぬ

よりてまた一族主水正式か二男久之丞正敦を養ひて家つかす正敦享保六年正月二十八日はしめて見參しことし從下の五位して遠江守になるおなしき十七年二月二十一日大番の頭となり延享三年十一月十五日御奏者の事を奉はり寶曆三年六月二十日卒す四十七歳其子備後守正賀父にさきたちて卒しけれは（寶延元年叙爵し同き三年五月十七日二十歳にして卒す）金森兵部少輔賴錦か二男藏人正辰を養ひて子とす正辰ことし八月十二日家つきて九月朔日はしめて見え奉り叙爵して遠江守に任すおなしき十年五月二十七日二十五歳にしてうせぬ嫡男主稅正意六月二十日父につくとしわつかに二歳なり安永二(三)年七月二十八日初見十二月十八日叙爵して遠江守に任し天明四年二月十七日卒すとし二十六子なかりしかは一族大和守正經か四男橘之助正房家をつきことし四月十五日はしめて拜謁し十二月叙爵して遠江守に任す

筑後守源政蔽は故筑後守政清か子なり延寶二年九月十一日はしめて見えたてまつりあくる三年八月五日父の遺領を賜ひ（上總下總國の內一萬石）弟猪之助政式に所領をわかつ（千五百石）明るとしの冬叙爵し享保元年三月朔日五十六歳にして卒すその子監物正鄰ことし四月二十三日父につき七月叙爵して筑後守に任しおなしき十六年八月七日致仕し寛保三年閏四月八日卒す（五十二歲）子なかりけれは弟宮內正森を養ひてよつきとす（政蔽か六男）正森享保十五年二月十五日はしめて謁し奉り父か致仕せし日家をつきこの年從五位下山城守に任し（二十二歲）寶曆十年十二月病によりて致仕すその子直之丞正國家をつく實は尾張中納言殿（宗勝卿）の十男寶曆五年正森にやしなはれおなしき七年二月十五日はしめて見えたてまつり十年の冬叙爵して筑後守に任し（二十二歲）明和四年十一月八日大坂城の定番となるこれも男子なかりけれは竹腰山城守勝紀か二男芳次郎正紀をおのか女にあはせよつきとす

森川

源重政

重般カス　長十郎
依病籠居號平入亦號廓翁
享保二年十二月六日卒八十一歲
法名自得院月蕭

重雅ツネ　菊之助　主水　主殿
森川下總守重名養子

重信　次郎八
出羽守從五位下
寛文三年十二月廿八日敍任
元祿五年六月廿七日致仕
號知閑
寶永三年六月七日卒六十二歲
法名覺林院月窓知閑

俊胤　牛彌　内膳　初重範　重興　重令
紀伊守從五位下
元祿六年十二月十八日敍任
寶永五年正月十六日改出羽守
享保十七年閏五月十一日致仕
剃髮號悠計
延享三年正月廿四日卒七十七歲
法名英雄院一元顯光

重高　彌十郎
森川下總守重名養子

女子二人　一人早世
森川土佐守俊勝妻

某　大學　右近
元祿六年六月十五日卒

女子　早世

重能　金一郎
飛驒守從五位下
正德三年十二月廿二日敍任
享保元年閏二月九日卒十八歲
法名桃源院別岑芳林

俊常　初稱堀場又三郎　右衛門　初重紹　重基
内膳正從五位下
享保元年七月廿二日敍任
同十九年七月朔日卒三十八歲
法名功全院忠林玄心

女子
實戸田主膳氏紀女
許嫁酒井主膳忠英離別

女子
山口兵衛重貞妻

俊令 源之丞 初俊方
實森川勘兵衛重良二男
兵部少輔從五位下
享保十九年十二月十八日叙任
寶曆十年正月廿二日改内膳正
明和元年四月六日致仕
剃髪號善應

女子二人
俊令妻
森川下總守俊囦妻
俊令養女

俊央ナカ 織部 下總守
森川下野守重高養子

氏紀 熊之助 主膳 將監
戸田半彌氏道養子

俊孝 大之丞 半彌
紀伊守從五位下
寶曆七年十二月十八日叙任

俊輝 寅之丞 數馬
森川甲斐守俊顯養子

女子三人
小笠原左門長喜妻
甲斐庄兵庫助正昉妻
實俊常女
藤大膳正芳妻

女子 早世

俊盛 半彌 早世

俊敏マサ 源之丞
實森川數馬俊輝嫡男

女子
實有馬能登守氏保女牧野
備後守貞長養許嫁俊盛
俊盛卒俊孝養配俊敏

森川

○出羽守源重信は伊賀守重政か子也寛文三年十二月叙爵し元祿五年六月二十七日致仕して（寶永三年六月七日卒す六十五歳）嫡子内膳俊胤（初は重範重興重令）父につく（下總生實の地一萬石）これよりさき延寶七年九月二十三日はしめて見えたてまつり家つきし年の十月二十九日奥詰となりあくる六年四月二十一日御小性になされ五月四日大番の頭に補せられてことしの冬従五位下紀伊守に任す（後出羽守）御代あらたまりて寶永六年四月六日御側衆を經て七年九月御奏者になり寺社奉行をかねたり正德四年九月六日少老にうつり享保元年四月六日職務の料を賜ふ（五千俵）おなしき二年十一月十六日職やめられて同き十七年致仕入道して悠計と號し延享三年身まかりぬ（正月二十四日七十七歳）嫡子某いとけなくして失けれは二男金一郎重能嗣となり叙爵して飛彈守と申せしかこれも父にさきたちけれは三男右衛門俊常（はしめ重紹重基）よつきとなり享保元年四月十五日はしめて謁したてまつりこの秋従五位内膳正になる父につきし年八月十九日大番の頭に補せられて九年七月朔日大坂在て卒す三十八歳子なかりしかは一族勘兵衛重良か二男源之丞俊令（はしめ俊方）を己か女にあはせて家つかしむ俊令父か卒せし年九月三日遺領を賜はり同き十五日家つきしかしこまり申て見え奉り十二月叙爵して兵部少輔に任す（後内膳正にあらたむ）寛保三年四月二十八日大番の頭になり延寶二年閏十一月大坂城の定番にうつり寛延二年八月より御奏者の事をうけたまはる事十七年にして明和元年の春ゆるされて四月六日致仕す（時に四十四歳）嫡子半彌俊孝父につき寶暦七年の冬叙爵して紀伊守に任し（時に十五歳）安永元年六月十七日大番の頭になる

久世

源廣之

女子　早世

某　百助
慶安二年二月十二日卒

女子
遠山信濃守友貞室

女子
松平宮内少輔重治妻

女子
内田出羽守正家室

某　半彌　早世

女子　早世

某　織部
貞享元年十一月九日卒

女子
松平和泉守康貞室離別

某　富千代　早世

某　縫之助　早世

女子　早世

重之　勝之助
出雲守從五位下
延寶元年十二月廿八日叙任
寶永元年十月九日改讃岐守
同二年九月廿三日改大和守
正德三年八月廿三日從四位下
同四年八月廿五日侍從
享保五年六月廿七日卒六十一歲
法名眞如院消殘露月日成

某　次郎助　早世

廣次　平九郎　初重勝
實久世三四郎廣當三男
寶永七年十二月十六日致仕
號平休
享保六年六月二日卒七十七歲
今久世丹後守廣民祖

暉之　源五郎
隱岐守從五位下
正德三年三月七日叙任
延享二年九月三日改讃岐守
寬延元年八月廿二日致仕
同二年八月十八日卒五十一歲
法名實相院敎海常照日注

廣籌　千橘　民部
今久世斧三郎廣德祖

女子二人　共早世

某　八十之助　早世

女子　早世

某　門丸　早世

某　小源次　早世

廣明
實久世若狹守廣武嫡男
出雲守從五位下
延享二年十月八日叙任
明和六年九月廿四日從四位下
安永六年九月十五日侍從
天明元年閏五月十一日改大和守
同五年正月廿四日卒五十五歲
法名常靈院法月照門日明

廣般　乙女　靭負　小彌太
久世主水廣貞養子

某　小膳　早世

女子
石川主殿頭總廣室離別
許嫁井伊因播守直定早世

廣敦 勝之助
従五位下隱岐守
明和二年十二月十八日叙任

女子
許嫁松平主殿頭忠恕早世

某 吉次郎 早世

某 千三郎 早世

某 熊之丞 早世

某 安十郎 早世

女子

女子
安藤長門守信馨室

廣愷（ヨシ） 雄之助

女子二人 共早世

廣戈（モト） 鐵之助
久世丹後守廣氏養子

某 福太郎 早世

某 嘉十郎

廣備（モト）　勇次　主水　源次左衛門
久世丹後守廣氏養子後歸

勝孚（チカ）　岩吉
長谷川丹後守勝富養子

利豐　七之助　左門
土井豊前守利國養子

女子二人
久世政之助廣樂妻
許嫁大久保虎之助忠和早世

女子
許嫁藤堂佐渡守高矗

某　又九郎
松平傳三郎勝與養女

女子
久世泰三郎廣孝妻

某　雄之丞

久世

○大和守藤原重之は故大和守廣之か三男也舍兄等みな世を早うしけれは重之よつきとなり寛文九年三月七日十歳にしてはしめて見えたてまつり延寶元年十二月二十八日叙爵して出雲守に任し（後隱岐守又大和守）おなしき七年八月六日父か遺領を賜ふ（下總國關宿五萬石○此時伯父三四郎廣當か三男平九郎重勝に私墾田三千石をあたふ平九郎は重之か猶子なり）九月十三日御奏者の事をうけたまはる然るに父の廣之か職にありし時の事によりて天和元年六月出仕を止られて（松平越後守御咎ありて所領沒收せられし時なり）十二月二十七日事ゆりけれと御奏者を停られまた同しき三年八月二十一日備中國廣瀬にうつり貞享二年九月十四日ふたゝひ御奏者にくわゝりあくる年の正月二十六日又所領の地をうつされて丹波國龜山をたまふ（松平伊賀守忠昭にかはる）元祿十年六月かさねて三河國吉田の城にうつる（小笠原佐渡守長重にかはる）寶永元年の冬寺社の奉行をかぬおなしき二年九月二十一日少老の職にうつり十月晦日舊領下總國關宿の城をたまふ（牧野備前守氏春にかはる）正德三年八月三日宿老の職にすゝみ從四位下に叙し明る年の八月侍從に任す享保三年三月三日加恩の地をたまふ（一萬石そへて六萬石）同き五年六月二十七日六十一歳にして終りをとれりその子源五郎暉之これよりさき正德二年正月二十八日拜謁しおなしき三年の春從五位下に叙し隱岐守に任す（のちに讃岐守）享保五年八月十一日家繼く弟民部廣壽に所領わかつ（六萬石の内二千石私墾田三千石を加へてすへて五千石）寛延元年八月致仕しあくる年八月十八日卒す五十一歳嗣子熊太郎廣明は一族若狹守廣武か嫡子にていとけなき時より竹千代君（俊明院殿の御事）の御伽衆につかへまいらせしか寛保三年七月九日暉之にやしなはれしかは御伽衆ゆるされておなしき二十八日はしめて見えたてまつり延享二年十月叙爵して出雲守に任し（のち大和守）家つきて寶暦十年十二月十九日御奏者となり明和二年の秋寺社の奉行をかぬ同しき六年九月二十四日大坂の城代となり從四位下に叙す安永六年九月十五日所司代に補せられて侍從に任す天明元年閏五月十一日西城の宿老になり九月十八日本城に作し連署の事をうけたまはるおなしき五年正月五十五歳にして卒す嫡子廣敦明和二年六月朔日はしめて拜謁しことし叙爵して隱岐守に任し父か卒せし年の三月十日家をつく（時に三十五歳）

稻垣

源長茂

重綱

重昌

女子　皆川志摩守廣連妻

重昭　藤三郎　初重祥
信濃守從五位下
明暦元年十二月廿九日叙任
貞享五年二月廿三日致仕
剃髮號空山
元祿十六年六月十六日卒六十八歲
法名寂照岳翁空山

重富　大藏
和泉守從五位下
貞享四年十二月廿五日叙任
元祿六年十一月十二日改對馬守
寶永七年四月十七日卒三十八歲
法名淸光院心安榮達

女子　溝口宮內直武妻

女子　早世

昭賢　大藏　初重相　重量
信濃守從五位下
正德二年十一月十五日叙任
同三年十一月廿二日改和泉守
享保十年十二年朔日改攝津守
寶曆二年十二月三日卒五十五歲
法名泰政院華嶽英山

女子　早世

昭辰　大膳
享保廿年六月十五日卒三十一歲

昭倫　久丸　久四郎　大隅守
今稻垣久四郎昭房祖

昭央　賴母

昭久　伊織

昭央　賴母　大藏
實大膳昭辰長男
從五位下和泉守
延享三(二)年十二月十八日叙任
寶曆三年六月廿二日改對馬守
安永二年七月廿二日致仕

長以　富之助
從五位下和泉守
明和四年十二月十六日叙任
安永三年七月廿三日改攝津守

女子二人
三浦志摩守前次室
二人早世

長守　英之助

某　鍋藏　早世

某　早世

長守　英之助
實昭央二男
信濃守從五位下
天明三年十二月十八日叙任
同四年五月十七日五十八歲
法名先德院英苗賢雄

女子
實三浦志摩守前次女

重太（モト）　藤七郎　若狹守從五位下　寛永三年八月十九日叙任
萬治元年四月廿三日卒六十五歲　法名洞仙院賢剛清心

重定　藏人
備後守從五位下
延寶四年十二月廿六日叙任
後改安藝守
寶永四年十一月十日卒六十歲
法名泰昌院的應政號

重房　主水
長門守從五位下
貞享三年十二月廿六日叙任
享保五年三月四日卒五十一歲
法名芳巖院歎崇良喜

女子一人
大久保豐前守忠庸妻
市橋壹岐守直方室

某　源三郎　早世

定亨　熊次郎
安藝守從五位下
享保十二年十二月十八日叙任
元文五年四年廿五日卒三十一歲
法名翠峯院傑叟良英

定計（カス）　鎌吉
實稲垣大隅守昭倫男
從五位下若狹守
延享二年十月十八日叙任
後改周防守長門守

女子一人
許嫁定計早世
一人早世

定淳　藤五郎
從五位下若狹守
天明元年十二月十六日叙任

女子一人
增山河内守正賢室
一人早世

定時　鎌吉　早世

定賢　定次郎

定邦　耕之進

定成　熊次郎

女子　早世

某　藤次郎　早世

稻垣

○信濃守源重昭初は重祥は藤助重昌か嫡男也又重昌世を早うしけれは重昌寛永十一年二十二歳にして父に先たちて卒す祖父攝津守重綱かよつきとなり正保四年十月十三日はしめて拜謁し承應三年三月三日重綱か遺領を賜はりしとき二萬石三河國苅屋叔父平三郎重門か子數馬に所領わかつ三千石明暦元年十二月從五位下信濃守に任し寛文十一年九月二十三日叔父淡路守重氏にも所領をわかつ私墾田千五百石貞享五年二月二十三日長男大藏重富に家をゆつり致仕入道して空山と號し元祿十六年六月十九日卒す六十八歳重富天和三年十一月二十七日はしめて見參し貞享四年十二月叙爵して和泉守に任す後對馬守にあらたむ父か致仕の日家をつく元祿六年十一月七日近侍の衆にくはゝりて十一日に御扈從となるおなしき十二年七月二十八日少老の職にうつり十五年九月七日所領まし賜はりて五千石上總國大多喜にうつされしか土地狹しとておなしき二十八日下野國鷹山の地を賜はり永井伊賀守尚庸にかはる五千石合て三萬石寶永元年十二月朔日又所領の地をくわへらる同しき六年九月二十六日日ころの病によりて職ゆるされしかあくる年四月十七日終にたゝすなりぬ年三十八嫡子大藏昭賢初重相重量寶永五年十一月十五日はしめて拜領しおなしき七年六月十一日父か遺領を賜はり正德二年十二月叙爵して信濃守に任す後和泉守又攝津守享保十年十月十八日志摩國鳥羽の城にうつり松平丹波守光慈に代る寶暦二年十二月三日とし五十五歳にして卒す男子なかりしかは延享二(三)年の二月姪の賴母昭央大膳昭辰か長子なりを養ひて子とす十二月從五位下和泉守に任しのち對馬守にあらたむ○九月七日初てまみへ奉りし日也寶暦三年正月二十五日家をつき安永二年七月二十二日致仕す時に年四十二その子富之助長以父につくこれよりさき明和四年十月朔日見參し同き十二月叙爵して和泉守に任す時に十九歳後攝津守にあらたむ

○安藝守源重定は稻垣三郎重恭より六代攝津守重綱か弟若狹守重太か子也父重太慶長十二年十四歳にて大相國家に台德院殿の御事つかへ奉り御花畑の番衆となり俸米三百俵をたまふ十八歳のとし大坂の軍にしたかひまいりて首一つきつて献すあくる元和元年采地四百石を賜ふといふ元和二年左大臣家大猷院殿の御事に附られて近侍の衆となり寛永三年叙爵して若狹守に任す同しき十年七月二十四日御書院の番頭になされ重太元和のはしめよりしは〳〵采地くはへられて三千石を領せしといふ同き十一年十二月十四日地加へられ三千石合せて六千石を領す正保元年五

月二十三日大番の頭となり慶安三年九月四日大納言家に附らる同き四年七月二十二日御留守居となり万治元年うせぬ六十五歳藏人重定明暦三年六月初て拜謁し父かうせし年の六月家をつきて（三千石ことし閏十一月十八日寄合衆となる）延寶四年三月四日御書院番の頭となりて役料をたまふ（廩米二千俵）ことしの冬從五位下備後守に任し（後安藝守に改たむ）おなしき七年八月十二日大番の頭に補せられ（はしめ賜はりし廩米二千俵を領地に合てたまひすへて八千石を領す）天和三年八月二十一日若君浄徳院殿に附られ七月十八日御側衆となり貞享二年十一月六日ふたゝひ地加へ賜り（五千石合せて一萬石を領す）少老の職にあけらる然るに元祿二年二月三日職にかなはすとてやめられしかはみつからつゝしみて出仕せす日をへて御ゆるしかうむりて寶永四年十一月十日卒す六十歳その子長門守重房貞享三年十二月叙爵して寶永五年閏正月十五日父か遺領をたまひ正德元年五月朔日大番の頭となり享保五年三月四日卒すとし五十一その子熊次郎享保四年六月家をつくおなしき十一年五月二十八日はしめて拜謁しあくる年の冬叙爵して安藝守に任し元文五年四月二十五日三十一歳にして卒す子なきにより一族大隅守昭倫か嫡子鎌吉定計を養ひてことし六月二十一日家つかす（ときに十三歳）延享元年十一月十五日はしめて謁したてまつり二年十一月十八日叙爵して若狹守に任す（後周防守又長門守にあらたむ）寶暦八年十一月十五日大番の頭となり天和元年十月十五日大坂の定番にうつり嫡子若狹守定淳安永八年六月十五日はしめて見え奉り天明元年十二月叙爵す

西尾

源忠照

某　庄之助
延寶五年九月十三日卒

女子二人　共早世

某　主税　早世

某　彦五郞　早世

忠尙　千次郞　初忠直
播磨守從五位下
元祿十六年十二月廿一日叙任
正德三年八月七日改隱岐守
延享二年九月廿八日從四位下
同三年九月朔日侍從
寶曆十年三月十日卒七十一歲
法名高風院德巖道掛

忠成　勝之助　右京
隱岐守從五位下
寬文七年十二月廿八日叙任
正德三年七月廿三日致仕
同年八月十日剃髮號祥鳳
同年十月十三日卒六十一歲
法名東麟院元彩祥鳳

某　伊三郞
享保五年五月十二日卒

某　豊次郞　早世

女子　早世

忠需（ミツ）　安三郞　主水
實京極若狹守高或二男
從五位下主水正
享保十六年十二月廿二日叙任
安永四年閏十二月十一日從四位下
天明二年九月廿九日致仕

女子
實忠照弟主水忠知女
小出淡路守有利妻

忠吉 森之助
酒井下野守忠寛養子

某 七三郎 早世

某 連之助 早世

女子三人 共早世

女子
許嫁忠需早世

忠雅 萬吉 左京
播磨守從五位下
寶曆十年七月十八日叙任
明和二年十月十八日卒廿六歲
法名德雲院潛靈譽龍

忠移 ユキ 金三郎 兵部
山城守從五位下
明和三年十二月十九日叙任
天明二年十月朔日改隱岐守

女子 早世

某 千次郎
安永四年正月晦日卒

忠善 榮次郎
實牧野越中守貞長二男
從五位下左衞門佐
天明四年十二月十六日叙任

女子　忠善室

女子二人

某　金三郎

某　鍂吉　早世

女子

西尾

○隱岐守源忠成は丹後守忠照か嫡男也承應三年十二月二十二日二歳にて家をつき（二萬石駿河國田中）叔父主水忠知に所領の地を分つ（五千石○延寶三年忠知うせて子なかりしかは釆地を忠成に返し賜はりよりて二萬五千石を領す）寛文元年三月八日はしめて謁し奉り同七年叙爵し延寶七年九月六日所領の地を轉して信濃國小諸にうつさる（酒井日向守忠時にかはる）天和二年の春また遠江國横須賀にうつり（本多越中守利長にかはる）正德三年七月二十三日致仕して祥鳳と號し十月十三日年六十一にして卒すその子千次郎忠尙（初め忠直）元祿九年十月二十八日初て見えたてまつり（時に七歳）十六年十二月二十一日從五位下に叙し播磨守に任す（後隱岐守にあらたむ）正德三年父につき享保十七年三月十五日御奏者となりて寺社の奉行をかぬおなしき十九年九月二十五日少老にうつり延享二年九月朔日宿老の職にあけれら大納言家に（俊明院殿の御事）附られ加恩の地をたまはり（五千石）從四位下に叙す明年五月十五日本城の宿老にうつりて侍從に任すおなしき四年三月朔日より大御所につかへ奉り寛保二年十二月十五日地ましくはへられ（五千石加へちれて合て三萬五千石）寶暦元年大御所かくれさせたまひしかは七月十二日又本城にめされ連署の衆の末に候すへきよし仰うけたまはり同き十年三月十日卒す（七十一歳）忠尙男子二人ありしかみな世を早うしけれは享保十四年五月京極若狹守高式か二男主水忠需を己か女にあはせてよつきとす忠需享保十六年十月二十八日はしめて謁し奉りことし叙爵して主水正になり父かうせし年の四月二十六日遺領をたまふ明和二年十月二十八日御奏者の列に加はり職にある事十年にして安永四年閏十二月十一日御ゆるしかうむりて從四位下に叙し（五十九歳）天明二年九月二十九日致仕す長子左京忠雅叙爵して播磨守と申せしかさきたちてうせけれは二男兵部忠移に家をゆつる忠移明和二年十二月二十日嗣となりてあくる三年三月朔日はしめて拜謁しことし從五位下山城守に任し（時に二十一歳後隱岐守にあらたむ）天明四年の五月御奏者の事をうけたまはりその子榮次郎忠吉實は牧野越中守直長か二男己か女にあはせて嗣とす天明四年三月朔日はしめて見へ奉りおなしき十二月十六日叙爵して右衞門佐に任す

三浦

平正次

安次　龜千代　甚太郎
志摩守從五位下
慶安元年十二月晦日敍任
天和二年九月六日卒五十歲
法名法源院照譽常和圓徹

共次　長五郎　越中守
子孫斷絕

女子　早世

女子
前田宮内少輔利廣室

明敬（ヒロ）　平五郎　左兵衞
壹岐守從五位下
寬文十二年十二月廿八日敍任
享保九年二月十五日致仕號哲翁
同十年三月十日卒六十八歲
法名龍雲院貞譽壽松允石

某　甚之助　早世

女子
土井豐前守利良室

某　左兵衞　早世

重次　內膳　早世

明喬　吉五郎　百助
備後守從五位下
元祿十六年十二月廿一日敍任
後改壹岐守
享保十一年四月六日卒三十八歲
法名高岳院隆譽崇山完翁

明胤　右近　早世

義理（サト）　求馬　初吉章

某　百助　早世

某　金次郎　早世

明次　政五郎

義理　求馬　初吉章
實明敬五男
志摩守從五位下
享保十一年九月六日叙任後改主計頭
寶曆六年七月三日卒六十一歲
法名元享院乾譽涼山義全

明次　政五郎　後共次
實明喬三男
從五位下志摩守
元文五年十二月廿一日叙任
安永元年九月廿四日致仕改兵庫頭
家譜初任備中守

女子二人
酒井近江守忠儔室
一人早世

矩次　鍋之助

矩次　鍋之助
實義理二男
備後守從五位下
寶曆十二年十二月十八日叙任後改志摩守
安永九年三月廿一日卒三十四歲
法名龍德院信譽智海魚底

女子
石川主水正總孝室

前次　チカ　文之助

女子
酒井相摸守忠吉室

守次　紈　早世

女子　皆川左京正庸妻

前次　文之助
實明次二男
備後守従五位下
安永四年閏十二月十一日叙任
後改志摩守

毗次（テル）　剛之助

毗次　剛之助
實矩次二男

女子　稲垣攝津守長以養女

某　文之助

某　榮之助

某　保之助　早世

女子

某　邑之助

三浦

○志摩守平安次は故志摩守正次か嫡男也寛永十八年七月朔日はしめて謁したてまつり十一月二十二日父か家をつき下野國壬生の城二萬石弟長五郎共次に采地をわかつ五千石安次慶安元年の冬叙爵し天和二年卒す九月六日六十歳その子平五郎明敬寛文八年三月朔日はしめて拜謁しおなしき十二年の冬從五位下壹岐守に叙任し天和二年十一月三日父か遺領を賜はり貞享三年十一月二十二日御奏者の事をうけたまはり元祿二年二月六日少老の職に補せられしかいかなるゆへかありけんいくほとなく職ゆるされて又御奏者となり同き五年二月二十三日恩加の地賜はりて日向國延岡の城にうつり三千石をくはへらる有馬左右衞門佐承純にかはる正德二年の秋かさねて三河國苅屋の城にうつり本多中務大輔忠隆にかはる享保八年十月十一日年老ひて奉公に堪すとて御奏者を辭しあくるとし二月致仕して嫡子備後守明喬に家をゆつりおなしき十年三月十日卒す六十八歳明喬はしめ吉五郎といふ元祿十三年九月十五日はしめて見へたてまつり同しき十六年の冬叙任して父か致仕の日に家をつく享保十一年の夏病にかゝりて日にましおもりけるにその子政五郎某は生れていまた一年にもあらねは成長のほと心もとなしとて弟求馬義理初め吉章して家つかせん事を公に申をきてつゐにむなしくなりしかは四月六日三十八歳こと し五月二十九日その請所にまかせられて義理に遺領を賜はりやかて出仕して九月六日從五位下志摩守に任すのち主計頭にあらたむ延享元年五月十五日御奏者の事うけたまはり明る年十二月二十一日西城の少老になり四年二月十一日三河國西尾の城にうつり土井大隅守利信にかはる寛延二年六月二十九日病によりて職ゆるされ寶暦六年七月三日六十一歳にて身まかりぬ義理子ともありしかとも女もいとけなくてうせぬ又すちめなれは政五郎某を子とし養ふ元文三年四月朔日はしめて拜謁し五年の冬叙爵して志摩守明次といふ寶暦六年八月二十四日家をつきおなしき十四年六月二十一日美作國勝山の地賜はりてうつりあらたに城築へしとて土木の料をたまふ四千石安永元年の秋致仕して兵庫頭共次にあらたむ明次も己か子をさし置て義理か子勝之助矩次をよつきとす矩次寶暦七年やしなはれて十二年九月朔日はしめてまみへたてまつり從五位下志摩守に

叙爵し明次かゆつりをうけて家をつき安永九年に卒す三月二十一日三十四歳その子文之助前次實は兵庫頭明次か男なり前次安永四年十一月朔日はしめて拜謁し從五位下に叙し備後守に任し十九歳○後志摩守父におくれし年の五月十六日遺領をたまふ

米津

藤原田盛（タダモリ）

政武　勘兵衛　初政盛
伊勢守從五位下
寬元三年十二月廿八日敍任
貞享四年五月十八日改出羽守
元祿十一年十一月十一月致仕後改內藏
允號澤翁
寶永五年六月廿六日卒七十一歲
法名雲行院兩施澤翁

田賢　小太夫
今米津小大夫田將祖

女子　大久保長門守敎寬室

政矩　小大夫　初盛氏
元祿十六年正月十五日卒二十九歲
法名春光院高嶽源水

政容　賴母
女子　青木縫殿頭直宥妻
政因　主水
伊澤播磨守政久養子
某　隼之助　早世

政容　賴母　監物
實政武二男
出羽守從五位下
寶永六年三引七日敍任
元文四年七月廿七日卒五十八歲
法名幡龍院威月澄潭

某　賴母　早世

某　九十郎　早世

女子二人
酒井兵部忠陸妻
一人早世

政崇　勘兵衞　初政丘　政基
相模守從五位下
元文四年十二月十六日叙任
延享二年十一月十六日改伯耆守
同三年十一月三日改越中守
明和四年十一月十一日致仕
天明四年五月廿一日卒六十一歲
法名貞性院遠空紹久

女子四人
武田越前守信村妻
近藤登助英用妻
澁谷釆女正艮紀妻
青木主水直賜妻

某　源之助　早世

女子
關伊織成有妻離別
嫁柴田修理亮勝房

通政　勘兵衞
出羽守從五位下
明和四年十二月十六日叙任
天明元年九月十八日改播摩守

某　三太郎

政美　內藏助　早世

政樹　兵部

女子

米津

○伊勢守藤原政武は初は政盛 出羽守田盛か長男也慶長元年五月十一日初て見へたてまつる 寛文三年十二月二十八日叙爵し貞享元年三月二十七日家をつく二男周防守田賢に所領をわかつ政武武藏久喜のうち一萬二千石田賢三千石別に千石をくはへ賜はる合せて四千石を領す○前編田賢を田治につくる おなしき四年五月十八日寺社の奉行を奉はる明る元祿元年の十月二日その職にかなはすとてゑりそけらる朔望の拜賀をも久しくとめられて同き四年四月御ゆるしかうふりぬかくて十一年の冬致仕してその子小太夫政矩に家をゆつり寶永五年六月二十六日とし七十一にして卒す政矩初め成氏 貞享三年七月十二日はしめて拜謁し家繼し時弟頼母政容に所領の地千石をわかちあたふ元祿十五年大坂の城の守にそへられしか明る十六年正月十五日彼地にて卒す二十九歳 政矩子なきにより終りにのそみて弟頼母政容に家つかせむ事を申せしかは三月二十三日兄か遺領を給ふ 一萬千石○政容か采地千石は公にかへしおさむ 政容はこれよりさき初見して六年の秋御小性にめしくはへられしか兄か家つきても其儘昵近して寶永六年の正月故御所 常憲院殿の御事 かくれさせたまひしかは近侍をゆるされ三月七日従五位下出羽守に叙任し享保七年四月二十一日大番の頭に補せられおなしき十四年の冬大坂城の守になり元文四年七月二十七日彼地にありて卒す五十八歳その子勘兵衛政崇はしめ政丘政基 おとゝしの十一月はしめて見へたてまつりことし九月家をつきその冬叙爵して相模守に任す後伯耆守又越中守 延享四年の三月朔日大番の頭となり寛延二年の秋大坂城の守りとなりしか病によりてことし十月二十五日御ゆるしかうむり明和四年十月十一日致仕し天明四年五月二十一日六十一歳にして世をさりぬ その子勘兵衛通政父につく明和三年十一月朔日はしめてまみへたてまつり家繼し年の冬叙爵して出羽守に任す時に十八歳○後播磨守

藩翰譜續編巻之六上

● 奥平　美作守昌章　松平下總守忠弘
　附　松平八郎右衛門清通　松平宮内少輔忠尙(ナヲ)

● 小笠原　信濃守長勝　右近將監忠雄
　備中守貞房　壹岐守長祐(スケ)

● 小笠原　土佐守貞信

● 岡部　內膳正行隆

● 諏訪　因幡守忠晴

● 土屋　相模守政直

● 丹羽　長門守氏明

● 山口　修理亮重貞

● 北條　伊勢守氏治

奥平

平信昌マサ

家昌

忠昌

昌能

女子　秋元伊賀守喬房室

某　次郎吉　早世

女子二人　共早世

昌章　小次郎
實五島淡路守盛勝二男
美作守従五位下
天和元年十二月廿七日叙任
元祿八年四月八日卒二十八歳

昌成　熊太郎　初昌春
大膳大夫従五位下
寶永四年十二月廿八日叙任
延享元年十二月十六日従四位下
同三年十一月十四日卒五十二歳

某　豊太郎　早世

昌敦　熊太郎
丹後守従五位下
元文二年十二月十六日叙任
寛保二年六月朔日改山城守
延享四年正月四日改大膳大夫
寶暦八年九月廿六日卒三十五歳

女子二人
昌章室
松平和泉守乘春室

昌鹿　熊太郎　初昌邦
丹後守從五位下
寶曆七年十一月十八日叙任
同八年十一月十七日改大膳大夫
安永九年七月廿四日卒三十七歳

喜生　靭負
松平伊勢守喜以養子

義風　逸橘
山野邊兵庫頭義胤養子

女子三人
許嫁建部内膳長教卒
土屋能登守篤直室
堀田出羽守正邦室

義峯　兵部
松平主水義著養子

女子
實式部昌純女
板倉隱岐守勝從室

昌男　牧之丞　九八郎
美作守從五位下
安永五年十二月十六日叙任
同九年九月廿二日改大膳大夫
天明六年八月三日卒廿四歳

女子
許嫁松平新十郎政久卒

某　盤麻呂　早世

女子

女子
内藤紀伊守信興室

昌純　千十郎　式部
寶曆五年十一月十七日卒廿八歳

某　万之允　早世

昌高　富之進
實松平薩摩守重豪二男

女子
昌高室

忠明

女子七人

松平肥前守忠直室後
嫁鍋島甲斐守直澄
大久保加賀守忠德室
四條宰相隆術卿室
京極主膳正高洪室
榊原越中守照清妻
大澤右近將監尚親妻
四條宰相隆術卿養女

忠弘

鶴松丸　初清良
下總守從五位下　正保二年十二月晦日敍任　承應二年十二月廿九日從四位下
寛文三年十二月廿九日待從　元祿五年十二月廿日致仕　同九年十二月十八日
改刑部大輔　同十三年五月十六日卒七十歲　法名梯伽院瑞翁道巖

清道　八郎左工門

正保元年十二月廿六日卒十一歲
家絕
法名瑞光院梅窓了雪

女子

許嫁松平大膳大夫正甫早世

忠張　熊千代

某　仁十郎　早世

女子三人

清照　鶴千代　主税
依病籠居
貞享三年五月廿七日卒三十五歳
法名凉雲院南峯道薫

某　松千代　早世

某　鶴松丸　早世

飛驒守従五位下
享保十九年十二月十八日叙任
元文三年四月十九日卒十九歳
法名乾龍院圓應元道

女子二人
一人早世
松平左京大夫頼安室

女子二人
松平左兵衛督直常室
牧野備前守成春室

忠雅　齊宮　左膳
下總守従五位下
元祿五年三月廿二日叙任
寶永元年十二月十一日従四位下
同七年十二月十八日待従
正徳三年閏五月四日左近衛権少将
延享三年六月廿日卒六十四歳
法名大梁院仁嶽紹裕

女子
大澤右衛門督基隆妻

一人早世
松平右近将監武元室
一人早世

清純　左門　後宗純
松平阿波守宗英養子

女子
眞田出羽守幸詮室

忠刻　岩吉　主膳　初清種
信濃守従四位下
元文三年十二月十八日叙任
延享三年八月十一日改下總守
明和四年閏九月四日待従
同八年六月十四日致仕改信濃守
天明二年十二月廿七日卒六十六歳
法名龍光院光院天山宗見

清淳　伊勢之助　後直在
井伊伯耆守直員養子

女子
毛利讃岐守匡平室

忠泰　主膳
豐後守從五位下
寶曆七年十二月十八日叙任
同十三年正月廿日卒廿七歳
法名俊良院天麟宗玉

女子　松平相摸守重寛室

忠啓　岩次郎　民部
兵庫
駿河守從五位下
寶曆十三年十二月九日叙任
明和八年六月十四日改下總守
安永元年十二月十八日從四位下
同五年十二月廿三日待從
年錄作十三日

乘良　源次郎
延寶四年正月廿五日卒七歳

忠功　職之丞
實紀伊中納言宗將卿七男

女子五人
忠功室
二人早世
龜井讚岐守矩賢室
黑田甲斐守長舒室

某　早世

女子二人

女子　早世

女子
津輕出羽守信壽室干

某 仙千代　早世

某 勝次郎　早世

忠尙 源次郎
初乘高　乘守
實松平和泉守乘久嫡男
宮內大輔從五位下
寛文四年十二月廿八日叙任
後改宮內少輔
享保四年十一月二日致仕
同十一年正月廿九日卒七十六歳
法名義節

女子十人
四條宰相隆音卿室
桑山美作守一尹室後
嫁大澤右京大夫基恒
忠尙室
大久保加賀守忠增室
六人早世

忠恭 官之介
初乘利
實松平和泉守乘久九男
織部正從五位下
寶永二年十二月十九日叙任
正德三年九月廿六日卒三十歳
法名日心

某 熊介　早世

忠曉 小三郎
初乘包
實松平和泉守乘春四男
玄蕃頭從五位下
正德三年三月七日叙任
元文元年二月十四日卒四十六歳
法名淨關

忠衙 富之介
享保六年二月廿二日卒四歳

女子
毛利大和守高能室後嫁
堀田若狹守正實

忠恒 定太郎
大藏少輔從五位下
享保十九年十二月十八日叙任
延享元年十月九日改宮內少輔
寶曆九年九月廿五日改攝津守
明和五年十一月九日卒四十八歳
法名義光

女子四人
高木若狹守正恒室
二人早世
稻垣長門守定計室

忠福　幸太郎
従五位下釆女正
寶暦五年十二月十八日叙任
安永五年十一月三日改玄蕃頭

女子二人
內藤紀伊守信凭室
松平和泉守乗祐養女

恒篤　斧三郎
大久保彦左衛門忠恒養子

女子四人
許嫁本多玄蕃忠遠後
許嫁本多勘右衛門忠紹
許嫁本多菊次郎忠紀後
嫁松平彌九郎忠順
一人早世
桑原伊豫守盛員養女

長澤松平

和泉守信光八男（此系譜は原書には忠明の上欄に在り）

忠房　定太郎
従五位下釆女正
安永九年十一月十八日叙任

女子五人
一人早世
津田山城守信久妻
一人早世
曲淵勝次郎景露妻
景露後妻

福親　勇次郎
高木主水正正直養子

忠韁　乙五郎

女子　早世

女子　早世

某　祐之介

源親則　源七郎備中守從五位下
住三州岩津長澤
寛正二年十一月卒
法名如心　考仲

益親　源七郎上野介備中守
法名巖臾淨久

重親　源七郎上野介備中守
明應五年七月十八日卒
法名白祐淨覩

昌親　源七郎源次郎上野介
永正六年三月朔日卒
法名覺臾淨心

直親　源七郎上野介
天文二年十月一日卒
法名玉山淨全

直忠　源七郎兵庫上野介
元龜三年二月廿五日卒
法名臺寶淨賢

政忠　源七郎上野介
永祿三年五月十九日於尾州桶
狹間討死
法名耀峯淨珠

康高　源七郎上野介
母清康君女　住長澤城領三
萬五千石
元龜元年姉川天正三年長篠
合戰高天神城攻小牧長久手
之役有勳功後于京都隱遁
元和四年八月八日卒
法名雲元齊

康忠　源七郎上野介
母家康公之御妹
文祿二年七月廿九日卒二十五歳
法名三尊院大翁淨安

直隆　源助　早世

女子　松平紀伊守家信室

直宗　源三郎

直之　本多某

女子三人　本多出雲守忠朝室　有馬玄蕃頭豐氏室　遠藤修理亮慶利室

忠輝　上總介越後少將家康公六男母君於茶阿方文祿元年生遠州濱松城繼長澤家實文祿三年之春也慶長六年賜下總國佐倉城領四萬石同八年二月六日賜信州川中島城領十八萬石同十四年四月十六日叙從四位下稱左近衛權少將同十五年二月三日賜越後國高田城領六十萬石元和二年七月有故配流伊勢國

忠明　從四位下侍從下總守繼澤長家

奥平

幷松平　附　八郎左衛門情道

○美作守平昌章は（奥平と稱す）大膳亮昌能か養子實は五島淡路守源盛勝か二男也寛文十二年十月五日いとけなふして父の家をつき（出羽の國山形城九萬石）延寶三年九月四日はしめて見え奉り天和元年十二月叙爵して貞享三年六月二十二日下野國宇都宮の城にうつさる（本多下野守忠平にかはる）元祿二年三月奥詰の衆にくはへられ中ひとゝせをこへて其列をゆるされ八年四月八日身まかりぬ年二十八その子熊太郎昌成（はしめ昌春）ことし六月十五日わつか二歳なりしに遺領を賜ひおなしき十年六月十一日丹後國宮津の城にうつり（阿部對馬守正森にかはる）おなしき十六年九月二十八日はしめて拜謁し寶永四年の冬叙爵して從五位下の大膳大夫になる享保二年二月十一日豐前國中津の城にうつされて新恩の地をたまふ（一萬石○中津はもとより樞要の地なり大膳大夫としわかしといへともその家につきて御おほへあさからされはたまふ所なり政事に心を用ゆへしと仰下されしとそ）延享元年十一月從四位下に叙し同き三年うせぬ（十一月十四日五十二歳）其子熊太郎昌敦元文元年十月二十八日初見の禮をとりあくる年叙爵して丹後守になる（後山城守大膳大夫）延享三年父か遺領を賜ひ寶暦八年九月二十六日卒す三十五歳嫡子熊太郎昌廉（はしめ昌邦）寶暦七年の夏初て謁し奉りこの冬從五位下丹後守に叙任し（後大膳大夫とあらたむ）父か卒せし年の十一月家をつき安永九年に終る（十一月廿四日三十七才）長子九八郎昌男安永五年十月はしめて見參しこの冬叙爵して美作守になり（のちに大膳大夫）おなしき九年九月十二日家をつき天明六年に卒す（八月三日廿四歳）其子富之進昌高實は松平薩摩守源重豪か二男なりおなしき九月二十日遺領を賜る（時に十二歳）

○下總守源忠弘は（初は清良○此家松平と稱す）故下總守忠明嫡子幼名鶴松丸と申す（父の忠明は東照宮の御外孫なり忠弘五歳の時公に見へ奉りしといふ）正保元年五月十八日父か遺領をたまひ弟八郎左衛門清道に地を分つ（播摩の國姫路の城十八萬石の内忠弘十五萬石清道三萬石○清道は此年十二月廿六日卒けれは所領は公にかへし奉る）忠弘おなしき二年の十二月晦日叙爵して下總守になり慶安元年姫路をあらためて出羽國山形の城にうつさる（松平大和守直基にかはる）承應二年十二月二十九日從四位下に叙し寛文三年十二月侍從にすゝみおなしき八年六月二日下野國宇都宮の城にうつり（奥平美作守忠昌にかはる）天和元年七月二十七日また陸奥國白川の城を賜ふ（本多下野守忠平にかはる）ことし八月嗣の事をこひ申けれは忠弘男子三人ありしかとも嫡子清照は病者にて家つかん事かなひかたし

殘る二人は世を早うしけれは天和元年八月公の御えらひをもて似あはしき嗣子を定め申さはやと申けるに松平和泉守乘久か嫡子宮內大輔忠倚は忠弘か聟なれは子とし養ふへしと仰下され然るに主税清照はからすも男子をもうけしか齋宮といふまさしきすちの事なれはことし元祿元年十月忠倚公に申て齋宮忠雅をもて忠弘か世つきとす忠弘も又公に申こふて所領のうち私墾の地（二萬石）を忠倚にさきあたふ（はしめ齋宮忠雅やう／＼おひたちけれは忠倚かよつきにたてんとて忠弘忠倚とも／＼公に申けるに忠弘か嗣子にやしなふてしかるへしとの御氣色ある由を宿老の人忠倚のかたりけれは忠倚一儀にも及はすことはをあらためて忠雅して忠弘かよつきとなさん事を申けり又私墾の地を子孫にわかちあたふとの事ゆるされかたき事にてありしかとも忠弘わきて申むれ有しかは事ゆるされしなり）志かるにおなしき五年七月二十一日忠弘御咎かふむりて白川の城收公せられ領地をも減せらる（本領のうち五萬石を減せらる）門戸を閉てこもり居るこれはことし夏はしめ家人等不和の事出來て本主を蔑にせしふるまひ多くあるゆへ立退そくものあまた有なと聞けるより家務のゆるかせなる事公に聞えけるによりてなり家人の中其罪甚しきもの二人流罪せられきされとも八月十六日に出羽國山形の城賜はる（松平大和守直雅にかはる）閉門はゆるされてなを逼塞して有りしか十二月二十日その事ゆりぬこの日仰によりて致仕しおなしき十三年五月十六日年七十にして身まかりぬ齋宮忠雅（此ころは左膳と申す）元祿四年三月二十五日はしめて見え奉り忠弘致仕の日家つきて同二十二日從五位下下總守に叙任しおなしき十三年正月十一日備後國福山の城賜はりて移る寶永元年の冬從下の四位に昇る同き七年閏八月伊勢國桑名の城にうつさる（松平越中守定重にかはる）此時溜間伺候の衆となり侍從に任す正德三年の夏御使として京に上り左近衞の少將に轉し延享三年六月二十日に卒す（六十四歲）嫡子熊千代忠張享保十九年の冬はしめて謁し奉る從五位下に叙し飛彈守に任し元文三年四月十九日十九歲にて卒しけれは四男主膳忠刻をよつきとす（二男仁十郎某は早世し三男左門清純は松平阿波守宗英にやしなはる）忠刻ことし七月二十八日はしめて見參し十二月從四位下して信濃守に任し（後下總守に改む）父か卒せし年の八月遺領をたまふ明和四年の秋明年立坊の御使にさゝれて侍になされ同しき八年致仕して天明二年十二月二十七日六十六歲にて卒す長子豐後守忠泰寶曆七年の六月拜謁し十二月叙爵せしか父にさきたちてうせけれは二男岩次郎忠啓をよつきとす忠啓は同しき十三年四月二十八日謁し奉り（十八歲）十二月九日從五位下

駿河守になり家繼て後下總守に任し改む安永元年の冬從四位下に叙しおなしき五年十二月十五日溜の間の衆になされて侍從に任す男子なけれは天明三年紀伊中納言宗好卿の七男織之丞忠功をやしなひをおのか女にあはせてよつきとす

○宮内少輔源忠尙は（初め乘高又乘守○此家も松平と稱す）松平和泉守乘久か子也忠尙いまた父かもとにありし時萬治元年としわつかに八歲にして見え奉り寛文四年叙爵して宮内大輔に任し（後少輔にあらたむ）天和元年の秋忠弘か嗣となり元祿元年十月二十一日所領の地を分たれ（陸奥國白川の地私墾田二萬石の事忠弘の下にみへたり）おなしき十三年下總守忠雅に備後國福山を賜はりし時忠尙は伊達郡の地にうつさる寶永二年正月十一日御奏者の事を承りあくる年の冬西城に奉仕し御代あらたまりてのちまた本城につかへたてまつり正德三年八月支族左門某を親族等か義絕せしやう卒爾の事なりと仰かうむりて凡五十餘日か間逼塞す京保三年十一月二十六日職ゆるされおなしき四年の冬致仕して玄蕃頭家曉に家をゆつりおなしき十一年正月二十九日七十六歲にして卒す忠尙か子供皆世を早うしてけれは弟宮之介正恭を子としやしなひ叙爵して織部正といひしか正德三年の九月先たちてうせぬ（三十歲）是によりてまた弟の和泉守乘春か四男小三郎をよつきとし十二月二十六日はしめて見參しあくる三年の三月叙爵して玄蕃頭に任す忠曉これより京保四年家つきておなしき九年三月十八日御奏者となりおなしき七年八月七日寺社の奉行をかぬ中一年をへたてゝこれを辭しその翌年奏者の事をもゆるされて元文元年二月十四日身まかりぬ四十六歲その子定太郞忠恒享保十九年九月十五日はしめて拜謁しことし從五位下大藏少輔に叙爵し父におくれし年の三月十一日御奏者の事を承はりことし所領伊達郡半田といふ所の銀山を公に奉らんと申せしによりて所領を上野國碓氷郡の地にうつさる同き年の九月十一日寺社の奉行をかぬあくる寛延元年閏十月朔日少老の職にうつり明和四年閏九月二十八日又領地轉せられて同國小幡にうつさるあくる年十一月九日四十八歲にして卒す嫡子幸太郞忠福寶曆五年四月はしめて見參し十二月叙爵して釆女正になり（時に十四才後玄蕃頭）父か卒せし年の十二月遺領を賜はりぬ安永三年十二月二十二日御奏者の衆に加へられ天明五年の十二月二十四日西城

の少老となる嫡子定太郎忠房安永九年十一月十八日
はしめて見えたてまつり十二月從五位下采女正に叙
任す

小笠原

源秀政

忠備

長次

女子
松平阿波守光隆室

長章
上野介從五位下
承應二年十二月十八日叙任
後依病籠居
寛文三年七月十七日卒
法名陽玄院松譽華貞單信

女子
森美作守忠繼室

長胤　大介

長智　民部

女子
酒井内匠頭忠相室

長富　式部

女子
增山河内守正任室

長救　新介

長勝　辰之介　内匠
内匠頭從五位下
寛文六年十二月廿八日叙任
後改信濃守
天和二年十二月二日卒三十七歲
法名寒松院儉峯宗恭

女子二人
一人早世
岩城權之介景隆妻

某　早世

長圓　磯之助

長胤　大介
實長章長男
修理大夫從五位下
天和三年十二月四日叙任
元祿十一年七月廿九日配流
豐前國小倉
寶永六年三月廿七日死四十二歲
法名本源院天巖紹眞

女子二人　共早世

長美　縫殿

女子
黑田伊勢守長清室

某　早世

某　早世

女子三人　一人早世
長胤室
黑田甲斐守長清繼室

長圓　磯之介　宮内
元祿七年七月廿九日繼長胤
信濃守從五位下
元祿十一年十二月廿五日致仕
正德三年十月廿三日卒二十八歲
法名眞淨院義英宗高

長邕　造酒介
享保元年九月六日卒六歲
法名靈覺院亘巖宗英

長興　善三郎
享保元年十月十二日繼長邕
同十五年十二月十一日致仕號純覺
天明六年六月廿四日卒七十五歲
法名謙光院清隱紹貞

女子
長達室

長達　總次郎
實遠江守忠基二男
信濃守從五位下
享保十五年十二月十八日敍任
明和七年八月十八日卒五十八歲
法名景雲院天寧宗祐

女子　早世

某　幸松　早世

長爲　總次郎
信濃守從五位下
明和七年十二月十六日敍任
天明二年十二月十二日卒三十八歲
法名明鑑院心嶽宗印

忠苗　保三郎
左京大夫忠總養子

女子
水野日向守勝起室

忠興　匡之丞
大關越前守忠恒養子

政宜　豐次郎　金十郎
小笠原外記政孝養子

長禎（ヨシ）　豐松丸　總次郎

長之　龜吉

某　早世

女子
許嫁伊奈半左衞門忠歡

忠貞

長安　千松　平十郎
兵部大輔從五位下
寛永十五年十二月晦日叙任
後依病籠居
寛文七年閏二月五日卒五十歳
法名自照院孤峯靈明

女子
松平右衛門佐光之室

長宣　又次郎　大介
大和守從五位下
正保三年十二月晦日叙任
寛文三年正月十日卒三十三歳
法名乾龍院仁山義哲

女子二人
松平刑部大輔賴元室
一人早世

女子五人
藤堂大學頭高睡室
實松平刑部大輔賴元女
松平內匠頭昌興室
一人早世
淺野土佐守長澄室
直方養女

忠貞　豐松　織部
織部正從五位下
享保十年十二月十八日叙任
後改遠江守
寛保元年正月十八日卒三十六歳
法名智勝院仁岳義勇

長周　三好鍋五郎
忠基養子

女子
忠基養女

女子　早世

長達　總次郎
喜三郎長興養子

女子二人
一人早世
松平大和守義知室

忠雄　萬松丸　彈正　初長眞
遠江守從五位下
寛文三年十二月廿八日叙任
同七年十二月廿八日從四位下
元祿十年十二月十八日侍從
同月廿日改右近將監
享保十年六月廿八日卒七十九才
法名靜照院曉山紹榮

忠基　豐松　織部　初清貞　清遙　忠遙　忠清
織部正從五位下
元祿九年十二月廿二日叙任
同十年十二月廿日改遠江守
享保十年十二月十八日從四位下
同十八年十二月十八日侍從
同月廿六日改右近將監
寶曆三年二月五日卒七十一歳
法名洪濟寺亘巖際仁

清彪　菊千代　小五郎
稻葉紀伊守正辰養子
後歸稱三好彥三郎

女子
稻葉長門守正知室

貞通　[illegible]任次郎　鶴千代
備中守眞方養子

長親　大刀　早世

忠總　玫之介　只次郎
伊豫守從五位下
寛保元年十二月十九日叙任
寶曆三年十二月十八日從四位下
明和元年五月三日改左京太夫
安永四年二月五日改兵部大輔
同年四月九日改左京太夫
同年閏十二月十一日侍從

女子　早世

長周　三好鍋五郎
實忠貞長男

女子
實忠貞女
佐渡守長恭室

忠苗　保三郎　初長浮
實信濃守長逵三男
伊豫守從五位下
安永二年十二月十六日叙任

直方　隼人　初長彦
備後守從五位下
寛文十一年十二月廿八日叙任
後改備中守
寶永六年七月五日卒五十八歳
法名廣大院

女子
實兵部大輔長安女
松平隱岐守定長室

女子
實右近將監忠雄女
牧野周防守康重室

貞通　任次郎　爲千代　内記　初基房
實右近將監忠雄三男
近江守從五位下
寶永六年十二月十八日叙任
延享四年正月五日卒六十二歳
法名曾溪院

定政　左京
元文四年六月廿二日卒

女子二人
裏松左中辨祐光室祐光卒
左京大夫家人宮木圭馬員弼妻
五島右膳盛春妻離別嫁
小笠原平十郎長之

貞顯　龜之介　内記
備後守從五位下
寛延元年十二月廿一日叙任
後改彈正少弼備中守備後守
天明二年八月十九日致仕

忠增　峯松　監物
家人
坂牧兵右衞忠利養子

長弘　兵作　下枝五郎三郎
後稱小笠原左兵衞
爲家人

女子　信濃守長爲室

貞温　又次郎
從五位下近江守
天明二年十二月十八日叙任

貞則　鐵五郎
左京大夫忠總家人
宮木圭馬貞陣養子

女子　高木菊次郎忠任妻

忠知

長矩

女子　早世

長祐　千代松　民部　初長治　長敦
能登守從五位下
寛文三年十二月廿八日叙任
延寳七年九月朔日改壹岐守
元祿三年六月十七日卒四十七歲
法名彈指院則峯宗見

長重　兵助

某　大吉
享保元年八月十四日卒

女子　早世

長庸　又次郎　數馬

某　長千代
延寳二年六月九日卒

長重　兵介　釆女　初長好致仕後長亮
實長矩二男
佐渡守從五位下
寛文十二年十二月廿八日叙任
元祿四年閏八月廿四日從四位下侍從
寳永七年五月十八日致仕號峯雲
享保十七年八月朔日卒八十三歲
法名竺仙院英嶽崇雄

女子四人　共早世

女子
小笠原備後守定顯室

長恭　上丸　內膳　初長明

長道　兵介
元祿十年九月廿五日卒

長熙　津八郎　初長信　長寛
山城守從五位下
寳永元年十二月十一日叙任
正德四年九月改佐渡守
享保十三年五月七日改壹岐守
元文四年四月廿二日致仕
寳曆二年三月廿一日卒六十三歲
法名乾亨院貞山崇元

某　八之丞　早世

長堯　岩丸　津八郎

實小笠原大膳長丘二男
山城守從五位下
元文三年十二月十八日致仕
延享元年七月六日卒二十三歲
法名祥雲院龍山崇吟

女子　長厝室

某　萬勝　早世

女子二人　共早世

佐渡守從五位下
寶曆六年十二月十八日叙任
明和四年七月五日改能登守
安永五年五月廿九日卒三十七才
法名慈雲院本源崇德

女子二人
北條遠江守氏彥室
九鬼式部少輔隆貞室

從五位下佐渡守
天明元年十二月十六日叙任

女子
織田左近將監信浮室

長富　錢次郎

長英　恒五郎

小笠原

○信濃守源長勝は故信濃守長次か二男也兄上野介長章は（前編には長知）病者にて籠居しけれは長勝よつきとなり寛文二年十二月五日はしめて謁したてまつりおなしき六年八月二十九日父か遺領をたまはり（豊前國中津の城にて八萬石）十二月從五位下内匠頭に叙任し天和二年に卒す（十二月二日三十七歳）其子修理大夫長胤實長章か長子なり延寶三年の夏はしめて見參し天和三年正月二十六日家繼て十二月叙爵し元祿二年六月二十八日奥詰の衆となりしかおなしき五年六月十日其列をゆるさる同き八年實の弟民部長智に所領をわかつ（私墾田五千石）しかるに長胤身の行ひたゝしからさるによりておなしき十一年七月二十九日領地沒收せられ同姓右近將監忠雄にめしあつけられぬ（寶永六年三月廿七日四十二歳にて卒す）されとも勤勞ある家なれはとて弟宮内長圓に中津の城地四万石をうけ長圓ことし十二月從五位下して信濃守になり正德三年十月十三日三十八歳にしてうせけれはその子造酒助長邕はつか三歳にしてことしの十二月家をつきしか享保元年九月六日世をはやうせしかは家絕へかゝりしをふるき家の筋目なれはとて弟喜三郎長興（五歳）に播磨の國の内にして一万石を賜はり長興また病かちにて生長する迄出仕なさゝりしかばかくては仕へまいらすへきもあらすとておなしき十五年の春所領の地を公にかへし奉らん事をこひけれとも一族のうちしかるへきもの養ひて家つかすへきむね仰ありけれは六月十一日遠江守忠基か二男總次郎長達を子として十二月十一日家讓りて致仕す（天明六年六月廿四日七十五才にて卒）長達この秋見へ奉りやかて從五位下の信濃守になり明和七年八月八日五十八歳にて身まかりその子總次郎長爲明和元年の五月初見の禮をはりおなしき七年十月二十四日家をつき叙爵して信濃守に任し天明三年二月十二日卒す三十八歳其子豐松丸はつかに三歳にして家をつく

○右近將監源忠雄（初は長眞）故右近將監忠眞か三男也忠眞男子六人あり長子兵部大輔長安寛永十五年の冬叙爵しけれとも病によりて籠居けれは二男大助長宣よつきとなり正保三年從五位下大和守に叙任し父にさきたちてうせけれは（寛永三年正月十日三十三歳）忠雄世つきとなるこれよりさき万治三年五月二十八日はしめて謁したてま

つり寛文三年十二月叙爵して遠江守になり（後右近将監）おなしき七年十二月十日父か遺領賜はりて（豊前の國小倉の城十五萬石）従四位下に昇りおなしき十一年九月二十二日弟隼人眞方に領地をわかつ（私墾田一萬石）元祿十年の冬侍従にすゝみ享年七十九にして享保十年六月二十八日身まかりけり嫡子織部忠基（初は清貞といふ又清遙忠遙忠清にあらたむ）元祿四年九月十五日はしめて拝謁し同き九年十二月従五位下織部正に叙任し（後遠江守にあらたむ）享保十年八月十五日家つきて十二月従下の四位に昇り同十八年侍従にすゝみ右近將監にあらたむ寶暦二年六月五日七十一歳にして卒す嫡子織部忠貞は享保四年十一月二十八日初て見え奉りおなしき十年十二月従五位下織部正に叙任し（後遠江守）父にさきたちて卒す（寛保元年正月十八日三十六才）二男摠次郎長達は喜三郎長興か家つきけれは三男只次郎忠總をよつきとす忠總寛保元年の秋初て見參し十二月従五位下伊豫守に叙任し（後左京大夫にあらたむ）父におくれし年の三月二十二日家をつき寶暦三年十二月従四位下して安永四年閏十二月侍従に任す（時に年五十二）その子保三郎忠茴は信濃守長達の三男なり安永二年六月朔日はしめて見へ奉り十二月叙爵して伊豫守に任す

○備中守源眞方は（はしめ武秀前編に長貞にしるす）右近將監忠眞か四男也寛文八年六月十四日初見の禮をはりおなしき十一年九月二十三日兄忠雄か所領をわかち賜る（私墾田壹萬石○前編には父の遺領をわかちたまふとしろせり）この年十二月叙爵して備後守に任し（後備中守にあらたむ）寶永六年七月五日五十八歳にして卒す其子内記貞通（初は基方）實は右近將監忠雄か三男元祿十三年十二月十五日はしめて見へ奉り寶永六年九月七日遺領を賜り十二月従五位下に叙し近江守になり延享四年正月五日六十二歳にしてうせぬ長子左京定政享保十七年四月はしめて見參しけるか世を早うしけれは二男内記貞顯を世つきとす貞顯父か卒せし年の三月十六日家を繼寛延元年四月謁したてまつり十二月従下の五位して備後守に任し（後彈正少弼備中守また備後守）天明二年八月九日致仕す（七十一才）嫡子又次郎貞溫今年六月はしめて拝謁し父につき十二月従五位下近江守に任す

○壹岐守源長祐は（初長治又長教前編には忠治としるす）山城守長矩（初長頼といふ前編には初長祿又長根といふと見へたり）か嫡男也明暦元年十一月十一日はしめて謁し奉り寛文三年十二月従五位下能登守に叙任し（後壹岐守）延寶六年三月晦日家つきて（三河國吉田の城六萬石）元祿三年に卒す（六月十七日四十七歳）其子長千代早世しけれは弟采女長重

初は長好をよつきとす長重はしめ寛文四年三月二十一日見參しおなしき十年七月十一日中奥の衆となり十二月二十八日はしめて廩米を賜ふ五百俵おなしき十二年四月御小性となり叙爵して佐渡守に任す厳有院殿におくれまいらせし後職務なくしてありしか天和元年七月六日御書院の番頭になされて明る二年九月采地を賜ふ千石貞享二年七月九日兄長祐か嗣となりこれまて賜はりし采地はかへし奉る元祿三年十月十日家をつき十二月三日御奏者の事を承はり寺社の奉行をかぬあくる年の閏八月所司代に補せられ従四位下の侍従に叙任し役料一萬俵を賜ふおなしき十年四月十九日宿老になされ地くはへられ一萬石武藏國岩槻の地にうつさる松平伊賀守忠榮にかはる寳永五年八月二十七日西城につけられまた地加へられ一萬石合て六萬石同しき六年の春御代改りしかは本城の衆に列しあくる年の五月病によりて致仕し入道して峯雲といふ致仕せし後折にふれて召す事あり恩遇他に異なりしなり年つもりて八十三歳享保十七年八月朔日身まかりぬ其子津八郎長凞初長治又長寛元祿十一年はしめて見え奉り寳永元年従五位下にて山城守になり家つきて鴈の間の詰衆となり正徳元年二月遠江國掛川の城を賜り松平山城守忠喬にかはる元文四年致仕し寳暦二年三月十一日六十三歳にして卒すその嗣子數馬長庸は一族大膳長丘か二男なり元文三年九月十五日はしめて見えたてまつり十一月従五位下山城守に叙任し四年四月二十一日父かゆつりをうけて家をつき帝鑑の間の列となり延享元年七月六日にうせぬ二十三歳其子内膳長恭初は長明八月二十七日家をつき同き三年九月二十三日陸奥國棚倉の城に移り松平右近將監武元にかはる寳暦六年三月はしめて見へたてまつり十二月叙爵して佐渡守になり後能登守安永五年五月二十九日卒す三十七歳嫡子津八郎長曉ことしの七月家をつく時に十七才おなしき九年の春はしめて見參し天明元年十二月従五位下佐渡守に叙任す

小笠原

源政信

女子　織田因幡守信昌室離別
嫁中院内大臣通茂公

女子　貞信室

某　源七郎　早世

貞信　伊勢松　新五郎　主膳
實高木權右衛門貞勝嫡男
土佐守從五位下
明暦二年十二月廿六日叙任
元祿十五年七月十八日致仕剃髮號一玄
正德四年六月十七日卒八十四才
法名眞光院鐵梁一玄

女子　早世

清信　新五郎
延寶七年依病籠居號一永
正德六年二月十六日卒五十七才

信秀　半次郎　大膳
元祿六年七月廿二日卒三十三才
法名高照院秋覺月清日法

女子
秋山吉兵衛正輔妻離別

女子
高木五郎右衛門衛貞妻

信辰　大學
駿河守從五位下
寶永六年六月十一日叙任
享保六年四月廿五日致仕後號河內入道
元文元年二月廿八日卒五十一歲
法名法專院一祐愚人

女子
信成室

某　式部　早世

貞政　主税　早世

信成　彈正　齋宮
實酒井因幡守忠隆二男
能登守從五位下
享保五年十二月十八日叙任
同十五年七月十四日卒二十七才
法名承德院仁叟豐寛

信胤　源十郎
實本多伊豫守忠統二男
佐衛門佐從五位下
享保十五年十二月十八日叙任
延享二年六月廿九日卒三十一歳
法名龍臺院賢巖義哲

女子
高木新兵衛篤貞妻

信房　源彌
實信辰二男
從五位下飛驒守
寛延九年十二月廿一日叙任
安永九年十一月十六日致仕

信房　源彌

某　豐次郎
寶暦十年六月廿二日卒

長教　伊勢松　初信愛
相摸守從五位下
安永九年十二月十八日叙任

信賢 采女

女子 福島左門正豐妻離別
嫁知久圖書助頼福

信順 常葉内記

女子三人 小笠原政之介直信妻
許嫁小栗吉五郎久修離別
嫁有馬兵部大輔廣春
小笠原三右衛門信興養女

小笠原

○土佐守源貞信は左衛門佐政信か子實は高木權右衛門貞勝か嫡男也寛永十七年九月十四日政信か遺領をたまひ（下總國關宿の城二萬二千七百石余）明の日はしめて見參しおなしき二十八日關宿をあらためて美濃國高須の城にうつり明暦二年十二月叙爵し元祿四年七月二十六日又越前の國勝山の城にうつりおなしき十五年の秋致仕し正德四年六月十七日に卒す（八十四歲）其子新五郎清信いたはる所おほかりしにより二男大膳信秀を嗣とすしかるに信秀父にさきたちしかは其子大學信辰祖父のゆつりをうく信辰はしめ元祿八年四月初見の禮をはり寶永五年六月九日公の仰かうむりてふたゝひ城主となり勝山の地に城を築く（おほち土佐守貞信家つきし時おさなかりしかは關宿の城主にたへすして高須にうつされしなり城もちの列を除かれしかはおりにふれてたひ〳〵なけき申せしによりかくはなされしとなり）おなしき六年の夏叙爵して駿河守に任し享保六年に致仕し後剃髪して河内入道といふ元文元年二月所領の地にありて卒す（五十一歲）其子齋宮信成實は酒井因幡守忠隆の二男享保五年七月はしめて拜謁し十二月從五位下して能登守になりあくるとしの四月二十五日家つきておなしき十五年の七月十四日二十七歲にしてうせぬ子なかりしかは本多伊豫守藤原忠統か二男源十郎信胤をやしないてよつきとす信胤九月遺領たまはりて初見の禮をはり十二月叙爵して左衛門佐に任し延享二年六月病おもりける時子なかりしにより河内入道か老後にもうけし男子源彌に家つかせん事を申おきておなしき二十九日むなしくなりけれは（三十一歲）八月二十九日源彌信房に信胤か遺領を賜ふ信房寛延元年十一月はしめて見參して從五位下飛驒守になり安永九年の冬致仕し（時に四十八歲）その子伊世松長教に家をゆつる長教これよりさき安永五年十二月はしめて見へたてまつり家繼てのち叙爵して相摸守に任す（廿一歲）

岡部

藤原宣勝

行隆 龍千代 帶刀
內膳正從五位下
寬永十七年十二月廿九日叙任
天和三年十一月四日從四位下
貞享三年八月廿五日致仕號紹慶
同四年十二月廿五日卒七十一歲
法名最乘院仁叟紹慶

女子二人
松平周防守康映室
朽木伊豫守植昌室

高成 主稅介
寬文十一年正月十九日卒
至孫數馬廣高家絕

豐明 左京
阿波守從五位下後改市正
今岡部專左衛門利寬祖

女子
有馬周防守永純室

長泰 龍千代 帶刀
初宣乾
備後守從五位下
寬文四年十二月廿八日叙任
天和三年九月十一日改美濃守
寶永七年十二月十八日從四位下
享保六年九月廿二日致仕
同九年七月十七日卒七十五歲
法名雲祥院靈巖瑞應

女子二人
實桑山修理亮一貞女
堀式部少輔直勝室
實市正豐明女
町野酒之丞幸重妻

某 龍千代
延寶四年六月七日卒

長敬 大介
初致清 宣隆
內膳正從五位下
元祿六年十二月十八日致仕
享保元年七月廿五日卒四十六歲
法名俊德院義山崇信

長德 賴母
家人
阿部監之介成俊養子

亮賢 幼名庸丸
大和國內山上乘院

宗重 百藏 帶刀 丹下
初宗盈
柳生備前守俊方養子
後歸

長紹 兵部 早世

直好　造酒　造酒介
初孝之　長隆
志摩守從五位下
今岡部監物直淸祖

女子
水野藤三郎忠雅妻離別
嫁內藤三左衛門信成

正敦　數馬
播磨守從五位下
主稅介高成養子

成俊　監之介
爲家人

某　大介　早世

女子
板倉近江守重治妻離別

長著　豊次郎
初長富

女子三人
久世出雲守賀明室
家人朝比奈圖書稠池妻
內藤能登守政陽室

長住　滿彌
初長茂

長修　六貮　監物
初長吉　長恭

美濃守從五位下
享保九年十二月十八日叙任
寶暦六年五月十日致仕
同年六月四日卒四十九歳
法名十輪院錡闢道玄

長晧　外記
伊賀守筑前守
今岡部外記長敎祖

長邦　織部　早世

長矩　賴母
家人岡部賴母長德養子

從五位下内膳正
寶暦五年十二月十八日叙任
安永元年四月廿三日致仕

某　小隼　早世

某　三之介　早世

女子
家人岡部外記長剛妻

長修　監物

女子
家人岡部監之介長堅妻

長房　五十吉　彈正
家人岡部外記長剛養子

女子

實長著四男
美濃守從五位下
明和八年十二月廿八日叙任
安永五年八月十八日致仕後改駿河守

某　半次郎　早世

某　萬鍋　早世

長備　富三郎
美濃守從五位下
安永六年十二月十八日叙任

某　盛太郎

某　茅次郎

薫訓　舟越楠喜

岡部

○內膳正藤原行隆は美濃守宣勝か嫡男なり寛永十七年十二月叙爵し寛文元年十月二十七日家をつき（和泉國岸和田城五萬三千石）舍弟等に所領わかつ（主税助高成に五千石阿波守豐明に二千石）天和三年從四位下に叙し貞享三年八月致仕して嫡子帶刀長泰に家をゆつりあくるとし十二月二十五日卒す年七十一長泰明暦三年六月六日はしめて見へたてまつり寛文四年從五位下備後守になり（後美濃守にあらたむ）寳永七年從下の四位に昇り享保六年致仕し年つもりて七十五歳おなしき九年七月十七日身まかりぬ嫡子龍千代世を早うしけれは二男大助長敬世つきとなり貞享二年十一月十三日はしめて見へ奉り元祿六年叙爵して內膳正に任し父か致仕の日家つきて享保八年九月御奏者の事を承りあくる年七月二十五日卒す四十六歳嫡子大助いとけなくてさきたちけれは二男豐次郎長著を世つきとす長敬か卒せし年の九月二十五日長著に遺領を賜はり十月朔日はしめて見えたてまつり十二月從五位下美濃守に任す元文五年二月十六日弟外記長晧に廩米を分つ（三千俵）長著寳暦六年五月十日致仕して六月四日卒す年四十九嫡子滿彌長住寳暦四年四月朔日はしめて拜謁し明る五年叙爵して內膳正になり父か致仕せし日家をつく子なかりけれは舍弟監物長脩をやしなひて子とし安永元年の夏致仕して（時に三十五歳）家をゆつる長脩は明和八年十二月十五日はしめて見えたてまつり二十八日叙爵して從五位下美濃守になり家つきて後病多かりしかは安永五年八月十八日致仕す（三十一歳）その子富三郎長備をして七月朔日はしめて見參して家をつき明のとし冬叙爵して美濃守に任す（十七歳）

諏訪

源忠恒

忠晴　右京　因幡守從五位下　明暦三年十二月廿七日叙任　元祿八年三月六日卒五十七歳
法名乾龍院雄巖文穎

賴蔭　兵部
下總守
今諏訪辨之進賴古祖

賴久　右衞門
壹岐守
今諏訪靱負賴嵩祖

盛條　五郎左衞門
今諏訪源六郎盛善祖

女子三人　山口但馬守弘隆室
諏訪備前守賴音妻
岡田將監善次妻

某　右京　早世

某　盛太郎　早世

忠尋　小太郎
出雲守從五位下
寶永六年三月廿七日叙任
享保二年四月廿二日卒廿三歲
法名景耀院靈淵空惠

某　千代熊　早世

某　萬介　早世

忠虎　左京
安藝守從五位下
延寶六年十二月廿八日叙任
享保十六年七月二日卒六十九歲
法名洞虎院影往闇幽

女子
實大炊御門左大臣經孝公女
最上右京義雅妻

某　勝之介　早世

某　大藏　早世

某　八十之丞　早世

忠休　小太郎　早世

某　新七郎　早世

某　左助　早世

忠林　織部　修理
實諏訪肥後守賴篤二男
伊勢守從五位下
享保六年十二月十八日叙任
後改因幡守
寶曆十三年八月廿六日致仕
明和七年五月廿七日卒六十八歲
法名養賢院聖懿諦範

忠倫　小木郎
延享四年四月十六日卒八歲

某　丈之介　早世

某　鐵次郎　早世

忠厚　軍藏
從五位下伊勢守
寶曆十二年十二月十八日叙任
後改安藝守
天明元年十二月十一日致仕

女子
松平和泉守乘完室

賴基　猪五郎
刑部大輔
上諏訪元大税諏訪大隅守
賴隆養子

女子四人
二人早世
忠林室
伊達紀伊守村信室

賴訓　勇次郎　早世

女子二人　共早世

忠粛　軍次郎
從五位下伊勢守
天明元年十二月十八日叙任
後改因幡守

女子　早世

賴庸　鶴藏　早世

諏訪

○因幡守源忠晴は出雲守忠恒か嫡男也 正保三年四月初て見へたてまつりしといふ 明暦三年二月二十五日父か遺領を賜はり 信濃國高島の城三萬石 舍弟二人に所領をわかつ 下總守頼隆壹岐守頼久各千石 叙爵して元祿八年三月六日五十七歳にして卒す其子右京忠虎寛文十五年四月四日はしめて拜謁し延寶六年の冬叙爵して安藝守に任す父か卒せし年の四月家をつき享保十六年七月二日卒す六十九歳嫡子出雲守忠尋父に先たちてうせけれは 忠尋實は三男也忠虎子すへて九人ありみな早世したり 支族肥後守頼篤か二男修理忠林にをのか女に配せて嗣とせしなり忠林享保六年七月朔日初見の禮をとりことし從五位下に叙して伊勢守になり 後因幡守にあらたむ 享保十六年八月二十五日家を繼寶暦十三年致仕し明和七年五月二十七日年六十八にしてうせぬ嫡男小太郎忠倫世を早うして二男三男もともにさきたちてうせけれは四男軍藏心厚をよつきとす忠厚寶暦十三年二月十五日はしめて見參しおなしき十二月伊勢守に任し十三年八月二十六日家つきて安藝守になり天明元年十二月十一日致仕す 時に三十六歳 その子軍次郎忠肅ことし十一月十五日はしめて拜謁し父につきて從五位下伊勢守に任す 十九歳

土屋

源數直

女子　渡邊久左衛門進妻

政直　左門　能登守從五位下　萬治元年十二月廿八日叙任　寛文五年改相模守　貞享二年十月六日從四位下侍從
享保四年五月廿八日致仕　同七年十一月十六日卒八十二歳　法名德相院俊翁道者

雅直　辰之介　藤三郎
水野石見守忠貞養子

女子　稻葉石見守正休室

某　式部
寛文七年十一月廿六日卒

昭直　鶴千代　主計
大和守從五位下
天和三年十二月四日叙任
元祿三年十月廿九日卒廿四歳
法名崇峯院中巖玄庸

女子四人
內藤能登守義好室
二人早世
岡部內膳正宣隆室

定直　采女
出羽守從五位下
元祿十六年十二月廿一日叙任
寶永二年閏四月九日卒七十七歲
法名大慈院英叟義雄

女子
松平和泉守乘邑室

陳直　左門　左京　初矩直　啓直
左京亮從五位下
寶永六年三月七日叙任後改但馬守
享保十九年正月十六日卒四十歲
法名靈鷹院顯翁瑞英

女子
實土屋數馬宗直女
三浦備後守昭高室

女子三人
一人早世
松平和泉守乘祐室
松平主殿頭忠利室

某　粂五郎
享保十三年七月廿四日卒

女子二人　共早世

篤直　左門
能登守從五位下
延享四年十二月十九日叙任
安永五年五月廿日卒四十五歲
法名本覺院嚴性道義

氏純　主計　傳之丞　初以直
戶田監物氏休養子

女子　早世

壽直　辰之介　左京
相模守從五位下
安永五年十二月十六日叙任
同六年七月十九日卒十七歲
法名俊良院彰善惟顯

女子　早世

泰直　健次郎

好直　外記　土佐守
實土屋主稅達直三男
今土屋隼人光直祖

女子　早世

英直　主稅

女子四人
一人早世
松平大膳亮忠實室
阿部備中守正精室
實戶田主計氏純女
富山織部義福妻

泰直　健次郎
實篤直二男
從五位下能登守
天明三年十二月十八日叙任

土屋

○相模守源政直は但馬守數直か嫡男也[承應三年六月朔日初て拜謁す]万治元年十二月從五位下能登守に叙任し延寶七年五月十日父か遺領をたまふ[常陸の國土浦の城四萬五千石]同年九月十三日御奏者の事を承はり天和五年六月駿河國田中の城にうつされ貞享元年七月大坂の城代になされておほくの地くはへらる[二萬石]おなしき二年の秋所司代にうつり從四位下の侍從に任しおなしき四年十月十五日宿老の職にあけられ舊領常陸國土浦の城にうつる[松平因幡守信興にかわる]元祿七年の四月十日常憲院殿政直か邸にわたらせたまひておなしき二十一日また地くわへたまふ[一萬石]寶永七年の春宿老の職に在なから連署等の事みゆるしありて優侍ならひにくわゝりしなり正德元年十二月所領の地ましたまはる[一萬石]職にある事三十二年享保三年三月三日又領地加へられて[一萬石合て九萬五千石]同し職ゆるさる明る年の夏致仕す年つもりて八十二同しき七年十一月十六日卒す長子式部某は早世し二男大和守照直三男出羽守定直みなさきたちけれは四男左京陳直して家つかしむ陳直寶永二年四月十五日初めて謁し奉りおなしき六年叙爵して左京亮に任し[後但馬守]享保四年五月二十八日家をつきおなしき八年三月十五日御奏者の事をうけたまはりおなしき十三年二月病によりて其職を辭し同き十九年正月十六日卒す四十歲二男左門篤直ことし三月父か遺領たまはり[長子粂五郎早世す]延享四年九月十五日はしめて見參し奉りこの冬叙爵して能登守になり寶曆十年正月御奏者となり明和六年十月寺社の奉行をかぬ安永五年五月二十日四十五歲にして卒す嫡子左京義直七月十六日父につきてはしめて見へ奉り十二月叙爵して相模守になる明る六年七月十九日十七歲にして世を早うす子なかりしかは弟健次郎泰直をよつきとし泰直九月十六日家をつき天明三年十月はしめて拜謁しことし十二月從五位下能登守に任す[時に十六歲]

丹羽

源氏純

女子　早世

氏明　勘介　初氏房
長門守從五位下
天和二年十二月廿七日叙任
貞享三年三月二日卒廿歳
法名德玄通海

某　數馬　早世

女子　土井内藏允之政妻

女子
實丹羽權兵衛氏右女
巨勢大和守利啓妻

某　六丸　早世

氏音　莊之助
實丹羽權兵衛信氏二男
越中守從五位下
元祿五年十二月十八日叙任
後改壹岐守
同十四年十二月改和泉守
寶永二年閏四月七日卒廿六歳
法名傑岑亘英

薫氏　猪之助　右近　初倚氏
實丹羽權兵衛氏右嫡男
式部少輔從五位下
寶永六年三月七日叙任
元文元年十一月廿二日改和泉守
寶曆七年五月廿二日卒六十三歳
法名英山源機

氏榮　勘介　初郡氏
長門守從五位下
享保十八年十二月十八日叙任
延享三年二月四日改越中守
寶暦九年十二月十六日改和泉守
明和元年六月廿三日改式部少輔
同八年七月九日卒五十六歳
法名智勝藏海

氏董　猪之介　主殿　中務
薙髪號澤源

利永　大吉
巨勢大和守利啓養子

某　一色又吉
延享四年三月四日卒

氏福　龜五郎　勘介
實巨勢大和守利永二男
從五位下長門守
安永九年十二月十八日叙任

氏壽　求馬
安永六年十月十日卒

氏昭　勘介

某　新助　早世

丹羽

○長門守源氏明は式部少輔氏純か男なり延寶二年の秋八歳にして父にわかれ十一月遺領を賜ふ（美濃國岩村の城二萬石）天和二年の冬叙爵して貞享三年三月二日世を早うす（二十歳）子なかりしかは一族權兵衛信氏か二男庄之助氏音をよつきとす氏音ことし閏三月二十七日家をつき（此家祖先より廿世父子相續せしか氏明にいたりてはしめて人の子を養ひしといふ）元祿五年十二月從五位下に叙し越中守に任す（後壹岐守和泉守にあらたむ）同しき十五年家人等二十余人罪かうむりて刑せられ氏音も家事正しからすといふ事にて岩村の城收公せられ所領半を減せられて越後國頸城郡の地を賜はり（一萬石〔此時賜はりし越後國頸城の郡高柳といへる地のよし其後元文二年薫氏大坂城の定番の仰かうむりし時美作の國にて所領を賜ひ寛保二年また所領かへられ播磨の國加東郡三草の地へ移るなり〕）閉門してそありける（本は元祿十四年城下の商賈邪なる事ありしにそれに事よせ私の誤りをはたさんと黨をむすふその罪狀明白に白狀ありしか氏音はからひよからすして罪かふむりしなり）寶永二年閏四月七日卒す二十八歳氏音子なかりけれは支族權兵衛氏右か男猪之助薫氏をやしなひて家つかす薫氏おなしき六年叙爵して式部少輔になる（後和泉守にあらたむ）享保四年正月御奏者の事をうけたまはり元文四年八月大坂の城の定番にうつり寶暦七年五月二十二日行年六十三にて卒長子勘助氏榮はしめ享保十八年十一月朔日見へ奉りやかて從下五位の長門守に任し（越中守和泉守式部少輔に改む）父か卒せし年七月十六日遺領を賜はり寶暦十年の夏大番の頭となり明和元年六月大坂の城の定番にうつり同き八年七月九日五十六歳にて身まかりぬ其子勘助氏福家つく（時に十歳）氏福は巨勢大和守利永の二男なり（利永實は氏榮か弟なれば氏福は甥なり）安永六年五月十五日初て見へ奉りおなしき九年の冬叙爵して長門守に任す

山口

多々良弘隆

重貞　長次郎
修理亮従五位下
延寶五年十二月廿六日叙任
元祿十一年四月四日卒四十六才
法名重貞院應郎圓

政信　小次郎
萬治三年二月卒

重治　勝三郎

重富　百合介　半之介
數馬　釆女

女子四人　三人早世
久世丹波守勝春妻離別
嫁谷主水頼衞離別

某　早世

重治　勝三郎　左門
實弘隆三男
依病籠居

弘豐　勝三郎　求馬
修理
初重明
伊豆守從五位下
寶永六年三月七日叙任後改
但馬守周防守
享保十六年九月二日致仕
寶曆五年十一月廿三日卒七十三歳
法名弘豐院眞龍定淵

女子二人
許嫁前田隼人利英卒
服部平吉保種妻
保種養女

豐隆　淸十郞　求馬
享保十四年六月廿五日卒廿八歲

女子二人　共早世

某　早世

女子六人
諏訪若狹守賴一妻
三人早世
弘長室
賴一後妻

某　早世

女子三人

弘長　右近　修理
實渡邊備中守基綱三男
修理亮從五位下
享保十六年十二月廿三日叙任
明和五年十一月十二日卒六十二歲
法名弘長院仁海崇雲

女子二人　共早世

某　早世

弘稱　熊次郞

女子二人
一人早世
渡邊丹後守伊綱室離別
嫁小出傳八郞有里離別
嫁新庄駿河守直規

某　早世

弘倉　忠之丞　兵部
實弘豐五男
明和五年八月四日卒三十六歲

女子

弘道　政之進　中務
實弘豐六男
但馬守從五位下
明和六年十二月十八日叙任後改修理亮
天明三年九月十二日卒四十四歲
法名弘道院長水玄瀾

弘務　勝之進
實溝口出雲守直溫七男
從五位下
天明三年十二月十八日叙任

女子
實弘倉女
弘務室

女子三人
二人早世
柴田七左衛門康哉妻

弘倉 忠之丞

弘道 政之進

女子
服部源太郎保郁妻

某 久太郎 早世

女子 早世

女子二人

弘致 仲之進

女子 早世

山口

○修理亮多々良重貞は故修理亮弘隆か嫡男也慶安四年十一月二十三日はしめて拜謁し延寶五年十一月九日父につき（常陸の國喜久の地一萬石）十二月叙爵して元祿十一年四月四日四十六歳にしてうせぬ世つきなかりけれは弟左門重治を子とし寛文十年の春初見の禮をとるしかるに重治病によりて家つかすへうもあらさりしかは嫡孫修理弘豐をよつきとす弘豐元祿八年六月二十八日はしめてまみえ奉り同き十一年五月二十九日家をつきて寶永六年の春從五位下伊豆守に任し（後但馬守周防守）享保八年九月七日大番の頭に補せられおなしき十四年五月二十五日職ゆりて十六年九月二日致仕し寶曆五年十一月二十一日卒す七十三歳その子求馬豐隆正德五年五月二十八日はしめて見へ奉りしか父にさきたちてうせけれは渡邊備中守源基綱か三男右近弘長をやしなひてをのか女にあはせてよつきとす享保十四年十月十五日弘長はしめて拜謁し弘豐か致仕せし日家をつきことし叙爵して修理亮に任す元文四年六月大坂城の定番となりしかいくほとなく病によりて職を辭し其後病いへしかは寶曆元年の冬大番の頭になり明和元年の秋職を辭しておなしき五年十二月十二日卒す六十二歳これよりさき弟忠之丞弘倉をやしなひて子とし寶曆六年初見の禮をとりしに明和五年の秋卒しけれはその弟政之進弘道をよつきとす弘道ことし十二月遺領賜はり明のとしはしめて見えたてまつり從五位下して但馬守になり天明三年九月十二日四十四歳にして卒す子なかりけれは溝口出雲守源直溫七男勝之進弘務をやしなひて子とす弘務天明元年の冬はしめて見え奉りおなしき三年十二月父につき叙爵して伊豆守に任す（時に二十一歳）

北條

平氏宗

氏治 八平 左京
實北條右近大夫氏利二男
伊勢守從五位下
寛文十年十二月廿八日叙任
元祿六年九月十五日改美濃守
同九年五月廿九日卒五十八歲
法名淨覺院俊甫宗秀

女子三人
氏治室
久留島出雲守通貞室
舟越左門爲景妻

氏朝 龜之介 左京
實北條右近大夫氏利五男
遠江守從五位下
寶永六年三月七日叙任
享保廿年九月晦日卒六十七歲
法名圓成院郎證元領

女子
久世主水廣貞妻

氏從 專次

氏以 隼人

女子 早世

氏貞 龜之介 左京
相摸守從五位下
享保十九年十二月十八日叙任
延享二年十一月十四日改美濃守
寶曆八年四月廿七日卒五十六歲
法名廣覺院倍叟義覽

某 民部 早世

女子 早世

某 鍋千代
北條對馬守氏澄養子

女子　實北條內膳氏園女
本多百介攄信妻

女子三人　稻垣安藝守定亭室
許嫁土方河内守雄房早世
安藤帶刀次由妻

女子二人　永井信濃守直國室
許嫁永井監物直遵早世

氏彦　龜太郎　左京
遠江守從五位下
寶曆八年十二月十八日叙任
明和六年五月朔日卒廿八歳
法名淡光院鐵叟紹心

氏昉　豐吉
相摸守從五位下
安永八年十二月十六日叙任

氏幹　三郎

女子二人　一人早世

氏喬　左京

某　龜之進　早世

某　惠吉

某　龜吉
本多半之丞正尹養子

氏格　友之進

女子　石原善之丞正範妻

恭順　幼名　友八郎
天王寺秋野法印理順養子

北條

〇伊勢守平氏治は左近大夫氏利か二男にて久太郎氏宗に養はれ寛文四年正月十五日初めて見參し同き十年十月朔日氏宗致仕しけれは氏治家つきて（河内の國横山一萬石）（氏宗は貞享二年六十七歳にて卒す）十二月叙爵し天和六年九月十五日御側衆にうつり同き九年五月二十九日五十八歳にして卒す氏治男子なかりけれは弟左京氏朝をやしなひて子とす氏朝天和三年閏五月五日初見の禮をはり元祿九年七月二十五日氏治か遺領をたまはり寶永六年從五位下して遠江守に任す享保五年六月伏見の奉行となり同しき十九年十月御奏者の事をうけたまはり寺社奉行をかぬあくる二十年七月二十九日病によりて職ゆるされ九月晦日六十七にして身まかりぬ嫡子左京氏貞正德四年八月十一日はしめて見え奉り享保十九年從五位下相模守に任し（後美濃守にあらたむ）あくるとしの十二月二十二日家を繼寶暦八年四月二十七日卒す五十六歳嫡子左京氏彥ことし六月父につき初見叙爵して遠江守になり明和六年五月朔日うせけれは（二十八歳）其子豐吉氏昉六月二十七日家をつき（時に十七歳）安永五年七月はしめて謁し奉りおなしき八年の冬從下の五位して相模守に任す

藩翰譜續編卷之六下

秋元

藤原富朝（トミトモ）

女子
戸田山城守忠昌室

喬知（タカトモ）　甚九郎　初喬朝
實戸田山城守忠昌嫡男
但馬守從五位下
萬治二(三)年十二月廿八日敍任
寛文五年十二月廿六日改攝津守
貞享二年十月廿二日改但馬守
元祿十二年十二月五日從四位下
同十三年十二月四日侍從
正德四年八月十四日卒六十六歲
法名濟川院義舟喬知

女子五人
一人早世
朽木民部少輔種元室
秋田伊豆守就季室
一人早世
戸田山城守忠昌養女

喬房（フサ）　源之助
伊賀守從五位下
元祿十年十二月十八日敍任
享保十年十二月七日改但馬守
元文三年九月五日卒五十六歲
法名泰元院智山義勇

武朝（タケ）　七之丞
寶永四年七月十三日卒廿八歲

女子
實秋元忠右衛門成朝女
有馬左兵衛佐貞純室

喬求　彦七
實戸田越前守忠余二男
越中守從五位下
享保十五年十二月十八日敍任
寛保二年四月三日致仕
延享元年二月廿六日卒三十歲
法名誠心院義由智貫

女子
喬永室

某　源之助　早世

達朝　岩次郎
實喬求男
越中守從五位下
寶曆五年十二月十八日叙任
同九年十一月八日卒廿三歲
法名到岸院寶利潤光

涼朝（スケ）　一覺　圖書
實秋元隼人正貞朝三男
攝津守從五位下
寬保元年十二月十九日叙任
延享四年九月三日改但馬守
同年十二月十五日從四位下
寬延元年五月朔日侍從
明和五年五月廿四日致仕改壹岐守
安永元年九月六日剃髮號休弦
同四年五月廿五日卒五十九歲
法名化城院休弦涼朝

永朝（ツネ）　玄蕃
實上田能登守義當四男
攝津守從五位下
寶曆十年七月十八日叙任
安永九年十二月十二日改但馬守

女子三人
松平主水正乘孝室乘孝卒
嫁阿部織部正陣
一人早世
實秋田主水正定季女
京極能登守高中室

達朝　岩次郎

修朝（ノフ）　龜太郎
攝津守從五位下
安永九年十二月十八日叙任

某　礄一郎

某　岩五郎

女子二人
一人早世
本多中務大輔忠典室

某　捨三郎

女子
許嫁土井龜丸利行

秋元

○但馬守藤原喬知（初め高朝）は越中守富朝の嗣子實は戸田山城守忠昌の子也明暦三年十月二日富朝か遺領を賜り（甲斐國谷村の城一萬八千石）初めて拜謁し万治三（二）年十二月叙爵して但馬守に任す（後攝津守又但馬守と改む）延寶五年の秋御奏者の事をうけたまはり天和元年十一月廿九日寺社奉行をかね同しき二年十月十六日少老の職にうつる元祿四年二月所領の地くわへ賜り（五千石）おなしき七年十二月またも地くはへらる（七千石）おなしき十二年宿老の職にのほり從下の四位に叙すあくる十三年五月ふたゝひ所領をまし賜はる（一萬石）ことし侍從に任す寶永元年十二月朔日かさねて加恩ありて（一萬石）二十五日武藏國川越の城をたまふ（松平美濃守吉保にかはり）正德元年十二月また地くはへられたり（一萬石合て六萬石）喬朝かたしけなくも宰輔の職をうけたまはりて三世の君につかうまつり六十のよはひにこへたりことし正德四年の秋老病しきりにおもり醫藥さらにしるしあらすして八月十四日つゐにむなしくなりぬ六十六歳なり嫡子源之助喬房これよりさき元祿六年十一月はしめて見參しおなしき十年叙爵して伊賀守に任し正德四年九月家つきて享保八年九月御奏者の衆に加はりしかは元文三年九月五日五十六歳にして卒す男子なかりしかは享保十二年閏正月戸田越前守忠余か二男彥七喬求をやしなひをのか女にあはせてよつきとしおなしき十五年初めて見參にいれ十二月叙爵して越中守に任し元文三年十月二十八日喬房か遺領を賜はる喬求性病多くして公の務心にまかせされは寛保二年四月三日身のいとまたまはりて致仕す（延享元年二月廿六日三十歳にして卒す）その子源之助はいまたむつきのうちにてうしなひけれは支族隼人正貞朝か子圖書涼朝を子としやしなふ涼朝寛保元年九月朔日初見の禮をはりことし叙爵して攝津守に任し明るとし父かゆつりをうけて家をつき延享元年五月十五日御奏者の事をうけたまはりおなしき二年五月二十八日寺社の職をかねあくる四年の六月西城の少老に補せられ九月また宿老にのほることし從四位下して明るとし侍從に任す寶暦十年御代あらたまりて西の御所本城にうつらせたまひしかは涼朝連署の衆に例し明和元年三月病によりて職をとく翌る二年十二月廿二日ふたゝひ西城の宿老に補せられしか同しき四年六月

また病によりて職ゆるされぬことし九月川越の所領をあらためて出羽國山形城を賜ふあくる五年五月二十四日致仕して壹岐守にあらためやかて入道して休弦といふ安永四年五月二十五日五十九歳にして卒す凉朝はしめ越中守喬求か子岩次郎達朝をよつきとしけるか世を早うしけれは上田能登守源義當四男玄蕃永朝を子とし養ふ永朝は凉朝か甥なり永朝寶曆十年初て見え奉り叙爵して攝津守に任し明和五年凉朝か家ゆつられて時に三十五歳安永三年十二月二十三日御奏者の事を奉はるその子龜太郎修朝同しき九年十一月はしめて見參せりその冬叙爵して攝津守に任す十九歳

稲葉

一世 越智政成（マサシゲ） 一作正（マサ）

正次（マサツグ） 八左衛門
寛永五年五月廿六日卒三十八歳

正能 市五郎 八左衛門
初正重
貞享二年五月廿五日卒六十歳
今稲葉主計頭正存主稅正朝等之祖

正定 龜之助 治左衛門 清左衛門
初正利
延寶七年十一月十九日卒五十四歳
今稲葉喜太郎正陽祖

二世 正勝

三世 正則（ノリ） 鶴千代 美濃守従五位下 寛永十一年十二月廿九日叙任 明暦三年十二月廿七日従四位下 寛文元年十二月晦日侍従 天和三年閏五月廿七日致仕號泰應 元祿九年九月六日卒七十四歳 法名潮信院泰應元如

女子 酒井日向守忠能室

四世
正征ユキ　宇右衞門　初義雅　正道
丹後守從五位下
承應三年十二月廿八日叙任
天和元年十二月朔日從四位下侍從
寶永四年八月廿一日致仕
同年十一月廿七日改內匠頭
享保元年十月九日卒七十七歲
法名高德院仁裕龍澤

女子
堀田筑前守正俊室

女子
松平隱岐守定直室

某　鶴千代　早世

女子二人
土井甲斐守利治室
小笠原信濃守長圓室離別

五世
正知トモ　宇右衞門
美濃守從五位下
元祿十二年十二月十八日叙任
同十四年十一月廿六日改長門守
寶永四年十一月廿七日改丹後守
享保元年十二月十八日從四位下
同十四年五月廿九日卒四十五歲
法名萬祥院瑞山紹運

正佐　長吉　織部
實正則十一男

女子　早世

正貞サダ　宇右衞門
享保十年八月廿六日依病籠居
元文四年二月八日卒三十五歲

女子

某　元次郎　三十郎　早世

六世
正任タフ　總兵衞
美濃守從五位下
享保十三年十二月廿一日叙任
同十五年正月十二日卒十七歲
無嗣以支蕃頭正恒奉祀
法名瑞信院天祥自澤

正房　主膳
正佐養子

女子三人

正香　主税
寶永元年七月十七日卒二十四歳

女子五人　共早世
二人早世
許嫁土井出雲守利武利武卒
嫁有馬日向守孝純

正茂
享保二年十月廿二日卒廿六歳

正房
實正知四男
享保六年十二月廿六日卒七歳
家絶

正倚ヨリ　主税
出羽守従五位下
寛文二年十二月廿七日叙任
元禄五年十一月朔日改駿河守
正德四年八月廿七日卒六十八歳
法名天理院了翁元心

七世
正恒　平左衛門　玄蕃
享保十五年三月廿四日卒廿歳
無嗣以越中守正親奉祀
法名剛節院俊山淨松

某　岩之丞　早世

女子二人　早世

正員　初稱毛利少輔四郎　外記　左近　備後守従五位下　寛文五年十二月廿七日致仕後改備前守　寶永二年十二月十六日
復本氏　享保四年八月廿日叙任　同十三年四月三日卒八十歳　法名庸行院堯融玄空

正辰　亀之助　主水
紀伊守従五位下
元禄六年十二月十八日叙任
正德四年九月八日改若狭守
享保十三年五月廿日卒七十九歳
今稲葉主水正峯祖

正博　藤五郎　數馬
實土井周防守利益三男

女子　早世

正直　大學　初正能
河內守從五位下
元祿十三年八月廿八日叙任
寶永二年九月廿六日改下野守
享保八年七月廿二日致仕
同十年五月廿六日卒七十二歲
法名泰量院全磯元彰

某　求馬　早世

利意　縫殿助
土井兵庫頭利長養子

女子
松平陸奧守綱村室

通周　惣十郎　左衞門　初正賀
元文三年十月十日卒七十二歲
今稻葉新太郎通義祖

某　幾十郎　早世

八世
正親（チカ）　式部　初正命
實太田原十藏晴門男
越中守從五位下
享保十三年十二月二日叙任
同十五年三月廿七日繼玄蕃正恒
同十六年六月廿八日改佐渡守
同十九年六月六日從四位下
同年九月十四日卒四十三歲
法名大義院徹山道機

女子
實柴田氏女
屋代主計正國妻

九世
正益　大學　初正甫
內匠頭從五位下
享保十八年十二月十八日叙任
延享元年十二月二日改丹後守
寬延三年十二月十八日從四位下
明和八年九月廿八日卒五十四歲
法名溫良院恭道義儉

正福　藤藏
修理正方養子

正明　留之助
藤藏正福養子

正名　本五郎　式部
延享四年九月十八日卒二十五歲

女子　早世

正春　三彌　宮內　內膳

女子
許嫁戶田能登守忠辰卒

正如　嘉内　賴母
正員養子

女子
松浦肥前守篤信室離別

正佐　長吉
正征養子

總明（フサトモ）　留次郎　兵庫
石川山平總詳養子

十世
正弘（ヒロ）　大學　字右衛門
佐渡守從五位下
寶曆十三年十一月十八日叙任
明和四年七月二日改美濃守
安永二年九月十二日卒二十七歲
法名純正院淳嶽道裕

女子
立花出雲守種周室
稻葉主水正溫妻

正諶　幸之助

十一世
正諶　幸之助　兵部
實正盆四男
從五位下丹後守
安永三年十二月十八日叙任

女子
有馬左兵衛佐譽佐室

某　字右衛門

正備（ナリ）　定之助

女子四人

女子　早世

正尹（タヽ）　幸三郎　早世

久功（ヒサコシ）　德之助　右近
仙石壹岐守久常養子

正如　嘉內　賴母
實美濃守正則九男
元祿十一年六月八日卒十八歲

女子　早世

正相　才藏　靭負
寧松平和泉守乘久十男
寶永二年十月十日卒廿歲

某　隼人　右近
實毛利甲斐守匡廣四男
享保十三年正月九日卒

正方　左次郎
實毛利刑部少輔元知三男
享保十三年十二月廿二日卒四十九歲
法名乾德院陽岳瑞雲

正福　藤藏
實佐渡守正親二男
享保廿年五月九日卒十八歲
法名眞解院萬機道融

正令　留之助
備前守從五位下
明和七年十二月十六日叙任
安永九年十一月十八日依病籠居

女子　早世

正明　留之助
實佐渡守正親三男
越前守從五位下
元文二年八月廿八日叙任
後改越前守

正吉　橒佐
寛永五年繼八左衛門正次　伊勢守從五位下　慶安四年八月十六日叙任
明暦二年七月三日自殺　三十九歳　法名端雲院性山鐵心

正休　權助（佐）
石見守從五位下
延寶二年十二月廿七日叙任
貞享元年八月廿八日殺死

正賞　定之丞　式部
堀數馬親褒養子

女子

某　勇之助
明和四年閏九月四日卒

正武　本三郎
從五位下播磨守
天明四年十一月十六日叙任

某　早世

女子二人

永井伊賀守尚庸室

町野左門幸重妻

稲葉　附石見守正休

○侍従兼美濃守越智正則は丹後守正勝か子也 幼名を鶴千代といふ寛永六年兩御所に拜謁す 寛永十一年二月家をつく 相摸國小田原の城八萬五千石 ことし十二月としわつか十一歳叙爵して美濃守に任す 春日の局の弟齋藤佐渡守利宗小田原の城にありて正則かいとけなかりしほとうしろみとしてありしか仰ありしによりてなりと家譜にしるせり 明暦三年九月二十八日今より後御側近くめしつかはるへしとて常に昵近してありけるか従下の四位に昇り万治元年閏十二月十九日連署の事仰下されて寛文元年侍従に任しおなしき三年二月八日地加へらる 一萬石 あくる四年伯父八左衛門正次か子ともに領地をわかつ 稲葉八左衛門正重三千石その弟治左衛門正實に二千石いつれも私墾田なり 延寶八年正月十二日また所領の地を加へ賜ふ 一萬五千石合て十一萬石 天和元年十二月職を辭しおなしき三年閏五月二十七日致仕し嫡男丹後守正往に家を讓りその餘の子供に所領をわかつ 十一萬石の内嫡子正往に十萬二千石次男出羽守正信七千石三男少輔四郎正貞四男正辰に三千石つゝ五男大學正直に二千石をわかつおほくは私墾田なり 正則としつもりて七十四元祿九年九月六日卒す 「五代将軍家御代しろしめされし初侍従正則を召され越後家の臣等か争論の事その計らひいかゝに思召すとの御事也そのとき正則御答に先君御病症重らせ給ひ御政務の事は酒井雅樂頭忠清へ御預のよふになりし處御家門の第一たる越後家の御事なれは若も額發にもおよはれん事ありては歎かはしく依ては家族の争論をたに取鎭なは事治るべしとゆる／＼事をはからひしよし先君御病にあらせられすは君の御旨にたかはせられし御事はあるましけれと申上しかは又先君御病おもらせられしに及ひ有栖川親王家を養君となし下し奉らんとせしは實事なるやとの御尋なりしに正則かしこまり先君御手をつけられし女房鈴木傳右衛門といひし人の女なり其頃妊娠せしよし承りし内御不例かろからす君を始め奉り甲府尾張紀伊御兩家等より御養君立せ給はゝたとへ御男子御出生ありとも大統繼せられん事いかゝあるへく親王家は将軍とかしつき奉らんこと京都に歸しかりにても安く夫の若君誕生まての御後見と忠清初め了簡仕るは更に他に心を存せす既に君大統を繼せられし時にも徳松君には館林の御家御相續あるへしとの御事は彼の女房の腹より若君御誕生ましまさは直に御養君に立給はんとの思召ある所情願の事も無れは水の泡と消ぬ是先君の御詮せさせ給ふところ是非なき次第なりしかりといへとも君大統を受繼かせ給ひ千代萬代も東照宮の神孫たへさせ給はぬ御事世を去りし忠清はしめ老衰の臣等か幸ひなりと申上しかは其の後は是れらの事御沙汰無かりしとなりし此時正則ありしく御答へせは忠清か後を初め此事に心をひとしうせし人々の身の上危き事なるに流石は春日の局の孫にて正則の御答を成せしゆへなんの御沙汰もなかりしこと或書に見侍りしまゝこゝに書附置ぬ」正往 慶安四年十一月二十三日初めて拜謁し承應三年の冬叙爵し元和元年四月御奏者の事をうけたまはり寺社の奉行をかね同しき年の十一月十五日所司代の職に補せられ従四位下して侍従に任す又加恩の地 三千石 をたまふおなしき三年家つきしをのか所領はかへしたてまつれり貞享二年九月所司代をゆるされて十一月十一日越後國高田の城にうつる元祿十年三月十四日舍弟左衛門道周に采地をわかちあたふ 私墾田千石 おなしき十三年三月大留守居の職になされあくる十四年正月十一日宿老にすゝみことし六月下總國佐倉の城にうつる 戸田能登守忠眞にかはる 寶永四年八月二日病

によりて職を辭しやかて致仕す嫡男鶴千代も先たちて世を早うせしかは次男丹後守正知に家をゆつり三男織部正佐（實は正則か弟の子なり）に地をわかつ（私墾田三千石）享保元年十月九日とし七十七にして卒す正知元祿九年の春はしめて見え奉り同き十一年十二月從五位下美濃守に叙任し（後長門守丹後守）享保元年十二月從四位下に叙しおなしき八年五月朔日所領を轉せられ山城國淀の城を賜ふ（松平和泉守豊貞にかはる）おなしき十四年五月二十九日四十五歳にして卒す長男宇右衛門正貞は多病にして籠居し次男三十郎は早世しけれは三男惣兵衛正任よつきとなる正任享保十年九月朔日はしめて見參し同き十三年叙爵して美濃守に任し明る十四年七月十六日父か遺領をたまはりしか次のとし正月十二日十七歳にして世をはやうしけれは支族平左衛門正恒をして同しき十四日正任か家つかせらる（此時正恒か采地七千石公にかへしたてまつる）しかるに正恒は三月二十四日二十歳にしてむなしくなりしかは同月二十七日越中守正親をして家つかせらる（後佐渡守○正親實は太田原十藏丹治晴門が子なりしが一族下野守正直にやしなはれてその家をつきてありしを正恒か家をつかせられしなり正親か采地二千石は公にかへし奉る）明くる十六年六月廿八日御奏者の事をうけたまはり同しき十九年六月六日大坂の城代になさる從四位下に叙す今年九月十四日四十三歳にして彼地に卒す嫡男大學正益享保十八年八月二十八日初見の禮おはり十二月叙爵して内匠頭に任し明る十九年の十一月父か家をつき延享四年五月御奏者の事をうけたまはり十二月廿三日寺社の奉行をかぬ寛延三年十一月從四位下に叙し御奏者寺社の兩職をゆるされ明和八年九月二十八日卒す（五十四歳）その子宇左衛門正弘寶暦十三年はしめて見參し從五位下佐渡守に叙任し父かうせし年の十一月家を繼安永二年九月十一日卒すとし二十七歳正任子なかりしかは舍弟兵部正諶をして同しき十一月家つかせられ（ときに廿五歳）あくる三年の春はしめて謁し奉り叙爵して丹後守になり天明元年四月十一日御奏者の事をうけたまはる

○石見守越智正休は佐渡守正成か孫伊勢守正吉か嫡男也正吉か兄八左衛門正次寛永五年にうせてその子いまた幼稚なりしかは正吉をして正次か家つかせらる（五千石）慶安三年十一月十九日御書院の番頭となりあくるとし八月叙爵して伊勢守に任し明暦二年七月駿府城の守りに在りなから自殺してうせぬいかなるゆへをしらす（三十九歳）ことしその子權佐(助)正休に遺領を

たまふ正休承應元年八月七日はしめて見へたてまつり延寶二年正月十五日御小姓組の番頭となりことし十二月叙爵して石見守に任すおなしき五年四月十四日御書院の番頭にうつり七年八月御側衆になされ天和元年の秋加恩の地をたまふ（二千石）次のとし三月二十二日少老の職にのほり八月十一日所領くわへられて大名になさる（五千石を加へ合せて一萬二千石）貞享元年八月二十八日御所のうちにて狂氣して大老堀田筑前守正俊をきりたりけれは其座にありし宿老の人々に卽座にとりふせられて事はてぬ（四十五歲）かゝりしかは所領の地收公せられて家絕たり

○越前守越智正明は藤藏正福か養子實は佐渡守正親か三男にして正福か舍弟也正明か曾祖父備前守正員（前編備後守元祖としるす）美濃守正則か三男なりはしめ毛利左近といふ（毛利といふは母方の家號を稱せしにや）寛文元年四月九日中奥の御小性になりおなしき八年廩米をたまふ（千俵○此後身傾しければ俸米を公にかへし奉り父の所領小田原に引こもりてやまひをやしなふ）そのゝち天和三年九月二十七日父か領地をわかたれ（三千石）享保四年養子修理正方（毛利刑部少輔大江元知か三男）に家をゆつる正方おなしき五年御使番となりて享保十三年に卒しぬ子なかりしかは一族佐渡守正親か子藤藏正福をやしなひて子とす正福家つきて後早世しけれはその子富之助を嗣子とすこれ越前守正明なり後二十年八月五日家をつき元文二年竹千代君（駿明院殿の御事）の御扈從になりて叙爵し（時に十五歲）延享二年九月大納言家（惇信院の御事）につかへ奉り本城にわたらせたまひしときゑたかひ奉り寶曆五年御小性組の頭番に準せられことし御側衆になりて中次の事をもうけたまはる同しき十年五月御代あらたまりて大御所西城にうつらせたまひけれは正明も西城に候しけるか明るとし大御所かくれさせ給ひし後また本城に拜謁して明和五年十一月中次の事をうけたまはり同しき六年十月廿七日加恩の地を賜はり（二千石）このゝちふたゝひ地くはへられて（安永六年四月二千石天明元年九月三千石分せて一萬石）万石の列となる事を得たり天明五年正月また地くはゝりて（二千石）御おほえことに淺からさりしかあくる年八月二十六日いかなるゆへにかありけん俄に御氣色あしくなりて職とゝめられ所領の地（三千石）削られてゑはしは出仕をもとゝめらる正明か長子富之助正命寶曆十三年はしめて謁し奉り明和六年御扈從になり中奥御小性にうつりあくる七年從五位下の備前守に任すゑかるに

いたはる所ありて務にたへさりけれは安永九年中奥の列をゆるされ祿をも辭して籠居す次男は他の家にやしなはれぬ三男はうせけれは四男本三郎正武よつきとなり天明四年九月十五日はしめて見參し叙爵して播磨守に任す 御側衆の子にして叙爵せしためし有にやこれも父の正明か御覺へよかりしゆへなるへし

堀田

紀正盛（マサモリ）

正信

正休（スヤ） 帶刀 初正清 正職 正昌 正國 豐前守從五位下 寛文八年十二月廿七日叙任 正德五年六月廿九日致仕 剃髮稱正休 享保十六年七月十二日卒七十七歳 法名悠淨院夢梯殘石

正明 大藏

女子 筑前守正俊養女

某 與一之助 早世

正方 頼母 左衛門 寶永七年十一月七日依病籠居號友慰 享保元年十一月晦日卒四十二歳 法名影現院白潤圓受

某 齋宮

女子 加賀守正陣室

重武　數馬　內匠　兵部　修理　後重浮
板倉東市正重太養子

正朝　仙四郎　采女　初國潘　正浦
駿河守從五位下
正德五年十二月十八日叙任
享保四年八月廿日卒四十歲
法名正朝院月桂臺光

職勝
花房五郎左衛門職政養子

女子
酒井飛驒守忠菊室

正直　內記
伊豆守正虎養子

一興
堀田孫太郎一平養子

女子二人
伊豆守正虎養女
高木民部正安富妻安富卒嫁堀田主殿直矩離別嫁永谷信濃守勝比

女子

正陣　小太郎　三四郎　列正附
出羽守從五位下
享保八年十二月十八日叙任
後改加賀守
寶曆三年十月四日卒四十五歲
法名貞現院銘殘常敬

女子　早世

女子

職朝　岩之助　數馬　大膳
花房求馬職時養子

某　半之丞　早世

正邦　三四郎
出羽守從五位下
寬延二年十二月十八日叙任
安永元年六月二日卒三十九歲
法名締了院實圓常性

正命　彌八郞
本多平藏正安養子

助友　大學
本多日向守紀賀養子

安親　熊五郎　圖書
脇坂一學安種養子
後繼脇坂伊勢守安實

女子二人　一人早世
許嫁脇坂伊勢守安實卒

忠良　求馬
屋代甚三郎忠因養子

正穀サネ　門次郎　三四郎
豐前守從五位下
安永八年十二月十六日叙任

女子

某　鐵次郎　早世

一世
正俊トシ　久太郎　備中守從五位下　慶安四年八月十六日叙任　延寶七年十二月廿八日　從四位下同八年八月十八日侍從
天和元年二月廿五日改筑前守　同年十二月十一日左近衞權少將　貞享元年八月廿八日卒五十一歲
法名不矜院又新發翁

正英　虎之助　内膳
對馬守從五位下
萬治二年十二月二十七日叙任
元祿元年七月二日卒五十一歲
法名正英院秋巖崇居

正親　右近
土佐守從五位下　天和三年十二月四日叙任　元祿元年九月廿二日蟄居陸奥國福島
寶永三年十二月廿五日於出羽國山形死三十九歲

正矩ノリ　小市郎　主稅　小船
延享元年八月三日致仕　寶曆十年五月廿九日卒八十九歲　今堀田内膳正貫祖

正章　大助　式部
寛保元年五月十日卒六十六歲　今堀田主蕃正貴祖

女子
建部傳左衛門妻離別
嫁黒川八左衛門盛敬

女子　早世

二世
正仲（ナカ）　左京
下總守從五位下
延寶四年十二月廿六日叙任
天和二年十二月十五日從四位下
元祿七年七月六日卒三十三歳
無嗣以伊豆守正虎奉祀
法名常樂院其阿法漢映性

女子　早世

正德（ノリ）　政次郎
元祿六年十一月三日卒六歳

正奐　織部
元祿八年二月八日卒八歳

某　千次郎
元祿八年三月十七日卒六歳

女子
實豐前守正休女
五島大和守盛住室離別

正村　市十郎
寶永六年正月五日卒十一歳

女子三人
榊原右京大夫政一室
戸田采女正氏英室
一人早世

正定　增五郎
延享二年三月二日卒九歳

三世
正虎　織部
伊豆守從五位下
天和二年十二月廿七日敍任
元祿七年八月晦日繼正仲
寶永七年十二月十八日從四位下
享保十四年正月廿二日卒六十八歲
法名慈德院瑞山紹蓮

某　源之丞
元祿十五年正月十三日卒三歲

正直　內記
實豐前守正休五男
播磨守從五位下
寶永六年十二月十八日敍任
享保二年八月九日卒二十九歲
法名正明院頓與眞圓

四世
正春　內記
享保十六年十一月廿日卒十七歲
無嗣以左源次正亮奉祀
法名青叢院禪阿陽岳定心

女子　早世

五世
正亮　左源次
實主水正武男
享保十六年二月十三日繼正春
相摸守從五位下
享保十六年十二月廿二日敍任
延享元年五月朔日從四位下
同二年十二月十五日侍從
寶曆十一年二月八日卒五十歲
法名青雲院陸阿松山月灌惟心

女子
松平主殿頭忠祇室離別

某　幸之丞
寬保三年十二月廿五日卒五歲

女子
本多若狹守助之室

正泰　幸次郎
寶曆三年十月十七日依病籠居
同十一年五月二日卒二十一歲

某　長助
延享三年五月晦日卒三歲

六世
正順　鐵藏
相摸守從五位下
寶曆十一月十二月十八日敍任

女子
大久保山城守忠喜室

某　辰三郎
寶暦十一年二月廿六日卒二歳

女子二人
上田長門守義篤妻
横田内記知明妻

正時　徳次郎

正通　喜之松
寶暦十三年正月十六日卒十三歳

女子二人
許嫁戸田淡路守氏養離別
嫁間部若狹守詮茂
許嫁本庄山城守道揚

女子二人　佐竹右京大夫義和室
一人早世

女子

正功　鍋次郎

正高　内匠　宮内　兵部　大學
初正有　正在　俊兼　正輔
茂俊　俊季　俊秀　俊實
俊普　正茂　正俊　正秀
備後守從五位下

正芳ヨシ　一學
元祿元年五月十三日卒九歳

寶永六年六月十一日叙任
享保七年五月九日致仕
同年七月三日剃髮號元海
同十三年五月廿九日卒六十二歳
法名建功院慈山元海

女子二人
實河村善七某女
曾我又左衛門仲祐妻
實上野介正信女
阿部遠江守正房室離別

正武 主水
正德五年二月四日卒二十三歳

正亮（スケ） 左源次
伊豆守正亮養子

女子二人 共早世

正勤（ユキ） 光賀 裳吉
享保七年五月廿八日卒七歳

正冬 數馬
元祿九年十一月七日卒七歳

某 龍丸 早世

某 覺松 早世

女子
實河野勘右衛門通重女

某 勝之助 早世

女子 早世

某 若松 早世

正峯 鍋之助 斧三郎 刑部
初正淨 正淸 正美 正范 正範
信濃守從五位下
享保七（六）年十二月十八日叙任
同十一年四月十四日卒二十三歳
法名豐松院泰峯元久

正永 岩吉 德十郎 宮內 大學 民部
初俊尾 正眞
實正高九男
大和守從五位下
享保十一年十二月十六日叙任
同廿年八月廿九日卒廿七歳
法名嶺松院多樂宗永

正氏　鐵之助　兵部
元文元年五月廿日卒十六歳

女子　早世

某　金四郎　早世

女子　早世

正永　岩松
正峯養子

女子三人
本庄大和守道堅室
堀田數馬正貫室離別
嫁津田日向守信之
三枝源十郎賴音妻離別

正寶　岩之助　丹宮
實脇坂一角安利二男
若狹守從五位下
享保廿年十二月十六日叙任
寶暦八年十月廿八日卒四十三歳
法名覺海院天空元仲

正富　梅之丞
右京亮從五位下
明和四年十二月十六日叙任
安永四年八月廿二日改若狹守

女子　早世

正敦　藤八郎　攝津
初村由
實松平陸奥守宗村八男

女子
正郭敦カ室

某　梅之丞　早世

某　畑之丞

女子　早世

敬顯（ヒロアキ）　紀三郎

女子

堀田

附　對馬守正英
　　伊賀守正虎

○豐前守紀正休初正清正成正昌正國は上野介正信か嫡子也万治三年父の正信罪かうむり領地沒收せられ弟脇坂中務大輔安政にめし預られて信濃國に配流せらるゝとき正休にあらたに廩米を給ふ一萬俵寛文三年九月二十六日はしめて拜謁しおなしき八年十二月叙爵して天和元年五月二十一日大番の頭になさるあくる二年三月廿九日德松君につけられ上野國吉井の地たまはる一萬石廩米に加へ賜はりしなりあくるとしの七月御奏者の事を奉はり貞享三年二月職をゆるされ元祿十一年三月七日近江國宮川の地にうつさる正德五年病によりて致仕し剃髮して正休と號す享保十六年七月十二日卒年七十七歲にて身まかりぬ長子左衞門正方は身いたはる所ありて籠居し次男賴馬重武は板倉東市正重太か子となりしかは三男采女正朝世つきとなる正朝初は國藩又正甫元祿九年十一月初見の禮をはり家つきてのち從五位下駿河守に叙任し享保四年大坂の城の守にありしか事はてゝ江戸に參るとて美濃國細湫の驛にて病にふして八月二十日卒す四十歲嫡子小太郎正陣初は正附ことし十月家をつきおなしき六年初て見えたてまつり同き八年從五位下出羽守に叙任しのち加賀守おなしき十九年八月二十八日大番の頭に補せられ延享三年七月少老の職にうつり九月若君俊明院殿の御事につけられて西城に候しけるか十二月にまた本城の衆に列す寛延元年十月十五日加恩の地賜はり三千石大御所有德院殿の御事につかへ奉りて西城に候す寶曆元年大御所かくれさせ給ひてのち職ゆるされて鴈の間の衆となりおなしき三年十月四日四十五歲にして身まかりぬ嫡子出羽守正郁は寛延二年四月朔日はしめて見えたてまつり十二月叙爵して寶曆三年十一月家繼くおなしき八年十二月十八日大番の頭になり安永元年六月二日卒す三十九歲長子三四郎正穀ことしの秋父の遺領を賜ひおなしき七年九月十五日はしめて謁し奉り十七歲あくる八年從五位下の豐前守に任し天明六年正月大番の頭に補せらる

○筑前守紀正俊は加賀守正盛の三男たり寶永十八年八月五日若君嚴有院殿の御事御誕生ありしかは御七夜の時初めて見參し御扈從となりてつかへ奉る同き二十年十二月六日春日局か采地相摸國吉岡の地三千石を賜はるといふ○春日局は稻葉正成か室なり正成か女正俊か祖父の正吉に嫁しけれは正俊は春日局曾孫なり慶安四年八月十四日父か所領下總國守谷の地をわ

かたる一萬石 従五位備前守に叙任し万治三年二月廿三日御奏者の事をうけたまはり寛文七年六月上野國安中の城に地を添て賜ふ 合せて二萬石 同しき十年少老の職にうつり延寶六年の冬又地加へられ 五千石 あくるとしの七月十日宿老にすゝみ多くの地増し賜はり 一萬五千石 従四位下に叙しあくるとし侍従に任し天和元年二月地増し賜はり下總國古河の城にうつる 五萬石大井周防守利立にかはる 筑前守にあらためことし十二月十一日大老職になりて少將にすゝみあくるとしの正月あまたの地くはへられて 四萬石合せて十三萬石 かほど御おほへもよかりしか貞享元年八月二十八日御所のうちにて稲葉石見守正休にきられたり深手なれは堪かたくてまかり出けるかこの日つゐに身まかりぬ 年五十一 嫡子左京正仲寛文十一年十二月二十二日はしめて拜謁し延寶四年従五位下下總守に叙任し天和二年従四位下に叙し貞享元年十月十日家をつき舍弟等に所領わかつ 二男伊豆守正虎に二萬石三男兵部俊季に一萬石 翌年六月古河の城を轉して出羽國山形の城にうつさる 奥平美作守昌章にかはる あくる年の秋又陸奥國福島の城賜はりてうつる 本多中務大輔正武にかはる 元祿七年七月六日三十三歳にてうせぬ正仲男子なかりしか早世しけれは弟織部正虎家を

繼正虎これよりさき延寶三年五月十八日謁見し天和元年の六月中奥御小性の列となりことしの冬より菊の間に候し二年の冬従五位下伊賀守に任し元祿七年正仲か家をつき この時正虎の所領二萬石はかへしたまはる 同しき十三年正月十一日出羽國山形の城にうつる 松平下總守忠雅にかはる 寶永七年従四位下にのほり享保十三年十月七日大坂の城代となるこの冬江戸をたちてのほりけるに明る年の正月伊勢國龜山の驛にて終に病して卒す 六十八歳 子ともみな早世しけれは豊前守正休の五男正直を養ひて子とすこれも先たちてうせけれは嫡孫内記正春して家つかす正春享保十四年二月祖父か遺領を賜ふこのとき叔父左源次正亮に地をわかつ 私墾田三千石 正春おなしき十六年二月九日卒す 十七歳 いまた子なかりけれは叔父正亮して家つかせたり 正亮これまて領せし地は公にかへし奉りし也 正亮は主水正武正俊の四男 か子なり此年叙爵して相摸守になり寛保元年四月十二日御奏者の事をうけたまはり翌年七月朔日寺社の奉行をかね延享元年五月大坂の城代に移り従四位下に叙す明る年の十一月十三日宿老の職にすゝみ侍従に任し同しき三年正月下總國佐倉の城にうつる 松平和泉守乘祐にかはる 寛延二年の秋べつに仰によりて連署の

人々の上首となる寳暦十年四月領地くはへられ（一萬石合せて十一萬石）あくる年二月八日五十歳にて身まかりぬその子鐵藏正順ことし三月家繼く初見叙爵し相摸守に任す（時に十七歳）安永三年御奏者の衆に加へられ天明三年七月寺社の奉行をかぬ對馬守紀正英は加賀守正盛か四男童名を虎之助といふ慶安四年八月十四日父か遺領をわかち賜ふ（五千石○萬治二年六月朔日中奥御扈從となる）万治二年從五位下對馬守に叙任し寛文九年六月二十二日御扈從組の番頭となりおなしき十一年十月八日御書院の番頭にうつり延寳四年六月二日大番の頭にすゝみ同き八年十一月二十二日地加へられて（三千石）德松君につけられ御側の衆となりて西城に奉仕す明る天和元年の九月六日西城の少老に補せられ次の年の春所領の地加賜まふ（五千石を加へ合せて一萬三千石）貞享二年六月十日御奏者の事をうけたまはる正英卒して（元祿元年七月二日五十一歳にて卒す）遺領の地を割て次男小市郎三男大助に賜はる（小市郎三千石大助二千石）其餘の地はおほやけにめし收られぬ正英か長子正親是よりさき叙爵して土佐守にてありけるかいかなる故にや升斗の祿もたまはらす其身をは正英か兄の子の下總守正仲にめしあつけられて所領陸奥國福島に下せしなり（寛永三年十二月廿五日三十九歳にて死す）

○備後守紀正高（あまたゝひ名をかへたりくはしくは系圖にみゆ）は筑前守正俊か三男也天和二年五月十八日はしめて見參し貞享元年十月十日父か所領わかち賜ふ（下野國都賀安蘇兩郡の地一萬石）元祿十一年三月七日所領の地轉せられて近江國滋賀唐崎等の地を賜はる寳永六年六月叙爵して享保七年の夏致仕剃髮して元海といふおなしき十三年五月二十九日卒す（六十二歳）正高子ともあまたありしかと世を早うしけれは八男刑部正範よつきとなり享保六年五月八日見參し父か致仕の日家つきことし七年從五位下信濃守に任しおなしき十一年四月十四日二十三歳にしてうせぬ正範いまた男子なかりけれは弟民部正永をやしなひて子とす六月九日正永家をつきて十二月從五位下の大和守となり同しき二十年八月二十九日大坂の城の守りにありてうせぬ二十七歳その子若狹守正實まことは脇坂一角藤原安利か二男なりおなしき十一月父か所領を賜りて叙爵し寳暦三年六月大番の頭になりおなしき八年十月十八日身まかりぬとし四十三その子梅之丞正富ことし十二月家をつきて明和三年の秋初見の禮をはり（時に十五歳）あくる年の冬從五位下左京亮

に任す後若狭守正富子なかりしかは天明三年三月松平陸奥守藤原宗村か八男攝津正敦初は村里をやしなひて子とす廿九歳

太田

源資宗

資政　志摩介　初資周
寛文十年五月十九日卒四十七歳

資次　左馬助
攝津守從五位下
慶安四年十二月廿八日叙任
天和元年十一月六日從四位下
貞享元年四月六日卒五十六歳
法名見性院道雄日健

資直　左近
備後守從五位下
寛文十二年十二月廿八日叙任
後改備中守攝津守
寶永二年正月二日卒四十八歳
法名高德院道祐日通

資昭　主税　早世

資房　帶刀
元祿四年八月二日卒三十歳

資福　長十郎
元祿七年十一月七日卒七歳家絶

資良　式部　隱岐守
今太田駿河守資信祖

女子七人
稻葉權佐吉正妻
加藤美作守泰義室
一人早世
永井伊賀守尙庸室
一柳土佐守末禮室
土井周防守利益室
角倉與一玄良妻

女子二人
內藤紀伊守信勝室
一人早世

某　釆女

某　右京

某　辰之助　早世

某　虎之助　早世

資晴　熊次郎　初資重　資在
備中守從五位下
寶永六年四月四日叙任
享保十九年九月廿五日從四位下
元文五年三月廿四日卒四十六歲
法名瑞光院道精日現

女子
松平能登守乘賢室

資俊　新六郎　初資元
攝津守從五位下
享保十九年十二月十八日叙任
寶曆十三年十二月十日卒四十四歲
法名名慈德院道俊日潤

某　源三郎　早世

某　岩五郎　早世

資胤　下野守
水戶家人
太田對馬守資眞養子

女子
實資晴女
松平石見守乘穩室

某　源太郎　早世

女子　早世

資愛　多門
備後守從五位下
寶曆八年十二月十八日叙任
後改備中守

女子四人
板倉主水正勝忠室
久留島信濃守通祐室
稻垣攝津守長以室
內藤伊賀守賴尙室

女子
加藤兵左衛泰都妻

晴郷（ハルサト）　主膳

某　左次郎　早世

俊満（トシミツ）　玄蕃
戸田圭馬氏亮養子

俊門（トシカト）　兵部
佐野右兵衛尉茂承養子

女子四人
角倉與一玄篤妻
一人早世
堀田出羽守正邦室
太田内記資知妻
井上遠江守正辰室

某　圖書助　早世

女子
資俊養女

資武　洋之進　新六郎
大和守從五位下
安永六年十二月十八日叙任
後改釆女正
天明四年八月廿五日卒十五歳
法名德淨院道因日絲

某　湧之助　早世

資順 正之助 初愛親
攝津守從五位下
天明五年十二月十八日叙任

女子
土屋能登守泰直室

某 健之助 早世

女子二人
一人早世
木下主計頭俊懋室

某 洋之進

太田

○攝津守源資次は備中守資宗か二男なり寛永十六年七月九日初めて拜謁し慶安四年十二月叙爵す寛文十一年十二月父資宗致仕しけれは資次ゆつりをうけて家をつき舍弟式部資良に領知をわかつ（遠江國濱松の城三萬五千石のうち資次三萬二千石を領し三千石は私墾田を合せて五千石の地を資良にあたふ）延寶元年六月十二日御奏者の事をうけたまはりおなしき四年七月二十六日寺社奉行をかね同き六年六月十九日大坂の城代になさる地加へられ（二萬石合せて五萬二千石）この時遠江の所領をあらためて攝津河内のうちにして宛行はる天和元年の冬從四位下に叙し貞享元年四月六日大坂に在て卒す（とし五十六歳）嫡子左近資直寛文九年九月初見同しき十二年十二月叙爵して備後守となり（後備中守攝津守にあらたむ）貞享元年六月十四日父か遺領をたまひ弟帶刀資房に所領をわかちあたふ（二千俵）ことし七月駿河國田中の城（田中の城は天和二年十二月古屋能登守敬直に封せられけるか貞享元年七月敬直大阪の城代に補せられ居城田中をやめしかは其闕に太田資直を封せられしと見えへたり）を賜る明るとし六月御奏者の事をうけたまはり八月九日小老の職にうつり次の年の正月御近習衆の列となりしか幾程もなくやめられて寶永二年正月二日四十八歳にしてうせけれは五男熊次郎資晴二月二十九日家をつき（資直子あまたありしかみな世を早ふしけるゆへ也）四月二十二日陸奥國棚倉にうつさる（内藤豐前守式信にかはる）同き六年從五位下備中守に任し享保八年二月御奏者の事をうけたまはり十年の九月寺社の奉行をかぬ同しき十三年五月七日小老の職に補せられ上野國舘林の城を賜はりてうつる（松平彈之進武元にかはる）同しき十九年大坂の城代となりて從下の四位にのほるこのとき所領舘林の地をあらためて攝津河内等の國にてたまはれり元文五年三月二十四日大坂にありて身まかりぬとし四十六嫡子攝津守資俊享保十七年初見の禮をはりおなしき十九年叙爵し（幼名は新六郎）元文五年五月十六日家をつきこの時上野國舘林の城にかへしうつさる延享二年十月御奏者の事をうけたまはりおなしき三年九月遠江國掛川の城にうつされ（小笠原能登守長泰にかはる）寶暦十年十二月三日寺社の奉行をかぬおなしき十二年兼職を辭しあくる年の十二月十日四十四歳にして卒す其子多門資愛寶暦八年初見叙爵して備後守に任し（後備中守）おなしき十三年十二月家をつき（時に二十五歳）明和五年御奏者となり安永四年寺社の奉行をかぬ天明元年閏五月十一日西城の少老になりほ

となく本城の衆にうつるその長子新六郎資武安永六年四月はしめて見へたてまつり十二月叙爵して大和守に任し〈のち女正〉〈乘〉けるか先たちてうせけれは次男正之助資順をよつきとさだめ天明五年の冬叙爵して攝津守に任す

朽木

源種綱

女子
三浦志摩守安次室

植昌　彌五郎　縫殿助　初季綱
伊豫守從五位下
明曆三年十二月廿七日敍任
寶曆五年六月廿五日致仕
正德四年二月廿三日卒七十二歲
法名隆德院馨隱自香

則綱　千五郎　隼人
和泉守從五位下
寬文十二年十二月十八日敍任
後改周防守
享保十一年五月廿二日卒七十六歲
今朽木和泉守直綱祖

女子一人
內藤丹波守正親室
木下右衞門大夫俊長室

植元　左近　帶刀
民部少輔從五位下
延寶六年十二月廿八日敍任
享保六年十一月廿四日卒五十八歲
法名鏡心院淸源湛水

植治（ハル）　萬吉　釆女
土佐守從五位下
元祿九年十二月廿二日敍任
享保十一年五月廿一日繼植綱
同十三年十一月廿二日致仕
號英山
寬保元年七月廿八日卒七十七歲
法名當智院孤峯無住

植綱　吉三郎　大膳
伊豫守從五位下
享保九年十二月十八日敍任
同十一年五月五日卒十七歲
無子以土佐守植治奉祀
法名玄興院嚴亘性

女子四人
松平兵庫頭乘紀室
松平主水義堯妻
近藤宮内政德妻
松平粂之助政森妻

秀直　左京
土屋山城守朝眞養子

女子二人
水谷主殿勝時妻
藤堂源五郎良端妻

植榮（シゲ）　主税　早世

昌充　主計

廸綱　伊織

某　萬之助　早世

昌充　主計
實植昌五男
享保二年九月十九日卒

廸綱　伊織　采女
實植昌六男
享保八年十月十二日卒

綱貞　萬五郎
初依病籠居後之綱養子

女子

玄綱　岩之助　舍人
實松平兵庫頭乘記五男
出羽守從五位下
享保十二年十二月十八日叙任
同十三年十一月廿八日改土佐守
明和七年八月晦日卒六十二歲
法名德溫院俊山直哲

綱貞サダ　萬五郎　內記
實廸綱男
出羽守從五位下
寬保三年十二月廿一日叙任
安永七年六月七日改大炊頭
同九年八月六日致仕

鋪綱　千之助

某　豐次郎　早世

某　秀之助　早世

乘純　彥三郎　仲
松平仲乘俊養子

某　政五郎　早世

女子二人
一人早世
內藤丹波守政苗室離別
嫁間部主膳正詮史

鋪綱　千之助　舍人
實玄綱男
伊豫守從五位下
明和八年十二月十八日叙任

昌綱　斧次郎

榮綱　幾三郎　修理
朽木直之丞直綱養子

女子三人
一人早世
朽木權佐道綱妻
一人早世

如音　熊之助
牧野磚藏成如養子

某　幸三郎　早世

女子二人
許嫁本多兵庫頭忠由離別嫁柴田左京勝滿
松平隼人忠尙妻

乘保　慥五郎
松平能登守乘薀養子

某　鎚三郎　早世

女子　早世

某　卯之助　早世

女子
許嫁成瀨小吉正賢離別
嫁內藤大和守長好

昌綱　斧次郎　左門
實綱貞男
後五位下隱岐守
安永九年十一月十八日叙任

某　唯之助　早世

倫綱　千之助　舍人
實鋪綱男

女子二人
柴田修理亮勝房妻
大久保仁三郎教長室

倫綱　千之助

朽木

○伊豫守源植昌は民部少輔種綱か嫡男也承應三年九月二十三日はしめて拜謁し明暦三年十二月從五位下に叙し寛文元年二月六日父か遺領をたまはりて常陸國土浦の城五萬七千石 舍弟隼人則綱に地をわかつ三千石 おなしき七年八月十五日御奏者の事をうけたまはりおなしき九年六月八日加恩の地たまはりて丹波國矢田郡福知山にうつる五千石加へられて三萬二千石松平主殿頭忠房にかはる 元祿十五年御奏者をゆるされ寶永五年六月二十五日致仕して嫡男植元に家をゆつり二男釆女植治に所領をわかつ二千石内分といふ 正德四年二月二十三日とし七十二歳にして卒す帶刀植元寛文十三年七月十八日はしめて見參し延寶六年の冬叙爵して民部少輔に任し寶永五年家をつき正德元年正月十一日御奏者の事を奉はり享保六年十一月二十四日五十八歳にして世をさりぬ其子植綱享保五年四月二十八日はしめて見へたてまつりあくる六年十二月二十五日父か遺領をたまひ同き九年十二月從五位下に叙し伊勢守に任しおなしき十一年五月五日十七歳にして世をはやうすいまた子なかりしかはおなしき十一日叔父植治して家をつかせられ植治はこれよりさき元祿七年中奥の御扈從になるおなしき九年の冬叙爵して土佐守に任し寶永五年六月二十五日父植昌致仕のとき領知分たれ御扈從組の番頭にうつり享保二年病によりて職ゆるされてありしなり植綱か家をつきこれまて領せし三千石も領す おなしき十三年の冬致仕し寛保元年七月二十八日卒すその子舍人玄綱はしめ植治子なかりしかは弟主計昌充をやしなひけるか享保二年の秋さきたちて卒しけれはかされて次の弟釆女迪綱を子としけれとおなしき八年の冬これもうせしにより迪綱の子萬五郎綱貞をよつきにさたむしかるに綱貞も身にいたはる所ありて家つかすへきもあらされは松平兵庫頭乘記の五男を子として養ふこれ玄綱なり 享保十二年閏正月十五日はしめて見參しおなしき十二月從五位下出羽守になり父か仕をかへすの日家つきておなしき十九年九月二十八日御奏者の事を奉はり寶暦八年の夏寺社の奉行をかぬあくる九年病によりて兩職ともに辭し申けれは寺社奉行をはゆるされて御奏者の事はゆるされす明和七年五月四日つゐに御奏者をも辭し申てことし八月晦日六十二歳にして卒すその子内記綱貞綱貞は前に注する萬五郎か事なり年を經て病いえしかは玄綱かよつきとなる 寛保三年五月朔日はしめて拜謁し叙爵して出羽守に任しのち大炊頭 明和七年十月二十四日家をつき安永九年八月六日致仕し時に六十八 其子舍人鋪綱に

家をゆつる鋪綱實は玄綱子なり鋪綱明和八年二月十五日初見の禮をはりことし叙爵して伊豫守に任し安永九年父につく時に五十六歲その子隱岐守昌綱實は綱貞か子なり安永六年はしめて拜謁しおなしき九年叙爵す三十六歲

内田

藤原正信

某　新五郎　早世

女子二人　一人早世　實酒井左衛門尉家人高刀嘉兵衛一方女　岡部勘左衛門勝重妻

正衆（モロ）　長十郎
出羽守從五位下
萬治元年閏十二月廿七日叙任
元祿十二年二月四日卒五十五歳
法名快壽院實譽眞岸惠相

正勝　長太郎
元祿七年五月十一日卒二十八歳
法名瑞峯院懺翁元桂

女子
上田主殿義鄰妻

正房　造酒助
延寶七年三月廿五日卒十歳

正偏　主膳
信濃守從五位下
寶永六年三月七日叙任
寛保三年二月廿九日卒六十一歳
法名澄宵院歆譽觀道融清

正廣（ヒロ）　三之丞
久世大和守廣之養子

正清　八三郎　數馬　式部
元祿十一年十一月四日卒十六歳

正長　平三郎　隼人　帶刀
若狹守從五位下
元祿九年十二月廿二日叙任
元文四年五月廿二日卒六十八歲
今內田帶刀正央祖

女子一人
水野隱岐守勝長室
松平信濃守直之室

正親　チカ　千松　靱負
出羽守從五位下
享保十二年十二月十八日叙任
延享三年五月十八日卒三十三歲
法名法聚院高譽義俊篤崇

女子
富田主膳知德室

長隆　主水　遠江守
平野權平長曉養子

正美　卯之助
出羽守從五位下
寶曆二年十二月十六日叙任
同三年九月廿四日卒十九歲
法名純德院譽靖淸卓助貞

正豐　勝間田捨五郎
寶曆三年五月廿日卒廿歲

正良　主殿
實內田伊織二男
初內田帶刀正傳養子
寶曆三年六月廿六日繼正美
主殿頭從五位下
寶曆三年十二月十八日叙任
明和六年八月十九日改近江守
天明二年二月十四日致仕

正純 長十郎
従五位下和泉守
天明二年十二月十八日叙任

正賀 長三郎 志津摩
馬場三郎左衛門尙式養子
後歸

廣品 隼人 初正辰
川勝縫殿助廣長養子

女子

堯道 銀次郎 小膳

内田

○出羽守藤原正衆は信濃守正信か嫡男なり慶安四年八月十四日父か遺領を賜ふ 下總國小見川下野國鹿沼等の地一萬五千石 承應三年九月三日はしめて見えたてまつり万治元年叙爵し 寛文二年四月厳有院日光山にまうてさせたまひしとき正衆か所領鹿沼の第にたちよらせたまひしかは物たてまつりものたまふこともおほかりき 元禄十二年二月四日五十五歳にして卒す嫡子右京正勝は延寶五年二月九日初て見え奉り元禄七年五月十一日二十八歳にて父に先たちて卒しけれは嫡孫主膳正偏に元禄十二年三月二十九日祖父の遺領を賜はり叔父等に所領をわかつ 一萬五千石のうち正偏一萬三千石を領し叔父若狭守正長千五百石久世三之丞正廣に五百石をわかつ正廣外祖大和守廣久の養子となりしなり 四月十五日はしめて見えたてまつり寶永六年二月七日従五位下信濃守に任す享保九年狂氣してをのか妻に手負せけれは一族に仰てをしこめさせ本領を減せられてその子靭負正親に賜ふ 一萬石○鹿沼の地をは收公せられ下總國香取郡下野國都賀郡にして賜ひしなり 正親ことし十二月朔日初見の禮をはりおなしき十二年の冬叙爵し出羽守になり延寶三年五月十八日世をさりぬ とし三十三歳 嫡子卯之助正美ことし七月父の遺領をたまはり寶暦元年三月十九日はしめて見へたてまつり二年の冬従下五位の出羽守に任し三年五月二十四日にうせぬ 十九歳 家つかすへき子なかりけれは支族帯刀正傳か子主殿正良して家をつかせらる 正良は同性伊織正南の二男にてはしめ帯刀正傳の養子となる ことし初見叙爵して主殿頭になり のち近江守 天明二年の春病によりて致仕す 時に五十三 嫡子長十部正純これよりさき安永四年五月初て謁したてまつり家つきて後五位下和泉守になる 二十七歳

柳生

菅原宗冬

宗春 内膳 大膳
延寶三年二月四日卒廿七歳

女子
小出瀨兵衞尹重妻
朽木周防守則綱妻離別

宗在 又右衞門
對馬守從五位下
延寶三年十二月廿六日叙任
元祿二年四月十三日卒三十六歳
法名寂光院靈峯宗劍

女子
曾我又左衞門近祐妻離別

俊方 帶刀

副隆 萬吉
九鬼和泉守隆律養子

俊方 帶刀
實宗春嫡男
備前守從五位下
元祿七年十二月十八日叙任
享保十五年四月四日卒五十八歳
法名翠峯院棧運紹鑑

隆方 內記
九鬼長門守副隆養子

宗盈 一作重 帶刀 丹下 百藏
實岡部美濃守長泰三男後歸

矩美 莊之助 隼人
實松平壹岐守仲澄五男
享保六年六月廿四日卒十七歳

俊平 彌六 靫負
實松平越中守定重十一男
但馬守從五位下
享保十五年十二月十八日叙任
後改飛彈守
寬保二年十一月十六日致仕
明和五年三月十八日卒八十二歳
法名得自院心源妙證

俊峯　龜之丞　釆女
實眞田彈正忠信弘四男
但馬守從五位下
寛保二年十二月十八日叙任
後改備前守
寶曆十三年八月廿九日卒四十五歲
法名大心院隨轉紹幽

俊則　爲次郎　釆女
初賢廣
實松前志摩守邦廣二男
從五位下釆女正
寶曆十三年十二月九日叙任
後改但馬守

女子三人
俊則室
池田釆女政朗妻
秋月式部種穀妻

某　幸次郎　早世

某　金之助　早世

某

柳生

○對馬守菅原宗在は飛驒守宗冬か二男なり寛文二年二月十五日初めて拜謁しおなしき十年の春中奥の御扈從となるしかるに兄の大膳宗春世を早うしけれは宗在世つきとなり（この時中奥の勤はゆるされたり）延寶三年十一月二十六日父の遺領をたまふ（大和山城兩國のうち一萬石）この年從五位下對馬守に任し（家の譜にこのとき家傳の劍術父か時のことなしへ奉るへきよし仰をかうむる）元祿二年四月十三日に卒す（三十六歲）その子帶刀俊方まことは兄宗春か嫡男なり元祿二年六月二日遺領をたまひおなしき六年正月二十八日奥詰となりあくる七年十二月叙爵して備前守に任す寶永六年正月二十一日奥の勤をゆるさる明る七年二月わさと御所に召して家につたふる劍術のわさを御覽せらる享保十五年四月四日五十八歲にして卒す俊方はしめ岡部美濃守長泰か三男百藏を子としやしなひしか多病なれはかへしやりて松平壹岐守仲澄か五男莊之助矩美をこひうけて子とすしかるにいくほともなく世を早うしけれはかさねて松平越中守定重か第十一の男子彌六俊平をやしなひてよつきとす俊平享保六年十二月はしめて見參しおなしき十五年五月家つきて從五位下の但馬守に任す（後飛驒守になる）寬保二年十一月十六日致任して明和五年三月十八日卒す（八十二歲）これも子なかりしかは眞田彈正忠滋野俊弘か四男龜之丞俊峯を子としやしなふ俊峯享保十九年初見して俊平致仕せし時家ゆつられ叙爵して但馬守に任し（後に備前守といふ）寶曆十三年八月二十九日うせぬ四十五歲俊峯も男子なかりしかは松平志摩守源邦廣か二男爲次郎俊則を養ひそのか女にあはせて子とす俊則寶曆三年の九月はしめて見參しおなしき十三年遺領を賜ひ十二月從下の五位して采女正になる（後但馬守時に三十四歲）

小堀

藤原正之

某　主膳　早世

女子　岡田將監善衞妻

某　一學　早世

某　岩千代　早世

女子　小堀仁右衞門克敬妻

女子　松平甚九郞康寛妻

政房　源左衞門　大膳
遠江守從五位下
寶永六年六月十一日叙任
正德三年十月十六日卒廿九歲
法名松巖院天覺宗端

政恒　主膳　大膳　初政延
和泉守從五位下
延寶二年十二月廿七日叙任
元祿七年正月二日卒四十六歲
法名法源院眞甫宗實

政峯　重次郞
實政恒六男
備中守從五位下
正德三年十二月廿一日叙任後改和泉守
寶曆十年十二月十六日卒七十一歲
法名泰淸院梅巖宗香

某　大吉　早世

女子　永野庄左衛門某妻

政養　多門　民部　早世

女子　小堀仁右衛門惟明妻

政穀　左門　繼小堀玄蕃政鄉

政寧（ヤス）　大繕　早世

某　千彌　早世

政展　内匠　小堀左門政穀養子

女子

某　松之丞　元祿七年七月朔日卒

政峯　重次郎

某　十次郎　早世

政昌　金次郎　天明三年九月三日卒

政壽（ヒサ）　富之助
實小堀仁右衞門雅明二男
大膳亮從五位下
寬延二年十二月十八日叙任
寶曆二年六月十日依病籠居

政方（ミチ）　金次郎　初政彌
備中守從五位下
寶曆八年十二月十八日叙任
後改和泉守

女子二人
一人早世
內藤綾之助正雄妻

女子
實小堀仁右衞門維貞女
久世丹後守廣氏室

某　德次郎　早世

女子二人　共早世

政登（タカ）　半五郎　八十郎　主水

政榮（ナカ）　闕平

某　長松　早世

女子
小堀下總守政共養女

小堀

○和泉守藤原政恒は備中守正之か嫡男延寶二年十一月父の遺領を賜り（近江國淺井郡小屋一萬千四百石餘）ことし叙爵し元祿七年の正月身まかりぬ四十六歳その子大膳政房三月六日家をつき（一萬六百石餘）舍弟二人に地をわかつ（五男松之丞五百石六男重次郎重峯三百石○松之丞はことし七月早世して采地はかへし奉りしなり）政房寶永六年六月十一日從五位下して遠江守になり正德三年十月十六日二十九歳にしてうせぬ子なかりしかは舍弟重次郎政峯をやしなひて家をつかしむ（政峯かこれまて領せし采地は收公せられ）政峯ことし從五位下備中守に叙任し享保八年十二月大番の頭になりおなしき十九年伏見の奉行にうつり延享三年二月御奏者の事をうけたまはり寛延元年七月大御所（有德院殿の御事）の少老になる寶曆元年の六月大御所かくれさせたまひしによりて職ゆりしかおなしき六年六月ふたゝひ少老に補せらるおなしき十年御代ゆつらせたまひて大御所（惇信院殿の御事）西城にうつらせたまふときゑたかひまいらす此年十二月病によりて職を辭し同月の十六日七十一歳にしてうせぬ子ともおほかりしか或は早世しあるひは一族の嗣となりしかは仁右衛門惟明か次男富之助政壽（政峯か外孫なり）をやしなひ初見叙爵して大膳亮に任せしか病によりて籠居しけれは六男金次郎政方をよつきとす政方寶曆七年四月二十八日はしめて謁したてまつりあくる年從五位下備中守になる（後和泉守にあらたむ）寶曆十一年二月七日父か遺領をたまはり明和七年の春大番の頭となり安永七年の十一月伏見の奉行にうつり天明五年二月二十七日罪ありて職とゝめらる（時に四十四歳）

藩翰譜續編卷之七上

池田 賜松平

淺野 賜松平

前田 賜松平

京極

黑田 賜松平

有馬

伊豫守綱政　　池田信濃守政言(トキ)
池田丹波守輝録(テルトシ)　　松平相摸守光仲
松平壹岐守仲澄　　松平河内守清定
安藝守綱長　　宮内少輔長賢(カタ)
淺野内匠頭長矩(ノリ)　　淺野式部少輔長照(テル)
淺野主鈴長定
參議綱紀(ノリ)　　附 松平大藏大輔正甫(トシ)
松平飛驒守利明　　前田釆女利昌
前田右近大夫利意
備中守高豐　　壹岐守高通
伊勢守高盛　　備後守高明
右衛門佐光之(ユキ)　　黑田甲斐守長重
黑田伊勢守長清
中務大輔頼元　　附 伊豫守豐(トヨ)範(ノリ)
兵庫頭氏倫(トモ)

山内　　土佐守豐昌　　山内大膳亮豐明
　　　　山内遠江守豐産[タダ]

堀　　周防守親貞

堀　　丹後守直利[トシ]　　長門守直佑[スケ]
　　　飛驒守直良

池田

源輝政
　├利隆
　├光政
　└女子三人
　　　堀田下總守正仲室
　　　許嫁金森出雲守頼時早世
　　　本多中務大輔政氏室

綱政　太郎　三左衛門
初興輝
侍從伊豫守從四位下
承應二年十二月廿三日叙任
元祿九年十二月五日左近衛權少將
正德四年十月廿九日卒七十七歲
法名曾源寺湛然德峯

吉政　岩千代　備前守從四位下
同八年九月廿九日卒十八歲　元祿五年十二月十五日叙任
法名寂照院實鑑普明

軌隆　主膳
依病籠居

政晴　善太郎
丹波守輝錄養子

女子三人
松平長門守吉元室
松平土佐守豊房室
立花飛驒守鑑仕室

軌明　釆女
內匠頭政倚養子後歸

輝吉　安之丞
政倚養女後歸

政順　三左衛門
寶永六年九月廿九日卒

女子
綱政養女

繼政　峯千代　主稅　茂十郎
初保教
侍從大炊頭從四位下
正德五年四月五日叙任
延寶元年十二月十六日左近衛權少將
寶曆二年十二月六日致仕
同三年五月廿八日剃髮號空山
安永五年二月八日卒七十五歲
法名保國院鐵叟空山

宗政　峯千代　茂十郎
初尙政
彈正大弼從四位下
元文五年十二月十一日叙任
寬延元年十月十八日改伊豫守
同年十二月廿一日侍從
明和元年三月十四日卒四十歲
法名壽國院豊山延祥

女子四人
本多下野守忠平室
大猷院殿御養女
榊原刑部大輔政房室
中川佐渡守久恒室

女子
實主膳軌隆女
一條關白兼香公室

政純　和泉
家人池田玄蕃某養子

女子
實和泉政純女
一條關白通香公室

政喬　主稅
家人池田和泉某養子

治政　新十郎　初敏政
從四位下侍從兼內藏頭
明和元年九月十一日叙任

政久　新十郎　本之丞

政芳　攸之進　攸次郎

女子二人
一人早世
許嫁松平雅之助長高

長寬　護之進
相頁越前守福將養子

女子
榊原式部大輔政敦室

女子
丹波守政晴室

政言　稱池田左門　初恒能
信濃守從五位下
寛文九年十二月廿五日叙任
元祿十三年八月十九日卒五十六歳
法名天性院性月自光

女子二人
京極伊豫守高圭室
大關因幡守增備室

政舍　鍛治之助
正德四年九月十二日卒

政倚　竹之助　內匠　初政照
內匠頭從五位下
寶永六年十月十五日叙任
元文三年二月十六日致仕
延享四年七月四日卒七十九歳
法名禪通院蘭溪良秀

女子二人
山內主膳豐清妻
宗家家人
土倉市正一除妻

軌明　采女
實主膳軌澄二男依病歸家

輝言　安之丞　多宮　兵介
實軌隆三男依病歸家

政方　亘　兵部
實池田織部由利二男
信濃守從五位下
元文四年十二月十六日叙任
寶曆十年三月十四日致仕
改大內記
安永元年七月廿一日剃髮號長閑齊

女子
四辻宰相中將公萬卿室

政香　春五郎　兵部
内匠頭從五位下
寶曆十一年十二月十八日叙任
明和五年八月廿五日卒二十八歲
法名圓源院玄如禪哲

政直　陽助

女子三人
內藤出雲守忠晃室
島津式部少輔久般妻
京極大膳高厚妻

李農　權三郎
大關佐渡守李通養子

女子二人
酒井左門忠政妻
井戶十左衞門弘俊妻

政宣　右門
池田吉十郎長置養子

政直　陽助
實政方二男
信濃守從五位下
明和五年十二月十八日叙任

女子二人
池田織部直好養女
池田百助頼完妻

敎方　隆之助
池田釆女政朗養子

女子
逸見熊次郎長行妻

女子

政貴　角次郎

女子
依田長次郎守甫妻

政養　陽助

某　武三郎

女子

某　慶太郎

某　辨之助　早世

輝廉　鎚之丞　主稅　外記
大隅守從五位下
元祿十五年十二月廿一日叙任
寶永三年九月六日卒廿歲
法名通仙院淨圓白的

某　辰之亟　早世

輝錄（トシ）　稱池田八之丞　主稅助丞　初政倫
丹波守從五位下
延寶元年十二月廿八日叙任
正德三年十一月廿六日卒六十五歲
法名靈樹院古巖全宗

女子一人
毛利甲斐守綱元室
家人瀧川儀大夫一家妻

女子二人　共早世

某　與五郎　早世

某　豐久　早世

某　仙武　早世

政晴　善太郎
實主膳軌隆長男
丹波守從五位下
享保二年十一月十八日叙任
寬延元年九月十一日卒四十五歲
法名隆興院雲嶽宗觀

女子四人
宗家々人
池田近江長行妻
山內遠江守豐隅室
松平市正忠庸妻
一人早世

政長　善之助　德十郎　藤右衛門
繼相摸守家人鴉殿大隅某家

政員　泰太郎　伊織
中務少輔從五位下
寶曆三年十二月十八日叙任
明和四年正月廿九日卒三十一歲
法名承德院祐邦宗賢

晴宣　秀次郎

女子
甲斐庄兵部正賢妻

政以　源之助　修理　後長惠
池田筑後守政倫養子

政弼　永次郎　初晴宣
實政晴三男
丹波守從五位下
明和五年十二月十八日叙任
安永五年七月廿九日卒三十五歳
法名持元院觀梅性聞

政良　豐之助
安永三年五月十九日卒十六歳

某　秀次郎　早世

政峰　巳三　早世

女子　竹中厚之進元智妻

政恭　永次郎　初之進
初正房

忠雄

光仲　勝五郎　相摸守　寛永十九年十二月晦日從四位下侍從　承應二(五)年十二月廿六日左近衛權少將　貞享二年六月廿一日致仕　元祿六年七月七日卒六十四歳　法名興禪院俊翁義剛

仲政　勝三郎　美濃守從五位下　正保三年十二月晦日叙任
慶安二年十月十七日卒十八歳

綱清　新五郎
侍從伯耆守從四位下
寛文元年十二月廿六日叙任
元祿八年十二月十八日左近衛權少將
同十三年五月廿五日致仕
正德元年七月四日卒六十五歳
法名清源寺亘宗常温

女子

吉泰　長吉　勝五郎　初吉明
實壹岐守仲澄嫡男
侍從右衛門督從四位下
元祿十三年十一月十五日叙任
正德五年十一月十八日左近衛權少將
寛保十四年閏九月廿一日改相摸守
元文四年七月廿三日卒五十三歳
法名天祥院機雲衍應

女子
實池田雄之助政興女
松平修理大夫吉武室

澄古（ヒサ）
二郎四郎　釆女　伊織　造酒　實壹岐守仲澄三男　佐渡守從五位下
享保八年十二月十九日叙任　七月卒三十四歳　法名微心院義峯淨透

宗泰　長吉　勝五郎
侍從出羽守從四位下
享保十六年十二月六日叙任
元文五年正月改相摸守
延享四年八月廿六日卒三十一歳
法名大廣院義山衍隆

女子
許嫁松平丹後守宗教卒

治恕　鶴三郎侍從右衛門督從四位下　安永八年十二月五日叙任
天明元年七月十二日卒十七歳　法名孝得院本然自性

重寛　勝五郎　初仲穆　重穆
侍従相摸守従四位下
寶暦九年十月廿一日叙任
安永二年十二月十六日左近衛權少將
天明三年十月十八日卒三十八歳
法名岱嶽院祥玄淇澤

仲澄　長吉　初仲時
壹岐守従五位下
寛文五年十二月廿七日叙任
元祿十六年九月六日致仕
享保七年六月二日卒七十三歳
法名成德院建山道空

女子　早世

治道　岩五郎　秀三郎
従四位下侍従兼相摸守
天明四年正月廿一日叙任

女子

澄時　龜丸　主計
松平修理亮延俊養子

女子二人

澄教（ノリ）　連之助
主計澄時養子

吉恭　長吉
伯耆守綱清養子

隆律　千之助
九鬼長門守隆昌養子

仲央（テル）　長八
初澄猶
造酒正從五位下
寶永三年十二月十九日叙任
後改豐後守攝津守
寶曆三年正月十一日卒六十二歲
法名泼敦院治寶徽玄

澄古　次郞四郞
伯耆守綱淸養子

定賢　式部
河内守淸長養子

矩美　隼人
柳生備前守俊方養子

仲庸（ツネ）　達次郞　右膳
初澄寅
攝津守從五位下
寶曆三年十二月十八日叙任
同八年六月十二日卒四十歲
法名淸章院雲外弘庸

女子
松平主水正定滿室

央章　金五郞
寶曆五年五月九日卒二十二歲

央堯　縫殿助
繼宗家家人鵜殿大隅守家

久利　鐵次郞
繼宗家々人池田大藏某家

庸熈　市之丞
松平伊勢守喜以養子

澄延 幡吉
飛驒守從五位下
明和二年十二月十八日叙任後改攝津守
同六年九月十一日卒二十三歳
法名賢德院英山行雄

延俊 慶次郎

女子
勸修寺右中辨經逸室

澄敎 連之助
實重寬三男

淸定 辰之助 靱負
河內守從五位下
元祿十四年十二月八日叙任
寶永六年四月十一日賜御家號
享保三年九月九日卒三十六歳
法名桂巖院心月淨空

淸勝 萬之助
池田權之助政撫養子
元祿九年七月廿九日卒無嗣家絕

延俊 慶次郎
實仲庸二男
修理亮從五位下
明和六年十二月十八日叙任
同八年三月廿六日卒二十歳
法名仁厚院權客玄智

定賢 式部
實壹岐守仲澄四男
近江守從五位下
享保三年十一月十八日叙任
元文元年九月七日卒三十七歳
法名方長院自得淨澄

澄時 龜丸 主計
實相摸守重寬三男
天明五年八月十三日卒十九歳
法名眞常院本覺淨光

定就 隼之助
下野守從五位下
元文二年十二月十九日叙任
延享二年七月五日改甲斐守
寶曆元年四月十八日改兵庫頭
明和五年四月十六日致仕

定信 新助
宗家家人
和田遠江守信時養子

清彌　辨之助
初爲久留島伊豫守通政養子稱主殿通孝依病歸
稱池田新藏享保元年十一月六日卒二十九歲

定得　和三郎
大隅守從五位下
明和四年十二月十八日叙任
安永二年七月九日卒二十二歲
法名瑞恭院善倫爲室

定常　銀之助　恒次郎
實池田半藏政勝二男

女子

之茂　能登
宗家家人
池田日向之壽養子

女子
宗家家人
津田將監元武妻

就高　池田豊之助　早世

池田 賜松平

○左少將兼伊豫守源綱政は新太郎少將光政の嫡男也光政寛文の末に致仕して天和二年の夏七十四歳にして卒す一代の言行世の口碑に傳ふる事すくなからす綱政の母は本多中務大輔忠刻か女にて天樹院殿の御腹なりしかは大相國家の御外孫女なりさる御ちなみに依て綱政二歳になりし時御所に召して御覽せられ御いつくしみをかふむりし事淺からす承應二年十二月御所にまいりて元服し從四位下に叙し侍從に任し伊豫守をかぬ御諱の字を賜はりて綱政とは名のりしなり（行光の御刀をたまふ）寛文十三年六月父のゆつりをうけて家を繼（備前備中の内三十萬石餘）舍弟二人に所領をわかつ（下にみへたり）元祿九年左少將に任し正德四年十月二十九日七十七歳にして卒す長子備前守吉政はさきたちて卒し（貞享二年初て見ゆ元祿五年從四位下に叙し御緯字賜り同しき八年九月二十九日うせぬ）二男主膳軌隆やまひありしかは三男三左衛門政順を立しかとも是も世をはやくして四男茂十郎保教よつきとなる保教正德三年二月十五日はしめて見參し明る四年の十二月十八日家つきて同しき五年の四月元服し從四位下侍從兼大炊頭に叙任し御諱字賜はりて繼政とあらため名のり延寶元年の冬左少將にすゝみ寶曆三年二月六日致仕して（あくる三年岡山にゆき其後剃髮して空山と號す）安永五年十二月八日卒す（七十五歳）その子茂十郎尙政は元文二年三月二十八日初て見參しおなしき五年十二月元服せし時從四位下に叙し御諱字賜はりて彈正大弼宗政といふ（後に伊豫守）寛延元年十二月侍從に任し寶曆のはしめ家つきて明和元年三月十四日卒す四十歳嫡子新十郎敏政寶曆十二年はしめて拜謁し父か卒せし年の五月十日に遺領たまはり（時に十五歳）九月十一日元服して從四位下侍從兼內藏頭に任し御諱字賜りて治政と改む

○信濃守源政言は（はしめ恒能稱池田）光政の二男也寛文九年六月朔日はしめて見へたてまつり十二月叙爵して同しき十二年六月十一日所領の地わかたれ（備中國のうち私墾田三萬五千石）元祿十三年八月十九日卒五十六歳その子內匠政倚つくはしめ天和二年五月十五日見參し父か卒せし年十月十四日遺領賜はり寶永六年十月叙爵して內匠頭に任す政倚か嫡男鍛冶之助政合世をはやうして外に子なかりしかは池田主膳軌隆（綱政の二男）か二男釆女軌明を養ひて子とし享保六年十一月十五日はしめて見參せ

し後病おほくなりしかは家つかすへうもあらされは又軌隆か元にかへしてその子安之丞輝言をやしなひしも是も病者なりけれはまたかへしやかて元文二年八月二十四日池田織部由利か二男亘政方を養子としあくる三年二月十六日致仕して家をゆつる（延享四年七月四日七十九歳にして卒）政方この家にやしなはれし年の十一月十五日拜謁し元文三年家つきて同き四年十二月叙爵して信濃守に任し寶暦十年三月致仕し（大内記にあらたむ）安永元年剃髮して長閑齋と號すその子兵部政香寶暦七年九月朔日初て見參し家繼て後十一年十二月從五位下に叙し内匠頭に任し明和五年八月廿五日二十八歳にて卒す子なかりしかは弟陽助政直よつきとなり十月廿九日遺領を賜はり（時に廿三歳）十二月叙爵して信濃守に任す

○丹波守源輝録は（はしめ政倫池田と稱す）光政の三男也寛文七年十一月十五日はしめて拜謁し同しき十二年所領の地わかたれ（備中の國の内一萬五千石）延寶元年の冬叙爵して丹波守に任し元祿六年七月五日奥詰の衆に加はり同しき十五年十二月十五日御奏者の事をうけたまはり正保三年七月廿三日こふに依て其事を許され十一月廿六日卒す年六十五その子大隅守輝廉先たちて卒しけれは（元祿十五年叙爵し寶永三年九月六日二十歳にて卒し其餘の男子みな早世す）池田主膳軌隆の長男善太郎政晴を養ひて嗣とすあくる四年十二月十九日輝祿か遺領をたまはり六月朔日初て拜謁し享保三年の冬叙爵して丹波守に任し寛延元年九月十一日四十五歳にして卒嫡男伊織政員こととし閏十月五日家をつき寶暦三年九月十五日はしめて見參し十二月叙爵して中務少輔に任し明和四年正月二十九日三十一歳にて卒すその子永次郎政弼實は弟なりこの年三月二十一日家つく四月朔日はしめて見え奉り同しき五年從五位下丹波守になり安永五年七月二十九日卒す年三十五男子三人早世しけれは四男永次郎政房二歳にて九月二十二日父につきおなしき八年四月朔日初之進政恭にあらたむ

○左少將兼相摸守源光仲は參議忠雄か嫡男也寛永九年三歳にして家を繼（因幡伯耆三十五萬石）十五年正月はしめて見たてまつる十二月二十九日元服して御諱字賜はり（大左文字の御脇差をたまふ）相摸守といふ（叙爵せすして守と稱せしなり）十九年十二月從四位下の侍從に叙任し承應五(二)年三月十二日少將にすゝみ貞享二年六月二十一日致仕し元祿六年の七月七日卒す（六十四歳）嫡子新五郎綱淸母は紀伊大納言殿（賴宣）

（卿の御事）の御息女徳川殿の御孫なり明暦三年二月二十一日十歳にしてはしめて見參し寛文元年十二月二十六日元服し御諱字賜はりて從四位下に叙し侍從に任し伯耆守をかぬ父の朝臣致仕の日家をつき弟長吉仲時に（後壹岐守仲澄）所領をわかつ（下にみえたり）元祿八年左少將にすゝみ十三年五月に致仕し正德元年七月四日年六十五にしてうせぬ子なかりしかは弟仲澄か嫡子長吉を養ひて家繼す長吉元祿元年正月二十八日初めて拜謁し家繼し時叔父池田靱負清定に（後松平河内守）地をわかつ（下にくはし）ことしの冬從下の四位して從侍兼右衞門督になり吉明と名のる（後相摸守吉泰にあらたむ）元服の式父にかはることなし正德五年の冬左少將にうつり元文四年七月卒す（二十三日）（五十三歳）その子勝五郎宗泰享保十六年七月二十六日はしめて見參し十二月元服し從下四位の侍從兼出羽守に叙任し元文四年九月七日父につき國事をきくこと九年にして卒す年三十一歳子勝五郎仲稼年わつかに二歳なりしに延享四年十月二日遺領を賜はり家老二人を宿老堀田相摸守にもとにめして勝五郎幼稚の身にて二ヶ國を領す汝等殊に心を用ひてよろつおきてをせよとそ仰下されけり寶曆九年四月朔日初て見えたてまつり十月十一日元服して從四位下侍從になり相摸守をかぬ御諱字を賜はりて重穆とあらたむ（後又重寛にあらたむ）田安中納言殿（宗武卿の御事）の御息女にそひまいらす安永二年の冬左少將にすゝみ（數代中絕たりし紅葉山御詣の豫參若菜の節供の進物なとこの頃こふによりてむかしにかへしけり）天明三年十月十八日三十八歳にして卒す嫡子右衞門督治恕はさきたちてうせけれは二男秀三郎嗣となりことし十二月四日家つきて十五日はしめて見參し同しき四年正月二十一日元服して從下の四位し侍從兼相摸守に任し御諱字を賜りて治道と名のる（時に十九歳）

○壹岐守源仲澄は光仲の二男也寛文三年十一月二十六日はしめて拜謁しおなしき五年の冬叙爵して貞享二年六月二十一日所領わかたる（因幡伯耆の内にて私墾田二萬五千石）嫡子長吉吉恭家をつきしか後元祿十二年閏八月所領の地ましくわふ（私墾田五千石合せて三萬石）明る十六年九月六日致仕し享保七年六月二日七十三歳にして卒す二男長吉仲央元祿十五年六月二十八日はしめて見へたてまつり家繼て後寶永三年十二月從五位下造酒正に任し（後豐前守又攝津守に任す）寶曆三年正月十一日卒し六十三歳その子右膳仲庸元文二年十一月二十一日はしめて拜謁し父かうせし

年の三月十五日遺領たまはり十二月叙爵して攝津守に任し寶暦八年六月十二日卒す年四十長子幡吉澄延ことし八月二十日家をつきおなしき十二年十月十五日はしめて見參し明和二年の冬叙爵して飛驒守に任し 後攝津守に改む 同しき六年卒す 九月十一日二十三歲 子なかりしかは弟慶次郎延俊を嗣とす十一月四日延俊に遺領をたまひ十五日初てまみへ奉り十二月從五位下修理亮に叙任しおなしき八年卒す 三月廿六日二十歲 延俊こふ所にまかせて六月十四日相摸守重寛三男主計澄時して家つかせられ天明四年閏正月十五日はしめて見參せしか同しき五年是も世を早ふしけれは 八月十三日十九歲 その弟連之助澄敎嗣となり年六歲にして十月十九日遺領をたまふ

○河内守源淸定は光仲の四男初め池田靱負といふ元祿十三年五月姪の右衛門督吉泰家繼しとて所領の地さきあたふ 因幡伯耆兩國の内私墾田一萬五千石 ことし七月はしめて見參しあくる十四年十一月叙爵したり寶永六年四月右衛門督吉泰か請しによりて池田氏を改めて松平と稱す享保三年九月九日三十六歲にして卒すその子式部定賢實は壹岐守仲澄か四男なり同しき年閏十月九日遺領を賜ひ其月十三日はしめて拜謁し十一月叙爵して近江守に任し元文元年九月七日卒す三十七歲その子隼之助定就は十月二十九日父につき十一月十五日初て見へたてまつり明る二年の冬叙爵して下野守に任し 後甲斐守又兵庫頭 明和四年四月十六日致仕す 四十二歲 息男和三郎定得ことし正月はしめて見參し家つきて十二月從五位下大隅守に任し安永二年七月九日卒す二十二歲子なきによりて支族池田半藏政勝か二男鐵之助定常を養ふ定常九月十八日家をつき天明五年二月十五日はしめて見參す 十八歲

淺野

源長政

幸長

長晟（アキラ）

長治（ハル）

光晟

綱晟

綱長　岩松　安藝守　延寶二年十二月廿七日從四位下侍從
寶永五年十二月十二日卒五十歲　法名顯妙院支典日統

長澄　大助
式部少輔長照養子

女子　本多能登守忠常室

吉長　岩松
備後守從四位下
元祿八年十二月四日敘任
寶永五年十一月一日改安藝守
同年十二月十八日侍從
享保十七年十二月廿二日左近衛權少將
寶曆二年正月廿三日卒七十二歲
法名體閑院恒巖宗隆

某　數馬　早世

女子三人
小笠原右近將監忠基室
九條左大臣師孝公室
松平出雲守義方室

宗恒　仙次郎　岩松
從五位下刑部大輔
享保十六年十一月廿三日敘任
後改伊勢守安藝守但馬守
寬延二年十二月十八日侍從
寶曆十三年二月廿一日致仕

女子三人
許嫁松平大膳大夫正甫正甫
卒嫁相馬因幡守德胤
松平加賀守綱紀養女
許嫁毛利右京元矩卒
許嫁松平越中守定輝定輝
卒嫁阿部隱岐守正直

女子
實宮內少輔長賢女
小笠原右京大夫忠總室

重晟　幸次郎
從四位下上總介
寶曆八年十一月廿八日敘任
後改安藝守
明和九年閏十二月十八日侍從

長孝　式部
水野和泉守忠任養子

長員　左京
兵部少輔長昌養子

女子
許嫁松平隱岐守定功定功
卒嫁松平伯耆守資承

長包　友之助　初長芳

某　仙次郎　岩松　早世

某　時之丞　善次郎

某　杢之丞

女子三人
水野式部少輔忠光室
兵部長裕室
許嫁南部慶次郎信敬

長尙　松千代　又六　實紀伊守光次二男母大猷院殿御養女實小松中納言利常女　和泉守從五位下
萬治元年十二月廿七日叙任　寛文六年七月廿八日卒二十三歲　法名淨心院顏哲自容

長照　長藏
光實晟三男
母同長尙
式部少輔從五位下
寛文六年十二月廿八日叙任後改因幡守
元祿四年十二月二日致仕
寶永二年十一月十五日卒五十四歲
法名朧雲院壁龍禪杖

長澄　大助
實彈正大弼綱晟三男
土佐守從五位下
貞享二年十二月廿八日叙任
享保三年八月四日卒四十八歲
法名天桂院霖應熊山

長經　撫三郎　又六郎
享保四年四月廿三日卒十三歲家絕
法名鳳童院孝嶽紹流

長寔　主鈴
享保五年五月廿一日卒十歲家絕
法名瑞麟院丹霄來雲

女子二人 內匠頭長矩室 河鰭左少辨季綠室

長賢 萬吉 民部 大膳
寶永七年九月廿八日賜御家號
兵部少輔從五位下
寶永七年十二月十八日叙任
後改宮內少輔
延享元年九月廿五日卒五十二歲
法名大通院圓翁紹幽

女子三人
一條中納言兼香卿室
許嫁佐竹大膳大夫義格義格卒
嫁松平豐後守資訓
許嫁松平三左エ門政順政順卒
許嫁水野日向守忠茂忠茂卒
許嫁森越中守長生長生卒
嫁河鰭權中納言輝秀卿

重員 雅之丞 主殿
中川內膳正久忠養子

長容 粂之助 左京 兵部

長喬 鍋次郎 玄蕃 舍人
兵部少輔從五位下
寬延二年十二月十八日叙任
明和六年十二月十六日卒三十八歲
法名泰潤院德運仁龍

女子二人
安藝守吉長養女
毛利志摩守廣寬室

長員 左京
實但馬守宗恒二男
從五位下近江守
明和七年十一月十六日叙任

某 英之丞

女子
許嫁松平主計澄時澄時卒
許嫁細川和泉守立禮離別
嫁戶澤上總介正親

某 光次郎

長重

長直

長友

長矩 又一郎
内匠頭従五位下
延寶八年八月十八日叙任
元祿十四年三月十四日切腹三十五歳
法名冷光院吹毛玄利

長廣 犬千代 大學
享保十九年六月廿日卒六十五歳
今淺野大學長貞祖

淺野　賜松平　附内匠頭長矩　附式部少輔長照　附主鈴長寔

○侍從兼安藝守源綱長は彈正大弼綱晟か嫡子幼名岩松といふ寛文十年四月二十一日初めて見參し延寶元年二月二十五日父の遺領をたまひ安藝國及ひ備後の國の内三十七萬六千五百石餘九月十八日御前にめして元服の式あり備前正恒の御刀をたまふ御諱字たまはる此時より安藝守とはめされけり是祖父光晟か例によりていまた叙爵もせすして安藝守と稱せしなり同しき二年從四位下に叙し侍從に任し寶永五年二月十一日卒す五十歲嫡男岩松吉長元祿元年六月十八日はしめて見參し同き八年十二月四日元服して御諱の字賜ひ從四位下備後守に叙任し後安藝守にあらたむ寶永五年三月二十六日父につきこのとし侍從に任す享保四年甥又六郎長經世を早ふしけれは其所領を吉長にかへし附らる五萬石此年長矩か弟主鈴長寔に五百石をわかちあたふ然るに明る五年是も世をはやくせしかは又かへし賜はるよりて合せて四十二萬六千五百石餘おなしき十五年五月十一日舍弟兵部少輔長賢に廩米をわかつ三千石同き十七年の冬少將にうつる元文四年正月二十二日尾張宗春卿御氣しきかうむらせ給ふ時水戸殿の支族大學頭賴貞播磨守賴幸とともに御使にさゝれて仰の旨を申つたふ吉長としつもりて七十二歲寶暦二年正月二十三日所領廣島にて卒す嫡子岩松宗恒享保十一年九月朔日はしめて拜謁おなしき十六年十一月二十三日元服して從下の四位刑部大輔に任し後伊勢守安藝守但馬守に改む寛延二年十二月侍從になり寶暦二年三月七日家つきておなしき十三年二月二十一日致仕すときに四十歲其子善次郎重晟寶暦七年二月十五日はしめて見參し十七歲あくる八年十一月二十八日元服して從四位下に叙し上總介に任す後安藝守父か致仕のとき家つきてあくる明和元年侍從に任す

宮内少輔源長賢は侍從總長か二男にて少將吉長か弟なり寶永七年九月二十八日はしめて拜謁す此時吉長かこひ申によりて松平と稱する事をゆるさることしの冬叙爵して兵部少輔に任す後宮内少輔にあらたむ延享元年九月二十五日年五十二にして卒すことし十一月その子鍋次郎長喬に遺領をたまふ長喬寛延二年二月十五日初て見へたてまつり十二月從五位下兵部少輔に叙任し明和六年十二月十二日卒すとし三十八男子なかりしかは宗家但馬守宗恒か三男左京長員を嗣とす長員明る七年二月四日家をつき十五日はしめて見へ奉り叙爵して近江守に任す廿五歲

○内匠頭源長矩は（淺野と稱す）采女正長友か嫡子也延寶三年三月二十三日父か遺領を賜ひ（五萬石播磨國赤穗の城）四月七日襲封を謝し奉る時はしめて拜謁しおなしき八年の秋叙爵す元祿十四年勅使下向有て長矩饗應の事をうけたまはりしに三月十四日勅使御所に參向ありしかは長矩も祇候せしに吉良上野介義英と鬪論して長矩いかりにたへすたちまち帶せし刀をぬきて義英にきりかけしかとも梶川與三兵衛賴知にさゝへられてほんいを遂るに及はす義英もわつかに手負ひたれは兩人に仔細をたつねらるゝに私のいさかひなることまきれなけれは義英は宿所にかへして疵をやしなはせ長矩は田村右京大夫定顯にめしあつけられこの夕へ御使を下されて長矩私の宿意を以て殿中をもはゝからす白刄をふりしことその罪かろからすとて定顯か家にて死を賜はり所領こと〳〵く沒收せられぬ長矩ことし三十五歳一朝のいかりにその身をわすれて家を失ひけるこそあはれなれ（世に傳ふる所は吉良義英は官位といひ年臈といひ高家の人々の上首にて公式應對の禮式あつからさる事なく人ももつはらとひことわりしによりおのつとおこるこゝろありて人にもほこりしゆへわれと事をともにする人はことはなやわらけて幣をあつくしてましはりけるに内匠頭長矩は生堅剛にして義英に品多く送るこゝろさらになかりしかは義英も初めより快よからすおもひて事にあたりおしへみちひく事なきのみならす思ひあきらめんとする中をもひきたかへたることたへなしてあまつさへあさめわらひけれは長矩いきとほりにたへかねてかゝるふるまひにもおよひしとそ義英此のち公の務を辭して籠り居たりしにあくる元祿十五年十二月十四日の夜長矩の家人大石内藏助吉田忠右衛門等をはしめ四十六人意をむすひて義英か家にうちいりしかは家人等ふせきたゝかふに及はすついに義英をうちおほせ其首をとりて故主の墓に手向し後家人等はみつからうつたへ出て公のつみをまつそのあたをむくひし志はさる事なから公の法をおかしたる事なれは罪をなためらるへきやうもなくして殘りなく死を賜りぬ）

○式部少輔源長照は（淺野と稱す）紀伊守光晟か三男なりし（母は左大臣家の御養女實は小松中納言利常の女なり長照寬文五年父のもとにありし時初見せしとそ）を因幡守長治養ふて子とす寬文六年十二月叙爵し延寶三年三月二十三日父か遺領をたまひ（五萬石備後國三吹の城）元祿四年十二月二日致仕して其子大助長澄に家をゆつり（長澄實は彈正大弼綱晟か二男なり）寶永二年十一月十五日年五十四歳にして卒す長澄いまた兄綱長か元に有し時天和元年十二月十二日はしめて拜謁し明る二年八月六日長照にやしなはれ貞享二年の冬從五位下土佐守に叙任し元祿四年父か家つきて享保三年八月四日所領の地にありて卒す四十八歳其子又六郎長經十月二日家つきしか明る年の四月二十三日年十三にして世をはやうし嗣なくして家絶たり（領地は宗家にかへしたまはる）

○主鈴源長寔は（淺野と稱す）土佐守長澄か二男にて長經か弟なり享保四年十月廿五日安藝守吉長所領の地割あたへしか（二萬石うちわけといふ）いくほとなくて明る五年五月二十

所領は吉長にかへし賜はる

一日十歳にしてうせぬ是も嗣なければ家絶たり

前田

管原利家

二世 利長 ナカ

二世 利常

光高

某 太郎 早世

女子六人
實右近大夫利豊女
家人長大隅守尙達妻
一人早世
松平安藝守吉長室
家人前田對馬守孝資妻
一人早世
松平相摸守吉泰室

某 久丸 早世

四世ノリ
綱紀　犬千代丸
初綱利
母
大猷院殿御養女
實水戸中納言賴房卿女
左近衛權少將加賀守正四位下
承應二年十一月十二日敍任
萬治元年閏十二月廿七日左中將
元祿六年十二月朔日參議
寶永四年十二月廿八日從三位
享保八年五月九日致仕
同年六月十五日改肥前守
同九年五月九日卒八十二歲
法名松雲院德翁一齋

某　萬菊
母同上
慶安二年八月十三日卒

五世
吉德　勝次郎　勝丸　犬千代丸　又左衞門
初利典　吉治
左近衛權少將正四位下兼若狹守
元祿十五年六月九日敍任
享保八年六月十五日改加賀守
同年八月十八日中將
天文五年十二月朔日參議
延享二年六月十二日卒五十六歲
法名護國院佛鑑法性

利章　富五郎　造酒丞
飛驒守利直養子

女子
二條關白吉忠公室

某　雅十郎　早世

女子二人
實松平安藝守吉長女
酒井左衞門尉忠寄室
實家人前田美作守孝行女
三條西前權大納言公福卿室

六世
宗辰　勝丸　犬千代丸　又左衛門　初利雄
左近衛權少將佐渡守正四位下
元文六年六月廿八日叙任
延享二年八月四日改加賀守
同年十月十八日中將
同三年十二月十二日卒二十二歲
法名文應院梅觀雪峯

利安　龜次郎　後重熙

女子三人
一作安藝守
松平伊勢守宗恒室
實備後守利章女
南部信濃守信貞室
松平出雲守利幸室

利和　前田勢之助
寶曆九年二月廿三日卒

利見　嘉三郎　後重靖

女子四人
佐竹左兵衛督義直室
二人早世
酒井阿波守忠宜室離別

七世
重熙　龜次郎　初利安
實吉德二男
但馬守從五位下
寬保三年十二月廿一日叙任
延享四年二月四日改加賀守
同月十九日正四位下近衛權少將
寬延元年十二月廿一日中將
寶曆三年四月十二日卒二十五歲
法名謙德院綄甫尙古

八世
重靖　嘉三郎　初利見
實吉德四男
上總介從五位下
寶曆元年十二月廿八日叙任
同三年六月四日改加賀守
同月十二日正四位下左近衛權少將
同年十月五日卒十九歲
法名大珠院嘯月仁勇

某　前田八十五郎
寶曆十一年五月十二日卒

九
重教　健次郎
初利篤　重基
左近衞權少將加賀守正四位下
寶曆四年四月十五日叙任
同五年十一月十八日中將
明和八年四月廿二日致仕
同月廿六日改肥前守
天明六年六月十二日卒四十六歲
法名泰雲院仁山彭壽

女子　一人早世
治脩養女

利博　敎千代

女子　治脩養女

女子　早世

利實　前田喜六郎
明和三年五月廿二日卒

一世
治脩　時次郎
初利有
正四位下左近衞權中將兼加賀守
明和八年六月廿五日叙任
安永九年二月十八日中將

女子　實重敎女
松平駿河守容詮室

利博　敎千代　又左衞門
實重敎男

女子　實重敎女
許嫁松平雄丸賴儀

利次

某　千勝丸
寛永廿年五月十四日卒

女子
水野和泉守忠京室

正甫　掃部
掃部頭從五位下
寛文二年十二月廿七日敍任
同八年十二月廿七日從四位下
大藏大輔
寶永三年四月十九日卒五十八歳
法名正甫院天心日耆

某　主税
延寶四年二月十二日卒

利興　萬德丸
長門守從五位下
元祿七年十二月十八日敍任
寶永三年十二月廿九日從四位下
享保九年七月十八日致仕
同十八年五月十九日卒五十四歳
法名安祥院靑山日高

女子　早世

利隆（タカ）　彈正

利由　萬勝　早世

某　龜千代　早世

利隆　彈正
實正甫三男
出雲守從五位下
享保九年九月六日敍任
同十年十二月十八日從四位下
延享元年十二月廿日卒五十五歳
法名大龍院惠天日洽

利鄉　内膳

女子
大和守利理室

利明 萬吉　大藏　美濃　初利成
實肥前守利常五男
大藏少輔從五位下
萬治二年十二月廿七日叙任
同三年十二月廿五日改飛驒守
寛文三年十二月廿八日從四位下
元祿五年五月十三日卒五十六歳
法名大機院賢翁紹英

女子三人
一人早世
加賀守吉德養女
眞田伊豆守信安室

利直 大學　內記
內記從五位下
貞享三年十二月廿六日叙任
元祿二年七月十七日改飛驒守
寶永三年十二月十九日從四位下
同七年十二月十三日卒三十九歳
法名圓通院悟性義聞

女子三人
水野出羽守忠周室
南部遠江守通信室
溝口伯耆守宣重室

利昌 釆女
寶永六年二月十八日切腹廿六歳
法名眞涼院雄鋒紹機

利貞 龜丸
寶曆九年十二月廿七日卒

女子
喜連川大藏大輔忠氏妻

利章 富五郎　造酒丞
實加賀守綱紀四男
備後守從五位下
寶永五年十二月十八日叙任
享保元年十二月十八日叙任從四位下
元文二年九月七日卒四十七歳
法名正智院廓巖泰然

女子二人
松平長門守利興室
酒井左衛尉忠眞養女

利道 造酒丞
壹岐守從五位下
延享四年十二月十九日叙任
寛延二年四月廿五日改備後守
寶暦四年十二月十八日從四位下
安永七年五月廿五日致仕
同年七月四日改遠江守
天明元年正月十四日卒四十九歳
法名顯照院徹巖義心

信成 中務

女子
前田伊豆守長敦妻

利考 勇之助

利純 藏人

利精 勇之助 造酒丞
美作守從五位下
安永六年十二月十八日叙任
同七年七月四日改備後守
天明二年六月廿一日致仕

利物 虎次郎

某 元三郎 早世

女子
許嫁加賀守治脩

利寧 主計

利物 虎次郎 主水
實利道三男
美濃守從五位下
天明二年十二月廿八日叙任

利以 大學
大和守利見養子

利行 勘解由

利幹 頼母

利龍　大學

利之　主水

女子　早世

利孝 タカ

利意　孫八郎　右近
初利豐
右近大夫從五位下
萬治三年十二月廿八日叙任
貞享二年四月廿八日卒六十一歲
法名靈雲院桃岳宗晴

考矩　帶刀
初利房
日向守
今前田安房守矩貫祖

利世　主膳
加賀守紹紀家人

利廣　宮內
元祿六年七月九日卒四十九歲
法名觀性院然山宗嚴

某　主殿
承應元年八月十一日卒

豐昌　釆女
今前田丹波守武宣祖

孝興　織部
貞享四年八年十一日卒

利慶　孫八郎　右京
元祿八年九月七日卒二十三歲
法名超雲院楚霄萬里

利英　長十郎

女子二人
富山下總守義寧妻
加賀守綱紀養女

女子　淺野内記友政妻

利英　長十郎　隼人
實利廣二男
寶永五年五月十五日卒廿歳
法名楞嚴院大高空月

誠明　左京
加賀守綱紀家人

元休　兵庫
上田萬太郎元隆養子

孝敎　市左衛門
釆女豐昌養子

某　市五郎
享保四年七月十五日卒

某　安之丞
享保八年九月廿五日卒

利理　又五郎　初利方　利安
實前田帶刀孝治嫡男
大和守從五位下
正德三年二月七日叙任後改
丹後守大和守
寶曆六年十二月七日卒五十七歳
法名禮源院仁宗眞心

定正　主税　助六郎
福島助太郎某養子

孝好　伊勢松　數馬
加賀守綱紀家人

女子
前田帶刀孝治妻

某　千之助
元文三年二月十五日卒

女子二人
共帶刀孝治養女

利尙　豐平　宮內
從五位下大和守
寶曆六年十二月十八日叙任
改丹後守
天明年五月九日致仕

重勇　左門　七右衛門
木村七右衛門信祐養子

武宜　要人　初孝郷
前田淡路守孝武養子

能弘　右膳　市兵衛
能勢市兵衛頼能養子

正盈　左膳
筒井與次右衛門政悦養子

某　又五郎
寶暦二年五月十四日卒

利見　豊平　右近
従五位下右近將監
天明三年十二月十八日敍任後改大和守

女子
利見養女

利以　大學
實備後守利道六男

女子
實利尙女

前田　賜松平　附　采女利富

○參議加賀守菅原綱紀は（はしめ綱利）少將光高の嫡子也幼きほとは犬千代丸といふ父の光高左大臣家の（大猷院殿の御事）御養女にそひまいらせて（阿智姫君と申して又大姫君とも申す實は水戸中納言頼房卿の息女なり）寛永二十年十一月十六日綱紀をまうけぬあくる正保元年母君御前へまいらせたまひしにぐしてははしめて見へたてまつるおなしき二年六月十三日父か遺領をたまひ（加賀能登越中近江國八十萬五千石餘大奥において新藤五郎國光の御脇差をたまふ）年わつかに三歳なりしかは祖父利常に沙汰してよろつうしろ見せよとて仰下されけり承應三年正月十二日犬千代丸御前に參りて元服し正四位下左近衛權少將兼加賀守に叙任し御諱字賜はりて綱利（のち綱紀と）名のる（貞宗の御脇差をたまふ）万治元年十月祖父利常卒したれは小松の城を合せ領す（二十二萬石）ことし閏十二月二十七日左中將に轉し（寛永十二年十月光高に放鷹の地をたまふ武藏國相模の內也綱紀より〳〵其地に出し逍遙せしといふ）元祿六年十二月朔日參議に補しおなしき十五年四月二十五日綱紀か家の例として老臣の內叙爵をゆるさるゝもの三人ありしを又一人をくわへて四人すてに爵たまはるへきよし仰下されぬ二十五日は綱紀か邸にならせたまひ綱紀および息男若狹守に數の寶賜りしかは饗する事美盡せしうへ献せしものも又少からす寶永四年十二月從三位にのほり享保八年五月九日致仕す年つもりて八十二同しき九年五月九日おはりぬ（綱紀は智仁勇の三才をかねたりといふへきほとの人にてありけれは國の政事もすくれたりし事とも多く黑部川四十八瀨といふは北國にかくれなき難所にてわたり瀨急流なるゆへやゝもすれはおほれ死するものありしに綱紀此川上の山そひにあらたに道をひらき橋をわたして諸人のゆきゝをやすくしたり此事を議せしはしめ家の老ともいへるには國を守る要害の地をうしないなんといひしを綱紀國の安危は政事の得失にこそあれ山海の險難によるへきにあらすとてなかく覆溺の憂ひを除れたりとそ）其子又左衛門吉德元祿十五年二月二十八日はしめて見參し六月九日御所にして元服し御諱字賜り正四位下左近衛權少將兼若狹守に叙任し（二字國俊の御刀を賜ふ）寶永五年十一月八日御所の姬君（松姬君と申尾張大納言光友卿の息女を御所にむかへて養ひ君とせさせ賜ひしなり）を迎へまいらせて室とす享保八年父か家ゆつられてことし八月左中將に轉て元文五年十二月參議に補し延享二年六月十二日五十六歲にして卒す（享保十六年の秋吉德金拾五萬兩をたてまつりて公の財用をたすけ參らせし事ありしに其後半かへし下されしに鎭西の國々蝗災ありて貸米の事もつはらおきてさせ給ふ折からなれはたまわりし殘りはすても侍りなんと申けれはこの金はたまはらすなりぬ同しき十八年の春吉德いとまたまはり金澤におもむくとて見參のついてに此事をもほのめかせたまひて御けしき淺からす家のおきて殊に聞ゆるも吉德心にいれてはからふゆへにこそとてかへす〳〵ほめさせたまひしとなり）其子又左衛門宗辰元文二年四月二十八日はしめて拜謁し六月二十八日御諱字賜りて正四位下の少將兼佐

渡守に叙任し（備前長光の御刀をたまふ）父か卒せし年の七月二十五日家繼て十月十八日左中將に轉しあくる年の十二月十二日二十二歳にて卒す未た子なかりしかは弟龜次郎重熙を世つきとす重熙はしめ寛保三年二月十一日に見へたてまつりしか從五位下の但馬守に任し延享四年正月二十六日兄か家つきて二月十九日御諱字を賜はり正四位下の少將に任し（三原の御刀をたまふ）其後中將に轉て寶曆三年四月十二日卒す年二十五是も男子なくして弟嘉三郎是よりさき初見叙爵して上總介利見といひしに五月十八日重熙か家繼せらる六月十二日正下の四位にのほり左少將に任し加賀守をかぬ御諱字を賜て重靖と改たむかくて歸國のいとまたまはりて下りしか十月五日金澤にしてうせぬ（十九歳）よつきの事は弟健次郎と申たりけれはそういなく遺領をたまはるへかりしに此ころ健次郎も金澤に來り折ふし病に臥て江戸に參らん事心に任せす明る寶曆四年の三月になりて參りしかは十一日に御所にめして御對面ありすなはち家繼へきよし仰有て四月十五日また御前に參り元服の事有さき／＼の例にまかせて正四位下の左少將に叙任し加賀守をかぬ御諱の字賜はりて重敎と名のる（備前爲光の御刀を賜ふ）おなしき五年十一月左少將に轉し國政をとる事十七年になりぬ重敎いまた四十にも及はぬ身なりけれと病痾におかされて公私のつとめにたへさりけれはことし明和八年弟時次郎か金澤にいたりしをよひのほせて三月二十五日初て見參にいれ四月二十二日國ゆつりてその身は致仕し（肥後の守にあらたむ）天明六年六月十二日金澤にありて卒す四十六歳なり時次郎兄につきし年御所にまいりて元服し正四位下左少將兼加賀守になりて治脩と名のる（時に十九歳）安永元年十二月左中將に轉す

○大藏大輔菅原正甫は（前編利昌としるす）淡路守利次か二男也（長子千勝丸は早世せり）寛文二年五月十日初て拜謁し十二月從五位下掃部頭に叙任す同しき八年の冬從下の四位にのほり大藏大輔にあらため延寶二年九月四日家を繼（越中國富山の城十萬石）寶永三年四月十九日五十八歳にして卒す其子万徳丸利興元祿五年七月二十八日はしめて見參し同しき七年の冬從五位下長門守に叙任し父にわかれし年の六月二日遺領を賜はり十二月從四位下にのほり享保九年七月十八日致仕しおなしき十八年五月十九日五十四歳にして卒す利興男子なかりしかは弟彈正

利隆嗣となり家継て後従五位下出雲守に任し同き十年の冬従四位下して延享元年十二月二十日卒す年五十五その子隆丸利幸これよりさき寛保三年十月十五日はしめて見參にいり十二月叙任して主計頭になり延享二年二月十三日家継て出雲守に改む閏十二月従下の四位にのほり寶暦十二年九月四日三十四歳にして卒す其子隆丸世を早うしけれは弟靱負利與嗣となりことし十一月三日遺領をたまひ十二月朔日初て見參し従五位下出雲守になり明る十三年従四位下に叙し安永六年十一月八日致仕して家を長子又三郎利久にゆつる 淡路守に改たむ○利與文學を好みしかは安永三年富山の城下に學校を建て諸士を敎育し春秋の釋菜をもあけおこなひしとそ 利久去年の三月朔日初て見へたてまつりことし十二月従五位下出雲守に任し 十一歳 同しき八年の冬従四位下に叙す

○飛驒守藤原利明は中納言利常か第五の子にて兄飛驒守利治か嗣子也万治二年五月二十六日初て拜謁し十二月従五位下大藏少輔に任し翌年七月三日利治か遺領をたまふ 加賀國大聖寺の城七萬石 寛文三年十二月従下の四位にのほり元祿五年卒す 五月十三日五十六歳 嫡子内記利直天和四年二月十日はしめて見參し貞享三年の冬従五位下に叙し元祿四年八月十九日奥詰の衆となる同き五年七月九日家継て弟采女利昌に所領わかつ 私墾田一萬石 利直この時飛驒守にあらたむ寶永三年十二月従四位下に叙し同き六年正月二十一日奥詰衆をゆるされてあくる年十二月十三日三十九歳にして卒す其子酒造丞利章實は少將綱紀第四の弟なり寶永五年三月二十八日初て見參し十二月従五位下備後守に叙任し正德元年正月二十九日遺領をたまひ享保元年十二月従四位下して元文二年九月七日卒す四十七歳其子酒造丞利道ことし十月二十七日家をつき延享二年三月二十六日はしめて見へたてまつり同しき四年の冬従五位下壹岐守に叙任し のち備後守 寶暦四年十二月従下の四位にのほり安永七年致仕して 遠江守にあらたむ天明元年正月十四日卒す四十九歳 家を勇之助利精にゆづる利精初め安永四年十一月十五日拜謁し同き六年の冬叙爵して美作守になり のち備後守 天明二年八月二十一日病によりて致仕す 二十四歳 男子なかりしかは弟主水利物を養て嗣子とす利物家つきて十月朔日はしめて見へ奉り 二十三歳 十二月従五位下美濃守に叙任す

○采女菅原利昌は 前田と稱す 飛驒守利明か二男也元祿五

年兄飛驒守利直か所領のうちあたへられ私墾田一萬石寶永六年二月東叡山にて法會行はれし時織田監物秀親とおなしく勅使饗應の事を承はり此月十六日の曉東叡山の奥書院にありて俄に狂氣し秀親を殺害しけれはそのまゝ石川主殿頭義孝に召しあつけられ同き十八日死を賜はりけれは家絶たり領地は利直にかへし賜はる

○右近大夫菅原利意は前田と稱す初は利豊大和守利孝の嫡男也寛永九年三月二十八日はしめて見參し同き十四年九月八日父か遺領をたまはり上野の國の内一萬石餘万治三年十二月叙爵して右近大夫と稱す右近將監に任せしなり貞享二年身まかりぬ四月廿八日六十一歳其子宮內利廣ことし七月二十五日家繼て元祿六年七月九日四十九歳にして卒す嫡子右京利慶貞享四年九月六日初て拜謁し父かうせし年の九月十三日遺領をたまひ元祿八年九月七日卒す年二十三いまた子なかりけれは十一月二日弟隼人利英して家繼せられ利英おなしき十三年三月十八日初て見參し寶永五年二月十五日年二十にしてうせぬ是も子なきにより一族帶刀孝治か嫡男又五郎利理嗣となり四月七日遺領を賜はりぬ同き七年閏八月朔日はしめて拜謁し正德三年二月七日從五位下大和守に叙任し後丹後守又大和守に改む寶暦六年卒す二月七日五十七歳其子宮內利尙寛延三年三月朔日初て見へ奉り寶暦六年閏十一月二十九日叙爵して大和守になり後丹後守天明二年五月九日致仕す時に四十二歳其子右近則見去年の八月十五日初て拜謁してことし家繼て明る三年十二月從五位下右近將監に叙任す時に廿歳

京極

源高吉

高次

忠尙

高和

女子二人　宗刑部大輔義眞室　今出川右大臣公矩公室

某　小次郎　法師　早世

女子

高豐　百助　備中守從五位下　寬文九年十二月廿五日叙任　元祿七年五月十八日卒四十歲　法名橡山道英

女子　實藤堂大學頭高次女　石川日向守昌能室

高房　賴母　實家人多賀宮內常良嫡男　延寶五年五月廿一日卒無嗣家絶　法名俊林道逸

女子　實高房女　石川備中守總承室

女子　高和養女

某　仙千代　早世

某　祐次郎　早世

某　松之助　早世

女子　酒井雅樂頭忠峯養女

高或　縫殿　若狹守從五位下　寶永三年十二月十九日敍任　享保九年六月廿二日卒三十三歲　法名仁巖道宅

女子二人　安藤對馬守信友養女　一人早世

高矩　縫殿助　初高定　佐渡守從五位下　享保十六年十二月廿三日敍任　寶曆十三年九月廿六日卒五十一歲　法名眞翁道哉

女子二人　板倉內膳正勝承室　許嫁高迢高迢卒嫁遠山和泉守友淸

高迢　虎五郎　實馬之助高綏男　中務少輔從五位下　寶曆九年十二月七日敍任　同十二年閏四月廿四日卒十七歲　法名正嶽道智

高中　榮吉　初高影　從五位下能登守　明和七年十二月十六日敍任

高敎　番

高通　喜內　初高澄　內膳
壹岐守従五位下
寶永六年十二月七日叙任
享保廿年九月廿四日致仕
同年十一月廿九日剃髪號道静
寛保三年四月廿日卒五十三歳
法名寂翁道静

忠霈　安三郎
西尾隱岐守忠尙養子

高綏　馬之助

高亮　喜七郎　早世

良安　左門
家人多賀式部亰貴養子

某　輕三郎　早世

某　辨之助　早世

高明　豐吉　早世

高慶　千吉　內膳
出羽守従五位下
享保廿年十二月十六日叙任
寶曆六年二月廿六日卒三十七歳
法名安禪道寧

高迢　虎五郎

高行　忠次郎　早世

某　定五郎　早世

女子
伊達和泉守村賢室後嫁
藤堂山城守亰峯離別

某　岩八　早世

尙文　內膳　初高央　高武
従五位下壹岐守
明和六年十二月廿八日叙任

治高　又八
松平筑前守治之養子

女子 西尾隱岐守忠尙室

某 八十郎　早世

高賢 秀松　內膳

高知

高通

高明 隼人 備後守從五位下

高保 長五郎

某 左馬進　早世

某 忠五郎　早世

高供

高之 鍋千代　主殿 主膳正從五位下

高祇 元之丞　早世

女子 許家京極釆女高周早世

某 鍋之助 元祿十四年十二月廿一日卒

高長 內匠　右近 實內藤豐前守式信三男

延寶三年十二月廿六日叙任
貞享九年七月二日改主膳正
元祿十二年四月廿九日致仕
寶永六年三月八日隼人正
同七年閏八月十四剃髮號道意
享保十一年十二月二日卒六十七歲
法名智宏院仁譽勇臾道意

―某　孫六　早世

―高久　千之助　主殿　右近
實京極織部高庭二男
備後守從五位下
明和二年十二月十八日叙任

―女子　早世

寶永六年三月七日叙任
享保八年二月二日卒四十六歲
法名隆源院天譽碩含道倫

―高重　外記
正德二年二月五日卒三十二歲
至孫伊兵衛高伴有罪家絶

―某　久米之助
八幡宮本防弟子

―李明　岩松
本間善左衛門季豐養子

―高備　千之助　主水

―女子　早世

―某　宮次郎　早世

備後守從五位下
享保八年十二月十八日叙任
明和二年六月八日致仕
同年十一月十八日改主膳正
同六年四月二日卒七十五歲
法名源寥院廓譽常光道仙

―女子　高長室

高三

高盛　六丸
伊勢守從五位下
寬文三年十二月廿八日叙任
延寶二年三月十八日致仕
寶永六年二月朔日卒六十歳
法名楊林院照山道廓

高元　主税

女子三人
一人早世
森伯耆守長武室
一人早世

某　幸吉　早世

女子　早世

高直

高住　土肥之助
實飛驒守高直四男
甲斐守從五位下
延寶二年十二月廿七日叙任
正德四年七月十九日致仕號甲斐入道
享保十五年八月十三日卒七十一歳
法名普明院大雲道端

高住　土肥之助

某　萬里之助

某　完之助　早世

高尙　錦三郎

高榮　修理　初高繼
加賀守從五位下
正德四年十二月八日叙任
享保六年六月十五日卒三十二歳
法名源照院通岸道達

高正　龜之助　早世

善興　重次郎　水野左衛門
今京極勇次郎高端祖

女子三人

高門　兵部　初尙明
享保九年二月十七日卒六十四歲
今京極八之丞高燭祖

女子　早世

高寛　土肥之助　享保十一年九月十二日卒十歲
法名源通院道圓日照

高永　黑田大吉　修理　初高平
享保十一年九月十九日繼高寛
甲斐守從五位下
享保廿年十二月十六日敘任
寶曆十年八月十二日卒四十歲
法名靈瑞院新豐華谷道浮

高里　興之助　圖書　民部　初高久　高德
京極兵部高門養子
後歸剃髮號瑞石

高完　求馬
高極齋宮高成養子

女子三人　共高經養女
共實圖書高里女
京極帶刀高壽妻
家人
石東源兵衛明達妻
家人
坂本團右衛門守林妻

高品　六丸　修理
甲斐守從五位下
寶曆十一年十二月十八日敘任

高大　陽吉　左近
實高永五男依病籠居

某　多田勝十郎　早世

成壽　幾松　舍人
初高盈
坂部左五右衞門正方養子

永武　元吉　早世
玄蕃

女子三人
石川靱負總武妻
許嫁鳥居左太郎忠供離別
嫁大澤下野守基孝
一人早世

高大　陽吉　左近

女子

京極

○備中守源高豐は刑部少輔高和か男なり寛文元年八月二十六日初て見參し同しき二年高和卒しけれは十二月四日父に遺領を賜ふ 讃岐國丸龜の城○六萬石領○寛文四年四月五日曾祖母なりける常高院か化粧料遠江國野田長田等千四百石餘の地高豐にたまふこの常高院は淺井備前守長政の女にて姉妹三人あり母は織田右府のいもとにて小谷の方と長政うせし後柴田勝家に嫁しけれは三人の女子ともに母にともなひて越前にありしに勝家うたれ小谷の方もうせけれと此三女はことゆへなくして長女は豐臣家におもはれて淀殿といひ二女は則常高院にて京極宰相高次の妻となり三女はおほけなくも大相國家の御臺所にておはしますこのけはひ料は慶長三年八月大閤よりあたへし所なり大坂の事おはりし時常高院御和睦の事によりて申せし事ありしかは左大臣家御代しろしめしけるとき此料元のとくにたまひけるをおのかやしなひし女に三萬石をわかち又若狹の國常高寺に三百石をよせて寛永十年身まかりけるか殘る所の地を高豐にたまひしといふ おなしき九年十二月叙爵して備中守に任し 延寶五年弟賴母高房死し嗣なかりしかは家絶けるか其所領三千石高豐に返し賜ふ高房實は家人多賀宮內といふもの丶子にして高利か甥なれは養て子とし采地を分て仕へ奉りしなり 元祿七年五月十八日四十歲にして卒す其子縫殿高或六月十八日遺領をたまはり 五萬五千五百石 弟喜內高澄後壹岐守高通といふ 所領をわかつ 一萬石 高或おなしき十五年四月十五日はしめて見えたてまつり寶永三年十二月從下五位の若狹守に任し享保九年六月二十二日卒す年三十三嫡子縫殿助高矩五月二十二日家をつきおなしき十六年二月二十八日初て拜謁し十二月叙爵して佐渡守になり寶曆十三年九月二十六日卒す五十一歲高矩初男子なかりしかは寶曆四年四月三日甥の虎五郎高迢をやしなひて子とすることし男子をもうけしかおなしき十二年高矩早世しけれは明るとし六月五日彼男子をよつきと定め榮吉高中といふ十月晦日十歲にして遺領たまはり明和七年閏六月朔日はしめて見へ奉り十二月從五位下能登守に任す

○壹岐守源高道は備中守高豐か五男也元祿七年六月十八日父か遺領をわかち領す 一萬石 おなしき十五年四月十五日はしめて拜謁し寶永六年二月從五位下して壹岐守に任し享保二十年九月二十四日致仕して嫡子千吉高慶に家をゆつる 高通致仕の後剃髮し道靜と號し寛保三年四月廿日卒五十三歲 高慶享保十九年正月十八日はしめて見へたてまつり家繼て後叙爵して出羽守になり寶曆六年二月二十六日三十七にして卒嫡子內膳高文五月二日父につく 時に四歲 明和六年九月十五日はしめて見參し十二月叙爵して壹岐守に任す

○伊勢守源高盛は飛驒守高直か嫡男也寛文三年三月二十五日父か領遺を賜はりて 丹後國田邊三萬二千石 舍弟兵部高門に所領わかつ高直四月二十日はしめて拜謁し十二月

叙爵して同しき八年五月二十一日但馬國城崎豊岡等の地を賜はりてうつる（三萬五千石となる）此とき土木の用途をたまふ（金二千兩）延寶二年三月十八日致仕す（寶永六年二月朔日六十歳にて卒す前編に寛文七年致仕としるせしはあやまりなり）其子土肥之助高住（前編に高記と書く）實弟にて高直か四男なり寛文七年九月五日初て見參し延寶二年家をつき従五位下甲斐守に任し正徳四年七月十九日病によりて致仕し（享保十五年八月十三日卒す七十一歳）長子修理高榮家を繼弟水野左衞門善興に廩米をわかつ（二千俵）高榮寶永元年九月十五日初て見へたてまつり後に叙爵して加賀守に任し享保六年六月十五日卒す三十二歳長子土肥之助高寛八月三日父か遺領をたまはり同しき十一年九月十三日十歳にして世を早うしけれは所領召おさめられ弟なりける黒田大吉高平（後修理高永とあらたむ）に新に所領たまはりて家名をつかせらる（舊領の内一萬五千石をたまはる此内にして水野善興に廩米をわかてり）同しき二十年七月二十八日はしめて拜謁し十二月従五位下甲斐守になり寶暦十年八月十二日卒す四十歳嫡子修理高品七月十八日父か遺領を賜る（時に廿歳）同き十一年九月十五日初て見へ奉り十一月叙爵して甲斐守に任す

○備後守源高明は主膳正高供か嫡也男寛文十二年四月二十三日はしめて拜謁し延寶二年四月十九日父か遺領賜はり（丹後近江下總常陸國の内一萬千五百石餘）おなしき三年十二月従五位下に叙し備後守に任し（後主膳正又隼人正に改む）元祿十二年四月二十九日致仕す（入道して道意と號し享保十一年十二月二日六十七歳にして卒す）長子主殿高之貞享三年三月朔日初て見へたてまつり元祿十二年家を繼（一萬石）舍弟外記高量に采地をわかつ（五千石）寶永六年三月叙爵して主膳正に任し享保八年二月三日年四十六にして卒すその子右近高長實は内藤豊前守藤原式隆か三男なり高之か女にそひて嗣となり正徳四年九月十五日はしめて拜謁し高之かうせし年の四月二日に遺領をたまはり十二月叙爵して備後守は任し明和二年八月八日致仕し（主膳正にあらたむ）おなしき六年四月二日卒す年七十五その子主殿高久はその族織部高庭か二男なり寛延三年十一月朔日初て見參し明和二年家をつき（時に三十七歳）ことし従五位下に叙し備後守に任す嫡子主水高備安永二年正月十五日はしめてまみえたてまつる

黒田

源長政

忠之

女子　酒井河内守忠峰室

綱之　萬千代　初長貞
筑前守從四位下
寛文九年十二月十一日叙任
延享五年十一月十三日依病籠居
同年二月剃髪號澄範後改
泰雲又號眞乘坊幹亮
寶永五年六月六日卒五十四歳
法名眞乘坊幹亮

某　市之助　早世

吉之　左京　初政之
大隅守從四位下
元祿九年十一月廿六日叙任
寶永七年七月三日卒三十九歳
法名乾光院範雄道洪

女子二人
一人早世
宣政養女

光之　槌萬　古兵衛　初長之
左京大夫從四位下
寛永廿年十二月廿九日叙任
正保四年三月廿八日改右衞門佐
承應二年十二月廿六日侍從
元祿元年十二月九日致仕
寶永四年五月廿日卒八十歲
法名江龍院淳山宗眞

之勝　萬吉　初政之
黑田東市正高紋養子

女子
實松平右近大夫輝興女
東市正之勝室

綱政　宮内　初長寛
初東市正之勝養子
宮内少輔從五位下
延寶四年十二月廿六日叙任
同五年閏十二月廿一日從四位下肥前守
元祿元年十三月廿五日侍從
寶永七年十二月廿八日改右衞門佐
正德元年六月十八日卒五十三歲
法名靈元院囘山紹光

長淸　平八郎
伊勢守從五位下
貞享元年十二月廿五日叙任
享保五年二月廿二日卒五十四歲
法名龍湫院瑞林道祥

女子
甲斐守長重室

宣政　守山辨之助　初政則
和泉守從五位下
元祿十四年十二月廿八日叙任
寶永七年閏八月廿一日從四位下佐渡守
同年三月十八日改肥前守
正德元年十二月十八日侍從
享保四年十一月廿一日致仕
延享元年八月十日卒六十歲
法名黍林院義山道勇

某　龜之助　早世

女子
許嫁上杉民部大輔吉憲卒

長好　菊千代
宣政養子

某　早世

女子
佐竹右京大夫義峯室

女子四人
松平伊豫守宗政室
酒井左衛門尉忠温室
甲斐守長邦室
松平越中守定邦室

重政　左京　初長賢
修理大夫從四位下
寬延元年十一月廿八日叙任
寳曆十二年七月十四日卒廿九歲
法名英元院瑞嶽紹圓

某　早世

女子　繼高養女

某　黑田宮內　早世

女子二人
立花左近將監鑑通室
南部信濃守利謹室

長經　黑田平八
寳曆十二年八月廿六日卒廿二歲

女子四人
廣幡大納言伊光卿室
許嫁久我宰相信道卿卒
二人早世

某　隼三郎　早世

繼高　菊千代　官兵衛
初長好
實伊勢守長清嫡男
筑前守從四位下
正德四年二月朔日叙任
享保四年十二月十八日侍從
寶曆元年十二月十八日左近衞權少將
明和六年十二月十日致仕改圖書頭
永安四年六月十七日卒七十六歲
法名功崇院章山道善

女子
實吉之女
繼高室

長喬　權之助
實德川民部卿治濟卿三男

長興

治之　隼之助
初高滿
實德川刑部卿宗尹卿五男
侍從式部大輔從四位下
明和三年七月十八日叙任
同六年十二月十二日改筑前守
天明元年十一月廿一日卒三十歲
法名鳳陽院典山紹淸

女子
治之養女

女子
實重政女
許嫁治之早世

治高　又八
初高幸
實京極出羽守高慶七男
侍從筑前守從四位下
天明二年三月七日叙任
同年十月廿四日卒二十九歲
法名龍雲院德巖道俊

女子
實繼高女

女子三人
藤堂佐渡高通室
小笠原壹岐守長祐室
小笠原備中守直方室

某　犬萬　早世

長重　千之助
甲斐守從五位下
延寶元年十二月廿八日叙任
寶永七年十月廿九日卒五十二歳
法名英雲院別叟宗傳

女子
宗家家人
黒田三左衛門一貫妻

女子
加藤遠江守泰温室

長邦　修理
河内守從五位下
元文二年十一月十六日叙任
寶暦五年九月五日改甲斐守
同十二年二月廿五日卒四十一歳
法名興德院一岑宗閑

長軌　千之助
隱岐守從五位下
元祿十三年十二月廿一日叙任
正德五年十二月四日卒三十歳
法名興陽院三峯宗玄

女子　早世

女子二人
松平淡路守近貞室
保科越前守正率室

長惠　豐松
甲斐守從五位下
明和七年十二月十八日叙任
安永三年九月二日卒廿一歳
法名岱德院亮應宗惇

長貞　加藤市大夫　修理
初長治
實宗家家人野村太郎兵衛祐春嫡男
甲斐守從五位下
享保元年七月廿二日致仕
寶暦四年九月十日卒五十八歳
法名興願院耀譽禎歡

長堅　貞之助　千之助
實山崎主税助義俊二男
天明五年十二月八日依病籠居
同年九月十一日卒十七歳
法名靈雲院光岳道照

女子
秋月佐渡守種美室

女子
山崎主税助義俊妻

長道　外記　早世

忠聽　多宮
酒井兵部忠陸養子

女子
甘路寺前大納言親長卿室

某　信助　早世

女子
廣橋中納言在家卿室

長舒　幸三郎　修理
實秋月佐渡守種頴二男
天明五年三月十三日繼長堅

某　犬萬

某　好松

黑田　賜松平　附　伊勢守長信

○侍從兼右衞門佐源光之は筑前守忠之か嫡男也幼名は槌萬といふ寛永十二年正月五日八歳にして始めて見參し其年の冬從四位下に叙し左京大夫に任す慶長元年十二月二十八日御家號及ひ御諱字を賜ひ右兵衞佐光之とあらたむ行光の御刀をたまふ承應三年四月二十二日父の遺領をたまひ筑前國四十三萬二千石餘五月二十三日長崎の警衞を奉はる父忠之か時に此事をうけたまはりしといふ後代に是をつとむことしの冬侍從に任し元祿元年十二月致仕す寶永四年五月廿日八十歳にて卒す嫡子筑前守綱之籠居しけれは五十八前編にみへたり綱之寶永五年迄なからへて五十四歳にて身まかりしといふ次男宮內少輔長寛をよつきとす長寛はしめ叔父東市正之勝にやしなはれて寛文三年十月九日家を繼き筑前國直方の地四萬石直方とは東運寺といふおなしき五年二月二十八日はしめて見參し延寶四年叙爵すしかるに兄綱之籠居しけれは明る五年二月十三日父光之公にこひおのか家によひとりぬこのとき長寛か領せし地は父光之にかへし賜ることし閏十二月從四位下に叙し御家號御諱字たまはりて松平肥前守綱政とあらため名のる長光の御刀をたまふ元祿元年十二月九日家を繼き弟平八郞長清後伊勢守に所領わかつ私墾田五萬石おなしき二十五日侍從にすゝむ正德元年六月十八日卒す五十三歳嫡子左京吉之元祿四年二月十五日はしめて拜謁し九年二月元服して從下四位の大隅守に任し御家號御諱字御刀を賜ふ寶永七年七月三日二十九歳にして父に先たちて卒す次男守山辨之助政則元祿十三年十二月十五日はしめて見へたてまつりあくる十四年叙爵して和泉守になり寶永七年閏八月二日よつきとなり二十一日元服して從四位下佐渡守に任し後肥後守にあらたむ御家號及ひ御諱字賜はりて宣政とあらたむ青江の御刀をたまふ正德元年八月十一日父につき遺領賜はりてやかて侍從にすゝみ享保四年の冬致仕し延享元年八月十日年六十にして卒す子なかりしかは叔父伊勢守長清か長子菊千代を子としやしなひ正德四年五月朔日はしめて見參し十二月朔日元服して從四位下に叙し筑前守に任す御稱號ならひに御一字をたまはりて綱高とあらたむ兼光の御刀をたまふ享保四年十一月二十二日家繼て後侍從にすゝみおなしき五年父長清卒して嗣子なかりしかは四月十五日彼所領を綱高にかへし賜はる寶曆元年の冬少將に轉し明和六年十二月十日致仕して圖書頭にあらため年つもり七十六安永四年四月十七日に終り

女子　秋月佐渡守種美室

女子　山崎主税助義俊妻

長道　外記　早世

忠聽　多宮　酒井兵部忠陸養子

女子　甘路寺前大納言親長卿室

某　信助　早世

女子　廣橋中納言在家卿室

長舒　幸三郎　修理　實秋月佐渡守種頴二男　天明五年三月十三日繼長堅

某　犬萬

某　好松

黑田 賜松平 附 伊勢守長信

○侍從兼右衛門佐源光之は筑前守忠之か嫡男也幼名は槌萬といふ寛永十二年正月五日八歳にして始めて見參し其年の冬從四位下に叙し左京大夫に任す慶長元年十二月二十八日御家號及ひ御諱字を賜ひ右兵衛佐光之とあらたむ（行光の御刀をたまふ）承應三年四月二十二日父の遺領をたまひ（筑前國四十三萬二千石餘）五月二十三日長崎の警衛を奉はる（父忠之か時に此事をうけたまはりしといふ後代に是をつとむ）ことしの冬侍從に任し元祿元年十二月致仕す（寶永四年五月廿日八十歳にて卒す）嫡子筑前守綱之籠居しけれは（五十八前編にみへたり綱之寶永五年迄ながらへて五十四歳にて身まかりしといふ）次男宮内少輔長寛をよつきとす長寛はしめ叔父東市正之勝にやしなはれて寛文三年十月九日家を繼き（筑前國直方の地四萬石直方とは東運寺といふ）おなしき五年二月二十八日はしめて見參し延寶四年叙爵すしかるに兄綱之籠居しけれは明る五年二月十三日父光之公にこひおのか家によひとりぬ（このとき長寛か領せし地は父光之にかへし賜る）ことし閏十二月從四位下に叙し御家號御諱字たまはりて松平肥前守綱政とあらため名のる（長光の御刀をたまふ）元祿元年十二月九日家を繼き弟平八郎長清（後伊勢守）に所領わかつ（私墾田五萬石）おなしき二十五日侍從にすゝむ正德元年六月十八日卒す（五十三歳）嫡子左京吉之元祿四年二月十五日はしめて拜謁し九年二月元服して從下四位の大隅守に任し御家號御諱字御刀を賜ふ寶永七年七月三日二十九歳にして父に先たちて卒す次男守山辨之助政則元祿十三年十二月十五日はしめて見へたてまつりあくる十四年叙爵して和泉守になり寶永七年閏八月二日よつきとなり二十一日元服して從四位下佐渡守に任し（後肥後守にあらたむ）御家號及ひ御諱字賜はりて宣政とあらたむ（青江の御刀をたまふ）正德元年八月十一日父につき遺領賜はりてやかて侍從にすゝみ享保四年の冬致仕し延享元年八月十日年六十にして卒す子なかりしかは叔父伊勢守長清か長子菊千代を子としやしなひ正德四年五月朔日はしめて見參し十二月朔日元服して從四位下に叙し筑前守に任す御稱號ならひに御一字をたまはりて綱高とあらたむ（兼光の御刀をたまふ）享保四年十一月二十二日家繼て後侍從にすゝみおなしき五年父長清卒して嗣子なかりしかは四月十五日彼所領を綱高にかへし賜はる寶暦元年の冬少將に轉し明和六年十二月十日致仕して圖書頭にあらため年つもり七十六安永四年四月十七日に終り

ぬ嫡子左京長賢寶延元年正月十五日はしめて見へ奉りことしの冬元服し御家號御諱の字賜はり從四位下して修理大夫に任し重政とあらたむ寶暦十二年七月十四日二十九歳にして卒す次男宮内某三男平八長經ともにこれよりさき世をはやくせしかはおなしき十三年十一月二十三日仰により刑部卿宗尹卿の五男隼之助高滿をおのか女に配せて嗣とすこの時黒田と稱すへかりしを御家號を賜る家なれはとてすくに松平と稱すへきよし仰下されぬ明和三年十二月十五日高滿初て出仕しあくるとし七月十八日元服して四位の侍從兼式部大輔に任し御諱字賜はりて治之といふ（後筑前守に改む〇利光の御刀を賜ふ）繼高致仕の日國ゆつられて天明元年十一月二十一日三十歳にして卒す長子隼三郎世を早うしけれは京極出羽守高慶か子又八高幸を嗣とせん事をこひ申せしか明る二年二月二日高幸して家つかせられすくに御家號をもゆるされぬおなしき十八日高幸はしめて拜謁し三月七日元服して從五位下侍從兼筑前守になり御諱字たまはりて治高と改む（重國の御刀をたまふ）時に二十九歳なりしかるに十月二十四日福岡にて終に病てうせぬ是も嗣子なきによりて民部卿治濟卿の次男雅之之助長壽を嗣として十二月十九日家つかせらる（是もすくに松平と稱せし也）此長壽ことしわつかに六歳也いとけなきほとは支族のものかはりて長崎の警衛をつとむる例なかりしかと黒田千之助長堅もいまた幼弱なれは長壽家の老とも心を合てかしこを守るへきよし仰下されぬ

〇甲斐守源長重は（黒田と稱す幼名千之助）故の甲斐守長興か嫡子也寛文五年六月十一日父か遺領を賜ひ（筑前の秋月五萬石）延寶元年叙爵して元祿四年五月十八日奥詰の衆となり五年八月十五日御奏者となりしか寶永五年二月二十九日辭して七年十月二十九日五十二歳にして卒す嫡子千之助長軌元祿十年九月二十八日初て見へ奉り十三年の冬叙爵して隱岐守に任し寶永七年十二月二十七日家をつき正德五年十一月四日卒す三十歳其子修理長貞（初は加藤市太夫といふ）實は野村太郎兵衛祐春か子也（野村は宗家の家人也長貞は長軌か再從弟といふ）十二月十六日長貞に長軌か遺領をたまはりあくる六年正月十五日初て見へたてまつり享保元年の秋侍從五位下甲斐守に任し寶暦四年九月十日年五十八にして卒す嫡子修理七郎長邦元文元年二月十五日初て拜謁し翌る二年の冬叙爵して河内守になり寶

暦四年十一月十六日家繼十二年二月二十五日卒す四十一歳其子豐松長惠四月十九日遺領をたまはり明和七年二月十五日初めて見參しことしの冬叙爵して甲斐守に任し安永三年九月二日卒す二十一歳子なかりしかは外甥のちなみにつきて山崎主稅助藤原義俊か二男貞之助長堅をよつきとすことし十二月遺領をたまはりぬ（此時千之助と改む）長賢すてに十七歳に及ひしに年頃病ありて公のつとめなしかたくいまた子ともなかりしかは宗家雅之助をはしめ一族のともからあひよりて長賢か身のいとま賜はり似あひのものをゑらひて家つかせん事を望み申せしかいまた見參にもいたらすして致仕の事はたやすく許されかたきさためなりしかと宗家雅之助長崎の警衛をうけたまはり幼弱のほとは支族のともからにしてまもるゆへとあれは別儀によりてそのこひに任せらるゝよし仰下されしかは天明五年三月十三日長堅致仕し秋月佐渡守大藏種頴か二男幸三郎長舒して家つかす長舒四月朔日初て見參し五月朔日宗家雅之助にかはりて長崎を守るへしと仰下さる（時に廿歳）長堅は病ついにいへすして九月十日身まかりぬ

○伊勢守源長清は（黑田と稱す）右衛門佐光之の四男也天和二年十二月二十一日初めて見參して貞享元年の冬從五位下の伊勢守に叙任し元祿元年の十二月九日父か所領を分ち賜はる（筑前國の內私墾田五萬石）同しき二年四月十八日奥詰の衆となり同しき六年正月二十八日そのつとめをゆるさる正德四年肥前守宣政疾にふして國にゆく事なりかたけれは五月七日仰によりて長清かはりて長崎を守り享保五年十二月二十三日五十四歳にして卒す嫡子長好宗家をつきて外に子なかりしかは長治か家は絕てけり所領は宗家にかへし給はる

有馬

源豐氏

忠頼

頼利

頼元　源四郎
實中務少輔忠頼二男
中務大輔從四位下
寛文八年十二月廿七日叙任
元祿八年十二月十八日侍從
寶永二年七月廿日卒五十二歲
法名慈源院忠巖道孝

頼旨　萬吉
筑後守從四位下
元祿十三年十二月廿二日叙任
寶永三年四月八日卒二十一歲
法名昌林院謙空道性

女子四人
松平大和守基矩室
宗對馬守義方室
酒井讃岐守忠音室
松平豐後守資訓室

則維　虎之助　兵庫
實石野大夫則貞三男
初有馬宮內則政養子
玄蕃頭從四位下
寶永三年十二月十九日叙任
同五年十二月十八日侍從
享保十四年七月六日致仕
元文元年十二月九日剃髮號唯翁
同三年四月朔日卒六十五歲
法名梅巖院唯翁通考

則矩　岩松
寶永五年七月七日卒

某　大次郎
寶永五年十一月廿二日卒

則如　長十郎
享保三年五月五日卒

女子二人
實谷播磨守照高女
佐竹修理大夫義堅室
稻葉能登守董道室

頼僮　左近
中務大輔從四位下
享保十一年十二月十六日敍任
同十七年十二月十六日侍從
安永元年十二月十五日左近衞權少將
天明三年十一月廿三日卒七十二歲
法名大慈院圓山道遍

女子
許嫁丹羽若狹守高庸早世

頼貴　定五郎
從四位下上總介
寶曆八年十二月十八日敍任
後改中務大輔
天明元年十二月十六日侍從

女子
許嫁松平又三郎忠堯早世

女子
實石野筑前守範至女
許嫁兵庫頭氏恕

女子
許嫁土井兵庫頭利制

頼董　藤三郎

某　定之丞

某　長作

則惠　宅之進
元文三年六月十五日卒十九歲

女子二人
津輕出羽守信著室
龜井隱岐守茲延室

某　多吉郎
寶曆六年五月三日卒十二歲

某　重八

女子

女子
備後守氏保室

某　五八

豐範　萬菊　內匠
實小出修理亮吉重三男
伊豫守從五位下
寬文八年十二月廿七日敘任
貞享元年七月卅日配流筑後國久留米
元祿五年五月九日赦
同十三年十二月廿八日死五十五歲
法名寒江院雲添良雪

豐胤　萬菊　采女　修理
後英致
貞享元年七月晦日配流久留米
元祿五年五月九日赦
後小出權之助英道養子

賴次　初賴泰
母東照宮御養女
實松平源七郎康直女
加賀守從五位下
寬永五年正月朔日敘任後改伯耆守
同九年十一月十六日配流筑後國久留米
同十三年十二月二日赦
慶安三年五月九日死三十九歲
法名宗無

吉政　淸兵衞
實建部內匠頭元重二男
寬文十二年六月十一日卒七十六歲
法名了眞

義景　淸兵衞
實紀伊殿家人正木五郎右衞門爲永二男
元祿十年致仕
享保七年九月三日卒七十八歲
法名自性院

氏倫　四郎左衛門
兵庫頭從五位下
享保元年七月廿二日敍任
同廿年十二月十二日卒六十八歲
法名法源院

某　長八　早世

氏久　六左衛門
實紀伊殿家人渡邊主水泰綱三男
備後守從五位下
享保十九年十二月十八日敍任
寶曆九年六月二日致仕
明和八年二月廿六日卒七十三歲
法名覺源院

女子
紀伊殿家人淡輪新兵衛重方妻離別

某　彌平次　早世

某　大助　早世

光隆　主計
實建部丹後守政周十一男
寬延二年之歸其家

氏恒　彌平次
實堀大和守親藏四男
式部少輔從五位下
寶曆九年十二月七日敍任
同十年二月廿四日卒二十二歲
法名正源院

女子四人
黑田豐前守直亨室
堀石見守親賢繼室春臺院養女
二人早世

某　幸次郎　早世

氏房　赤松　常吉

氏房 常吉
實氏久三男
安永二年閏三月八日卒十七歲
法名亮雲院

氏恕 恕吉
實堀大和守親長二男
兵庫頭從五位下
安永八年十二月十六日叙任
天明三年九月廿六日卒二十三歲
法名孔昭院

氏保 直次郎
實牧野駿河守忠寛二男
備後守從五位下
天明三年十二月十八日叙任
寛政二年七月廿九日卒廿九歲

久保
實加藤遠江守久周二男
備後守從五位下
寛政六年十二月叙任
文化十一年七月廿六日卒三十六歲

女子

某

有馬　附 伊豫守定軌

○侍従兼中務大輔源頼元は故の中務大輔忠頼か二男にて幼名源四郎といふ寛文七年十一月二十三日はしめて見へたてまつり兄玄蕃頭頼利か嗣子となりて明る八年八月二十一日家をつき（筑後國久留米二拾萬石）叔父内匠頭豊軌に所領をわかつ（五萬石○前編に二萬石としるすは誤りなり）十二月二十七日頼元従四位下して中務大輔に任し元禄八年侍従にすすむこれよりさき伊豫守豊範（則内匠か事なり）罪ありて家絶し時所領（一萬石）収公せられしを元禄十年五月頼元にかへしたまひぬ寶永二年七月二十日頼元五十二歳にして卒す嫡男万吉頼旨元禄十一年二月十五日はしめて見参し同しき十三年従四位下筑後守に叙任し寶永二年九月五日父か遺領をたまはりて明る三年四月八日世を早ふす年二十一男子なかりけれは支族宮内則政か子虎之助則維を養ふて世つきとす（利維實は石野八大夫則貞か二男にて利政か養子とす）五月二十一日則維家つきてことし従四位下の玄蕃頭になり同しき五年十一月侍従に任し享保十四年七月六日致仕しその後入道して唯翁と號す（元文三年四月六十五歳にて卒す）男子三人早世しけれは四男左近頼僮よつきとなる頼僮享保十一年九月朔日初て拝謁し十二月従下の四位して中務大輔に任し同しき十四年父か家ゆつられ十七年の冬侍従にすゝむ安永元年頼僮年六十に及ふまて公務おこたりなかりしかは家の先達をこえて少將に轉すかくて齡古稀を過て天明三年十一月二十三日卒す其子定五郎頼貴寶暦八年十一月十五日初て見へ奉り十二月十八日従四位下に叙し上総介に任し天明元年の冬侍従になり同しき四年正月二十三日父か遺領をたまふ（時に年四十四歳）

○伊豫守源豊範は中務大輔忠頼か養子實は小出修理亮藤原吉重三男にして忠頼か外甥也寛文八年八月二十一日中務大輔頼元父か家つきし時筑後國御原郡松崎の地をわかちたまふ（一萬石）ことしの冬従五位下の伊豫守に任す貞享元年七月晦日土方伊賀守雄隆罪かふふりし時豊範も其事に坐して領地没収せられ嫡子釆女豊胤もともに頼元にめしあつけられ久留米の地に蟄居せり（元禄五年五月九日ゆるされて十三年十二月身まかりぬ）

○兵庫頭源氏倫は伯耆守頼次か四代の孫也頼次は玄蕃頭豊氏か二男にて元和三年初て見參にいりあくる四年に駿河大納言忠長卿につかへしか寛永元年公の

御勘氣かふむりて父豐氏に召あつけられ久留米の地に籠居して慶安のはしめ身まかりぬ豐氏その後なきをなけき建部內匠頭元重か子淸兵衞吉政は外孫なるゆへ有馬の苗字をあたへ賴次か後とし紀伊大納言賴宣卿の家人とす（千石を領す）吉政も子なくして傍輩正木五郞右衞門爲永か二男淸兵衞義景を子としやしなふ義景か子則氏倫なり（父か家繼て用達しといふ役になる加增を賜りて千三百石を領す）享保元年有德院殿紀伊殿よりいらせたまひて御代つかせ給ひし時氏倫扈從にて五月二十五日御側衆となり伊勢國三重郡の內にて新に采地をたまふ（本領の五百石別に職務料稟米千俵をたまはる）ことし七月叙爵して明る二年正月十一日加恩の地をたまふ（下野國芳賀郡の內にて千石職務の料を合せて二千七百石）同き八年六月十八日祿をましくわへらる同しき十一年正月十一日おほくの地くはへたまはり萬石の列となりぬ（伊勢國下總上總等の內にて七千七百石をくわへて合せて一萬石）氏倫奉公の年つもりて六十八歲同しき二十年十二月うせぬ子なかりしかは紀伊殿の家人渡邊主水泰綱か三男を養て子とし六左衞門氏久といふ享保二年六月二十二日はしめて見へたてまつり同しき八年近習の衆になり稟米（五百俵）をたまふ同き十九年十二月叙爵して備後守に任し元文元年二月三日氏倫か遺領をたまはりて昵近をゆるされ同しき五年六月二十日大番の頭となる寶曆八年六月十二日職を辭してあくる九年六月三日に致仕す（明和八年正月二十六日七十三歲にてうせぬ）氏久も初め子なくして延享三年建部丹波守政周か二男主計某をやしなひしか病ありしかは父か元にかへしやりて寬延二年堀大和守藤原親藏か四男彌平次氏恒を世繼とす氏恒寶曆七年四月朔日初て見參し同しき九年氏久か家ゆつられて從五位下の式部少輔に任し同じき十年二月二十四日卒しけれは弟赤松常吉氏房ことし四月十九日家をつく氏房は氏久か致仕ののちもふけし子なり安永元年三月十五日初て見參し同しき二年の長病によりて閏二月世をはやうす年十七是も子なきによりて堀大和守藤原親長か二男恕吉氏恕をやしなふ氏恕ことし五月十四日遺領をたまひ四年四月二十八日初て見へたてまつり八年叙爵して兵庫頭に任し天明三年九月二十六日二十三歲にして卒す又子なかりしかは牧野駿河守忠寬か二男直次郎氏保を嗣子とす氏保ことし十一月十八日遺領をたまはり從五位下備後守に任す（時に廿二歲）

山內

藤原忠義

忠豐

女子五人
本多中務大輔政長室
一人早世
眞田伊賀守信直室
山內次郎右衞門一輝妻
一人早世

女子三人
京極備中守高豐室
阿部對馬守正邦室
一人早世

豐昌 國松 筑後
筑後守從四位下
明曆三年十二月十七日敍任
寬文五年十二月廿六日改土佐守
同九年十二月廿五日侍從
元祿十三年九月十四日卒六十歲
法名覆載院含弘周德

豐房 民部
實山內次郎大夫一俊嫡男
民部大輔從四位下
元祿二年十二月廿七日敍任
同十三年十二月廿二日侍從改土佐守
寶永三年六月七日卒三十五歲
法名天暉院俊山泰雄

女子 豐房室

豐隆 鳥居右京 猪右衞門 初豐長
實山內次郎大夫一俊二男
土佐守從四位下
寶永三年十二月十九日敍任
同五年十二月十八日侍從
享保五年四月十四日卒四十八歲
法名龍泉院靜國鐵心

某　久米千代
正德四年十月十九日卒

豐常　龜千代　大助
土佐守従四位下
享保六年十二月十八日叙任
同八年十二月十八日侍従
同十年九月二日卒十九歳
法名旭光院天岳良英

某　山内萬之助　氏松　早世

某　鳥居岩丸　早世

女子
上杉彈正大弼宗憲室

某　山内勝三郎　正次郎　早世

豐治　辰之助
元文三年三月七日卒

豐儀　幸次郎　幾安
延享元年五月廿一日卒

豐敷　市正　伊衞門　初重國
實山内主馬規重長男
民部大輔従四位下
享保十年十二月十八日叙任
同十三年十二月廿一日侍従
同四年十一月十九日卒五十九歳
法名天昌院大德承貞

某　山内吉五郎　早世

女子　豐敷室

某　山内重之助　早世

女子　早世

豐根　山内金之進　直丸
延享九年七月十五日卒

女子一人
松平大和守朝矩室
佐竹右京大夫義敦室

豐雍　松之丞　國松　初峯喜　恭豐
従四位下筑後守
明和元年十一月十三日叙任
同五年正月廿五日改土佐守
同年十二月十八日侍従

女子
小笠原伊豫守忠苗室

豐泰　鑒次郎
式部豐産養子

女子　早世

某　山内桃之助　早世

豐策　邦之丞

女子二人　上杉直丸顯孝室　一人早世

豐敬　山内金五郎

某　山内景之助　早世

忠直

女子　板倉越中守重清室

直明　虎之助　早世

女子　早世

女子　早世

豐定

豐明　九郎太郎　國助　大膳
初直久
豐定卒嗣子豐次幼弱故豐明併領其地
大膳亮從五位下
延寶五年閏十二月廿六日叙任
元祿二年八月四日配流遠江國濱松
同五年五月赦
寶永元年正月十七日死六十三歲
法名陽法院

豐次　辰千代　觀之助
國助
元祿二年六月十二日卒十二歲
法名大應院特瑚英奇

女子　早世

女子　杉浦外記正辰妻

豐成　九郎太郎
初直溝　豐勝
元祿二年八月三日配流遠江國濱松
同五年五月赦
延享四年七月卅日死七十三歲
法名大鮮院安叟諸樂

豐淸　大次郎
式部之豐養子

某　慶三郎　早世

女子　早世

某　水野直之丞　早世

某　大太郎　早世

女子　早世

某　彥十郎　早世

某　直七郎　早世

豐產　時五郎　松助
主膳豐淸養子

女子
大島兵庫義里妻

豐茂　善五郎　兵部　早世

尹信　幸次郎　初豐武　主計　武信
南部主計勝信養子

一安　松助　猪右衛門
遠江守從五位下
慶安四年八月十六日叙任
萬治三年六月四日卒廿五歳
法名義德院仁仲智覺

豐之　梅助　式部　初安豐
實土佐守忠義五男
元祿四年四月廿五日卒五十五歳
法名本源院心應通徹

豐則　梅助　早世

豐房　萬之助　早世

女子三人
一人早世
大森三次郎賴隆妻
石河大學貞名妻

豐清　大次郎　大膳
實大膳亮豐明二男
寶曆六年八月三日卒八十歳
法名天龍院德善道毅

女子一人
根來新右衛門正國妻

豐救　大次郎　早世

女子　青木齋宮直舊妻

某　傳三郎　早世

女子二人　共早世

某　千代之助　早世

女子　早世

豐產　松助　式部　賴助
實九郎太郎豐成四男
遠江守從五位下
天明元年十二月十八月叙任
同三年五月廿一日致任

女子三人　許嫁堀田孫七一暾早世
有馬內膳則滿妻
一人早世

豐穀　一太郎　主膳
安永八年六月十六日卒廿八歲

豐秀　時五郎　早世

豐泰　監次郎　帶刀
實土佐守豐敷五男
攝津守從五位下
天明三年十一月十八日叙任

豐武　松太郎

山内

賜松平　附　大膳亮豊明

○侍従兼土佐守藤原豊昌は對馬守忠豊か嫡男なり明暦二年二月十八日はしめて見參にいり明る二年十二月従四位下に叙し筑後守に任す（後土佐守にあらたむ）寛文九年六月十五日豊忠か致仕のときその所領を賜ふ（土佐國高知山の城二十萬二千六百石）ことしの冬侍従にすゝみ元祿十三年九月十四日六十歳にしてうせぬ其子民部豊房實は一族次郎大夫一俊か嫡子にてその家をつきたりしか元祿二年豊昌の女にそふて嗣となり十二月従四位下の民部大輔に任し（後土佐守に改む又忠義の例に任せて土佐守に書す）豊昌身まかりし年の十一月十二日遺領たまはりて十二月侍従にすゝむ寶永三年六月三十五歳にして卒す（豊房仁厚にして國民をいつくしみ十ヶ條の掟をさためて近臣にしめし土佐國式社考を編集し梓にちりはめて世に行はる）是も子なかりけれは弟鳥居豊長（後豊隆）を嗣とす豊長ことし八月二日家繼て十二月十九日従四位下して土佐守に任しおなしき五年十二月侍従にすゝむ享保五年四月十四日卒す四十八歳其子大助豊常去年四月二十八日初て見參にいりことし五月二十七日父か遺領をたまひあくる六年の冬従四位下に叙し土佐守に任しおなしき八年の十二月侍従にすゝみおなしき十年の九月二日とし十九歳にしてうせけれはことし十月二十二日家臣山内主馬矩重か長子市正豊敷に遺領賜はり（伊右衛門とあらたむ）十二月十八日従四位下の民部大輔に任す（後土佐守にあらたむ）おなしき十三年の冬侍従にすゝみ明和四年十一月十九日五十九歳にてうせぬその子國松豊雍といふ兄三人みな世を早うしけれは豊雍四男にて嗣となり寶暦十三年二月十五日はしめて見えまいらせ明和元年十一月十三日四位の筑後守になり（後土佐守にあらたむ）同き五年正月二十日父か遺領をたまふ（時に十九歳）ことし十二月侍従にすゝむ安永九年十二月二十一日支族山内式部豊産に稟米（一萬俵）をわかつ嫡子邦之丞豊策天明五年二月十五日はしめて拜謁す（時に十二歳）

○大膳亮藤原豊明は（山内と稱す）修理大夫忠直か二男也寛文七年八月二十七日兄右近大夫豊定家繼しとき采地をわかたれ（三千石）寄合衆となる延保五年兄豊定卒し息男國助豊次幼なかりしかはことし十二月仰によりて兄の遺領を合せ領す（豊定か所得土佐國幡多郡一萬七千石と己が采地を合せて三萬石を領す）ことし閏十一月叙爵して大膳亮に任し元祿二年四月十四日奥詰衆となり五月四日少老の職に補せられしか

職にある事繾に六月やまひによりて職を辭す御氣色かうむりて目黒の別邸に籠居せしといふ　この折しも國助豊次うせたりければ六月十三日　八月三日豊明かはしめの所領と豊次か所領を收公せられ豊明にはもとの采地を賜ひて三千石　寄合の列となされけり玄かるにいかゝ意得たかへけるにや領掌の御請も申さゝりしかはあくる四日たちまちに罪かうむりて青山下野守忠重にあつけられて家たへたり　其子九郎太郎豊成も父とゝもにあつけられぬかくて三年を經て元祿五年五月御法會のとき日光御門主のとりなしによりて父子とともに罪をなためられて忠重かもとより豊昌にわたされて土佐國にありしかおなしき十三年五月十日江戸にまいる事をもゆるされ寶永元年正月十七日六十三歳にて卒す

○遠江守藤原豊產は山内と稱す　九郎太郎豊成か四男也叔父主膳豊清子としやしなふ豊清か祖父遠江守一安は土佐守忠義か四男にて慶安二年十一月二十八日はしめて拜謁し　慶安二年八月朔日嚴有院殿に見え奉りしといふいかなれはさきに大納言家に拜謁せしや詳ならす○是よりさき宿老酒井雅樂頭忠清の邸にして父祖の戰功をおほされて一安赤子なれとも召出されて御家人にくわへらるゝむね松平伊豆守信綱阿部豊後守忠秋列座して忠清仰をつたへしといふ　おなしき四年八月十六日叙爵して明暦二年の冬詰衆となり俸米三千俵　を賜ふ　前編には父の忠義にわかちしやうにしるせり月日も家譜と異なり○萬治三年六月四日廿五歳にて卒す　その子式部之豊家をつく之豊まことは忠義か五男なり元祿四年に身まかりぬ四月廿五日五十五歳　これも子なかりしかは大膳亮豊明か二男主膳豊清をやしなひて嗣とす豊清家つきて後おなしき十一年采地をたまひ稟米を止られて常陸下野上總等の内にて三千石を宛行はる寶暦六年にうせぬ八月三日八十歳　豊產初め式部といひし時豊清に養はれ元文五年の冬初て見參して寶暦六年十一月四日父か遺領を賜ふ安永九年十二月二十二日宗家土佐守豊矩稟米一萬石　をわかちたまふ采地を合せて一萬三千石を賜はる　その後叙爵して天明三年五月二十一日病によりて致仕す六十二歳　男子みな早世しければ土佐守豊泰の五男帶刀豊泰を養ひて嗣とす豊泰天明元年三月十五日初て見たてまつり同しき三年家をつき十二月十八日叙爵して攝津守に任す十九歳

堀

管原親昌

某　七十郎　吉十郎　早世

某　彦次郎　早世

女子三人

某　菊丸　早世

女子

親貞　吉丸　又七郎
周防守從五位下
萬治三年十二月十八日叙任
貞享三年十一月八日卒四十六歳
法名隆松院貞叟紹立

親常　千之助　又七郎
實近藤主税重信嫡男
美作守從五位下
元祿元年十二月廿五日叙任
同十年二月廿七日卒二十四歳
法明昔林院姓空道寛

親賢　長吉　玄蕃
實堀外記親興長男
大和守從五位下
元祿十一年十二月廿五日叙任
後改石見守
正德五年十一月廿八日卒三十二歳
法名東明院規俊宗頴

女子二人

某　右近　早世

某　三之助　早世

女子　森和泉守長直室離別

女子

女子二人　片桐大膳貞國妻
有馬備後守氏久室

親庸　一學
若狹守從五位下
享保四年十二月十八日叙任
同十二年七月三日卒廿二歲
法名寬祐院龍眞義定

親藏　與之丞

親藏　與之丞
實親賢二男
右衞門佐從五位下
享保十三年十一月廿一日叙任
後改美濃守大和守
延享三年十二月十八日三十八歲
法名禪林院大道林也

某　斧丸
京都佛光寺內
長性院養子

親長　久太郞　又七郞
從五位下大和守
寶曆二年十二月十八日叙任
安永八年四月廿五日致仕改右兵衞尉

女子
戶田淡路守民之室後嫁
石川阿波守總恒

女子
近藤讃岐守政方妻後嫁
藤枝帶刀敎忠

女子
小笠原兵庫長孝妻

親表　主税
安西六郎右衛門敏長養子後歸

女子
竹内彈正大弼惟久室

某　嘉内　早世

常郷　三藏
遠藤源五郎常住養子

親忠　忠藏
山城守從五位下
安永七年十二月十六日叙任
後改大和守河内守
天明四年七月九日卒二十五歳
法名孝悌院仁愛敎忠

親幸　幸之進
實親長四男

親豐　主膳　早世

爲明　主水
座光寺善兵衛爲知養子

氏恒　彌平次
有馬備後守氏久養子

親褒　數馬
堀數馬親敷養子

氏恕　恕吉
有馬常吉氏房養子

某　三之丞　早世

女子
遠藤主膳胤富室

親幸　幸之進

女子三人
德永久米三郎昌候妻
秋月式部種備妻
許嫁加納英次郎久敬早世

女子二人

某　銕三郎

女子

堀

○周防守菅原親貞は美作守親昌か嫡男也（前編に義昌も父親良か時母方につきて氏あらためて菅原になるとしるす家に傳ふる所は天和八年大坂の事をうけたまはりて後ゆゑありて菅原氏とあらたむといふしかれと寛永系圖にしるさゝれはしらす）万治三年の冬叙爵して周防守に任し延寶元年九月十一日家繼て（信濃國飯田二萬石）貞享二年に卒す（十一月八日四十六歳）子なかりしかは近藤主税重信か長子千之助親常を子としやしなふ親常いまた父の重信かもとに在し時天和三年二月十歳にしてはしめて見へまいらせ貞享三年二月四日家をつき元祿元年の冬叙爵して美作守に任すおなしき三年八月二十八日奥詰の衆となるあくる四年五月二十七日その事ゆるされおなしき九年正月二十二日御小性となり明る十年三月二十七日卒す（二十四歳）これも子なかりけれは支族の外記親興か長子玄蕃親賢を世つきとす親賢ことし五月十九日家つきておなしき十一年の冬叙爵し大和守になり（後石見守）正德五年八月大坂の城の守りにそへられてのほりしか十一月二十八日彼處にてうせぬ三十二歳長子一學親庸ことし十二月家繼て享保四年從五位下の若狹守に任し同しき十二年七月十三日卒す二十二歳いまた子なかりしかは弟興之丞親藏ことし九月嗣となりて家をつき十二月從五位下して右衛門佐に任す（後美濃守又大和守に改む）延享三年身まかりぬ（十二月十八日二十八歳）其子又七郎親長四月十二日父の遺領を賜ひ寶暦元年二月十五日はしめて見參し同しき三年叙爵して大和守に任し安永八年四月二十五日四十歳にて致仕す（右兵衛尉に改む）長男忠藏親忠安永四年三月五日はしめてまみへ奉り同しき七年十二月從五位下山城守に叙任し（後大和守また河内守に改む）明るとし父につき天明四年七月九日二十五歳にして卒す子無りけれは弟幸之進親幸十一歳にして兄か嗣と成ことし九月三日遺領をたまふ

堀

藤原直政

直寄

直時

直吉

女子
成瀨隼人正正幸妻

直道
主水　攝津守従五位下　寛永三年十一月十九日叙任　同五年閏正月依病
籠居　享保十一年五月十九日卒三十七歳　法名俊機隨巖宗流

直利　左京
左京亮従五位下
寛文十一年十二月廿八日叙任
寶永四年十二月十四日改丹後守
正德元年九月十六日致仕號獨鋒
享保元年七月十日卒五十九歳
法名禪慧院義天保壽

直爲　靱負　初直治　直長
左京亮従五位下
正德二年十二月十五日叙任
元文五年二月廿日致仕
同年二月六日改修理
寛保三年三月廿三日卒四十六歳
法名鐵翁院祖道儀闕

直堯　直太郎　三十郎
丹波守従五位下
元文五年十二月十九日叙任
天明元年九月十九日改丹後守
同五年十月廿九日卒七十一歳
法名松巖院俊德月休

直英　圖書
長門守直祐養子

利起　主許
酒井主殿忠兵養子後歸

女子
福原内匠資祀妻

直泰　靱負
安永八年六月二日卒四十二歳
法名源祥院觀空了夢

女子
許嫁備前守直寛直寛卒嫁井上遠江守正意
正意卒嫁松平孫大夫滿勘

直方　莊次郎

女子
直敎養女

信義　左近　助三郎
松平安房守昌信養子

長致　友次郎隼人　壹岐守
淺野河内守長壽養子

女子
淡路守直堅室

直行　喜内
堀三六郎直昌養子

成孝　兵庫
本多大膳將成養子

直敎　三十郎
左京亮従五位下
天明五年十一月廿八日叙任

直方　莊次郎　三十郎
實直泰男

女子
實直泰女

女子

直重

直外

直輝

女子　早世

直富　伊織　早世

直俊　字源太　主殿
依病籠居

直祐　松之助　初直矩
長門守從五位下
寛文十年十二月廿八日叙任
享保四年十月廿五日致仕
同六年六月廿日卒六十七歳
法名秋光院智海船樂

正義　喜右衞門
甲斐庄喜右衞門正永養子

直英　圖書
實左京亮直利三男
淡路守從五位下
享保四年十二月十八日叙任
同廿年二月廿三日致仕
元文四年四月三日號周翁
明和四年八月廿七日卒六十九歳
法名泰心院惠山了覺日應

女子二人　直英室　一人早世

正方　直助
內藤主水正甫養子

女子
安藤彥四郎直元妻

直寛　八五郎
長門守從五位下
享保廿年十二月十六日叙任
明和五(四)年九月廿六日致仕
安永六年九月廿日卒六十歳
法名泰了院正隆貞覺日運

女子二人
一人早世
立花和泉守長照室

直孝　熊之助　帶刀
號虛悠

直著　大膳
飛驒守直喜養子

某　人四郎　早世

女子　早世

某　堅五郎　早世

直堅　英五郎　圖書
淡路守從五位下
明和五年十一月十八日叙任
安永八年十一月朔日卒四十一歳
法名天祐院治巖紹機

直鄉　千之助
實直寛三男
中務少輔從五位下
天明元年十二月十八日致仕
同三年六月廿四日改長門守
同四年閏正月十一日卒二十七歳
法名觀智院春山意覺日了

直晧　信丸　内藏　初種幸
實立花和泉守長照七男
從五位下内藏頭
天明五年十二月十八日叙任

女子二人
植村辨之助泰高妻
平野中務長務妻

直恒　寛次郎
市橋大和守長能養子

女子

女子二人
一人早世
水野兵庫忠侯妻離別
嫁細井隼人勝村

直鄉　千之助

直之
直景

女子 早世

直良 三郎四郎 三右衛門
飛驒守従五位下
寛文八年十二月廿七日叙任
元祿四年二月十五日卒四十九歳
法名總持院等岳宇興

直方 三五郎
今堀縫殿直芳祖

直定 三六郎
堀五郎左衛門直定養子

直宥 三四郎 三右衛門 式部
式部少輔従五位下
寶永六年三月七日叙任
正德元年六月八日卒四十七歳
法名道樹院廓然宗白

女子 早世

直上 長吉 久五郎
本多彦兵衛壽宜養子

女子 早世

增順 岩丸 民部卿
山城國八幡別當岩本防
寶永五年五月十二日卒

直央 三四郎 内匠
初直時
飛驒守従五位下
正德元年八月十八日叙任
享保五年四月廿九日致仕
寛保二年六月廿日卒五十五歳
法名本空院五山宗温

女子 早世

直意 鍋之助 喜内
堀三五郎直元養子

某 金次郎 早世

直恒 萬之助

某　小坊
天明三年七月廿一日卒

直衝　幾十郎　監物
大澤出雲守基珍養子

女子　早世

直恒　萬之助　式部
實直宥四男
遠江守従五位下
享保五年十二月十八日叙任
同十五年十月十日卒三十一歳
法名觀功院耆岳宗英

女子　早世

直舊　直四郎

女子　早世

直述　岸之助　正作
直右衛門　早世

直舊　直四郎　初直喬
實直英二男
出雲守従五位下
享保十六年十二月廿二日叙任
後改式部少輔
寛延元年六月廿日卒三十歳
法名俊㚆院顯外崇忠

女子　早世

女子
土岐伊與守頼煕室離別

直喜　鎚五郎

直喜　鎚五郎
實直恒二男
飛驒守従五位下
延享四年十二月十九日叙任
寶暦元年六月廿二日卒二十二歳
法名懿德院徹山宗献

舊氏　駒之助　與一郎　早世
家人松平彌一兵衛氏知養子

直嗣　左吉　久五郎　平次
本多主膳榮久養子

女子
武田越前守信利養子

直著　千之丞　大膳
實淡路守直英三男
大膳亮從五位下
寶暦元年十二月十八日叙任
明和五年四月廿一日卒三十八歳
法名完領院逸道宗俊

女子
本堂新三郎親常妻親常卒
嫁近藤登助壽用

直宣　直一郎
備前守從五位下
安永七年十二月十八日叙任
天明元年八月十日卒二十歳
法名天觀院啓道宗祐

著朝　千之丞

直知　千三郎

直興　幸三郎

著朝　千之丞
實直著二男
式部少輔從五位下
天明二年十月二十八日叙任

堀

○丹後守藤原直利は故丹後守直吉か嫡男にて寛文十一年の冬叙爵し（寛文五年六月八日はしめて見へ奉りしといふ）延寶四年十二月廿一日家を繼（越後國村松三萬石）寶永二年九月二十一日御奏者の事をうけたまはり寺社の奉行をかぬおなしき五年五月二十六日其職にかなはすしてやめらる正徳元年九月十六日致仕し（獨峯と號す）享保元年七月十日五十九歳にして卒すその子靱負直爲寶永五年四月二十八日初て見へまいらせ正徳元年父か致仕の日所領をたまふ（直爲は直利か二男なり兄の攝津守直常か病によりて籠居しけれは直爲をよつきとなりしなり）おなしき二年從五位下して左京亮に任し元文五年二月二十日致仕す（寛保三年三月廿三日卒す四十六歳）其子直太郎直堯享保十八年九月初て見參にいり父かゆつりをうけて家をつき叙爵して丹波守に任し（後丹後守）七十一歳にして天明五年十月二十九日身まかりぬ嫡子靱負直泰は寶暦四年閏三月朔日初てみへ奉り安永八年六月二日父に先たちて卒し二男信義三男長致四男直行五男成孝みな他にやしなはれけれは六男三十郎直辰をよつきとし安永八年十一月五日に初て見えたてまつり天明五年十一月家をつく（時に十五歳）ことし從五位下に叙し左京亮に任し兄靱負直泰か子三十郎直方をやしなふて子とす直方同しき六年三月十五日はしめて見へたてまつる

○長門守藤原直祐は肥前守直輝か長男なり寛文九年九月六日父か遺領を賜ふ（信濃國須坂一萬石餘）同き十年の冬叙爵して長門守に任し享保四年十月二十五日致仕しおなしき六年五月二十日六十七歳にして卒すこれよりさき一族左京亮直利か三男圖書直英にをのか女をあはせて嗣とす（長子伊織直富早世しけれは二男主殿直俊を嗣とせしか病によりて身しりそく）直英正徳二年三月二十一日はしめて見參し父直祐の致任せし日家をつくこの冬叙爵して從五位下淡路守になり享保十年五月朔日大番の頭になり十二年二月二十一日病によりて職を辭しおなしき二十年二月致仕して嫡子八五郎直寛に家をゆつり明和四年八月二十七日卒す六十九歳八五郎直寛享保十九年四月二十八日はしめて見へたてまつり父直英致仕の時家繼て後從五位下の長門守に任し延享三年正月十一日大番の頭になり寶暦元年十月十五日伏見の奉行にうつりおなしき八年公に見參のため江戸にまいりしか病にふしてまたかへりのほらん事かなひ難しとて辭し申せしかは

職ゆりしか明和四（五）年九月二十六日致仕す（安永六年九月廿八日六十歳にて卒す）其子圖書直堅寶暦十一年二月十五日初て見參し明和五年父につき叙爵して淡路守に任す安永八年卒す（十一月朔日四十二歳）其子堅五郎は早世して弟千之助直郷を養ひて世繼とす直郷ことし二月二十四日遺領をたまはり天明元年の冬叙爵して中務少輔になり（後長門守にあらたむ）同しき四年閏正月十一日二十七歳にして卒す嗣子内藏直晧は立花和泉守源長照か七男なり直郷病おもかりし時養ひて三月四日家つかす（時に廿五歳）あくる五年の冬従五位下に叙し内藏頭に任す

○飛驒守藤原直良は式部少輔直景か嫡男也寛文八年八月十日家を繼（越後國椎谷（一に上總國苅谷）一萬石）十二月叙爵して飛驒守に任し元祿四年に卒す（二月十五日四十九歳）嫡子三四郎直宥延寶三年二月初て見參し父に後れて家を繼寶永六年の春叙爵して式部少輔に任し正德元年六月八日身罷りぬ年四十七歳長子三四郎直時（後直央）元祿十一年六月はしめて見へたてまつり父か卒せし年の七月晦日遺領をたまはり叙爵して飛驒守に任し享保五年四月二十九日致仕す（寛保二年六月廿日五十五歳にて卒す）弟万之助直恒を嗣としてて家をゆつる直恒正德五年の冬初て見參し直時致仕の日家をつきことし従五位下の遠江守になり享保十五年十二月十日三十一歳にしてうせぬ子なかりければ甥直四郎直舊（直英の二男也）をよつきとす直舊おなしき二十六日遺領をたまはりあくる年の三月はしめて見へ參らせ十二月叙爵して出雲守に任し（後式部少輔）元文四年六月二十一日大番の頭となり延享二年九月朔日西城の少老にうつり寛延元年六月二十日三十歳にて卒す其子槌五郎直喜實は遠江守直恒か子なり延享四年十一月朔日初て見參しことし叙爵して飛驒守になり父かうせし年の八月十三日家をつき寶暦元年六月二十二日二十二歳にしてうせぬ男子なかしかは一族淡路守直英か三男大膳直著をして後とせん事を申せしよりことし七月遺領をたまふ十二月従五位下大膳亮に任しおなしき八年八月十五日大番の頭となり明和五年二條の城の守になりてのほりける道より病して四月二十一日山城國大津（大津の驛は近江國滋賀の郡也山城國としるせしはあやまりなり）の驛にして身まかりぬ三十八歳其子直一郎直宣ことし八月二十二日家をつき安永七年十一月はしめて見へ奉り十二月叙爵して備前守に任し天明元年八月十日卒す二十歳子なきによりて弟千之丞著朝して十月六

日家つかせらる著朝おなしき十五日襲封のかしこまり申てはしめて見參にいりあくる年の冬叙爵して式部少輔に任す時に十八歳

藩翰譜續編巻之七下

●伊達 賜松平

陸奥守綱村

田村右京大夫建顕（タツアキ）

伊達宮内少輔宗純

附

伊達美作守村和（ムラヨリ）

伊達遠江守宗利

●細川

越中守綱利

丹後守行孝

若狭守利重

豊前守興隆

●加藤

内藏助明友

●藤堂

和泉守高久

佐渡守高通

●森

大内記長繼

附

伯耆守長武

對馬守長俊

關備前守長政

伊達

藤原政宗

秀宗

忠宗

坂上宗良

綱宗

女子二人
一人早世
松平大炊頭繼政室

村匡　千五郎　早世

女子　遠江守村年室

某　菊次郎　武三郎　早世

綱村　龜千代丸　總五郎　初綱基
左近衞權少將陸奥守從四位下
寛文九年十二月九日叙任
元祿八年十二月十八日中將
同月廿八日從四位上
同十六年八月廿五日致仕改上總介
享保四年八月廿日卒六十一歲
法名大年寺旨山全提

村和ヨリ　稱伊達　鶴千代　織部　將監　上野　左京　初顯孝　村任
美作守從五位下
元祿八年十二月十八日叙任
同十二年九月廿六日籠居
享保七年六月廿九日卒六十二歲

宗贇ショ　辨之助　主馬　初基弘　宗紹
遠江守宗利養子

某　扇千代　早世

女子二人　共早世

吉村　助三郎　藤次郎
實家人伊達肥前宗房嫡男
侍從越前守從四位下
元祿九年十一月廿六日叙任
同十六年八月廿六日改陸奥守
同年十二月廿一日左近衞權少將
正德元年十二月十八日從四位上中將
寛保三年七月廿五日致仕
同月廿六日改左兵衞督
寶曆元年十二月廿四(七)日卒七十二歲
法名續燈院獅山元活

女子
實綱宗女
木多下總守康命室

女子二人　共早世

村風カゼ　益之助　右京

宗村　勝千代丸　總次郎　初久村
侍從越前守從四位下
享保十六年十二月廿二日叙任
同廿年十二月十六日左近衞權少將
寛保三年七月廿六日改陸奥守
延享四年十二月十九日從四位上中將
寶曆六年九月廿六日卒三十九歲
法名政德院忠山淨心

女子
稻葉內匠頭正甫室

女子
實久我中納言通名卿女
家人伊達助三郎村胤妻

女子二人
許嫁松平河內守定名早世
家人片倉小十郎村廉妻

女子　家人伊達安房基實妻基實死嫁家人伊達左兵衛村隆

村直（ナヲ）　熊之助　初基永　大藏　若狹　家人伊達式部宗勝養子

女子六人　家人伊達安藝村元妻　家人中村日向成義妻　一人早世　立花彈正貞晟妻　綱村養女　一人早世

某　菊之丞　早世

某　久米之丞　早世

女子　早世

某　吉十郎　早世

女子二人　共早世

女子　實家人伊達安藝村元女　家人石川宮內村弘妻

村景（カケ）　吉之助　六郎　出羽　和泉　實家人伊達安藝村元男　家人伊達上野家景養子

女子　早世

村隆（タカ）　右京　初村候　村勝　田村左京大夫村顯養子

某　早世

某　富之助　早世

村良（ヨシ）　民部　家人伊達近江村倫養子

女子
松平信濃守重茂室
母
有徳院殿御養女
實紀伊大納言宗直卿女

重村　義八郎　藤次郎
從四位下侍從兼美作守
寶曆五年九月廿八日敍任
同六年七月十八日改陸奥守
同年十二月十八日左近衛權少將
明和四年十二月十八日中將
同月廿八日從四位上

女子
許嫁松平肥後守容綏早世

女子
母
有徳院殿御養女

女子
酒井修理大夫忠貫室

某　總三郎　早世

女子三人
大膳大夫利壽室
井伊玄蕃頭直豐室
松平相摸守治道室

女子

祝村　式三郎　總次郎

某　仙三郎　早世

某　早世

某　早世

女子四人　共早世

女子

―利德（ノリ）　藤三郎　淡路
初村賢
土井大隅守利信養子

―女子
家人中村日向義景妻

―村倫　藤四郎　安藝
家人伊達因幡村胤養子

―某　早世

―女子　早世

―利置　藤六郎
土井大隅守利信養子

―某　松之
明暦元年七月廿七日卒

―女子四人
一人早世
許嫁稻葉大學正弘早世
松平出羽守治郷室
一人早世

―某　藤七郎　早世

―女子　早世

―正敦（マサアツ）　藤八郎　攝津
初村由
堀田若狹守正富養子

―女子　早世

―女子二人
伊達能登守宗信室宗信卒爲誠顯室
遠山和泉守方央室離別
嫁板倉越中守重高

―女子四人
分部左京亮光忠室
一人早世
泰顯室泰顯卒嫁村顯
一人早世

女子　早世

建顯（カチアキ）　稱田村　千勝　內藏　修理　初宗永
左京大夫從五位下
寬文十年十二月廿八日叙任後改因幡守
寶永五年正月廿七日卒五十三歲
法名德源院乾峰自明

女子

顯寬（ヒロ）　主殿
今田村主馬顯時祖

顯始（ハル）　右衞門
主殿顯寬養子

某　經千代　早世

女子
松平下野守信治室

某　春千代
元祿四年十月廿一日卒

誠顯（アタ）　小膳　助十郎　修理　初長信
實田村助助大夫顯當二男
下總守從五位下
元祿九年十二月廿二日叙任
享保十二年六月十六日卒五十八歲
法名龍潭院槐陰禪樹

女子
實主殿顯廣女
永井修理尙昌妻

泰顯　數馬　修理
實田村主馬顯當長男
享保十年八月廿日卒二十三歲

村顯（ムラ）　喜七郎　弁之助　內膳　初典顯
實伊達遠江守宗贇四男
隱岐守從五位下
享保十三年十二月廿一日叙任
後改左京大夫
寶曆五年八月三日卒四十九歲
法名靈鳳院性空玄理

女子
永井遠江守直種室

顯普（ミツ）　主馬
右衞門顯始養子

宗常（ムネツネ）　玄蕃

女子二人　共早世

某　他人之助　早世

女子四人
一人早世
大田原飛驒守友淸室
二人早世

女子
實陸奥守家人伊達安房村實女
土方近江守雄年室

女子　早世

村隆（タカ）　幸三郎　式部　右京
初村候　村勝
實陸奥守吉村五男
下總守從五位下
寶曆五年十二月十八日叙任
後改右京大夫
天明二年二月七日卒四十六歲
法名景德院賢巖道嶽

村資（スケ）　保之助　內膳
實伊達式部村良嫡男
從五位下左京大夫
天明二年十二月十八日叙任

某　政五郎

宗實（サネ）　千松
元和八年十二月左京大夫
寛永五年正月十三日依病籠居
正保元年七月十四日卒三十三歳
法名靈照院尺山宗珠

宗時（トキ）　伊豫松　小次郎
左京亮從五位下
寛永九年十二月廿六日叙任
承應二年五月廿九日卒三十九歳
法名嶺雪院涼山宗可

女子三人　共早世

宗利（トシ）　兵助
大膳大夫從五位下
承應三年十二月廿八日叙任
明暦三年十二月廿八日從四位下
寛文三年十二月廿八日侍從
改遠江守
元祿六年十一月十四日致仕
同年十二月十三日改大膳大夫
寶永五年十二月廿一日卒七十五歳
法名天梁院賢山紹德

女子
眞田伊豆守幸道室

宗贇（ヨシ）　主馬　初宗昭
實陸奥守綱宗三男
紀伊守從四位下
貞享二年十二月廿八日叙任
元祿六年十二月十三日改遠江守
同九年十二月廿二日侍從
正德元年二月十八日卒四十七歳
法名大玄院天山紹光

女子
宗贇室

宗相（スケ）　兵五郎
寶永六年正月七日卒十三歳

女子　早世

某　岩次郎　早世

女子　早世

村年（トシ）　伊織　初宗貞　貞淸　村昭
遠江守從四位下
正德五年十二月十八日叙任
享保十三年九月七日侍從
同廿年五月廿八日卒三十五歳
法名泰雲院宗山紹澤

女子二人　共早世

┃宗臣

┃某　兵助　早世
┃女子　早世
┃某　六松　早世
┃某　鐵千代　早世
┃某　金十郎　早世
┃某　富之助　家人伊達刑部完職養子
┃某　榮之助　早世
┃女子　京極若狹守高或室

┃村顯　內膳　田村下總守誠顯養子
┃女子　早世
┃某　百助　家人桑折丹波宗敷養子
┃女子　早世
┃宗恒　守之丞　家人桑折丹波宗敷養子
┃女子二人　共早世
┃某　千代之助　早世
┃女子二人　一人早世　家人伊達刑部宗職養子

村候　伊織
初村房　村隆　村候
政德　政敎
從四位下大膳大夫
元文二年十二月十六日敍任
寶延二年二月五日改遠江守
寶曆二年十二月十四日侍從

女子三人
一人早世
松平美濃守伊信室
一人早世

女子四人
實堀川兵部大輔廣公女
小笠原飛驒守信房室
二人早世
許嫁井伊章臺直尚直尚卒嫁丹羽加賀守
長貴離別嫁植村出羽守家利

德輝（ノリテル）　彈正
爲家人

女子二人　共早世

德興　內匠
山口兵庫承養子

德元　內藏　早世

村壽　兵五郎
從四位下大膳大夫
安永五年十二月十六日敍任

女子
牧野兵部少輔貞實室

某　少次郎　早世

├德風　内膳
　爲家人
　　├某　九十郎　早世
├村銘　伊織
　青木美濃守一新養子
　　├某　藤三郎　早世
├某　早世
　　├女子四人
　　　許嫁花山院中納言愛德卿早世
　　　許嫁花山院中納言愛德卿離別
　　　松平大和守直恒嫁
　　　二人早世
├女子　早世
├宗純　小次郎　宮内少輔從五位下　明暦元年十二月廿九日叙任　元祿四年七月廿一日致仕　寶永五年十月廿一日卒七十三歲　法名大乘寺鎭山宗護
├某　德松　早世
├女子二人　一人早世
　家人渡邊左兵衛首妻
├宗職モト　刑部
　爲家人
├女子　早世

某　岩松　早世

宗保（ヤス）　九十郎　主計　初宗義　宗重
能登守從五位下
元祿四年十二月廿六日叙任
同六年十月二日卒二十一歲
法名法性院智隨禪緣

女子二人
京極內匠高兼妻
池田織部由利妻

村豐（トヨ）　金之助　初宗合　成任
實家人伊達刑部宗職二男
左京亮從五位下
元祿十年十二月十八日叙任
正德二年八月十五日改和泉守
享保十年十二月二日改若狹守
元文二年六月晦日卒五十五歲
法名大淵院澤翁眞龍

成朝（シゲトモ）　右膳
家人久德半左衞門成祐養子

久定　三九郎　內記
繼家人恒川義右衞門久家

成要（ヤス）　六三郎　要人

村澄（スミ）　庄三郎　宮內
享保廿年九月十七日卒十七歲

村信　左京　初村冬
紀伊守從五位下
元文二年十二月十六日叙任
寶曆十三年九月八日致仕
明和二年二月廿一日卒四十八歲
法名環中院本融道玄

女子
戶澤上總介正諶室

義枝（シゲ）　熊之助　數馬　中務
上杉靭負知義養子

成房　卯之助　舍人

德行　河內　主馬　已八郎

某　豐松　早世

村賢（ヤス）　武一郎　左京
　從五位下和泉守
　寶暦十三年十二月六日叙任

　村高　直一郎　増之助　左衞門

　村芳　直松　分三郎

　女子二人

女子　南部左近信依室

成武　粂次郎　主膳

成壽（シケナカ）　秀之助

女子二人　上杉中務義壽妻
　小笠原玄蕃長有妻

某　保五郎　早世

女子
伊達舍人成房養女

常衣（ツネトキ） 與之丞 左仲
家人松田六郎右衛門常盛養子

伊達

賜松平　附　美作守村和

○左近衛權中將兼陸奥守藤原綱村は故陸奥守綱宗か子也幼名は龜千代といふ父綱宗萬治三年八月御氣色かうむりて致仕籠居の身となりしとき（綱宗正德元年六月四日七十二歲にておはりぬ）龜千代わつかに二歲なりしか領國ことゆへなく賜はり（陸奥國仙臺の城六十二萬石）一族伊達兵部少輔宗勝田村右京大夫宗良を召して龜千代をさなき間はうしろ見して國政を沙汰すへしと仰下され龜千代所領のうち三萬石（つゝ）をさきて二人にたまはりぬ（宗勝は後に罪かうむりしこと前篇に見へたり所領は綱基にかへし附らる）かくて龜千代寛文四年四月六日六歲にしてはしめて見えたてまつりおなしき九年十二月九日御所にまいりて元服し從四位下左近衛の少將に叙仕し陸奥守をかね御諱の字たまはりて綱基となのる（新藤五國光の御脇指をたまふ○のち綱村とあらたむ○寛文十一年綱基か家人原田甲斐宗輔執政の家に在て狼藉に及びし事あり其事前篇にくはしく見へたり）元祿八年弟左京村和に所領の地わかちあたふ（三萬石うちわけといふ）綱村ことし十二月左中將にすゝみて四位に上階し十六年八月二十五日致仕して上總介といふ享保四年六月二十日六十一歲にして卒す綱村子なかりしかは從弟藤次郎をやしなひ嗣子とす藤次郎は綱宗か第八の子伊達肥前宗房か長子なり元祿八年十二月二十七日綱村にやしなはれおなしき九年正月二十八日はしめて見參して十一月二十六日元服し從四位下の侍從兼越前守に任し御諱たまはりて吉村となのる（左文字の御刀をたまふ）おなしき十六年八月家督ゆつられて陸奥守にあらためことし左近衛の權少將を經て正德元年從四位上の左中將にのほる嫡子總次郎久村享保十一年正月二十八日八歲にして初見の事あり同しき十六年十二月元服して從下四位の侍從に任し越前守をかぬ御諱の字賜はりて宗村といふ（國信の御刀をたまふ）おなしき二十年四月二十七日御所の姬君（利根姬君と申す紀伊宗直卿の息女を御所のやしない君にせさせたまひしなり）を宗村か室家になしたまはるへしと仰下されしかは父吉村をはしめ一家の人々かしこまりおもふ事淺からすことし十一月二十八日宗村か元にむかへまいらす宗村やかて左近衛の權少將になりぬこの御ちなみによれるなるへし寬保三年七月二十五日吉村致仕して嫡子宗村に家をゆつるとの事とくよりのあらましなりしかと公におしませたまひけれはとかくためらひしかこのたひあなかちにこひ申てゆるされしなりかくて吉村左右衛督とあらため老をやしな

ひて寶暦元年十二月二十七日七(四)十二歳にてうせぬ越前守宗村父につきて陸奥守に改め延享四年十二月左中將に轉し四位の上に加階し寶暦六年五月二十六日三十九歳にして卒す姫君もこれよりさき延享二年閏十二月にうせ給ひぬ〔利根姫君の失せ給ひしは閏十二月六日なり法名は雲松院殿と申し仙臺の大年寺に葬る〕この御はらには女子のみありしかはおもひものゝはらにまうけたる男子を藤次郎とよひて嗣子にさためたり藤次郎寶暦二年四月朔日はしめて見參しおなしき五年九月二十八日元服して從四位下侍從兼美作守に叙任し御諱の字たまはりて重村といふ〔助光の御刀をたまふ〕あくる六年七月九日父か遺領をたまはりてことし左少將になり明和四年十二月四位の上の左中將にのほるはしめ父宗村かおほやけの御ちなみにつなかれしよりして御かへりみの他にことなることもありしはいふにおよはす今重村かみそちにもたらすしてかくなりのほりぬる事もこの御ひかりによれるにや嫡子總次郎天明五年十二月十五日はしめて見へまいらす〔時に十二歳〕

○美作守藤原村和は〔伊達と稱す〕陸奥守綱宗の二男初め左京といひしなり元祿八年七月六日兄綱村か所領わかち賜り〔陸奥國の内三萬石〕このとし叙爵す同しき十二年九月二十六日罪かうむる事ありて逼塞してゐたりしを〔此月九日の事なりしか村和外より家に歸る路次にて御小性組の番衆岡八郎兵衛に行あひたりみちのちまたなりけれは八郎兵衛おもはす村和〔美作守村和か邸は麻布に有岡八郎兵衛行あたりしは芝土器町なり此日八郎兵衛當番なりしなり此一件の事書記したる物に小笠原長門守忠次組頭神尾左兵衛谷中より村和か邸に馳つけ岡を宥てかへせしと此事を記るせし書に見へたり〕先にたちけるはしりの者のあはひに行かゝりしにはしりのもの八郎兵衛にとりかゝりけれは八郎兵衛いかりて腰刀をぬきてきりはらふこれを見て村和か下人ともむらかりよりてその刀をうばひとり狼藉に及ふを村和これをいましめんともせすこしをはやめて行過しかばあらかひし從者とも八郎兵衛をすてゝ主人にはしりつきぬ八郎兵衛いきまきて鎗をつとり跡をおひて村和か家の門につきいりけれは村和か家人とも周章して御目付の許に事のよしをいひ送る水谷彌之助天野傳四郎をはしめ番頭小田切土佐守北條右近大夫仁木周防守ならひに組頭等もおひ／＼に村和かもとにはせ行八郎兵衛をなためて宿所にかへりつこの事公に聞へけれは村和御けしきかうむりけり八郎兵衛も番衆をとゝめられて逼塞し從者ともは村和いましむへしとありしかは無禮せしもの三人の首をはねけり〕兄の綱村いかゝおもひけん村和か身のいとま賜りておのか所領にくたしけれはその所帶は綱村にかへしけり

○因幡守坂上建顯は〔田村と稱す○父宗良田村を稱する事前篇にみへたり〕隱岐守宗良か二男なり寛文四年十月二十八日はしめて拜謁すおなしき十年叙爵して右京大夫に任し延寶六年五月二十八日家をつく〔陸奥國磐井郡一の關三萬石○前篇に宗良か子宗永その子建顯かつかる家譜によるに建顯はしめ宗永といふ父子にはあらす〕元祿四年五月十八日奥詰衆となりあくる五年八月十五日御奏者となるおなしき七年八月二十一日弟主殿顯寛に廩米をわかつ〔七百俵〕寶永五年正月

二十七日に年五十三にして卒す其子助十郎誠顯實は一族助大夫顯當か二男也元祿九年三月二十八日はしめて見えたてまつり十二月從五位下下總守に任し父か身まかりし二月二十二日に遺領をたまふ享保十二年六月十六日卒す五十八歳男子なかりければ叔父主馬顯普か男修理泰顯を養ひて子とし泰顯享保元年八月九日謁したてまつり同しき十年の秋うせしかはまた伊達遠江守宗贇か四男内膳村顯をやしなひてよつきとす村顯か見へ奉りしは享保十二年の正月二十八日なり誠顯うせし年の八月十六日家繼ておなしき十三年從五位下隱岐守になり（後左京大夫とあらたむ）寶暦五年に卒す（八月三日四十九歳）其子を下總守村隆といふ陸奥守吉村か五男なりしをやしなひ嗣子となして寶暦三年六月はしめて謁し奉りおなしき五年九月二十四日家つきことし叙爵し年四十六にて天明二年二月七日にうせぬ村隆か後なくしておいなりし陸奥守重村か家人伊達民部村良（陸奥守吉村か八男なり）か子内膳村賚を子とし養ひことし三月二十九日遺領をたまはる村賚これよりさき安永七年十月十五日はしめて見參し家繼きて從五位下の左京大夫に任す（時に十六歳）

○侍從兼遠江守藤原宗利は（伊達と稱す）故の遠江秀宗か守三男也秀宗か長子左近大夫宗實病によりて籠居し次男左京亮宗時先たちてうせければ兵助宗利嗣子となりて慶安四年十一月二十二日はしめて見へ奉り承應三年從五位下大膳大夫に叙任し（後遠江守）明暦三年七月二十一日秀宗致仕して家を繼き（伊豫國宇和島の城七萬石）宮内少輔宗純に所領をわかつ（三萬石）宗利ことし從四位下して寛文三年侍從になり元祿六年十一月十四日致仕し寶永五年十二月二十一日七十五歳にしておはりぬ其嗣子主馬宗贇は陸奥守綱宗か三男なり貞享元年宗利にやしなはれて四月七日はしめて見參にいり明る年從四位下の紀伊守に任し寶永五年宗利かゆつりをうけて家を繼くはしめ宗贇か祖父秀宗致仕せし時五男宗純に所領さきあたへしかはこれより七萬石にはなりしかとも猶國持になそへたる人々のなみにかすへられてさらにことなるすちもあらすされは所領のうちにある所の私墾田を本領にくはへてそのかみのことくなし賜はらはやと申せしに元祿九年七月四日望のまゝにゆるされてふたゝひ本領十萬石になりぬことし十二月侍從にすゝみ正徳元年に卒す（二月十八日四十七歳）長男兵五

郎次男岩次郎ともに世を早うして三男伊織村年ことし四月十三日十一歳にして父につくいまた幼弱なりしかは公より野々山源八郎木下清兵衛を御使として所領宇和島に下され國務の樣をとはせらる（國目付といふ）村年正德四年三月二十八日はしめて謁したてまつりあくる年の十二月從四位下の遠江守に任し享保十三年の九月侍從に任すおなしき二十年所領にをもむきしか道にして病におかされ五月二十八日播磨國加古川のやとりにて終にむなしくなりぬ三十五歳なり嫡子伊織村候ことし閏三月二十八日はしめて拜謁し七月二十一日家を繼く（時に年十一歳）元文二年十二月從四位下の大膳大夫になり（後遠江守にあらたむ）寶曆二年侍從にすゝむその子兵五郎村壽安永五年十一月十五日はしめて見參し從四位下して大膳大夫に任す

○宮内少輔藤原宗純は（伊達と稱す）遠江守秀宗か五男なり（前篇には四男としるす）承應二年十月十九日はしめて拜謁す明曆元年十二月叙爵して三年七月二十一日所領を分ちたまふ（伊豫國吉田三萬石）元祿四年七月二十一日その子主計宗保に家ゆつりて致仕し寶永五年十月二十一日とし七十三にて卒す宗保貞享二年三月朔日はしめてまみへ奉り家繼て從五位下能登守に叙任し元祿六年に世を早くす（十月二日二十一歳）子なかりけれは一族刑部宗職か二男金之助村豐を子として家つかす（宗職は秀宗の七男なり）村豐ことし十二月遺領たまはりて十五日に謁し奉り十年に叙爵して左京亮になり（後和泉守又若狹守）元文二年に卒す（六月晦日五十五歳）長子宮内村澄は享保十八年はしめて見參し二十年の秋うせけれは次男左京村信嗣となりて元文元年正月二十八日見へたてまつり同しき二年八月二十四日父に繼十二月叙爵して紀伊守に任し寶曆十三年九月八日致仕し明和二年五月十一日四十八歳にして終る其子村賢寶曆十一年六月朔日拜謁し家繼て叙爵し和泉守に任す（時に二十三歳）

細川

源義季（ヨシスエ）——俊氏（トシウヂ）

公頼（キンヨリ）

頼貞（サダ）——顯氏（アキ）——業氏（ナリ）

滿經（ミツツネ）——持經（モチ）——成經（ナリ）

尚經（ナラ）——尹經——晴經（ハル）

輝經（テル）

忠興（オキ）

忠利

光尙（ナヲ）

女子八人
松平豐後守賴路室
酒井左衞門尉忠眞室
許嫁西園寺中納言公滿卿卒
若狹守利重養女
釆女正利昌室
家人淸水靱負勝貞妻
二人早世

某　與一郎
元祿十三年七月廿二日卒十四歲

吉利　千次郎　內記
初利章
侍從兵部大輔從四位下
元祿十六年十二月廿二日叙任
寶永三年四（九）月廿五日卒十八歲
法名圓妙院惠海宗遠

某　竹之助　早世

女子二人　早世

某　八三郎
正德四年十一月十七日卒

女子　早世

某　萬次郎　早世

女子　共早世

綱利　六丸
侍從越中守從四位下
承應二年十二月十一日叙任
元祿九年十一月五日左近衞權少將
正德二年七月十一日致仕
同四年十一月十二日卒七十二歲
法名妙應院雲岳宗龍

宣紀　竹之丞　主稅　初利武
實若狹守利重二男
侍從主稅頭從四位下
寶永六年四月九日改越中守
同十七年六月廿六日卒五十七歲
法名靈雲院桃谷義幡

女子一人
實若狹守利重女
久我右大臣惟通公室
實松平志摩守直丘女
松平采女正定基室離別

興彰（オキアキ）　長四郎　隼人
家人長岡圖書興行養子

某　龍五郎　早世

宗孝（タカ）　主稅　六丸　初紀達
侍從越中守從四位下
享寶十七年十二月六日叙任
延享四年八月十七日卒三十二歲
法名隆德院廓然義同

女子一人
松平讃岐守賴泰室
宗對馬守義如室

紀雄　六之助

女子二人
安藤對馬守信尹室

紀休　後稱長岡伊三郎　織部　淸記　初紀豐

女子三人
家人長岡助右衞門是福妻
大和守興里室
家人小笠原備前長軌妻

重賢 六之助　民部　主馬　初紀雄

實宣紀五男
侍從越中守從五位下
延享四年十一月廿日叙任
明和六年十二月十八日左近衛權少將
天明五年十月廿六日卒六十八歲
法名靈感院徹巖宗印

治年 胤次　初賢年

從四位下侍從兼中務大輔
安永三年三月廿三日叙任
天明五年十二月廿九日改越中守

女子

長門守與德室

某 長岡豪次　早世

利方（ミチ） 需一郎　大内藏

依病籠居
寶曆二年正月廿二日卒五十五歲

利寛（ヒロ） 右近

（治年子）

女子

某 應五郎　早世

女子

利重　七之助
若狹守從五位下
萬治三年十二月廿八日叙任
貞享四年八月五日卒四十二歲
法名通玄院玉峯紹圖

利昌　釆女
釆女正從五位下
元祿元年十二月廿九日叙任
正德五年六月三日卒四十四歲
法名靈源院湛然紹智

利武　主稅
越中守綱利養子

某　求馬　早世

女子三人
和泉守有孝室
越中守綱利養女
實越中守綱利女
松平志摩守直丘室

利恭　仁三郎
備後守從五位下
享保元年七月廿二日叙任
寬保二年二月七日致仕
寬延二年六月三日卒四十八歲
法名海雲院儉翁紹恭

利英（テル）　四郎五郎

利乙（クニ）　三次郎

利明　外記
津田外記正房養女

長員　十藏
小笠原外記長記養子

豐章　半平
宗家家人
木村半平豐持養子

女子二人
和泉守有孝養女

宗家家人
長岡帶刀豊之妻

利寛（ヒロ） 右近
實大內藏利方長男
釆女正從五位下
寛保二年十二月十八日叙任
寛延元年正月廿二日改若狹守
明和四年九月廿四日卒五十四歲
法名大慈院實翁紹眞

利久 主水

女子二人
利寛室
增山對馬守正孝室

利業 七之助 靭負
寶曆十三年十月晦日依病籠居
安永五年八月五日卒三十四歲

利意（モト） 鐵次郎 數馬 要人
寶曆十三年三月廿一日卒十九歲

利致（ユキ） 大三郎 將監
若狹守從五位下
明和六年十二月十八日叙任
天明元年五月廿五日卒三十二歲
法名大圓院悟嶽義了

利庸（ツネ） 熊五郎 民五郎 亘理
實利寛四男
從五位下能登守
天明元年十二月十六日叙任

利庸 亘理

等之（トモユキ） 造酒之助 新藏
家人
戸川忠右衛門等顯養子

某　龜之丞

某　富之助

立孝

行孝　宮松　帶刀
丹波守從五位下
承應二年十二月廿八日叙任
元祿三年六月四日卒五十四歲

某　宮松

女子三人　共早世

某　三之丞　早世

女子　許嫁小出玄蕃重興早世

有孝　熊次郎　致仕後治孝
和泉守從五位下
元祿三年十二月廿六日叙任
同十六年九月六日致仕

興生（オキナリ）　乙次郎　熊次郎　初有淸　興壽　壽孝
伊豆守從五位下
正德三年三月七日叙任
享保十五年七月三日改山城守

法名泰源院省石宗發

某　龜松　早世

女子
大炊御門内大臣經光公室

女子二人
京極甲斐守高求室
柳澤民部少輔保卓室

興里　源次郎
大和守從五位下
元文元年十二月十六日叙任
延享二年十月五日卒二十四歳
法名泰嶽院要叔紹玄

號宗貫後改紹貫
享保十八年六月十九日卒五十八歳
法名泰立院通峯宗貫

興武　熊之進　早世

女子　早世

興文（ノリ）　哲之助　龜之助　大之丞
初興周
實興生三男
豐前守從五位下
延享二年閏十二月十六日叙任
寶暦八年二月二日改中務少輔
安永元年正月廿五日致仕號月翁
天明五年七月五日卒六十三歳
法名幽巖院心海月翁

同廿年十一月二日致仕號梅山
元文二年正月七日卒三十九歳
法名恭壽院英譽梅翁

女子
實釆女正利昌女
織田肥前守輔世室

女子
越中守治年室

某　松三郎　早世

女子　早世

立禮（ヒロ）　與松
從五位下和泉守
安永元年十二月十八日叙任

孝應　雅樂助

興道（主計）

興文（哲之助）

總彬（フサヨシ）（左門）石川縫殿總相養子

女子 丹波長門守氏福室

冬菊（左膳）

女子 難波少輔宗功室

立之（與松）

頼春（ヨリハル）—頼有（アリ）—頼長（ナガ）

持有（モチ）—敎春（ノリ）—常有（ツネ）

政有（マサ）

元有（モト）

藤孝（タカ）

興元（オキモト）

興昌（マサ）

女子

女子

板倉伊豫守重同室離別嫁興誠

某　萬千代

貞享三年三月十三日卒

女子二人

若狹守利重室

小笠原佐渡守長亮室

興貞　源次郎　大學

寶永六年二月廿八日卒十七歲

興隆　兵千代　市正

豐前守從五位下

正保三年十一月晦日敍任

元祿二年閏正月十四日致任號宗閑

同三年正（四）月廿一日卒五十九歲

法名法雲院徹心宗閑

興榮（ナカ）　萬千代　初興英　玄蕃

長門守從五位下

寶永六年三月十八日敍任

享保十三年十一月十二日致仕

元文元年十一月十九日號岫雲

同二年七月十九日卒八十歲

法名鳳泉院岫雲紹泰

興誠（サネ）　主馬

實姊小路權大納言公量卿二男

正德五年八月廿一日依病籠居

享保十三年九月廿日卒四十一歲

法名偃溪院滴巖法水

泰和（マサ）　權之助
加藤平内直泰養子

興虎　武三郎
乏蕃頭從五位下
享保十二年十二月廿一日敍任
元文二年二月十一日改長門守
同年十二月廿一日卒二十八歲
法名松林院乾德全梁

興晴　辰十郎
從五位下乏蕃頭
寶曆二年十二月十六日敍任

某　豐之助　早世

興德　喜十郎

行和（マサ）　健之丞　早世

德隣（ノリチカ）　繁五郎

女子二人
山名小太郎義方妻
堀内藏頭直晧室

清昭（アキ）　敏松
大田原賴母清貞養子

某　恒次

女子

細川

〔左近衞權少將兼越中守源綱利は肥後守光尙か嫡男なり幼名を六丸といふ正保二年十一月十一日六歳にして御所にまいりはしめて見えたてまつる慶安二年十二月二十六日父光尙卒しけるとき六丸わつかに七歳なりしかは光尙終りに臨て領國を公にかへしいれん事を申おきたりしにあくる三年四月十八日領地ことに故なく六丸に賜りこの時節の老長岡式部おなしき勘解由を御所にめして仰下されけるは光尙年わかくしてうせけることいと不便におほしめされ肥後は西海の要地にしてことに國もひろし六丸いまた幼弱なれは他にうつらすへけれとも曾祖忠興より此かた世に忠貞をあつくし仕へたてまつり光尙終りにのそみて申せし處も奇特なるによりてそのまゝに賜はりぬ家人等心を同しうして六丸をおふしたつへし小倉侍從忠政（爰にいふ小倉侍從忠政朝臣は小笠原右近將監忠興朝臣の事なるへし此朝臣寛永九年十一月小倉へ封せられ寛文三年十二月侍從に任せられ同しき七年に卒す又光尙朝臣の父忠利朝臣の室は兵部大輔秀政の女にて忠眞朝臣の妹なれは光尙朝臣の母方の伯父なり）は隣國ことにうとからぬあはひなれはよりて領國に行向ひて家人等と事をはからへと仰下されぬまた御使をも下されて國政をとはせらるへしなとかすかすかたしけなき仰を賜りけり（家譜にこれよりさき光尙病重りしときこしめされて酒井讃岐守忠勝してとはせられしに光尙申しけるは大國賜はりし身させる奉公もつかうまつらすいまゝ身まかりなんとすされはいとけなき子ともに傳へん事おもひもよらすなからん後は領國をはかへし奉りなんいとけなきものともひと〻なりなはにあひのかたにめしつかはれんはその上の恩なかへしといふ死にのそみては誰も後の事をこそいへこれは公の事をはかりて私におよはさゝる心さし他にことなれは殊に御感ありてかく本領のまゝにて家つかせらるといふ）やかて御使を熊本にくたされて國政をおきてさせたまふ承應二年六丸十一歳におよひしかはさき〳〵の例に任せ十二月十一日御所にめして元服の式あり從四位下の侍從になされ御諱字賜ひて越中守綱利とめさる（貞宗の御刀をたまふ）寛文六年七月二十一日弟若狹守利重に所領をわかちあたふ（三萬五千石内わけといふ）元祿九年十一月五日綱利左近衞の權少將に進む同しき十年六月十四日弟若狹守か二男主稅利武に采地（五千石）をわかちあたふ正德二年七月十一日綱利致仕しおなしき四年十一月十二日七十二歳にして卒す長男與一郎元祿八年二月十五日はしめて見えたてまつりしかおなしき十三年にうせけれはおなしき十五年九月十五日次男內記を見參にいれてあくる十六年十二月廿二日元服し四位の侍從兼兵部大輔吉利といふしかるにこれも寶永三年九(四)月廿五日先たちて

うせぬ外に子なかりしかはおなしき五年正月十九日をい主税利武をよつきにさためておなしき六年四月十八日元服し従下の四位して侍従兼主税頭になり御諱字賜はり宣紀とあらため名のる（貞宗の御刀を賜ふ）宣紀正徳二年家督ゆつられてのち越中守に改む享保十七年六月二十六日五十七歳にして卒す男子三人みなうせて六丸紀達四男にてよつきとなる父かうせし頃は熊本に居たりしをめしくたされて八月二十五日遺領をたまはりことし十二月六日元服し従下四位に叙し侍従兼越中守に任し御諱の字たまはり宗孝とあらため名のる（近常の御刀をたまふ）延享四年八月十五日宗孝おもまさるわさはいにかゝりぬそのゆへは月なみの拝賀ある日なれは御所に出仕せしに板倉修理勝倹もまうのほりしかとのゝうちにてにはかに心くるひて宗孝にきつてかゝりあまた所手おはせけれは御所にもきこしめしおとろかせたまひさま〳〵いたはりみくすりなとたまはりていそき家におくりかへさせたまふしかれともいた手なれは醫藥しるしあらすしておなしき十七日ついにむなしくなりぬ三十二歳なり（板倉勝倹を其座にて水野監物にめしあつけられしか宗孝うせけれはとかうにおよはす死をたまはりぬ）いまた子もなかりしかは弟主馬紀雄をよつきとして十月四日家つかせらる十一月二十日紀雄元服して従四位下侍従に任し越中守をかね御諱の字たまはりて重賢とあらたむ（青江の御刀を賜ふ）明和六年十二月十八日左少將にすゝみ天明五年十月二十六日卒す六十八歳（重賢國を治ろ事三十九年政務に心をいれしかは士民なつきしたひて家足人足しとその言行を書しるして銀臺遺事といふ）その子胤次賢年安永二年十二月十五日はしめて見參しあくる三年三月二十三日元服し四位の侍従して中務大輔をかね御諱の字賜はりて治年といふ（康春の御刀をたまふ）父かうせし年の十二月十二日家をつき越中守になる

○若狹守源利重は肥後守光尙の次男也萬治二年八月十三日はしめて拜謁し同しき三年に叙爵す（寛永二年七月廿一日兄の綱利所領三萬五千石をわかちあたふ貞享四年八月廿五日卒す四十二歳）其子采女利昌貞享元年七月二十三日はしめて見參しおなしき四年又遺領をたまふ（九月廿七日）元祿元年叙爵して采女正に任し正德五年六月三日四十四歳にして卒す長子大内藏利方は病者なりけれは二男仁三郎利恭嗣となる利恭正德五年七月二十七日父の遺領たまひて享保元年叙爵して備後守になり寛保二年二月七日致仕す（寛延二年六月三日卒す四十八歳）其子采女正利寛は大内藏利方の男なり享保十五年十

一月十五日はしめて拜謁し父か致仕の日家をつくことしの冬敍爵し明和四年九月二十四日卒すとし五十四嫡子利業は病によりて籠居し次男利意早世しけれは三男將監利致五月十六日父につきおなしき六年九月十五日はしめて見參しことし從五位下の若狹守になり天明元年五月二十五日三十二歲にして卒す子なかりけれは弟丑理利庸を嗣とす利庸五月二十一日兄か遺領をたまひ十二月敍爵して能登守に任す 時に二十八歲

○丹後守源行孝は中務大輔立孝か嫡男なり初めは帶刀といふ肥後守光尙か所領をわかち領し正德二年八月四日はしめて見えたてまつり 肥後國うちの地三萬石內わけといふ光尙行孝か家譜ともにことし所領をわかつといふてその月日はおなしからす前篇には行孝か父立孝うちの地をわかち領し正德三年閏五月十一日卒しその子帶刀行孝つくといふ日記を按するに正德三年八月四日細川帶刀か御禮申せし事をのせて父中務か家繼しによるとしるさすさらは父立孝これよりさき所領ありしと見へたり前編にのふる所よしとすへきにや ことし八月四日はしめ拜謁承應二年從五位下の守に任し元祿三年卒す 六月四日 五十四歲 三男熊次郎有孝 兄二人早世せしなり 貞享元年七月二十三日はしめて見參し又行孝卒せし年の八月十日家をつきことし敍爵して和泉守になる元祿六年正月二十八日奥詰衆となりおなしき十四年五月十二日ゆるされて十六年九月六日致仕し 享保十八年六月十九日五十八歲にして卒す 其子乙次郎

興生五歲にして家をつき正德二年九月朔日はしめて謁見し同しき三年從五位下の守に任し享保二十年十一月二日致仕し元文二年正月七日三十九歲にして卒す其子源次郎興里寛保十九年十一月朔日はしめて拜謁し父興里致仕していへをつき元文元年從下の五位して大和守になり延享二年卒す 十月五日 二十四歲 男子なかりしかは舍弟大之丞奐文よつきとなりてことし十二月兄か遺領をたまはり敍爵して豐前守に任し安永元年正月二十五日致仕し 天明五年七月五日卒す六十三歲 其子與松立禮に家をゆつる立禮明和八年二月十一日はしめて拜謁し 時に十七歲 父のゆつりをうけし年從五位下の和泉守になる嫡子を與松立之といふ

○豐前守源興隆は玄蕃頭興昌か嫡男なり 寛永十年六月父か遺領賜はる常陸國茂木の地一萬六千二百石餘その後元祿の頃領地のうち加へられ一萬六千三百石餘となる 正保三年敍爵し元祿二年閏正月十四日致仕す 同しき三年四(正)月廿一日卒し五十九歲 嫡子玄蕃興榮寛文六年四月十八日はしめて見參し父か致仕の日家を繼き寶永六年從五位下長門守に任し享保十三年十一月廿一日致仕す 元文二年七月十九日八十歲にして卒す 興榮男子二カ三人みな世を早くしけれは姉小路亞相藤原公量卿の二男主馬興誠をやしなひをのか女にあはせてよつき

に定めしに病ありて引籠りけれはその子武三郎興虎を嗣とす興虎享保六年五月九日はしめて拜謁し祖父のゆつりをうけそのとしの冬從五位下して玄蕃頭に任し（後長門守）元文二年十二月二十一日二十八歳にして卒す嫡子辰十郎興晴あくる三年二月十六日父か遺領賜はり（時に三歳）寶曆二年二月十五日はしめて拜謁しことし從五位下の玄蕃頭になる嫡子喜十郎興德なり

加藤

藤原明成（アキナリ）

明友　孫三郎
内藏介從五位下
寛永十六年十二月晦日敍任
天和三年十二月七日卒六十三歲
法名皆足院了知

女子二人
青山大膳亮幸利室
溝口伊豫守政胤室

明英（ヒデ）　孫太郎
佐渡守從五位下
貞享二年十二月廿八日敍任
元祿十年四月十九日改越中守
正德二年正月二日卒六十一歲
法名寥々院宗理

政親　帶刀
溝口伊豫守政胤養子

明治　内匠

女子三人
木下伊賀守俊量室
三宅備後守康利室
許嫁本多伊豫守忠統卒

某　甚之助
元祿十五年七月三日卒

明治（ハル）　内匠
實明友三男
周防守從五位下
元祿六年十二月十八日敍任
正德元年十二月一日卒四十七歲
法名是眞院

嘉矩　左膳
和泉守從五位下
正德二年十二月十五日叙任
享保九年九月九日卒三十二歳
法名覺音院宗璜

明喬（タカ）　虎之丞　織部　内匠
初稱松平後復加藤
享保十四年九月十五日卒三十三歳

女子
實駿河守明教女
水野大炊頭忠昭室

女子
永井伊賀守直陳室

明經　孫三郎
伊勢守從五位下
元文三年十二月廿八日叙任
延享三年八月廿九日卒二十四歳
法名通入院宗甫

某　左門　早世

某　富之助　早世

女子
長澤壹岐守資顯妻

明策（カス）　虎松
元文五年八月十四日卒十五歳無嗣家絶

女子
明照養女

明熈　一學
實加藤駿河守明教二男
豐後守從五位下
延享三年十月十八日叙任
寛延二年正月十三日改佐渡守
明和四年七月朔日改相模守
同年十月十六日卒四十四歳
法名興眞院宗覺

女子 實明經女 明堯室

某 幾之助
寶曆十一年五月廿八日卒

明堯（タカ） 萬助 孫太郎
實松平遠江守忠名二男
能登守從五位下
寶曆十二年十二月十八日叙任
明和四年十二月八日改伊豫守
安永七年五月十日致仕
天明五年八月十日卒四十六歲
法名大光院宗演

明陳（ノリ） 駒吉 孫八郎
實明淵三男
能登守從五位下
安永五年十二月十六日叙任
同九年十二月三日改佐渡守

明允（マサ） 龜吉 孫太郎

女子三人
梅小路宰相定福卿室
冷泉中納言爲榮卿室
松平兵庫頭直行室

明陳 孫太郎

明朝 山之丞

明旨 陽之助

熈峯 縫殿丞
京都淸水寺執行寶性院

加藤

○内藏介藤原明友は式部少輔明成か嫡子なり寛永十六年十二月從五位下に叙すおなしき廿年五月三日父の明成所領陸奥國會津の地（四十三萬石）を收公せられし時（事は前篇に見へたり）明成か父左馬介嘉明さしも舊功ありし家なれは一旦にたへん事をおしませたまひ明友に一所懸命の地たまはりて（石見國吉長の地一萬石）家つかせられ父明成も所領に住して病をやしなふへしと仰下されたりこの丶ち明成年ころ奉公の志をあらはしたれは天和二年六月十九日近江國水口の城をたまはり一倍の地くはへらる（あはせて二萬石）これもなほ祖父か餘烈によるところそときこへし同き三年九月十一日鴈の間祇候の衆にくはへられしかいくほとなくして卒す（十二月七日六十三歳）長子孫太郎明英これよりさき寛文五年十一月初てまみえたてまつり貞享元年二月十二日家つきてあくる二年の冬從五位下佐渡守に叙任し（後越中守にあらたむ）元祿二年八月三日御奏者の事をうけたまはり寺社の奉行をかねあくる三年十月二十一日少老の職に補せられおなしき八年五月下野國壬生の城にうつり地くはへられ（五千石なくはへ合せて二萬五千石○松平右京大夫輝貞にかはる）正德元年十二月少老の職を辭してあくる二年正月二日六十一歳にして卒すその子甚之助先たちてうせけれは弟周防守明治貞享のはしめめし出されて中奥の御小性にありけるを元祿十五年八月十三日やしなひて嗣子とすこれも先たちて卒す其子左膳嘉矩寶永四年八月はしめて謁したてまつり父の明治うせしとき正德二年二月二十三日家をつき（この時帝鑑の間の衆となる）舊領近江國水口の城にうつり（鳥居伊賀守忠英にかはる）十二月叙爵して和泉守に任す享保九年五月舍弟松平織部（外祖の氏を稱せしなり）明喬に廩米をわかちあたふ（千俵内わけといふ）ことし九月九日嘉矩三十二歳にして身まかりぬ嫡子孫三郎明經十一月二日父につき元文三年十一月朔日はしめて謁したてまつり從五位伊勢守になり延享三年八月二十九日卒す歳二十四子なかりしかは去年の秋一族駿河守明敎か二男一學明熙をやしなひて嗣とし見參にいれて從五位下の豐後守に任す（後佐渡守相模守）ことし十月二十三日父か遺領をたまふ明和四年十月十六日四十四歳にして卒す明熙はしめ子なかりしかは寶暦十一年十一月二十六日松平遠江守源忠名か二男萬助明堯を女にあはせてよつきとす明堯寶暦十二年四

月十五日はしめて拜謁し叙爵して能登守に任し父かうせし年の十二月七日家をつき安永七年五月十日致仕し天明五年八月十日四十六歳にして終れり明堯も子なかりけれは明煕か子孫太郎明陳を嗣とし安永五年十二月はしめて見えたてまつり叙爵して能登守に任す後佐渡守明堯致仕して家を繼時に十七歳

藤堂

藤原高次

高久　一作大助丸　大助
和泉守從四位下
承應三年十二月廿六日叙任
寛文九年十二月廿五日侍從
元祿八年十二月十八日左近衞權少將
同十六年四月廿九日卒六十六歲
法名了義院實親高顯

女子二人
京極刑部少輔高和室
安藏式部少輔重之室

高睦チカ　庄助　初高近
實高次五男
大學頭從四位下
貞享二年十二月廿八日叙任
元祿十六年十二月廿一日侍從
寶永五年五月廿二日改和泉守
同年十月九日卒四十二歲
法名大亨院獨山高愼

女子　早世
實酒井雅樂頭忠清女

女子　早世
實備前守高賢女

高敏　正助
實佐渡守高通三男
大學頭從四位下
寶永四年十二月廿二日叙任
同五年十二月二日改和泉守
同月十八日侍從
享保十三年四月十三日卒三十六歲
法名大輪院智月高映

某　大助　早世

女子　早世

高治　幸之進　大膳

實家人藤堂出雲高明二男
初佐渡守高陳養子
大膳亮從五位下
享保八年十二月十八日叙任
同十三年六月十九日改大學頭
同年十二月廿一日從四位下
同十五年十二月十八日侍從
同廿年八月二日卒三十歲
法名長空院智風高達

高豐　出雲　大膳
致仕後高朗

實家人藤堂出雲高武長男
初繼庶流
大膳亮從五位下
享保十三年十二月廿一日叙任
同廿年九月廿一日改和泉守
同年十二月十六日從四位下
元文元年十二月十六日侍從
延享四年十一月朔日左近衛權少將
明和六年二月九日致仕
同年二月五日改中務大輔
天明五年四月十日卒七十三歲
法名孝讓院經山高綸

高般　兵部

女子
松平越後守長孝室

女子
實家人藤堂出雲高武女
伊勢國一身田專修寺門跡
圓猷附第圓起室圓起卒嫁
酒井大和守忠大

高般　兵部
實高治男
初家人藤堂出雲高武養子
大學頭從四位下
寶曆二年十二月十六日叙任
同四年七月六日卒二十四歲
法名本寂院義洞高明

女子
許嫁酒井河內守忠得

高悠　斧千代

高敦　初次郎
佐渡守高稚養子

高朶　左京
大膳亮高敦養子

高悠（ナカ）　斧千代　與右衛門
實高豊二男
大學頭從四位下
明和三年十二月十九日叙任
同六年三月五日改和泉守
同年十二月十八日侍從
同七年閏六月二日卒二十歳
法名到岸院圓應高德

高通　學助
佐渡守從五位下
萬治二年十二月廿七日叙任
元祿十年八月九日卒五十四歳
法名勝光院松月龍吟

高敦　初次郎
實高豊三男
初佐渡守高雅養子
從五位下佐渡守
寶暦十二年十二月十八日叙任
明和四年七月三日改大膳亮
同七年八月十八日改和泉守
同年十二月十六日從四位下
安永元年十二月十八日侍從

女子
實佐竹右京大夫義處女

某　岩之助　早世

女子二人
清水谷中將公美室
一人早世

高興　彈正
左京亮高柔養子

女子二人　一人早世
加藤遠江守泰候室

高崧（タケ）　五瀬千代　大學

女子

高兌（サハ）　庚千世

女子

-某　鶴松　學助　早世

-女子　早世

-高敏　正助
和泉守高睦養子

-某　萬吉　早世

-高堅　正次郎　圖書
元祿十年十月五日繼高通
備前守從五位下
元祿十年十二月十八日叙任
正德五年六月十四日卒六十五歲
法名顯輝院心峰宗覺

-高陳　主水
主水正從五位下
正德五年十二月十八日叙任
享保三年六月十四日改佐渡守
同八年九月十三日致仕
同十三年六月十五日改備前守
同十七年六月十四日卒三十二歲
法名聖諦院廓然義空

-女子二人　和泉守高久養女
一人早世

-高治　幸之進　大膳
實宗家家人藤堂出雲高明三男
大膳亮從五位下
享保八年十二月十八日叙任
同十三年六月十一日繼和泉守

高豐　出雲　大膳
實宗家家人藤堂出雲高武長男
大膳亮從五位下
享保十三年十二月廿一叙任
同廿年九月廿一日繼大學頭高治

高雅　幸次郎
實宗家家人藤堂出雲高武二男
佐渡守從五位下
元文三年十二月十八日叙任
寶暦十二年九月廿日卒四十二歳
法名元學院慈達諦岸

高敦　初次郎
實和泉守高豐三男
從五位下佐渡守
寶暦十二年十二月十八日叙任
明和四年七月三日改大膳亮
同七年閏六月廿六日繼和泉守高悠

高朶　アタ　左京
實和泉守高豐四男
左京亮從五位下
明和七年十二月十六日叙任
安永四年十二月廿八日致仕

高興　彈正
實和泉守高豐五男
彈正忠從五位下
安永四年閏十二月廿八日叙任
同六年三月十二日卒二十六歳
法名威德院巖淨自棲

高衡　由七郎
實宗家家人藤堂出雲高周長男
佐渡守從五位下
天明元年九月五日叙任
同年十月九日卒十八歳
法名德粲院照明行源

高矗　ナヲ　柔次郎
實高周二男
從五位下佐渡守
天明五年十二月十八日叙任

女子二人
伊勢國一身田專修寺門跡堯圓室
安藤式部少輔重之養女

基恒 七助
大澤兵部大輔基将養女

女子
京極刑部少輔高和養女

高近 庄助
後高睡

藤堂

○左近衞權少將兼和泉守藤原高久は大學頭高次か長子幼名は大介といふ七歳の時正保元年三月三日始て見えたてまつり承應三年從四位下に叙し和泉守に任し寛文九年九月十九日父高次致仕しけれは家をつき（伊勢國安濃津三十二萬三千九百石餘此うち佐渡守高通に五萬石正次郎高賢に二千石をわかつ内わけといふ）ことし侍從して元祿八年左少將にすゝみおなしき十六年四月二十九日六十六歳にして卒す子なかりけれはこれよりさき弟庄助高睦をやしなひて世つきとす高睦は高次か第五の子なり貞享二年十月十三日謁したてまつりこの年從四位下の大學頭となり（後和泉守）高久卒し家をつき（この家の例にて家つきしときに先祖の忠功をおほしめされていよ／＼心をいれてつかへまゐらせよとの仰をかうむるそのかみ高虎か恩遇の他に異なりし餘波のいまものこれるなるへし）やかて侍從にすゝみ寶永五年十月九日に卒す年四十二これも子なかりしかは兄佐渡守高通か三男正助高敏を子とし養ふ高敏去年の冬從四位下に叙し大學頭に任しことし十一月二十五日高睦か遺領たまはりて和泉守にあらためやかて侍從に任し享保十三年四月十三日三十六歳にてうせぬ大膳亮高治は一族にて家人なりし藤堂出雲高明か子なりはしめ佐渡守高陳か家つきしか高敏うせて後なかりしかは六月十一日本家をつき（大學頭にあらたむ）やかて從四位下に叙し同しき十五年侍從になり同しき二十年八月二日三十歳にして卒しけれは九月二十一日支族大膳亮高豐よつきとなりて家を繼く高豐も家の老藤堂出雲高武か長子なりしを高治宗家にうつりし時おのか家は高豐してつかせけるにいくほとなくて高治うせけれはまた本家にうつりて享保二十年九月二十一日遺領をたまはり和泉守になることし從四位下に叙しあくる年侍從に任す延享四年御即位の禮をおこなはれし時御使をうけたまはりて京にのほり事はてて左少將に任せらる明和六年二月九日病によりて致仕し（後中務大輔高朗といふ）天明五年四月十日七十三歳にてをはるはしめ高治男子一人ありけれとも幼弱なれは家人出雲高武にとらせて高豐して家つかせけるにかの男子おひたちて兵部高般といふすちめなれは高豐よひとりて嗣子としおのか子斧千代高悠を高般かやしなひにさためたり寶曆二年九月朔日高般はしめて見え奉り十二月從下四位の大學頭になる然るにおなしき四年七月六日世を早うす二十四歳なりこれによりて斧

千代高悠世繼となり與右衛門とあらため明和三年八月十五日はしめて見えたてまつりことし從四位下の大學頭に任し（後和泉守）おなしき六年父か家ゆつられて侍從になりあくるとし閏七月三日卒す年わつかに二十歳子なかりけれは弟佐渡守高嶺（初は高敦）兄につく高嶺もはしめ支族佐渡守高雅か家繼しかまた宗家に移りて和泉守にあらためやかて從四位下にのほり（時に三十歳）安永元年侍從に任すその子大學高崧

○佐渡守藤原高通は大學頭高次か二男なり明暦二年三月十五日初めて謁したてまつり萬治二年叙爵し寛文九年九月二十九日父か所領をわかち領す（五萬石○伊勢國一志郡にして新に地をひらき久居と號し居所とす）元祿十年八月九日五十四歳にして卒すその子正助高敏いまたいとけなかりしかは十五歳にならんまては弟の圖書高堅（すなはち正次郎か事）に所領ゆつらむ事を望みけるに十月五日望のまゝにゆるされてをのか所領をもあはせ領す（これより五萬三千石となる）ことし十二月叙爵して備前守に任し正德五年六月十四日六十五歳にしておはりぬこれよりさき嗣子高敏は宗家のよつきとなりしかは高堅か嫡子主水高陳正德二年三月二十二日はしめて見參し父かうせし年の八月六日遺領をたまはり十二月從下の五位して主水正になる（後佐渡守にあらたむ）高陳いまた年わかゝりしかともいたはる所ありけれは享保八年九月十三日致仕し宗家和泉守か家人藤堂出雲高明か三男幸之進高治を子としやしなひて家つかす（高陳享保十七年六月十四日三十二歳にして卒す）高治ことし叙爵して大膳亮に任し同しき十三年六月十一日宗家和泉守高敏か家つきしかはをのか家は出雲高豐してつかせたり高豐か本家の家人出雲高武か子なり高豐にかはりしは叙爵して大膳亮になるしかるにおなしき廿年本家をつきしによりて十月十一日弟藤堂幸次高雅に高豐前領賜はる高雅元文二年二月二十八日はしめて謁見しあくる三年從五位下の佐渡守に任し寶暦十二年九月二十日卒す四十二歳なり子なかりしかは和泉守高豐か三男初次郎高嶺十一月二十日家つきてやかて叙爵して佐渡守になる（後大膳亮）明和七年六月二十六日これも宗家をつきしかは弟左京高朶その所領をゆつられ（高豐四男なり）高朶九月七日兄につき十二月從五位下の左京亮に任す病者なりけれは安永四年十二月二十八日致仕す（時に年三十八）これよりさき弟彈正高興を嗣とす高興家ゆつられてのち叙爵して彈正忠に任しおなしき六

年三月十二日二十六歳にてうせぬいまた子あらさりけるゆゑ宗家の家人藤堂出雲守高周か長男山七郎高衡を後として六月五日遺領をたまひぬ高衡おなしき八年二月朔日はしめて謁見し天明元年九月五日従五位下佐渡守になりて月をこへて卒す年十八十二月十一日今の佐渡守高矗継くこれも高周か子にて高衡か弟なりおなしき五年十月はしめて見えたてまつりて叙爵す廿一歳

森

源忠政

重政 大膳亮 廿六歲早世

女子四人 關民部少輔成次室 池田備中守長吉室 松平左衛門督忠繼室後嫁鳥居左京亮忠政 森左近某妻

某 虎松丸 早世

忠廣 侍從右近大夫從五位下 同十年八月廿二日卒三十歲 元和元年十二月廿七日敍任 寬永二年八月十九日從四位下

女子 本多能登守忠義室

長繼 二世五世 兵助 內記 實關民部少輔成次嫡男 大內記從五位下 寬永十一年十二月廿八日敍任 同十二年十二月廿九日從四位下 同十七年十二月廿九日侍從 延寶二年四月廿六日致仕 元祿十年八月二日式部衆利以狂疾廢故長繼再立 同十一年六月十九日再致仕 同年七月十一日八十九歲 法名長繼院靜林道岳

某 千助 早世

忠繼
美作守從四位下
承應三年十二月廿六日叙任
延寶二年二月廿八日卒三十八歲
法名靈光院義海仁功

女子
早世

某
兵吉　早世

長成
兵三郎

女子二人
松平兵部大輔昌親室
一人早世

某
兵部　早世

三世
長武
兵吉　伯耆守從五位下　萬治三年十二月廿八日叙任　延寶二年十二月廿七日從四位下　後爲別家不二世而絕
元祿九年五月十八日卒五十二歲　法名圓明院碧雲鐵山

四世
長成
兵三郎　萬右衞門　美作守從四位下　貞享三年十二月廿六日叙任　元祿八年十二月十八日侍從
同十年六月廿日卒二十七歲　法名雄峯院賢仲義英

女子二人
一人早世
關備前守長政養女

長俊
松之助　對馬守從五位下　延寶三年十二月廿六日叙任　正德五年七月廿七日致仕號快翁山
享保廿年六月四日卒八十七歲　法名長俊院快翁

女子　鳥居左京亮忠常室

某　大吉　早世

長治　千菊　大藏
闕備前守長政養子

女子五人
一條內大臣冬房公室
家人森采女三隆妻
闕備前守長政養女
保料兵部少輔正賢室
松平遠江守信政室

長基　萬吉　主殿
元祿九年七月廿六日配流美作國
寶永七年十二月三日死四十二歲

六世
長直　龜之助　帶刀
和泉守從五位下
元祿十年十二月十八日叙任
享保七年八月廿四日卒五十一歲
法名鐵性院一峯淨空

女子　早世

某　金五郎　早世

女子三人
長孝室
二人早世

七世
長孝　九一郎　左膳　帶刀
實家人森采女三隆嫡男
志摩守從五位下
享保五年十二月十八日叙任
同八年三月晦日卒三十歲
法名大智院諦巖道勝

八世
長生　松太郎　左門
實家人各務伊織利直長男
初家人森采女三隆養子
越中守從五位下
享保八年十二月廿八日叙任
同十六年六月廿六日卒三十四歲
法名凌雲院奇外道光

衆利（ヒロトシ）　大助　式部　初家人關市正衆之養子　長成卒無嗣應召赴江戸途發狂疾癈　寶永二年十月三日死三十三歲
法名壽仙院鶴林全松

女子　早世

九世
政房　虎之助　靱負
實家人各務伊織利直四男
伊勢守従五位下
享保十六年十二月廿三日叙任
延享三年十二月八日卒三十三歲
法名大觀院圓覺淨智

某　茂平太　早世

十世
忠洪（ヒロ）　五郎作　初可保
實家人森縫殿正典嫡男
和泉守従五位下
延享四年十二月十九日叙任
明和六年七月廿三日致仕
安永五年六月二日卒四十六歲
法名太盛院以德善隣

忠贊　禎藏

女子

十一世
忠興　豐之助
山城守従五位下
明和五年十二月廿八日叙任
安永九年八月六日致任
天明元年八月三日改出雲守
同四年正月晦日卒三十三歲
法名宗德院忠巖義興

女子　早世

女子
六卿丹後守政展室政展卒
塚内藤右近將監政養離別

某　長次郎　早世

女子
加藤佐渡守明陳室離別

某
豐之助　早世

女子二人

十一世
忠贇
禎藏
實忠洪三男
伊豫守從五位下
安永九年十二月十八日叙任
天明二年四月十三日改大內記

某
龜太郎　早世

女子
早世

某
圍丸　早世

女子三人

某
五郎作

某
伊豫作

可敦（ヨシアツ）
直三郎　左京
依病籠居

女子二人
實共左京可敦女
船越式部景順妻
瀧川大學利廣妻後嫁
松平左金五定寅

女子二人
池田內匠頭政香室
長谷川榮三郎正滿女

長記 ノリ 六松 宮内
安藝守從五位下
正德五年十二月十八日叙任
元文四年六月二十六日致仕
明和四年五月四日卒八十一歲
法名長運院豐山

長廣 熊次郎
關備前守長治養子

藤原長政 稱關 次郎八 式部
父同長繼
承應元年十二月二十八日叙任
但馬守從五位下
後改備前守
元祿二年六月六日致仕
同十一年七月六日八十二歲
法名壽福院梅巖性誠

衆之 關市正
爲家人

俊春 勝五郎
對馬守從五位下
元文四年十二月十六日叙任
安永三年五月二十九日致仕
改安藝守

俊韶 達五郎
對馬守從五位下
安永三年十二月十八日叙任

女子

長治 千菊 大藏
實長繼六男
備前守從五位下
寶永六年四月十五日叙任
享保十年三月五日致仕
元文三年八月十一日卒八十二歲
法名西來院廓聖木然

長廣 熊次郎 民部
實對馬守長俊二男
但馬守從五位下
享保十年十一月十八日叙任
同十七年五月五日卒四十歲
法名長德院泰嶽淨謙

女子一人
實共長繼女
松平主馬介康雄室
毛利飛驒守元次室

政富　三次郎
播磨守從五位下
享保十六年十一月十八日叙任
寶暦十年六月四日卒四十二歳
法名建德院鳳山元輝

女子
安藝守俊春室

長輝　陽之助

長誠　陽之助

政辰　小十郎
安永三年八月二十三日卒十八歳
法名慈德院岐山本立

長誠　陽之助
實政富庶長子
備前守從五位下
安永年十二月十八日叙任

富矩　道五郎　早世

女子二人
一人早世
毛利石見守就馴室

富昌（アキラ）　英之丞　主水

女子二人
金森左京可英養女後歸
嫁安藤内藏助廣峯離別
岩瀨式部氏紀妻

女子
甘露對侍從國長室

某
菊壽丸　早世

某
芝次郎

森　關備前守長政　附　伯耆守長武

○侍從兼大内記源長繼は左中將忠政か外孫にて家人關民部少輔藤原成次か子なり忠政か嫡子大膳亮重政二男虎松丸三男右近大夫忠廣皆父にさきたちて卒せしかは長繼外祖の嗣子になりて寛永十一年三月はしめて見えたてまつり同しき八月家つきて（美作國十八萬六千石）從五位下大内記に任しあくる十二年從四位下して十七年侍從になり延寶二年四月二十六日致仕す長繼あまたの男あり長子美作守忠繼は父にさきたちて卒す忠繼か子を万右衛門といふ年わつかに四歳なれは三男伯耆守長武を子として長武に家をゆつる（前編に長繼延寶三年四月に家ゆつり嫡子忠繼か家繼きし年卒すといふはあやまりなるへし忠繼ことし二月十八日流山にありて卒すと家譜にしるしおほやけの記錄に四月廿三日長繼致仕し長武家つきしよししるしたり）長武これより先明暦二年二月二十一日初めて見え奉り万治三年に叙爵し家繼て從下の四位に昇る國務をとる事十三年を經て長成ひとゝなりしかは家譲て己れは別に所領を分ち領す（廩米二萬俵をわかちしなり）美作守長成延寶五年四月十一日七歳にして初めて拜謁し貞享三年五月二十七日家を繼て十二月從下の四位し元祿八年侍從に任しおなしき十年六月廿日二十七歳にしてうせて子なしこれより先祖父長繼か九男大助といひしを家人關市正衆之にやしなはせて關式部衆利といふ家人なれともをちなれは後とせん事を公にのそみ申せしより津山よりめしくたさる衆利めしにしたかひて參るとき伊勢國まて來りしに俄に病におかされてこゝろあら／＼しく物くるはしきさまにて有しは狂病のいたすところなりと聞へけれはさらむものにいかてか家國をたまはるへきとて八月二日長成か所領は殘らす收公せられ致仕の長繼をめしてあらたに所領の地をたまふ（備中國高月の郡西江原の地にて二萬石）これしかしなから故の中將忠政か舊功をすてさせ給はぬゆへとそきこへし長繼ことし八十八歳おほくの子ともにおくれしうへ相傳の所領にさへはなれてはち多しといひけん命なかくもさこそ心うかりけめさはいへとこの時長繼もしなからへさらましかは家の存亡はかりかたしかしこくも生のはゝりて血含のまつりなかく傳はりし事は此家のさちといひなから又祖父の餘烈によれるなるへし長繼ふたゝひ朝參の列にましはるといへとも老病にたへさりけれは八男帯刀長直か別にめしつかはれて御所に候せしを公に申

請て嗣とし明る十一年再ひ致仕し七月十一日世を去ぬ八十九歳なり長直去年の九月家嗣となりて從五位下に叙し和泉守に任し此年六月十九日父に繼寶永三年正月二十八日播磨の國赤穂の城賜はりて移り享保七年八月二十四日卒す年五十一嫡子金五郎は世を早くしけれは家人森釆女三隆か子帶刀長孝を已か女に配せて嗣と定む長孝享保四年十二月初めて見え奉り明る五年十二月叙爵して志摩守になり七年十月二十三日家をつき八年十月晦日卒齢二十歳又子無りしかは家人森左門長生して十二月二十二日家つかす長生實は家人各務伊織利直か子也初め森釆女三隆已か子を主に參らせて此長生を養ひたりしに幾程なくて長孝うせけるにより主の世繼となり叙爵して越中守に任す享保十六年六月二十六日長生三十四歳にして亡せ是も子無りしかは弟各務虎之助政房を後として八月十九日遺領を賜ふ政房此年十二月從下の五位し伊勢守になる延享三年十二月八日政房三十三歳にして卒す長子茂平太は世を早くして外に子無りしかは家人森縫殿正典か子五郎作忠浩を養て家繼せんと申す明る四年二月六日忠洪政房か遺領を賜はり十二月叙爵し和泉守に任し明和六年致仕す（安永五年六月二日卒す四十六歳）嫡子山城守忠興明和五年二月初て見參し十二月叙爵し明る六年七月廿三日父に繼天明四年正月晦日卒す三十三歲長子豐之助早世し外に子無りしかは弟禎藏忠贇を養て子とす忠贇安永九年六月朔日初て見參し奉り八月家繼て十二月從五位下伊豫守になる（時に廿三歳後大内記）

○從四位下伯耆守源長武は大内記長繼か三男なり明暦二年二月廿一日はしめて見えたてまつり万治三年從五位下の伯耆守になる延寶二年兄美作守忠繼卒しけれは嗣子となりて家をつき從下の四位にのほるかくて忠繼か子長成ひとゝなりしかは貞享三年五月二十七日家をゆつりおのれは別に所帶をわかち領す（二萬俵くわしくはまへに見へたり）元祿九年に卒し（五月十八日五十二歲）長武子なかりしにより病をもかりし時に弟主殿長基をよつきとせんとこひてゆるされしかは長基この時津山に居たりしを急き見參すへしといひやりしにいかなる故にやとかくひきゑろひて來らす長武うせても來らさりしかは美作守長成におほせてめしけれはまいれりやかて事の子細をめし尋ねらるゝに申す所さらに正體なかりけれはとかく執行の沙汰に及はすして長成に

わたされて幽閉せられ長武かゝる不覺のものを後にせんと申せしことなれはとかくに及はすして家たえたり長武か祿は長成にかへし附られたり（長基寶永六年大赦にあふて七年十二月三日死す四十二歳）

○備前守藤原長政は（闕と稱す）美作守忠政の家人闕民部少輔成次か二男にて母は忠政かむすめ也兄大內記長繼外祖忠政か家をつきしに及ひ弟長政をもおほやけにつかふまつらせ所領の地をわかちあたへたり（一萬八千七百石餘前編には一萬石といふ○長政の家人に加はり地領せし事年月詳ならす万治のころまてに分ちたりと家譜にいへりはしめわかち地はかへせしにや記錄にみへす前編にしるさゝれはしはらくこゝに缺く）承應元年叙爵して但馬守に任し（後備前守にあらたむ○これより先寛永十一年京にしてはしめて拜謁す）元祿二年六月六日致仕す（十一年七月六日卒す年八十七）嗣子大藏長治は大內記長繼の六男にて長政か姪なり寛文九年六月朔日はしめて見えたてまつり元祿二年家をつくおなしき十年宗家の所領を除かれし時長治は備中國にして領地加へたまふ寛永六年四月十五日叙爵して備前守に任す子なかりしかは森對馬守長俊か二男民部長廣をやしなひて子とし家讓りて致仕し元文三年八月十一日卒す八十二歳長廣寶永四年六月十三日はしめて見參し享保十年三月五日父につき十一月從五位下但馬守に叙任しおなしき十七年五月五日年四十にて身まかり其子三次郎政富閏五月廿九日遺領を賜り同き十九年十一月初て謁し奉り此年叙爵し播磨守になり寶曆十年六月四日卒す年四十三嫡子小十郎政長七月廿七日家を繼安永元年初て見え奉り同しき三年八月廿三日十八歳にして世を早くし子なかりければ十一月廿六日弟鍋之助長誠（實は庶兄なり）を嗣として遺領をたまふ（時に三十歳）やかて拜謁し叙爵して備前守に任す其子陽之助長輝

○對馬守源長俊はおさな名は松之助大內記長繼か四男なり寛文五年十月九日初めて拜謁し延寶三年叙爵し四年四月二十五日兄伯耆守長武かこふによりて所領をわかちあたふ（私墾田一萬五千石○前編には父こふによれりといふ）元祿十年宗家の所領をのぞかれし時長俊か領地は播磨の國（播磨國佐用郡三ヶ月の地へ居所をかまへしは此時の事なるへし）にうつされたり（本領のまゝ）正德五年七月二十七日長子宮內長記に家ゆつりて致仕す（後快翁と稱す享保廿年六月四日卒す年八十七）長記元祿十二年十一月二十八日はしめて見參し父につきし年從五位下安藝守になり元文四年六月二十六日に致仕す（明和四年五月四日八十一歳にして卒す）長子直三郎は病者なりければ二男勝五郎俊春をして家つかせ俊春ことし十二月叙爵して對馬守になり安永三年

五月仕へをかへす時に五十三歲安藝守に改む今の對馬守俊韶は其子なり安永元年九月朔日初めて見參叙し父につきて爵す廿九歲

藩翰譜續編卷之八上

毛利（賜松平）

大膳大夫綱廣（ヒロ）
毛利日向守元賢（モトカタ）
毛利刑部少輔政苗（マサミツ）

附
毛利甲斐守綱元（モト）
毛利刑部少輔元知（トモ）

島津（賜松平）

大隅守光久（ヒサ）
島津式部少輔久壽（ヒサナカ）

鍋島（賜松平）

丹後守光茂（ミツシゲ）
鍋島攝津守直之（ユキ）
鍋島和泉守忠茂（シゲ）
鍋島加賀守直能（ナラヨシ）
鍋島和泉守直朝（ナラトモ）

蜂須賀（賜松平）

淡路守綱矩（ノリ）
蜂須賀飛驒守隆重（タカシゲ）

毛利

大江輝元

一世

秀元

秀就

女子　松平越後守光長室

某　松壽丸　早世

某　和泉　早世

女子　鷹司關白房輔公室

某　宮市丸　大吉丸　早世

女子　早世

綱廣　千代熊丸
侍從大膳大夫從四位下
承應二年十二月十一日叙任
天和二年二月廿七日致仕
元祿二年四月十七日卒五十一歲
法名泰巖院淸光亮安

女子三人
松平攝津守義行室
内藤豐前守弌信室
一人早世

吉就　元千代丸
侍從長門守從四位下
天和二年四月六日叙任
元祿七年二月七日卒廿七歲
法名壽德院大光元榮

女子
許嫁家人吉川内藏助廣猶卒

就勝　千之助　後吉廣

某　熊之助　右京
家人毛利阿波就詮養子

某　百助　早世

吉廣　千之助　主膳　初就勝
實綱廣二男
初家人毛利六郎左衛門就信養子
侍從大膳大夫從四位下
元祿七年八月十二日叙任
寶永四年十月十三日卒三十五歲
法名青雲院徹山道照

元直　萬之助　阿波
繼家人毛利阿波就詮家

女子二人
一人早世
家人毛利阿波就詮養女
甲斐守匡廣室

某　萬吉　早世

元重　長吉　監物
初留吉
松平兵部大輔昌明養子
大監物従四位下
元祿四年十二月廿六日叙任
同十二年六月朔日歸
寶永三年八月十三日卒三十一歳

女子二人
一人早世
松平下總守忠雅室

宗元　又四郎　元太郎
初元朝
初繼甲斐守綱元家後爲吉元嗣子
佐渡守従四位下
享保二年十二月十五日叙任
同六年四月十九日卒十九歳
法名祐巖院貫長淨雄

某　齋宮　早世

元陳　左門
正德三年七月十四日卒

女子
松平大隅守能豐室

某　槌三郎　早世

女子
主水正師就室

吉元 又四郎 初元倚
實甲斐守綱元嫡男
右京大夫従五位下
元禄四年十二月廿六日叙任
寶永三年十二月五日従四位下
同四年十二月十一日改民部大輔
同月廿三日（九）侍従
享保九年八月十九日改長門守
同十六年九月十三日卒五十五歳
法名泰桓院仰辭淨高

女子 實甲斐守匡廣女
有馬左衛門佐壽就室

宗廣 左澤百合助 大膳 初維廣
大膳大夫従四位下
享保十五年十二月廿八日叙任
同十六年十二月廿三日侍従
寶暦元年二月七日卒二十七歳
法名觀光院天倫常澤

女子二人 共早世

重就 岩之允 初元房 匡敬
實甲斐守匡廣八男
甲斐守従五位下
元文四年十二月十六日叙任
寶暦元年六月十三日従四位下侍従
兼大膳大夫
安永二年十二月十六日左近衛權少將
天明二年八月廿八日致仕
同年九月五日改民部大輔

女子三人
一人早世
重成養女
一人早世

重廣 初純峯 幸廣 大三郎 實有馬左兵衛佐壽純二男 民部大輔従四位下 寶暦二年十二月十二日叙任
同十年六月廿一日卒二十七歳 法名隆徳院傑山傳英

女子 實宗廣女
重廣室重廣卒嫁
松平肥後守容綏

女子 許嫁内藤豊前守信任信任卒
嫁松平山城守信亨

女子　鷹司右大臣輔平公室

匡満（マサミツ）　文之助

女子　松平土佐守豊雍室

治親　岩之允　初德元　治元
從四位下壹岐守
明和五年三月十九日叙任
天明元年十二月十六日侍從
同二年五月五日改大膳大夫

某　德次郎　早世

女子二人　有馬上總介頼貴室
一人早世

某　岩之助　利丸　早世
永丸

（治親子）

女子　早世

女子

某　茂次郎

某　保三

某　恒五郎

親著（チカアキ）　友次郎

女子
松平下總守忠啓室

匡芳（マサヨシ）　政次郎　初匡豐
繼能登守匡滿家

女子
早世

女子一人
許嫁近衛權大納言師久卿早世
讃岐守匡邦室離別

某
富次郎　早世

某
熊五郎

二世
光廣

三世
綱元　右京
甲斐守從四位下
寛文四年十二月廿五日叙任
元祿五年十一月十八日侍從
寶永六年三月朔日卒六十歳
法名龍澤院道正瑞霖

女子一人
南部信濃守行信室
稻葉駿河守正喬室

吉元　又四郎　初元倚
右京大夫從五位下
元祿四年十二月廿六日叙任
寶永三年十二月從四位下
同四年十一月廿三日繼吉廣

女子
南部備後守信恩室

四世
元朝　又四郎　後宗元
繼祖父綱元後
正德三年十月廿二日爲宗家嗣

某
齋宮

元陳
左門

匡英 マサ 幸之助
本多長門守忠利養子

匡以 春之助　大炊

五世
元矩 那波仁八郎　右京
正德三年十月廿三日繼元朝
享保三年三月廿日卒十五歲
法名玄隆院道聽德融

六世
匡廣 權三郎　內膳
初元平
刑部少輔元知二男
讃岐守從五位下
寶永六年四月十五日叙任
享保二年四月十五日繼元知併領其封
同十三年十月九日改甲斐守
同十四年九月十九日卒五十六歲
法名瑞泉寺淨活湛然

女子 早世

七世
師就 主水
初親就
主水正從五位下
享保十四年十二月十六日叙任
同廿年四月廿三日卒三十歲
法名聖諦院廓心勇然

教達 多賀之允

八世
匡敬 岩之丞
初元房
實匡廣八男
甲斐守從五位下
元文四年十二月十六日叙任
寶曆九年二月七日繼宗廣

九世
匡滿 文之助
能登守從五位下
寶曆十一年十二月十八日叙任
明和六年八月十三日卒二十五歲
法名淨雲院寶山有道

十世
匡芳　政次郎　初匡豐
實大膳大夫重就五男
甲斐守從五位下
安永三年十二月十八日叙任

某　直次郎

女子

政苗（マサナリ）　竹之助　初匡平
刑部少輔從五位下
享保十五年十二月十八日叙任
同廿年九月十四日改讃岐守
安永四年七月廿九日致仕號覺翁
天明元年七月廿三日卒六十六歲
法名大源院覺翁了照

女子　船越式部景順妻

某　吉太郎　早世

某　早世

女子三人
二人早世
大膳大夫吉廣養女

某　萬之助　早世
元文二年十月六日卒

某　豐熊　刑部
寶永二年五月廿五日卒

某　幾三郎
元文三年正月卒

女子二人
宗家家人毛利織部廣圓妻
冷泉中納言爲榮卿室

某　源之助
寶曆四年八月廿七日卒

―某　權五郎
寶永五年十二月八日卒

―某　岩千代
寶永四年七月五日卒

―某　早世

―女子二人
許嫁增山彈正少弼正武卒
一人早世

―廣胖（ヒロヤス）　又三郎　筑後　內匠
初匡達
宗家々人毛利豐三郎廣信養子

―某　隼人　右近
稻葉修理正方養子

―匡敬　岩之允

―女子　早世

―匡幸　千五郎
增山彈正少弼正武養子

―元貞　吉次郎
寶曆十二年八月十一日卒

―女子二人
戶川內膳達恒妻
池田信濃守政直室

―某　豐五郎
寶曆八年四月五日卒

―匡邦　寅之進
初匡升　匡訓
讚岐守從五位下
安永四年閏十二月十一日敍任

―女子　早世

就隆（ナリタカ）

元知　權三郎　刑部
刑部少輔從五位下
慶安四年八月十六日叙任
天和三年閏五月十四日卒五十三歲
法名高林院凉岸常淸

元武　鶴千代　喜太郎
伊豫守從五位下
延寶元年十二月廿八日叙任
同四年依病籠居
同五年七月廿五日卒二十歲
法名玄性院心月宗淸

匡廣　內膳　初元平
讃岐守從五位下
寶永六年四月十五日叙任
享保三年四月十五日賜元矩舊領

正方　左次郎　修理
稻葉備前守正員養子

某　少輔之助
貞享四年十一月十五日卒

女子　早世

女子五人
岡部主税商成妻
一人早世
葉室大納言頼孝卿室
京極内匠高冬室
酒井越前守忠榮室

某　千代松丸　早世

某　岩松丸　早世

女子　井上筑後守正蔽室

某　千壽丸　早世

元賢　元丸　式部　初元隆
日向守從五位下
元祿元年十二月廿五日叙任
同三年五月廿一日卒廿一歳
法名大陽院玉譽澄和

元次　龜之助

女子　早世

元次　龜之助　主計
實就隆五男
飛驒守從五位下
元祿三年十二月廿六日叙任
享保元年四月十三日配流出羽國新庄
同四年五月廿八日赦
同年十一月十九日卒四十九歳
法名曹源院性海滴水

某　主計　早世

女子三人
一人早世
内田信濃守正偏室
一人早世

元堯　龜松　龜次郎　百次郎　初元國　就清　就久
初與父被罪被預吉元
享保四年五月廿八日赦
日向守從五位下
享保五年十二月十八日叙任
同六年二月十一日卒二十一歳
法名豪德院家山紹運

女子一人
稻葉玄蕃頭正恒室
宗家々人毛利伯耆元連妻

廣房　三次郎

廣豐　三欲郎　初廣房
實元次三男
但馬守從五位下
享保六年十二月十八日叙任
延享四年九月五日改山城守
寶暦八年四月八日致仕號弟山
安永二年十月廿九日卒六十九歳
法名天了院廓翁湛然

廣矩　數馬
寶暦七年八月十四日卒二十五歳
法名慈德院仁嶽通忠

廣寛　粂三郎　求馬　初豐長
志摩守從五位下
寶暦九年十一月七日叙任
明和元年二月廿六日卒三十歳
法名泰山宗院俊巖亮逸

女子　早世

某　三助　早世

豐都　求馬
松野源左衛門助能養子

女子
八條侍從隆輔室

豐完（サタ）　兵馬
小笠原大吉正衍養子

就馴　専之助
實廣豐十男
從五位下大和守
明和四年十二月十六日叙任
天明元年閏五月十二日改石見守

女子一人
池田大炊頭忠郷室
坪內式部定恒妻

女子

豐和　粂之助

豐正　又五郎

女子　早世

―女子
小笠原彦太郎正寄妻

―就正　秀之助
宗家々人毛利七郎兵衛元連養子

―豊嘉　相馬

―豊明　大三郎
八幡豊前房孝川法弟

―女子二人
一人早世
許嫁吉田左衛門佐兼隆早世

―豊房　吉五郎
宗家々人吉川左京經水養子

―就馴（タカヨシ）　専之助

―豊候（トキ）　無五郎
土方宇源太勝芳養子

―女子二人
姉小路中将公聰室
平野中務長純妻

―豊敏　織之助
大島雲四郎義苗養子

―女子
岡部十次郎利寛妻

駉倫（ヨシトモ）勝三郎
女子
就壽（タカヒサ）德太郎

毛利　賜松平　附　刑部少輔元和

○侍從兼大膳大夫大江綱廣は長門守秀就第四の男母は越前中納言秀康卿の御女なり幼名は千代熊正保三年三月二十五日八歳にてはしめて見參す慶安四年の正月父秀就卒しけれは二月二十日遺領事ゆへなく千代熊にたまはる 長門周防兩國すへて三十六萬九千四百石餘 この時家の老をめして千代熊いとけなきほとは心をあはせて國の事を沙汰すへし下としてはからひかたき事は越後中將光長松江侍從直政につきてとひはかれと仰下さるこの二人はともに外家のちなみあるゆへなり承應三年十二月十一日千代熊御前にまいりて元服し御諱字を賜はりて綱廣と名のり 貞宗の御脇差をたまはる この日從四位下に敘し侍從に任し大膳大夫をかねたり天和二年二月二十七日致仕し元祿二年四月十七日卒すとし五十一この子元千代延寶三年六月四日はしめて拜謁し父か致仕の日家つきてことし四月六日元服し從四位下の長門守に任し御諱字を賜はりて吉就と名のる 越中利重の御刀をたまふ 元祿七年二月卒す 七日〇卅七歳なり いまたよつきなかりしかは舍弟主膳勝就して四月十三日家つかす はしめ家人毛利六郎左衞門就信に養はれ主膳就勝といひて長門守に任しなり おなしき十八日襲封の事を謝し奉りて初めて見參にいり八月十三日御諱字を賜はりて吉廣と改め名のる 來國秀の御刀をたまふ 從四位下侍從兼大膳大夫となる寶永四年十月十三日三十五歳にして卒す嗣子なかりけれは疾おもりし時一族甲斐守綱元か嫡子右京大夫吉元を子とし家繼しむ吉元初めは元倚といふ父綱元か家にありしとき貞享三年十一月十一日はしめて見えたてまつり元祿四年十二月二十六日敘爵し寶永三年十二月五日從四位下に昇り御諱字賜はりて吉元とあらため 信國の御刀をたまふ 同き四年吉廣か家をつく十二月二十九(三)日侍從にすゝみ民部大輔にあらたむ享保十六年九月十三日五十五歳にして卒す吉元はしめ宗家をつく時長子又四郎元朝を父綱元か家にとゝめて三男左門元陳をもて己か嗣とさためしに元陳世を早うしけれはまた元朝を儲嗣とす元朝享保二年十二月十五日元服し從四位下の佐渡守に任し御諱の字を賜はりて宗元とあらため名のる 延壽國資の御刀をたまふ おなしき六年四月十九日これもさきたちてうせけれは五男百合助維廣をよつきとす維廣享保十四年八月十五日はしめて見參しあくる十五年十二月二十八日元服

し従四位下に叙し大膳大夫に任し御諱字をたまはりて宗廣といふ（國守の御刀をたまふ）同き十六年十月二十三日家つきて侍従にすゝむ寶暦元年二月七日三十七歳にて卒す男子無りしかは支族甲斐守匡敬を嗣とすへしと申置たりしに四月十二日こふ所に任せて匡敬に遺領をたまはり六月十三日従四位下の侍従になされ御諱の字を賜はりしかは大膳大夫重就とあらため名のる（盛元の御刀をたまふ）重就はしめ有馬日向守壽純か次男大三郎純峯を子としやしなひ見參にいれて従四位下の民部大輔になりしか世を早くせしかは七男岩之允（三カ）をよつきとし寶暦十一年田安宗茂卿の息女を岩之允か妻に結納して公にもうとからぬ身となれりかくて安永二年十二月重就左少將にうつり天明二年五十八歳にして致仕す岩之允德元これよりさき明和二年六月朔日初見の禮をはりおなしき五年三月十九日元服し従四位下して壹岐守に任し御諱字をたまはりて治元とあらため名のる（正嘉の御刀をたまふ）（のち治親にあらたむ）天明元年侍従にすゝみあくる二年八月二十八日父につき大膳大夫にあらたむ（時に廿八歳）その子を茂次郎といふ

○甲斐守大江綱元は（毛利と稱す）和泉守光廣か嫡男也承應二年十月十一日父か遺領をたまはり（長門國府中の地何ほといふ事はしらす）叔父刑部少輔元知に所領をわかつ（一萬石）明暦二年八月二十八日七歳にして初見の禮をはり寛文四年の冬従四位下の甲斐守に任し御諱の字をたまふ（備前遠近の御刀の賜ふ）元祿五年侍従に任し寶永六年三月朔日卒し六十歳嫡子元倚はこれよりさき宗家の嗣となりしかは元倚か子又四郎元朝を嗣とす元朝ことし四月十八日十七歳にして祖父か家をつき正德三年三月はしめて拜謁し明る三年十月二十三日宗家吉元か儲嗣となるこれによりて叔父右京元矩（綱元か四男）してこの家をつかせらるゝかるに元矩十五歳にして享保三年三月二十日世をはやうしけれはこの流はたへぬ所領の地は宗家民部大輔吉元か處分として支流讃岐守元平にあたえたり（この家は宰相秀元より國持になそらへて官位加階なとも他にことなりしかこの時におよひてもすちは兩流に傳えけれとも家の式はことノ〵くあらたまりて異なることなき家とはなれり）

○刑部少輔大江元知は（毛利と稱す）宰相秀元の二男也（正保二年三月朔日奥にまいりてはしめて見參し慶長元年御小性衆に加へらる）慶安四年八月十六日叙爵し承應二年十月十三日兄和泉守元廣か遺領のうちを分ち領す（長門國豐浦郡のうち一萬石）天和三年に卒す（閏五月十四日五十三歳）嫡子喜太郎元武延寶元年七月十八日初めて見えたてまつり

九月朔日鴈の間の詰衆にくはゝりて俸米をたまふ三十俵ことし叙爵して伊豫守に任すおなしき四年の夏病にかゝりしかは身のいとま申て父か所領の地に引こもりしか明る五年うせぬ元知か室は増山彈正少弼正則か妹にて寶珠院殿とはまさしく姉妹也承應元年元知にあはせらるへしとの御氣しきありて明暦二年の春御所のつほねより元知か家にむかふかゝるゆへによりて元武も生れたちよりうちくにてめし御覽せられ賜り物なとも數々ありとそいふ次男内膳元平後匡廣にあらたむ世つきとなり天和三年八月三日父か遺領を賜はり寶永六年四月十五日從下の五位して讃岐守に任す享保三年の春右京元矩世を早くしけれは宗家民部大輔吉元かはからひにて四月十五日元矩か所領の地を併せ領す吉元か譜によるに此時三萬八千石をわかち享保五年三月ふたたひ地くわへて四萬七千石となれりされは元矩か舊領もとより五萬石にはみたさりしとこのゝち甲斐守にあらため同しき十四年九月十九日うせぬ五十六歳嫡子主水師就享保三年〔享保十年七月廿八日水野隼人正忠恒殿中にて俄に心みたれ腰刀をぬき師就かうしろより切付しに長田某忠恒を組留たり師就長田にむかつて忠恒一圖に知る人にあらされはかつて意恨をふくむへきのいはれなしこれ全く心くるひしと思ひけれは某腰刀は拔す稍なからあいしらひしなり心亂れし人なれは後の御咎輕くこそ願たけれといひし此時師就廿歳はかりの時なりかゝる不慮の災にあひなから少しも心動かす其語詳に忠恒か御咎の事まて申述たりしは若冠ににけなき行條と其頃世の人々申あへりと或書にみへたり〕の八月十八日はしめて見參おなしき四年十月二十六日父につき弟竹之助政苗に所領をわかつ私墾田一萬石ことし十二月師就叙爵して主水正に任しおなしき二十年四月二十三日三十歳にしてむなしくなりぬその子多賀之丞幼弱なりしかは弟岩之丞元房を後にせんと申せしにことし六月十四日兄か遺領を元房にあたへ同しき二十八日そのかしこまりを申てはしめて見參にいり元文四年十二月從五位下の甲斐守に任す寶暦元年二月七日元房宗家大膳大夫宗廣か家つきしかはそのか家は嫡子文之助匡滿に讓る匡滿ことし九月三日家つきて寶暦十一年十月朔日はしめて見參し十二月叙爵して能登守に任す明和六年八月十三日二十五歳にして卒す子なかりしかは宗家大膳大夫重就か五男政次郎匡芳を養ひ子とし十月七日家つかす匡芳安永三年三月朔日はしめて謁見し十二月從下の五位して甲斐守になる天明三年五月二十九日宗家大膳大夫治親かこひによりて匡芳五萬石の城持の列となる

○日向守大江元賢は初は元隆○毛利と稱す故の日向守就隆か四男なり延寶二年八月二十八日初めて見參しあくる七年十月十三日父か遺領をたまひ前編に周防國徳山五萬石といふ元祿元年十二月從五位下に叙し日向守に任しおなしき三年に卒す五月廿一日年二十一歳其子主計元次實は弟なり八月十日家をつき叙爵して飛驒守に任すしかるに正德五年の六月

元次か所領の士民宗家民部大輔吉元か所領のものに殺害せられしにその下手人の沙汰違亂せしにより元次か領民愁訴におよふ吉元家人一族等をしてさま〴〵にあつかひさとしけれとも元次聞いれねは吉元かくては國法をむなしくするに似たりとて元次を籠居させ息男百次郎元堯をして家つかせむ事を公に申たりしに元次か所爲たとひそのいはれありとも宗家に禮義をそんし國民の愁訴を思はゝなとかはからふむねなかるへき殊に年頃その身のおこなひをはしめ政務もあしさまなり其罪もこれかろからすとてあくる享保元年四月十三日所帯をめしはなたれ戸澤上總介正庸にめしあつけられ百次郎元堯をも吉元にあつけられて家絶たり所領の地は吉元にかへし附らる元次これより戸澤か所領出羽國新庄におもむきて四年の春秋を經たりしかおなしき四年五月つみゆりて江戸にかへる此とき百次郎元堯もおなしく恩免をかうふりしかは宗家吉元また公に申て舊領德山の地をわかちあたふ（三萬石○吉元か譜にかの時その祖就隆以來領せし地ことく〳〵くあたふとしるすこれによれははしめに三萬石を領せしにや）明る五年十二月元堯叙爵して日向守に任しおなしき六年二月十一日二十一歳にしてうせぬ子なかりしかは弟三次郎廣豐を嗣となし四月十六日遺領を賜りおなしき二十八日家つきしかしこまり申てははしめて見參したてまつり此冬從五位下但馬守になり（後山城守あらたむ）寶暦八年四月致仕して弟山と號し安永二年十月六十九歳にして卒す長子數馬廣矩寛延二年十二月朔日はしめて拜謁し父にさきたちてうせけれは二男求馬廣寛嗣となる廣寛寶暦七年十二月二十八日ははしめて見參し父か致仕せし年家をつき九年十二月叙爵して志摩守になり明和元年二月十六日三十歳にして卒す男子なけれは弟專之助就馴を子とし家つかす就馴おなしき三年の冬はしめて見へたてまつり明るとし叙爵して大和守に任す（時に十八歳）

○刑部少輔大江政苗（毛利と稱す）は甲斐守匡廣か二男なり享保十四年十月廿六日父か遺領をわかち賜ふ（長門國淸末の地一萬石）あくる十五年の冬叙爵して刑部少輔に任し（のち讃岐守に改む）寶暦九年七月二十八日御奏者となり寺社奉行をかねしかるに寺務の爭論を（下野國千本長安寺と烏山の天性寺本末の條例にあらそひしをうつたへあらそひしなり）あしさまに斷りしきこえありしかはそのゆへをたつねとはるゝに家人等かはからひにまかせたりしによりまいないをいれて非法の沙汰にお

よひしかは政苗さらに陳すへき詞なくして明和元年二月四日兩職をとゝめられ罪をかうむりて逼塞したり五月あまりにて出仕をゆるさる かくて安永四年七月致仕して覺翁と號し天明元年七月二十三日淸末に於て卒す六十六歲男子あまた早世して七男寅之進匡邦嗣となる匡邦安永三年三月はしめて拜謁し父か致仕せし日家をつきことし叙爵して讃岐守に任す時に十九歲

島津

源忠良（タヽヨシ）

貴久（タカヒサ）

義久（ヨシヒサ）

家久（イエヒサ）

某　兵庫
慶長十九年正月廿八日卒三歳

女子四人
一人早世
家人北郡山城翁久妻
家人島津彈正久慶妻
家人種子島左近忠時妻

光久　虎壽丸　又三郎　初忠元
侍從薩摩守從四位下
寛永八年四月朔日叙任
慶安四年十二月二十五日左近衛權少將
改大隅守
延寶元年十二月二十八日從四位上中將
貞享四年七月二十七日致仕
元祿七年十一月廿九日卒七十九歳
法名寛陽院泰雲慈溫

綱久　虎壽丸　又三郎　初久平
侍從薩摩守從四位下
慶安四年十二月二十六日叙任
延寶元年十一月十九日卒四十二歳
法名泰淸院閑山亘無

綱貴（タカ）　虎壽丸　又三郎　初延久
侍從修理大夫從四位下
寛文七年十二月二十五日叙任
延寶元年七月十八日改薩摩守
貞享四年十二月十八日左近衛權少將
元祿八年十二月十八日中將
同月二十八日從四位
寳永元年九月十九日卒五十五歳
法名大玄院昌道元新

忠朗　又八郎　兵庫
家人島津兵庫久徵養子

久直　又十郎
式部少輔從五位下
寛永八年四月朔日叙任
家人北卿出雲忠亮養子

女子二人
二人早世
家人島津大和久章妻

忠廣　市正
家人島津平馬久道祖

忠尙　出羽
家人町田圖書久幸養子

忠紀　越後
玄蕃頭從五位下
寛永八年四月朔日叙任
家人島津又四郎久敏養子

女子三人
島津但馬守久雄室
家人島津美作久憲妻
家人島津又八郎久薫妻

久定　次郎左衛門
家人北卿式部少輔久直養子

忠長　攝津介　外記
初家人喜入美作忠高養子
後繼久定家改島津

久峯　又六
家人島津又五郎久道養子

久達　備前
初伊勢兵庫貞衞養子後歸爲
家人佐多丹波久利養子改稱島津

久侶　壱岐
家人島津大助忠淸養子

女子
家人島津又十郎忠興妻

女子
酒井靫負佐安隆室

某　六七　早世

久季　兵庫
家人島津又八郎久薫養子

女子
鳥居播磨守忠救室

重永　右近
家人彌寢七郎重政養子

久雄　安藝
家人島津中務忠榮養子

女子
家人島津筑前久輔妻

正勝　松千代　藏人
家人鎌田治部政統養子

女子三人
家人肝付伴兵衛兼屋妻
一人早世
家人島津中務久茂妻

久國　右衛門
家人伊集院右馬助忠廣養子

忠宗　三郎右衛門
家人島津下總常久養子

正長
家人鎌田藏人正勝養子

女子
家人入來院隼人重治妻

忠智　筑後
家人島津外記忠長養子

久亮（スケ）　安房
繼忠長家稱喜入

久明　大藏
家人島津藤馬久儔祖

女子三人
家人北郷宗次郎忠昭妻
家人伊勢兵部貞顯妻
家人島津圖書久洪妻

久當　將監
家人島津又六久峯養子

女子
家人島津內記久文妻

久朝
家人伊集院松千代養子

貞昭　兵部
家人伊勢兵部貞昌養子

久尙　又九郎
家人樺山助七郎久辰養子

女子四人
一人早世
家人入來院石見重頼妻
二人早世

某　早世

女子
家人島津圖書久行妻

某　外記　早世

久記　賴母
家人島津相馬久英祖

久祐　織部
家人桂太郎兵衛久常養子

女子二人
織田因幡守信盛室
家人桂外記忠世妻

基明　式部
家人阿多內膳忠榮養子改稱島山

女子四人
家人種子島彈正伊時妻
家人頴娃主膳久明妻離別
家人肝付帶刀兼柄妻
伊時後妻

重矩　主馬
家人入來院又兵衛規重養子

久房　求馬
家人島津求馬久昶祖

女子二人
家人島津主水久輔妻離別
家人島津源次忠伴妻

久雄　市大夫
家人島津壹岐久侶養子

女子二人
一人早世
家人能鄕作左衛門久嘉妻

久皎　左門
初家人高橋十郎右衛門種周養子後去其家稱稅所

女子二人
近衛關白守久公繼室

吉貴　菊三郎　又三郎　初忠行
侍從修理大夫從四位下
元祿二年十二月十五日敍任
寶永元年十一月二十七日改薩摩守
同年十一月十一日左近衛權少將
同七年十一月十六日從四位上中將
正德四年十一月二十九日正四位下
享保六年六月九日致仕改上總介
同十七年八月十三日剃髮號上總入道
延享四年十月十日卒七十三歲
法名淨國院鑑𨵦天清道熙

繼豐　鍋三郎　又三郎　初忠休
侍從大隅守從四位下
正德五年四月五日敍任
享保六年十二月十八日左近衛權少將
同十四年十二月十六日從四位上中將
延享三年十一月二十一日致仕
寶曆十年九月二十日卒六十歲
法名宥邦院圖鑑享盈

宗信　益之助　又三郎　初忠顯
侍從薩摩守從四位下
元文四年十二月十一日敍任
延享三年十二月十八日左近衛權少將
寬延元年十二月十三日從四位上中將
同二年七月十日卒二十二歲
法名慈德院俊岩良英

女子
實家人島津圖書久洪女
島津淡路守惟久室

某　菊太郎　早世

久儔　周防
家人島津美濃久弼養子

忠直　玄蕃
家人島津玄蕃久寔養子

女子
近衛關白家久公室

久方　圖書
家人島津圖書久洪養子

淸純　仙十郎
家人稱寢丹波淸雄養子

女子二人
實島津伊賀守忠敦女
牧野備後守成央享成央卒吉
貴養爲女嫁阿部伊勢守正襲
一人早世

某　忠五郎　早世

忠儔　玄蕃　備前
家人島津玄蕃忠直養子

女子二人
家人島津大學久章妻
一人早世

忠紀　周防
爲家人

久亮　圖書
家人島津圖書久倫養子

女子
家人島津出雲久定妻

女子
隆人樺山十郎久倫妻

重年　善次郎　兵庫
初久門
繼宗信
左近衞權少將薩摩守從四位下
寛延二年十一月二十八日敍任
寶曆五年六月十六日卒二十七歳
法名圓德院覺滿良義

女子二人
家人肝付彈正兼伯妻
家人島津市大夫久隆妻

久峯　木工
家人島津木工久豪養子

女子二人
松平修理大夫重政室
一人早世

定勝　大和
家人入來院主馬定埔養子

―女子　松平飛驒守定英室離別

―久東　權七　家人島津將監久常養子

―某　鍋保丸　早世

―女子三人　家人島津藤次郎久智妻　家人山田鄉九郎久傳妻　家人桂七郎久音妻

―久福　仁十郎　家人島津主水久輔養子

―貴澄　備前　貴儔養子

―女子　家人伊勢兵部貞矩妻

―忠鄉　因幡　爲家人

―忠温　安之助　因幡　繼忠鄉家

―女子　早世

―女子二人　一人早世　許嫁奥平大膳大夫昌男

―女子　淺姬御事

重豪　善次郎　又三郎　初久方　忠洪
従四位下左近衞權少將兼薩摩守
寶曆八年六月十五(三)日叙任
明和元年十一月十三日從四上中將

忠堯　虎壽丸　又三郎

女子
實家人島津兵庫久徵女
島津淡路守忠將室

昌高　富之進
奥平大膳大夫昌男養子

女子三人　共早世

某　雄五郎

某　早世

某　龜五郎　早世

某　感之助　早世

某　時之丞

一世 忠將 ― 二世 以久 ― 三世 忠興

四世 久雄 ― 五世 忠高

久富

六世 久壽　鶴千代　又吉
延寶四年八月十一日忠高卒其男惟久猶幼久壽繼家後讓惟久
式部少輔從五位下
延寶六年十二月二十八日叙任
元祿六年八月三日卒三十歲
法名青原院篤譽勇信義哲

七世 惟久
初忠充　萬吉　又次郎　左京　淡路守從五位下
元祿十三年十二月廿一日叙任　享保八年五月廿五日致仕　元文三年九月十九日卒六十三歲
法名自持寺龍淵道水

女子
立花出雲守種甄室

女子　早世

久睦　堯麟坊　主膳
島津主膳久武養子

久智　堯龍坊　敬次郎
又次郎

女子
九鬼長門守隆張室

女子　早世

雅攄（マサハル）　正之允　大膳　紀伊守
山本縫殿頭正延養子

忠雅　萬壽丸　又四郎
但馬守従五位下
享保元年十二月十八日叙任
後改加賀守
寶暦三年十一月十一日致仕
天明四年五月十五日卒八十二歳
法名仁壽院忍齊慈照

久芳　龜千代　權七　式部
山城守
島津主膳久睦養子

某　早世

女子二人　共早世

久奉（トモ）　堯仙坊　半兵衛
勘ヶ由
寶暦元年五月廿一日卒

女子　早世

久福　覺元坊　秀之助
左膳　淸左衛門
安永三年五月廿四日卒

九世
久柄　萬壽丸　又四郎
従五位下淡路守
寛延六年十二月十八日叙任
後改但馬守
天明五年五月廿三日致仕

某　早世

女子　早世

某　早世

久澂　恭隆坊　直次郎
直江

久武　鶴丸　安五郎
大和　中務
左京

某　早世

某　早世

十世
忠持　勝丸　又之進
従五位下淡路守
天明三年十二月十八日叙任

某　早世

女子
久留島帶刀道同室

女子

久充　運長坊　莊之助
采女

久儔　剛次郎　能登
初久慶

就賢 仙壽坊 主殿
享保十八年二月廿日卒

久中 元券坊 元次郎
猪散太 新右衛門
天明五年七月三日卒

女子
家人樺山衛守久寛妻

某 早世

島津　賜松平

○左近衛權少將兼大隅守源光久は中納言家久第二の子なり童名は虎壽丸といふ 長子兵庫某は世をはやくしけれは虎壽丸よつきとなり又三郎忠元とあらたむ寛永元年の冬父にしたかひて江戸にまゐり明る二年四月廿三日はしめてまみえたてまつる 寛永八年四月朔日元服し御家號御諱字を賜り從四位下して侍從に任し薩摩守をかぬ 左文字の御刀を賜ふ○先祖豐後守忠久は右大將賴朝卿の子なりけれと幼稚の時に藤原基通等にやしなはれしゆゑ藤原を稱せしなりかくて多くの星霜を經て父家久の時より源姓に復らん事をおもひしにはからすも光貞か任官の宣旨に源としるされしかはこれよりして本氏に復せしといふ 同き十五年五月八日父か遺領をたまひ 薩摩大隅日向國にて六十五萬五千石餘なり 慶安四年の冬左少將に任し大隅守にあらため延寶元年十二月上階して中將に轉し貞享四年七月二十七日致仕し元祿七年十一月二十九日卒す 七十九歲○光久か時にあたりて正保元年琉球國の王尙賀使をまゐらせかすのさゝけものありこれ謝恩使のはしめなり 其子又三郎久平 後綱久 寛永十八年正月十一日はしめて拜謁し慶安四年の冬元服を加へ御家號御諱の字をたまはり從四位下に叙し侍從兼薩摩守に任す 則宗の御刀を賜はる しかるに延寶元年十二月父にさきたちて身まかりしかはその子虎壽丸延久よつきとなり萬治二年七月十一日はしめて見えたてまつり寛文七年十二月元服して御稱號御諱の字を賜はり從四位下の侍從に任し修理大夫をかぬ 吉房の御刀をたまふ○後薩摩守にあらたむ 祖父か致仕の日家をつき左少將に任し元祿八年の冬上階して中將に轉し寶永元年九月十九日五十五歲にして卒すその子菊三郎吉貴貞享二年五月十四日はしめて見參し元祿二年元服のとき御家號御諱の字を賜はり從下四位の侍從して修理大夫になる 一文字の御刀をたまふ○後薩摩守にあらたむ 寶永元年十月二十五日父か遺領をたまはり左少將に任しおなしき七年十一月上階して左中將に轉す正德四年正四位下にのほり享保六年の夏致仕して上總介にあらため 十七年の秋剃髮して上總入道と稱す 延享四年十月十日卒す 七十三歲 その子又三郎繼豐正德五年三月十五日はしめて見えたてまつり元服して從四位下の侍從に任し大隅守をかぬ 御家號御緯の字及ひ備前重直の御刀を賜ふ 享保六年六月九日家を繼十二月左少將になる繼豐としわかくして妻におくれけれは享保十四年六月御所の姫君 竹姫君と申す常憲院殿のやしなひ君にておはせしなり「竹姫君は清閑寺大納言照定卿の女なり初松平久千代正邦緣約ありしに正邦卒しけれは有栖川正仁親王緣約したり然るに此親王も薨したまひけれは繼豐の後室とならせたまひしなり安永六年十一月五日逝去法名を淨岸院殿と申す鹿兒島福昌寺へ葬る」 をむかへ參らすへきよし仰下され御もうけの事とも有しかのひて十二月十一日繼豐か家にいらせたまふかゝりしかは繼豐も四位の上階して左中將になる延享三年

十一月二十一日繼豐致仕し寶曆十年九月二十日とし六十にして卒すその子益之助宗信（宗信は繼豐の妻のうみたりしを姫君とりてやしなひたまひよつきにさためられ享保廿年二月十三日姫君宗信をともなひ大奥にいらせたまひしときうち／＼初て見えたてまつりしにおまへにめして延壽國重の御短刀をたまふ）元文二年七月朔日初見の禮をはる同き四年八月四日御家號をゆるされ此後も永く松平を稱すへしと仰下さることとし十二月元服し御諱の字賜はり從下の四位にて侍從兼薩摩守に任す（大和志津の御刀を賜ふ）寬延元年十二月上階して左中將に轉すあくる年七月十日二十二歳父か致仕の日家ゆつられて少將に任し寬延元年十二

にして世を早うす宗信子なかりしかは弟兵庫重年ことし十一月十日家を繼き（重年はしめ家人島津兵庫久年か家をつく）やかて元服し御諱の字賜はりて從四位下左少將に叙爵し薩摩守をかぬ（公則の御刀を賜ふ）これもよはひ未た三十にみたすして寶曆五年六月十六日卒すその子又三郎忠洪七月廿七日遺領を賜はりしか未たいとけなかりしかは（時に十二歳）おほち繼豐して政事をたすけしめらる忠洪同き八年四月十九日はしめて見參し六月十三（五）日御諱の字たまはり從四位下の左少將になされ薩摩守重豪と名のる（信國の御刀を賜ふ）明和元年の冬從四位上の左中將に轉すその子虎壽丸忠堯天明六年七月二十八日はしめて拜謁す

○式部少輔源久壽は（島津と稱す）飛驒守忠高（前編に久英につくる）の叔父主膳久富か子也延寶四年八月忠高卒せし時其子萬吉はいまた襁褓のうちにありしかは十月二十五日久壽をめして萬吉か成人にいたらんまては久壽家の事を沙汰すへしとてかの所領を賜る（日向國佐土原三萬石）十一月十五日はしめて見えたてまつり同しき六年の冬叙爵す萬吉惟久いつしか十五歳になりけれは元祿三年五月二十九日所帶をゆつる久壽かとしころ奉公の勞をおほしめされて惟久か領地のうちをわかち給ふ（六千石）惟久貞享二年五月十四日はしめて拜謁す所領佐土原はもと城地なりしか絕て久しく年經たりしを元祿十二年四月十五日むかしにかへされて惟久を城主になされけりかくて明るとし叙爵して淡路守に任し享保八年五月二十五日致仕し元文三年卒す（九月十九日六十三歳）長男主膳久睦は一族島津主膳にやしなはれ二男大膳雅攄も山本縫殿かよつきと成けれは三男又四郎忠雅家を繼くこれよりさき正德五年三月十五日はしめて見えたてまつり享保元年の冬從下の五位して但馬守に任し後加賀守にあらたむ　寶曆三年十二月致仕し天明四年五月十五日

八十二歳にして終りをとる嫡男又四郎久柄寛延元年二月十五日はしめて見参しあくる二年従五位下の淡路守に任し後但馬守にあらたむ父か致仕せし日家を繼き時に十二歳天明五年五月二十三日致仕して其子又之進忠持に家を讓る忠持これよりさき天明元年十一月朔日初て見えたてまつりあくる二年叙爵して淡路守に任す廿歳

鍋島

藤原直茂

勝茂

元茂

忠直

女子

女子
土井大炊頭利重室

光茂　翁助
丹後守從四位下
慶安元年十二月廿二日叙任
萬治元年二月五日侍從
元祿八年十一月廿八日致仕
同十三年五月十六日卒六十九歲
法名乘輪院全機㝎運

女子

綱茂　左衛門
信濃守從四位下
寬文七年十二月廿五日叙任
元祿八年十二月十八日侍從
寶永三年十一月二日卒五十五歲
法名玄梁院卓巖道印

女子四人
水野隼人正忠直室
伊東大和守祐天室
家人鍋島主水武興養女
家人鍋島主水直朗妻

直利　彈正

某　早世

某　早世

女子
家人鍋島彌平左衛門高就養女

吉茂　彈正　初矩茂　直利
實光茂六男
左衛門佐從四位下
寶永三年十二月五日叙任
後改丹後守
同四年十二月廿三日侍從
享保十五年三月十八日卒六十五歲
法名法性院健巖㝎勇

女子三人

某　千太郎
家人神代左京直長養子

女子

女子二人
實光茂女
榊原式部大輔政邦室
許嫁上坂民部大輔吉憲室

女子

茂文 伊豫
家人多久長門茂雅養子

女子

女子
家人諫早豐前茂照妻

某 彥法師

政盛 隱岐
家人村田宮內政種養子

女子二人
鋼茂養女
家人鍋島十左衛門茂乘女

某 三平

某 左內

女子
實小花和太兵衛成之女
甲斐守直稱室

女子
家人鍋島山城直愈妻

女子三人

直董 主膳

女子三人

茂之 周防
繼家人鍋島縫殿淸信家

長行　内匠
繼鍋島帶刀直方家

某　久松

女子

某　百助

某　龜千代

女子
吉茂養女

某　伊平太

辰茂　伊豫

德寛　城之助

直道
家人神代左京直長養子

某　和太郎

女子
吉茂養女

女子二人

女子三人
實甲斐守直澄女
淡路守直條室
實加賀守直能女
三浦壹岐守直次室
實榊原越中守照清女
攝津守直之室

宗茂　主膳　初直董
實光茂十男
信濃守從四位下
享保元年十二月十八日敍任
同五年十二月十八日侍從
元文三年十二月九日致仕改飛驒守
寶曆四年十一月廿五日卒六十九歲
法名梅董院慈明活眼

女子四人
實甲斐守通稱女
日野大納言資持卿室
實光茂女
岡部丹波守監明室
實紀伊守元武女
三浦備後守明喬室
實光茂女
攝津守直恒室

女子二人

宗教　萬吉　初教茂
丹後守從四位下
享保十七年十二月六日敍任
元文三年十二月十八日侍從
寶曆十年十一月廿六日致仕
安永九年二月二日卒六十三歲
法名光德院瑞章亘麟

某　早世

女子三人

某　早世

某　早世

直鄰　富丸　主膳

某　竹丸

重茂　右平太　初直亮
實宗茂七男
上總介從四位下
寬文二年三月廿一日敍任
後改信濃守
寶曆十年十二月十八日侍從
明和七年閏六月十日卒廿八歲
法名大弘院道聽亘廓

某　吉次郎

某　富松

女子二人
實五條大納言爲範卿女
紀伊守直員室
實甘露寺大納言矩長卿女
攝津守直寬室

某　翁助

直亮　右平太

女子　伊達遠江守村候室

某　甚吉

女子　岡部内膳正長住室離別

直煕　中務

女子二人

某　源丸　早世

治茂　中務　初直煕
實宗茂十男
初備前守直郷養子
從五位下和泉守
寶曆十三年十二月十八日叙任
明和七年七月五日繼重茂
同年十一月七日從四位下改肥前守
同八年二月九日侍從

女子四人

某　祥太郎

某　敏次郎

女子

某　徹之助

女子二人
實攝津直恒女
堀河左衞門佐康央室
加賀守直愈室

直能　飛驒　初直宗
飛驒守從五位下
慶安四年十二月廿八日敘任
後改加賀守
延寶七年十二月廿八日致仕
元祿二年八月廿六日卒六十八歲
法名弘德院星巖元晃

某　牖三郎

女子二人
實堀河左衞門佐康實女
甲斐守直溫室
實紀伊守直員女
正親町大納言公明卿室

直將　飛驒　早世

女子二人
家人四尻宮內興種妻
丹後守光茂養女

元武　久丸　式部　初直賴
紀伊守從五位下
延寶四年十二月廿六日敘任
正德三年正月廿六日致仕
同年八月廿日卒五十二歲
法名善通院全渠元明

元敦　大藏
家人鍋島圖書某祖

某　式部　早世

女子
丹後守吉茂養女

元延　三平
飛驒守從五位下
寶永六年十二月十八日敘任後改加賀守
正德四年五月晦日卒二十歲
法名見性院直空淨眼

女子
家人鍋島主水茂知妻

直朗　主水
家人鍋島主水武興養子

直治　大學

晃淳　僧

能冬　靱負
家人三浦木工助盛治養子

女子

某　左膳

直英　出雲
正德四年九月三日繼元延
加賀守從五位下
正德四年十二月十八日叙任
延享元年九月十二日卒四十六歲
法名圓覺院錦山淨高

某　萬之助　早世

女子
備前守直郷室

女子三人

直員　三次郎
紀伊守從五位下
寬保元年十二月十九日叙任
明和元年十二月十三日致仕

女子二人
宗家々人諫早豐前茂成妻
家人太田縫殿之助增恒妻

直嵩　喜三郎　早世

女子
肥前守治茂養女

直愈　伊三郎　直喬
加賀守從五位下
明和八年十二月十八日叙任

安永九年六月廿四日卒五十五歳
法名法眼院□然淪一

女子

直昭　大和
家人鍋島山城直祐養子

能候　靱負
家人三浦靱負能冬養子

維種　監物
家人田尻松龜菜養子

女子

女子二人
家人水町主膳公忠妻
家人園田善左衛門忠利妻

直澄

直賢　捨五郎
繼鍋島帶刀直益家

女子二人
家人鍋島内匠元清妻
家人鍋島山城直容妻

直宜　守三郎

女子
家人鍋島左近能光妻

種信　監物
家人田尻監物維種養子

豐明　造酒
家人面頼母豐恭養子

女子
家人野口慶之助能賢妻

某　千熊　早世

直守　右近

直之　千熊丸　攝津
攝津守從五位下
萬治三年十二月廿八日敍任
寬文五年二月九日致仕號了閑
享保十年四月廿八日卒八十三歲
法名要玄院了閑宗勇

之治　右衞門
直守養子

女子
丹後守光茂養女

女子

之映　修理
家人鍋島又兵衞貞恒養子

女子二人

直富　勝之助
元祿七年三月朔日卒二十一歲

直稱　熊之助　主税
初之紀
實直澄五男
甲斐守從五位下
元祿十三年十二月廿一日敍任
享保二年四月九日致仕號哲通
元文元年五月十八日卒七十歲
法名大應院哲通玄海

之基　萬平
家人鍋島龜之助之德養子

女子
信濃守宗茂養妹

直恒　左京　主税
初稱就
攝津守從五位下
正德五年十二月十八日敍任
寬延二年十月十六日卒四十九歲
法名龍華院實巖玄成

女子
家人練早石見茂候妻

某　熊之助

好古　圓次郞
家人中野八右衞門好忠養子

穪起　衞守
家人鍋島修理之農養子

女子二人

之紀　熊之助

之徳　龜之助
家人鍋島左膳某祖

豐方　右馬允
家人峯五郎右衛門某養子

盛隆　千九郎
家人成富杢右衛門盛政養子

玄義　卯左衛門
家人牟田圭左衛門乏光養子

女子二人
家人松枝善右衛門貞昌養女
家人中澤太左衛門政員養女

直興　直之助　初直賢
甲斐守從五位下
寛延二年十二月十八日叙任
寶暦七年五月廿九日卒廿六歳
法名大慈院鐵船廣濟

喬良　鶴次郎
家人鍋島五郎大夫種頁養子

直寛　虎八　満八　主税
實直恒四男
攝津守從五位下
寶暦十二年十二月十八日叙任
安永二年七月廿七日卒二十八歳
法名蟠龍院海印道供

女子
許嫁肥前守治茂早世

直温　常丸　直三郎　初直候
甲斐守從五位下
天明二年十二月十八日叙任

女子

守尋　龜三郎
家人牟田諸左衛門守陣養子

女子三人
信濃守董茂養女
家人中野八右衛門好古養女
家人大塚六右衛門常芳養女

直朝　仁王　初茂繼
母
東照宮御養女實岡部内膳正長盛女
初孫平太正茂養子後別爲家
刑部大輔從五位下
寶永十七年十二月廿九日叙任
後改和泉守
寛文十二年十二月九日致仕號紹龍
寶永六年十一月十九日卒八十八歳
法名書明寺高岳紹龍

直寛　虎八

女子
家人鍋島左膳稱信養女

女子三人

朝英　中務　早世

女子

某　辰之助
家人勝屋勘右衛門茂晴養子

格峯　僧

某　早世

某　英丸　早世

女子

茂之　久松　早世

女子
家人鍋島周防茂之妻

直堅　岩松

直郷　織部　初直吉
備前守從五位下
享保十七年十二月十六日叙任
寶曆十三年十一月十六日致仕
明和七年十月五日卒五十三歳
法名天祥院恭山際運

直條　伊賀　右京　初直隆
備前守從五位下
寛文十二年十二月廿八日叙任
寶永二年四月晦日卒五十一歳
法名正統院泰窩實春

某　久丸

某　中將

朝淸　式部

朝則　左門
家人鍋島左門宜平祖

女子一人

直熙　中務　後治茂
實信濃守宗茂十男
和泉守從五位下
寶曆十三年十二月十八日叙任
明和七年七月五日繼信濃守重茂

和泉守從五位下
寶永六年十二月廿五日叙任
後改刑部少輔
享保十二年十二月四日卒三十二歳
法名德雲院大年隆雄

某　虎之助

堅武　多宮

直宜　守三郎
實紀伊守直員四男
明和八年十一月十一日繼直熙
和泉守從五位下
安永七年十一月十六日叙任
後改備前守

直年 千六郎

女子二人

忠茂 半助
和泉守從五位下
慶長六年叙任
寬永元年八月四日卒四十一歲

正茂 孫平太
寬文四年十二月廿七日致仕
剃髮號宗甫
貞享三年十一月十八日卒八十二歲

茂久 右衞門
勝茂家人佐野右京助茂義養子

茂貞 雅樂助
爲勝茂家人

女子
勝茂家人
鍋島若狹茂綱妻

某 虎尾丸 早世

茂繼 仁王 後直朝
實信濃守勝重九男
履歷見上

正恭 帶刀
今鍋島伊豫守直賢祖

鍋島　賜松平

○侍従兼丹後守藤原光茂は肥前守忠直か嫡男なり忠直は勝茂か子なりされと家つかすして世を早うしけれは（元和五年二月廿八日はしめて見參し同き八年叙爵して御家號に御諱字をたまひ寛永十二年正月廿八日卒す二十二歳）光茂祖父か嗣となりし童名は翁介といふ正保元年三月三日はしめて見へたてまつり（家譜にいふ所ははしめ外祖松平下總守忠明かこひ申せしにより光茂六歳のとき寛永十四年はしめて見參にかく幼稚なれは忠明にともなはれめのとの女房につきそひ御所にいつ大臣家（大猷院殿の御事）光茂を御膝のもとにめされてもてあそひものをたまはりしと云ふ）慶安元年十二月廿七日御家號賜はり（此家御諱の字賜はる度毎に御家號ゆるさるゝ例なり）御諱字をたまひ従四位下の丹後守に叙任し（二字國俊の御刀をたまふ）明暦三年二月十九日勝茂致仕して家をつく（肥前國佐賀三十五萬二千石餘）長崎警衛の事も祖父か時のことく奉る（長崎警固の濫觴をたつぬるにいにしへ寛永十七年南蠻船（なれこた船といふ）一艘彼處に着岸せりもとより制禁の事なれはのち來りしものとも多く討せられきそのとき勝茂約命をうけたまはりて家の老等に士卒數十人をそへて湊を伏せしを初にてこれに繼て黒田忠元かこの事をうけたまはるおなしき十八年勝茂歸國のいとま給はりしとき忠元にかはりて警固せよと仰下されしかはこの湊の外に源堀といふ所に陣立して人數を置遠見ゝ衛所をあまたつくりたり明る年黒田と年毎に交代してまもるへきよし仰ーされけり連綿せしとなり）万治元年二月侍従に任し元祿八年の冬致仕して嫡男信濃守綱茂に家をゆつりおなしき十三年五月十六日年六十九にして卒す綱茂万治九年二月十八日はしめて見參し寛文七年十二月御諱の字賜り従四位下の信濃守に任し（助貞の御刀をたまふ）家つきし年侍従にすゝみ寶永三年の冬卒す五十五歳彈正直利をやしなひて家をゆつる直利ことし正月十二日はしめて見參したてまつり十一月御所にまいりて元服し従四位下左衛門佐に任し（後丹後守にあらたむ）御諱の字賜はりて吉茂とあらため（則成の御刀をたまふ）あくる四年五月二十七日家つきて十二月侍従に任す男子なけれは弟主膳直董をよつきとし享保十五年三月十八日六十五歳にして卒し直董享保元年十一月十八日はしめて見えたてまつり十二月十八日元服し御諱の字たまはりて従四位下の信濃守に任し宗茂と名のる（助忠の御刀をたまふ）同しき五年の五月二十六日家をつき十二月侍従にすゝみ元文三年致仕して嫡男万吉教茂（後宗茂）に家をゆつりその身は飛驒守にあらため寶暦四年十一月二十五日身まかりぬとし六十九教茂享保十五年八月十五日はしめて拜謁しおなしき十七年従四位下の丹後守に叙任し御諱の字を賜り宗教とあらため（盛宗の御刀をたまふ）元文三年十二月九日父につき侍従に任し寶暦十年の冬致仕し安永九年二月二日六十三歳にして卒すその子右平太直亮（後重茂とあらたむ）實は信濃守宗茂か七男なり兄宗教

か嗣となり寛文二年三月朔日はしめて拜謁し二十一日御諱の字賜はりて重茂とあらため從四位下の上總介に任す（政光の御刀をたまふ）寶暦十年十一月二十六日家をつきことし侍從にす丶むその妻先たちてうせけれは田安中納言殿（宗武卿）の息女をむかへて後の室として明和七年閏六月十日卒す（三十八歲）嫡子源丸世を早うしけれは舍弟和泉守直熙支族備前守直郷にやしなはれてその家つきて在けるをことし七月五日重茂か家をつかせらる直熙十一月七日從四位下の肥前守になり御諱字賜はりて治茂とあらため（正盛の御刀をたまふ）あくる八年侍從に任す（時に廿六歲）安永三年の春支族加賀守直愈御勘氣かうむりし時その緣座にて御前にいつる事をと丶めらる（此時國にありしゆへ御前にいつる事を止らるるよしに准してつ丶しみ居る事三十餘日なり）

○加賀守藤原直能は（鍋島と稱す）紀伊守元茂か子なり寶永十七年十二月十日初めて見參し慶安四年從五位下の飛驒守に任し（後加賀守にあらたむ）承應三年十二月父におくれて家をつき（肥前國小城七萬三千六百石餘）延寶七年十二月二十八日致仕し元祿二年に卒す（五月廿六日六十八歲）その子式部直賴（後元武）延寶二年二月七日はしめて拜謁しおなしき四年敍爵して紀伊守になり父か致仕の日家をつき元祿六年七月五日奧詰の衆に加へられ御代のあらたまりしのち寶永六年正月二十一日これもゆるさる正德三年正月二十六日致仕して其子加賀守元延に家をゆつり八月二十日五十二歲にして卒す元延これよりさき寶永六年十一月二十八日はしめて見參し敍爵して飛驒守に任し（のち加賀守）正德三年父につきおなしき四年五月晦日卒す二十歲よつきなかりけれは弟出雲直英して九月三日家つかす直英ことし從五位下加賀守に敍任し延享元年九月十二日卒す四十六歲その子三次郎直員寛保元年六月朔日初て見參し敍爵して紀伊守になり父かうせし年の十二月三日家をつき明和元年の冬致仕し嫡子伊三郎直愈に家をゆつり安永九年六月二十四日五十五歲にして卒す直愈明和八年はしめてまみえまいらせ敍爵して加賀守に任す（時に年十六）安永三年二月ことし有栖川殿下向によりて饗應の事をうけたまはりしに直愈年ころ資財とほしくてことにえたかひかたしとて公のものをかしたまはりまうけの事をと丶のへむとねかひ申せしにさはかりの用意なくして不覺の事を申よしにてみけしきよからす饗應の事終りし後御とかめかうふりて出仕をと丶めらる肥前守治茂

も直愈か事治茂宗家としてなとあひはかるむねもなかりつらん但し治茂在國の事なれは家人とものはからひゑとけなきによる所なりと仰下されしかは治茂をはしめ一家の人々にても面目なくおもひて門さすまてはなかりしかとゑはしは出仕をもはゝかりてありしか月をこへて事ゆりにけり

○攝津守藤原直之は鍋島と稱す甲斐守直澄か嫡男なり明暦二年六月五日初めて見參し万治三年の冬叙爵し寛文六年二月二十八日家をつく肥前國蓮池五萬三千二百石餘寶永五年十二月九日致仕して了閑と號しとしつもりて八十三歳享保十年に卒す直之男子三人みな世を早うしけれは弟主税直稱初之紀をやしなひて家つかす直稱元祿八年二月十八日はしめて見えたてまつり同き十三年從五位下甲斐守に叙任し享保二年四月九日致仕して嫡子主税直恒初は就稱に家をゆつり哲通と號してけり元文元年七十歳にして身まかりぬ直恒正德四年八月十一日はしめて見えたてまつり明る五年從下の五位して攝津守に任し享保二年家つきて寛延二年十月十六日卒す年四十九其子直之助直賢後直興おなしき三年三月二十日父につき四月朔日はしめて拜謁す十二月叙爵して甲斐守に任し寶暦七年五月二十九日年二十六にして卒す男子なかりしかは弟主税直寛をやしなひてよつきとす直寛あくる八年正月二十七日家をつきおなしき十二年九月十五日はしめて見參しことし叙爵して攝津守になり安永二年七月二十七日卒す二十八歳嫡子直次都直候のち直温明る年八月七日十二歳にして父につき九年十二月朔日はしめて見えたてまつり天明二年從五位下甲斐守に任す

○和泉守藤原直朝は初は茂繼○鍋島と稱す信濃守勝茂か九男也父か所領の地を分ち領す肥前國鹿島の地二萬石○はしめ勝茂弟和泉守忠茂に二萬石の地をさきあたへその子孫平太は正茂に傳ふ忠茂寛永の頃直朝をこひとりてよつきとせし也勝茂おもふ所ありしにや直朝をわか家によひとり正茂か所領をもたまひて忠朝にあたへ別に家を繼しといふ忠茂か傳は下に見へたり寶永十七年叙爵して刑部大輔に任し後和泉守にあらたむ寛文十二年の冬致仕して紹龍と號しその子右京直條に家をゆつり肥前國鹿島二萬石寶永六年卒す十一月十九日八十八歳直條寛文十二年二月二十一日はしめて見參し十二月九日父かゆつりをうけて從五位下の備前守に任し寶永二年四月晦日卒す五十一歳五男岩松直賢よつきとなり兄四人皆早世し父か卒せし年の六月五日遺領をたまはり九月朔日始て拜謁しおなしき六年叙爵して和泉守に任し後刑部少輔にあらたむ享保十二年十一月四

日卒すとし三十二その子織部直郷はしめ直吉あくる三年十一月六日家をつきおなしき十七年四月朔日初めて見參したてまつり此冬從五位下備前守に叙任し寶暦十三年十一月十六日致仕し明和七年十月卒す五十三歳長子中務直煕實は信濃守宗茂か十男也父か致仕の日家をつきことし十二月朔日初て見えたてまつり叙爵して和泉守になるしかるに宗家信濃守重盛卒し家つくへき子なかりけれは明和七年七月五日直煕よつきとなれりあくる八年十一月十一日一族紀伊守直員か四男守三郎直定に直煕か領地をたまふ時に十歳直定安永七年十一月十五日初めて見參しことし叙爵して和泉守に任す後備前守

○和泉守藤原忠茂は鍋島と稱す加賀守直茂か二男なり文祿慶長のあひた父と共に朝鮮の軍にしたかひ同き六年證人となり江戸にまいりて初めて見參し大相國家台德院殿の御事につかへ奉りことし御諱の字をたまひ又采地をたもふ下總國矢作の城五萬石御側小姓となるおなしき十三年これをゆるされ同き十五年兄信濃守勝方より所領の地をわかたれす肥前國鹿島二萬石へく二萬五千石寛永元年八月四十一歳にして卒すその子孫平太正茂つく正茂慶長十四年はしめて拜謁しそのゝち勝茂か九男仁三茂勝を養ひて子とすゝかるに寛永十九年にいたりて勝茂か先に忠茂にわかちし所領二萬石を茂繼にあたへて別につかへ奉り上に見えたり正茂は此ときよりはしめ賜りし采地五千石を知行せり寛文五年致仕入道して宗甫と號し延享二年三月十八日八十五歳にて身まかりぬ

蜂須賀

源忠英

光隆

綱通

某 小太郎 早世

吉武 熊次郎 加茂之助 初龍誠
修理大夫従四位下
寳永三年十二月五日叙任
享保十年五月二日卒三十四歳
法名仁艮院皙巖紹濬

女子 宗英養女

某 老之丞 早世

某 岩丸 早世

某 常千代 早世

隆壽 賴母
飛驒守隆長養子

女子
許嫁井伊備中守直提卒

綱矩ノリ　熊太郎　初龍之　正儔
實蜂須賀藏人隆矩男
淡路守從四位下
延寶六年十二月廿一日叙任
同七年十二月廿九日侍從
享保十三年正月廿三日致仕
改左衞門尉
同十四年十月廿六日薙髮號操山
同十五年十一月七日卒七十歳
法名南溟院操山廉節

女子二人　共早世

女子
許嫁家人山田織部宗名早世

宗員　隱岐　初正員
初飛彈守隆長養子
隱岐守從五位下
享保十六年十二月十八日叙任
同十年五月四日爲綱嗣
同年十二月七日從四位下改伯耆守
同十三年正月廿六日改淡路守
同十四年十二月十六日侍從
同廿年六月七日卒二十八歳
法名承國院泰運長淸

女子
井伊掃部頭直惟室

某　八五郎　早世

某　源吾　早世

女子三人
小笠原遠江守忠貞室
一人早世
許家大久保出羽守忠數卒

宗英　勘次郎　宮內　初隆秦
實蜂須賀隼人隆喜三男
享保廿年六月十日繼宗員
阿波守從四位下
享保廿年十二月十一日叙任
元文二年十二月十六日侍從
同四年十二月廿二日致仕薙髮號潛外
寬保三年二月晦日卒六十歳
法名威俊院幽嶽泰玄

充矩　文太郎　後重矩
宗鎭養子

某　早世

女子二人
一人早世
許嫁安藤對馬守信尹卒

女子　早世

女子
東園中納言基廣卿室

宗純　左門　初清純
實松平下總守忠雅二男
淡路守從四位下
元文三年十二月七日叙任
同四年二月十三日卒二十四歲
法名天雲院春峯玄義

女子　早世

重矩　文太郎　初元矩
實宗員三男初有故爲左京
隆壽子
民部大輔從四位下
延享四年十一月廿八日叙任
寶曆元年閏六月十三日卒十九歲
法名性德院哲山俊明

某　龜千代　早世

某　岩松　早世

女子　早世

重隆　和十郎　初隆興　帶刀
實左京隆壽三男
內匠頭從四位下
寶曆二年十二月十二日叙任
同三年八月十一日依病籠居

女子
花山院大納言愛德卿室

隆穀　蜂須賀和泉

宗鎮　松之助　志摩　初正泰
實松平志摩賴熙二男
隼人佐從四位下
元文四年十二月十一日叙任
同月廿五日改阿波守
寛保元年十一月十九日侍從
寶曆四年五月廿二日致仕
同年十月十九日改木工頭
安永九年八月廿七日卒六十歲
法名憲德院晦山宗景

女子
實修理大夫吉武女
宗鎮室

至央　鋏丸　志摩　初賴央
實松平志摩賴熙三男
寶曆四年七月十二日卒二十一歲
法名奐雲院仁祐龍澤

女子
井伊掃部頭直幸養女

某　養之助　早世

女子三人　共早世

休光　安之丞　主殿　初安詰

某　萬歲　早世

重喜　岩五郎　大炊　初義信　政胤
實佐竹壹岐守義道三男
從四位下阿波守
寶曆四年十一月廿五日叙任
同六年十二月十八日侍從
明和六年十月晦日有命讓
同治昭蟄居
同七年十月十六日改大炊頭

治昭　初喜昭　千松丸　從四位下阿波守　明和七年十一月七日叙任　安永元年十二月十八日侍從

某

女子

喜翰　若狹

喜和　豐前

喜起　駿河
爲家人

女子

允功　主計
爲家人

女子
鷹司關白政熙公室

允廸　大和
爲家人

女子
醍醐大納言輝久卿室

某　貝次郎　早世

女子二人
二人早世

某　繁之助　早世

某　亨之助　早世

女子

允澄　牧五郎　出羽
爲家人

允穎　健　早世

女子

某　勝三郎　早世

女子　早世

女子

女子　早世

女子

某　吉之丞　早世

隆重　萬之助　初至熙　正武
飛驒守從五位下
慶安四年八月十六日叙任
寶永二年十二月廿六日致仕號欽樂
同四年八月廿四日卒七十四歲
法名月江院盧錐雲公

隆喜　隼人

正上　玄蕃　早世

女子七人
阿波守綱通養妹
松平大學頭賴貞室
許嫁相良宮內少輔賴貞賴貞卒
嫁內藤紀伊守信輝
三人早世
隆長養女

隆長　吉之助　賴母
實隼人隆喜長男
下總守從五位下
元祿十三年十二月廿一日叙任
寶永二年十二月廿六日改飛驒守
正德四年九月十七日卒四十一歲
法名鶴峯院定應大心

隆長　吉之助
隆重養子

隆泰　勘次郎　後宗英
繼淡路守宗員

女子二人
一人早世
實隆重女
南部大膳亮利幹室

隆壽　左門　初豐龍　萬次郎　賴母
實淡路守綱矩五男
下總守從五位下
寶曆五年十二月十六日卒六十一歲
法名凌雲院寶山惠眼

正員　隱岐
實淡路守綱矩六男
隱岐守從五位下
享保六年十二月十八日叙任
同十年七月四日爲宗家嗣

蜂須賀

賜松平　附　飛彈守隆重

○淡路守源綱矩は阿波守綱通か嗣子實は蜂須賀藏人隆矩か子なり（隆矩は故阿波守忠英か四男なり）延寶六年十月七日父か遺領を賜ひ（阿波淡路兩國廿五萬七千石○家譜を按するにおなしき十九日伯父飛驒守隆重に私墾田三萬石をわかつといふ）十二月御家號御諱の字を賜り（此家御諱字賜る度毎に御家號ゆるさるゝ例なり）從四位下に叙し（左安吉の御刀を賜ふ）あくる七年の冬侍從に任すおなしき八年の夏あつかり人堀田正信みつからのどをきりてうせけれは同き七月十九日綱矩御咎かうむりて閉門せしかほとなくゆるされたり享保十三年正月廿三日致仕して左衛門尉にあらためやかて剃髪して操山と號しおなしき十五年十一月七日卒す七十歳なり綱矩男子多かりしかと長子小太郎は世を早うし二男修理大夫吉武は元祿十五年二月二十八日はしめて見えたてまつり寶永三年十二月御諱の字賜はり從四位下に叙し（行光の御刀をたまふ）けるか享保十年五月二日三十四歳にて身まかりぬ三男老之助四男岩丸は早世し五男賴母隆壽は支族飛驒守重隆にやしなはれしかは六男淡路守正員嗣となる正員初支族飛驒守隆長か家をつきしか兄吉武うせけれは家にかへり（これまで正員か領せし五萬石の地は綱矩にかへし賜はる）享保十年十二月從四位下に叙し御諱の字賜はりて宗員とあらたむ（三原の御刀をたまふ）父か致仕せし日家をつきあくる十四年侍從に任しおなしき二十年六月七日二十八歳にして世をさりぬよつきなかりけれは支族隼人隆長か次男宮内隆泰に同き十日遺領をたまはり十二月十一日御諱の字をたまはりて宗英と名のるこの日從四位下の阿波守になり（信國の御刀をたまふ）元文二年侍從に任しおなしき四年十二月二十二日致仕入道して潛外と號し寬保三年二月晦日六十歳にして卒すこれも子なかりけれは松平下總守忠雅か二男左門淸純をやしなひて子とす淸純は元文三年四月十五日はしめて拜謁し十二月從四位下の淡路守に任し御諱の字賜りて宗純とあらため（備前秀長の御刀を賜ふ）同き四年二月十三日二十四歳にして身まかりけれはかさねて松平志摩賴熙（讃岐守賴重の末子）か男松之助正泰をやしなひをのか女にあはせてよつきとす正泰元文四年十月十五日はしめて見參ことし御諱の字賜りて宗鎭とあらたむ從四位下の隼人佐に任し（後阿波守○延壽の御刀をたまふ）父か致仕の日家つきて寬保元年侍從にすゝみ寶曆四年五月二十二日致仕し杢頭にあらため安永九年八月二十七日卒す六十歳その

子鐵松至央實宗鎮か弟なりはしめ宗鎮男子二人ありしかとみな世を早うしけり此子いまた生れさりしとき家にありし左京隆壽（綱矩か五男）か子文太郎充矩をやしなふ（亮矩實は淡路守正員か子なり故ありて隆壽か子とせしとそ）充矩延享四年十月十五日初めて見えたてまつり十一月從四位下に叙し民部大輔に任し御諱の字賜はりて重矩と名のり（三原廣忠の御刀をたまはる）先たちてうせけれは隆壽か二男帯刀隆興を養ふこれは寶暦二年十一月朔日初めて拜謁し十二月御所にまいり元服し從四位下に叙し御諱の字賜はりて內匠頭重隆とあらたむ（助綱の御刀を賜ふ）しかるに病かちにて籠り居けれは此至央を嗣とはなされしなり寶暦四年四月十三日はしめて見參し父か致仕の日家ゆつられて所領をたまふことし七月十二日卒すとし二十一その子岩五郎政胤實は佐竹壹岐守義通か四男なり政胤八月二十五日遺領たまはり十一月二十五日御前にして元服し從下四位の阿波守になり御諱の字賜はりて重喜と改む（廣次の御刀をたまふ）同き六年侍從に任す（時に十九歲）明和六年重喜この年ころ國政たゝしからす家人國民等もなけきくるしむよし公にきこえけれは十月晦日重喜をしりそけて嫡子千松丸して家つかせられまた家のおとなともに仰下されしは重喜か心としてはからひし事ともはあらためてふるきおきてにしたかひ千松丸ひとゝならんまては親族のともからにもあひはかりて心をあはせ家政をおさむへしとそ有ける重喜此後德島におもむきて籠居したり千松丸喜昭ことし十三歲家繼きしはしめ父か事によりしはらく籠居しけるかあくる七年の二月出仕をゆるされて十一月七日元服し御家號及ひ御諱の字をたまはりて從四位下に叙し阿波守治昭とあらため名のる（盛景の御刀をたまふ）安永元年十二月侍從に任す

○飛驒守源隆重は（初至照正武蜂須賀と稱す）阿波守忠英か二男なり（前編に三男といふは誤なり）正保元年隆重十一歲のとき若君に（巖有院殿の御事）給仕せん事を父の忠英のそみ申せしかは左大臣家御感淺からすことし五月七日若君に見參してつかへ奉り慶安四年の秋叙爵し明暦三年三月十五日詰衆にくはへられ俸祿を賜はる（三千俵○家譜に延寶六年阿波守綱矩いとけなきほと後見せよと仰かうむりしかは詰衆の列を辭し申し十月十九日綱矩か所領五萬石わかちあたへ祿米は公にかへしいれたり○前編に忠英卒してのち五百俵をあたへ綱矩につきて一萬石を分つといふは誤なり）元祿元年四月十四日ふたゝひ詰衆となる寶永二年十二月二十六日致仕入道して欽樂といふおなしき四年八月二十四日七十四歲にして卒す

その子玄蕃世を早うしけれは弟隼人隆喜か長男頼母隆長を養ひて子とし元祿十二年十二月二十八日はしめて拜謁しあくる十三年叙爵して下總守に任し寶永二年十二月二十六日家繼く鴈の間祇候の衆となる飛彈守にあちたむ正德四年九月十七日四十一歲にして卒す長子吉之丞世を早うせしかは宗家淡路守綱矩か五男下總守隆壽をやしなひしに疾によりて籠居しけれは其弟隱岐守正員をよつきとす正員六歲にて正德四年十一月十六日父か遺領を賜り享保三年二月十五日はして見參し同き六年の冬叙爵して隱岐守になる同き十年兄修理大夫吉武卒しけれは正員宗家にかへりてよつきとなる

藩翰譜續編卷之八下

藤原綱勝

綱憲 初景倫 喜平次 實吉良上野介義英嫡男 侍從彈正大弼從四位下 延寶三年十一月廿三日叙任
元祿十六年八月廿一日致仕 寶永元年六月二日卒四十二歲 法名法林院映心

吉憲 勝千代 喜平次
民部大輔從四位下
元祿十一年十一月廿八日叙任
同十六年八月廿一日侍從
享保七年五月二日卒三十九歲
法名樹德院泰心

義周 左兵衛
吉良上野介義英養子

憲孝 主殿

宗憲 初憲英 勝千代 喜平次
侍從彈正大弼從四位下
享保八年十一月十一日叙任
同十九年五月十二日卒廿六歲
法名桂德院岳心

勝典 豐イ 政千代

義雄 飛彈守 下總守
畠山主計義躬養子

勝政 直千代

宗房 初勝豐 政千代 民部
實吉憲二男
侍從民部大輔從四位下
享保十九年十二月十一日叙任
延享三年八月十二日卒三(二)十五歲
法名英德院雄心

重定　直千代　大炊
初勝政
實吉憲四男
從四位下侍從兼大炊頭
延享三年十二月五日叙任
明和四年四月十四日致仕

治憲　直丸
初勝興
實秋月佐渡守種美二男
彈正大弼從四位下
明和三年七月十八日叙任
同四年十二月十六日侍從
天明五年二月七日致仕改越前守

女子
治憲室

勝熙　賴母

勝意　保之助

勝定　連之助
駿河守勝承養子

定興　近江

治廣　保之助　喜平次
初勝意
實重定三男
從四位下中務大輔
天明二年九月十九日叙任後改彈正大弼
同五年十二月十八日侍從

顯孝　直丸

顯孝　直丸
實治憲二男

某　久千代　早世

勝周　主税
駿河守從五位下
享保四年十一月十八日叙任
延享四年七月二日卒五十三歳
法名祥運

勝延　式部

女子
黒田甲斐守長治室

女子　早世

勝承（ヨシ）　幸松
駿河守從五位下
寶曆元年十二月十八日叙任
天明五年六月十日卒五十一歳
法名歸一

正矩　采女　幸之助
初勝職
金田幸次郎正峯養子

女子　早世

某　偲松　早世

勝定　達之助　靱負
實大炊頭重定四男
駿河守從五位下
天明五年十二月十八日叙任

上杉

○侍從兼彈正大弼藤原綱憲は播磨守綱勝か世つき實は吉良上野介義英か嫡男なり寛文四年六月五日家をつき（出羽國米澤十五萬石この時所領半を減せられし事は前編に見へたり）延寶三年十一月二十三日元服し御諱の字賜はり（備前長光の御刀をたまふ）從四位下兼彈正大弼に任す（ことし閏四月朔日はしめて見えたてまつるとそ）元祿十六年致仕し寶永元年六月二日四十二歲にして卒す其子喜平次元祿七年の冬はしめて拜謁しおなしき十一年十一月元服して從四位下の民部大輔に任し御諱の字をたまはりて吉憲と名のる（國次の御刀をたまふ）同き十六年八月二十一日父か家ゆつられてやかて侍從にすゝみ享保四年二月二十五日舍弟主稅勝周に所領をわかちあたふ（私墾田一萬石）おなしき七年五月二日廿九歲にて卒すその子勝千代憲英六月十八日遺領をたまはり七月朔日はしめて見え奉り（襲封の事を謝せし日なり）あくる年の冬元服して御諱の字を賜り從四位下の侍從に任し彈正大弼宗憲と改め（信國の御刀をたまふ）おなしき十九年五月十三日二十六歲にして世を早うす子なかりしかは舍弟民部勝豐をよつきとして六月二十八日家をつく七月二十八日はしめて見えたてまつり十二月十一日元服す從四位下の侍從に任し民部大輔をかね御一字賜はりて家房とあらため名のる（長九郞の御刀を賜ふ）延享三年八月二（三）十五歲にして卒すこれも子なかりしかは九月廿六日弟大炊勝政家をつく勝政ことし十月初めて拜謁し程なく首服を加へ從四位下の侍從兼大炊頭に任し御諱字賜りて重定といふ（盛景の御刀をたまふ）明和四年の夏致仕す（時に四十八歲）重定これよりさき秋月佐渡守大藏種美か二男直丸勝興を養ひて子とし明和元年の冬初て見えたてまつり同き三年七月元服して從四位下に叙し彈正大弼に任し御一字賜はりて治憲と名のり（正行の御刀をたまふ）父か致仕せし日家をつきその年十二月侍從に進み天明五年の春四十歲にして致仕す（越前守にあらたむ）これよりさき天明二年弟喜平次勝意をよつきとさたむ直丸といふ男子ありつれとも喜平次父のまさしき子なりけれは其血肉の親しみをおもへるなるへし勝意おなし年の七月朔日はしめて拜謁しやかて元服して御諱の字を賜り從四位下に叙して中務大輔治廣とあらため（康光の御刀をたまふ）同き五年二月七日家をつき十二月侍從にすゝむ

○駿河守藤原勝周は彈正大弼綱憲か四男なり正德四

年の秋はしめて見え奉り享保四年兄吉憲か領地をわかち領す出羽國米澤の内にて私墾田一萬石ことし叙爵して延享四年七月卒す五十三歲嫡男幸松勝承八月二十九日父か遺領をたまはり寶暦元年二月はしめて見えたてまつりこの年の冬從五位下駿河守に叙任し天明五年六月五十一歲にて卒すその子靭負勝定實は宗家大炊頭重定か四男なり天明三年の冬嗣となりあくる四年の春拜謁し又の年八月二日家をつき十九歲やかて叙爵し從五位下駿河守に任す

佐竹

源義隆タカ

女子　黑田甲斐守長興室

義寘ヲキ　所化丸　四郎三郎
式部大輔從五位下
承應三年十一月十八日叙任
寛文五年九月廿一日卒三十三歳
法名見應宗性

義都クニ　所化丸　四郎三郎　式部
式部少輔從五位下
寳永六年三月七日叙任
享保五年十一月廿七日致仕
同十年二月十五日卒六十一歳
法名泰翁常安

義堅カタ　福壽丸
右京大夫義峰養子

女子　早世

義苗ミツ　德壽丸　次郎
初義林
修理大夫從四位下
貞享元年十二月廿五日叙任
元祿十二年九月十八日卒三十九歳
法名天巖明公

叙胤　仁壽丸
初義珍
相馬彈正少弼昌胤養子

義處（スミ）　德壽丸　次郎
右京大夫從四位下
承應三年十二月廿六日叙任
寛文九年十二月廿五日侍從
元祿十一年十二月九日左近衞權少將
同十六年六月廿三日卒六十七歲
法名不山宗見

義慰（ヤス）　玄蕃

義堅　福壽丸　主膳
實式部少輔義都男
豐前守從五位下
享保五年十二月十八日叙任
同十七年五月十一日改修理大夫
同年十二月十二日從四位下
寛保二年二月四日卒九十一歲
法名性海惠潤

女子三人
藤堂佐渡守高通養女
松平越後守宣富養女
黑田隱岐守長軌室

義格（タダ）　千代助　千代丸　源次郎
侍從大膳大夫從四位下
寶永五年十二月十八日叙任
正德五年七月十九日卒二十二歲
法名實巖圓心

女子
松平出羽守宣維室

義峯　仙壽丸　求馬
初恭義
實壹岐守義長二男
侍從右京大夫從四位下
正德五年十二月十八日叙任
延享元年十二月十六日左近衞權少將
寛延二年八月十日卒六十歲
法名月翁智心

女子　早世

義眞　左吉　德壽丸　次郎
左兵衞督從四位下
延享三年十二月十八日叙任
寛延二年十二月十八日侍從
寶曆三年八月廿日卒二十六歲
法名融山了本

義明（ハル）　延壽丸　求馬
初義局
寶曆三年九月三日繼義眞
侍從右京大夫從四位下
寶曆三年十二月十八日叙任
同八年三月十八日卒三十六歲
法名德巖玄光

女子四人
松平隱岐守定喬室
松平丹波守光雄室
義明室
松浦壹岐守邦室

義長　千代松丸　左近
左近將監從五位下
寛文十年十二月廿八日叙任
延寶四年十二月十六日改壹岐守
享保三年九月六日致仕改兵部少輔
元文五年十二月七日卒八十六歳
法名空山宜彈

某　千代松
元祿二年八月十三日卒

女子　早世

義峯　仙壽丸
大膳大夫義格養子

義道　富千代　源六郎　求馬
實宗家家人佐竹將監義本長男
壹岐守從五位下
享保三年十二月十八日叙任
寶曆十三年五月十四日致仕改和泉守
明和元年閏十二月七日卒六十四歳
法名道安圓成

義局　延壽丸　求馬
左兵衛督義眞養子

義敏　勝千代　民部　求馬
寶曆十三年三月二日卒三十六歳
法名實相常睡

女子　早世

義祇　榮之助

女子

女子
松平賴母直道妻

義忠　富之助　多宮
初義陂
從五位下壹岐守
寶曆十三年十二月九日叙任
安永九年十一月七日致仕改播磨守

女子
義道室

重喜　岩五郎　大炊
蜂須賀志摩至英養子

義祗　榮之助
實義敏男
從五位下壹岐守
安永九年十二月十八日叙任

女子

義恭　中務

女子

義敦　秀丸　次郎
初義直
侍從右京大夫從四位下
寳暦十三年十二月九日叙任
天明五年六月十日卒三十八歲
法名恭岳良清

女子
許嫁松平虎壽丸早世

義和　直丸　次郎

女子

義方　左近

女子
谷播磨守衡量室離別

佐竹　附　式部少輔義都

○左近衛少將兼右京大夫源義處は左少將義隆か嫡男なり小字を次郎といふ正保三年八月十二日拜謁し承應三年從四位下に叙し寛文九年侍從に任すおなしき十一年父義隆卒してけれは明る十一年二月九日家をつき（出羽國秋田廿萬五千八百石餘）元祿十二年左少將にすゝみ同き十四年の春弟壹岐守義長姪四郎三郎義都に所領をわかつ（義長二萬石義都一萬石となる私墾田なり）同き十六年に身まかる（六月廿三日五十七歳）嫡男修理大夫義苗は世を早うし二男長門守叙胤は相馬彈正少弼昌胤にやしなはれしかは三男源次郎義格をよつきとす義格元祿十六年四月朔日はしめて見えたてまつり八月十二日父につき寶永五年從四位下の侍從になりて大膳大夫をかぬ正德五年の秋二十二歳にして卒す子なかりしかは叔父壹岐守義長か嫡子求馬義峯を嗣とす義峯はしめ父義長かもとにありし頃はしめて拜謁しことし家つきて從四位下侍從兼右京大夫に任しそのゝち左少將にすゝみ寛延二年の秋六十歳にして卒す義峯子なかりしかは支族豐前守義堅を養ふ（義堅か所領一萬石は義峯にかへし附らる）義堅享保十七年修理大夫にあらため從四位下に叙し寛保二年義峯にさきたちて卒すその子次郎義眞嗣となり延享元年はしめて拜謁しおなしき三年從四位下左兵衛督に叙任し寛延二年十月二日家つきてのち侍從にすゝむ寶暦三年八月二十日二十六歳にて卒すよつきなかりけれは支族壹岐守義道か子求馬義明して九月三日家つかせらる十二月十八日義明從四位下に叙し侍從に任し右京大夫をかぬおなしき八年卒す（三月十八日三十六歳）嫡子次郎義敦ことし五月十一日父か遺領をたまはりおなしき十三年二月はしめて見參し十二月四位の侍從して右京大夫をかね天明五年六月三十八歳にて卒しその子次郎義和つく（時に十五歳）

○式部少輔源義都は式部大輔義寘か男なり義寘は修理大夫義隆か庶長子にて慶安二年はしめて見えたてまつり承應三年の冬叙爵せしか義隆に先たちて身まかりぬ義都幼名を四郎三郎といふ天和二年十二月二十一日はしめて見えたてまつり元祿十四年二月十一日叔父右京大夫義處か所領をわかち領す（私墾田一萬石）寶永六年の春叙爵して享保五年十一月二十七日に致仕しおなしき十年卒す（二月十五日六十一歳）その子主膳義堅元祿十

五年十月はしめて見えたてまつり父かゆつりをうけ家をつきやかて叙爵して豊前守に任し享保十七年の夏宗家のよつきとなる

○壹岐守源義長は修理太夫義隆か四男なり寛文八年はしめて拜謁し同しき十年叙爵して左近將監に任す（後壹岐守にあらたむ）元祿十四年二月兄右京大夫義處か所領をわかち領す（私墾田二萬石）享保三年九月六日致仕し（兵部少輔にあらたむ）元文五年の冬卒す（十二月七日八十六歳）嫡子求馬義峯は大膳大夫義格にやしなはれしかは宗家の家人佐竹將監義本か長子源六郎義道におのか女をあはせてよつきとす義道享保元年の冬はしめて拜謁し家つきし年叙爵して壹岐守に任し寶暦十三年の春致仕し（和泉守にあらたむ）あくる明和元年閏十二月七日六十四歳にして身まかりぬ長子求馬義明は宗家をつき二男民部義敏は先たちて卒し三男多宮義忠寶暦十三年四月はしめて見えたてまつり五月十四日家つきて十二月從五位下の壹岐守任し安永九年致仕し（五十一歳○播磨守にあらたむ）姪の榮之助義祇を子とし養て家をゆつる義祇は民部義敏か男なり安永二年はしめて見參し同しき九年從五位下壹岐守に叙任す（時に廿二歳）

岩城

平宣隆

重隆　庄次郎　左京
伊豫守従五位下
明暦二年十二月廿六日叙任
寛永元年二月十八日改仕號月峯
同四年十二月十一日卒八十歳
法名大通院雄山月峯

女子　早世

隆房　甚次郎　主殿助

女子　石川美作守乗政室

景隆　百助　權之助
依病籠居
元禄九年四月十八日卒
法名孤岳院郭山了然

女子二人　一人早世　柳生備前守俊方室

某　花園彈正　早世

女子　早世

某　平次郎　早世

秀隆　采女
伊豫守従五位下
寛永六年四月十五日叙任
享保三年十月廿五日卒四十六歳
法名常心院智觀道光

某　千次郎　早世

某　榮次郎　早世

隆韶（ツグ）　久之助　左京　初清隆
實松平陸奥守家人伊達肥前村興二男
但馬守從五位下
享保六年十二月十八日叙任後改河内守
延享三（一）年八月廿九日卒三十八歳
法名眞正院擧山道揚

某　早世

隆恭　鶴次郎　數馬　民部　初倫隆　村壽　隆光
實松平陸奥守家人伊達下總村堅男
伊豫守從五位下
延享二年閏十二月十六日叙任後
改左京亮
天明二年十一月五日卒五十九歳
法名正德院善明祗眼

女子三人　共早世

某　庄三郎　早世

女子
細川和泉守立禮室

隆恕（ノリ）　熊吉　采女
伊豫守從五位下
天明四年十二月十六日叙任

女子二人
一人早世
織田織部信應妻

某　卯之吉　早世

岩城

○伊豫守平重隆は但馬守宣隆か嫡男なり寛永の頃はしめて見へたてまつり明暦二年七月二十五日家をつき(出羽國の亀田の地二萬石)ことしの冬叙爵し寶永元年二月十八日致仕して月峯と號しおなしき四年十二月卒す八十歳その子權之助景隆多病にして籠居し嫡孫采女秀隆家をつく同しき六年從五位下して伊豫守に任し享保三年四十六歳にして卒す秀隆男子二人みな世を早うしけれは松平陸奥守吉村か家人伊達肥前藤原村興(吉村か弟)二男久之助隆韶を養ひて家つかす隆韶十二月十五日はしめて拜謁し(襲封を謝し申せし日なり)おなしき六年從下五位の但馬守になる(後河内守にあらたむ)延享二(三)年卅八歳にして卒すこれもまた繼きなかりけれは伊達下總村堅(松平陸奥守宗村か家人)か子民部隆恭を養ふ隆恭ことし十二月十日家をつき十二月朔日はしめて見え奉り(襲封の事を謝せし日なり)閏十二月從五位下して伊豫守に任し(後左京亮にあらたむ)天明二年卒す(十一月五日五十九歳)その采子女隆恕天明元年の夏はしめて拜謁しあくる二年十二月二十九日父か遺領を賜はり(時に十六歳)おなしき四年十二月叙爵して伊豫守に任す

秋田

安倍盛季（スヱ）

就季　初廣季　萬千代　大藏　伊豆守従五位下　貞享二年十二月廿八日叙任
正徳五年六月五日卒四十九歳　法名大通院心源貞性

女子二人　共早世

某　松原勝之進早世

女子二人　一人早世
秋田兵部季端妻

頼季　主水　初季侶
實家人荒木玄蕃高村（守村）長男
初秋田平大夫季豊養子
主水正従五位下
正徳五年十二月十八日叙任
享保六年六月十日改信濃守
寛保三年六月朔日卒四十八歳
法名廣運院俊徳玄明

某　萬千代

女子二人　一人早世
輝季養女

延季　民部　東太郎　初治季　致仕後太季
河内守従五位下
享保廿年十二月十六日叙任
寶暦元年九月廿二日致仕
同三年六月廿三日改山城守後號扇裏
安永二年七月六日卒五十六歳
法名天稟院令徳永顯

女子　伊東出雲守祐實室

女子　早世

某　東太郎　早世

輝季　萬吉　大藏
信濃守従五位下
寛文二年十二月廿七日叙任
正徳五年十二月七日致仕
享保五年九月十九日卒七十二歳
法名乾元院剛山瑞陽

女子　早世

女子　酒井雅樂頭親本室

女子　實廣季女　賴季室

女子　本多豐後守助盈室

季陳　富二郎

某　安五郎　早世

女子三人　一人早世　許嫁秋田內膳季通早世　一人早世

定季　富三郎　主水　初季陳
實賴季二男
主水正從五位下
寬延三年十二月十八日叙任
寶曆七年六月十四日卒三十二歲
法名恭德院仁則惟敬

某　春之助　早世

千季　乙之助

淸季　乙之助　東太郎　初千季
實延季二男
信濃守從五位下
明和四年十二月十六日叙任

女子　內藤駿河守賴多室賴多卒
嫁秋田淡路守季高離別

女子二人　一人早世　加藤右京恭尹室

某　東太郎　早世

女子　早世

謐季　乙之助

女子二人

―季高　兵之助　早世
　　　織之助

―季保　安東與五郎　早世

―氏紀　安東七郎　式部
　岩瀨吉左衞門氏以養子

―女子
　秋元但馬守凉朝養女

―季周　安東政之助　吉之助
　　　後稱秋田左京

―季房　八郎　左近
　秋田平大夫季恭養子後歸

―女子
　永井十左衞門直親妻離別
　許嫁上川長門守義篤義篤死嫁
　井戸新十郎公長

―女子　早世

秋田

○信濃守安倍輝季は安房守盛季か二男也萬治元年の秋はしめて見へたてまつり寛文二年十二月従五位下の守になる延寶三年父盛季大坂の城の守もりにさゝれてのほりしか病にふしておもりぬときこえけれは明る四年の正月輝季公にいとま申てはせのほりしに盛季つゐにうせけれは三月六日かしこにして遺領を賜り陸奥の國三春の城五萬石父かかはりとしてすくにとゝまりて城中を守る貞享元年十二月ことに思召所やありけん輝季を譜第の衆にくはへたまふ家の譜に輝季かおほち河内守俊季は左大臣家に御ちなみありしかは常に御かへり見あさからさりしほとに日光山の御もうてよりはしめて供奉警衛の事はいつも譜第の人々うちましりてつかうまつれり父盛季はいたはる所ありてはかゝしく出仕をもせさりしゆへはしめのほとこそあれ後にはいつとなく外樣にはさふらひけりされと新正の拜賀三日の夜のさいけものなとは猶譜第の人々のなみにてありけれはかゝるゆいしよにやいまはた譜第の列に仰下されしといふその子大藏就季叙爵して伊豆守になりしか正德五年六月父に先たちて卒し家つかすへき子なかりしかはことし七月支族主水頼季をやしなひてよつきとし輝季やかて致仕して家を譲り享保五年九月七十二歳にして卒す頼季まことは輝季家人荒木玄蕃守村(高村)か子也始め支族平大夫季豐か家繼きてまた宗家にやしなはる采地八百石は公にかへしいれたり正德五年十二月七日家を繼き叙爵して主水正になる後信濃守にあらたむ享保十五年三月七日門さして引籠るこれは此頃家人の仕置正しからす玄かのみならす荒木玄蕃は家人なからもまさしきをのか父なるをめしこめたるによりてなりおなしき七月そのつみをゆるされ寛保三年六月四十八歳にて卒す其子東太郎延季享保十九年三月はしめて見參し明る二十年の冬叙爵して河内守に任し父におくれて家をつき寶暦元年九月致仕す山城守にあらため後入道して扇裏と號し五十六歳にて安永二年七月六日に卒す延季子なかりしかは弟主水定季を嗣とす去年の八月十五日はしめて見え奉り十二月叙爵して主水正に任し家譲られて同き七年六月三十二歳にて卒すこれも子なかりしかは延季か子の乙之助清季してつかせたり清季明和四年の秋はしめて見參しことし叙爵して信濃守に任す時に十七歳

相馬

平貞胤（タネ）

- **昌胤** 東千代松　采女
  實長門守忠胤二男
  彈正少弼從五位下
  延寶七年十二月十八日叙任
  元祿十四年二月十一日致仕
  享保十三年十月六日卒六十八歳
  法名逵德院勢譽岐岩孔照
- **女子**
  北條左京氏朝妻離別

- **叙胤**（ノブ） 仁壽丸　求馬　初義珍
  實佐竹右京大夫義處二男
  圖書頭從五位下
  元祿九年十二月廿二日叙任
  寶永五年五月十五日改長門守
  同六年六月五日致仕
  正德元年四月廿日卒三十五歳
  法名香雲院鑁翁玄鏈
  - **尊胤**（タカ） 東千代松　民部　初清胤　宗胤
    實昌胤二男
    讃岐守從五位下
    寶永七年閏八月廿三日叙任
    享保十三年十一月廿八日改彈正少弼
    明和二年五月廿一日致仕
    安永元年四月九日卒七十七歳
    法名壽高院仁譽廉節瑞巖
  - **某** 次郎　早世
  - **某** 延壽丸　早世
  - **德胤** 菊千代
- **女子**
  叙胤室
- **尊胤** 東千代松
- **女子二人**
  許嫁松平肥前守武雅武雅卒
  許嫁毛利但馬守廣豐早世
  板倉甲斐守勝重室

福胤　主膳　釆女
寶暦八年六月四日卒

女子　尊養女

信胤　式部　早世

女子
佐竹壹岐守義祇室離別

齋胤　伊織
天明六年八月二日卒二十六歳

徳胤　菊千代　内膳
實叙胤四男
因幡守從五位下
享保元年十二月十八日叙任
寶暦二年五月十五日卒五十一歳
法名洞嶽院別宗覺天

女子
實釆女福胤女
大久保大和守忠元室

恕胤　内膳
讃岐守從五位下
寶暦二年十二月十六日叙任
後改因幡守
天明三年十二月八日致仕
同四年十一月十八日改長門守

祥胤　吉次郎
讃岐守從五位下
安永七年十二月十六日叙任
天明四年正月十八日改因幡守

女子
織田左近將監信浮室

某　英次郎　早世

女子
許嫁松平采女正忠房早世

某
暢次郎

某
内膳

相馬

○彈正少弼平昌胤は長門守忠胤か二男にて采女といひし時延寶四年四月しはめて見え奉り同しき七年兄出羽守貞胤世を早うせしかは十二月十八日昌胤家繼きて陸奥國中村の城六萬石叙爵し元祿二年の春奥詰衆にくはへられ六月には御近習になさるされと身いたはる所多かりしかはいくほとなくして辭し申すあくる三年の七月に奥に候する事をもゆるされ同き十四年二月十一日致仕し享保十三年十月六日六十八歳にして卒す昌胤子なかりしかは佐竹右京大夫源義處か二男求馬叙胤を養ひて嗣とす叙胤元祿五年十二月はしめて見參にいり同き九年從五位下圖書頭に任し後に長門守昌胤か致仕せし日家を繼く叙胤もまた身煩はしけれは寳永三年十二月舍弟民部尊胤を嗣としおのか子菊千代を尊胤か世つきとす民部尊胤は昌胤か子にて叙胤か養はれし後に生れたるなり明る六年六月致仕して尊胤に家ゆつり正德元年四月三十五歳にしてうせぬ尊胤家繼し明くる年閏八月叙爵して讃岐守に任し後に彈正少弼に改む明和二年に致仕し安永元年に卒す七十七歳菊千代德胤正德四年七月二十一日はしめて見え奉り享保元年叙爵して因幡守に任し寳暦二年尊胤に先たちてうせけれはその子內膳恕胤を嗣とす恕胤これよりさき寳暦元年はしめて見え奉りおなしき二年叙爵して讃岐守に任し後に因幡守明和二年五月二十一日家繼きて天明三年十二月二日致仕す四十九歳後又長門守にあらたむ長子式部信胤は世を早うし二男伊織齋胤は病ありしかは三男吉次郎祥胤よつきとなり安永六年四月はしめて拜謁しおなしき七年從五位下の讃岐守に任し時に十八歳家ゆつられて後因幡守にあらたむ玄かるに此ころ關東の國々米穀みのらすして諸民うゑ苦しむ事大かたならさりしなかにも祥胤か所領中村は土地もひろかりしかとも近頃凶年うちつゝきて家貧とほしかりしにまた關東奥羽の地おしなへて饑饉の年にさへあひて領民をたすくる手たてをうしなひしかは公の恩惠をあふき望みしに祥胤か凶荒のまうけおろそかなる事をいましめさせたまひてみけしきあしかりけれとも士民のうれひもたしかたしとて公のもの黃金五千兩をかし賜はる祥胤は玄はし出仕をとゝめられたり天明四年十二月の事なりあくる年の二月にいたりて事とけぬ

丹羽

藤原光重

女子二人　共早世

長之　主殿　初重昌
實左京大夫重二男
越前守從五位下
元祿五年十二月廿八日叙任
同十三年二月七日卒四十五歲
法名巖松院徹外宗法

秀廷　五郎三郎　初尹量
左京大夫從五位下
元祿十六年十二月廿一日叙任
寶永五年十二月十八日從四位下
享保十三年九月十一日卒三十九歲
法名泰雲院鐵山玄榮

女子　秀廷養女

長次　鍋丸　大膳
若狹守從五位下
萬治元年閏十二月廿七日叙任
延寶三年十二月廿六日從四位下
元祿五年十二月十八日侍從
同九年十二月五日改左京大夫
同十一年六月廿六日卒五十六歲
法名興國院節山廓功

女子二人　松平伊豫守綱政室　松平出雲守義昌室

重昌　主殿

女子　西尾隱岐守忠成室

高寛　百介　五郎左衛門
實丹羽近江守長道長男
左京大夫従五位下
享保十三年九月七日叙任
同十九年十二月十八日従四位下
延享二年五月九日致仕
寶暦十二年十月十一日剃髪號豁如
明和六年七月二日卒六十三歳
法名天嶽院豁如了然

女子
實長之女
高寛室

高庸　百介　五郎左衛門
若狭守従五位下
寛保元年十二月廿五日叙任
寶延三年十二月十八日従四位下
明和二年十二月十四日卒三(二)十八歳
法名天洞院柏庭宗

女子一人
阿部伊豫守正右室
稲葉丹後守正益室

長倫　大膳
生駒主殿頭親賢養子

女子
西尾播摩守忠雅室

長圓　頼母
津田外記正春養子

女子一人
中川内膳正久徳室離別
松平丹後守直恭室

長貴　五郎左衛門
左京大夫従五位下
明和三年十二月十九日叙任
安永元年十二月十八日従四位下
同四年二月七日改加賀守

女子
松平丹後守直恭繼室離別
嫁間部下總守詮茂

長恒　伊織一作織部

女子一人
太田攝津守資順室
本多豐後守助受室

—女子三人　丹羽左近長祐妻　小濱長三郎政隆妻　管谷兵庫政常妻

—長賢　大學

—希驥（ヨシ）　鍋太郎

—女子

—貴戠（トシ）　健五郎

—女子

—某　修藏

丹羽

○左京大夫藤原長次は故の左京大夫光重か嫡子なりはしめは大膳といふ承應二年三月十五日はしめて見えたてまつり萬治元年從五位下に叙し若狹守に任し後左京大夫にあらたむ延寶三年の冬從下の四位にのほりおなしき七年父かゆつりをうけて家をつき陸奥國二本松の城十萬七百石餘光重か事は前編に見へたり致仕の後入道して玉峯といふ元祿十四年四月十一日八十一歳にて身まかれり元祿五年十二月侍從に任し年五十六歳にしておなしき十一年六月二十六日卒す男子なかりけれは弟主殿長之を嗣とす長之これよりさき貞享四年九月はしめて見えたてまつり元祿五年七月兄にやしなはれ十二月從下の五位して越前守に任すおなしき十一年家をつき十三年四十五歳にして卒すその子五郎三郎秀延あくる年の二月三日父か遺領をたまひおなしき十五日はしめて見えたてまつる襲封の事を謝せし日なりことし四月溝口源兵衛勝興大久保源右衛門忠識等を二本松の城に下さる國目付といふ是秀延か幼稚なるによる所なりおなしき十六年從五位下左京大夫に任し寶永五年の冬從四位下にのほる享保十三年三十九歳にして卒すその子五郎左衛門高寛實は一族近江守長道の長子なりことし六月遺領を賜り七月朔日はしめて見參し九月叙爵して左京大夫に任すおなしき十九年の冬從下の四位になほり延享二年致仕しのち入道して豁如と號し明和六年七月卒す年六十三その子五郎左衛門高庸寛保元年の夏はしめて拜謁し十二月從五位下若狹守に任し家繼て後寛延三年從下の四位にのほり明和二年に卒す二(三)十八歳その子五郎左衛門長貴あくる三年の春遺領をたまふこのとしの冬叙爵して左京大夫に任し時に十六歳安永元年十二月從四位下に任すのち加賀守にあらたむ

立花

源鑑連（アキツラ）

宗茂

忠茂

某　早世

女子　早世

某　千熊丸　早世

女子二人　一人早世　一人小野勘ヶ由直俊妻

茂虎　帯刀

茂高　帯刀

茂之　主水

茂易　友之丞　彈正貞晟養子

鑑虎　勝千代　大助　初直茂　廣茂　鑑茂
左近將監從五位下
萬治二年十二月廿七日叙任
寛文四年十二月十八日從四位下
延享四年十二月十三日改飛驒守
元祿五年十二月十八日侍從
同九年正月四日致仕剃髮號英山
同十五年六月廿三日卒五十八歲
法名雪峯院英山性俊

女子　早世

某　鑑千代　早世

茂辰　山三郎　文助　大膳　初宗滿
延寶六年三月廿七日卒廿三歲

女子三人
實飛驒守忠茂女
松平肥前守綱政室
一人早世
小出大和守英益室

某　千熊丸　早世

鑑任　大助　勝千代　初宗直　宗昌　宗政　鑑常　鑑春
飛驒守從五位下
元祿九年十二月廿三日叙任
同十二年十二月十八日從四位下
享保六年五月十三日卒三十九歲
法名靈明院常心法鑑

某　吉之助　早世

某　岩次郎　早世

女子四人
三人早世
家人小野和泉守隆幸妻

某　勝千代　早世

貞俶　友之丞　右京　彈正　初茂昜　淸直
實帶刀茂高二男
初彈正貞晟養子
飛驒守從五位下
享保六年十二月十八日從四位下
同八年十二月十八日叙任
延享九年五月廿七日卒四十七歲
法名奏源院玆雲紹蔭

女子
永井越中守尙房室

茂堅 石見
家人矢島上水俊行養子

女子
家人由布五兵衛惟長室

貞晟 千德丸 源五郞 彈正
享保五年十月廿四日卒六十一歲

貞俶 友之丞
實帶刀茂高二男
後鑑任養子

女子
貞俶室

女子二人
家人立花三左衛門鎭信妻
鑑虎養女

虎重 采女
家人矢島石見行知養子

女子

某　孫次郎　早世

貞則　虎吉　虎之進
丹後守從五位下
元文五年十二月廿一日叙任
寛保二年六月五日改伯耆守
延享元年七月十九日改飛彈守
同二年閏十二月十六日從四位下
同三年七月廿七卒廿二歳
法名等覺院廓融性瑩

俶香　駒之丞

女子二人
家人立花主水茂矩妻
松平大膳大夫重就室

某　己三郎　早世

女子
家人小野若狹隆局妻

鑑通　駒之丞　左近
初俶香　鑑致
實貞俶二男
從五位下左近將監
延享三年十二月十八日叙任
寛延二年十二月十八日從四位下
安永六年十二月十八日侍從

女子二人
一人早世
家人立花帶刀茂親妻

鑑門　富之進
從五位下丹後守
安永四年閏十二月十一日叙任

女子二人
家人立花內膳壽德妻
一人早世

通玄　大之丞　早世

通厚　友壽

鑑一　千之丞

女子
家人戸次織部通英妻

通尹　圖書

致傳　主税

致眞　監物　初致增

女子　松平阿波守重喜妻

通孝　戸次爲之丞

致知　皐之助　靫負
山名中務豐暄養子

直次

種長　仙千代　彌七郎
和泉守從五位下
萬治三年十二月廿八日叙任
天和二年二月廿七日致仕號道運
正德元年二月朔日卒八十七歳
法名壽德院泰叟道運

女子
細川玄蕃頭興時室

通經　隼人
家人矢島采女行崇養子

通堅　兵部

女子　早世

種次

種明　彌七郎　主膳
元祿十二年正月八日卒五十六歳
法名天德院條叟淨英

女子五人
家人立花友之進通寛妻
同立花勝壽政峯妻
同矢島重千代某妻
同小野勘解由隆儀妻

貫長　民部
出雲守從五位下
寶永六年十二月七日叙任
延享四年五月廿一日卒六十一歳
法名靈通院仁翁紹覺

―某　早世
―種世　宇右衛門
―女子　左近將監宗茂養女

―種澄　五右衛門　左兵衛　正德五年十月三日卒　今立花大吉種鄉祖
―種義　權之助　家人三原忠左衛門某養子
―種久　伊左衛門　式部　後號墨外
―種要　宇右衛門　早世
―種正　內記　兵部　後正明　秋山十兵衛門養子
―女子二人　立花帶刀茂高妻　家人屋山又兵衛孟貞養女
―宗之　市正　家人屋山又兵兵衛孟貞養子

―種盈　主稅
―女子二人　共早世
―某　共早世
―女子　實式部種久女　渡邊平十郎武妻

長熙　彌七郎　民部
和泉守從五位下
延享四年十二月十九日叙任
寶暦十二年九月廿六日致仕
安永七年閏七月二日卒五十九歳
法名明徹院英相紹眞

女子
許嫁井伊伯耆守直貞直貞卒
嫁青山百助成昭

直卷　巷イ　兵庫
黑田源右衞門直方養子

女子
加納大和守久堅室

孝山　牛之助
八幡山豐前坊

直尹　內匠

某　彌七郎　早世

種周　勝之助　民部　主膳
出雲守從五位下
寶暦十二年十二月八日叙任

種德　造酒丞

女子

某　政之助

某　勝次郎　早世

長堅　勝之進　早世

種盈　豐之助
安部兵庫信盈養子

種武　富丸
立花左兵衞達好養子

種幸　內藏
堀長門守直鄉養子

女子
三宅備前守康武室康武卒
嫁宮原長門守義潔

女子二人
立花監物種秀養女
家人屋山又兵衛繼平養女

應興　兵部

女子　早世

某　直之進　早世

立花

○飛驒守源鑑虎は（初は直義廣茂鑑茂といふ）故の飛驒守入道好雪か四男なり（嫡子某次男千熊丸早世し三男帯刀茂虎は庶子なり）万治元年四月はしめて拜謁しあくる二年十二月從五位下左近將監に任し寛文四年閏五月七日父かゆつりをうけて家をつく（筑後國柳川の城十萬九千石餘）ことし從四位下に叙し元祿五年侍從にすゝみおなしき九年致仕の後入道し英山と號し五十八歳にして同き十五年六月卒すその子勝千代鑑任元祿三年十月はしめて見えたてまつり家繼て後叙爵して飛驒守に任しおなしき十年六月十四日叔父彈正貞晟に所領をわかつ（私墾田五千石○前編には鑑虎か時にわかちしとしるす）同き十二年從下の四位にのほり享保六年五月卒す三十九歳その子勝千代世を早うしけれは從弟彈正貞俶を嗣とす（貞俶實は帯刀茂高か子にてこれよりさき彈正貞晟か家つきてありしなり）ことし七月鑑任か遺領をたまはりて十二月從五位下飛驒守に任し中一年をへてゝ從四位下に叙し延享元年五月四十七歳にて卒す長子孫次郎はいとけなくしてうせけれは二男虎之助貞則よつきとなれり元文四年八月十五日はしめて見參し明るとし從下の五位して丹後守に任し（後伯耆守又飛驒守にあらたむ）父か卒せし年家をつき延享二年從下の四位にのほりおなしき三年二十二歳にて世を早うし子なかりけれは弟左近鑑通よつきとなりことし十月十日家をつく（十八歳）やかて見參し十二月叙爵して左近將監になる寛延二年從下の四位にのほり安永六年の冬侍從にすゝむ長子富之進鑑門安永三年三月はしめて見えまいらせあくる四年叙爵して丹後守に任す

○主膳源種明は和泉守種長の嫡子なり天和二年二月二十七日父致仕して（入道して道運と號し正德元年二月朔日卒す八十七歳なり）家をつさ（筑後國三池一萬石）元祿十二年正月五十六歳にて卒す嫡子民部貫長元祿八年の秋はしめて見えたてまつり家繼て後寶永六年從五位下に叙し出雲守に任し延享四年卒す（五月廿一日六十一歳）嫡子民部長熈享保二十年閏三月はしめて拜謁し延享四年七月遺領と賜りやかて從五位下和泉守に任し寶暦十二年致仕し嫡子主膳種周に家をゆつる（長熈は安永七年閏七月二日卒す五十九歳）種周おとゝしの冬はしめて見へたてまつりことし十二月叙爵して出雲守に任す（時に十九歳）

新庄

藤原直時

女子　早世

某　齋宮　早世

某　翁助　早世

直祐　勘十郎　監物
駿河守從五位下
寶永六年十二月六日叙任
享保廿年十一月廿日致仕
延享二年十月廿七日剃髮號直翁
同三年五月廿五日卒五十五歲
法名正亨院雄山直翁

直詮　主殿　初直智
寶永五年三月十六日卒四十三歲
法名慈德院春岩道翠

直陸　伊織
新庄與五右衞門直安養子

直成　主水　早世

直員　猪之助
松平志摩守直丘養子

女子　早世

某　靱負　早世

某　早世

直隆　鐵太郎　監物
越中守從五位下
享保廿年十二月十六日叙任
寶曆五年十月五日致仕
天明四年五月十九日改備中守

女子一人
新庄能登守直富妻

直侯　助三郎

信尹　喜之助　源吉
松浦酒之丞信英養子

某　萬次郎　早世

某　富之助　早世

孝寛　幼名金五郎
山城國八幡豐前坊

某　久松　早世

女子　早世

高周　大八　市十郎
京極一學高林養子

女子
關兵部永張妻

親純　吉五郎　市正
松平豐前守重休養子

直由　千次郎　大膳　早世

孝優　幼名長十郎　一位
山城國八幡豐前坊附弟

女子　早世

直令　直次郎　主稅

高曉　秀五郎　喜左衛門
京極一學高英養子

女子　早世

某　富次郎　早世

直矣（トシ）　求馬
新庄右衛門直澄養子

某　助太郎　早世

直侯（ヨシ）　助三郎　主計
實直祐二男
越前守從五位下
寳暦五年十二月十八日叙任
安永元年十月十日卒四十二歳
法名頓悟院圓山維鏡

直規　龜次郎
實直隆三男
駿河守從五位下
安永元年十二月廿八日叙任

女子二人
伊丹大膳勝從妻
新庄勝五郎直容妻

某　龜丸

女子

女子

某　吉松

女子
許嫁宮城久三郎和奨離別
嫁大久保豐前守忠溫

女子
大久保吉三郎忠義妻

女子
最上兵庫郷信妻

直規　龜次郎

女子三人
一人早世
新庄安太郎直清妻
直妻後妻

盛富　助五郎　左門
關伊織盛有養子後請

信幸　繁三郎
佐久間小膳信尹養子

直景　定三郎

豐昌　熊次郎
平井斧右衞門豐武養子

直温　乙次郎　靜馬

某　德五郎　幾之助　早世

女子　早世

景鄕　虎五郎
長屋已喜松景道養女

直敬　岩五郎

直嵩　鐵三郎

女子

新庄

○主殿藤原直詮は初は直智隱岐守直時か嫡男なり延寶五年五月はしめて拜謁し九月父か遺領をたまはり常陸國麻生一萬石寶永五年三月十六日四十三歳にして卒すその子監物直祐おとゝしの夏はしめて見へたてまつりことし五月家をつきてあくる六年從五位下駿河守に叙任し享保十年十一月二十日致仕して後入道して直翁とあらため延享三年五月卒す五十五歳その子監物直隆に家をゆつる直隆享保十七年閏五月十五日はしめて見へたてまつり家繼し年越中守に任し寶曆五年十月五日致仕す五十歳○のち備中守にあらたむ舍弟主計直候家をつく直候これよりさき寬延四年四月二十八日はしめて見えたてまつり寶曆五年十二月從五位下の越前守に叙任し安永元年に卒す十月十日四十六歳子なかりしかはことし十二月四日直隆か男龜次郎直規に遺領をたまふおなしき二十八日直規叙爵して駿河守に任す廿三歳

土方

源雄久

雄氏

雄高

女子三人
織田播磨守成純室
淺野大學長廣妻
酒井日向守忠紀室離別

雄豐　淸十郎　木工助　主殿助
初豐雄
實勘解由氏久三男
備中守從五位下
寛文元年十二月廿八日叙任
延寶七年改東市正
寶永元年九月廿三日致仕
同二年七月朔日卒六十八歲
法名通霄院玄峯孤順

女子三人
雄豐室
永井伊豫守尙右室
脇坂甚兵衞安道妻

豐高　彥丸　木工助
元祿十一年五月廿三日卒三十七歲
法名眞照院慧鑑玄光

久長　靱負　主殿
今土方主膳久高祖

豐義　彥丸　內記
初豐友
丹後守從五位下
寶永六年四月十五日叙任
享保四年七月朔日卒三十一歲
法名寛光院仁海宗智

雄房　彦九郎
河内守從五位下
享保八年十二月十八日叙任
延享三年十一月十九日改丹後守
寛延三年正月廿五日致仕
寶暦八年十一月廿日卒五十二歲
法名大峯院賢徳養治

女子
織田下野守信方室

雄通　聟之助

女子二人
川鰭左少將輝季室
渡邊牛三郎邦綱妻離別
嫁大久保彌十郎忠肥

雄端　聟之進　内記
初雄通
實豐義二男
主殿頭從五位下
寛延三年十二月十八日叙任
寶暦四年十二月廿九　改備中守
同八年九月十七日卒四十七歲
法名永源院仁英紹切

女子
内藤主殿頭貞幹室

雄年　清太郎
從五位下近江守
明和四年十二月十六日叙任
安永九年十月八日致仕

義法　新之助　數馬
依病籠居

義直　喜之助　縫殿助
後倹直
木下大内藏倹昌養子

和義　孝之助　外記　勘右衛門
長門守　後信勝
中山勘右衛門信明養子

女子二人
京極主水高備妻
雄年養女

雄著　春之助　本助
依病籠居

雄貞　直吉　實田沼主殿頭意次六男　丹後守從五位下　安永九年十二月十八日叙任
天明二年十一月四日卒二十歳　法名翫乘院松山江月

女子　實雄端女
雄貞室

義苗（タネ）　彦吉　實木下縫殿助俊直二男

雄重

雄次　彦三郎　河內守從五位下　寛永十七年十二月廿九日叙任　延寶七年十一月廿七日致仕
同八年正月廿八日卒七十歳　法名淸光院江月淨澄

女子二人　那須美濃守資重室
九鬼式部少輔隆季室

雄信　刑部
依病籠居

某　内匠
配流八丈島

雄隆
監物　山城守從五位下　延寶七年十二月廿八日叙任後改伊賀守　貞享元年七月廿一日配流越後村上
元祿四年六月十二日死五十一歲　法名高泰院玄山宗道

雄賀
民部　正德元年四月十四日卒
今土方勘兵衛雄忠祖

某
林助之進　配流伊勢國

女子

土方

○東市正源雄豐は（初は備中守豐雄といふ）杢助雄重かよつき實は雄高か弟勘解由氏久か三男なり承應元年二月八日雄高か遺領をたまはり（伊勢近江兩國の內にて一萬二千石餘）寛文元年十二月叙爵し寶永元年九月致仕してあくる二年七月卒す六十八歲嫡子杢助豐高父にさきたちてうせけれは嫡孫內記豐義（初は豐友）祖父につき叔父靱負久長に采地をわかつ（千石）豐義これよりさき元祿十二年はしめて見えたてまつり寶永六年四月十五日從五位下の丹後守に任し享保三年大坂の城の守りにそへられてありしか明る四年かしこにて卒しけれは（七月朔日三十一歲）その子彥五郎雄房にことし八月遺領を賜ふ雄房九月十五日はしめて見えたてまつり（襲封の事を謝せし日なり）おなしき八年の冬從五位下して河內守に任し（後に丹後守）寛延三年の春致仕す（寶暦八年十一月廿日五十二歲にて卒す）子なかりしかはいにし延享四年正月舍弟內記雄端を養ふ雄端二月十九日はしめて見參し雄房か讓をうけて家をつきおなしきとしの十二月從五位下主殿頭に叙任し（後に備中守）寶暦八年九月四十七歲にして卒す嫡男清太郎雄年十一月九日家つきて明和四年はしめて拜謁し從五位の近江守に任し安永九年十月八日致仕す（三十歲）その子杢助義著いまた幼稚なりしかのみならす多病なりしかは去年十二月田沼主殿頭意次か六男直吉雄貞を養ひて家をゆつる雄貞やかて叙爵して丹後守になり天明二年十一月二十歲にて世を早うしけれは木下縫殿助俊直か（俊直は雄平か弟なり）二男彥吉義苗を後として十二月二十九日遺領をたまふ五歲

○河內守源雄次は掃部頭雄重か嫡男なり寛永六年父か遺領をたまはり（陸奧能登兩國のうち二萬石）おなしき十七年十二月叙爵し延寶七年の冬致仕す（おなしき八年正月廿八日卒七十八歲）嫡子刑部雄信は病ありけれは二男監物雄高をよつきとし三男民部雄賀に采地をわかつ（二千石）雄隆家繼し年叙爵して山城守に任す（のちに伊賀守）貞享元年七月二十二日所領沒收せられ越後國村上に流されて榊原虎之助政邦にめしあつけらるその子細は雄隆子なかりけれは去年所領にかへりし時弟にて家人なりし林助之進貞辰をよつきにと公に申おきたりしに家人河合圖書安倍長藏といふもの雄隆をすゝめて兄の子內匠を嗣子とせんとておほくの方人をかたらひてさま〳〵にいひさまたけしかは雄隆も終に心うこきてはしめの請をひるか

へし内匠をたてんとおもひてことし參勤の時にめしくしてまいれりかゝりしかはこゝにありし家人とも異議まち〳〵にしてさらにおたやかならす貞辰もはしめの詞にたかひしをいきとおりて有馬伊豫守豐範かもとに行ん事をはからんとせしに豐範ものむつかしくやおもひけん對面にもおもはす貞辰いよ〳〵口惜くおもひて高木筑後守秋山修理亮二人ともに大目付なりにつきて一紙の書をさゝけて愁訴をのべおのれは東叡山にいりて公裁をあふきしにより雄隆をはしめ一族家人等まてめしとはれしか雄隆かはからひたゝしからす家臣かあしさまなるやうこと〳〵くあらはれしかは雄隆罪かうむり兄の刑部その子内匠弟貞辰等もみな配流に所せられ河合安信等ははらきらせられたり有馬豐範は土方か所縁なりしなりこれも此事によりて所帶を失なへり其傳をあはせ見るへり

藩翰譜續編卷之九上

眞田

滋野信幸

信吉

信政

信就　勘解由　至孫小源太家絕

某　又八郞　早世

某　大學　早世

女子　遠山主殿頭政亮室

某

信利　兵吉　伊賀守從五位下　明暦二年十二月廿六日叙任　天和元年十一月廿二日配流出羽國山形　元祿元年正月十六日死

信就　仙千代　彈正忠從五位下　寬文九年十二月廿五日叙任　天和元年十一月廿二日配流播磨國赤穗　元祿元年七月廿日赦免　改釆女　寶永四年七月卒四十八歲

信秋　嶺千代　武藤源三郞　天和元年十一月廿五日配流美濃國

某　栗本外記　天和元年十一月廿五日配流信濃國

女子

某　辰之助　共栗本外記配流信濃國

女子

某　百助　早世

某　源太郎　早世

女子四人
小出大隅守有聖室
土岐左京亮賴長室
家人鎌原外記重俊妻
青山和泉守忠親室

幸道　右衛門　初信房
伊豆守從五位下
寛文九年十二月廿五日叙任
享保六年十二月十八日從四位下
同十二年五月廿七日卒七十一歲
法名眞常院全山一提

某　源次郎　早世

信弘　藏人
實勘解田信就七男
初眞川孫七郎信親養子
出羽守從五位下
寶永元年十二月十一日叙任
享保十二年七月十九日改伊豆守
同十五年七月廿二日改彈正忠
元文元年十二月廿七日卒六十七歲
法名乾德院巖嶽一雲

幸詮　藏人
出羽守從五位下
享保十二年十二月十八日叙任
元文元年二月七日卒廿四歲
法名高豐院奇玄一秀

某　六郎　早世

信安　豐之介
豐後守從五位下
元文元年十二月十六日叙任
延享九年六月十八日改伊豆守
寶曆二年四月廿五日卒三十九歲
法名覺性院幽山一玄

俊峯　龜之丞
柳生但馬守俊平養子

繁信　藏人
天明六年三月十二日卒

女子
松平美濃守信鄕室

忠盈　粂之助
本多中務大輔忠政養子

女子
一柳土佐守末榮室

幸弘　豐松　初幸豐
從五位下伊豆守
寶曆五年十二月十八日叙任
天明三年十二月十五日從四位下

女子二人
松浦壹岐守政室後嫁建部内匠頭政堅
松平主殿頭忠恕室

幸專　順介
實井伊掃部頭直幸九男

女子二人
幸專室
許嫁井上武三郎正甫

眞田 附 伊賀守信利

○伊豆守滋野幸道は（はしめ信房）大内記信政か六男なり（信政か嫡子勘解由信就はいかなる子細にや御勘氣をかうむりその餘の子ともはみなうせけれは幸道をよつきとせしなり信就寛文五年十二月罪ゆりめし出されて後二千石をたまふ）明暦四年六月十四日父か遺領を賜り（信濃國松代の城十萬石）寛文四年正月はしめて見えたてまつりおなしき九年叙爵し享保六年從下の四位にのほり同き十二年五月七十二歳にして卒す息男源次郎世をはやうしけれは元祿十六年十二月二十五日姪藏人信弘を養ひて嗣子とす信弘は勘解由信就か七男にてこれよりさき一族孫七郎信親か家をつく信親か父は内匠昌親といひ幸道か曾祖安房守昌幸三男なり信親か時におよひて元祿七年八月二十二日幸道か所領（二千石）をわかちあたふ信親子なくして信弘をやしなひたり信弘又幸道に養はれしかは采地（二千石）は幸道にかへし附らる信弘寶永元年正月はしめて見えたてまつりその後叙爵して出羽守になる（後伊豆守また僧正忠にあらたむ）享保十二年七月十一日家をつき元文元年十二月六十七歳にて卒し三男豐之助信安（長子出羽守幸詮次男六郎みな先たちて卒す）ことし三月二十三日はしめて見參し十二月叙爵して豐後守に任し（後伊豆守にあらたむ）おなしき二年二月十八日父につき寶暦二年四月卒す年三十九その子豐松幸弘つく（時に十四歳）おなしき五年十月はしめて見へたてまつりやかて叙爵して伊豆守に任す天明三年從四位下にのほる子なかりしかは井伊掃部頭直幸か九男唯助幸專をやしなひそのか女にあはせて嗣とす

○伊賀守滋野信利は（前編には信濃守といふ）河内守信吉か子にして伊豆守信幸か孫なり父の信吉ははやくうせぬ祖父信幸明暦二年十月晦日致仕せし時二男内記信政に家をゆつり（十萬石）信政かこれまて領せし地を信利もあたふ（上野國沼田の城三萬石）信利ことし十二月叙爵し延寶の末に兩國橋の修理を助くへきよし仰下されしに其材を所領の地より採んとしけるかいかゝせしにや殊のほかに遲滯せしに御氣色にたかひぬ信利もとより行跡正しからす家中のをきてより領地の政事にいたるまておろそかにして其上臨時の役も合期せさりしかは天和元年十一月二十二日所領沒收せられ嫡子彈正忠信就もともに配流の身となる（信利は出羽國山形に流されて奥平小次郎昌幸にあつけられ元祿元年配所にて死す子息信就は播州赤穂になかされ淺野内匠頭長矩にあつけられしか元祿元年つみゆるされ十二月十一日めし出されて廩米三千俵を賜はり寄合衆となり（此時改めて采女といふ）寶永四年七月四十八歳にして死嗣子なけれは家絶たり）

九鬼

藤原守隆

良隆 ― 久隆 ― 隆昌

隆律　千之助　初隆仲
實松平相模守光仲三男
和泉守從五位下
寛文十一年十二月十八日叙任
貞享三年六月六日卒三十歳
法名泰雲院茂山秀乘

副隆　萬吉　彈正
實柳生大膳宗春二男
長門守從五位下
元祿元年十二月廿五日叙任
同十年五月十八日卒二十四歳
法名道哲院安叟禪心

隆方　内記
實柳生對馬守宗在二男
大和守從五位下
元祿十年十二月十八日叙任
寶永四年四月十六日致仕
享保七年六月廿三日卒四十三歳
法名放箭院威山頁音

女子　隆律室

女子　早世

女子　早世

隆祇　兵助　初隆休
實戸田土佐守忠定二男
丹後守從五位下
寶永四年十二月廿二日叙任
享保十八年十一月九日卒四十四歳
法名眞性院自覺成覌

隆由　豐之助
實備後守隆寛三男
伊勢守從五位下
享保十九年十二月十八日叙任
寛保三年十二月五日卒二十七歳
法名大剛院律仲利峻

隆邑　仙次郎
實備後守隆寛四男
從五位下長門守
延享元年十二月十六日叙任
天明五年十一月十四日致仕剃髮號松翁

女子三人　二人早世　隆由室

隆張　幸之助　中務
從五位下長門守
天明五年十二月十八日叙任

隆國　仙次郎

隆季

隆幸　宮内
元祿四年五月二日卒二十一歲

女子　朽木修理長綱妻

隆常　杉千代　市正　内匠
大隅守從五位下
延寶二年十二月廿七日叙任
元祿十一年四月朔日卒五十三歲
法名乾德院仁嶽了賢

隆直　万之助　式部
實松平伊勢守信次四男
豐前守從五位下
寶永六年三月七日叙任
正德三年正月晦日致仕
享保十七年八月四日改長門守
元文五年二月十三日剃髮號瑞翁
寶曆二年八月四日卒六十六歲
法名誠諦院瑞翁了閑

隆寬　辨之助　初隆快
實建部丹波守政周二男
大隅守從五位下
延享四年十一月廿一日改河內守
寶曆十年十二月四日改備後守
明和三年三月八日致仕
同月廿六日剃髮號休翁
天明六年五月廿三日卒八十七歲
法名泰嶽院休翁隆山

女子一人
秋田淡路守季隆室
三枝右近守直妻

隆英　主水

隆英　主水
實隆直男
延享七年五月廿一日卒三十七歲

隆恭　左京
寶曆二年三月廿二日依病籠居
同八年八月四日卒三十五歲

隆由　豐之助
丹後守隆祇養子

隆邑　仙次郎
伊勢守隆由養子

隆貞　猶之助　帶刀
式部少輔從五位下
明和四年十二月十六日叙任
安永九年十二月十二日卒五十二歲
法名高峯院雲外隆松

隆許　主税
天明五年三月卒

某　左近
安永三年十二月六日卒

某　孝次郎
安永五年六月八日卒

隆晃　安三郎
實保科越前守正富三男
安永八年八月十二日卒十八歲

隆祺　鐵吉
實田沼主殿頭意次七男
從五位下大隅守
天明二年十二月十八日叙任

某　鐵吉
天明六年五月八日卒

女子二人
隆祺室
圓滿院坊官西坊法眼妻

女子三人

淺野河內守長壽妻

諏訪左門賴壽妻

花房大膳職雅妻

女子

隆鄕

定五郎

九鬼

○和泉守藤原隆律は（はしめ隆仲）長門守隆昌か嗣子にて實は松平相模守源光仲か三男也寛文九年九月六日隆昌か家をつき（攝津國三田の地三萬六千石）同き二十五日はしめて見參し（家つきし事を謝せし日なり）おなしき十一年叙爵し貞享三年に卒す（六月六日三十歳）子なかりしかは柳生大膳菅原宗春か二男萬吉副隆をよつきとす副隆ことし十一月家をつく元祿元年叙爵し長門守に任しおなしき四年六月五日奥詰になり同き十八日また御扈從になるしかるに身いたはる事多かりしかは同き六年十月七日昵近をゆるされおなしき十年五月十八日二十四歳にしてうせぬいまた子なかりしかは柳生對馬守宗在か二男内記隆方（從兄弟なり）を嗣として七月二十二日遺領を賜はることとし十二月叙爵して大和守に任しおなしき十二年閏九月御扈從になり同き十四年四月奥に候する事をゆるされて外樣の列にかへり寶永四年四月十六日致仕す（享保七年六月四十三歳にて卒）これも子なかりけれは元祿十四年六月戸田土佐守藤原忠定か二男兵助隆祇を子とし養ふ十二月十五日初て見參し家つきし年の冬叙爵して丹後守に任す享保十八年隆祇病おもりたるに子なかりしかは一族備後守隆寛か三男豊之助隆由を嗣とせん事を申おきて十一月九日うせぬ四十四歳なりことし十二月隆由遺領を賜はり十九年の冬從五位の伊勢守に任し寛保三年に卒す（十二月五日二十七歳）弟仙次郎隆邑後となりて十二月二十九日家をつく延享元年十二月從五位下して長門守に任す天明五年十二月十四日致仕入道して松翁と號す（時に五十九歳なり）その子中務隆張父につきて從五位下の長門守に任す（三十五歳）

○大隅守藤原隆常は式部少輔隆季か子なり承應三年九月二日はしめて拜謁し延寶二年十一月父かゆつりをうけて家をつき（丹後國綾郡一萬九千五百石○前編には二萬石としるす寛文元年に季隆か弟十郎左衞門隆重に五百石の地をわかちあたへしなり）ことし十二月叙爵し元祿十一年江戸にまいるとて三河國池鯉鮒の驛にして身まかりぬとし五十三歳息男宮内隆幸父に先たちてうせけれは松平伊勢守源信次が四男式部隆道をやしなひて子とす隆直おとゝしの十一月初見の禮をとりことし五月晦日父か遺領をたまはり寶永六年の春從五位下豊前守に任し正德三年正月晦日致仕しその後長門守にあらためさて入道して瑞翁と號し寶暦二年八月四日六十

六歳にて卒すその子辨之助隆寛實は建部丹波守源政周か二男なり正徳二年十二月はしめて見えまいらせ家つきて後叙爵して大隅守に任し のち河内守また備後守にあらたむ 明和三年三月八日四男帶刀隆貞に家をゆつり はしめ隆寛か父隆直か致仕の後まうけし子主水隆英をやしなひて嗣とせしかはやくうせければなのか長子左京隆恭を嗣とすこれも病によりて籠居し次男三男ともに宗家をつきしかは四男帶刀して家繼せしなり 致仕入道して休翁とあらため八十七歳にて天明六年五月二十三日卒す帶刀隆貞實暦二年四月はしめて見參し家つきてのち明和四年に從五位下の式部少輔になり安永九年十二月十二日卒すとし五十二男子二人なりしかみな早世しければ保科越前守源正富か三男安三郎隆晁をやしなひて子とすこれまた世をはやくしければ田沼主殿頭源意次か七男鐵吉隆祺をやしなひおのか女に配せてよつきとす鐵吉隆祺天明元年三月十二日家をつき五月十五日はしめて見えたてまつり 時に十七歳 あくる二年十二月叙爵して大隅守に任す

分部

源嘉高

女子　伊東駿河守祐峯室

信秋　辰千代　右近
元祿九年九月十九日卒廿二歲

女子二人　河鰭中將實詮室
一人早世

某　四郎五郎　早世

女子　早世

信政　甚三郎
實池田修理長信三男
隼人正從五位下
寬文七年十一月廿七日叙任
元祿十五年十一月十日改若狹守
正德四年六月廿三日致仕
同年十二月十八日卒六十二歲
法名雪溪淨猷

光忠　熊之助　隼人
初光重
左京亮從五位下
正德四年十二月十八日叙任
享保十六年三月十四日卒三十四歲
法名鶴山淨滄

忠榮　長野幸左衛門

光命　熊之助　隼人
和泉守從五位下
享保十六年十二月廿二日叙任
延享元年五月十二日改若狹守
寶曆四年九月七日致仕
明和六年六月廿五日剃髮號風齊
天明三年十一月廿三日卒七十七歲
法名圓空慶弅

女子
姉小路大納言公文卿室

女子　松平安藝守家人上田主水義敷妻

久寵　內記　主水　外記
渡邊外記久深養子

女子　家人澤井八郎右衛門元直養女

忠德　恒河孫左衛門

女子　山木中納言實親卿室

忠覗　長野主税

女子　松平日向守堅房室

光庸　甚三郎　隼人
從五位下隼人正
寶曆四年十二月十八日敘任
安永元年五月廿二日改若狹守
天明五年三月十日致仕
同月十九日剃髮號靜好

澄鮮　伊織助
細川越中守家人
三淵志津摩澄定養子

光實　善次郎　左京

女子二人
高木監物貞固妻
安部攝津守信亨室

庸行　織居

庸章　主計

某　甚三郎

女子　早世

女子

某　武吉

女子三人

女子二人
角倉與一玄壽妻
細川越中守家人長岡主水營之妻

澄盈　守禮
細川越中守家人三淵伊織助澄鮮養子

女子
家人恒河國右衛門忠英妻

宗顯　治部卿
三雲施藥院宗隆養子

康永　多膳
尾張殿家人
中條東四郎康隆養子

命誠　春之進　早世

女子
高木監物貞固後妻

庸久　帶刀　早世

某　孝之進　早世

女子二人
一人早世
花房左京職喬妻

分部

○若狹守源信政は故の若狹守嘉高（前編には嘉亮とあり）か嗣子實は池田修理長信か三男なり寛文七年八月廿七日父か遺領を賜はり（近江國大溝二萬石餘）ことしの冬叙爵して隼人正に任し（後若狹守にあらたむ）正德四年六月二十三日致仕し身のいたはりをやしなはんとて所領の地に下りしかいくほとなくしてうせぬ（十二月十八日六十三歳）嗣子右近信秋二男四郎五郎ともに父にさきたちてうせけれは三男隼人光忠よつきとなり寶永五年七月朔日はしめて拜謁し正德四年の夏父かゆつりをうけて家をつき十二月從五位下して左京亮に任し享保十六年三月三十四歳にして卒す其子光命これは隼人といふ享保十四年二月二十八日はしめて見參しおなしき十六年十一月六日父か遺領をたまはり十二月叙爵して和泉守に任し（後若狹守にあらたむ）寶曆四年九月七日長男隼人光庸に家をゆつりて致仕し所領の地に下り剃髮して風齋と號す天明三年十一月七十歳にて終る隼人光庸いまた甚三郎といひし時寛延三年六月朔日はしめて見へたてまつり家つきし年の冬叙爵して隼人正になる（後若狹守にあらたむ）天明五年三月十日致仕す（五十五歳同き十五日入道して靜好といふ）その子善次郎光實安永八年五月朔日はしめて拜謁し父致仕の日家をつく（時に二十四歳）

遠山

藤原友貞

友春　五郎八　和泉守從五位下　延寶四年十二月廿六日敍任　正德二年二月十六日致仕號友山
同四年三月六日卒五十四歲　法名大安寺泰華友山

女子二人　大久保大隅守忠香妻
淺野壹岐守長恒妻

某　五郎八
貞享元年四月十七日卒

友由　宮內
伊豫守從五位下
寶永四年十二月廿三日敍任
享保七年四月廿一日卒三十歲
法名大林寺源巖宗蔭

友將　勝三郎
豐前守從五位下
享保十二年十二月十八日敍任
同十七年閏五月廿二日卒二十歲
法名白峯寺大哲崇雄

友央　左兵衞
享保十七年閏五月廿五日繼友將
和泉守從五位下
享保十七年十二月十六日敍任
元文五年八月廿七日致仕
安永元年六月十三日卒六十八歲
法名諦心寺興仙定條

友明　越之進
實播磨守賴明三男
丹後守從五位下
享保十八年十二月十八日致仕
後改佐渡守
寶曆三年六月一日卒三十七歲
法名見性寺一嶽道安

友淸　左吉
實友央二男
出羽守從五位下
寬延三年十二月十八日敍任後改和泉守
安永六年十一月三日致仕
天明元年正月十二日卒四十七歲
法名龍光寺禪岸道響

女子二人
阿部美濃守正晴妻
新庄駿河守直祐室

友隨　源之進
實友明二男
從五位下近江守
明和二年十二月十八日叙任

友福　虎五郎

女子

女子　友明室

友淸　左吉

女子二人
淺野河内守長壽妻
山村外記良永妻

友福　虎五郎
實友淸二男
從五位下和泉守
天明四年十二月十六日叙任

友壽　左吉

友隨　源之進

福將　源次郎
相良近江守頼完養子

遠山

○和泉守藤原友春は信濃守友貞か長子なり幼名は五郎八延寶三年七月六日父におくれて家をつく（美濃國苗木の地一萬五千二十一石餘）おなしき二十六日はしめて拜謁し（襲封の事を謝せし日也）同き四年叙爵し從五位下の守になる正德二年二月十六日致仕し（友由と號す）同しき四年三月六日卒すとし五十四その子宮内友由寶永二年六月十日はしめて見參しおなしき四年の冬從五位下の信濃守に任し父致仕せし日家をつく享保七年四月二十一日三十歳にしてうせぬ息男勝三郎友將六月十五日父につき叔父左兵衛友央に（友春か三男）所領をわかつ（五百石）同き十年八月十五日友將はしめて見えたてまつる十二年叙爵して豐前守に任し十七年閏五月二十一日とし二十歳にて世を早うすいまた子なかりしかは同き二十五日叔父左兵衛友央して家つかせらる（友央か采地五百石は此時公におさめらる）友央ことし十二月叙爵して和泉守に任し元文五年八月二十七日致仕してその子越之進友明に家をゆつる（友央は安永元年六月六十八歳にて卒す）友明實は松平播磨守源賴明か三男友央か女にそふて嗣となり享保十八年はしめて謁見し叙爵して丹後守になり（のち佐渡守にあらたむ）寶暦三年六月朔日卒す三十七歳友明か友央に養はれし後友央男子をまうけて左吉友淸といふすちめなれは友明やしなひて嗣とさたむ寛延二年五月十五日はしめて見參しあくる三年の冬叙爵して出羽守に任す（後和泉守にあらたむ）寶暦三年七月二十三日家をつき安永六年十一月致仕し弟源之進友隨に家をゆつる（天明元年正月十二日友淸四十七歳にて卒）源之進友隨は友明か子なり寶暦八年二月二十七日友淸か嗣となり明和元年三月はしめて見えまいらせあくる二年の十二月叙爵して近江守に任すこれも又舍弟虎五郎友福を（和泉守友淸か子なり）養ひて嗣とす友福安永五年四月朔日はしめて拜謁し天明四年從下五位の和泉守に任す

遠藤

平常友

常春 外記
右衛門佐從五位下
天和二年十二月廿七日叙任
元祿二年三月廿四日卒二十三歲
法名惠正院素敎

常久 岩松
元祿五年三月晦日卒七歲

女子一人
蒔田久太郎定次妻
石川惣八郞當後妻

胤親 數馬 主膳
實白須才兵衛政安嫡男
元祿五年五月九日爲戶田
彈正氏成養子繼常久
下野守從五位下
寶永六年三月七日叙任
享保八年十二月十八日改但馬守
同十八年九月廿五日致仕
同廿年三月二日卒五十三歲
法名寶池院素吟

胤將 主膳 初胤和
備前守從五位下
享保十八年十二月十八日叙任
明和八年四月十二日卒六十歲
法名大心院素江

胤充 數馬
延享二年十月廿一日卒二十四歲

胤忠 兵庫
實胤親三男
下野守從五位下
寶曆十年十二月十八日叙任

女子
實胤忠女
松平慶八郞乘森妻離別
嫁岡田隱岐守淸長

女子　小堀内匠政辰妻

胤忠　兵庫

某　吉次郎　早世

女子　胤將養女

女子　遠藤大之丞常益妻

胤壽　兵庫
天明元年十月十九日卒廿二歳

女子二人　共早世

胤相　久次郎
實酒井遠江守忠興二男
天明五年六月十八日卒三十七歳

胤富　陽五郎　主膳
實松平伊豆守信復五男

遠藤

○右衛門佐平常春は備前守常友（初慶澄 常季）か嫡子なり延寶三年二月九歳にして初めて見えたてまつりあくる四年の夏父常友身まかりしかは六月朔日遺領を賜り（美濃國郡上郡八幡の地二萬四千石）天和二年叙爵し元祿二年の春うせぬ（三月廿四日二十三歳）その子岩松常久ことし六月六日としわつかに四歳にて家をつきおなしき五年の春世を早うしけれは家すてに絶ぬへかりしに先祖忠節ありし家なれはとて五月九日戸田彈正氏威か養ひ子數馬胤親して家つかせられ舊領の地はのそかれてあらたに所領をたまう（常陸上野のうちにて一萬石）胤親實は白須才兵衛源政安か子なり此日しも俄に戸田氏成かやしなひになりてまた岩松か後となりしかはさためて故ある事なるへしかくて七月十二日見參して親恩のかたしけなきを謝し申すおなしき十一年七月七日所領の地を轉して近江國のうちにてたまはりぬ寶永六年二月七日叙爵して下野守に任す（後但馬守にあらたむ）享保十八年九月致仕しおなしき二十年うせぬ（三月二日五十三歳）その子主膳胤將享保十一年十月はしめて見へたてまつり家つきし年備前守に任し延享二年九月廿日大番の頭となり寶暦元年八月大阪の定番にうつり明和四年十一月八日御奏者の事をうけたまはる同き八年四月十二日六十歳にて卒す子なかりしかは弟兵庫胤忠を養ひて嗣とす胤忠寶暦十年の冬はしめて見參し叙爵して下野守に任す父か身まかりし年の六月四日遺領を賜はる（時に四十一歳）安永八年四月十五日大番の頭となる長子吉次郎二男兵庫胤壽世を早うせしかは酒井遠江守忠興が二男又次郎を養ひて子とすこれも先たちて卒しけれは松平伊豆守源信俊か五男陽五郎を嗣とし主膳胤富とあらたむ

一柳

越智直盛

直家

直次　宇右衛門
實小出伊勢守吉親二男
萬治元年十二月廿七日卒三十六歲
法名圓智禮翁宗正

女子二人
一人早世
直次室

末禮　縫殿　初直孝　末朝
對馬守從五位下
寬文元年十一月廿八日叙任
天和元年九月改土佐守
正德二年二月十三日卒六十四歲
法名圓照禪翁鐵心

直昌　伊右衛門

女子
板倉內膳正重道室

吉忠　百助
小出伊勢守吉親養子

直昌　伊右衛門　縫殿
實直次二男
元祿十四年六月廿日卒四十五歲
法名智光宗仁日信

女子四人
井上周防守正清室
中坊內記秀久妻
許嫁竹中主稅重誠卒
井上周防守正清繼室

末昆　民部
對馬守從五位下
正德三年三月七日叙任
享保十一年改土佐守
元文二年八月十三日卒三十九歲
法名圓乘心翁道伴

女子
藤堂和泉守家人
藤堂宮內長照妻

末榮　隼人
從五位下土佐守
寬保三年十二月廿一日叙任
安永八年九月十六日致仕
同年十一月十八日改對馬守

女子
朽木主膳廣綱室離別
嫁山口修理亮弘長

女子
織田左近將監信好室離別
嫁秋田內膳秀禮

末英　隼人
從五位下土佐守
安永八年十二月六日叙任

爲磾　中務
座光寺喜兵衞爲忠養子

女子二人
山口但馬守弘通室
吉川監物經倫妻

氏紹　吉之丞
石尾七兵衞氏封養子

女子
松平三郎太郎庸盛室離別
嫁一柳兵部少輔賴欽

某　隼人　早世

末昭　鈙右衞門

直頼

直治　主膳
山城守從五位下
萬治三年十二月廿八日叙任
天和二年二月九日改右近將監
貞享二年十一月廿四日改兵部少輔
寶永二年閏四月十五日致仕
享保元年十二月十九日卒七十五歲
法名大運軒閑翁宗治

直次　權之助
小出伊勢守吉親養子

直堅　帶刀
實直治三男
寶永二年四月廿日卒廿六歲

直郷　內記　初直恭　頼徳
因幡守從五位下
寶永六年四月十五日叙任
享保九年十月四日卒五十九歲
法名蝶巷祖覺

治良　數馬

直堅　帶刀

頼邦　新藏　內藏介　初右達
實數馬治長男
兵部少輔從五位下
享保九年十二月十八日叙任
延享元年七月八日卒五十歲
法名甘節軒圓巖祖融

頼邦　新藏

某　新太郎　早世

女子
杉浦內藏之丞正峰妻

某　內藏助　早世

賴壽　民彌　主膳　初賴長　賴澄
山城守從五位下
寛延元年十二月廿一日叙任
寶曆五年二月十六日改美濃守
安永八年八月七日致仕
同年十二月五日改上總介
天明二年九月廿八日改但馬守
同四年十二月十六日卒五十二歲
法名恒一軒天遊英心

女子
家人
喜多川舍人久喬妻

邦常　辰之介　式部　靭負

賴忠　民彌　左京
明和七年五月六日卒十九歲

賴欽　慶次郎　兵庫　初賴恭
美濃守從五位下
安永八年十二月十六日叙任
天明元年十二月五日改兵部少輔

女子

某　德二郎　早世

壽厚（カズアツ）　造酒

壽善　熊藏
土屋市之丞昌俞養子

女子一人
一柳勘之丞直里妻離別
實式部邦常女
渡邊久藏胤妻

邦高 菊彌 左門 内記
一柳玄蕃頭直正養子

某 源之丞 早世

壽陳 孝之助
村越茂助房氏養子

女子
神尾直次郎元喬妻

女子

壽重 留之助

一柳

○宇右衛門越智直次は（前編に源氏としるす今寛永諸家譜及ひ家の譜によりてあらたむ）美作守直家か子實は小出伊勢守藤原吉親の二男也寛永十九年直家病おもかりしかは直次を後とせん事をこひてうせぬ明る二十年三月十五日直次を直家か女にあはせて家つかせらる（二萬八千六百石のうち一萬石を播磨の國のうちにてたもふ○直家か嗣子を申せし時すちたかへんこと御旨にかなはすとて所領の地多く減せられしといふ）万治元年の冬直次卒す（十二月廿七日三十六歳）嫡子縫殿末禮（はしめ直好また末朝）あくる二年二月七日遺領を賜り寛文元年叙爵して對馬守に任す（のち土佐守にあらたむ）元祿五年二月二十三日大番の頭に補せられおなしき十五年七月二十八日御留守居の職に轉し明る十一年十一月六日御側衆となる寶永六年御代あらたまり後昵近をゆるされて外樣の衆となる正德二年二月十三日六十四歳にて卒す末禮はしめ弟伊右衛門直昌（後縫殿といふ）をよつきとさためしに先たちてうせけれはその子民部末昆して家つかすおなしき三年末昆叙爵して對馬守に任し（後土佐守にあらたむ）元文二年八月十三日三十九歳にして卒すその子隼人末榮十月十八日父に遺領をたまはり寛保元年四月朔日初て拜謁しおなしき三年叙爵して土佐守になり安永八年九月十六日致仕し對馬守にあらたむ（時に三十五歳なり）嫡子隼人末英安永四年八月十五日十八歳にてはしめて見參し家繼し年土佐守に任す

○兵部少輔越智直治は藏人直頼か嫡男なり正保二年父直頼卒して（四月十八日四十四歳にて卒す）のち閏五月十四日遺領を賜り（伊豫國の内小松一萬石）そのゝち初見の禮をはり（承應二年六月なり）万治三年の冬叙爵して山城守に任す（後右近將監又兵部少輔と改む）寶永二年閏四月十五日致仕してその子内記直鄉に家をゆつる（享保元年十二月十九日七十五歳にて卒）直鄉延寶四年の秋はしめて見へ奉り家つきて後寶永六年叙爵して因幡守に任し享保九年十月五十九歳にて卒す男子なかりしかは弟帶刀直堅をやしなひしか先たちてうせけれは姪新藏頼邦（直堅か兄數馬治良か子なり）を嗣とす頼邦正德四年直鄉にやしなはれ十月朔日初て見參し享保九年十一月家つきて叙爵し兵部少輔に任す延享元年七月八日終る五十歳その子主膳頼壽家をつき寛延元年はしめて見えたてまつり叙爵して山城守に任し（後美濃守にあらたむ）安永八年致仕し（後上總介また但馬守にあらたむ）天明四年十二月十六日五十二歳にてうせぬ長子左京は早世しけれは二男兵庫頼欽をよつきとす頼

欽明和八年二月十五日はしめて見え奉りときに十九歳安永八年八月七日家をつき叙爵して美濃守になる後兵部少輔にあらたむ

市橋

藤原長政

―女子　市橋三四郎長成妻

―政信　兵吉　下總守従五位下　慶安元年十二月晦日叙任　寶永元年正月朔日卒八十二歳　法名龍源院覺潭玄澄

―女子　立花和泉守種長室

―政直　岩之助　傳左衛門

―政房　兵吉　寛文六年六月十七日卒十八歳

―女子　蒔田久太郎定行妻

―某　大助　早世

某　大吉　早世

政勝　久五郎　左京
元祿六年依病籠居
享保十六年十月八日卒六十五歲
法名祥麟院瑞岳元輝

信治　吉三郎　早世

某　吉助　早世

女子三人
山崎主稅助敏治妻
松平主水淸倫妻

利政　小次郎　右近
實市橋三四郎長常男
元祿十一年十二月廿二日依病籠居
元文四年二月廿四日卒五十九歲
法名瑞心院朴翁淳徹

信直　傳左衛門　外記
實傳左衛門政直男
下總守從五位下

直方　主計　兵部
實溝口信濃守重雄二男
壹岐守從五位下

女子
直擧室

某　大助　早世

某　又三郎　早世

女子　早世

直擧　萬次郎　友太郎　主計　兵部
實立花主稅種盈長男
從五位下下總守

寶永六年三月七日叙任
享保五年二月十六日卒六十五歳
法名永昌院俊山玄英

享保五年十二月十八日叙任
元文元年五月廿五日致仕
寛延三年九月十一日卒六十一歳
法名泰安院元德亨山

直記 豐五郎

女子 早世

元文元年十二月十六日叙任
寶曆八年十一月廿四日致仕

直好 銕彌

某 民之丞 早世

康孝 主計
松平主馬康詮養子

女子 早世

某 鍋吉 早世

直好 銕彌 兵部
實直方四男
延享五年正月廿九日卒十九歳
法名宴泰院万融宗哲

女子二人
一人早世
市橋孝之助長晟妻

直記　豐五郎
實直方七男
寶暦四年五月十日卒十六歳
法名巖德院淨英全悊

直舊　直三郎　早世

女子三人
一人早世
長璉室
一人早世

長璉　豐三郎　安之丞　民部
實稻葉伊勢守董通二男
伊豆守從五位下
寶暦八年十二月十八日叙任
天明五年十月六日卒五十三歳
法名嶺雲院徹翁淨閑

直智　靭負
大島雲九郎義通養子

長賢　爲之助　早世

正備　武三郎
堀田式部正貴養子

女子

女子三人
一人早世
畠山次郎四郎國濤妻
一人早世

女子

長昭　韶之助

女子二人
一人早世
松平阿波守家人
稻田九郎兵衞某妻

女子三人

市橋

○下總守藤原政信は故下總守長政か嫡男なり（寛永六年十二月はしめて拝謁す）慶安元年六月十四日父か遺領を賜はる（近江河内のうち一萬七千石○前編には一萬八千石としるす）弟傳左衛門政直に所領わかつ（千石○前編には二千石といふ）ことし十二月叙爵し（もとは兵吉といふ）寶永元年正月朔日八十二歳にて卒す男子六人みな世を早うせしかは弟傳左衛門政直か子外記信直か別につかへて居たりしを（御書院の番衆たり）養ひて嗣とす（采地千石はことし収公せらる）ことし二月十九日家をつきおなしき六年の春従五位下の下總守に任し享保五年二月二十六日六十五歳にして卒すその子兵部直方實は溝口信濃守源重雄か二男なり寶永二年四月信直にやしなはれ明る三年四月初めて見へたてまつり享保五年四月二十六日遺領をたまはりことし叙爵して壹岐守に任しおなしき十五年三月二十八日大番の頭になり十八年五月十一日病によりて職を辭し元文元年五月二十五日致仕す（寛延三年九月十一日六十一歳にて卒す）その子兵部直擧實は立花主税種盈（出雲守貫長弟）か長子享保十三年九月直方か嗣となりてはしめて見へたてまつり元文元年家をつきことし叙爵して下總守に任し寶暦八年十一月十四日四十七歳にて致仕す直擧はしめ直方か子鐵彌直好豊五郎直記（直春か養はれしのちにうまれし子なり）をやしなひしかとも早世しをのか子ともゝみなうせけれは寶永五年二月十一日稲葉伊勢守越智董通か二男安之丞を養ひて嗣とす安之丞民部長璉とあらため三月十五日はしめて見えたてまつり直擧か家ゆつられ叙爵して伊豆守になり天明五年十月六日五十三歳にて卒す嫡男詔之助長昭ことし十二月七日父か遺領を賜はる

仙石

源政俊　忠俊

某　幾千代　早世
某　長太郎　早世
某　以和丸　早世
某　彌五郎　早世
某　清三郎　早世
女子三人　共早世
某　主稅　早世
政房　靱負　實家人仙石勘解由久次二男
政明　主稅　越前守従五位下

某　七十郎　早世
某　宮内　早世
女子　土井伊賀守利寛室離別
某　悅之助　早世
某　萬三郎　早世
某　安之助　早世
政辰　陽之助　實仙石釆女政因二男

寛文十二年十二月廿八日叙任
享保二年六月六日卒五十九歳
法名直龍院德巖雄義

信濃守従五位下
寳永五年十二月十八日叙任
享保廿年四月廿三日卒六十一歳
法名大雲院慈潤義徹

女子四人
織田備後守信房室離別
三人早世

某　鐵之助　早世

某　熊次郎　早世

女子　早世

越前守従五位下
元文三年十二月十八日叙任
安永八年八月晦日卒五十八歳
法名實相院諦巖了興

女子三人
一人早世
改辰室
井上大和守正賢室

政芳　金五郎

女子
山崎兵部信盛妻

政芳　金五郎
實政房七男
信濃守従五位下
寛延三年十二月十八日叙任
寳暦三年八月廿日卒廿一歳
法名常應院深覺禪心

女子　早世

政直　陽之助　早世

女子　久行室

久保　秀次郎　靱負　早世

久行　友之助　權兵衛
實仙石丹波守久近三男
兵部少輔從五位下
明和八年十二月十八日叙任
天明五年十月十四日卒三十三歲
法名大慈院仁讓德理

久道　鐵之助

女子　小笠原近江守貞溫室

女子

仙石

○越前守源政明はもとの越前守政俊か孫なり父兵部少輔忠俊先たちてうせけれは祖父か嗣となりて寛文八年九月十五日はしめて見へたてまつりあくる九年二月廿五日家を繼き（信濃國上田の城五萬八千石餘）叔父次左衛門政勝に所領をわをかつ（二千石）政明同しき十二年叙爵し寶永三年正月二十八日但馬國出石にうつる（松平伊賀守忠周にかはる）政明男子多かりしかみな早世せしかは家人仙石勘解由久次か二男靭負政房を養ひて嗣とし享保二年六月六日とし五十九歳にて卒す靭負政房寶永五年はしめて見參し叙爵して信濃守になり享保三年八月三日家をつきおなしき七年十一月二十八日御奏者の事をうけたまはり同き十九年五月六日寺社奉行をかぬあくる二十年病にふしゝかは職を辭しけれともかくて猶しはし醫療をくはへよとてとゝめさせたまひしか終におこたらすして四月二十三日にむなしくなりぬ六十一歳なり男子みな先たちてうせけれは享保十七年八月支族釆女政因か二男陽之助政辰をやしなひておのか女に配せて嗣とす政辰同き二十年六月十八日遺領を賜はり元文二年十一月二十一日はしめて拜謁しおなしき三年の冬從五位下に叙し越前守に任し安永八年八月晦日卒す五十八歳政辰はしめ政房か末の子金五郎政芳を嗣として見參に入叙爵して信濃守になるしかるに寶暦三年八月二十一歳にてうせぬをのか子とも二人まてありしかみな早世しけれは明和七年十二月六日支族丹波守久近か三男友之助を子としやしなひ權兵衛久行とあらため名のるおなしき八年初見して從下の五位し兵部少輔に任し安永八年五月六日家をつき天明五年十月十四日卒す三十三歳長男鐵之助久道十二月十四日父に繼く（時に十五歳）

溝口

源秀勝

宣勝

宣直

重雄 久三郎 初宣廣
信濃守從五位下
慶安四年十二月十八日叙任
寶永三年七月十九日致仕號悠山
同五年九月四日卒七十六歳

女子二人
市橋下總守政信室
溝口攝津守宣就妻
板倉筑後守重行室

女子五人
戸川土佐守安宣妻
稻葉能登守知通室
酒井石見守忠與室
松平駿河守定陳室
宗右京大夫義倫室

重元 久三郎 初宣盛
伯耆守從五位下
元祿七年十二月十八日叙任
元祿七年十二月十八日致仕
享保三年十一月廿三日卒三十九歳

直方 主計 兵部
市橋下總守信直養子

元長 逸見隼人
今逸見隼人副長祖

直治 久三郎 初重定
信濃守從五位下
享保四年十二月廿八日致仕
同十七年閏五月十一日卒二十八歳

親敷　助右衛門
堀助右衛門親泰養子

直温　龜之助　主膳
實溝口攝津守重行三男
出雲守從五位下
享保十七年十二月廿八日叙任
寶暦十一年正月二十三日致仕
安永九年九月五日卒六十七歳

直經　龜之助　左京
寶暦十年十月十六日依病籠居

直養　龜五郎　主膳
初直範
從五位下主膳正
寶暦十年十二月十八日叙任

直之　大膳
溝口内記直秀養子

女子二人
酒井山城守忠起室
毛利能登守匡滿室

某　幸之助　早世

女子二人
一人早世
鳥居播磨守忠永室

直信　惠三郎
初直堅
實直温六男
伯耆守從五位下
安永元年十二月十八日叙任
天明六年七月十一日卒三十一歳
法名全達

長祥　左近　熊次郎
逸見隼人副長養子

女子二人
南部内藏頭信房室
一人早世

某　峯次郎

某 茂十郎 早世

直信 惠三郎

弘務 勝之進
山口修理亮弘道養子

某 永次郎

女子二人
永野壹岐守忠昭室
許嫁池田初之進政房

女子

女子二人
一人早世
實溝口大膳直之女
堀長門守道鄉室

女子

直侯 龜次郎

女子 早世

女子三人

善勝

政良 金助 初政胤
伊勢守從五位下
寛文十年十二月廿八日叙任
天和三年六月朔日卒
法名俊英

政勝

政親 帶刀
實加藤内藏助明友二男
貞享四年八月廿五日依酒失家絶

溝口

○信濃守源重雄ははしめ宣廣出雲守宣直か嫡男なり幼名は久三郎寶永十七年十月二十八日はしめて見え奉り慶安四年十二月叙爵し寛文十二年九月二十日父か所領をゆつらる越後國新發田五萬石寶永三年七月十九日致仕し致仕の後は悠山と號すおなしき五年九月四日七十六歳にて卒すその子久三郎重元はしめ宣盛元祿二年五月九日はしめて見參しおなしき七年の冬叙爵して伯耆守に任し寶永三年家つきて享保三年十一月卒す年三十九その子久三郎直治はしめ重貞享保元年十月十五日はしめて拜謁し同しき三年十二月二十六日父につきあくる四年叙爵して信濃守になりおなしき十五年五月十一日叔父逸見隼人元長に廩米をわかちあたふ千俵享保十七年又二千俵をましあたへたり同き十七年閏五月十一日二十八歳にして卒す男子なかりしかは一族攝津守重行か三男龜之助直温を嗣とす直温ことし七月五日遺領を賜はり叙爵して出雲守になる嫡子龜之助直隆は多病なれは寶暦十年十月十六日二男主膳直養はしめ直範をよつきとし十一月朔日はしめて見えまいらせ叙爵し主膳正になる時に十五歳明る十一年正月二十三日直温致仕して安永九年九月五日六十七歳にて卒す直養家繼てのち弟惠三郎直信はしめ直賢を嗣とす直信叙爵して伯耆守に任せしか天明六年七月十二日三十一歳にて父にさきたちてうせけれはことし八月十八日その子龜次郎直候を嗣とす

○伊豫守源政良ははしめ政胤土佐守政勝か男寛文十年三月二十七日家を繼き越後國のうち一萬石ことし十二月叙爵し初名は金助といふ天和三年六月卒す長男帶刀政親實は加藤内藏助藤原明友か二男なりことし八月二十三日遺領を賜ふしかるに貞享三年所領にありし時酒にくるひあらぬふるまひなせしかは家人等たへかねて兄加藤佐渡守明英かもとに告こせしゆへ明英おほやけの御旨をうかゝかひて當地によひよせおしこめておきけるか其有樣常ならすとても家治めん事心もとなしとて一族に相はかりて申こふにより同しき四年八月二十五日所領沒收せられその身は明英かもとにわたされてわつかの扶持の料をは賜はりけり廩米五百俵

藩翰譜續編卷之九下

南部　大膳大夫重信　遠江守直政

戸澤　能登守乘盛

津輕　越中守信政

六郷　佐渡守政信

大田原　山城守高清

大關　信濃守增長

龜井　隱岐守玆親

伊東　大和守祐實

中川　佐渡守久恒

有馬　左衞門佐清純

大村　因幡守純長

毛利　安房守高重

南部

源利直

重直

重信　彦太郎　彦左衛門　隼人
初家人七戸隼人直時養子
大膳大夫從五位下
寛文四年十二月廿八日敘任
天和三年五月七日從四位下

行信　八内
信濃守從五位下
寛文六年十二月廿八日敘任
元祿十二年十二月十八日從四位下
同十五年十月十二日卒六十一歲
法名德雲院玉翁宗珊

女子
青山播守幸督室

某　信千代
寛文十一年七月八日卒

女子三人
牧野河內守英成室
遠江守直政室
毛利駿河守高久室離別
嫁小出玄蕃重興

實信　隼人
隼人正五位下
元祿五年十二月十八日敘任
同十三年十二月廿九日卒廿五歲
法名泰雲院靈嶽宗元

信恩　藤平　刑部
初久信
備後守從五位下
元祿十四年十二月十八日敘任
寶永四年十二月八日卒三十歲
法名靈巖院了因義方

元祿五年六月廿七日致仕
同十五年六月十八日卒八十七歲
法名

女子二人
松平伯耆守綱清室
本多肥後守忠英室離別
嫁有馬伊豫守豊範

政信　主稅
今南部主稅信喜祖

勝信　鶴之助　主計
享保十七年四月廿四日卒六十四歲
法名覺樹院伽雲宗水

女子　早世

通信　右近
遠江守直政養子

定信　大助　數馬
坪內總兵衞定重養子

信應　吉助

女子
松平肥前守宣政室

信尹　幸次郎　縫殿
實山內大膳亮豊明七男
延寶四年八月六日致仕
寬延三年六月十一日卒

女子
信尹妻

某　熊之助　早世

信之　主計
實毛利周防守高慶二男
寛延元年八月廿一日卒

女子
信之妻

信起　萬之助　彦九郎
實大膳亮利幹二男
安永七年八月六日卒

信由
實大膳亮利親六男
後大膳大夫利雄養子

女子
信由妻

女子
南部肥前守信喜妻

某　岩次郎
寶永元年十二月十八日卒三歳

女子
永井飛驒守直朗妻

利幹　吉助　左近　主馬
初信應
實行信四男
信濃守從五位下
寶永五年十二月卒十八日叙任
正德元年九月十一日改大膳大夫

利視　吉助
初信賀　信規
實信恩二男
修理大夫從五位下
享保十年十二月十八日叙任
延享四年正月廿三日改大膳大夫

利雄　辰之助　龜五郎
初信貞
實利幹男
信濃守從五位下
元文四年十二月十六日叙任
寶曆八年五月七日改大膳大夫

享保十年六月四日三十七歲
法名靈德院雄山宗英

信賀　吉助

寛延三年十二月十八日從四位下
寶暦二年四月四日卒四十五歲
法名天量院宣山宗明

信貞　辰之助　龜五郎

信起　萬之助　彦九郎
南部主計信之養子

明和三年十二月十九日從四位下
安永八年十一月十三日卒五十五歲
法名養源院機翁宗鑑

女子
牧野豐前守惟成室

信傳　德五郎　主稅
南部主殿信彌養子

信居　三戶左京

信篤　三戶主水

信周　三戶主計

信明　三戶龍彌

信由　三戶幸吉
南部彦九郎信起養子

女子
井伊庭五郎直中室

某　彦次郎
安永四年七月二日卒

女子

女子二人
許嫁松平左兵衛直之

利謹　三郎　初高信
信濃守從五位下
寶暦十一年十二月十八日叙任
安永三年十一月十八日依病籠居

某　龜五郎　早世

利正　幸吉　初信由
實利規六男
初南部彦九郎信起養子
修理大夫從五位下
安永三年十二月廿八日叙任
同九年七月廿七日改大膳大夫
天明四年五月廿五日卒三十一歳
法名義徳院南岳宗薫

信敬　慶次郎

女子
細川能登守利庸室

直房

直政　武大夫
遠江守從五位下
延寶二年十二月廿七日叙任
元祿十二年三月十六日卒四十歲
法名天祥院月磵宗眞

直常　彥次郎　早世

女子
市橋左京政勝妻

信興　龜之助　左衞門
左衞門佐從五位下
寬保元年十二月十九日叙任
延保三年七月十八日改遠江守
明和元年閏十二月廿一日改左衞門尉
同二年五月廿九日致仕
安永二年八月十三日卒五十一歲
法名龍津院珠巖宗湜

通信　右近
實大膳大夫重信四男
遠江守從五位下
寶永六年四月十五日叙任
享保元年八月廿四日卒四十四歲
法名三玄院法林徹證

女子二人
朽木主水周綱妻
南部主計膳信妻

信依　龜次郎　左近
甲斐守從五位下
明和二年十二月十八日叙任
天明元年二月十四日致仕
同年六月七日卒三十五歲
法名寶性院禪巖宗安

廣信　宮內
甲斐守從五位下
享保五年十二月十八日叙任
寬保元年五月二日卒三十六歲
法名正見院覺雲宗智

女子　早世

某　修理　早世

信房　繁松　右近
從五位下內藏頭
天明二年十二月十八日叙任

某　安吉

女子　早世

某　熊次郎　早世

信之　松之助

某　岩之丞　早世

信充　圖書　早世

興長　主膳

興春　秀之助

女子　織田大膳長孺妻

南部

○大膳大夫源重信は信濃守利直か二男山城守重直か弟なり（はしめ家人七戸隼人直時か家つきて隼人といふ）兄の山城守重直か吉松早世せしかは堀田加賀守紀正盛か末子内藏介をやしなひて子とせしかこれもうせぬかゝりしかとも世つきの事とも望ませらるへし心やすかるへきよしたまたま仰せられてしをたのみ奉りてこひ申す事もなくてうせぬかくて寛文四年十二月六日弟二人に遺領をわかち賜ふ（重信は陸奥國盛岡の城八萬石數馬直房に三千石を賜ふ）重信この月十五日はしめて見參し從五位下に叙し天和三年五月七日かつは年ころ奉公を賞せられかつは所領の地廣しときこしめし及はれぬれはとて十萬石になされ從下の四位に加階せり七十七といふ元祿五年の夏致仕し同き十五年身まかりぬその子信濃守行信寛文六年初見叙爵し父か致仕の日家をつき元祿七年八月二十一日舍弟等に所領をわかつ（主税政信に五千石主計勝信に三千石を分つ私墾田なり後に廩米になりしとそ）同しき十二年の冬從下の四位にのほり同き十五年十月卒し六十一その子隼人正實信父にさきたちてうせけれは三男刑部信恩嗣となり元祿十四年はしめて見へたてまつり叙爵して備後守に任す明る十五年十一月二十七日父か遺領を賜り寶永四年の冬三十歳にして卒す嫡子岩次郎早世しけれは弟主馬利幹を養ひて家繼す利幹おなしき五年閏正月五日家をつき初見叙爵して信濃守になり（後大膳大夫にあらたむ）享保十年六月三十七歳にして卒すこれも又家つかすへき子なかりしかは信恩か遺腹の子吉助信賀（後信規又信稅にあらたむ）をやしなひて子とせん事をこひ申置けれは七月二十一日信賀に遺領たまはり叙爵して修理大夫に任し（後大膳大夫にあらたむ）寛延三年從下の四位に昇て寶暦二年卒すとし四十五その子龜五郎利雄質は大膳大夫利幹か遺腹の子なり元文三年はしめて見參しあくる四年從五位下して信濃守に任し（後大膳大夫にあらたむ）寶永二年正月二十五日家をつき明和三年從四位下に叙す長子三郎利龍叙爵して信濃守といひしか多病なるによりてこもり居二男龜五郎早世しけれは安永三年十二月十六日弟の幸吉利正一族彦九郎信記か家つきて有りしを養ひて子とし同き八年の冬五十五歳にして卒す幸吉利正兄にやしなはれし年はしめて拜謁し叙爵して修理大夫に任し（後大膳大夫にあらたむ）同き九年二月七日家を繼き天明四年の五月三十三歳にてうせ

けれは七月十七日二男藤次郎信敬ことし六歳にて父につく

○遠江守源直政は左衛門佐直房か子なり寛文八年八月二十一日父か遺領を賜り陸奥國三戸郡八戸の地二萬石二十五日家つきし事を謝し申てはしめて見えたてまつり延寳二年叙爵して貞享四年九月十八日詰衆につらなり元祿元年九月十二日御側衆となり十一月十二日御側御用人になり又の年正月職をとく同き十二年三月卒す年四十子なかりしかは宗家大膳大夫重信か四男通信を養ひて嗣とし五月十三日家をつき寳永六年叙爵して遠江守に任し享保元年の秋四十四歳にして卒すその子宮內廣信十月二十六日家をつきことしはしめて見參し同き五年從五位下の甲斐守になり寛延元年に卒す五月二日三十六歳その子龜之助信興元文五年十二月はしめて見へたてまつり父かうせし年の六月二十四日遺領を賜はり十二月叙爵して左衛門佐に任し後遠江守又左衛門尉明和二年五月致仕し嫡子右近信依に家をゆつり安永二年卒すとし五十一信依寳暦十二年の冬はしめて見參し家繼し年從五位下甲斐守になる身いたはる所多かりしかは天明元年二月致仕しいくほとなくてうせぬ三十五歳長子內藏頭信房安永九年はしめて拜謁し父か致仕せし年家ゆつられ天明二年叙爵す十八歳

戸澤

平政盛

某 半平 早世

定盛 又三郎
實鳥居左京亮忠政二男
越中守從五位下
寛永十八年二月二日卒三十四歲
法名容雲院虎山龍公

女子 早世

女子三人
定盛室
加藤出羽守泰興室離別
一人早世

某 帯刀 早世

某 右京 早世

女子三人
一人早世
久留島伊豫守通政室
青木甲斐守重安室

政武 彈正左衛門 主計 早世

某 市藏 早世

某 常五郎 早世

女子
正庸養女

女子 早世

某 彌五郎 早世

女子二人 共早世

正成 治大夫
實鳥居久大夫成信三男
筑前守從五位下
正德三年十二月廿一日叙任
享保十九年十一月廿五日卒四十九歲
法名天曉院不峯玄路

女子
實正誠女
正成室

正賀 彦四郎 早世

正誠　千代鶴　初乗盛　政條　政悠　勝盛　政定　正職　忠義　政陟　政晟　政鐘
能登守從五位下
承應二年十二月廿八日叙任
元祿十三年改上總介
寶永七年二月十六日致仕
同月廿七日改中務大輔
正德四年剃髪稱中務入道
享保七年二月三日卒八十三歳
法名香雲寺莊海慧巖

正庸　內記
實家人猪岡兵衞門友淸二男
下野守從五位下
貞享四年十二月廿五日叙任
寶永七年二月廿一日改上總介
元文二年十二月六日致仕改大和守
同五年十二月廿七日卒七十七歳
法名源德院龐山常隆

女子　山內主膳豐穀妻
正親　城之進
正珍　千次郎
正陽　淸三郎　格之助　早世
女子
某　兵吉　早世
女子　市川又四郎正志妻

正勝　六三郎
下野守從五位下
享保廿年十二月十六日叙任
元文二年十二月六日改上總介
延享二年八月十四日卒二十七歳
法名成箭院重山高透

正諶　猪之七郎　內記
庸視　大四郎　監物
寬延二年八月十二日卒無嗣家絶
法名天光院普山全照
女子　早世
某　鐵之助　早世
女子　板倉伊勢守勝陸室
正備　長五郎　民部　中務
正愛　乙五郎

正諶　猪之七郎　内記
實正庸五男
上總介從五位下
延享二年十月十八日叙任
明和二年九月廿日卒四十六歳
法名智德院仁山宗勇

女子　早世

正產　孝次郎
能登守從五位下
安永四年閏十二月十二日叙任
同九年十月七日卒二十三歳
法名宿仙院德巖慈本

正良　豐三郎　左京
實正諶二男
主計頭從五位下
安永九年十二月廿八日叙任
天明六年八月十六日卒廿六歳
法名戒運院勇山良將

女子
松平兵部少輔乘友室離別
嫁戸田大炊頭忠喬離別

正良　豐三郎

某　斧四郎　早世

正親　城之進
實中務正備長男

戸澤

○上總介平正誠(初乗盛)は右京亮政盛か子なり童名をは千代鶴といふ(前編には左京一族としるす)はしめ政盛か養子越中守定盛か卒せし後この千代鶴は生れしなり政盛いまはのきはに至るまて千代鶴か事披露申さすそのあやまちはさる事なれと政盛か子なる事其うたかひなきによりて慶安三年八月七日父か遺領をたまはり(出羽國新庄の城六萬八千二百石)明る四年家繼しかしこまり申すとてはしめて見へ奉り承應二年叙爵して能登守になる(後上總介にあらたむ)寶永六年六月五日譜第の衆につらなり(父は譜弟の衆に列せしか正誠か時におよひて外様に候せし故いま又かく仰かうむれり)同き七年二月致仕し(中務大輔にあらたむ)としつもりて八十三享保七年の春身まかりぬ男子五人みな世をはやうせしかは家人猶岡兵右衛門友清か男内記正庸は骨肉のしたしみあるによりて養ひて子とす正庸貞享三年の夏はしめて見參しあくる四年従五位下下野守に叙任し(後上總介にあらたむ)父か致仕せしとき家をつく長子彌五郎世を早うしけれは正德三年九月二十七日鳥居久大夫成信か三男治大夫正成をおのか女にめあはせてよつきとしことし叙爵して筑前守に任す正庸このゝちあまたの男子をまうけたり次男彦四郎これはゝやうゝせぬ三男を六三郎四男を猪之七郎五男を大四部六男を鐵之助七男を長五郎八男を乙五郎といふ享保十九年十一月正成父に先たちてうせけれは三男六三郎正勝を家嗣としておなしき二十年五月二十八日はしめてまみへ奉り十二月従五位下の下野守に任す元文二年十二月六日正庸致仕し大和守にあらため正勝に家ゆつり四男内記正諶に(猪之七郎か事なり)所領わかつ(七千石内わけといふ)おなしき五年二月二十七日七十七歳にして卒す正勝家繼て上總介にあらため延享二年に卒し(八月十四日三十七歳)弟内記正諶を後とすことし十月七日正諶家繼き叙爵して上總介に任す十二月二十日弟大四郎庸祀に所領を分つ(三千石)寶暦六年十一月去年所領の地凶荒にあひて土民飢餓にのそみしにすくふへきたくはへなかりしかは公のものをかし給はらん事を申こひしに俵米(三千石)をたまはりて急狀をまぬかれしかと正諶か常のまうけおろそかなる事をいましめさせたまひて出仕をとゝめられしか五月にやかて事すみぬ明和二年九月二十日四十六歳にして卒す長子孝次郎正産ことし十一月十二日父につき安永四年はしめて出

仕して従下の五位し能登守になるおなしき九年十月七日うせぬ二十三歳その弟左京正良十二月七日兄につき叙爵して主計頭に任す天明六年八月廿六歳にして卒し嗣なかりしかはおほち正庸か七男中務正滿長五郎か事か子誠之進正親して家つかす時に二十五歳

津輕

藤原信義

某　右京　早世

信政　平藏
越中守從五位下
萬治元年閏十二月廿七日叙任
寶永七年十月十八日卒六十五歲
法名妙心院恭潤眞覺

女子一人
土屋能登守利房室
今大路道三玄淵妻

可定
山門院家養源院權僧正

女子
津輕左京信敏妻

信壽　平藏　初信重
出羽守從五位下
貞享元年十二月廿五日叙任後改土佐守
享保十六年五月十六日致仕
同年七月剃髮號竹翁後號榮翁
延享三年正月廿日卒七十八歲
法名玄圭院怪定徹心

資德　主殿　與市
那須遠江守資祇養子

壽世　釆女
津輕釆女政兕養子

女子
堀石見守親賢室

女子
許嫁松平越前守信淸卒

信興　磐磨　右京
右京亮從五位下
寶永七年十二月廿三日叙任
享保十五年七月十二日改越中守
同年十一月廿五日卒三十六歲
法名瑞巖院台岳圓乘

女子一人
保科彈正忠正昭室
岩城河內守隆韶室

著敎　豐次郞　內記
延京二年正月廿日卒二十五歲
無嗣家絕

女子　早世

某　竹次郞　早世

信著　勝千代
出羽守從五位下
享保十六年十二月廿二日叙任
延享元年五月廿五日卒三十歲
法名顯林院眞道如因

女子一人
脇坂淡路守安興室
松平宮内少輔忠恒室

信寧　岩松
土佐守從五位下
寶曆三年十二月十八日叙任
後改右京亮出羽守越中守
天明四年閏正月八日卒四十八歲
法名戒香院梅溪常薰

好古　平三郎
仙石彌兵衛久當養子

某　友之助　早世

某　勝之助　早世

女子二人　共早世

女子三人
阿部伊勢守正倫室
許嫁安部彌一郎信享卒
許嫁堀河內守親忠卒

信明　松五郎
出羽守從五位下
安永六年十二月十八日叙任
後改土佐守

女子二人
堀河內守親忠繼室
那須與市資明妻

女子

實那須與一資虎女
許嫁柴田政次郎勝峯早世

津輕

○越中守藤原信政は土佐守信義か嫡男なり明暦二年二月二日父か遺領を賜り陸奥國弘前の城四萬七千石叔父十左衛門信英に地をわかつ五千石○信英嫡子左京信繁に家ゆつるとき采地千石をさきて二男三郎兵衛信純にあたふ信純か養子信成よつきなくして死せしかは八千石の地は公におさめしなり萬治元年信政叙爵し貞享四年那須か家の事によりて十月十四日罪かうむりて閉門す政信か二男主殿那須遠江守資祇にやしなはれ與市資徳と改めて家繼しのち資祇の庶子福原大膳資豊愁訴せしにより事起りて資祇か男子ある事なしりなから資祇かこふにまかせて與一を養はあせしは政信か麁忽のはからひなりとてとかめさせたまひしなりくる五年の四月十七日に罪ゆりて八月に出仕したり寶永七年十月卒すとし六十五嫡子平藏信壽延寶八年はしめて見えたてまつり貞享元年從五位下の出羽守になり後土佐守にあらたむ父か卒せし年の十二月十九日家を繼四萬六千石その子越中守信興さきたちて卒しけれは孫勝千代信著を嗣とし十六年五月十六日家ゆつりて竹翁又榮翁と號す延享三年正月卒す七十八歳信著享保十六年はしめて見え奉りことし祖父につき叙爵して出羽守になり延享元年五月卒す三十歳その子岩松信寧父につき從祖父内記著敎に廩米をわかつ三千俵○延享二年正月著敎うせて子なかりしかは家たへたり寶暦三年信寧はしめて出仕し叙爵して土佐守に任すのち右京亮また出羽守越中守等にあらたむ天明四年の春卒すとし四十八その子土佐守信明安永五年十二月はしめて見參し同き六年叙爵して出羽守に任し父におくれし年時に二十五歳家を繼く

六鄕

藤原政勝

政信 伊織
佐渡守從五位下
萬治三年十二月廿八日叙任
貞享二年七月廿一日卒五十一歲
法名見性院機山宗玄

政盛 頼母

高信 平左衞門
今六鄕平左衞門政廣祖

政晴 莊之助
伊賀守從五位下
元祿三年十二月廿六日叙任
享保十一年五月朔日改阿波守
同廿年閏二月二日致仕
寬保元年十二月廿七日卒六十七歲
法名善性院法譽祥蓮

女子二人
三枝攝津守相妻
松平金七郞康鄕妻

政英 千之助
但馬守從五位下
享保三年十二月十八日叙任
同十一年九月廿六日依病籠居
寶曆十四年五月十四日卒六十歲
法名祥雲院丹山玉鳳

女子
牧野內膳正康周室

政長 民部
丹後守從五位下
享保十一年十二月廿六日叙任
後改伊賀守
寶曆四年八月八日卒四十九歲
法名瑞林院鳳山玄祥

女子
大關伊豫守增與室

政蔭 式部

女子二人
生駒刑部親賢室
小堀大膳政春妻

政經　長之助

政展　莊之助
實政長男
丹後守從五位下
明和五年二月十八日叙任
安永五年三月十八日卒廿六歳
法名乾德院雲外善龍

女子二人　一人早世
三枝宗四郎守義妻

政聲　秀之助　右近
天明元年十二月九日依病籠居
同四年五月十四日卒廿六歳

某　熊二郎　早世

政林　長之助
初政經　政儀
實式部政蔭男
兵庫頭從五位下
寶曆四年十二月十八日敍任
天明五年三月十日致仕

政展　莊之助

政武　尙三郎
從五位下佐渡守
天明三年十二月廿八日敍任

女子
大關伊豫守增輔室離別
嫁船越三次郎景範離別
嫁中西彈正元武

某　榮次郎

某　辨之助

政曉　松之助

六郷

○佐渡守藤原政信は伊賀守政勝か嫡男なり幼名を伊織といふ慶安四年はしめて見へ奉り萬治三年の冬叙爵し延寶四年六月晦日父かゆつりをうけて家を繼き（出羽國本庄の城三萬石餘）貞享二年に卒す（七月廿六日五十一歳）嫡子莊之助政晴九月二十二日遺領を賜り元祿三年十二月二十六日はしめて見參し叙爵して伊賀守に任す（後阿波守にあらたむ）同しき六年正月二十四日奥詰の衆につらなりあくる七年十月九日ゆるされて外樣になる享保二十年閏二月二日致仕す嫡子但馬守政英は病者なりされは二男丹後守（後伊賀守にあらたむ）政長して家繼かせ享保元年に終る（六十七歳）政長享保十一年の冬初見叙爵し寶曆四年の秋四十九歳にして卒す子なかりしかは弟式部政蔭か子長之助政林を養ひて世つきとす政林（初政經又正儀といふ）ことし十月四日政長か遺領をたまはりて從五位下の兵庫頭に任し天明五年三月十日致仕す（時に四十八歳）政林はしめ政長か儲嗣となりし後政長男子をまうけて莊之助政展といふ政林やしなひておのかよつきとす時に安永五年の春おもはすもさきたちてうせぬ政林か嫡子秀之助政聲は多病なり二男ははやくうしなひしかは三男倘三郎政武を嗣子とす政武天明二年の七月朔日に初て見へ奉り明る三年十二月叙爵して佐渡守に任す父か致仕の時家をつく（時に二十六歳）

太田原

丹治政清

女子
堀田權六一幸妻

女子
谷播磨守照悳室離別

高清　彥次郎　主膳
山城守從五位下
寛文元年十二月廿八日叙任
延寶五年九月廿五日致仕改織部正
元祿十一年六月十一日卒六十二歲
法名千秋院久昌長榮

典清　主膳
實織田小十郎政時嫡男
備前守從五位下
延寶三年十二月廿六日叙任
元祿七年六月廿一日卒三十七歲
法名月鏡院直光不昧

純清　主膳
和泉守從五位下
元祿五年十二月十八日叙任
同十二年五月廿二日卒三十二歲
法名純清院絕點涼白

爲清　長次郎
天和二年十月廿四日卒無嗣家絕

資世　市兵衛
家人大田原主計資淸養子

三清　右兵衛

女子二人

女子二人
典清室
實島津八郎兵衛久周女
牧野伊豫守忠貫妻

女子

女子三人
一人早世
芦野左衛門資親妻
一人早世

吉清　武左衛門

晴川　十歳

女子三人
宮城監物某妻
大田原隼人政增妻
一人早世

某　爲次郎
寶永五年四月廿九日卒

某　七之助
寶永七年四月三日卒

建清　左兵衛
備前守從五位下
享保九年十二月十八日叙任
同十六年正月卒廿二歳
法名靈光院智緣照徹

女子三人
堀田信濃守正範妻正範卒嫁本庄大和守道規離別嫁前田式部房長
二人早世

某　藤藏
享保元年十月八日卒

某　十歳
享保十三年十一月廿一日卒

清信 勘藏
實武左衞門吉道長男
備前守從五位下
元祿十二年十二月十八日叙任
同十五年十一月廿四日卒二十二歲
法名乾德院撫山淸育

扶淸 爲之丞 初命淸
實十藏晴川長男
飛驒守從五位下
元祿十六年十二月廿一日叙任
延享二年六月五日卒五十七歲
法名恭嶽院潔心亘白

正親 式部
稻葉下野守正能養子

友淸 勘藏
出雲守從五位下
元文五年十二月廿一日叙任
安永四年二月八日致任改左兵衞佐
同五年七月七日卒五十一歲
法名見性院廓道本然

某 吉之丞 早世

友子

英淸 內膳

堅淸 又助

某 藤助 早世

元淸 勘助

壽清 銕之助
寶曆六年七月四日卒十二歳

女子
堀田左京亮正富室離別
嫁青山内記卒愛離別嫁
芦野主膳資英

庸清 貞之助 織部
山城守從五位下
明和七年十二月十六日叙任
後改飛驒守

光清 孝丸

女子

清堅 監物 甚五郎
渡邊主計登養子

女子 早世

清定 伊織
多田靭負賴顯養後歸

某 幸藏 早世

清豫　造酒之助　左近
芦野主膳資英養子

某　嘉藏　早世

女子　早世

太田原

○山城守丹治高清は備前守政清か嫡男なりはしめは主膳といふ寛文元年五月十二日父か遺領を賜り(下野國大田原の城一萬千五百石餘)弟長次郎爲清に所領を分つ(千石)此年十二月敍爵し延寶五年十二月二十五日致仕し(織部正にあらたむ)元祿十一年に卒す(六月十一日六十二歳)子なかりけれは織田小十郎平政時か長子主膳典清をやしなひをのか女に妻はせて家嗣かす典清延寶二年十一月はしめて見參しあくる三年の十二月二十六日從五位下の備前守になり同き五年家ゆつられて元祿七年六月二十一日三十七歳にして卒す嫡子主膳純清は貞享四年はしめて見えたてまつり元祿五年敍爵して和泉守に任しおなしき七年八月十九日父か遺領を賜り同き十二年五月二十二日卒す三十二歳子無りしかは曾祖父政清か五男武左衛門吉清か子勘藏清信をやしなひて(これより本性に復す)七月十九日家つかす清信十二月十八日從下の五位して備前守に任しいくほとなくしておなしき十五年十一月二十日世を早うす二十二歳これも子なかりしかは武左衛門吉清か弟十藏晴川(政清か六男)か長子爲之丞扶清(はしめ命清)を後とす扶清明る十六年二月五日家をつくことし十二月從五位下の飛驒守に任し延享二年六月五日五十七歳にして卒す扶清子ともあまたありしかおほくうせて六男勘藏友清よつきとなり元文三年十二月はしめて見參しおなしき五年敍爵して出雲守になり延享二年七月二十九日父につく明和元年八月十五日月並の拜賀に友清故なくしてまいらさりけれはたつねとはれしに病ありて出仕せすさらは其よしを申へかりしにいかに事たかひしにやその事なかりしかは陳訴の詞をうしなひつゐにみけしきにたかひめしこめられたり(逼塞といふ)五月あまりにしてゆるされぬ安永四年の春五十歳にて致仕す(左京佐にあらたむ)其子山城守庸清に家をゆつりあくる五年七月卒す庸清明和五年十一月はしめて見えたてまつりおなしき七年從五位下の守になる(時に十八歳又飛彈守にあらたむ)

大關

丹治増周（マスチカ）

女子　早世

某　右衛門
天和二年正月廿二日卒

女子
伊丹左京勝守室離別
嫁神保織部

某　萬次郎　早世

増茂　民部
元祿元年十月廿二日卒
法名藏珠院玄淵義仲

増恒　大助　彈正
信濃守從五位下
寶永六年三月七日叙任
元文三年三月廿五日致仕號得翁
寶曆九年正月廿日卒七十四歲
法名慧日院義天得翁

増榮（ナガ）　主馬
實土佐守高増二男
信濃守從五位下
寬文四年十二月廿八日叙任
元祿元年十二月十三日卒五十二歲
法名本源院心印元澄

某　大助
正德五年三月朔日卒

女子　北條相摸守氏貞室

增興　廿之助　帶刀
伊豫守從五位下
元文四年十二月十六日叙任
寶曆十三年十月致仕改能登守
明和七年六月廿六日卒六十二歲
法名護國院義賢一貞

增滿　求馬

英孫　八十郎
小出修理英致養子

女子二人
加藤織部正喬廣室
平野權之助長英妻離別
嫁金田主殿正峯
一人早世

長繼　銕之助　秋元衞守
爲家人

增備　直之助　彈正
因幡守從五位下
寶曆十三年十二月九日叙任
明和元年八月廿七日卒三十三歲
法名玄梁院活眼道印

增副　靭負　早世

女子三人
分部隼人正光庸室
大島雲平義周妻
尾林助次郎嘉成妻

女子
西尾出雲守敎榮妻

資淸　熊吉　賴母
大田原主稅淸位養子

女子　早世

增輔　辨吉　彈正
伊豫守從五位下
安永八年十二月十六日叙任

—女子二人
天田原主稅淸位妻
增山織部正柱妻

—英敦　鐲五郎　右膳　式部
小出八十郎英孫養子

—增陽　吉太郎

大關

○信濃守丹治增榮は土佐守高增の二男なり兄土佐守增周にやしなはれ寛文三年六月二十一日家をつく（下野國黒羽根一萬八千石○はしめ增周家つきしとき所領の地をさきて弟主馬增榮甚右衞門增公に各千石をわかちあたふ增榮兄のよつきとなりし時千石の地は收公せられ增公は天和二年奈良の奉行になされ五百石を加へ賜りしか貞享二年七月八日死してよつきなかりしかは前の千石を合せて收めらる○前編一萬九千石といふは誤りなりおもふに當時增榮か采地をは收公せられしかとも增公いまた繼なかりしほとなれはこれか采地をあはせてなるへし）おなしき四年十二月二十八日叙爵し元祿元年に卒す（十二月十三日五十二歲）その子民部增茂はことし十月先たちてうせけれはおなしき二年閏正月增榮か遺領を孫の大助增恒（民部增茂か二男）に賜ふ增恒寶永六年叙爵して信濃守になり元文三年三月二十五日致仕して得翁と號し七十四歲にして寶曆九年の春身まかりぬその子帶刀增眞享保七年はしめて見えたてまつり父か致仕せし日家をつくあくる年の十二月從五位下の伊豫守に任し寶曆十三年十月致仕し（能登守にあらたむ）明和七年六月二十六日六十二歲にして卒す嫡子彈正增備寬延元年六月はしめて見參し寶曆十三年父かゆつりをうけ叙爵して因幡守になりしかいくほともなく明和元年八月うせぬ三十三歲こととし十月二十二日其子辨吉增輔に遺領を賜ふ增輔安永五年三月はしめて見參しおなしき八年叙爵して伊豫守に任す（時に二十五歲）

龜井

源茲政

茲長　新十郎
能登守從五位下
元祿十五年二月十八日叙任
享保十一年六月四日卒三十九歲
法名眞龍院驪晏玄珠

女子二人
一人早世
茲滿養妹

政直　新十郎　初茲朝
伊豫守從五位下
萬治二年十二月廿八日叙任
延寶七年九月廿一日卒三十五歲
法名禪性院一相全無

女子
井伊掃部頭家人
天野一學某妻

茲次　式部
天和二年六月二日卒

女子三人
島津飛驒守忠高室
難波宰相宗豐卿室
大和國教行寺妻離別

女子二人
許嫁永井日向守眞達卒
一人早世

定好　靭負
菅沼民部定辰養子

某　伊織　早世

某　鍋之丞　早世

女子三人　共早世

某　萬吉　早世

女子
實井伊掃部頭家人
廣瀨鄕左衞門將英女
龜井主殿茲堅妻

茲延　八十郎

滿博　監物　早世

茲親　松之助
能登守從五位下
貞享元年十一月廿九日叙任
元祿四年十月四日改隱岐守
享保十六年五月廿九日卒六十三歲
法名岳仙院法山祖應

政相　大助　早世

女子二人
板倉甲斐守重寛室一作養女
森川出羽守俊胤室
柳生備前守俊方室

宗清　權僧正
石淸水八幡宮社務
田中權僧正要淸養子

眞純　賴母
家人多胡主水眞武養子

矩致　宮內
眞純養子後稱龜井

茲滿　松之丞
因幡守從五位下
享保十二年十二月十八日叙任
元文元年四月九日卒三十七歲
法名養壽院宗月源光

女子
實茲長女
鳥居伊賀守忠孝室

女子
實家人龜井宮內矩致女
松平淡路守賴多室

茲延　八十郞
實茲長長男
豐前守從五位下
元文元年十二月十二日叙任
寬保三年閏四月三日致仕
寶曆六年四月四日卒三十五歲
法名寬量院仁嶽道智

某　千之助　早世

茲休　眞八郞
實茲胤二男
明和三年十一月八日卒十七歲

女子
秋月山城守種德室

龜井

源茲政

―政直　新十郎　初茲朝
伊豫守從五位下
萬治二年十二月廿八日叙任
延寳七年九月廿一日卒三十五歲
法名禪性院一相全無

―女子
井伊掃部頭家人
天野一學某妻

―茲次　式部
天和二年六月二日卒

―女子三人
島津飛驒守忠高室
難波宰相宗豐卿室
大和國敎行寺妻離別

―茲長　新十郎
能登守從五位下
元祿十五年二月十八日叙任
享保十一年六月四日卒三十九歲
法名眞龍院驪晏玄珠

―女子二人
一人早世
茲滿養妹

―女子二人
許嫁永井日向守眞達卒
一人早世

―茲延　八十郎

―定好　靱負
菅沼民部定辰養子

―滿博　監物　早世

―某　伊織　早世

―某　鍋之丞　早世

―女子三人　共早世

―某　萬吉　早世

―女子
實井伊掃部頭家人
廣瀨鄕左衞門將英女
龜井主殿茲堅妻

茲親　松之助
能登守從五位下
貞享元年十一月廿九日叙任
元祿四年十月四日改隱岐守
享保十六年五月廿九日卒六十三歲
法名岳仙院法山祖應

政相　大助　早世

女子三人
板倉甲斐守重寛室一作養女
森川出羽守俊胤室
柳生備前守俊方室

宗清　權僧正
石淸水八幡宮社務
田中權僧正要清養子

眞純　頼母
家人多胡主水眞武養子

矩致　宮内
眞純養子後稱龜井

茲滿　松之丞
因幡守從五位下
享保十二年十二月十八日叙任
元文元年四月九日卒三十七歲
法名養壽院宗月源光

女子
實茲長女
鳥居伊賀守忠孝室

女子
實家人龜井宮内矩致女
松平淡路守頼多室

茲延　八十郎
實茲長長男
豐前守從五位下
元文元年十二月十二日叙任
寛保三年閏四月三日致仕
寶曆六年四月四日卒三十五歲
法名寛量院仁嶽道智

某　千之助　早世

茲休　眞八郎
實茲胤二男
明和三年十一月八日卒十七歲

女子
秋月山城守種德室

茲胤 德藏
實松平播磨守賴明五男
隱岐守從五位下
寬保二年十二月十八日叙任
延享二年十月十二日改信濃守
寶曆二年七月廿日卒二十八歲
法名陽昇院德巖賢昶

女子
實菅沼靱負定好女
茲胤室

女子

矩貞 吉三郎
實菅沼靱負定好長男
從五位下能登守
寶曆三年十二月十六日叙任
天明三年四月十八日致仕

茲休 直八郎
明和三年十二月八日卒

矩賢 吉三郎
從五位下隱岐守
天明四年十二月十六日叙任

茲㒶 安次郎

女子二人
許嫁龜井登之助茲求卒
一人早世

龜井

○隱岐守源茲親は豐前守茲政か三男なり長子伊豫守政直二男式部茲次ともに早世す○前編には茲親を二男とす延寶八年初て見參し天和元年二月二十七日父か遺領を賜はり石見國津和野の城四萬石貞享元年の冬從五位下能登守に任し元祿四年九月朔日奧詰衆にくわへられて十月三日御扈從になる明る五年昵近をゆりて雁の間に候す寶永六年四月詰衆をゆるされて柳の間の列にかへる享保十六年五月二十九日六十三歲にして卒す長子能登守茲長父にさきたちて卒し二男靱負定好は菅沼民部定辰に養はれその餘の子ともは早世せしかは六男因幡守茲滿よつきとなるこれよりさき享保十二年はしめて見參して叙爵し同しき十六年八月二日家をつき元文の四月卒す二十七歲子なかりしかは兄能登守茲長か子八十郎茲延六月三日家をつき十一月從五位下に叙し豐前守に任す男子なかりけれは寬保二年の秋松平播磨守源賴明か五男德藏茲胤をやしなひて嗣としおなしき三年致仕し寶曆六年に卒す三十五歲德藏茲胤茲延に養はれし年はしめて拜謁し叙爵して隱岐守になりあくるとし家つく後信濃守にあらため寶曆二年の七月卒す二十八歲これも子無りしかは祖父茲親か二男菅沼靱負定好か庶子を茲胤か家人にして龜井吉三郎矩貞といひしに九月十六日家繼かせらる十月このかしこまりを申てはしめて見參しやかて從五位下に叙し能登守に任ず天明三年四月十八日致仕す時に四十八歲矩貞はしめ茲胤か子直八郎茲休をよつきにさため明和三年十一月見へたてまつりしか十二月八日うせけれは長子吉三郎矩賢した家つかす天明三年三月矩賢はしめて拜謁し父につきあくるとし從五位下隱岐守に叙任す時に二十四歲

伊東

藤原祐由ミチ

女子

某　松千代

祐崇　萬吉　式部
實主殿助祐春長男
駿河守從五位下
元祿六年十二月十八日叙任
寶永四年六月十四日依病籠居號可山軒
延享四年十一月十日卒七十九歲
法名齡運院得翁道德

女子
祐實養女

祐實　彥松　監物
實大和守祐久四男
出雲守從五位下
寬文三年十二月廿八日叙任
後改大和守
正德四年四月廿九日致仕
享保八年九月十八日卒八十歲
法名洞林院佺叟丹心

祐永　傳之助　求馬
實伊東左門祐信長男
豐後守從五位下
寶永四年十二月廿三日叙任
後改修理亮
元文四年正月十四日卒四十九歲
法名玄澄院靈鑑自覺

女子
實祐崇女
祐永室

祐之　熊太郎
大和守從五從下
寬保二年十二月十八日叙任
延享元年九月二日卒十八歲
法名天受院仁空義眞

女子
九鬼長門守隆邑室

某　又千代　早世

某　豐熊　早世

祐隆　他七郎　左門
延享元年十二月十二日繼祐之
修理大夫從五位下
延享元年十二月廿八日叙任
寶曆七年八月八日卒四十八歲
法名玆光院節山玄義

女子二人　共早世

祐順　鎌藏　早世

某　富之助　早世

女子三人　共早世

女子二人

女子二人　共早世

某　他八郎　早世

女子
伊東內記祐惠妻

祐房　長三郎　主殿
伊東三吉祐陳養子

某　岩松　早世

女子　早世

女子

祐福　虎三郎
豐後守從五位下
寶暦三年十二月十八日叙任
後改大和守出雲守
天明元年七月廿日卒四十七歳
法名廣德院大安道樹

祐肅　虎三郎

祐甫　虎五郎　早世

某　德次郎　早世

女子
龜井能登守矩貞室

祐武　安之助
伊東主殿祐房養子

伊東

○大和守藤原祐實は元の大和守祐久か四男（前編には二男といふ）左京亮祐由には弟なり明暦三年八月初て見へたてまつり兄祐由か嗣となりて寛文元年八月二十九日その遺領をたまはり（日向國龍野の城五萬千石餘前編に寛文三年祐實兄か遺領をたまはりし時みつからの所領三千石を加へすへて五萬四千石を領すといふ祐由家つきしとき三千石をさきあたへしは祐久か三男主殿介祐春にして祐實にはあらす）おなしき三年叙爵して出雲守となりその子松千代早世せしかは兄主殿助祐春か長子式部祐崇をよつきとし元祿六年四月はしめて見參し十二月從五位下に叙し駿河守に任すしかるに病にかゝりて家繼かすへうもあらさりしかは一族左門祐信か男求馬祐永をやしなひて祐崇か女にあはせ正徳四年四月二十九日祐實致仕して家をゆつり享保八年の九月八十歳にして終る祐永寶永四年七月はしめて見參し十二月從下の五位して豐後守になり（後修理亮にあらたむ）元文四年の正月卒す四十九歳嫡子熊太郎祐之三月九日父につき寛保二年の冬はしめて見參し叙爵して大和守に任し延享元年九月十八歳にして卒す弟左門隆祐十二月兄に繼きやかて從五位下修理大夫に叙任し寶暦十年八月とし四十八にして卒す其子虎三郎守福寶暦二年四月はしめて見參し奉り明る三年叙爵して豐後守に任し父におくれし年の十月家を繼き（後大和守また出雲守に改む）天明元年の七月うせぬ四十七歳嫡子虎三郎祐肅ことし九月六日二十歳にして父につく

中川

源久清

某　主膳
元祿六年十二月十三日卒十二歲

某　龜次郞
貞享三年正月廿三日卒

女子五人
藤堂和泉守高敏室
加藤出羽守泰純室
一人早世
秋月長門守種弘室
一人早世

久恒　淸藏
佐渡守從五位下
明曆元年十二月十八日叙任
元祿八年六月十五日卒五十五歲
法名寶淨院英松久山

女子二人
松平大藏大輔正甫室
家人田邊喜八郞某妻

女子
仙石越前守政明室

久通　主膳
因幡守從五位下
延寶五年閏十二月廿六日叙任
寶永七年三月廿八日卒四十八歲
法名天眞院元亘貞仙

某　鍋千代　早世

女子　早世

久忠　萬之助
內膳正從五位下
正德元年六月四日叙任
寬保二年十月廿二日卒四十五歲
法名通玄院雲外了弘

久豐 爲家人 求馬

某 采女 早世

淸正 淸五郎 早世

久和 爲家人 圖書

久旨 爲家人 右近

女子 早世

久矩 淸八 早世

女子 早世

久周 爲家人 主馬

久慶　主殿
實松平安藝守綱長十六男
山城守從五位下
元文三年十一月十八日叙任
寬保三年十月晦日卒三十六歲
法名魏然院鐵心如山

女子
家人中川主馬久周女
久慶室

久貞　祝之丞
實松平伊豆守信祝二男
從五位下修理大夫
寬保三年十二月廿八日叙任

女子
實家人
中川右門久虎女
久貞室

女子
藤堂和泉守高敦室

久賢　千助
明和二年四月廿日卒廿一歲

久德　三郎
從五位下內膳正
明和五年十二月十八日叙任
天明三年十二月四日籠居
同五年正月廿九日改主計頭

女子三人
伊東出雲守祐富室
一人早世
小笠原相模守長教室

勝剛　鷹之丞　藤十郎
水野日向守勝起養子

女子
森右兵衛佐忠賛室

忠明　大炊
松平與五郎忠常養子

久遠　鐵之助

久持　香橘　祝之丞

女子　早世

中川

○佐渡守源久恒は山城守久淸か嫡男なり明曆元年四月はしめて見へたてまつりことし叙爵し寬文六年四月廿九日久淸かゆつりをうけて家をつき豐後國岡の城七萬四百石餘元祿八年六月十五日卒す五十五歲その子因幡守久通延寶五年の冬叙爵し父におくれし年家をつき寶永七年三月四十八歲にして身まかりぬ三男萬之助久忠兄三人とも に早世す去年七月はしめて拜謁しことし四月二十三日父か遺領をたまはり正德元年の夏從五位下の內膳正に任す子なかりけれは松平安藝守源綱長か十六男淺野主殿久慶をやしなひをのか女にあはせて嗣とし寬保二年十月四十五歲にして卒す久慶元文二年十二月はしめて見へたてまつりあくる三年叙爵して山城守になり父か卒せしのち家をつきしかいまた期月にも及はすして寬保三年十月うせぬ三十六歲その子祝之丞久貞つく久貞實は松平伊豆守源信祝か二男なり家つきしとし叙爵して修理大夫に任す時に廿三歲その子三郞久德明和五年の三月はしめて見參し十二月叙爵して內膳正になるゑかるにいつの頃よりか遊興にふけり身をわすれたる振まひなともありしかは久貞不興してかくては家つかせかたしとて公に申て嫡嗣を廢せんとせし折から家人のうちに久德をかた引て愁訴せしものありしによりてくはしくたつねとはれしに久德もとより放埒なりし事なれは一言の陳訴にもおよはすして天明五年十二月四日罪かうむりて籠居の身となる久貞も年ころ敎訓のおろそかなるによりてかゝる事にもおよひつれとて出仕をとゝめられ逼塞して居たりしかあくる六年十二月十六日御ゆるしかふむりて孫の鐵之助久遠久德か長子を嗣とす

有馬

藤原康純

清純　大吉　初永純
周防守従五位下
萬治元年閏十二月廿七日叙任
天和三年五月三日改左衞門佐
元祿十五年十二月九日卒五十九歳
法名華岳院清山宗純

女子三人
大村因幡守純長室
諏訪兵部頼尙妻
戸川玄蕃安宣妻

純息　求馬
今有馬圖書純長祖

純富　七之助
今有馬右近純久祖

壽純　大吉　初眞純　純壽
左衞門佐従五位下
正德元年六月四日叙任
享保十八年十一月十六日致仕
寛延二年九月三日改左兵衞佐號一準
寶曆七年八月廿日卒六十一歳
法名常泰院性山宗仕

女子
永井播磨守直亮室

孝純　吉太郎
日向守従五位下
享保十八年十二月十八日叙任
寶曆七年二月十二日卒四十三歳
法名躰顯院眞巖宗修

女子
間部若狹守詮方室

女子二人
松平式部少輔近輝室
許嫁永井若狹守高徦高徦卒
嫁安部丹波守信光

重廣　大三郎
松平大膳大夫重就養子

忠由　兵庫
本多長門守忠英養子

賴恒
平岡石見守賴重養子

女子
沼間左門清氏妻

純珍　百助
今有馬式部純昌祖

女子
安部壹岐守正貴妻

女子二人　共早世

某　金松
延享三年四月十九日卒

允純　外吉
遠江守從五位下
寶曆十二年十二月九日叙任
明和四年十二月十一日改左衞門佐
安永元年九月十九日卒二十六歲
法名勝達院天岳宗眞

譽純　大之進
從五位下左兵衞佐
天明四年十二月十六日叙任

純養　吉太郎

忠可 久彌
本多大和守忠堯養子

純辨 勝十郎 早世

純峰 郡太 早世

女子
近藤左京政明妻

有馬

○左衛門佐藤原清純は(初は永純)故の左衛門佐康純か嫡男也萬治元年從五位下の因幡守に任し(後左衛門佐にあらたむ)延寶七年十一月二十七日父かゆつりをうけて家をつき(日向國延岡の城五萬石)舍弟等に所領わかつ(求馬純息に千八百石七之介純か富に千石私墾田にてあたふ)かくて元祿三年所領にありしとき封境のうちおさまらす流亡の民多かりしかは家臣等罪かうむりて清純江戸にめされ明る四年七月二十六日累代の城地をめしはなされて越後國糸魚川にうつさる同き八年五月朔日ふたゝひ城主になされて越前國丸岡をたまふ(本多筑後守重益沒收の地なり)おなしき十五年五十九歳にして卒すその子大吉壽純あくる十六年十一月五日七歳にして家をつき十二月七日叙父百助純珍に稟米をわかち與ふ(三千俵○寄合の列にくはへらる)壽純寶永四年の冬はしめて見參し正德元年叙爵して左衛門佐になり八月十五日講第の衆に准せられ享保十八年致仕し(左衛門佐にあらたむ)寶曆七年の秋うせぬ六十一歳その子吉太郎孝純ことしの五月はしめて見へ奉り家つきて從五位下の日向守に任し寶曆七年に卒す(二月十二日四十三歳)その子外吉允純つく允純おなしき十三年七月はしめて見參し十二月叙爵し遠江守に任し(のち左衛門佐)安永元年九月二十六歳にして卒す長子大之進譽純十一月二十六日父につき天明二年はしめて拜謁し同しき四年の冬從五位下左兵衛佐に任す(十九歳)

大村

藤原純信

女子
生駒主殿親興妻

純眞　主膳
備後守從五位下
延寶六年十二月廿八日叙任
後民部少輔
元祿二年四月廿六日依病籠居
正德二年六月十五日卒五十一歲
法名泰清院芳山梅翁日充

純長　權吉郎　權佐
實伊丹播磨守勝長四男
因幡守從五位下
承應三年十二月廿八日叙任
寶永三年八月廿一日卒七十一歲
法名顯了院忠岳勇翁日長

純尹　源之助　數馬
筑後守從五位下
元祿二年十二月廿七日叙任
正德二年十月十四日卒四十九歲
法名寬長院德山日廣

清勝　大助　賴母
初政種
大田原隼人政增養子

女子
家人福田十郎左衞門長兼妻

純庸　幾之助　伊織
實純長四男
伊勢守從五位下
寶永七年十二月十八日叙任
享保十二年閏正月九日致仕
元文三年五月十三日卒六十九歲
法名光通院宗利了翁日員

女子
太田原帶刀清慮妻

某　龜五郎　早世

純庸　幾之助

壽員　萬之丞　初治員　靭負
西郷若狹守延昌養子

某　五郎八　早世

女子
實家人笠坊了玄益章女
久世三四郎廣隆妻

某　源之助　早世

純富　八太郎
河内守從五位下
享保十年十二月十八日叙任
寛延元年十一月廿一日卒三十八歳
法名慈光院正慧英翁日俊

純保　幾之助
彈正少弼從五位下
延享三年十二月十八日叙任
寶曆十年十二月十四日卒三十歳
法名高耀院源明淨翁日鏡

純將　幾之助　式部　早世

女子　早世

純鎭　新八郎
信濃守從五位下
安永三年十二月十八日叙任

女子
家人大村木工保勝妻

純皓　政之進　藏人

女子三人
家人大村彥右衞門富敬妻
一人早世
家人針尾半左衞門保納妻

某　虎之助　早世

女子二人

某　春之進

女子
實有馬吉太郎純養女

女子
大田原出雲守友清室離別

富包　幸次郎　右京
家人熊野鄉助包辰養子

富次　百助　主馬
家人三好七郎兵衞利房養子

大村

○因幡守藤原純長は丹後守純信か嗣子にて實は伊丹播磨守源勝前か四男なり慶安四年二月廿日父か遺領をたまはり肥前國彼杵郡大村久島の城二萬七千石餘承應三年叙爵し寶永三年の秋七十一歳にして卒す嫡子民部少輔純貞多病なりされは二男數馬純尹よつきとなり延寶四年はしめて見え奉り元祿二年從五位下の筑後守に任し父におくれしとし家をつきことし三月朔日所帶の地を分ち舍弟伊織純守にあたふ三千石正德二年十月純尹四十九歳にして卒す子なかりしかは弟純庸をよつきとす純庸は元祿三年七月はしめて拜謁し寶永七年兄にやしなはれ采地は純尹にかへしたまはるやかて從五位下の伊勢守になり正德二年十二月家をつき享保十二年閏正月致仕して元文三年に卒す六十九歳長子八太郎純富享保十年二月はしめて拜謁しことし叙爵して河内守に任し父か致仕の日ゆつりをうけ寛延元年十一月三十八歳にしてうせぬその子彈正少弼純保延享三年の冬はしめて見へたてまつり叙爵し父におくれて家をつき寶暦十年十二月卒す三十歳その子新八郎純鎭あくる十一年の春父につき時に三歳安永三年九月はしめて見へ奉りことし從五位下の信濃守に任す

毛利

藤原高侚

女子　戸田山城守忠眞室

高重　主膳
安房守從五位下
延寶四年十二月廿六日叙任
天和二年四月七日卒二十一歲
法名竹林院高重雲岱

高久　靱負
實久留島信濃守道淸二男
駿河守從五位下
天和三年十二月四日叙任
元祿十二年五月十三日致仕
享保元年四月十六日卒五十歲
法名南昌院泰雲昭慶

高慶　助十郞
實久留島信濃守通淸五男
周防守從五位下
元祿二年十二月廿七日叙任
寬延二年八月七日致仕
同三年九月十二日卒六十九歲
法名源林院了山宓寬

某　秀太郞　早世

高通　助十郞
攝津守從五位下
享保二年十二月廿一日叙任
同四年四月廿六日依病籠居
同十八年七月廿三日卒三十一歲
法名蘭溪院松逝了柏

高丘　寅太郞
周防守從五位下
延享二年十八日叙任
寶曆十年六月十六日卒二十一歲
法名蘭陵院香山全性

高標　彥三郞
從五位下和泉守
安永元年十二月十八日叙任
後改伊勢守

高能　大八郎
大和守從五位下
享保十五年十二月十八日叙任
元文五年正月廿四日卒三十四歳
法名靈牲院逸岩玄貞

信之　主計
南部縫殿養信養子

女子
戸田大炊頭忠吉室

聚　森圖書
水戸家人
山野邊兵庫頭義胤養子後歸
天明六年十月十一日卒

女子
大久保宗三郎敎純室離別
嫁巨勢日向守

女子　早世

女子
松左賴母直通妻離別
嫁竹中主膳元滌

一高　安次郎　早世

利濟　長門守
瀧川兵庫助利雄養子

女子
片桐石見守貞芳室

盛平　駒之丞　右近
關伊織盛有養子

正應　外記　玄蕃
花房因幡守正城養子

季禮　內膳
秋田淡路守孝高養子

女子
許嫁戸田大隅守忠怨忠怨卒
嫁本庄甲斐守通利

利雄　兵庫助
瀧川大學利廣養子

女子
許嫁森新太郎政依離別
嫁井上周防守正乘

高聽　岩之助

高長　松之助

毛利

○安房守藤原高重は伊勢守高尙か男にてはしめは主膳といふ寛文四年十一月父か遺領を賜り（豐後國佐伯の城二萬石）おなしき九年の夏はしめて見參し延寶四年叙爵し天和二年四月二十一歳にしてうせぬ男子なかりしかは久留島信濃守越智通清か三男靱負高久とやしなひてことし六月家つかす高久同き三年の冬從五位下に叙し駿河守に任すこれも子なかりけれは元祿元年の七月弟助十郎高慶（久留島信濃守通清か五男）を嗣としておなしき十二年致仕し享保元年四月五十歳にして卒す高慶元祿元年はしめて見へたてまつりあくる二年の冬叙爵して周防守になり同しき四年六月五日奥詰の衆にくはゝり屋かて御扈從になり十月に至りてゆるさる同しき六年四月二十二日仰かりむりてふたゝひ昵近しあくる七年二月十六日又ゆるされおなしき十二年五月十三日家をつく嫡子攝津守高通二男大和守高能ともに先たちてうせけれは高通か長子寅太郎高丘をよつきとし寛保二年八月致仕しあくる三年の秋六十九歳にして卒す高丘祖父か家ゆつられてのち延享元年はしめて見參しおなしき二年叙爵して周防守になり寶暦十年六月身まかりぬ三十一歳その子彦三郎高標家をつき明和八年の秋はしめて拜謁し寶永元年十二月從五位下和泉守に任す（十八歳○後に伊勢守に改む）

藩翰譜續編卷之十上

・稻葉

藤原信通

―女子
花山院内大臣定誠公室

―景通　右京
右京亮從五下
承應三年十二月廿八日叙任
元祿七年閏五月廿日卒五十六歲
法名本光院一空宗眞

―知通　市正　初通周
實能登守信通三男
能登守從五位下
貞享元年十二月廿五日叙任
寶永三年四月十五日卒五十五歲
法名本靈院一嶽宗泰

―女子
織田越前守信久室

―某　右衞門　早世

―通周　市正

―通行　監物

某　早世

越智恒通　彦六
飛驒守從五位下
寶永元年十二月十一日叙任
同三年六月十一日改伊豫守
同六年五月復越智氏
享保五年六月廿五日卒三十一歳
法名本輪院一草宗巖

通大　莊右衛門
稻葉內藏丞通長養子

董通　中務
能登守從五位下
享保五年十二月十八日叙任
同廿年五月改刑部少輔
同年九月改伊豫守
元文二年正月十七日卒三十二歳
法名本明院一源宗德

女子
松平修理定武妻

德綱　修理
栃木織部明綱養子

通古　監物

信昉　三左衛門
山高八左衛門信藏養子

女子
勸修寺權大納言顯通卿室

泰通　萬次郎　民部　初治通
右京亮從五位下
延享四年十二月十九日叙任
寶曆八年十月改能登守
明和五年七月二日卒三十九歳
法名水源院一水宗滴

女子
一柳土佐守末榮室

長璉　安之丞　民部
市橋下總守直恭養子

通房　主稅

弘通　龜太郎　初副通
従五位下能登守
明和七年十二月十八日叙任

通辰　松次郎

女子三人　伊東左京亮祐肅室　二人早世

候通　生駒彦四郎

雍通　虎次郎

女子　許嫁相良政太郎長猷卒

稲葉

○右京亮藤原景通はこの家もと越智氏なり前編にも越智にしたかふ家の譜によれり景通か七世の祖備中守通貞故ありて藤原にあらたむ景通か孫恒通か時におよひて本性に復し越智と稱すといふ能登守信通か嫡男なり正保三年の夏はしめて見へたてまつり承應三年十二月二十八日前編に承應二年としろすは誤なり叙爵し延寶元年の八月家をつき豐後國臼杵の城五萬石餘元祿七年の夏五十六歳にて卒す子無りけれは弟市正知通初は通周をやしなひて家つかす知通寛文元年はしめて見へ奉り貞享の冬從五位下に叙し能登守に任し寶永三年の夏身まかりぬ五十五歳その子彦六恒通元祿十二年七月二十八日はしめて拜謁し寶永元年の冬叙爵して飛驒守になりのち伊豫守おなしき三年六月十一日家をつき享保五年の夏三十一歳にて卒す嫡男中務董通去年十一月はしめて謁見しことし六月家つきて後從五位下の能登守に任し後刑部少輔又伊豫守元文二年のはる三十二歳にてうせぬ民部泰通父につき延享四年の冬叙爵して右京亮になりのち能登守にあらたむ明和五年の七月卒す三十九歳その子龜太郎弘通はしめ副通家をつき同しき七年の冬從五位下して能登守に任す時に十七

脇坂

藤原安元

安經　虎松
實中務少輔安治五男
佐渡守從五位下
寛永九年四月四日卒
法名紫禪院機叟紹用

安利　左兵衛
實堀田勘左衛門正吉二男
寛永十三年二月四日卒

安政　甚太郎　初安吉
實堀田加賀守正盛二男
中務少輔從五位下
慶安四年十二月廿八日叙任
貞享元年十一月廿五日致仕號如水
元祿七年四月廿日卒六十二歲
法名車陽院大機如水

女子
實脇坂甚九郎安信女
池田三之助長純妻

安村　甚太郎
東市正從五位下
寛文十年十二月廿八日叙任
延寶六年九月十三日依病籠居
天和二年九月十九日配流若狹國
寶永三年九月十五日死五十一歲
法名靈臺院智潤道勝

女子
安照養女

某　傳次郎　早世

安照　甚之助　主殿
淡路守從五位下
延寶六年十二月廿八日叙任
寶永六年十一月十六日致仕號幽水
享保七年九月十九日卒六十五歲
法名雲要院一機幽水

女子二人
有馬左衛門佐永純室
加藤遠江守泰常室

女子
實安村女
京極主膳正高之室離別

女子　早世

安清　主殿
伊勢守從五位下
元祿十二年十二月十八日叙任
寶永六年十一月十六日改淡路守
享保七年二月九日卒三十八歳
法名寛恭院泰岳了山

某　安次郎　早世

通用　織部
久留島帶刀通政養子

安貞　宮內
正德五年二月十一日卒

女子　早世

某　清次郎　早世

安興　豐之助
中務少輔從五位下
享保十六年十二月廿三日叙任
同十八年六月廿八日改淡路守
延享四年八月十一日卒三十三歳
法名敬信院泰巖亮順

女子二人
甘露寺權大納言規長卿室
內藤山城守政里室

安弘　主殿
中務少輔從五位下
寶曆四年十二月十八日叙任
同七年七月十八日卒廿歳
法名定惠院圓巖自性

女子二人
一人早世
板倉若狹守勝久室

安實　富次郎

女子三人
竹腰山城守勝紀妻
片桐石見守貞陳室後嫁一柳帶刀直任
花房近江守職朝養女

安實　富次郎
實安與二男
伊勢守從五位下
寶曆七年十二月十八日敘任
同九年七月廿四日卒二十歲
法名長孝院德峯英俊

安利　一角
元文三年十二月十八日卒

女子　早世

重貞　作左衞門
本多飛驒守重益養子

照武　幸次郎　早世

某　幸四郎　早世

安種　角次郎　圖書　一角
寬延元年十二月十三日卒二十七歲

正實　丹宮
堀田大和守正永養子

女子四人
木下左京某妻離別嫁
小出求馬秀允
荒木九十郎政爲妻離別
嫁櫻井權右衞門能久
奧山藤十郎和佐妻和佐
死嫁武田與左衞門信尹
離別嫁依田一角守壽
一人早世

安親　熊五郎　圖書
實堀田加賀守正陳四男
寶曆九年七月十七日繼安實
從五位下淡路守
寶曆九年十二月七日敘任
天明四年四月十三日致仕
同五年十一月十八日改圖書頭

安教 甚之丞
近江守從五位下
安永六年十二月十八日敍任
天明元年七月二日卒二十歲
法名順靖院廓通意然

女子
板倉內膳正勝永室

安董 龜吉
從五位下淡路守
天明五年十二月□□敍任

女子五人
京極加賀守高尙室
二人早世
北條相模守氏助室
田村左京大夫村資室

安種 帶刀

某 保次郎 早世

安致 右京

某　順之助　早世

安徵　虎次郎

女子　早世

某　賢次郎　早世

脇坂

○中務少輔藤原安政はゝしめ甚太郎安吉といふ淡路守安元か子實は堀田加賀守紀正盛か二男なり寛永十七年の冬はしめて見へたてまつり慶安四年十二月二十八日叙爵し承應三年三月三日家をつき（信濃國伊奈町の地五萬三千石）叔父六右衛門安方に所領をわかちあたふ寛文十二年五月十四日播磨國龍野の地をたまふその日安政を御前にめしてとし頃奉公の勞といひかつは正盛か子なれはとりわきおほしめさるゝ旨にて龍野はふるき城地なれはふたゝひ城壘を構ふへしと仰下さる天和三年の夏詰衆の列にくはゝり貞享元年の十一月致仕して如水といふ元祿七年四月廿日所領龍野にておはる六十二歳嫡子東市正安村は延寶六年の秋病によりて廢せしか二男傳次郎某は世をはやうしけれは三男主殿安照嗣となり是よりさき延寶六年の冬はしめて見參し叙爵して淡路守に任し貞享元年十一月二十五日家をつき寶永六年致仕し幽水と號し享保七年六十五歳にて身まかりぬ嫡子主殿安清元祿十一年はしめて見參し明る十二年の冬從五位下して伊勢守に任し（のち淡路守にあらたむ）寶永六年十一月十六日家つきて弟一角安利に采地をわかつ享保七年の二月三十八歳にして卒す子とも二人世を早うせしかは三男豐之助安興父につきおなしき十六年の冬叙爵して中務少輔に任し（後淡路守になる）延享四年の秋三十三歳にてうせぬ嫡子主殿安弘十月四日家をつき寶曆四年三月はしめて出仕し十一月從五位下の中務少輔になり七年七月二十歳にて卒し子なかりしかは弟富次郎安實をやしなひてよつきとし九月家つきて十二月從五位下伊勢守に叙任し同き九年七月二十四日二十歳にて世を早うすこれも子なかりしかはおなしき二十九日一族圖書安親して家つかす安親は堀田加賀守正陣か四男にて一角安種か家をつきしか今又宗家をつきしかは采地（二千石）は收公せらる安親ことし十二月叙爵して淡路守になり天明四年四月十三日致仕す（時に四十八歳のち圖書頭にあらたむ）嫡子近江守安敎は世を早うしけれは二男龜吉安董に家をゆつる安董ことしの春はしめて見參し家つきて明るとしの冬從五位下の淡路守になる（十七歳）

小出

藤原秀政

吉政

吉英

吉重

英安　萬作　勘解由
備前守從五位下
寬文六年十二月廿八日叙任
元祿四年十二月廿六日卒五十五歲

女子四人
一人早世
大關伊豫守增榮室
土方伊賀守雄隆室
一人早世

英益　鶴松　右京
初吉國
大和守從五位下
延寶七年十二月廿八日叙任
元祿五年十月十日卒二十六歲

英通　八十郎
小出宮內英本養子

女子
實成瀨隼人正正親女
關備前守長治室

英長　又次郎　藏人
初吉任
實小出主殿英信二男
播磨守從五位下
元祿五年十二月十八日叙任
同七年十二月十七日卒三十歲

某 左門

女子
谷出羽守衞廣室

豐祐 萬菊 内匠
初豐範
有馬中務大輔忠郷養子

女子二人
成瀨隼人正正親妻
立花主膳種明室

英直 萬德 左近 權之助
初吉藏
享保八年十二月廿六日敍任
同九年八月二日卒七十四歲
今小出大膳英敦祖

英及 久千代
元祿九年十月廿六日卒一歲
家絕

吉親

女子三人
一柳藏人直頼室
杉原伯耆守重長室
加藤織部正直泰室

女子
戸田右近大夫氏利室

某　岩松　早世

英和　字兵衞　勘兵衞　初吉久
信濃守從五位下
寛文七年十二月八日敍任
延寶元年十月廿一日致仕號常慶
元祿八年正月十三日卒七十八歳
法名青永院秋山常慶

英利　大學　初吉倘　英法
伊勢守從五位下
延寶元年十二月廿八日敍任
寶永二年四月廿二日致仕
正德三年二月十七日卒五十五歳
法名靈膳院端峯義光

英貞　主稅　大學
信濃守從五位下
寶永六年四月十五日敍任
延享元年十一月十九日卒六十一歳
法名泰雲院一叟紹貫

女子
板倉内膳正重矩室

英親　外記
小出百助吉忠養子

英雄　織之助　主膳
小出宮内英通養子

直次　字兵衞
一柳美濃守直家養子

英清　熊之丞　頼母　後重倘　重清
板倉越中守重相養子

女子二人
一人早世
片桐隼人貞烈妻

女子四人
牛井通仙院瑞堅妻
井上帶刀正照妻
小出才次郎吉明妻
井上帶刀正照後妻

某
山城國愛宕山成德院

女子二人
言英家人
小出頼母重治妻
松平加賀守家人
金森七之助某妻

吉直　兵助　權之助　十郎右衞門
實一柳藏人直賴二男

英一　兵助
初吉光
天和三年四月有故蟄居家斷絕

吉忠　留之助　百助
實一柳宇右衞門直次二男
今小出外記實俊祖

英治　作十郎　主殿
今小出富三郎英淸祖

女子
堀左京亮直長室離別
稻垣攝津守昭賢室

某　半之丞　早世

女子

英持　幾千代　主税
初英重　英有　英長
伊勢守從五位下
享保十年十二月十八日叙任
後改信濃守
明和四年十月十五日卒六十三歳
法名清興院透嶺義關

英常　直三郎
初英勝
伊勢守從五位下
寶曆七年十二月十八日叙任
安永四年九月十九日卒三十三歳
法名靈源院献峯紹機

某　政之助　早世

女子四人
一人早世
稻垣若狹守定淳室
一人早世
井伊掃部頭直重養女

英筠　主税

英信　茂松　時之進

女子
小出外記持皓養女

某　秀五郎　早世

秀家—三尹—有宗

有重　萬助　三左衛門
大隅守從五位下
寛文八年十二月廿七日叙任
元祿六年五月廿三日卒五十八歳

重興　五郎助　玄蕃
元祿九年四月九日卒三十四歳

重守　兵部
元祿九年六月十五日卒十五歳

小出

附　備前守英安
　　大隅守有重

○備前守藤原英安(前編に吉之としるす)修理亮吉重か嫡子なりいまた勘解由といひし時承應元年十一月はしめて見へ奉り寛文六年の冬叙爵し延寳元年の十二月家つきて(四萬五千石但馬の國出石の城)弟左近英直に所領をわかつ(私墾田千五百石)元祿四年身まかりぬ(十二月廿六日五十五歳)嫡子右京英益延寳四年九月十三日はしめて見參にいり七年の冬従五位下して大和守に任し元祿五年三月十五日父の遺領をたまはり(五萬石はしめにしるすは前にたかへりされとともに記錄に載たる所なれはいまたかゆへきにあらすたゝし英安か時に加恩の地ありしにや詳ならす)いくほとなくしてうせぬ(九月十日二十六歳)子なかりしかは支族藏人英長をやしなひて嗣とす(英長は主殿英信か二男にて英信か遺領二千石のうち五百石をわかち賜はりしか此時采地をは公にかへしたてまつるといふ)英長十一月十一日家つきて従五位下の播磨守になりおなしき七年の十二月三十歳にてうせぬその子久千代英及に明る八年の二月十四日遺領を賜はるいまた幼稚なれは家督の事は一族とものはからひたるへきよしおほせ下されしにあくるとしの十月二十二日三歳にてうせけれは家絶たり

○信濃守藤原英和(はしめ吉久)伊勢守吉親の嫡子寛文七年六月九日吉親致仕して家ゆつらる(この時所領二萬九千七百石餘私墾田を合せて三萬石のうち二萬五千石は英和に賜はり五千石は吉親致仕後の餘年をやしなひて死後には吉親か養子七郎左衛門吉直に三千石百助吉忠に二千石わかちあたふへきよし仰下さるこれは吉親かのそみ申せしゆへとそ吉忠は一柳藏人直頼か二男吉忠は一柳宇右衛門相次か二男にて共に吉親か孫なり)ことしの冬叙爵し延寳元年十月致仕して常慶と號し元祿八年に七十八歳にして卒す長子大學英利(初吉安英法)寛文八年の秋はしめて見參し家つきて後従五位下の伊勢守になり寳永二年四月二十二日致仕し其子大學英貞に家をゆつり末子作十郎英治に采地をわかつ(千石)正德三年の春五十五歳にて卒す英貞元祿十年閏二月朔日はしめて謁見し寳永六年従五位下信濃守に叙任し享保十年の五月御奏者の事をうけ給はりてまた寺社の奉行をかねおなしき十七年の春西城の少老に轉し延享元年十一月十九日に卒すとし六十一嫡子主税英持(初英重英長英有)正德六年閏二月はしめて見參し享保十年冬叙爵して伊勢守に任し(後信濃守にあらたむ)延享元年の冬家をつき同しき三年十二月朔日御奏者の衆となり寺社の奉行をかね寛延元年七月朔日少老の職にうつり明和四年十月十五日六十三歳にして卒すその子伊勢守英常(はしめ英勝)寶曆五年の夏はしめて見へたてまつりおなしき七年冬叙爵し父におくれて家をつき明

和六年十月朔日御奏者の衆に加はり安永四年九月三十三歳にして卒すその子主稅英筠十一月父につく時にとし二歲

○大隅守藤原有重は故の大隅守有宗か嫡子なり寛文八年十一月三日家をつき和泉河内攝津但馬等の國の內一萬石十二月二十七日從五位下して元祿六年の夏卒す五十八歲と聞ゆ嫡子玄蕃重興延寶六年四月十一日はしめて見へたてまつり父卒せし年の八月三日家をつきおなしき九年四月九日三十四歲にして身まかりぬ子なかりしかはいまはのきはに弟兵部重守を嗣とせんと申をきたりしに重守もいへつきてうせけれは十六歲八月十一日所領の地のそかれて家たへたり

加藤

藤原貞泰

泰興

泰義

女子
松平新太郎光政家人
池田大學長久妻

泰恒　五郎八
初泰經　泰常
遠江守從五位下
寛永十一年十二月廿八日叙任
正德五年七月九日卒五十九歲
法名英久院俊山紹俊

某　一學　早世

某　五郎八
貞享二年十二月廿日卒

女子　早世

泰統　已之助　左門　隼人
出羽守從五位下
元祿十六年十二月廿一日叙任
享保十二年六月廿四日卒三十九歲
法名顯德院圓惠幼明

某　小十郎　早世

泰温　隼人
初泰古　泰見
遠江守從五位下
享保十四年十二月十六日叙任
延享二年六月十四日卒三十四歲
法名大心院泰叟玄高

女子　早世

泰觚　覺十郎
織部正直泰養子

泰孝　頼母　初泰長
加藤兵助泰茂養子歸

泰實　幼名新助
本空院大僧正

泰久　又五郎　兵庫　求馬
小出和泉守宗貙養子

某　源十郎　早世

女子二人　共早世

某　萬之助　早世

女子二人
一人早世
板倉讃岐守昌信室離別
嫁伊藤伊賀守長五離別
嫁喜連川左兵衛督義氏

泰都　織之助　伊豫守　左兵衛
加藤兵助泰茂養子

女子　早世

泰廣　右京
大藏少輔泰實養子

女子三人
一人早世
德大寺大納言實憲卿室

女子　早世

泰衡　龜之助　藤馬
實伊豫守泰都長男
出羽守從五位下
延享二年十月十八日叙任
寛延元年七月五日改左近將監
寶曆十二年二月二日致仕
同年十一月十一日改上總介
天明二年七月十九日改加賀守
同四年閏正月十五日卒五十七歲
法名覺厚院仁叟通儀

女子六人
泰衡室
岩城伊豫守隆光室離別
嫁堀靭負直泰
許嫁加藤總十郎泰榮
三人早世

泰武　富之助

泰武　富之助　初泰政
實泰溫男
遠江守從五位下
寶曆十一年十二月十八日叙任
明和五年五月廿七日卒二十四歲
法名廣善院頴峯義俊

女子
稻垣攝津守長以室

泰行　瀧口作十郎

惠氏　全王丸
喜連川左兵衛督氏門養子

女子二人

直英　式部　又十郎　彈正
溝口修理道福養子

泰行　瀧口作十郎　造酒進　初泰顯　泰英
實泰衡男
出羽守從五位下
明和五年十一月十八日叙任
同六年五月十二日卒十九歲
法名本源院天性宗眞

女子
松平越中守定信室

泰候 長千代 次郎四郎 初泰輝
繼泰行
遠江守從五位下
安永四年閏十二月叙任

某 健五郎

女子二人 一人早世
出雲守泰賢室

泰豐 左金吾
加藤孫之丞泰輔養子

泰周 舍人

女子
板倉内膳正重通室

泰定 作内 初泰重

某 加次郎 早世

女子二人 共早世

某 帶刀 早世

女子

某 次郎四郎

泰倫 千太郎 早世

女子 早世

直泰　大藏　織部
織部正從五位下
萬治三年十二月十八日叙任
天和二年正月五日卒六十八歳
法名要關院一機直入

泰甗　覺十郎　織部　右京　初泰忠
實美作守泰義三男
出雲守從五位下
享保元年十月十二日致仕改泰忠
同十一年二月十四日卒七十一歳
法名萬了院風久淸雲

泰貫　大七郎　文藏　宮內　初泰任
大藏少輔從五位下
享保元年十二月十八日叙任
同十三年九月廿一日卒五十三歳
法名天祐院殿山宗晧

泰桓　內膳　早世

女子
松平數馬信房妻

泰廣　右京　初泰春
實遠江守泰恒七男
織部正從五位下
享保十二年二月十八日叙任
後改出雲守
寶曆六年八月十六日致仕
天明二年十一月九日改山城守
同五年二月十六日卒七十七歳
法名枯華院英翁㫋徹

女子
大久保江七兵衞敎平妻

泰官　右門
近江守從五位下
寶曆六年十二月十八日叙任
同八年七月六日卒三十五歳
法名仁㫐院謙巖慧讓

某　主膳　早世

某　辨彌　早世

泰賢　覺十郎
出雲守從五位下
天明二年十二月廿八日叙任

女子
大久保傳之進秋慶妻

泰由　半之丞

某　靱負

某　主水

直道　修理　高力大學直賢養子

女子二人　共早世

政泰　男也　安西六郎右衛門政永養子

女子二人　一人早世　近藤隼人用常妻離別　嫁大久保豐前守忠温

某　犀吉

泰友　恒吉

某　鑑吉　早世

加藤

○遠江守藤原泰恒は(初は泰紀)出羽守泰興か孫なり父美作守泰義は泰興に先たちてうせけれは泰恒祖父の世つきとなりて寛文六年四月十三日はしめて見へ奉り同しき十一年の冬叙爵して延寶三年二月二十五日家ゆつられて(伊豫國大洲の城五萬石)叔父二人に釆地をわかつ(平八郎泰賢左兵衛泰茂ともに私墾田千五百石つゝ)正徳五年七月九日卒す五十九歳嫡子五郎八は世をはやうせり二男隼人泰統元祿十六年の冬初見叙爵して出羽守になり父か卒せし年の九月家つきて享保十二年の夏二十九歳にて身まかりぬ嫡子隼人泰恒(初泰古又泰見)家をつき十四年の冬従五位下遠江守に叙任し延享二年の夏三十四歳にて身まかる男子あらさりしかは支族伊豫守泰都か長子藤馬泰衔をして家つかす泰衔父か家にありしときこれよりさき御小納戸の衆にめしくはへられしかみやつかへをゆるされてとし八月九日泰恒か遺領をたまはり十月十八日従五位下の出羽守に任す(後左近將監にあらたむ)寶暦十二年二月二日致仕し(上總介また加賀守に改む)天明四年閏正月十六日卒すとし五十七その嗣子富之助泰武(初は泰政)は故の遠江守泰恒か遺腹の子なり寶暦十一年はしめて拜謁し従五位下の遠江守になりて明る十二年泰衔かゆつりをうけ明和五年の夏二十四歳にしてうせぬ泰衔か男造酒之進泰行をやしなひて七月家をつくことしの冬従五位下出羽守に叙任しあくる六年の夏十九歳にて身まかりしかは弟次郎四郎泰侯家をつく(時に八歳)安永四年閏十一月叙爵して遠江守に任す其子作内泰定

○織部正藤原直泰は家をつきしとき所領分ち賜はる(元和九年の七月伊豫國新谷の地一萬石)萬治三年の冬叙爵して天明二年に卒す六十八歳その子織部泰觚(はしめ泰忠)實は美作守泰義か三男寛文十三年四月十三日はしめて見參にいり天和二年三月十三日家つきて寶永六年四月十五日従五位下出雲守に叙任し享保元年十月十二日致仕しておなしき十一年の春七十一歳にて卒す嫡子大藏泰貫元祿元年の六月はしめて見へたてまつり家つきし後従五位下に叙し大藏少輔に任す享保十二年の夏致仕しあくる年の九月身まかるとし五十三その子右京泰廣(はしめ泰春)實は遠江守泰恒か七男享保九年閏四月はしめて見參しおなしき十二年父か致仕の日家をつき従五位下して織部正に任し(のち山城守また出雲守にあらたむ)寶暦六年の

秋致仕し天明五年に卒す七十七歳長子右門泰官寳暦三年の三月はしめて見参しをなしき六年八月二十六日家ゆつられて後従五位下の遠江守になり明和八年の秋三十五歳にて卒す嫡子覺十郎泰賢父につき時に五歳天明二年の冬叙爵して出雲守に任す

谷

源衛政

衛利

衛廣　助十郎
出羽守從五位下
寛文二年十二月廿八日叙任
元祿二年十二月廿一日卒四十六歳
法名源忠

女子二人
油小路大納言隆貞卿室
谷帯刀衛周妻

貞胤　源三郎
高城淸右衛門重胤養子

衛純　一學　早世

照憑　鶴千代　左京　大學
播磨守從五位下
寶永六年三月七日叙任
享保二年十月十二日致仕
寶暦四年八月四日卒八十一歳
法名至白

女子二人
有馬玄蕃頭則維室
酒井紀伊守忠貫室

衛衝　勝千代　右京
出羽守從五位下
享保二年十二月廿一日叙任
寶暦十二年四月八日致仕
同十三年五月十三日卒六十三歳
法名了無

女子
有馬玄蕃頭則維養女

某　岩之助　早世
實衛將男

女子　青木甲斐守一都室

女子　谷莊右衛門衛朋妻離別

衛將　勝千代　大學
明和元年正月廿一日卒三十七歲
法名元明

衛秀　鶴次郎

女子四人
一人早世
內藤賴母信智妻
小倉宰相中將頁季卿室
谷賴母衛明妻

景熈　極馬
遠山織部景義養子

衛秀　鶴次郎　圖書
實衛衝二男
播磨守從五位下
明和二年十二月十八日致仕
安永九年八月十三日卒五十二歲
法名萬中

某　岩之助

某　濟之助　早世

女子　谷織之進勝衛妻

衛量　鶴太郎
從五位下大學頭
天明五年十二月十八日叙任

衛睦　外記

女子　蒔田圖書廣憲妻

谷

○出羽守源衛廣は大學頭衛政前編に大學重政としるすか孫なり父甚九郎勝利世をはやくしけれは勝廣祖父の嗣となり承應元年の冬はしめて見へ奉り寛文三年三月二十五日家を繼き丹波國山家の地一萬石ことしの冬叙爵して元祿二年に卒す十二月廿一日四十六歲長男一學衛純は世をはやくし二男右京照憑貞享二年の夏はしめて見參し元祿三年四月父か遺領をたまはりて八月二十八日奥詰衆になされしか明る年の五月さき〳〵のことく外樣に候すへしと仰下さる寶永六年の春從五位下の播磨守に任し享保二年の冬致仕してその子右京衛衝に家をゆつりおなしき三年五月やまひを養はんかため所領山家に下り寶暦四年に卒す八月四日八十一歲衛衝享保元年七月五日はしめて見へ奉り家ゆつられてのち從五位下の出羽守になり寶暦十二年四月八日致仕し明る十三年に卒五月十三日六十四歲嫡子大學衛將延寶三年十一月朔日初て見參し父か致仕の日家を繼き明和元年の春身まかりけれは三十七歲弟圖書衛秀三月二十一日家を繼き明る年の十二月叙爵して播磨守になり安永九年の秋五十二歲にて卒すその子鶴太郎衛量父に繼くはしめ衛秀家をつきし時衛將が子岩之助とてありしか幼稚なりけれは衛秀兄の嗣となり岩之助をはおのか子とせしにいくほとなく世をはやくしけれは衛量嗣となりしなり天明五年の冬叙爵して大學頭に任す時に廿歲

木下

豐臣家定

利房

利當

女子
遠山信濃守友貞室

利安 主殿
實利貞四男
以躬行不備廢嗣子剃髮號宥開
延享四年五月十日卒

女子
實遠山信濃守友貞女
淺野壹岐守長恒妻

女子二人 共早世

公福 織部
初豐寛
實內藏頭俊長三男
享保十二年六月一日卒四十七歲

女子二人
利潔室
片桐主膳正貞音室

利貞　兵部
淡路守従五位下
寛文三年十二月十八日叙任
延保七年四月十六日卒五十三歳
法名慈光院乾徳利貞

女子二人
闕左門長政妻
家人杉原長左衛門勝興妻
勝奐後妻

正長
家人瀬川半平正方養子

公定（キン）　熊之助　宮内
肥後守従五位下
延寶七年十二月十八日叙任
享保十四年九月二日致仕
同十五年十二月廿四日卒七十八歳
法名慶巖院觀翁慧定

女子一人
平野丹波守長政妻
一人早世

藤榮　初稱金森牛之助　内記
享保九年十二月十七日卒八十歳
木下萬之助利安祖

女子　早世

紹經
京都建仁寺中當光院

利安　主殿

利潔　文治郎　兵部
實内記藤榮二男（三カ）
兵部少輔従五位下
享保十四年九月十一日叙任
後改美濃守
元文五年閏七月廿三日卒三十歳
法名觀光院雅峯高潔

紀林　小太郎　刑部　内記
寶暦三年三月六日卒五十九歳

藤香
寶永六年二月廿日卒

利潔　文次郎

女子三人　共早世

女子
土方主殿頭雄端室

女子
京極備前守高久室

利忠　定太郎
宮內少輔從五位下
寶曆四年十二月十八日叙任
後改肥後守
天明四年七月廿七日致仕

女子二人
石川縫殿總相室
織田式部信之妻

利春　左京
本多大膳將成養子後歸

女子　早世

女子
左衛門佐俊胤室

利寛　豐之助
明和五年九月二日卒十二歲

女子
新庄駿河守直規室

利彪　富五郎
從五位下淡路守
天明五年十二月十八月叙任

女子四人
一人早世
木下萬之助利泰妻
酒井下野守忠哲室
家利養女
平野九左衛門長元妻

女子

某　定太郎

女子

某　富五郎

一世
延俊

二世
俊治

女子
早世

三世
俊長
主計
右衛大夫従五位下
寛文元年十二月廿八日叙任
寶永四年九月十三日致仕政内藏頭
享保元年九月八日卒九十九歳
法名桂峯院英岱宗哲

女子
相良近江守長興室

某
千勝　早世

某
萬千代　早世

某
多門　早世

女子二人
肥後守公定室
伊藤播磨守也祐室

四世
俊量
式部
式部少輔従五位下
貞享三年十二月六日叙任
寶永四年九月十三日改右衛門大夫
正德二年四月十二日改右衛門佐
享保十四年九月一日改伊賀守
同年十一月十二日卒五十八歳
法名德音院俊量廣哲

女子三人
二人早世
木下縫殿助榮俊妻

某
富之助
寶永七年四月廿三日卒三歳

女子
久留島信濃守光通室

量道
豐之丞
享保元年七月朔日卒十五歳

女子三人
大久保彌十郎忠貞妻
松平主水義見妻
横山内記清章妻

五世
俊在
牧之丞
享保十六年十二月五日卒十八歳
法名遠讓院温厚操俊

某
元之助　早世

長治　萬助　左兵衛
木下長兵衛俊重養子

紹策
京都建仁寺中常光院

俊重　長兵衛
元祿七年七月十三日卒六十七歲

長胤　求馬
享保二年卒八歲

某　辨之助　早世

女子
稻垣對馬守重富室

量寛　織部　後公福
肥後守公定養子

女子　早世

長保　千五郎
長胤養子

長治　萬助　左兵衛
實俊治二男
正德四年卒五十五歲

六世
長保　千五郎　主稅
實俊長四男
享保十六年十二月十八日繼俊在
和泉守從五位下
享保十八年十二月十八日敍任
元文三年八月廿九日卒三十三歲
法名龍溪院圓應淨覺

女子　早世

長監　岩三郎
元文三年十二月三日繼長保
寛保元年十二月十四日卒十九歲
法名義善院鐵山梁船

八世
俊能　幸之助
寛保元年十二月五日繼長監
式部少輔從五位下
寶保二年十二月十八日敍任
寛延元年八山晦日卒二十四歲
法名心亮院閑淸淨安

俊泰　內藏助
寛延元年九月廿四日繼俊能
大和守從五位下
寛延元年十一月十一日敍任
明和五年七月廿九日卒四十三歲
法名雲祥院俊岸泰英

某　內藏助　早世

某　龜之助　早世

俊胤　莊右衛門　主計
實戸田越前守忠金六(五)男
左衛門佐從五位下
明和四年十二月十六日叙任
安永五年五月廿日卒三十歳
法名嚇々院德邦巖馨

女子
實肥後守忠利女
俊胤室

女子
戸田因幡守忠寛養女

俊懋　千勝

女子六人
德山兵重介知雄妻
高井左門常清妻
許家大久保米吉忠慶早世
山崎主税助義德妻
溝口武藏直清妻
小笠原豐後守信成室

木下

○淡路守豊臣利貞は故淡路守利富か嫡子寛永十九年はしめて見へたてまつり寛文二年二月二十四日家をつき(備中國の内二萬五千石)おなしき三年の冬叙爵延寶七年の夏卒す(五十三歳)嫡子宮内公定(前編には俊康としるす)寛文四年四月十二日はしめて見へたてまつり父かうせし年の八月十四日家をつき弟內記藤榮(母方につきて金森と稱す)に采地をわかつ(六千石)十二月從五位下して肥後守に任す子なきによりて弟の主殿利安をよつきとせしか行跡よからさりしかはしりそけて一族內藏頭俊長か三男織部公福(はしめ量光)をやしなひしかさきたちて身まかりけれは弟內記藤榮か二男文次郎利潔を養ひて嗣とし享保十二年七月二十八日はしめて見參させ同しき十四年五月二日公定致仕して利潔に家をゆつりあくる年の冬七十八歳にしてうせぬ利潔家つきてのち從五位下兵部少輔に叙任し(後美濃守にあらたむ)元文五年の秋三十才にて卒す嫡子定太郎利忠九月二十二日家をつき寶暦四年十二月從下の五位して宮内少輔になり天明四年七月二十七日致仕す(四十七歳)その子富五郎利彪天明二年十二月朔日はしめて見へたてまつり父か致仕の日ゆつりをうけ(時に廿歳)あくる五年の冬叙爵して淡路守に任す

○右衛門大夫豊臣俊長は伊賀守俊治か長子なり萬治元年二月五日はしめて拜謁し寛文元年六月十三日家をつき(豊後國田村の城二萬五千石)十二月叙爵す嫡子式部俊量は天和元年の秋はしめて見參し貞享三年の冬從五位下の式部少輔に任す(後右衛門大夫又右衛門佐伊賀守にあらたむ)俊長寶永四年九月十一日致仕し(內藏頭にあらたむ)所領の地にくたりて享保元年の秋六十九歳にて身まかりぬ俊量寶永四年家を繼享保十四年の冬五十八歳にて卒す子ともあまた世をはやくしけれは六男牧之丞俊在父につくおなしき十六年十一月二十五日十八歳にて卒す病おもきにのそみて叔父主稅長保(右衛門大夫俊長の四男にて一族數馬長胤か家をつき御書院の番衆たり)を後にせん事をこひ奉るしかるに俊在いまた拜謁をたにとけさりしかはその申す所もゆるされかたしとて別の仰にて長保して家をつかせらる(二萬五千石この時長保か廩米三百俵は收公せらる)長保おなしき十八年十一月從五位下に叙し和泉守に任し元文三年の秋三十三歳にして卒す子なかりけれは俊量か八男岩三郎長賢して十二月三日家つかせられしに寛保元年の冬十九歳にしてうせぬこれも嗣子

なかりけれは弟幸之助俊能して家つかせらる俊能明る二年從五位下の式部少輔に任し寛文元年の秋二十四歳にて卒すこれもまた子なかりしかは弟内藏助俊泰を嗣とす俊泰九月二十四日家つきて十一月朔日はしめて見へたてまつり十二月從五位下大和守になるその子ともふたりまて世を早うせしかは戸田越前守藤原忠余か五(六)男主計俊胤をやしなひて嗣とす俊胤明和四年の冬初て見參し從五位下して左衛門佐に任しおなしき五年の秋俊泰四十三歳にてし卒俊胤家を繼安永五年五月三十歳にして卒す嫡子千勝利懋父につく（時に五歳）

相良

藤原頼寛

頼泰 長次郎
壹岐守從五位下
延寶四年十二月十八日叙任
同五年十月廿一日卒十六歲
法名德光院文溪了鑑

頼眞 宮內
宮內少輔從五位下
貞享二年十二月廿八日叙任
元祿元年五月廿五日卒十八歲
法名嚴淨院覺明玄眞

某 式部 早世

女子 早世

某 萬吉 早世

某 又四郎 早世

女子 家人某妻

賴喬　長次郎　初長武　賴房
遠江守從五位下
萬治五年十二月十八日叙任
元祿十六年正月十四日卒六十三歲
法名天靈院俊翁含英

賴利　右近

賴福　萬滿　釆女　初長房
實家人相良主殿助長秀長男
志摩守從五位下
元祿四年十二月廿六日叙任
正德三年九月十一日致仕
同四年五月三日號梁誠
享保五年三月五日卒七十三歲
法名勵嚴院梁誠太廓

長敞　求馬

女子　早世

長浩　左内

某　數馬　早世

長興　金之助　初賴以
近江守從五位下
寶永四年十二月廿二日叙任
享保六年七月十一日致仕
同十九年十一月六日卒四十二歲
法名隨流院實山玄幽

女子　早世

武慶　主殿

女子　早世

榮長　兵庫

某　岩次郎　早世

長在　求馬　初長敞

女子　家人某妻

賴峰　政太郎

賴央　賴母　初滋氏

實賴端五男
近江守從五位下
享保五年十二月十八日叙任
元文三年六月廿五日卒三十六歲
法名靈霄院泰嶺實岫

賴完 民部 長次部 初晃長
實秋月佐渡守種美二男
近江守從五位下
明和二年十二月十八日叙任
同四年正月十七日卒十九歲
法名高嶽院英巖了俊

志摩守從五位下
寛延三年十一月十八日叙任
寶曆八年四月廿四日卒廿六歲
法名秀德院雄山玄英

女子

女子
前田大和守利尙室

某 織部 早世

女子
本多大和守忠堯室

福將 源次郎 初次充
實遠山佐渡守友明三男
越前守從五位下
明和四年十二月十六日叙任
同六年正月十二日卒二十歲
法名泰雲院玄巖道樹

實家人相良織部賴直長男
遠江守從五位下
寶曆八年十二月十八日叙任
同九年八月十一日卒廿五歲
法名祥麟院華嶽仁封

長寛 護之進 初改長 長泰
實松平伊豫守宗政二男
從五位下壹岐守
明和七年十二月十八日叙任

義休 政太郎

賴德 武之進

賴匡 金三郎 中務

女子 米良主膳則順妻

女子 溝口龜次郎直候室

相良

○遠江守藤原頼喬（初長武又頼房）は壹岐守頼寛か子なり正保三年三月二十五日はしめて見參し萬治五年の冬叙爵して寛文四年閏五月七日父かゆつりをうけ（肥後國人吉の城二萬二千石餘）元祿十六年正月卒す（六十三歳）嫡子壹岐守頼恭（前編には頼基と記す）二男宮内少輔頼眞世を早うしつきの子とも等みな父にさきたちけれは家人相良主殿助長秀か長男釆女頼福（初め長房）をやしなひて嗣とす元祿三年の七月三日頼喬はしめて見へたてまつりあくる年の冬從五位下に叙し志摩守に任し同き十六年の四月十日家をつき正德三年の九月二十一日致仕入道して梁誠と號し享保五年に卒す（三月五日七十三歳）嫡子金之助長興（はしめ頼以）寶永元年五月二十八日初て拜謁し四年の冬從五位下の近江守になり正德二年の秋家つきて享保六年の秋致仕し同しき十九年の冬身まかる（十一月六日四十二歳）嗣子なかりけれは弟數馬長在（はしめ長敬）を子とす長在享保五年七月十一日はしめて見えたてまつり從五位下の遠江守に任し明る六年七月十一日家つきて元文三年の夏所領の地にゆくとて道すから病にふして豐後國大里といふ所にてうせぬ（六月廿五日三十五歳○長在の時に重代秘藏せる綱切の太刀と袖裁の鎧を公に御覽せらるゝ事有綱切袖裁の事は寛永諸家譜並に前編に見へたり）その子政太郎頼峯十月六日父か遺領をたまはり寛延三年の冬叙爵して志摩守になり寶暦八年の夏二十六歳にして卒す子なかりけれは家人相良織部頼眞か長子頼母頼央（初は滋氏）をやしなひて家つかす頼央ことし叙爵して遠江守に任し明る九年の八月二十五歳にして卒すその子民部頼完（はしめ晃長）實は秋月佐渡守大藏種美か三男なりことし十二月十一日家をつき明和二年の冬從五位下近江守になるおなしき四年の春十九歳にてうせぬその子源次郎福將（はしめ友允）實は遠山佐渡守藤原友明か三男なり三月九日遺領を賜り十二月叙爵して越前守に任すおなしき六年の春二十七歳にて身まかりしかは松平伊豫守宗政か二子護之進長寛を子として家つかす長寛同き七年の冬從五位下の壹岐守に任す（時に二十八歳）

秋月

大藏種春

女子三人　一人早世
本堂源七郎玄親室
花房右近正親妻

種恒　伊勢千代　右京
出羽守從五位下
寬文九年十二月廿五日叙任
同十一年七月十日卒十八歲
法名松巖院溫室宗候

女子
大森三次郎某妻

種政　萬作　兵部
山城守從五位下
延寶五年閏十一月十六日叙任
後改長門守
寶永七年閏八月二日致任
享保元年閏二月廿六日卒五十九歲
法名天祐院度岳宗善

女子
安部丹波守信峯室

女子
六條中將有綱朝臣室離別

種信　黑帽子　主殿　兵部
佐渡守從五位下
萬治二年十二月十八日叙任
元祿二年二月晦日致任
同十二年七月廿七日卒六十五歲
法名天澤院龍山宗雲

女子　早世

種弘　黑帽子　兵部
河內守從五位下
元祿十四年十一月十八日叙任
後改山城守長門守
享保十九年十二月七日致仕
寶曆三年七月廿一日卒六十七歲
法名瑞應院惠山宗定

女子三人
脇坂淡路守安清室
二人早世

某　半之丞

女子　早世

滋榮
下總國飯沼弘經寺

種封　重三郎　式部
初種重
今秋月式部種備祖

種利　六助　宮內

女子
松浦肥前守鎭信室

勝親　萬作　織部
佐久間安房守勝重養子

女子
北條遠江守氏朝室

女子
相良遠江守長在室

種美　兵部
從五位下佐渡守
享保十七年十二月十八日叙任
寶曆十年七月八日致仕
明和四年七月廿日改長門守

女子
秋月左京種武妻

種頴　黑帽子　兵部
初種茂
山城守從五位下
寶曆七年十二月十八日叙任
安永九年十二月十二日改佐渡守

種德　黑帽子　兵部
山城守從五位下
安永九年十二月十八日叙任

女子　秋月主殿種隆妻

女子　家人柴坦平作定信妻

種懷　此面　千之助

女子　家人泥谷靜馬直久妻

信義　文之助　兵庫　中條大和守康隆養子

女子　榊原主計政榮養女

利國　文十郎　齊藤左源太利起養子

某　黑帽子

女子四人　家人山內隼人重遠妻　一人早世　家人內田新之丞正矩妻　家人千塚武八郎吉從妻

治憲　松三郎　直松　直丸　初勝興　上杉大炊頭重定養子

賴完　民部　長次郎　初晃長　相良遠江守賴央養子

女子　家人小田收右衛門久和妻

忠快　大助　釜之助　大久保彌三郞忠麌養子

某　龜三郞　早世

某　政次郎　早世

女子　家人山田櫺十郞重禮妻

長舒　重三郎　修理　繼黑田千之助長堅

女子　家人中村仲道義妻

某　岩次郎　早世

某　常三郎　早世

種備　和三郎　式部　秋月式部種穀養子

秋月

○佐渡守大藏種信は長門守種春か嫡子なり正保三年三月二十五日はしめて見へたてまつり萬治二年七月二十六日家をつきて（日向國高鍋の地三萬石）叙爵し元祿二年の春致仕すこれよりさき嫡男出羽守種恒におくれしかは（前編には種恒家をつくとしるせしはあやまりなり）二男兵部種政に家をゆつり（一萬七千石）三男式部種重に采地をわかつ（三千石）おなしき十二年七月二十七日六十九歳にして卒す（前編に寛文九年に卒と記すはたかひたり）種政寛文十二年二月八日はしめて見參し延寶五年の冬從五位下に叙し山城守に任し（後長門守になる）寶永七年閏八月致仕して享保元年の春五十九歳にして卒す嫡子兵部種弘元祿十三年八月二十八日はしめて拜謁同しき十四年の冬從五位下の河内守になり（後山城守又長門守にあらたむ）寶永七年の秋家つきて享保十九年十二月致仕し寶曆三年七月卒す（六十七歳）その子兵部種美享保十七年の秋はしめて見參しことしの冬叙爵して佐渡守に任す（後長門守にあらたむ）同き十九年家ゆつられ寶曆十年七月八日致仕す（時に四十六歳）嫡子兵部種頴（初は種茂）寶曆六年の冬はしめて見へたてまつりあくる年の十二月從五位下して山城守になりおなしき十年家をつく（十七歳）その子兵部種德承七年十月はしめて見參しおなしき九年十二月十八日從五位下の山城守に任す

宗

一世 平義智（トシ）

二世 義成

三世 義眞 彦滿
播磨守從四位下
明曆元年六月十一日叙任
同三年十一月廿七日侍從改對馬守
元祿五年六月廿七日致仕改刑部大輔
同十五年八月七日卒六十四歲
法名天龍院高岱宗聖

女子三人
轉法輪右大臣公富公室
松平備前守正信室
太田攝津守資次室

某 彦滿　早世

女子
實轉法輪右大臣公富公女
永井市正直時室

四世 義倫 右京　初義龍
右京大夫從四位下
貞享元年十二月廿五日叙任
元祿五年十二月十八日侍從改對馬守
同七年九月廿七日卒廿歲
法名聖光院心岳宗觀

女子三人
日野中納言資義卿室資義卿卒
嫁德大寺内大臣公全公
龜井隱岐守玆親室
毛利周防守高慶室

眞周 藏人
家人古川治右衞門某養子

某
彦千代　早世

五世
義方　根緒次郎
元祿七年十一月廿九日繼義倫
侍從對馬守從四位下
元祿九年十一月十二日叙任
享保三年九月五日卒三十五歲
法名大衍院眞榮室輪

女子
醍醐左大臣久照公室

倫寛　左門
家人多田與右衞貞重養子

方誠　氏江增之助

七世
方熙　樋口主馬
享保十六年二月廿一日繼義誠
侍從對馬守從五位下
享保十六年四月廿九日叙任
同十七年九月十一日致仕改民部大輔
寶曆九年十一月十九日卒六十四歲
法名淸淨院凉池心水

六世
義誠　增之助　式部
初方誠
實義貞六男
侍從對馬守從四位下
享保三年十二月朔日叙任
同十五年十一月六日卒三十九歲
法名大雲院玉樓高岳

某　岩丸　早世

如喬　村岡左京
爲家人

八世
義如　彌一
實若誠男
刑部大輔從四位下
享保十六年十一月十二叙任
同十七年五月十一日改對馬守
同年十二月十六日侍從
寶曆二年正月五日卒三十七歲
法名圓鏡院正宣如因

女子二人　藤堂大學頭高治室　松平遠江守忠名室

義如　彌一

女子　大炊御門右大臣家孝公室

九世
義蕃　氏江主水　初加苗
寶曆三年二月廿三日繼義如
侍從對馬守從四位下
寶曆二年四月廿六日叙任
同十二年閏四月廿八日致仕後式部大輔
安永四年八月十二日卒五十九歲
法名大順院法如迢禪

蕃壽　氏江兵庫　爲家人

女子　醍醐右大臣經胤公室

如連　逢殿　家人樋口佐左衛門直連養子

女子　難波大納言宗城卿室

如式 彌一 早世

十世
義暢 眞孫 直之助
寶曆十二年閏四月廿八日繼義蓄
侍從對馬守從四位下
寶曆十二年五月廿一日叙任
安永七年正月五日卒十七歲
法名貞常院施法修空

十一世
義功 猪三郞

某 下野

女子

如泰 土佐
家人俵主膳方紹養子

暢朝 美濃
家人樋口彌五右衛門如基養子

宗

○對馬守平義眞（前編には義實としるす）は故の對馬守義成か嫡子なりいまた彦滿と申せしとき寛永二十年の秋うち〳〵より御前にまいりて見へたてまつり（時に五歳）正德三年五月二十八日はしめて出仕し明暦元年の夏從四位下して播磨守になりおなしき三年十一月二十七日家つきて（對馬國府中の城）侍從に任し對馬守をかぬ父祖の例により朝鮮往來の事をうけたまはるへきむね仰下さる萬治二年の冬府中の城下火災ありて民家燒亡せしかはあくる三年の春米穀を賜ふ（一萬石のかうやくの特恩にあひし事この後もしば〳〵なり）天和二年の秋御代はしめを賀し奉るとて朝鮮の信使來朝せしか義直ともなひてこゝにまいれり聘禮事故なく終り九月十日に暇賜ひて聘使をともなひ國にかへる元祿五年六月致仕す（刑部大輔にあらたむ）その子右京義倫（はしめ義龍）延寶六年五月二十二日はしめて見參し貞享元年の冬從四位下の右京大夫に任し家ゆつらるのち侍從兼對馬守になり元祿七年九月二十四歳にて卒す子なかりけれはことしの十一月弟次郎義方（時に十歳）遺領を賜はる義方いまた幼弱なれば期鮮國に應接の事は父義眞にうけたまはりてはからへと仰下さる義方おなしき九年の冬從四位下の侍從に叙任し對馬守をかぬおなしき十四年九月十八日朝鮮の事を義方に仰つけられて義眞猶うしろみせよとそをきてさせたまひけりかくて明る十五年の八月七日義眞對馬にして身まかりぬ六十四歳義方正德元年の冬朝鮮の使きたりて舊好をおさめし時義方もとのやうに東道のあるしとなりてよろつうけたまはり沙汰す舊儀をあらためられし事なともおほかりしに義方よくそのこゝろをえておほしめすやうにさたしたりされは事はてゝのち勳賞としてもとの家臣柳川豐前か闕所の地をかへし賜はれり（肥前國のうち千五百石餘）享保の御代のはしめに又朝鮮より使をまいらすへきにて義方仰をうけたまはりてかの國に申おくりしにおなしき三年義方はからすもやまひを得て九月五日に府中の城にしてむなしくなりぬ三十五歳子ともはみないとけなくして聘使の應酬にたへさりしかは弟氏江（式か）兵部義誠して家つかす義誠ことし十一月兄につきてやかて從四位下の侍從に任し對馬守をかねこの日すくにいとまたまひて府中にかへりあくる四年の九月にかの國の使をともなひて江戸に

まいる事はて丶又ともなひかへれりおなしき十五年十一月六日義誠三十九歳にしてうせぬその子彌一いまたおさなかりしかは弟樋口主馬方照して家つかせはやと申せしによりて明る十六年二月二十一日弟方照をめして遺領をたまふ方照四月十五日はしめて出仕して家繼しかしこまりを申おなしき二十九日從四位下の侍從兼對馬守になる方照やかて姪の彌一義如を子としやしなひて五月二十三日見參させ十一月從四位下の刑部大輔になる同しき十七年九月十一日方照致仕して民部大輔にあらため寶曆九年十一月二十九日卒す六十四歳義如家つきて後對馬守にあらため侍從にすゝみ寶曆二年正月五日三十七歳にしてうせぬ弟氏江主水義蕃嗣子となりて二月二十三日兄につき四月二十六日從下四位の侍從に任し對馬守をかぬおなしき十年御代あらたまりけれはまた朝鮮のつかひ來聘の期をさためたりしに義蕃としころの病にをかされてかの國の使に伴ふにたへさりしかはおなしき十二年閏四月そのこふに任せて致仕の事をゆるされ義如か子直之助義暢に家つかせらる義蕃これより式部大輔にあらためやまひをやしなひて安永四年八月十二日五十九歳にしておはる義暢家つきしとしの五月二十一日從四位下の侍從に叙任し對馬守をかぬ明和元年の春朝鮮の使來り聘禮さき〳〵のことくとゝのひたり安永五年三月四日このとし比朝鮮と互市の事たへはて國用たらす進退あゆみをうしなふよしゑきりになげきてしかは愁訴をきこしめしひらかれて年毎に公の物をたまはるへきよしおほせたまはる（年毎に黄金一萬二千兩をたまはれり對馬は海上にさしはなれたる國なれは磽确の地おほくして耕種のわさこゝろにまかせすさるによりてむかしより朝鮮にたより交易を事として國用なとゝのへきたりしにいつの頃よりかその利やうやくすくなくなりもてきて國のまもりをはしめ士民ふいくのてたてをうしなひしかは此事を公に歎訴して延享のころ年ことに黄金一萬兩をたまはり交易のたすけとせられしに寛延三年にかの國の人參をうる事年々にすくなくなりしなとかめさせたまひて黄金をたまはらすなりぬ義暢家つきて後さま〳〵になけき申けれはさらに交易の利むかしにかへらんまては年々白銀三百貫をたまはるへしとおきてさせ給ひしにそのゝちに及ひてものなかふる事たえ果けれはひたすら公の恩惠をあふきのそみ國を守事となれり）同き七年の春三十七歳にてうせけれは長子權三郎義功三月六日父につく（時に十歳）

松浦

源隆信

鎭信　源三郎　肥前守從五位下　寛永十二年晦日叙任　元祿二年七月三日致仕
薙髪號鎭信　同十六年十月六日八十二歳　法名天祥院慶巖徳祐

女子五人
秋月信濃守種信室
秋山修理亮正房妻
家人松浦主膳某妻
家人松浦宇右衛門某妻
松浦覺左衛門某妻

信　權之助
家人松浦縫殿助某養子

女子
秋月長門守種政室

長　國松　源三郎
肥前守從五位下
元祿二年十一月廿七日叙任
同五年六月九日卒廿二歳
法名龍珠院天圓宗光

棟（タカシ）　源三郎
壹岐守從五位下
萬治三年十一月廿八日叙任
正德三年二月十一日致仕
薙髮號壹岐入道
同年九月廿三日卒六十八歲
法名雄香院俊林宗英

女子
石川美作守乘政室

女子
家人松浦內匠某妻

某　源次郎　早世

女子
實秋月式部種封女
加藤和泉守嘉矩室

篤信　數馬
實鎭信四男
肥前守從五位下
元祿十一年十二月廿五日致仕
享保十二年閏正月二日致仕
髮薙號篤信
寶曆六年十二月三日卒七十二歲
法名松英院逸巖俊翁

某　槌之助　早世

雅信　直記
家人權之助某養子

女子
牧野越中守貞供室

有信　松千代　源三郎
壹岐守從五位下
享保九年十二月十八日叙任
同十三年八月廿五日卒十九歲
法名等覺院天麟英心

誠信　吉松　數馬

某　民之助　早世

女子二人
許嫁豐後守隣々卒松浦河內守信正爲
養女嫁朝倉織部豐長
本多越中守忠恕室

某　龜之丞　早世

義信　典膳
家人松浦舍人某養子

女子二人
實千本八右衛門祺隆女
松平能登守乘温室
實松浦河内守信正女
松浦猪右衛門備妻

信程　金七郎　與次郎
松浦河内守信正養子

女子
曲淵市大夫勝定養女

邦　茂十郎　數馬
壹岐守從五位下
延享二年十二月十八日叙任
寶暦七年五月四日卒廿六歳
法名本覺院桑林宗巖

女子　稻葉對馬守昭兼室

女子　早世

某　勝十郎　早世

女子二人
家人
松浦民部某養女
家人
松浦左兵衛某妻

致　半藏
豐後守隣養子

某　傳之丞　早世

誠信 吉松　數馬

實篤信二男
肥前守從五位下
享保十三年十一月廿一日叙任
安永四年二月十六日致仕
同八年四月十九日卒六十九歲
法名誠嶽院英山紹俊

某 吉松　早世

政 甚一郎　左治馬

壹岐守從五位下
寶曆七年十二月十八日叙任
明和八年八月十二日卒卅七歲
法名政功院蓬山宗岳

清 英三郎

從五位下壹岐守
安永三年十二月十八日叙任

女子三人

永井若狹守尙佽室
木下肥後守利忠室
本多彈正少弼忠籌室

某 千藏　早世

女子 高橋伊豆守長連室

保 大助　早世

女子二人

一人早世
家人松浦縫殿某妻

敦 太郎吉

女子

武　乙千代

女子

昌　織部　大膳
寶永三年五月七日致仕號退入
元文元年正月十日卒八十六歲
法名萬松院俊哲性英

女子五人
牧野伊豫守忠貴室
實家人松浦權之助信女
佐竹壹岐守義知室
實秋月佐渡守種信女
織田讚岐守信明室
新庄土佐守直賢室
板倉周防守重久室

某　賴母　早世

邑　玄蕃　初厚
寶永五年十月晦日卒卅九歲
法名松林院柏峯全操

憑　靭負
元祿十四年九月廿三日卒

某　渡邊隼人　早世

某　渡邊右近　早世

女子　早世

信守　主馬
松浦八兵衛信勝養子

鄰　大助　勝十郎　彈正
豐後守從五位下
享保四年十二月十八日叙任
同十三年九月十四日卒二十四歲
法名天球院剃山金光

女子二人
家人
熊澤作右衛門某妻
一人早世

俱隆　八右衛門
千本兵左衛門賴隆養子

篤信　數馬

齊　內膳
家人
松浦求馬耳養女

某　千之丞　早世

某　仙菊　早世

某　豐三郎　早世

致　牛藏　大膳
實肥前守篤信六男
大和守從五位下
享保十九年十二月十八日叙任
後改織部正
明和三年五月廿一日致仕
天明三年八月八日卒六十八歳
法名宗嶽院高雲源致

寶　大膳
大隅守從五位下
明和三年十二月十九日叙任
後改大和守伊豫守
天明三年五月七日卒三十五歳
法名玄性院雄岳令成

女子一人
大久保遠江守數近室
大澤内膳令德妻離別
嫁福原内匠資明

矩　龍之助

女子二人

松浦

○肥前守源鎮信は壹岐守隆信か嫡男なり寛永六年はしめて見參し（時に八歳）おなしき十三年の冬叙爵し十四年家をつき（六萬三千石餘壹岐國に肥前平戸を合て領す）寛文四年の夏從弟松浦猪右衛門信貞に采地をわかつ（千五百石）貞享二年九月晦日鴈の間の詰衆になり（松浦の家此時はしめて昵近の列に加はる）元祿二年三月二日奥詰の衆に加へられしか年おいことにいたはりもありしかは四月十八日さいさい申てゆるされやかて致仕して嫡子壹岐守棟に家をゆつり（六萬千石餘）二男織部昌に所領をわかつ（私墾田一萬石）おなしき十六年の冬身まかりぬ（十月六日八十二歳）棟ははしめは源三郎といふ明暦二年の八月五日はしめて見へたてまつり万治三年の冬從五位下の壹岐守に任し元祿三年の夏奥詰の衆に加はり（父鎮信奥詰をゆるされし時なり）おなしき四年十一月二十五日御奏者の事をうけたまはりて寺社の奉行をかぬ七年の冬病によりて職をときまた鴈の間に候す寶永四年詰衆をやめられて外様の衆となる正德三年致仕して（壹岐入道と稱す）やかて身まかりぬ（九月廿二日六十八歳）長子肥前守長さきたちてうせけれは弟數馬篤信をやしなひて嗣とし篤信元祿九年の四月はしめて見參し十一年の冬從五位下して肥前守に任し正德三年家をつき享保十二年閏正月二日致仕し寶暦六年十二月三日七十三歳にして卒すその子源三郎有信享保七年十一月二十八日はしめて見參しおなしき九年の冬從五位下の壹岐守になり十二年家つきてあくる十三年の秋十九歳にてうせぬ子なかりしかは弟數馬誠信を嗣とす誠信去年の二月朔日はしめて見へ奉りことし十一月七日家を繼やかて從五位下肥前守に叙任し安永四年二月二十六日致仕し八年の夏六十九才にて卒す長子壹岐守邦は世を早うせしかは二男左治馬政よつきとなり叙爵して壹岐守になるこれも父にさきたちてうせけれはその子英三郎清祖父の嗣となり安永三年の四月はしめて見參にいり十一月從五位下して明る四年の春誠信がゆつりをうけて家をつく（時に十九歳）天明六年の正月支族越前守信程に廩米を增あたふ（四百石）

○大膳源富は肥前守鎮信か二男なり寛文五年六月十四日はしめて見へたてまつり元祿元年四月二十七日中奥の御小性にめしくわへらる明る二年の秋父か所領をわかち賜はり（肥前國のうち私墾田一萬石）帝鑑の間に候す寶永三

年の夏致仕して元文元年に卒す（正月十日八十六歳）嫡子玄蕃邑厚（初は）元禄三年の春はしめて拜謁し寶永三年五月七日父か家ゆつられておなしき五年の冬三十九歳にてうせぬその子大助鄰十月二十七日家をつきおなしき七年正月譜代の人々の列をとゝめられて外様へくわへらる正德五年三月十五日初めて出仕し享保四年の冬從五位下豐後守に叙任しおなしき十三年九月二十四歳にて卒す子なかりしかは宗家の肥前守篤信か六男半藏致をやしなひよつきとす致十一月二十一日家繼き同き十九年の冬從五位下の大和守になり（後織部正にあらたむ）明和三年の夏致仕して嫡子大膳實に家をゆつり天明三年八月八日六十八歳にして卒す實明和三年九月二十一日はしめて見參し家繼くのち從五位下大隅守に叙任し（のち大和守又伊豫守に改む）天明三年五月三十五歳にてうせぬその子龍之助矩七月二日家つきて（時に十六歳）おなしき五年の冬はしめて見へたてまつる

五島

源盛勝

盛暢　主稅　初盛滿
飛驒守(佐渡守)從五位下
延寶五年閏十二月六日叙任
後改佐渡守(飛驒守)
元祿四年六月十二日卒卅歲
法名㫖嶽

昌章　小次郎
奥平大膳亮昌能養子

兄政　總八郎　八郎右衛門
日向半右衛門正春養子

盛延　民部

女子
米津小大夫政矩妻

盛住　國千代　萬吉　主計　初高盛
大和守從五位下
寶永六年四月十五日叙任後近江守
享保十三年八月十一日致仕
剃髮號和醉
同十九年八月六日卒四十八歲
法名天量

重勝　大學　作左衛門
本多飛驒守成仲養子

女子
內田若狹守正長室

盛道　源吉　傳之助　主稅
大和守從五位下
享保十四年十二月十八日叙任
後改淡路守
明和六年十二月廿日致仕
剃髮號見外
安永九年四月廿日卒七十三歲
法名向山

女子
松平河內守康年室

盛義　主税
依病籠居

女子
盛運養女

女子二人
松平左近康寛妻
伊東伊豆守長詮室

女子
實盛義女
伊東播磨守長寛室

盛運　豐熊　直之丞　孫次郎
從五位下大和守
明和六年十二月廿八日叙任後改近江守

某　亀吉郎　早世

道高　政治

道村　時之助　兵部
五島左膳盛藏養子

女子二人
石川靱負總武妻
松平下野守康道室

五島

○飛驒守源盛暢は初盛滿淡路守盛勝か嫡子なり童名は主税といふ延寶三年二月二十八日初めて見えたてまつりおなしき五年十二月二十四日父盛勝かゆつりを受て家を繼肥前國松浦郡のうち五島一萬二千五百石餘○盛勝はあくる六年二月廿四日三十五歳にて卒す頓て爵して佐渡守（飛驒守）に任す後飛彈守（佐渡守）に改む元祿四年六月三十歳にて卒す其子萬吉盛高初盛住、父につき寶永六年の夏從五位下の大和守になり後に近江守享保十三年の秋致仕して長子主税盛道に家をゆつるおなしき十九年の秋卒す八月六日四十八歳盛道享保十年の冬はしめて見へたてまつり家つきておなしき十四年の冬從五位下大和守になりのち淡路守明和六年十二月致仕し安永九年四月二十日七十三歳にしてうせぬ長子主税盛義は病によりて籠居しけれは二男孫次郎盛運嗣となり明和六年十月十五日はしめて見參し家繼く從五位下の大和守に任す時に十四歳後近江守にあらたむ

某　愛次郎　早世

某　市之助　早世

某　帶刀　早世

某　金三郎　早世

通祐　榮之助
信濃守從五位下
明和元年十二月十八日叙任

通同　福次郎　帶刀
實允通七男

通嘉　祥丸

女子二人
青木美濃守一新室
渡邊豐前守信綱室

女子
實家人久留島右門通高女
楫斐靱負喬政妻離別
嫁上村六郎久忠離別
嫁佐野與八郎久數

義俊　庄兵衛
山崎兵部信盛養子

女子四人
高井但馬守綽房妻
青木縫殿助直英妻
家人久留島右門通高妻
高井但馬守綽房養女

通同（トモ） 福次郎

久留島

○信濃守越智通清は初通次道鑑と稱す丹波守通春か嫡男なり初めの名は吉松といふ寛永十三年五月二十八日はしめてまみへたてまつり明暦三年家を繼き豐後國の内二萬三千五百石弟等に所領をわかつ半八郎通貞に千石宇右衛門通迴に五百石寛文元年の冬叙爵し元祿十三年九月二十九日七十二歳にして卒すその子帶刀通政はしめ通總寛文九年の七月十一日はしめて見參し父か卒せし年の十二月五日家繼きて寶永六年の夏從五位下の伊豫守になり享保四年十二月十三日五十九歳にて卒す男子なかりしかば脇坂淡路守藤原安照か三男織部通同をやしなひしか世をはやくせしによりて又松平相模守源光仲か六男主殿通孝を養ふ通孝やしなはれし後病者となりけれは光仲かもとにかへしやりて弟民部通重か叔父宇右衛門通近にやしなはれ家つきて居たりしを公に申てよつきとす通重このとき御書院番の組頭をつとむその釆地五百石は公に收めらるしかるに正德五年にこれもうせけれは叔父修理亮通貞半八郎か事か三男靱負光通初め通源をやしなひて嗣とす光通正德五年の夏はしめて見參し享保四年十二月二十五日家を繼きあくる年の冬從五位して信濃守に任し寛延三年三月大番の頭になり寶暦八年十二月二十八日山城國伏見の奉行にうつり明和元年の九月十八日かしこにて卒す六十三歳子ともあまた世を早くせしかは五男の榮之助通祐嗣となり寶暦元年十一月朔日はしめて見へたてまつりて時に十四歳明和元年の冬父か遺領たまはりて從五位下の信濃守に任し安永五年の二月大番の頭に補し天明五年の冬伏見の奉行にうつる子なかりしかは弟帶刀通同を嗣子とす

藩翰譜續編卷之十下

●織田

山城守長賴

越前守信久

主殿長明

監物秀親

●建部

內匠頭政宇[トキ]

●片桐

主殿頭貞房

●青木

甲斐守重正

●伊東

信濃守長貞

織田

平信秀

信長

信雄

信良

信昌

高長

勝廣　右馬助
正保六年六月十七日卒

長頼　右近　初信倚
山城守從五位下
慶安元年
同年十二月晦日從四位下
萬治三年十二月廿八日侍從

信武　亂麿　右近　初長通　長國
出雲守從四位下
寛文十二年十二月十八日叙任
延寶三年八月廿六日改伊豆守
元祿七年十月晦日自殺四十歳

信休　右近　初信恒
壹岐守從五位下
元祿六年十二月廿三日叙任
正德四年十月廿五日改近江守
享保七年十一月廿九日卒四十五歳

元祿二年四月四日卒七十歲
法名德雲院四岩宗順

-長政　式部　對馬守
今織田式部信之祖

-信久　左門
兵部少輔信昌養子

-賴房　津田內藏助
爲家人

-女子
杉原伯耆守重長室

-女子

-女子四人
織田小十郎政晴室
土方勘解由氏陣妻
織田藤十郎一之妻離別
平野丹波守長政妻

法名圓明院定岩宗惠

-某　長八　早世

-長淸　安千代
主殿長明養子

-某　鍋千代　早世

-長晴　大助

-女子　早世

-女子

-女子七人
加藤出雲守泰觚室
播磨國本德寺照尊妻
松平彈正少弼則綱室離別
土方木工助豐高室
五辻右兵衞佐英仲室
皆川靱負重幸妻
秋月刑部種重妻

法名長德院正嚴宗統

-某　易麿　早世

-女子
內藤主殿頭正貞室

某　玄蕃　早世

信朝　菊千代　右近
出雲守從五位下
享保八年十二月十八日叙任
元文二年正月六日卒三十歲
法名水月院淨岸宗阿

信舊　豐次郎　織部
實信休二男
山城守從五位下
元文二年十二月十六日叙任
天明三年四月廿九日卒七十四歲
法名蘆月院還岩紹阿

某　元丸　早世

某　勇千代　早世

信憑　萬五郎　大學
初信富
實對馬守信榮二男
出雲守從五位下
天明三年十二月十八日叙任

信應　織部

長貴　慶三郎

信舊　豐次郎

信鄕　丹宮

女子七人
三人早世
柳原大納言光綱卿室
三人早世

信應　織部
實信舊四男

長孝　瀬之助

某　哲之助

某　鍋之助

信盛　左門
因幡守從五位下
延寶四年十二月廿九日叙任
貞享二年六月十五日卒廿五歳
法名雲源院皈巖涼潔

信知　千代丸　釆女
甲斐守從五位下
享保二年十二月廿八日叙任
元祿六年九月十四日卒三十一歳
法名圓成院寂巖雄然

信房　仁十郎
備後守從五位下
享保九年十二月十八日叙任
同十二年十一月廿七日依病籠居
法名圓通院寂堂了安

信村　龜次郎　藏人

信乘　數馬
安永元年九月十六日卒

女子二人
和泉守信富養女
許嫁瀧川主膳利端

信久　左門　內記

實出雲守高長四男
越前守從五位下
明曆元年十一月廿九日叙任
萬治三年十二月廿八日從四位下
元祿五年十二月十八日侍從
正德四年七月八日卒七十二歲
法名凌雲院崳巖維崚

女子

織田隼人正長迢妻

信就　伊織　帶刀

美濃守從五位下
元祿七年十二月十八日叙任
正德四年十二月十八日從四位下
享保七年十二月十八日侍從
同十六年六月十一日卒七十二歲
法名乾瑞院亨巖元貞

信允　齋宮

女子

大村筑後守紀尹室

信右　左膳

若狹守從五位下
享保十五年十二月十八日叙任
元文元年十二月十六日從四位下
改兵部大輔
寶曆九年十一月十一日致仕
同十二年八月十八日卒四十七歲
法名桃溪院仙巖宗壽

長顯　多門

女子

某　帶刀　早世

女子

津田外記正春妻

長英　主膳

女子

長季　將監

信賁 健千代 内記
越前守從五位下
寶暦六年十二月十八日叙任
同七年七月廿五日卒十七歳
法名亘明院脩巖勇知

信富 主膳 靱負 初長英
實信就七男
和泉守從五位下
寶暦八年十二月十八日叙任
明和元年六月七日卒四十二歳
法名南禛院檮巖宗巽

女子
九鬼式部少輔隆定室

女子

某 内記 早世

信邦 五百八
實對馬守信榮三男
美濃守從五位下
明和元年十一月十三日叙任
同四年八月廿一日蟄居
天明三年七月八日卒三十九歳
法名淨翁院點巖了然

女子
實數馬信常女
信邦室

信浮 八百八
實對馬守信榮四男
從五位下越前守
安永元年十二月十八日叙任
同四年四月九日改左近將監

某 久丸 早世

某　民松　早世

女子

長益

長政

長定

某　莊三郎

衛保　官助
依病籠居號友憩

長明　主殿
天和二年三月二日致仕
元祿十一年七月十日卒三十九歲
法名澄澤院愨巖英範

長淸　安千代　內匠
實山城守長賴三男
丹後守從五位下
寶永六年七月朔日叙任
正德四年二月十三日致仕
享保七年十月七日卒六十一歲
法名普放院雄巖堅勝

長弘　竹助　主稅
正德四年七月十九日卒十八歲
法名英選院軒巖宗昂

女子

長善　虎久　修理
織田能登守長福養子

輔世　又助

某　郡助　早世

宗諄　幼名藤助　泉山
近江國安土山摠見寺

某　順助　早世

女子二人
祇園執行寶壽院行快妻
一人早世

長亮　又助　初輔世
實長淸五男
肥前守從五位下
正德四年十二月十八日叙任
享保十八年六月七日卒廿八歳
法名天高院秀巖赫連

輔宜　幸次郎
從五位下丹後守
延享四年十二月十九日叙任
安永七年二月廿五日致仕

益聰　榮次郎　早世

長敎　榮三郎

長敎　榮三郎
實長亮三男
豐前守從五位下
安永八年十二月十六日叙任

女子四人
一人早世
南部遠江守信興室
西本願寺院家本善寺住詮妻
一人早世

長宇（トキ）
德三郎

尙長

長種

秀一
源十郎
初長盛

秀親
源七郎　監物
初長昌

某
兵助　早世

某
金彌　早世

某
豐之助　早世

女子
早世

成純
源三郎　右京　左京
初秀將　長敎　秀俊

信濃守從五位下
寛文元年十二月廿八日叙任
貞享四年八月三日卒四十九歳
法名圓常院梅嶺指月

秀行　虎丸　求馬
實秀親五男
伊豫守從五位下
享保九年十二月十八日叙任
同十一年六月十八日卒三十歳
法名巖光院本照宗然

成純　源三郎
寶永六年二月十六日爲前田采女利正
被害四十八歳
法名祥光院椿峯宗久

信方　吉次郎　監物
實織田左兵衞信淸三男
下野守從五位下
享保十一年十二月十六日叙任
寛保元年八月十三日卒廿二歳（三十三歳）
法名峯德院留光宗知

秀行　虎丸
實秀一二男
豐後守從五位下
寶永六年四月十五日叙任
正德元年四月十一日改播磨守
享保九年十二月三日致仕號大約信記
同十四年十一月朔日卒五十六歳
法名龍德院圓巖宗澄

秀賢　安次郎
信濃守從五位下
延享元年十二月十六日叙任
寶暦十三年八月廿六日致仕改出羽守
天明元年九月廿二日改安房守
同四年十一月廿日卒五十七歳
法名圓證院覺應義正

女子
松平備中守定靜室

某　寅之助　早世

女子　水野小十郎元敏妻　日向次郎正肥妻　多賀大助高賢妻

某　純之丞　三淵縫殿助正廣養子

長恒　龜次郎　左京　實信方五男　筑前守從五位下

秀綿　富十郎　筑前守從五位下　安永三年十二月十八日叙任

女子　早世

某　德之助　早世

長賢　吉次郎　早世

長恒　龜次郎

某　茂之助　早世

某　泰次郎　早世

某　兵次郎

寶曆十三年十二月九日叙任
明和三年八月廿二日卒二十八歲
法名享德院誠光宗流

長寧 和三郎 兵庫
初長通 長喬

某 健次郎

女子 早世

女子

織田

○從四位下山城守平長頼（初は信尙）は出雲守高長の二男なり兄の右馬助勝廣世をはやうせしかは長頼よつきとなりて慶安元年從四位下に叙し（家譜には此年正月從五位下して山城守に成り十二月四位にあけらるといふ）萬治二年十二月父か所領ゆつられて家をつき（大和國宇陀郡二萬八千石）弟式部長政に所領をわかつ（三千石）おなしき三年十二月侍從に任し元祿二年四月七十歳にして卒しけれは長子伊勢守信武（初は長通又長國）つく信武これよりさきに寛文六年七月十日はしめて見參しおなしき十二年の冬從四位下して出雲守に任し（家の譜には去年の冬五位の叙爵してことし四位にのほるといふしかれとも補任に四位下無官としるせり）尾張殿（光友卿）の御女にそひまいらせたり元祿七年十月和州の所領にありていかなるゆへかありけん家の老田中生駒なといふものを成敗しておのれも自害したりけれはこの事公にきこへて撿使を下されて糺明せられしに家人等誅せし事罪科分明ならす（世に亂心のいたすところなりといふ）またみつから及にふしたるもなに事とも聞えさりしかは明る八年二月その所領をは收公せられ丹波國氷上郡柏原の地（二萬石）を嫡子近江守信休にたまはりて家つかせらる信休これよりさき元祿三年二月十五日はしめて見參しおなしき六年の冬叙爵して壹岐守に任す（後近江守にあらたむ）享保七年十一月二十九日四十五歳にて卒すその子右近信朝十二月二十四日家をつき明る年十二月從五位下して出雲守に任し元文二年正月三十歳にてうせぬ男子なかりしかは弟織部信舊を嗣とす信舊ことし二月遺領をたまはり十二月叙爵して山城守になり天明三年四月七十四歳にて身まかりぬ長子元丸二男勇千代早世せしかは支族の對馬守信榮か子大學信憑を子とし養ひしにそのうち子とも二人まて（織部信應敬三郎長貴）まうけたりしかは織部信應を大學信憑かよつきにさたむ信憑ことし七月家をつき十二月叙爵して出雲守に任す（四十三歳）

○從四位下侍從兼越前守平信久は兵部大輔信昌か嗣子實は出雲守高長か四男なり（高長は信昌か叔父なり）慶安三年九月朔日家をつく（上野國小幡二萬石）明曆元年の冬叙爵して越前守に任し万治三年從四位下にのほり元祿五年侍從に任す嫡子因幡守信盛次男甲斐守信知先たちて卒しけれは三男帶刀信就を嗣とし元祿七年十二月はしめて見參し叙爵して美濃守に任す信久七十二歳にして正德

四年七月八日所領小幡の地にしてうせけれは美濃守信就ことし八月家をつきて十二月に從四位下に叙し享保七年の冬侍從にすゝみておなしき十六年六月うせぬこれも七十二歳なりその子備後守信房藏人信村數馬信乘ともに病ありしかは四男左膳信右を嗣とさためてこその冬はしめて見えまいらせ從五位下若狹守になりことし七月家つきて元文元年十二月從四位下にのほり兵部大輔にあらたむ寶曆九年十一月致仕して十二年の八月卒す四十七歳長子越前守信貧はさきたちてうせけれは弟の靱負信昌を子としやしなふ信昌寶曆八年はしめて見えたてまつり叙爵し和泉守になり家つきて明和元年にうせぬ六月七日四十二歳子なかりしかは一族對馬守信榮か三男五百八信邦して家つかせことし從五位下美濃守になるおなしき四年家人の事によりて罪かうむりて蟄居せりこの頃山縣大貳と云ふもの兵書を講して世に口もらふものありをのれか業をてらはんとやおもひけんまさなき事ともいひのゝしりてついには公の禁にふるゝことともありしかはおこそかに糺明せられたちまち刑戮に行はる信邦か家の老吉田玄蕃といふ者も大貳と入魂せりとて與黨にさゝれたり信邦これよりさきに不道なることや聞たりけん玄蕃をは召籠てけれともその事公にはいかにとも申さゝりしかは御氣色よからすしてついに御勘氣の身となりぬされとも北畠の家流をおほしめすことにやあらん信邦か弟八百八信浮に所領賜はりて家つかせらるこの時に舊領上野國小幡の地をはのそかれて出羽國高畠といふ所をたまはりその居邸なも收公せられたり○案するに信邦か家は北畠内府入道道眞の子兵部大輔信貞より傳へたれは織田一統の貴族として國持城持と申すにもあらぬ身なから世に從四位下に昇り侍從にもすゝみてあしろのこし爪折の傘なとにて他にことなる由緒とも聞えたりしにこれよりのちよろつの品あらためてなみなみの家となりしこそうたてけれかゝりしかは八百八信浮もしはしは出仕をとゝめられ同き七年十一月家つきしかしこまり申すとてはしめて見參にいり時に廿歳安永元年の冬叙爵して越前守になるのち左近將監にあらたむ○信邦は天明三年七月八日三十九歳にて卒しけり

○主殿平長明は從五位下豐前守長定の子なり寛文十二年の夏父におくれて家をつく大和國芝村一萬石天和元年七月十日はしめて見えまいらせけれともその身虚弱にしていたはるところおほかりしかはことし十一月一族山城守長頼か三男内匠長清を子とし養ひておなしき十三年五月二日家をゆつる長明時に廿三歳なりかくて大和の所領にうつり住し元祿十二年七月うせぬ内匠長清い

また父の長頼かもとにありし時延寶二年七月はしめて見参し長明か家つきて後寶永六年七月從五位下丹波守に任す正德四年二月十三日致仕しその子主稅長弘に所領をゆつり享保七年に卒す（十月七日六十一歳）主稅長弘父に繼し年の七月十八歳にて世をはやうしけれは弟又助長亮をよつきとす長亮ことし九月家嗣て十二月叙爵し肥前守になり享保十八年六月七日うせぬ（三十八歳）其子幸次郎輔宣八月三日父につくことしわつかに二歳なりしか延享四年十六歳におよひしかは十一月はしめて出仕して十二月十九日從五位下の丹後守に任し安永七年二月四十七歳にして致仕す子なかりしによりて弟榮三郎長敎を嗣とす長敎ことし四十六歳にて家ゆつられおなしき八年十二月叙爵して豐前守になる其子德三郎長守

○信濃守平秀一は修理亮長種か（前編には長久としるす）嫡子なりはしめは源十郎といふ寛永二十年十二月七日家をつき（大和國柳本一萬石）寛文元年十二月二十八日叙爵し貞享四年八月三日四十九歳にして卒す長子監物秀親延享元年五月はしめて見えたてまつり父か卒せし年の九月二十七日遺領を賜ひ寶永六年二月十六日前田采女利昌かために殺害せらるこれは東叡山にての事なりことし常憲院殿かくれさせたまひしによりて京都より勅使を下さるけふその禮奠行はるへしとて事にあつかる人々拂暁より東叡山につとひまいらす監物秀親も饗應の事をうけたまはりて山の惠恩院に居たりしにおなしく事うけたまはりし前田采女利昌いかに心狂ひたるにかあらん刀をとりて秀親をきるおもひかけぬ事なるゆへ秀親立あふ事もあらすそこにて息たえたり采女をは家人ともとりすくめて宿所にかへりしをやかて石川主殿頭か許にわたされて子細をとはれしに狂亂の所爲に極りけれは同き十八日に腹きらせられ秀親か遺跡は事故なく其嗣子左京成純にそ賜りける成純は秀親か弟なりはしめ秀親か子ともみないとけなくしてうせけれは成純を嗣とせり元祿元年九月はしめて見参し家繼しその四月十五日從五位して豐後守になる（後播磨守にあらたむ）成純子なかりしかは兄の秀親かのちにまうけし子求馬秀行を子とし養ひ享保九年十二月三日家をゆつる成純これより大約信記とあらためておなしき十四年十一月朔日五十六歳にして終りぬ求馬秀行家繼し年の十二月從五位下伊豫守に任

し享保十一年の六月うせぬ三十歳なりいまた子なかりしかは一族左兵衛信清か三男監物信方を嗣子として八月十六日家をつき十二月從五位下の下野守になりて寛保元年八月三十三歳(二十二歳)にて卒長子安次郎秀賢つくおなしき三年はしめて見參し明る年十二月叙爵して信濃守に任し寶暦十三年八月致仕し天明四年十一月うせぬ五十七歳弟左京長恒を子としやしなふ長恒は下野守信方か五男なり寶暦十一年十一月兄かよつきとなりてあくる十二年正月十八日はしめて謁見し秀賢か致仕のとき所領ゆつられてこの冬從五位下の筑前守になり明和三年八月二十八歳にて卒しその子富十郎秀綿十一歳にして家をつき同き八年はしめて出仕し安永三年十二月叙爵して筑前守になる

建部

源政明

政辰　牛之助　主水
元祿十三年依病籠居
享保四年七月廿三日卒五十七歳

女子　早世

政周　庄九郎　又右衛門　主計
初建部宇右衛門光成養子
丹波守從五位下
正德五年十二月十八日叙任
享保十七年九月廿三日致仕號勝隱
寶曆七年十一月廿日卒八十四歳
法名蓬仙院泰巖勝隱

女子
猪飼淺右衛門晴光妻

某　三十郎　早世

女子五人
內藤圖書忠種妻
有馬兵庫頭氏倫室
二人早世
大森八十郎種重妻

政民　久米之助　內膳
初政就
丹波守從五位下
享保十七年十二月十六日叙任
寶曆十二年六月廿四日致仕
明和二年七月廿日剃髮號靜山
安永八年八月十八日卒八十二歳
法名顯德院徽則義信

某　善次郎　早世

隆寬　辨之助
九鬼豐前守隆直養子

某　仙之丞　早世

某　喜八郎　早世

政宇（トキ）　十三郎　主水
初政吉　政信
實丹波守政長五男
內匠頭從五位下
寬文十年十一月廿八日叙任
正德五年正月廿六日卒六十九歳
法名松巖院仁溪子義

女子　早世

某　早世

女子二人
一人早世
牧野佐渡守親成養女

某　内藏助　早世

光隆　主計　泰治　後號松柏
有馬備後守氏久養子後歸

女子二人
一人早世
本多日向守紀智室

光之　門之助　號友山

女子　早世

某　孫七　早世

某　長四郎　早世

某　縫殿　早世

女子
米津相模守政宗室離別
嫁秋田大和守季隆離別

長敎　庄九郎　内膳
近江守従五位下
寶暦十二年十二月十八日叙任
明和元年七月十日卒四十一歳
法名寛量院大建宗仁

政賢　留之助
實政民四男
従五位下内匠頭
明和元年十一月十三日叙任

女子
三宅能登守康邦室

光平　久五郎　織部

某　丑之助　早世

女子三人
板倉修理勝該妻
二人早世

某　千代之助　早世

某　釆女　早世

女子二人
本多彌五郎政寛妻
大島喜太郎義勝妻

政賢　留之助

女子　早世

建部

○内匠頭源政宇初政吉又政信は丹後守政長か五男なりいまた十三郎といひしとき見參にいり寛文十年二月二十七日兄の丹後守政明か嗣となりて家をつく播磨國揖東郡の内一萬石その年叙爵して内匠頭になり元祿十一年十一月十五日伏見の奉行にゑらはれて正德四年七月十一日寺社奉行にうつり明る五年の春身まかりぬ六十九歲長子を主水政辰二男を又右衞門政周といふ政周はこれよりさき支族の宇右衞門光成か家をつきしか兄の主水政辰病ありて籠居しけれは家にかへりて嗣となるその采地五百石なは公はおさめらる元祿十六年四月朔日はしめて出仕して父かうせし年の三月家をつき十二月從下の五位して丹後守になる享保十七年九月致仕し勝隱と號し寶曆七年十一月二十日卒す八十四歲なり嫡子内膳政民父につきし年の冬叙爵して丹波守に任し寶曆十二年六月致仕入道して靜山と號す安永八年八月八十二歲にておはるその子内膳長敎元文五年閏七月十五日はしめて謁見し父か所領讓られてのち從五位下近江守に任し明和元年七月四十一歲にて卒す男子なかりしかは弟留之助政賢を嗣とす政賢ことし九月十六日家つきて十一月從五位下内匠頭に任す時に十八歲なり

片桐

源貞昌

信隆　鶴千代　下條長兵衛　初貞信
享保元年四月朔日卒九十二歳
今片桐長兵衛信懸祖

女子二人　共早世

貞則　長十郎　後稱栗原丹齋　信明
依病籠居
元祿二年七月七日卒四十九歳

貞就　岩之助
片桐又七郎且昭養子

貞房　友之助　長七郎　三郎兵衛
主膳正從五位下

貞寛　友之助
天和二年五月十一日卒

貞經　隼人　貞親　初稱下條藤之助
寶永六年四月十八日卒二十五歳

貞起　鶴松　權之丞　內紀
實松田權之丞貞尙二男

貞因　初松田吉太郎　彌十郎　牛三郎　大膳　初滿紀
享保十三年十一月十九日依病籠居
明和六年六月廿四日卒六十九歳
法名安叔宗閑

女子　早世

貞音　勝之助　主膳
主膳正從五位下

延寶二年十二月廿七日叙任
寶永七年九月二十二日卒六十九歲
法名心叔宗鎭

石見守從五位下
寶永七年十二月十八日叙任
寬保元年四月朔日卒七十三歲

寬保元年十二月十九日叙任
寬延三年四月三日卒三十九歲
法名省叔宗悟

貞尙 權之丞
松田半右衞門重政養子

女子
上杉駿河守勝周室

貞芳 孫之丞
初貞陳
從五位下石見守
寶曆元年二月十八日叙任

女子二人
片桐民部友從妻
上杉駿河守勝承室

女子 早世

貞彰 孫千賀 主膳

某 千代之助 勇之助

政和 長之助 與九郞
初貞和
酒井作左衞門政勝養子

繁文 光之助 丹下
初貞勇
本多丹下寬方養子

尙之 大助
初貞勇
馬場三郞兵衞尙成養子

慶存　幼名關之助
南都東大寺塔頭龍松院附弟

重威　元之助
本多左京重守養子

女子
戸門鐵藏達邦妻

幹之　舟之助

長榮　海之助
小笠原主膳長知養子

片桐

○主膳正源貞房は石見守貞昌か三男なり貞昌男子四人あり長兵衛信隆吉十郎貞明三郎貞房權之丞貞尙といふ信隆長子なりしかと庶出なり貞明は病ありしによりて貞房をよつきとし信隆には所領千石をわかちあたふはしめは下條と稱せしなり四男貞尙は松田半右衛門重政か家をつく明曆元年五月二十三日はしめて拜謁し延寶二年正月父か所領をたまはり大和國小泉の地一萬石餘な十二月從下の五位して主膳正に任し元祿四年十二月三日大番の頭となる職にある事二十年身すてに老て歩行心にまかせさりけれは寶永七年五月職を辭して九月二十二日卒す六十九歲なり貞房子とも二人ありしかともみなうしなひてけれは弟松田右京貞尙か二男權之丞貞起をやしなひて子とすこれよりさき見參にいりてことし十一月家を繼き十二月從五位下石見守になり寛保元年七十三歲にして卒す嫡子大膳貞因病ありしかは二男主膳貞音よつきとなり享保十三年四月はしめて見へたてまつり父かうせし年家をつき叙爵して主膳正になる寛延元年四月三十九歲にて卒し嫡子孫之丞貞芳つく貞芳寶曆六年の冬はしめて見えたてまつり叙爵して石見守に任す時に十七歲

青木

丹治比重兼

可一　主殿助
實酒井讃岐守忠勝三男
正德元年六月廿六日卒

重正　內膳　民部
實朝倉越後守（筑後守）宣親嫡男
甲斐守從五位下
寛文十二年十二月廿八日叙任
元祿六年八月十五日卒六十九歳
法名陽德院徹山道剛

直正　求馬助
青木縫殿助直景養子

重矩　源五郎　民部　初重吉　重安　重基
甲斐守從五位下
寶永六年四月十五日叙任
正德三年閏五月廿二日致仕
享保十四年三月廿七卒六十五歳
法名了心院雄山元英

女子　早世

景孝　主水
朝倉藤十郎景行養子

重朝　內膳
加藤左衛門嘉隆養子

女子二人　共早世

一典　寅之助　民部　初重行　正盈
出羽守從五位下
正德三年十二月廿一日叙任
享保十四年八月朔日改甲斐守
元文元年正月廿七日卒三十九歳
法名香德院瑞海元淵

女子二人
一人早世
祇園寶壽院妻

某 源三郎 早世

一都 源五郎
出羽守從五位下
元文四年十二月十六日叙任
寛保元年七月朔日改甲斐守
寛延二年十二月廿六日卒二十九歳
法名覺翁院大徹淨眞

見典 内膳
實一典二男
内膳正從五位下
寶暦元年十二月十八日叙任
同四年八月十四日卒三十二歳
法名清涼院秋岳淨眞

一新 主稅 初兼稠
實一典三男
美濃守從五位下
寶暦四年十二月十八日叙任
明和七年七月廿六日致仕
天明元年五月廿日卒五十四歳
法名善應院心珠衍明

見典 内膳

兼稠 主稅

女子二人 加藤右近明義妻
一人早世

某 寅太郎 早世

某 郎
近江國四十九院村唯念寺養子

兼睢 參吉
井上左大夫貞高養子

一在　左近
明和三年二月廿六日卒十八歳

女子
一貫室

某　虎千代　早世

某　増十郎　早世

某　仲之助　早世

某　直三郎　早世

一貫　伊織　初一載
實伊達遠江守村年三男
甲斐守從五位下
明和八年十二月十八日叙任
天明六年六月廿八日卒五十四歳
法名養源院暮石衍瑪

貫忠　九十九
佐野肥前守義行養子

某　民三郎
設樂善左衛門貞福養子

女子二人　共早世

貫時　加賀一郎
米津梅之助盛福養子

一貞　源五郎

女子

女子
齋藤賴母利衆養女

一寧　綾之助

某　喜代三郎　早世

女子二人　共早世

青木

○甲斐守多治比重正初は民部といふ故の甲斐守重兼か嗣子にて實は酒井讃岐守源忠勝か外孫朝倉筑後守(越後守)日下部宣親か子なりしを外祖忠勝やしなひて又重兼か子とはなせしなり寛文十二年十二月甲斐守重兼致仕し入道して瑞山と號し天和二年九月十四日七十七歳にしてうせぬ民部重正家をつく攝津國麻田一萬石ことし十二月從下の五位に叙し甲斐守に任す元祿三年五月十八日大番の頭となりおなしき五年正月十一日御留守居にうつり三月朔日またうつりて御側衆となり同き六年八月うせぬ六十九歳なり嫡子民部重矩これよりさき延寶三年五月十八日はしめて見參し父か家繼し後寶永六年四月從五位下して甲斐守に任す正德三年閏五月致仕して所領の地にかへり享保十四年にうせぬ三月廿七日六十五歳その子民部一典父か所領ゆつられし年叙爵して出羽守になりのち甲斐守にあらたむ三十九歳にして元文元年正月卒し嫡子源五郎一都家を繼くおなしき四年十二月叙爵して出羽守に任しのち甲斐守寛延二年の冬二十九歳にしてうせぬ子なくして弟内膳見典を嗣とすあくる三年二月十二日遺領たまはりて寶曆元年の冬從五位下の內膳正になり同しき四年八月卒す三十二歳これも子なかりしかはその弟主稅一新してよつかせしはことし十二月從五位下の美濃守に任す明和七年の七月致仕し天明元年に卒す五月廿日五十四歳その子左近一在十八歳にて世をはやくしけれは伊達遠江守藤原村年か三男伊織一貫をやしなひて子とし明和七年三月はしめて見參し七月二十六日家をつくあくる八年の冬從五位下して甲斐守になり寶永七年十一月大番の頭をうけたまはりしか天明四年病によりて職ゆるされ同しき六年六月五十四歳にして卒し八月二十一日嫡子源五郎一貞父につく時に十一歳

伊東

藤原長治

長貞 幸松 民部
信濃守從五位下
萬治三年十二月十八日叙任
元祿六年九月朔日卒五十一歳
法名大德院竺岳賢心

長救 幸松 民部 初長祐
播磨守從五位下
寶永六年四月十五日叙任
享保八年三月五日致仕
同十七年七月廿一日剃髮號淨山
延享二年九月二日卒八十四歳
法名節翁院義功淨心

女子二人
遠山和泉守友春室
一人早世
齋藤飛彈守三政妻

某 縫殿之助
延寶六年六月五日卒

女子二人
二人早世
大島肥前守義也妻

女子
小笠原近江守基方室離別
嫁武田主馬信胤

長丘 熊之助 內膳 主稅 初長廣
伊豆守從五位下
享保八年十二月廿八日叙任
同十五年八月十三日改若狹守
寶曆十三年九月十六日致仕
明和八年五月十九日剃髮號淨久
天明二年十月十日卒八十六歳
法名寶相院悠嶽淨久

女子
岡部主水長藏妻

某 大助
元祿十五年十月廿八日卒

某 鍋五郎 賴母
正德二年八月十七日卒

某　萬次郎
貞享四年七月九日卒

女子
酒井新次郎忠恒妻離別
嫁神保修理親茂

女子二人　共早世

長照　岩之助　豐三郎
初堀江內記
享保十四年五月廿八卒十九歲

某　吉五郎
享保二年五月五日卒

女子二人
池田備中守長興室
松平市正方妻

某　幸松
享保八年十月廿二日卒

女子二人
木下縫殿之助泰俊妻
內田近江守正良室

某　熊之助
延享四年四月朔日卒十六歲

女子　早世

女子
木下大內藏俊昌妻

長詮　政之助　主税
伊豆守従五位下
寶暦十三年十二月九日叙任
安永七年六月廿九日卒四十三歳
法名龍泉院英嶽長雄

某　岩吉
寛延元年八月十五日卒

女子
三枝源之助守泰妻

貞通　悦次郎　初長寅
石河右膳貞義養子

女子三人
松平内匠頭康久妻
三枝源之助守泰妻
永見仙太郎爲紏妻

長寛　政之助
播磨守従五位下
天明二年十二月十八日叙任

某　勇之助

某　鐵之助
明和五年十月九日卒

女子

長庚　政次郎　初長歡

長岑　龜之助

女子　早世

女子

伊東　前編作伊藤

○信濃守藤原長貞は甚太郎長治か嫡子なり（甚太郎長治は丹後守長實か孫にて若狹守長昌か子なり寛永十七年父が家つきて萬治元年七月八日卒す三十一歳）萬治元年閏十二月十八日父か所領をたまはりて家をつく（備中國富田の地一萬三百石餘）おなしき三年十二月叙爵して信濃守に任す元祿六年駿府の城を守りて九月朔日彼地にて病にかゝりてうせぬ五十一歳嫡子民部長救（初は長祐）父につきてあくる七年正月十八日奥詰衆にくわへられ三月二十八日御扈從となりしか十一月三日病によりて昵近の奉公を辭す寶永六年四月十五日從五位下播磨守に任し享保八年三月致仕し（のち入道して淨山と號し延享二年九月廿日八十四歳にて終る）長男主税長丘（初は長廣）して家つかす長丘この冬叙爵して伊豆守に任す（のちに若狹守）その子主税長詮は三男なりしか兄ともに早世せしにより嗣となり寶暦二年三月はしめて見參しおなしき十三年九月十六日長丘致仕し其後入道して淨久といふ天明二年十月十日八十六歳にして終る主税長詮父か所領ゆつられし月叙爵して伊豆守に任し安永七年の夏四十三歳にて卒す嫡子政之助長寛家繼く（時に十五歳）天明三年はしめて出仕し明る年の冬從五位下播磨守になる

藩翰譜續編卷之十一

● 柳澤 賜松平 美濃守吉保 刑部少輔經隆
式部少輔時睦チカ

● 米倉 丹後守昌尹

● 黑田 豐前守直邦

● 間部 越前守詮房

● 加納 遠江守久通

● 大岡 越前守忠相 出雲守忠光

● 田沼 主殿頭意次

柳澤　賜松平

清和天皇

貞純親王

經基王

滿仲

頼信

頼義

義光

義清　武田冠者

清光　黑源太

信義　武田太郎　大膳大夫從五位下

信光　武田五郎　石和五郎　大膳大夫

信長　武田六郎　一條六郎　甲斐守

信經　八郎

時信　一條源八　武田甲斐守　或時經

時光　十郎　初稱青木

常光　十郎太郎　或經光

信連 次郎太郎 尾張守

貞義 孫六 尾張守

義遠 十郎

安遠 彌十郎 尾張守

義虎 彌七郎
永正八年五月十一日卒五十三歳
法名靈池院蓮阿字水

信定 青木尾張守 剃髪號德治
天文十年十月廿日卒六十一歳
法名不二院毘䏊淨賢

信興 彌十郎
住甲斐國柳澤村號柳澤

貞興 彌太郎

信景 彌十郎
天文十年從武田信虎遂駿河國後於近江國坂本戰死

信房 柳澤靭負 號柳澤齊

信兼 靭負
上野國膳城素肌攻之時爲先登勝賴怒背軍令賜之死追某信之以柳澤二妹與横手信俊

信立　尾張守
天正十八年六月十三日卒七十三歲
法名陽亨院泰翁乾康

女子三人
山高氏妻
馬場駿河守妻
曾根内膳母

信時　青木尾張守
慶長三年六月十一日卒
法名全長

信國　監物
以信玄之命繼横手家
元龜元年正月攻駿河國花澤城之時
先登戰死

信俊　青木源七郎　又長俊
兄信國戰死之後繼横手家
天正八年柳澤信兼賜死勝頼使信俊繼之
故改稱柳澤兵部丞
慶長十九年十一月晦日卒六十二歲
法名高藏寺安宗頁心

信眞　彌一郎　早世

信次　青木源次郎
曲淵玄張養子

女子
實曾根内膳女
折井仁左衛門妻

某　孫右衛門
實曾根内膳男

女子二人
米倉助右衛門清次妻
高屋莊左衛門信久妻

安吉　柳澤孫左衛門　又信文剃髮號孫柳
貞享三年閏三月六日卒九十二歲
法名桃林院澤翁孫柳

安忠　長藏　十右衛門　刑部左衛門　又信時
延寶三年七月十一日致仕
剃髮號露林
貞享四年九月十七日卒八十六歲
法名正覺院張無源長

女子二人
岩下宮內妻
曲淵助之進妻

信生　青木清左衞門
實落合常陸子

女子
信生妻

某　横手源七郞
實信後一族之子也信立養之使繼横手家無嗣子家絕

女子
山高新右衞門信吉妻

信花　四兵衞
實安吉子
天和三年六月廿五日與高橋某鬪死

保敎
實山高新右衞門信吉三男
信花死後爲吉保之家人

祐政　彌七郞　長五郞
鈴木三郞五郞重助養子

安弘　內記　源七郞
柳澤源七郞信尙養子

里光　左兵衞

光房　青木新左衞門

女子　信花妻

里住　千代之助
刑部少輔經隆養子

吉保
主税　彌太郎　初房安　保明　出羽守從五位下　貞享二年十二月十日叙任　元祿三年十二月廿五日從四位下　同七年十二月九日侍從　同十一年七月廿一日左近衞權少將　同十四年十一月廿六日賜御家號改美濃守　寶永六年六月三日致仕　同年十月十日號保山元養　正德四年十一月二日卒五十七歲　法名永慶寺保山元養

女子　早世

某　多門　早世

女子　早世
實吉安女

信睦　孫六郎
依病籠居
元文五年閏七月廿六日卒

女子
信鴻養女

時英　千藏　早世

女子二人　大久保出羽守忠興室

吉里　兵部　初安暉　安貞
越前守從四位下
元祿十二年十二月三日叙任
同十四年十一月廿六日共父賜
御家號改伊勢守
同十五年十二月朔日侍從
寶永六年六月二日改甲斐守
延享二年九月六日卒五十九歳
法名乾德院瑞龍全利

長暢　主税　初俊親　龜次郎　早世

女子二人
實折井市左衛門正利女
黑田豐前守直重室
實折井淡路守正辰女
松平右京大夫輝貞室

安基　修理　早世

女子　早世

信鴻（トキ）　久菊　初義稠　信卿　伊信
美濃守從四位下
元文三年十二月十八日叙任
後改左兵衛督
安永二年十月三日致仕
天明三年十二月十五日號香山
同五年十二月十八日剃髪

女子
許嫁中川山城守久慶久慶
卒嫁戸澤上總介正諶

信昌　柳澤靭負　剃髪號一翁
天明元年六月十七日卒

忠敬　柳澤彈正　半左衛門
伊奈備前守忠宥養子

女子
堀大和守親長室離別
嫁戸田彌太郎忠俊

女子
信鴻養女

信以　內匠
家人柳澤新五郎正春養子

女子
信鴻養女

信智　一條八郎
爲保光家人

女子
家人青木甚八郎時武妻

女子
風早三位實秋卿室

信周　青木大彌太　初柳澤市十郎　堀田惣兵衛定爲養子後歸

時武　青木甚八郎　爲保元家人

女子四人　家人柳澤新五郎正春養女　家人一條孫太郎祐行妻　外山修理之大夫紀實妻　武田虎之助護信妻

光睦　青木龜次郎

女子　實信睦女　藤堂佐渡守高睦室

保光　久菊　初安信　造酒正從五位下　明和四年十二月十八日叙任　同五年十一月十八日改甲斐守　安永八年十二月十八日從四位下

保民　鐵五郎

女子

信近　柳澤勝三郎　石八郎

信復　柳澤粂次郎　兵部

女子二人　阿部備中守正倫室
實信昌女　式部少輔信著室

信明　大三郎
武田主水信安養子

女子　實信昌女
[illegible]伊勢守信有室

某　柳澤愛之助　早世

某　柳澤重三郎　早世

信任　柳澤三千藏

女子　冷泉中將爲訓室

房豐　柳澤粂五郎　早世

信貞　柳澤富橋

元智　曾根全彌

女子二人

廣籌 乙四郎
六角越前守廣季養子

里之 來五郎
式部少輔信著養子

女子二人 一人早世
米倉長門守昌賢室

經隆 伊織 初安道
元祿八年六月十九日奉台命改稱横手
同十四年十一月廿六日賜御家號
刑部少輔從五位下
寶永四年十一月廿一日叙任
享保十年八月廿三日卒三十二歲
法名天休院實山勝義

保卓 政五郎 初保存
實里光二男

里濟 稱柳澤千代之助 刑部 初里任
實宗家々人柳澤因幡保敎五男
刑部少輔從五位下
享保十年十二月十八日叙任
同廿年九月廿三日改伊勢守
同年十一月二日卒二十七歲
法名鷲峯院一枝道華

女子

信有 政五郎
從五位下伊勢守

里旭 彌三郎 新五郎
實宗家々人柳澤左衞門里光嫡男
天文元年六月二日卒二十一歲
法名普曜院性天智旭

女子二人
里旭室
一人早世

光被 金藏

女子

民部少輔從五位下
元文元年十二月十六日敍任
寶暦十二年十二月廿三日改伊賀守
安永三年三月廿三日卒五十五歳
法名大道院智山道勝

女子
許嫁土屋出羽守定直

安永三年十二月十八日敍任

女子
土岐主税賴香妻

正敬　庄三郎
一作清兵衛
石原清左衛門正範養子

某　德次郎　早世

康由　榮之助
石卷權右衛門康福養子

隆直　直之助　早世

樹正　吉十郎　早世

女子
牟禮清左衛門勝昌妻

時睦　左門　初信豐
元祿十四年十一月廿六日賜御家號
式部少輔從五位下
寶永四年十一月廿三日叙任
享保九年七月廿六日致仕
寬延三年四月廿四日卒五十五歲
法名嵩嶽院敎外單傳

女子四人
實曾雌庄左衞門定秋女
內藤山城守政森室
一人早世
實野宮宰相定基卿女依仰養之
大久保大藏少輔忠英室
松平右京大夫輝貞養女

忠仰　大膳
米倉丹後守昌熙養子

女子　早世

保經　賴母　圖書
實美濃守吉保七男
彈正少弼從五位下
享保九年十二月十八日叙任
寶曆十年六月六日卒五十五歲

女子
米倉丹後守昌晴室

信著　賴母　稱柳澤
式部少輔從五位下
明和三年十二月十九日叙任
天明二年三月十日卒三十六歲
法名寶𣳾院禪源透徹

女子
日野主稅資直妻

信始　彈次郎　早世

保經 圖書
式部少輔時睦養子

女子 早世
吉里養女

里之 吉藏 來五郎
初方敎 信古 信瑗 里光
實美濃守信鴻五男
信濃守從五位下
天明二年十二月十八日叙任

女子

柳澤　賜松平

○左近衛權少將兼美濃守源吉保は武田大膳大夫信光の庶流にして柳澤兵部丞信俊といひしもの丶孫なり（信俊は信光か十四代の孫にてはしめは青木源七郎といふ甲斐の武田に屬し横手監物信國か家を繼き横手と稱し天正八年一族柳澤靭負信兼か跡を繼て甲斐國柳澤村にうつり住しより今の稱號になりて兵部丞といふ天正十年武田亡ひて後初て東照宮に見へ奉りしとの事なり）信俊二子あり長は孫左衛門安吉とて慶長十八年に大相國家を拜し奉り采地賜はりて（百五十石を賜はるといふ）つかへ奉る二男は刑部左衛門安忠といふ兄安吉か遺跡を繼し時その采地を賜はりて大相國家につかへ奉る元和元年より駿河大納言忠長卿につかへ寛永十六年にめしかへされて上總國市昏村にて采地を賜ひ廣舗の番をつとめ仰によりて舘林殿に候し延寶三年致仕して貞享四年に死す吉保はこの安忠か男なり（吉保はしめ房安又保明小字は彌太郎といひしなり）寛文四年常憲院殿潜邸の御時はしめて見へ奉り延寶三年に父の跡をうけ（此時采地百五十石廩米三百七十俵）同き八年に常憲院殿に随ひ奉り本城に參り（もとは小性組番士と成この時御小納戸になさるといふ）貞享二年の冬叙爵して出羽守に任すこれよりさき頻に加恩あり元祿元年十一月十二日地くはへられてはしめて萬石の衆となる（和泉上總兩國の内にて萬石くはへられあはせて一萬二千石）この時松平伊賀守忠德喜多見若狹守重政か列に入て中次の役となる三年三月二十六日また地ましくはへられ（一萬石）この年の冬從下の四位にのほり四年三月二十六日常憲院殿吉保かたちに渡御の事ありまつ邸内にあらたに殿造してむかへ奉る入御の日種々の賜ものあり親族はさらなり家人にいたるまで恩賜あけてかそへかたし吉保等もまた數の寶を捧て山海の珍味をつくして饗奉る凡御家人多き中にいかなる故にや吉保特に寵をかうむりて仕ふること日淺しといへとも恩遇深く頻年領地ましくはへられしかのみならす台駕光臨の事ありこれより後しはしはいたらせたまふ事都て五十餘度におよふかくのことき榮耀は古も今も更にためし有ましく當時において肩をならふる人なかりき同しき五年十一月十四日加恩の地をたまふ（三萬石）七年正月七日又地を添られて川越の城を賜ひ（一萬石○武藏和泉攝津三ヶ國の内にしてすへて七萬二千石餘を領す）同年十二月侍從にすゝみ宿老に准せられ十年七月二十六日領地加増あり（二萬石）十一年七月二十一日左少將に任すことし東叡山中堂造營終り八月二十八日本堂遷座ありし時吉保仰かふむりて參向し長時不斷の燈をかゝくこれ延曆

のむかし勅使比叡山中堂の燈を供せし舊例によらる所なり十四年十一月十六日邸宅に渡御ありし時御稱號および御諱字賜はり恩命ありて永く譜第の衆につらなる此時美濃守吉保とあらたむ十五年所領ましくはへらる二千石寶永元年十一月文照院殿西城に入らせたまふ時其事とり申すにより又地くはへたまはりて甲府の城にうつさる三萬九千二百石餘をくわへられ甲斐駿河兩國のうちにして都合十五萬千二百石餘翌年駿河の地を返したてまつりて甲斐國をたまふ此時額定は三十三萬石はかりなりといへとも御朱印にはしるされす六年六月三日致仕して私墾の田を庶子二人にわかつ四男刑部少輔經隆三男式部少輔時睦をの〳〵一萬石つゝなり入道して保山と號し正德四年十一月二日五十七歳にして卒す吉保身の榮耀ためしなかりし事は世のあまねくしる所なり譜第節功の臣おほしといへとも治平の世にしてかくは登庸寵遇を蒙りしとまれなりこれしかしなから性質の怜悧なるかいたす所なるへししかれともその寵遇をこのみて又奢侈なる事も有りけるにや禪法をこのみてみつから三十三册の書をあらはし東山院御製の序を申請て勅賜護法常應祿抄と號して名山に納め又其頃堂上衆の中にも當代の職公にきこえし正親町一位公通の妹をおもひものとし松蔭日記とて身の榮地を筆記せしとありしとなりその子兵部安暉後安貞又吉里元祿四年常憲院殿父か邸に渡御の時はしめて見參し十一月十二日またならせたまひしとき從四位下に叙し越前守に任す後伊勢守又甲斐守十四年十一月二十六日父とともに御稱號をゆるされ御諱字賜はりて吉里とあらたむ十五年の冬侍從にすゝみ永寶六年家を繼享保九年三月十一日甲斐國をあらためて大和國郡山をたまひ當時吉里か弟二人私墾田をあらためて新に所領を賜ふ延享二年九月六日に卒す五十九歳四男美濃守信鴻小字は久菊ことし十月二十日遺領賜り長子多門某は早世し二男孫七郎信睦は眼をうれひ三男千藏時英は先たちてうせしかは信鴻嗣となりて元文二年閏十一月朔日はしめて見へたてまつり同しき三年十二月十八日從四位下の守になり安永二年十月三日致仕して年五十歳香山と號す嫡子久菊保光明和四年十一月朔日初て見參にいり十二月叙爵して造酒正になり後甲斐守父か致仕の日家つきて安永八年冬從下の四位にのほる二十七歳

○刑部少輔源經隆ははしめ安通幼名伊織少將吉保か四男なり元祿八年二月十日父か亭に渡御ありしときはしめて拜謁し十四年正月十五日はしめて出仕し十一月廿六日御稱號を賜ひ元祿八年より横手と稱せしなり寶永四年十一月二十一日叙爵して刑部少輔に任し六年十一月十二日譜第の衆となり六月十一日父致仕せし時私墾田をわかたれ甲斐國山梨八代兩郡の内一萬石享保八年閏四月二十八日越後國蒲原郡黒川にて所領の地かへ賜はる十年八月二十三日卒す三十二歳男子なかりけれは宗家の家人柳澤因幡保敎

か五男千代之助をやしなひて嗣とす千代之助里濟ことし十月二十二日遺領を賜はり（此時より柳澤の稱を用）十二月叙爵し刑部少輔に任す（後伊勢守）二十年十一月二日二十七歳にて卒すこれも男子なくして兄左兵衛里光長子彌三郎里旭（のち新五郎）をやしなふ里濟かうせし年の十二月二十九日家つくあくる元文元年五月襲封を謝し申せし日はしめて見へたてまつりしかいく程もなく六月二日世をさりぬ年二十一實の弟なりし政五郎保卓を嗣とす保卓ことし八月三日家つきて十二月十六日從五位下民部少輔に叙任し（のち伊賀守）延享四年九月十一日大番の頭となる職にある事五年にしてやまひをもつて辭し安永三年三月二十三日五十七歳にして卒す嫡子政五郎信有明和五年十二月朔日初て拜謁し父か卒せし年の五月八日に遺領賜はり十二月叙爵して伊勢守に任す（二十二歳）

○式部少輔時睦（はしめ信豐小字は左門）吉保か五男なり元祿九年九月十八日常憲院殿父か邸に渡御ありしときはしめてまみへたてまつり十四年兄經隆とともに御稱號賜はり十五年三月二十九日はしめて出仕し寶永四年叙爵して同き六年譜第の衆につらなり私墾田をわかたれ（甲斐國山梨八代兩郡の内一萬石）のち所領加へ賜はる（越後國蒲原郡三ヶ市）事經隆か傳におなし享保九年七月二十六日致仕して寛延三年四月二十四日卒す五十五歳男子なかりしかは吉保か七男圖書保經をやしなひて子とす保經家ゆつられて從五位下彈正少弼に叙任し寶暦十年六月六日ことし五十五歳にして卒す長子賴母信著ことし七月二十九日家繼て（これは柳澤と稱す）十三年十一月朔日はしめて見參し明和三年十二月十九日叙爵して式部少輔になり天明二年三月十日三十六歳にて世をさりぬいまた男子あらさりしかは宗家美濃守信鴻か五男來五郎里之を嗣とすことし五月七日遺領賜はり十二月從五位下信濃守に任す（二十五歳）

米倉

源重繼 丹後 天正三年五月廿一日於三河國長篠戰死 法名大育院意慶空心
新羅三郎義光孫逸見黒源太清光男奈胡十郎義行孫彌太郎信繼始稱米倉重繼者信繼十世孫云

―晴繼（ハルツク） 彦次郎
永祿十二年四月廿八日於駿河國薩埵山戰死

―忠繼 五郎兵衞 主計助
一作慶長四年四月卒五十六歲
天正十九年四月廿日卒五十九歲
法名放光院陵山豕元一作珠

―種繼 六郎右衞門
寛永十三年四月八日卒八十九歲 法名米倉院無常道心

―種繼 六郎右衞門 依台命稱丹後 實重繼三男

―豐繼 左大夫
寛永三年死
今米倉彖之助正明祖

―利繼 彦大夫

―女子 早世

定繼　加左衛門
元和八年九月十二日死
今米倉善藏正友祖

清繼　一作永時　助右衛門
一作五十五
寛永元年二月二日卒五十六歳
至同五年使昌純奉祀
法名大虚院天譽道普

義繼　忠右衛門
元和元年五月七日於大坂戰死廿七歳

昌繩　傳五郎
慶安二年五月十四日卒四十八歳

女子二人　須田長三郎某妻長三郎死嫁高尾惣兵衛嘉文
一人早世

昌純　太郎助　助右衛門
貞享元年七月十九日致仕號一閑
寶永四年八月廿三日卒九十四歳
法名天眞院貞性一閑

昌繼　次郎大夫

女子　横田三郎兵衛倫松妻

重種 平大夫
慶安二年十一月卒
無嗣家絕

女子

昌尹 六郎右衛門 初昌忠
丹後守從五位下
元祿三年十二月十八日叙任
同十二年七月十二日卒六十三歲
法名藏林寺德右道明

昌繼 次郎大夫
實助右衛門清繼四男
正保三年正月十六日卒

女子三人
昌繼妻
本多播磨守信吉妻信吉卒
嫁榑川七之丞某
雨宮對馬守正種妻

昌明 忠右衛門 六郎右衛門
主計頭從五位下
元祿九年十二月廿三日叙任
同十二年九月十九日改丹後守
同十四年正月十四日改長門守
同十五年四月廿五日卒四十三歲
法名觀性院覺海澄圓

某 午助

女子
武田與右衛門信常妻

昌照 宮內 忠右衛門 主計
丹後守從五位下
寶永六年九月朔日叙任
正德二年五月廿三日卒三十歲
法名時峯院大機宗俊

女子
長田新右衛門房重妻

昌仲　數馬　六郎右衛門
初忠直
元祿十六年四月廿六日卒
今米倉十之丞昌盈祖

某　百助　早世

女子
小堀遠江守政房室

昌行　岩之助　宮內

忠仰　大膳　主計
初保敎
實松平美濃守吉保四男
丹後守從五位下
享保五年二月十八日敍任
後改主計頭
同廿年四月八日卒三十歲
法名諦了院雄巖忠英

里矩　鍋三郎
寬延二年三月六日卒十七歲
法名貞髻院機雲元珠

昌晴　長之助　大學　民部
實米倉六郎右衛門昌倫二男
丹後守從五位下
寬延二年十二月十八日敍任
天明五年十二月廿日卒五十八歲
法名義德院政運道香

女子　早世

某　增五郎
寶永十年八月十一日卒

昌賢 總五郎 長之助
從五位下長門守
安永六年十二月廿八日叙任

女子

某 民次郎 早世

晴光 綾八郎

某 貴次郎 早世

光知 慶次郎
戸田七内光稟養子

女子 早世

某 孝八郎 早世

賢宗 三津助
本多兵庫助忠由養子

女子三人

米倉

○丹後守源昌尹（初は昌忠）は甲斐の武田か家にて世にしられたる丹後守重繼かのち也（家の譜に新羅三郎義光の孫逸見黒源太清光か子奈胡十郎義行か孫彌太郎信繼はしめて米倉と稱す重繼は十世の孫なりといふ）重繼初て竹束といふものをつくりいたして攻城の用を得たりうちものとつて功をあらはすこと凡十三度天正三年五月三河國長篠の軍に戰死したりけり（その詳なる事は寛永の諸家譜甲陽軍鑑等に見へたれはこゝにしるさす）その子主計助忠繼武田か家亡ひて後はしめて御家人となり本領安堵して天正十八年關東にうつりたまひしとき采地を賜ふ（七百五十石○家譜には初甲斐國擣衣井といふ所にて七百石をたまはり關東にうつらせ給ふとき四百石を加へ賜ふ）子なかりしかは弟六郎右衛門種繼して繼せられ丹後守と名乘り御使番の衆になる種繼か子二人あり長子助右衛門清繼二男平大夫重種といふ兄弟ともに大番の衆となり別に采地賜はりしか清繼先たちてうせけれは種繼死せし時重種家をつく（重種これよりさき大番より御代官となりて采地六百八十石をたまひ寛永十三年父か遺領をたまひそのか知行をも併所領せしにや詳ならす子なきによりて兄の清繼か四男昌繼をよつきとしけるに正德三年に昌繼まつうせて慶安三年に其身も死しけれは嗣なくして家絶たり）清繼か死せしは寛永元年の事なり清繼か子四人あり長子忠右衛門義繼二男傳五郎昌繩三男助右衛門昌純四男次郎大夫昌繼なり（寛永の諸家譜に重種か兄の永時といふはこれ清繼か事にやまたその子義繼あり二男は助右衛門政繼三男庄左衛門三友とのせて三友實は庄左衛門久長か子なり永時やしなひて子とす久長は三友か伯母聟なりとしるせり又次郎大夫昌繼といふはなく重種か子に重好といふあり今しはし家譜にしたかふ）義繼は元祿元年大相國家に召れて大番となり高木主水正か手に屬し元和元年大阪の軍起りし時したかひ奉りて戰死しけれは軍終りし後子やあるとゝはせ給ひしかともなかりしかは弟傳五郎昌繩をあとめになされて采地をたまふ（百五十石）しかるに昌繩寛永五年に傍輩と闘論して所帶沒收せらるされとも思召むねやありけん昌繼をめして父清繼か家つけとて采地を賜はる（二百石）これも大番になりてそのゝち組頭にうつり貞享元年致仕入道して一閑と號し寶永四年八月九十四歳にて身まかるその子丹後守昌尹なり初は六郎右衛門といふ正保のはしめわつかに八歳にてはしめて見えたてまつり明暦三年のころ御小性組の番衆にくわゝり貞享元年の秋父か所領ゆつられて（五千石）やかて歩行衆の頭に仰付らる目付の職を繼くおなしき四年には桐の間番衆にうつり元祿三年の春所領まし賜はり（五百石）その冬從五位の諸大夫になりて丹後守に任しおなしき五年正月十一日御側衆になる是よりしきりに所領を加増せられて九年三

月二十八日には少老の職に補せられ所領の地万石にあけられたり（武蔵相模上野等の地のうち）昌尹さる才幹やありけんいまた御側の衆たりし時に土木營造の事をうけたまはり沙汰して東叡山に根本中堂建られしをも建造し又畿内の水路を修理せらるへしとて奉行になさるおなしき十一年五月七日賦用の事宿老秋元但馬守喬朝と相謀りて沙汰すへしと仰下さるこれ少老にて財用の事をとり申す權與なるにや八月にはさきにたてまつりし京畿の川筋巡見のいとま給りてうちたちぬ道の便りにつきて大坂堺奈良をはしめ東山東海兩道の國々をもうち上りて十月十五日かへりまいれり明る十二年の正月二日又地くはへ賜り（所領合せて一萬五千石となる）そのとし七月十二日六十三歳にして卒す昌尹子とも三人あり嫡子主計頭昌明次は數馬忠直三男は百助某といふ昌明は父かいまた御小性組の番衆たりし時御書院番となりて別に廩米を給ふ元祿五年三月二十三日五十人の頭になされておなしき九年父か少老となるに及ひてその子ともの列になされて叙爵したり父かうせしとしの九月家繼く弟六郎左衛門忠直に（數馬の事なり）所領わかつ（三千石）おなしき十五年四月四十三歳にして卒すその子主計昌照家つきて寶永六年九月朔日從五位下丹後守に任し正德二年五月二十三日大坂の城を守りてかしこにてうせぬ（三十歳）子なかりしによりて松平美濃守入道保山か四男大膳保敎して家繼すこととし七月遺領たまはり主計忠仰とあらため享保元年九月朔日はしめて見參に入るおなしき五年の冬叙爵して丹後守に任し二十年四月八日うせたり忠仰男子一人あり鍋三郎といふこれはおとゝしの秋の頃所領の地にておもひもの丶腹にもうけたりいまた嫡子と定めさりしかおもはすもいまはのきはにおよひしかはこの子して家つかせられん事を申すその狀いかに心得しにやことし九歳とそ申たてにしかは公の御不審かうむりて一族をよひ家人等をも糺明せられしかは此事忠治か心にはあらすして家人ともかはからひなるよし分明なりしかは家人二人は親族松平甲斐守吉里かもとにおしこめられて忠治か遺跡はことゆへなく鍋三郎に給はりぬかくて鍋三郎里矩十四歳にて延享三年三月十五日はしめて出仕しけるか十七歳の春世を早うしけれは支族六郎右衛門昌倫か二男長之助昌晴して家つかせらる昌晴寛延二年三月九日家繼くこと

し叙爵し丹後守に任す明和元年八月八日大番の頭をうけたまはりて安永五年正月御奏者の衆にくはゝりおなしき六年四月二十二日には少老の職に補せられ天明四年五月西城につけられしかあくる五年十二月二十日身まかれり五十八歳長子長之助昌賢これよりさきはしめて見参して長門守になり天明六年二月家をつく十八歳

黑田　寛永諸家譜曰本氏加治後依住中山號中山

丹治家勝　勘解由　天正元年七月廿五日卒五十九歲
宣化天皇曾孫多治比王之子多治眞人左大臣島公廿四世孫云

家範　勘解由　天正十八年七月廿三日(一に廿日)於八王寺城戰死四十三歲

照守　助六　勘解由
寛永十一年正月廿二日卒六十五歲
法名無相院可山宗印

信吉　佐助
備前守從五位下
仕水戸家

女子
北條家人長市右衞門繁由妻

直定　助六　勘解由
正保二年正月十九日卒四十七歲
法名高鑑院壽山英勝

直範　勘三郞
薙髮號風印
万治二年正月十八日
配流播磨國姬路

信良　勘右衞門
實長市右衞門繁由男

直守　新藤左衞門　助六
勘解由
丹後守從五位下
貞享四年七月二日卒
今中山助六郞直隆祖

直張　主税　藤兵衞
延寶八年十一月晦日卒四十七歲
法名寒松院古崖傑鐵

直次　市之丞

正信　源七郞
室賀下總守正俊養子

女子二人
水戸家人香取助十郎安之妻
天野三八某妻

女子
實天野三八某女
堀田權右衛門一純妻

女子三人
山田十太夫重恒妻
石谷七之助淸明妻
安藤元右衛門定智妻

直好　主稅
下野守
享保十三年五月十二日卒
今中山下野守直彰祖

直道　帯刀
今中山勘兵衛直供祖

直邦　三五郎　初直重
始稱黒田
豐前守從五位下
貞享四年十二月十八日叙任
寶永元年十二月廿六日從四位下
享保十七年十二月十五日侍從
同廿年三月廿六日卒七十歳
法名陽松院關鐵直邦

直基　平七郎　主膳
實瀧川讃岐守元長嫡男
對馬守從五位下
享保元年十二月十八日叙任
享保六年十月八日卒廿八歳
法名圓通院普雄榮觀

直純　三五郎
實本多豐前守正矩二男
大和守從五位下
享保七年十二月廿三日叙任
寶暦十三年十一月十八日從四位下
安永四年閏十二月廿八日卒七十二歳
法名春晃院勝融直純

女子
直純養女

直亨　千五郎
實直邦四男
豐前守從五位下
延享元年十二月十六日叙任
天明四年壬正月十二日卒五十六歳
法名松樹院元榮直亨

延貞 正八

直清 玄蕃
黒田源右衛門直常養子

女子二人
富永甚四郎高村妻
中山丹波守直守養女
瀧川讃岐守元長後妻

直弘 鐵三郎
實直純二男
安永五年九月六日依病籠居

女子五人
一人早世
松平玄蕃頭忠曉室
直基室直基卒嫁直純
一人早世
九鬼備後守隆寛室

某 繁丸 早世

女子
內藤播磨守政醇室

直亨 千五郎

女子
實直基女
本多對馬守忠榮室

女子七人
京極出羽守高慶室
津輕左近著高妻
上田主殿義陳妻義陳卒
嫁勝田安藝守元忠離別
許嫁三枝越前守正勝卒
許嫁杉浦丹波守正勝卒
本多伯耆守正珍養女
杉浦丹波守正勝後妻

直弘 鐵三郎

某 龜次郎 早世

某 長吉 早世

女子　早世

直英　三五郎
大和守從五位下
安永六年十二月十八日叙任
天明元年閏五月十一日改和泉守
同六年七月廿七日卒二十九歳
法名泰崇院雄山直英

某　三五郎
天明三年三月十六日卒

直温　鶴松
初直義

直行　虎五郎　早世

女子
鳥居久五郎成純妻
許嫁杉浦市十郎正信

直服　千五郎

直清　三十郎

某　己津彌　早世

黒田

○豐前守丹治直邦は寛永諸家譜に丹治比としるす中山勘解由家範か山中はしめは加治と稱すのち中山に住するによりて改めしといふ玄孫也家範は北條陸奥守氏輝につかへ天正十八年小田原の役に武藏國八王寺の城を守りて戰死す陸奥守氏輝は北條氏政か弟なれは小田原の城に籠りをのか城八王寺をは勘解由家範及ひ近藤出羽助狩野一友等をして守らしめたりしも豐臣家北國の大將うけたまはりて向ひたる前田利家上杉景勝八王寺をとらんとてこれよりさきに降參したる北條左衞門大夫氏邦か使して小田原既にやふれぬこの城今は誰かために守りたまふへきいそき城門をひらきてわたされよといはせたり家範さらにうけかわす氏輝か心肝ならんにはあけのくへしとは得こそ申すましけれ氏邦等か如き億病なる士は此所には候らはぬものをといふかゝりしかは寄手の大勢四方よりをしよせて十重二十重にとりかこむ城中にも手をくたきて防けれとも衆寡敵しかたきならひなれは城つゐにおちいりて狩野近藤等もれおもひ／＼にたゝかひ死す家範もとより武勇すくれて殊に八條修理滿朝か騎法を傳へ關東無双とうたはれしかは究竟の馬にうちのり手のものともをしたかへよせ手のうちに切ていり縱横にそかけたりける敵はさすかに多勢なれは新手を入かへうたんとす家範おもふほとたゝかひさつと引て城にいれはわつかに十四五騎にうちなされたりよせ手の大將前田利家このふるまひを見て敵なからも惜き武士なりいかにもして味方になさはやとおもひしかは急き所縁のものをたつねて城中につかはせしに家範疾く腹切てその妻もおなしくうせけれは利家大に感しおしみけりとなん　その子助六照守のち勘解由にあらたむ小田原の城に在しか北條すてに亡ひしかは御家人になされて大相國家に召つかはれ御使番をうけたまはりぬ采地四百石をたまふ○照守北條に家人たりし時前々の戰に功ありし事は寛永諸家譜にみへたり慶長五年關か原の役には大相國家山道をうつてのほりたまひしにつき參らせて眞田安房守昌幸かこもりたる信濃國上田の城攻られし時照守追手にせめいり一日三たひ迄敵と鎗をあはせてほまれをあらはすこれは九月六日の事にや大相國家保屋平に御馬をむかへたまひ諸方の攻手を定められ其のち御手廻りはかりにて敵城近く見めくりたまひしに安房守昌幸か手のもの四五十騎出あふたり御方の勢すくなきを見計ひて城兵きをひかゝりし時照守戸田半平等七人とゝもに鎗とつて追しりそくこれを世に上田の七人衆とは申すなり大坂冬夏の役にもしたかひ奉りて首級を得たり軍終りて其功を賞せられて地くはへらる五百石のち御目付を經て御鎗奉行となる寛永十年四月七日御籏奉行となされし時また地をもそへられたり二千石合せて二千五百石あくる十一年正月卒すとし六十五照守馬のゝ術にくわしかりしかは左大臣家にも傳へまいらせしとなりその子助六直定大坂の役に父とゝもに功ありこれもまた勘解由といふその子二人兄助六直守父につき弟藤兵衞直張に所領の地をわかつ五百石直張か三男直邦なり直邦はしめは三五郎直重といふ外祖なりし黒田信濃守直利かもとに養はれしゆへ黒田と稱し舘林殿の公達徳松君に仕へ天和元年西城に扈從し徳松君うせたまひし後貞享二年二月本城の御小納戸に加へられ十二月御小姓となりて四年の冬叙爵して豐前守に任すこれよりしきりに采地ましくはへられて元祿十三年十二月朔日に萬石の列となる十六年正月九日又地くはゝりて五千石

常陸國下館の城をたまひ寶永元年十二月從下の四位にのほりぬおなしき四年正月九日また地ましくはへらる五千石直邦か邸宅松平美濃守吉保か家に隔なかりし爲にや吉保か家に御成の折柄には直邦かもとにもしは／＼臨ませたまひしとそおなしき六年御代あらたまりけれは御小姓をゆるされて鴈の間の衆となるこの後御代しきりに移りて享保八年三月二十五日に直邦御奏者の事をうけたまはり寺社の奉行をかぬおなしき十七年二月朔日には上野國沼田の城をたまはりて領地をそへらる五千石七月二十九日西城の宿老になりてまたまし封せられて五千石合せて三萬石十一月侍從に任す直邦若かりし時は盛世の恩寵を辱くし老ては明主の値遇を得たるはまことにいみしき果報なるへしおなしき二十年三月七十歳にして卒す直邦子なきにより瀧川讃岐守元長か長子平七郎直基をやしなひて主膳といふ享保元年初め叙爵して對馬守に任せしかおなしき六年うせけれはかさねて本多豐前守藤原正矩次男三五郎直純を子とし同き六年の冬公に見へまいらせてあくる七年十二月從五位下大和守になる家つくのち寬保二年七月二十八日上總國久留里の地を賜はり城をきつく寬保二年御奏者の事を奉り寶曆十三年十二月從下の四位にのほりこの時御奏者の事をゆるされたり安永四年閏十二月二十八日七十二歳にしてうせぬその嗣子豐前守直亨實は故の豐前守直邦か子なり直邦直純を養ひて後まうけたりし子なれは直純をのれかよつきと定て寬保三年十二月はしめて見え奉り延享元年叙爵して豐前守になる安永五年十二月六日家つきて天明四年閏正月うせぬ五十六歳なり直亨もまた直純か子鐵三郎直弘を子としけれと病ありて家つかすへうもなかりしかは安永五年九月六日をのか子三五郎直英をよつきとす明る六年九月はしめて見參し十二月從下の五位して大和守になる父におくれし年の三月家を繼天明六年の秋大坂の城の守りにさゝれてゆきけるかそこにて病にてうせぬ二十九歳その子鶴松直溫といふ三歳

間部

藤原滿任　蜷川左衛門尉　贈大政大臣房前公九世孫云

秀任（季イ）　三郎

秀詮（季イ）　三郎

滿詮　市三郎

滿信　彌三郎

滿観　彌三郎

維親　左衛門尉

滿國　三郎

滿直　伯耆守　安貞二年五月戰死

滿資　左衛門尉　法名運貞　天福元年七月卒

滿貞　三郎左衛門　法名一溪　文永七年六月十日卒

滿長　平內左衛門　法名道休　文祿（七イ）五年六月十六日卒

滿永　三河守　法名道興　貞和元年十二月三日卒五十八歲

宗信　三郎兵衛　法名信清　正慶元年五月五日卒

賴宗　兵部少輔　法名光譽　慶安四年九日十九日卒

滿重　三河守　法名本覺　應永十四年五月廿日卒

滿一　刑部少輔　法名信清　應永卅年十二月九日卒

一宗　伯耆守　法名假宿　嘉吉元年六月廿四日卒

爲宗　宮內少輔　法名道經　文明七年三月朔日卒

爲滿　伯耆守　法名玄養
延德元年九月十五日卒

一家　三郎兵衛　三河守從五位下
初滿家　法名觀譽　永正六年正月廿一日卒

信氏　三郎左衛門
伯耆守
弘治元年二月廿二日卒
法名甫庵

滿定　山城守
永祿八年十二月十七日卒子孫斷絕

國滿　伯耆守
天正十三年十二月廿七日卒子孫斷絕

信行　三郎兵衛
初信光
天文四年十二月五日於三河國

詮光　彌九郎　刑部
改鹽川　稱眞鍋後作間鍋
天正十年六月二日於京都戰死

詮則　彌十郎

詮吉　彥兵衛

詮淸　刑部
稱星野
寬文十年七月十四日卒八十歲
法名忠岸院光譽淨照

淸定　久右衛門　喜兵衛　稱星野改西田致仕剃髮號紹有
正德元年六月十四日卒七十三歲　法名圓淨院長譽光山

詮房　右京　宮內　稱西田改間部
越前守從五位下
寶永元年十二月九日叙任
同三年十二月十二日從四位下
同六年四月十五日待從
享保五年七月十六日卒五十四歲
法名享淨院兼譽輕心煥靈

詮言　主馬
實清定五男
下總守從五位下
寶永五年十二月十八日叙任
享保九年八月十八日卒三十五歲
法名端昌院極譽惠光利道

某　兵助　早世

詮方　多門
實詮貞男
若狹守從五位下
享保九年十二月十八日叙任
寶曆十一年十二月六日致仕
天明二年九月廿二日改丹後守
同五年八月廿日卒七十七歲
法名覺廣院還譽到岸亮本

女子
詮方室

女子二人
實共詮貞女
永井備後守直英室
內藤右京亮義稠室

詮貞　主膳
享保十二年五月十四日卒六十歲

詮方　多門

女子二人
共詮房養女

女子
安部主計頭信美妻

詮之　右衞門
隱岐守從五位下
今間部主水方元祖

女子
小坂孫九郎雄重妻

詮衡　圖書
中務少輔　伊賀守　淡路守
本間部虎吉詮芳祖

詮言　主馬

某　源太郎
元文元年正月十八日

女子
九鬼式部少輔隆貞室

詮央　多門
主膳正從五位下
寶暦五年十二月廿八日叙任
明和八年五月廿九日卒三十四歳
法名定龍院乘譽政美男玄

詮堅　八次郎

詮茂　八次郎
初詮堅
實詮方三男
下總守從五位下
安永八(元)年十二月十八日叙任
天明二年六月廿二日改若狹守
同六年二月七日改下總守
同年八月七日卒四十八歳
法名栖蓮院廓譽善視凉然

詮熈　內藏　主膳
從五位下主膳正
天明五年十二月十八日叙任
同六年四月廿七日改若狹守

女子
許嫁間部虎吉詮芳

方教　八之助
佐久間宇右衛門信善養子

女子

方元　松之助
間部玄蕃詮裨養子

女子
櫻井三位兼元卿室

方親　友五郎　左織
田中市郎右衛門芳豊養子後歸

女子二人
松平小十郎定時妻
高木一學貞一妻離別
嫁曾我主水助國
石清水八幡宮在務田中權大僧都信清妻

方宜　九十都　釆女
三イ
天明二年八月五日卒

方喬　馬之助
明和七年九月六日卒

女子　松平釆女正忠房室

方孝　清之丞
阿部伊織正恭養子

詮彌　左次馬

詮彈　左門

詮量　乙馬　常次郎

間部

○越前守藤原詮房は西田喜兵衛清定か子也この家參議房前の後北家の支流なり鹽川伯耆守信氏その子三郎兵衛信行はしめて安祥殿につかふ天文四年森山にて御事ありし後尾張のかたき三河國によせ來り井田野といふ所にて御家人にむかひたゝかひしに三郎兵衛信行いた手にあたりてうたれぬその子彌九郎詮光わつかに五歳なりしか母の介抱にて和泉國にのかるこの母は當國の住人眞鍋主馬貞詮か女なれは詮光この家にやしなはれ人となりて眞鍋彌九郎とそ申けるそののち父祖の祿につきて三河國に參り德川殿に仕へ奉り再ひ御家人となりて間鍋刑部と改めたり天正十年德川殿和泉の國におはしませしに織田殿父子上洛ありしかは刑部詮光を御使として京につかはさるこの折しも明智日向守光秀逆心して織田殿うたれたまひ信忠は二條の御所にてたゝかひたまふ詮光かくと聞て見捨かたくやおもひけん御所にはしり入り信忠方にて戰死しけり其の子七郎詮利は流涙して西三河にありし詮利か孫を星野刑部詮清といふ詮清か子久右衛門清定後に西田喜兵衛とあらため甲府殿につかふ子五人あり長子刑部詮茂次男主膳詮貞三男右衛門詮之四男圖書詮衡五男主馬詮言といふ弱冠の頃より文照院殿の御近習にめしつかはれて西田をあらため間部右京と稱し又宮内といふ後には御用人になり寶永元年西城に扈從してやかて從五位下の越前守に任し御書院番頭の座なみに准せられあくる三年の正月御側衆となり采地ましくわへられて千五百石合て三千石三年四月所領あまたそへたまはりて万石となりあまつさへ少老の座なみに准せられたりその冬從下の四位にのほり宿老の座なみに准せられしといふ四年七月また所領くわへられ一萬石六年御代あらたまりてのち所領まし賜り一萬石侍從になさる七年五月二十三日上野國高崎の城をたまはり所領をもまし封せられたり二萬石をくわへ合せて三萬石詮房ことに御旨にかなひしかは常にうちにさふらひて出仕しその座につらなる人もあらす宿老の人々の上請する所もみな詮房につきてそ申けるされは正德三年文照院殿かくれさせ給ひしときも御跡の事ともを詮房に附託せさせ給ひしとそうけたまはる詮房藩邸の御時に夙夜公にのみ侍り私第にかへる事は一とせのうちにもわつかに四五日にはすきさりきされは若かりしよりいとまなくして文なとよみける事なけれときはめて資質のうるはしかりしかは天か下の大小の事とも申せしに大かた世の學ひたりといへるよりすくれたる所ありといふいくほともなく又御代あらたまりけれは享保元年五月十六日詮房職ゆるされて鴈の間の詰衆となりあくる二年二月二十一日に越後村上の城にうつる松平右京大夫輝貞にかはるおなしき五年七月十六日五十四歳にて所領の地にうせぬ子なかりしによりてこれよりさき弟主馬詮言を嗣とす詮言寶永五年五月朔日見へ奉り從五位下下總守に任し兄におくれし年九月十二日家をつくこの時所領うつされて越前國西鯖江の地をたまはりしかこの所狹隘にて便りあしとてあくるとしまた東鯖江の地にうつされたり九年八月三十五歳にて卒す詮言も子なかりしかは兄の主膳詮貞か子多門詮方して家つかすこととし十

二月叙爵して若狭守に任し實暦十一年十二月六日致仕して（後に丹後守にあらたむ）天明五年八月二十日卒す七十七歳嫡子多門詮央實暦五年十二月はしめて見へたてまつり叙爵して主膳正になり父かゆつりをうけて明和八年五月三十四歳にてうせぬ子なかりしかは弟八次郎詮賢（後に詮茂）をよつきとすことし七月家繼安永元（八）年八月朔日はしめて出仕しその冬從五位下總守になり天明六年六月七日四十八歳にて卒長子若狭守詮熙つく（二十一歳）詮熙はこその十二月初て叙爵し主膳正に任し又若狭守になる

加納

藤原久直　九十郎　孫大夫　稱加納
新田大炊介源義重四男藏人義季十二世松平備中守久親後裔改氏藤原

久利　九十郎　平右衛門
元和六年三月廿六日卒
法名覺陽院知春

久政　角兵衛
貞享五年二月廿五日致仕
元祿六年八月十一日卒
法名一如院休元

女子
紀伊家人鈴木五郎右衛門某妻

女子
大岡美濃守忠吉室

女子

某　兵右衛門
紀伊家人

久武　求馬
元文四年四月十二日依病籠居
寶曆元年四月十一日卒四十二歲

女子二人
一人早世
京極甲斐守高品室離別

久通 孫市 角兵衛
實紀伊家人加納大隅守政直二男
近江守從五位下
享保元年七月廿八日敍任
同六年九月廿七日改遠江守
寛延元年八月十九日卒七十六歲
法名教光院江山日久

女子
許嫁稻葉播磨守正武

久敬 英次郎

久保 楊次郎
有馬能登守氏保養子

久敦 鈴木弁五郎

久惠 留彌

久英 一學
享保十七年四月廿六日卒二十五歲

久堅 賴母
實紀伊家人加納大隅守政信五男
大和守從五位下
延享二年十月十八日敍任
寶曆十三年十月廿五日改遠江守
天明六年八月廿四日卒七十六歲
法名報壽院宗詮日成

久致 勇之助
河內守從五位下
明和七年十二月十六日敍任
安永元年八月二日卒十八歲
法名惠光院用定日住

女子 實松平伊豆守信禮女
久周室

久周 久彌
實大岡出雲守忠光二男
備中守從五位下
安永元年十二月十八日敍任

加納

○遠江守藤原久通は角兵衛久政か嗣子なり久政か祖父孫大夫久直はしめて御家人に召し加へられし家の譜によるに奉親君の御子松平備中守久親の子孫代々三河國加茂郡加納村に住す孫大夫久直か時にいたりて徳川殿につかへ奉り本多作左衛門重次か組たりこの時松平を改て加納とは稱すまた故ありて氏をも藤原にあらためたりといふその子平右衛門久利紀伊頼宣卿の家人となりて元和六年三月死すそれか子は角兵衛久政なり久政子なかりしかは久通をやしなひたり久通實は加納大隅守政直か次男にてはしめ孫太夫久直か女佐阿と申せしは傳通院殿につかへ参らせ後には徳川殿の御方にて侍らひける佐阿の姉の子鈴木九十郎をいとけなかりし時より養ひ置たりしか徳川殿召つかはれんとて兄の平左衛門直利か猶子にせよと仰ありけれはすなはち加納九十郎直恒と名のらす是も紀伊殿につけられたりその子大隅守政直なり○案するにこの家なと御支族たれは源姓なるをあらためて藤原と稱せしはいかなるゆへにかあらん又九十郎直恒は鈴木五郎兵衛か子といふいつれの家かはしれかたけれとも鈴木ならは穗積氏なるへきにや初は孫市また角兵衛といふ有徳院殿いまた紀伊殿におはしませし時に昵近し享保元年本城に扈從して五月二十五日御側衆となりその本領千石をたまふ七月叙爵して近江守に任すのちに遠江守にあらたむあくれは二年正月十一日所領くはへらる千石久通と有馬兵庫頭氏倫とはともに紀州よりの御よしみふかゝりしゆへわけて御親しくめし仕はれ君命をいたしいるゝの職御用御取次といふをうけたまはりて匪解の勞すでに十とせに及ひけれはことし享保十一年正月その勞を賞せられて所領の地あまたそへ賜り八千石萬石の列に入ることを得たり延享二年御代あらたまりし時西城に召供せられて大御所の執事となるおなしき四年九月久通齡すでに老て夙夜するにたへさるへし且は年頃の奉公に優せらるゝ所なりとて職事の直月を除かるそのゝちまたいたはる所もありと聞し召され直月を除かれしうへ日ことの出仕をも心にまかせて身をやしなふへしと仰下されたりあくる寛延元年の七月病おもかりけれは職とけん事を乞ひ申けれともゆるされさりしかついにおこたらすして八月十九日にそ身まかりける七十六歳なり嫡子求馬久氏病ありて嗣となしかたく二男一學久英は世を早うしけれは元文四年四月二十一日兄の大隅守政信か五男頼母久賢を子としやしなふその秋はしめて見へたてまつり延享二年十月從五位下大和守に任す久通かうせし年の十月三日家繼て寶曆元年五月七日大番の頭となりおなしき十三年七月朔日御奏者の事をうけたまはりて遠江守にあらため明和四年十月十六日少老にうつり職にある事二十年にして天明六年八月

二十四日卒す七十六歳嫡子河内守久致先たちて卒し外に子なかりしかはこれより先に大岡出雲守藤原忠光か二男久彌久周をやしなひて嗣とす安永元年の冬初見叙爵して備中守に任す廿歳

大岡

藤原某 善吉
左大臣教實公後裔ト云

忠祐 善七郎
享保二年於三河國吉田戰死

忠次 助十郎
永祿三年於尾張國石瀨戰死

忠政 傳藏　忠四郎　忠右衞門
寬永六年二月廿八日卒八十二歲 一作八十
法名順源院專譽淨西

忠勝 助右衞門　忠右衞門
初助勝
元祿三年六月十三日卒八十三歲
法名大綱院窓月淨見
改譜卒スル年月ヲ云ハス某年三河國ニ於テ死ス年七十三　法名淨見

忠俊 孫太郎
慶長五年八月二日於伏見戰死廿八歲

忠行 傳藏　忠四郎
元和元年五月七日於大阪戰死四十歲
今大岡忠四郎忠愼祖

忠世 忠右衛門
寛永十七年十二月廿八日卒六十五歳
法名源忠院德譽法雲

忠一 忠四郎
忠四郎忠行養子

忠貞 忠右衛門
元祿十三年四月十日卒六十四歳
法名眞竟院超譽勇進

女子二人
筒井次左衛門吉豐妻
上田萬五郎左勝妻

忠相（スケ） 求馬 市十郎 忠右衛門
實大岡美濃守忠高三男
能登守從五位下
正德二年三月十五日叙任
享保二年二月三日改越前守
寶曆元年十二月十九日卒七十五歳
法名松雲院興譽崇義

女子
忠相室

忠宣 求次郎 忠右衛門
紀伊守從五位下
享保十九年十二月十八日叙任
後改能登守越前守
明和三年八月廿六日卒五十八歳
法名賴光院觸譽照天

女子
實松平市之丞近苗女
中川喜右衛門祇明妻離別
嫁島津山城守久方

忠豫 大橋 求馬 忠右衛門
大藏 將監
明和二年三月廿五日依病籠居

忠恒 龍助
越前守從五位下
明和三年十二月十九日叙任
天明四年五月廿九日致仕
改美濃守能登守
同六年三月十七日卒三十六歳

女子四人
永野大膳忠體妻
堀田内膳正貫妻
長谷川榮三郎正滿妻
忠恒養女

女子
中山猪右衛門時庸妻

忠興　匡之丞　忠右衛門
實小笠原信濃守長逵四男
從五位下越前守
天明四年十一月十八日叙任

忠移ヨリ　千太郎
實忠恒二男

女子
實忠宣女
忠興室

女子　早世

忠移　千太郎

某　政吉

忠吉　兵藏　美濃守從五位下　寛永十年八月叙任　明暦二年四月十六日卒七十歳
法名窓譽月信

女子三人
水上五兵衛正光妻
中根茂助正次妻
都筑又兵衛正次妻

忠章　兵藏
明曆二年十一月十日卒四十八歲
今大岡龜之丞忠鄉祖

吉明　稱三浦　忠太郎　八郎左衛門
萬治三年八月廿一日卒四十八歲
今大岡主水正忠美祖

忠守　宗イ
承應二年十月十四日卒三十二歲

忠房　七郎兵衛
元祿元年十一月廿六日卒六十八歲
法名德明院當覺滿哲

忠信　惣兵衛
實忠章三男
延寶五年四月十日卒無嗣家絕

忠儀　主膳　善左衛門
元祿十五年十二月十七日卒四十一歲
法名德雄院格心天量

某　一學

重良　兵八郎
天野清左衛門重興養子

忠利　助四郎　助七郎
寬保三年閏四月十七日卒六十一歲
法名眞性院節翁頁忠

某　尉助
松平下總守家人
竹下平學某養子

忠平　只三郎
大岡與右衛門忠豊養子

女子
前田孫四郎定賢妻

忠光　主膳　兵庫
出雲守從五位下
享保十二年十二月十八日叙任
寶曆六年五月十八日從四位下
同十年四月廿六日卒五十二歳
法名得祥院義山天忠

女子三人
土方豐前守長富室
竹本次郎左衛門長宥妻
大岡播磨守忠恒養女

忠主　淡路守
大岡小右衛門忠恕養子

忠喜　兵庫
兵庫頭從五位下
寶曆四年十二月十八日叙任
天明二年三月廿四日致仕

女子
牧野駿河守忠覺室

久周　久彌
加納遠江守久堅養子

至方　內膳正
巨勢伊豆守至忠養子

女子四人
許嫁增山河內守正賢早世
小笠原若狹守信喜養女
許嫁牧野縫殿忠義離別
嫁本多帶刀政房
許嫁本多榮之進正保離別
嫁小笠原主計政明

忠要　式部
式部少輔從五位下
天明元年十二月十六日叙任

女子
水野壹岐守忠韶室離別

忠烈　鶴次郎

女子二人

女子
小笠原若狹守信喜妻

長景 次左衛門
竹本次左衛門長看養子

政斐 佐十郎
石川四郎左門門政邑養子

女子
橫田甚右衛門以松妻

大岡

○越前守藤原忠相は忠右衛門忠勝五世の孫なり家譜に忠勝は洞院の關白教實の苗裔なり故ありて三河國八名郡宇利の邊にくたり子孫なかくこの地に住す又善吉某か世にいたりて忠勝とともに御家人となるといふ忠勝はしめは助勝といふ元文元年安祥殿三河國今橋にて牧野兄弟と合戰ありし時牧野傳次といふものをうちて安祥殿の御感にあつかり下坂の鎗をたまふその孫忠四郎忠行か家に傳へたり贈大納言家の御時御諱の字を賜り忠勝とは名のりけり寛永の諸家譜に牧野傳次をうちしは永祿三年ことし御諱字賜りしを明る六年としるすはあやまりにや永祿六年佐渡の一向專修の門徒等德川殿に背きたてまつりてたゝかひ有し時忠勝福王忠右衛門といへる勇猛のものをうつ年つもりて八十三歳文祿三年にうせぬその子忠政忠右衛門と稱す忠政か子四人あり嫡子孫太郎忠俊は慶長五年の役に伏見の城にて内藤彌次右衛門と共に戰死し二男忠四郎忠行は別につかへしかは三男忠右衛門忠世をして家つかす四男は兵藏忠吉といふこれ出雲守忠光か祖なり忠世左大臣家の御時に大番の組頭となりて寛永十七年に死す長子忠四郎忠一はをちの忠四郎忠行か家繼しにより次男忠貞してつかせたりこれも忠右衛門と稱す忠右衛門子なきによりて一族美濃守忠高か三男求馬忠相をやしなひけり忠相元祿十三年七月家つきておなし十五年御書院番となり寶永元年歩行衆の頭をうけたまはり御使番御目付等を經て正德二年正月十一日に伊勢國山田の奉行となり叙爵して能登守に任し享保元年二月御普請奉行にうつりことし御代あらたまりてあくる二年の二月三日町奉行の職にうつるこのとき越前守にあらためたり忠相公正廉直にしてよく職にかなひしかは公の御覺淺からすおなしき十年には所領の地ましくはへらる二千石かくて職にある事すてに二十年に及ひしかは元文元年その勤勞を賞せられて寺社奉行にうつされ所領をもくはへらる二千石をくはへ合て五千石其餘に五千俵をは當職のうち賜りぬ○忠相か市中をおさめ獄訴をことはりしことの人にすくれたる事はあまねく世の口碑にのこりはしめ山田の奉行たりし時紀伊殿の領地松坂のものと山田のものと爭論せし事あり松坂のもの無下に非義にてありしかとさき／＼の奉行紀伊殿をはゝかりおもひてとかくことわりかれたりしかは數年をふるとも訴ふる事やます忠相爰に趣くに及ひて理非有のまゝにことわり松坂のものまけぬその頃は有德院殿いました紀伊殿におはしませし時なれは忠相か公事のはからひよくしろしめして御代つかせられしはしめに町奉行になされけるにはたして職にかなひて人その能を賞せりとなん忠相か忠直なりしはもとよりなれとかゝる事によりて其人をしらせ給ひける御事まことにありかたき御心にそさふらひける寛延元年閏十月朔日ふたゝひ地くわへられて五千石合せて一萬石御奏者の事をうけたまはり寶暦元年十月病によりて辭職の事申

たりしかは奉行の職はこゝ所に任せられ御奏者をはゆるされす心ゑつかに病やしなふへしと仰下さるされと病やう／＼重りて十二月十九日にうせぬ七十五歳なり嫡子求次郎忠宣これよりさき享保十一年に西城の御小性にめしくはへられ同き十九年従下の五位して紀伊守に任す（後に能登守にあらたむ）父忠相か萬石の家になりし時近侍の奉公ゆりて菊の間に候し寶暦二年二月十二日家繼て越前守になり十月二十八日大番の頭に補せられ明和三年の秋病によりて職を辭し八月二十六日卒す五十八歳嫡子將監忠豫は病ありしかは次男龍藏忠恒をよつきとす忠恒父につき叙爵して越前守に任す天明四年五月致仕して美濃守になり同き六年三月十七日三十六歳にしてうせぬ忠恒年ころ多病なりしかはこれよりさき小笠原信濃守源長達か四男匡之丞忠興を子として家をゆつる忠興家つきし年の十二月十六日從五位下越前守に任す（三十歳）

○出雲守藤原忠光は忠四郎忠吉か五世の孫にして助十郎忠利か子なり初は主膳又兵庫といふ享保九年八月二十六日西城の御小性にゑらまれておなしき十二年の冬叙爵して出雲守に任す忠光性質聰慧にして御旨にかなひけれは元文四年五月かりに中次の事（御用御取次見習といふなり）をうけたまはり延享二年御代あらたまりし時西城にゑたかひ奉りて御小性組の番頭に准せられ同き三年十月二十五日中次の衆になされ所領の地ましくはへられこれよりのちふたゝひ地加はりて寶暦元年の十二月に萬石の家となりおなしき四年三月朔日少老の職に補せられ所領の地くはへられたり奥に候する事もとのことし同き六年五月二十一日御側の御用人にすゝみ從四位下に叙し地をくわへられて一萬石 武藏國岩槻の城に封せらる（忠光ある時家人にむかひてわか家いまはなにほとの家にかなそらふへきといひしかは家人は領したまふ所の邑のかきりある事にさふらへともかく顯要におはしませはおよそ十萬石家にはをとり給はしと答ふ忠光つら／＼と聞てわれ渥恩を恭くして重職をうけたまはり公の政事あつかりぬれともわつかに十萬石の奉養ならんには天下の事もその心にてはからひ申へし口惜しき事ならすやといひけり世の大官重權になるものやゝもすれはおのれか家法をもつて公の事を治するにくらふれは忠光かこときは見る所なしとはいふへからす）同き十年夏病してうせぬ五十二歳なり嫡子兵庫忠喜寶暦三年三月十九日はしめて見へたてまつり明る年叙爵して兵庫頭になる家繼て後御奏者の事をうけたまはる事安永元年にいたれり天明二年正月四十五歳にして嫡子式部少輔忠要に家をゆつり忠要これよりさき初めて見えたてまつり叙爵しておなしき五年十二月御奏者となる（時に廿歳）

田沼

藤原重綱

田沼九郎　山城守　壹岐守　從五位下　藤原秀郷七世足利次郎大夫成行五世佐野庄司成俊六世孫文永二年十一月九日卒法名玄松院風山元了

重村

九郎　左衞門尉

伊賀守從五位下
文永四年五月叙任
文保元年二月十一日卒
法名道春

重行

九郎

丹後守
建武二年七月於越前國中津野戰死
法名弦德院智前勇山

重信

新五郎　後稱千本

伊賀守
應永二年二月五日卒
法名松嶽了幹

重隆

千本　兵助

右京亮　右京大夫
從五位下
寶德九年六月九日卒
法名玄松院一行道保

光房

九郎　初稱千本

田沼伊賀守
永正三年五月三日卒
法名長山道雲

重綱

喜右衞門

山城守
實新田一族高賴山城守忠重次男
永正十七年五月廿一日卒
法名東光院道夏

源忠高

刑部少輔
永祿十一年六月二日卒
法名梅應院日山道仙

重高

山城守
永祿八年八月八日於丸墓山戰死
法名東光院義重全高

重次

小次郎

主膳正
文祿二年八月十八日卒
法名楓山高林

忠吉 専左衛門 甚右衛門
寛永元年卒
法名乘文院大宅道鑑

吉次
寛文十二年正月十九日卒
法名普照院自徹道齊

吉重 次右衛門
延寳八年七月廿一日卒
法名龍澤院雲峯了興

義房 次右衛門
享保十五年六月十八日卒　法名廣德院一峯玄杖

意行 重之助　専左衛門　主殿頭從五位下　享保九年十二月十八日叙任
同十九年十二月十八日卒四十八歳　法名永隆院宗山良祐

某
紀伊國田邊郡寶滿寺

某 作之丞　早世

女子
長谷川相右衛門某妻

意次　龍助
主殿頭従五位下
元文二年十二月十六日叙任
明和四年七月朔日従四位下
同六年八月十八日侍従

意誠　専助　主水　市左衛門
能登守従五位下
寶暦元年十一月七日叙任
安永二年十二月十九日卒
今田沼能登守意致祖

意満　文助
延享四年九月廿六日卒

女子
新見讃岐守正則妻

意知　龍助
大和守従五位下
明和四年二月十六日叙任
天明元年閏五月十五日改播磨守
同二年十一月十五日改山城守
同四年三月廿四日爲佐野善左衛門所傷
四月二日卒三十六歳

女子　早世

某　勇次郎　早世

女子二人
一人早世
西尾隠岐守忠移室

某　勝助　早世

女子二人
井伊兵部少輔直明室
一人早世

意明　龍助

女子二人　共早世

某　萬之助
田代萬吉

某　田代幸吉　早世

女子
實田沼能登守意致女

意信　鎌之助

意正　中務少輔從五位下　水野出羽守忠友養子　天明六年九月五日歸稱田代支藩

女子　早世

某　松三郎　早世

雄貞　直吉　土方近江守雄年養子

隆祺　鐵吉　九鬼式部少輔隆貞養子

女子　實新見讃岐守正則女　土方近江守雄年室

田沼

○主殿頭源意次は故主殿頭意行か嫡子也藤原秀郷か後田沼壹岐守重綱下野國安蘇郡田沼といふ所に住して稱號とすそれも數代の裔に永正の頃伊賀守光房といひしあり新田の支族高瀬山城守源忠重か二男喜右衛門重綱をやしなひてよつきとし後に山城守と稱すその子刑部少輔忠高父か本姓にかへりて源姓となりたり意行初は専左衛門といふ紀伊國和歌山に生長し有德院殿の主税頭殿と申まいらせし時より召つかはれ本城に扈從して御小性となり享保九年の冬叙爵して主殿頭に任しおなしき十九年十二月うせぬ意次いまた龍助といひし時西城の御小性になされて廩米三百俵を賜ふ時に十五歳ことし父におくれてあくる二十年遺領を賜ひ六百石元文二年叙爵して延享七年惇信院殿御代つかせ給ひしかは意次もこれより本城に候す御覺ことにして次第に登庸せられたりおなしき四年九月十九日御小性組の番頭に准られ申次の事をうけたまはる寛延元年閏十月朔日番頭をかね寶暦元年七月十八日御側衆にうつりしきりに所領の地くはゝりておなしき八年九月はしめて萬石の家となる遠江の國榛原部相良の地にて充行れたり明和四年七月朔日御側の御用人になり從四位下にのほり城もちの列にいりて其領地相良に城壘かまふへきよし仰かうむれりおなしき六年八月十八日宿老に准せられし時侍從にすゝみ安永元年正月十五日連署の衆となれり又所領の地もいくたびといふ事なくましくはへられて後には五万七千石迄になりたりかく世にあひたる身なれは親戚うちひろこりてその子とも皆さるへき家々に養はれたり四男中務少輔忠繼は水野出羽守忠友か子となり三男丹後守雄貞土方近江守雄年か家を繼き七男大隅守隆祺は九鬼式部少輔勝貞にやしなはる嫡子山城守意知はこれよりさきに叙爵して鴈の間の詰衆たりしか天明元年十二月御奏者の衆にくはゝり中一とせをへたてゝおなしき三年十一月朔日少老の職となされ俸米五千俵をたまふそのかみ常憲院殿の御時にこそ宿老の子として少老にも補せられ新恩の地なと賜りけれ近き世にはさらにつたへぬほとの事なれは世の人驚きおもふもことわりなり意知これより築地の別邸にうつりぬ明る四年の春居邸新に造りかへて近きほとに職賜はりしよろこひの饗宴あるへしなと聞えし彌生の二十四日といふに不慮の事こそいてきたれたとへは意知例の樣に御所にまいりて同列の人々と共にまかりいつるとて新番のともから守りてありしあたりを過し時番衆の佐野善左衛門つとはしりかゝり意知かう

しろより刀をぬきてきりつけたり其座に候せし人々たれかかゝる事あるへしとおもひよるへきことならねはたゝたちにたちてわれも人もたかひにあはてまとふをりしも松平對馬守善左衞門をはいたきとめたれとも意知ははやあまた所に手おひたれは肩輿にて父の意次か邸まていてたりしかその疵重りて四月二日につひに卒しくなりぬ（この時のありさまのあたり見聞たる人もなをあるへきにや老たるも若きも多かりし中に七十にあまりたる對馬守忠次か手にあひたるこそ不思議なれ其座にありたる人のかひ／＼しき御振廻といひしかは對馬守聲うちふるひてかゝる年よりたる身のおもはさる事にあひて侍りけるかなしたまへたりしはほこり顔なるよりもなをゆゝしかりけり又善左衞門は其座よりすくに獄屋になをくりし子細をとはれしに君の御爲を存してこそかくははからひ候へなとゝあらぬ事申せしなりこれしかしなから狂氣のいたす所なりとて腹きらせたれは事はてぬ）そも／＼如何なる宿報のいたす所にかあらん天道の盈るをにくみて俄かに禍すとそ申すめる意次わつかなる家におひたちて天下の事をとりはからふ職にさへいたりしかともなをたる事を知るこゝろ無かりしかはその子まつ横殺にかゝりぬまたよの中を政こつ事は德信のあらはるゝと知からさるとにかゝれり意次當職數年の間なにの善政行ひもあらすかつて人のうらみおもふ事のみ多けれはこれよりのちもいかゝあるへきなと世の人申たりしかいくほとなくしてつゐに職とゝめられ罪かうむりけるこそうたてけれ

藩翰譜續編卷之十二附錄

加々爪　土佐守直清

桑山　美作守一尹

那須　遠江守資祇

佐久間　大膳亮勝元

喜多見　若狹守重政

坂本　內記重治

西鄉　若狹守延員

水谷　左京亮勝宗

本多　飛驒守重益

伊丹　大隅守勝政

屋代　越中守忠至

植村　土佐守忠朝

金森　出雲守賴時

加々爪

藤原直澄

直輔 隼人
信濃守從五位下
一作五月廿五日
萬治三年十月廿四日卒廿二歳

女子二人
一人早世
實某女
近藤登助李用妻

直清 圖書
實石川播磨守總長二男
土佐守從五位下
寛文二年十二月廿七日叙任
天和元年二月十八日配流伊勢國神戸
貞享二年十月四日死四十三歳
法名靈源院獨峯玄輝

加々爪

○土佐守藤原直清は甲斐守直澄か子實は石川播磨守總長か二男なり寛文二年の冬叙爵し延寶七年六月父か致仕の日家をつく遠江武藏相模國のうち一萬三千石然るに直清か遠江の領地の百姓に成瀨吉右衛門某か采地の百姓と境を論する事やまさりしか終に上裁をあふくにいたりて其事を糺問せられしに始直澄加恩の地賜はりし時いかなる所存ありけんその境をも糺し極めてありしかは直清か申所前後相違してさたかならす成瀨か申狀そのことはりありけれは直澄さきに奉行の職にありて公の制度を辨へなからかゝる麁略のしかたあるましき事なれはその罪のかれかたしとて天和元年二月九日松平土佐守にあつけられ直清もこの事により て所帶收公せらるされと素よりその始末をしらさる事なれは宥免ありて石川若狹守かもとにかへし預られぬ

桑山

藤原一貞

一尹 三之助
美作守從五位下
延寶五年閏十二月廿六日叙任
天和二年五月廿六日所領沒收
同三年五月十一日死
法名一政院峯月日捬

一慶 有助 幾之助 三郎右衛門
甲斐守從五位下
寶永五年四月廿八日叙任
享保十五年八月四日卒六十八歳
今桑山三郎左衛門公穀祖

一英 岩松 左内
元祿六年十一月廿二日卒廿五歳
今桑山左内一新祖

一規 源次郎
一英養子

亮忠　幼名　經丸
貞空院大僧正
寶永三年八月十六日寂

亮觀
寶巖院僧正
元文五年五月十八日寂

女子三人
河野源右衛門通矩妻
岡部内膳正行隆養女
設樂善左衛門貞高女

桑山

○美作守藤原一尹は修理亮一玄（初一貞○前編一元につくる）か嫡男なりいまた三之助といひし時明曆二年十二月二十一日初めて見えたてまつり延寶五年八月二十二日父かゆつりをうけて家をつき（大和國の内一萬千石餘）弟等に所領をわかつ（二男幾之助千三百石三男岩松千石○前編には三郎左衛門源七と記す後改めしにや）ことし閏十二月叙爵す天和二年の夏嚴有院殿三田のみほうゑありしにより勅使以下の人々京より下向ありしかは一尹新院使饗應の事をうけたまはりしに勅使東叡山に參詣の日無禮の事ありしにより五月二十六日所領沒收せられ二人の弟にめしあつけられ扶助の料稟米三百俵をたまふまた一尹か別邸を二人の弟に賜りしかはそこにひそみ居て天和三年身まかりぬ（五月十一日）

那須

藤原資景

資重　與一
美濃守從五位下
寛永元年正月叙任
同十九年七月廿五日卒廿四歳
法名自境院天心玄性

女子
喜連川右兵衛督尊信妻

資彌　初稱增山　千福　友之助
初高春　資祇
實青木三太郎利長二男
(一作佐)
右衛門尉從五位下
慶安四年八月十六日叙任
承應元年二月十八日改遠江守
貞享四年六月廿五日卒六十歳
法名蓮臺院光國清心

正彌　仙福
增山彈正少弼正利養子

資寛　(資豐)福原圖書
貞享四年(天和三年)十月十四日有罪被預
平野丹波守長政

資德　主殿　與市
實津輕越中守信政二男
貞享四年十月十四日所領沒收
元祿十四年十二月廿五日賜采地
寶永五年六月廿五日卒廿七歳
法名清光院月峯常心

資隣　豐丸　與一

資虎　豐太郎　與一

資明　與一

那須

○遠江守藤原資彌は（初高春 資祇）左京大夫資景か子實は青木三太郎丹治利長か二男增山彈正少弼正利の弟也資彌いまた增山友之助といひし時正保四年十二月五日御所に召され廩米を賜ふ（二千俵○此時昵近の衆になさると云）慶安四年の秋敍爵して右衞門佐に任すはしめ寬永十九年美作守資重卒して子なかりけれは那須の家すてにたえむとしけれは資重か父の資景なけき申むねやありけん承應元年二月十八日資彌を養ひて資景か家つかすへきよし仰下されしかは資彌此家のよつきとはなりけり（これよりさき資重卒するの時所領一萬三千石は公にめしおさめられ資景に五千石賜ひけれは此時資彌をのか二千俵を合て七千石を領す）おなしき二十五日見參して家つきし事を謝し奉り寬文四年十二月八日地ましくはへられ（五千石をくわへられ一萬三千石この時廩米二千俵をも地に加へてたまふ）天和元年十二月二十五日又地くはへられて下野國烏山の城を賜ふ（八千石合せて二萬石）貞享四年六月卒す（六十歲とも六十二歲ともいふ）資彌はしめ嫡子仙福正彌といひしをは兄の正利かよつきとす所領烏山に庶子一人あり福原圖書といふしかるにいかゝおもひしにや公にも申さすして過ぬかくて天和三年閏五月二日外樣なりし津輕越中守信政か二男主殿をやしなひてよつきとし與市資德とあらため資彌か卒て後家をつく圖書資豐（資寬）是を聞てほいなき事におもひ烏山を出てこゝに來り愁訴に及ひしかは資彌をのか子ある事を申さすして外樣をやしなひし事筋違へりとて（貞享四年）十月十四日所領烏山の地を奪れたり資德は罪せらるへかりしかいまたいとけなくして事の子細をしらさりしかは父の信政かもとにわたされて家絕たり資豐はその母とともに平野丹波守にわたされぬこの事によりて信政もかうしおひたり其傳をあはせ見るへし

元祿十三年五月大赦行はれしとき與市資德はふたゝひ御家人にめしくわへられ明る十四年采地千石をたまふ

佐久間

平盛次

盛政 理助　玄蕃允
天正十一年九月十一日爲豐臣太閤所殺

安政 初稱保田久六　久六郎　久右衛門
備前守從五位下
寛永四年四月廿五日卒七十三歳
孫三五郎安次早世家絶

勝政 三左衛門
柴田勝家爲養子
於近江國志津嶽戰死二十七歳

勝之 初稱佐々源六　源六郎
大膳亮從五位下
慶長十五年叙任
寛永十一年十二月十二日卒六十七歳
（一作玉安）
法名玉鳳泰山

勝年 左兵衛
信濃守從五位下
元和五年叙任後改因幡守
寛永七年九月廿八日卒四十一歳
法名玄鎮（鐵ィ）闕叟

勝友 藏人
寛永十九年七月朔日卒廿（三十）七歳
法名正覺性大

勝種 源四郎
天和二年八月廿二日配流伊豆大島

勝盛 源六郎
正保三年九月廿九日卒二十二歳
無嗣家絶

勝豐 權之助
備中守從五位下
寛文元年十二月廿八日叙任
同十年二月改安房守
貞享二年八月廿八日卒五十一歳
法名佛性院德岸淨乾

女子九人
秋月長門守種春室
立花主膳正種次室
山口備前守重雅妻
岡田豐前守善政妻
柴田三左衞門勝重妻
大島左大夫光盛妻
能勢次左衞門賴重妻
渡邊九郎兵衞某妻
中川隼人某妻

勝興 長助
寬文四年五月十五日卒廿九歲
今佐久間千太郎勝利祖

勝茲 一作親 萬作 織部
實秋月佐渡守種信五男
元祿元年五月十八日配流陸奧國二本松
同四年正月元月卒二十三歲

女子
勝茲室

佐久間

○大膳亮平勝之は久右衛門盛次か四男にて兄備前守安政(前編安次につくる)と共に徳川殿につかへ奉り軍功をあらはしけれは別に所領賜はりぬ(事は前編安政か傳に見へたり勝之はしめ佐々内藏介成政にやしなはれその女にそひて佐々源六郎と名のるそののち北條にしたかひ豐臣家につかへ本姓にかへりて佐久間と稱す慶長五年の秋東西に軍起りし時關東の御方に參りて御家人となされ御相伴衆にくはへられ叙爵して大膳亮に任し信濃近江常陸等の國にて一萬八千石を領すといふ)勝之寛永十一年十二月十二日卒六十七歳嫡男因幡守勝年は父に先たちて卒しけれは次男藏人勝友家をつき(一萬三千石)兄勝年か子源六郎勝盛に采地をわかちあたふ(五千石)おなしき十九年卒(四月朔日三十(廿)七歳)其子權之助勝豐に遺領をたまふ(一萬石)この時弟長助に所領わかつ(三千石)勝豐寛永元年十二月從五位下して備中守に任し(後安房守にあらたむ)貞享二年卒す(八月廿八日とし五十一)子なかりしかは秋月佐渡守大藏種信か五男織部勝親にをのか女をあはせて嗣とし天和二年十一月十六日はしめて見へたてまつり貞享十二年十月二十二日家をつく元祿元年五月十四日御小性にめしくはへられしにやまひありて昵近の奉公かなひかたしとて辭し申けれはたちまちにみけしきにたかひておなしき十八日に所領をめしはなたれ奥の二本松になかされて丹羽若狹守長次にあつけらる(おなしき四年の正月配所にてうせぬ廿三歳なり○此家の事は前編にもしるす)

喜多見 初木田見 又北見

平重長 畠山三郎 江戸太郎

重盛 江戸太郎 — 重方 江戸四郎次郎 — 重持 新太郎

武重 木田見小次郎

泰里 藤太郎 — 長門 遠江守 — 高重 藤太郎

康重 三郎 右京亮駿河守 — 重廉 三郎 — 重廣 右京亮 駿河守

某 又イ久六郎 立川合戰に死 — 定重 孫六 右京亮 — 信重 又五郎

廣重 小三郎 駿河守 — 門重 孫八郎 右京大屬 — 常先 稱江戸

某　彥太郎
於河越戰死二十六歲

賴忠　刑部　元和五年八月卒九十餘歲
法名興樂

朝忠　攝津守　一作駿河守　慶長七年八月卒五十一歲
法名法心

正忠　主水正從五位下
元和六年七月八日卒三十一歲

勝忠　五郎左衞門尉
若狹守從五位下
寬永三年八月十九日敍任
同四年十二月廿六日卒六十歲
法名宗珍

重恒　半三郎　五郎左衞門
寬文十一年五月十四日致仕
號宗幽
延寶七年六月廿一日卒

重政　彥五郎　五郎左衞門
實石谷長門守武清二男
若狹守從五位下
天和元年四月十九日敍任
元祿二年二月二日配流伊勢國
同六年七月廿八日死

重勝　久大夫

重長 隼人

女子
伊丹大隅守勝政妻

重治 茂兵衛

女子二人
石谷長門守武清妻
淺岡伊豫守直國妻

喜多見

○若狹守平重政は五郎左衛門重恒か子なりその先祖江戸太郎重長賴朝卿に仕へて軍功あり重長か六代の孫遠江守長門は足利家につかへ又鎌倉の基氏につかふそのゝち子孫北條家の家人となる北條ほろひ德川殿關東にうつらせたまひしとき五郎左衛門尉勝忠はしめて御家人となりたり 江戸を御座所になされしかは江戸といふをはゝかりて喜多見とあらため名のりしなり此時武藏多磨の郡喜多見村にして五百石をたまひしとそ 關ヶ原大坂等の軍にしたかひ奉り其のち遠江國の郡代になされて采地をくわへらる 五百石○元和三年正月十一日堺の津の政所の職に補せられあくる四年攝河泉三州の奉行をかれ同しき七年職内にある代官のものともが奉公のよしあしをたつれとはれしに勝忠かつとめよかりしかは又采地をくわへられ千石あくる九年御所都にのほらせたまひしつゐて堺の津に立よらせたまひ勝忠か邸にのそませ給ふまた寛永三年の御上洛には勝忠堺より參り謁しけれは從五位下の若狹守に任せらる 寛永四年十一月廿六日堺の津にて終る六十歲長子主水正正忠先たちてうせけれは二男重恒嗣子となる重恒はしめ慶長十三年拜謁し大坂の軍にしたかひ奉り父卒せし年遺領をたまひ 千三百石といふ後重政か家繼し時の記に千廿石と見へたり○舍弟久大夫重勝に遺領をわかつといふ 萬治二年七月二十五日御普請の奉行となる これよりさきに御書院の番衆たり 寛文十年四月二十一日病によりて職ゆるされおなしき十一年五月十四日致仕して子彥五郎重政に家をゆつる重政實は石谷長門守藤原武清か二男にて重恒か弟久太夫重勝か外孫なり家つきてより御書院中奥等の番頭を經て延寶八年九月十六日御扈從となり天和元年叙爵し若狹守に任しことし十二月二十七日采地くわへられ 二千石 三年正月十一日ふたゝひ地くわへたまはりて大名となり 六千八百石餘くわへられて一萬石 貞享三年正月十一日又所領くわへられ 一萬石合せて二萬石 重政天和のはしめよりしきりに登庸せられて俄に家を起しけるか奉公に心をいれすして御氣しきにたかふ事おほかりしかは元祿二年二月二日所領沒收せられ伊勢國になかされて松平越中守定重にめしあつけられおなしき六年七月二十八日配所にてむなしくなりぬ

坂本

源貞重　宮內少輔　一無少輔二字

　貞吉　宮內　慶長十一年正月朔日卒五十一歲　法名道春（一作順）

　　重安　久五郎　小左衛門　正保六年十二月七日卒五十七歲　法名日住

　　貞俊　權十郎　承應二年十一月五日卒　無嗣家絕

　　重治　久五郎　小左衛門　初重秀　實小林文右衛門正親二男　右衛門佐從五位下　天和元年四月十六日叙任後改內記　貞享四年五月十四日有罪籠居　元祿六年七月廿七日死六十四歲　法名日意

　　　成方　久五郎　小左衛門

　　　治之　久之丞

　　　直規　文大夫　齊宮

　　貞政　今坂本友三郎貞時祖

　貞次　兵部丞　豐前守　一無守字　文祿九年十月十八日卒七十六歲　法名順能

坂本

○内記源重治は小左衛門重安か嗣子實は小林文右衛門藤原正親か子也此家の譜を按するに新羅三郎義光より出て刑部太郎義業の男佐竹冠者昌義の後胤小瀬三郎義節（實イ）か孫甲斐國の住人坂本宮内貞重といふこれ重治か高祖父なり貞重か子を豊前貞次といふ父子相つきて武虎および信玄勝頼につかへ貞次は足軽二十人をつけられて駿河田中の城を守る天正十年徳川殿に召しつかはれなを田中の城にありて山西中の代官たり關原に移らせたまひて相模國深見郷のうちにて采地を賜ひ同國波多野二十四ヶ村の代官をうけたまはり貞次か子宮内貞吉その子重安なり重治正保三年二月二十八日重安か遺跡をたまはり（ことし十二月廿六日大番の番衆となる）寛文元年十二月二十六日新番になり二年三月十一日御小納戸にうつり巖有院殿かくれさせたまひ御代あらたまりし時七月二十九日采地くわへらるこれは先の御代に奉公の勞ありことに御いたはりの間よるひるとなくこゝろをつくしつかへ奉りしを賞せられし所なり此度の御所御造營ありしにも重治その奉行たりしなり天和元年四月十六日従五位下右衛門佐に叙任し（後内記とあらたむ）おなしき五月十二日大目付に推せられ明る年四月十一日職俸を采地にあらためて原秩にあはせたまふことし十月十六日寺社の奉行となり地くはへられて大名の列にいる（重治か祖貞次天正十八年はしめて三百七十石を賜り父重定か時二百石くわゝりて五百七十石になり重治か家繼し時二百七十石を弟にわかちてをのれ三百石を領すこれより次第にましくわゝりて二千五百石となりこゝにいたり多くの地そひて一萬石となりしなり）かく小身よりなり出て奉行をさへうけたまはりし身のいかなる子細にや職にかなはすして貞享四年の五月十四月に遂に職俸をはなたれてめしこめらるゝ事三年あまりにして（逼塞といふ）元祿二年六月四日事ゆりけれと最初にくわへたまはりし領地を（七千八百石）めしかへされてけり

西鄉

源正員

重員 主殿
延寶六年七月廿四日卒

女子二人
北條安房守氏平妻離別
嫁井上交泰院某離別 春イ
高力刑部通長妻

行員 釆女
寛文元年六月廿日卒

女子
土岐伊豫守賴殷室

氏員 熊之助 彈正
天和元年四月二日卒

茂員 萬吉 數馬
實八郎左衞門用員二男後歸

延員　孫六郎

若狹守従五位下
萬治三年十二月廿八日叙任
元祿三年十二月廿五日致仕
同五年十月廿九日蟄居下野國上田
號退休
同十四年四月廿五日卒八十四歳
法名通明院日實退休

壽員　萬之丞　靭負　初重員　治員

實大村因幡守純長五男
越中守従五位下
元祿二年十二月七日叙任
同六年改東市正
元文三年五月三日致仕別髮號同夢
寛保元年十月十九日卒六十九歳
法名緣生院同夢日諦

女子　壽員妻

末員　主膳

寛永十七年七月十日卒

用員　主馬助　八郎左衛門

今西鄉市左衛門貞壽祖

女子二人　共早世

西鄕

○若狹守源延員は故の若狹守正員か長子なりはしめ孫六郎といふ寛永十五年十二月朔日初てまみへたてまつる此月父正員身をはりけれは十二月の二十二日遺領を賜はりて家を繼 安房國朝夷長狹二郡の内一萬石 萬治三年十二月二十八日叙爵し元祿三年十二月二十五日致仕す子なかりしかは大村因幡守藤原純長か五男万之丞壽員をやしなひて家をゆつる壽員これよりさきに御小性にめしくはへられ叙爵して越中守といふおなしき五年延員致仕の身としてこゝろのまゝのふるまひあり緩怠のいたりなりとて御切勘をくはへらるへけれと壽員か近くつかへまいらせるに免せらるゝよしにていそき所領の地におもむきてよろつ穩便になすへしと仰下されしかはやかて下野國上田 ことし三月安房國の領地を下野國及ひ常陸河内等の内にうつされしなり に行て籠居す 元祿十四年四月廿五日八十四歳にて卒す 明る六年十一月壽員か昵近のつとめをゆるされて中奥の衆となさるこれ奉公のあしきによる處なりしになをあらたむる心もなかりしかは十二月になりてついに所領の地を削られ寄合衆となる此後もよからぬふるまひありしにやおなしき八年又みけしきにたかひて出仕をとゝめられ 逼塞といふあくる九年五月十四日みゆるしかうむり寛保元年まてなからへたり十月十九日六十九歳にて身をはる

水谷

藤原勝隆

勝宗　彌太郎
左京亮從五位下
寬永十八年十二月晦日叙任
元祿二年閏正月十四日致仕
同年二月十九日卒六十七歲
法名榮興院健峯全勇

女子
仙石越前守政俊室

勝美　犬千代　初勝明　勝賢
出羽守從五位下
延寶四年十二月廿六日叙任
元祿六年十月請以一族彌七郎勝晴爲嗣
六日卒三十一歲十一月廿七日勝晴亦卒
除失籍使弟勝時奉祀
法名隆昌寺天山全長

勝晴　彌七郎
元祿六年十一月廿七日卒三歲
法名見德院朝峯日理

女子
永井監物白弘妻

女子
諏訪織部賴安妻

勝時　虎之助　主水
初家人三上外記某所養
元祿六年十二月廿一日爲勝美之後
正德三年四月廿三日致仕
同四年八月十日卒四十九歲
法名大道院無萬全關
今水谷左京亮勝久家

女子
勝宗家人平山傳兵衛常時妻

勝能　彌四郎　新右衛門
延寶八年八月五日卒五十五歲
今水谷信濃守勝富祖

女子
一柳半彌直照妻
水野越中守忠久室

勝阜　彌之助
信濃守從五位下
元祿十二年十一月朔日叙任
享保五年十二月七日致仕
號玉齋
同十八年十一月廿日卒七十四歲

勝中　半藏
水谷小左衛門勝睦養子

女子　早世

某　菊之丞　早世

女子四人
妻木彦右衛門頼直妻
頼直後妻
二人早世

勝比　頼母　彌之助
信濃守從五位下

女子
宮原刑部大輔氏義妻

勝英　半助　半左衛門　左門
主水勝時養子

正庸　近江守
本多外記正芳養子

頼勝　伊左衛門
妻木伊左衛門頼帶養子

水谷

○左京亮藤原勝宗は伊勢守勝隆か嫡男なり寛永十八年の十二月叙爵し寛文四年七月十八日父か遺領をたまはり（備中國松山の城四萬八千石）所領のうち舍弟新右衞門勝能にあたふ（二千石）延寶五年閏十二月二十七日私墾田を併せ領す（私墾田二千石合て五萬石となる）元祿二年閏正月十四日致仕して家を嫡子出羽守勝美（初は勝明勝賢）にゆつり二月十九日身まかりぬ（六十七歲）勝美いまた犬千代といひし時寛文十二年二月八日初見の禮をはり延寶四年二月從下の五位に叙し父か致仕の日家をつき元祿六年の冬病にふしておもりけれは支族信濃守勝阜（新右衞門勝能嫡子）か長子彌七郎勝晴を養ひて家つかせん事をこひをきて十月六日三十一歲にしてむなしくなりぬしかるに勝晴も病にそみて十一月二十七日世をはやうせしかは領地収公せらるされとも祖先の勳勞によりて勝美か舍弟主水勝時（左京亮勝宗か庶子はしめ三上外記に養はれしほとは三上主水といひしなり）わつか地をたひて（二千石）その家をつかせらる

本多

藤原重昭

重益 初作成宗 成邦 成仲 成泰

飛驒守從五位下
延寶五年閏十二月廿六日叙任
元祿八年三月廿二日配流伊豫國今治
寶永六年八月廿日赦
享保十三年十月九日致仕號宜休
同十八年二月廿五日卒七十一歲
法名見譽寂照
今作左衛門成邑家

女子

五島佐渡守成暢室

重信 外記

重益養子

女子

許嫁甘露寺安丸離別
嫁難波三位宗尙卿

本多

○飛驒守藤原重益は故の飛驒守重昭の嫡男なり初は作左衛門といふ寛文十一年十二月五日はしめて見え奉り延寶四年二月十九日父の遺領を賜ふ（越前國丸岡の城四萬三千石餘）あくる五年の閏十二月叙爵す元祿八年三月廿二日家人等爭論の事ありしに重益かはからひよからすことに非道のふるまひ有しかは所領の地沒收せられ松平壹岐守仲澄にあつけられその子主計重條も京極喜内高昌にあつけられて家たへたり（寶永六年八月父子ともに罪ゆるされおなしき七年九月十六日重益に采地二千石を賜り寄合衆になる享保十三年十月九日致仕して十八年の二月廿五日七十一歳にして身まかりぬ）

伊丹

源勝長

勝久　大藏
實播磨守勝長五男
延寳四年十一月廿四日卒

勝守　竹之助　左京
元祿十一年九月十五日自殺二十六歳家絶
法名覺雲院本譽一泡月潤

女子
藤掛信濃守永次妻

勝政　五左衛門
大隅守從五位下
寛文二年十二月廿七日敍任
元祿四年七月十五日卒六十七歳
法名凉安院圓譽忠月覺仙

利忠　兵左衛門
丸毛兵左衛門利政養子

勝元　理左衛門　圖書
初勝重
今伊丹喜八郎勝道祖

純長　權吉
大村丹後守純信養子

女子二人
皆川又七郎秀隆妻離別
嫁川口茂右衞門宗憲
柴田和泉守康則妻

勝久　大藏

女子
大村丹後守純信室

伊丹

○大隅守源勝政は播磨守勝長か嫡子なり寛永十一年の十二月はしめて拜謁し寛文二年二月二十一日父か遺領を賜り甲斐武藏上總等の地にて一萬石十二月二十七日叙爵し元祿四年七月十五日六十七歳にして卒その子左兵衞勝守これよりさき天和元年五月初て見參し父かうせし年の九月十四日家つきしか元祿十一年九月十五日狂氣のいたすところにや自殺してうせけれは所領のそかれて家たへたり廿六歳といふ

屋代

源正興

忠位　五郎左衛門　甚三郎　初忠至　實朝倉平七郎一至二男　越中守從五位下　寛文三年十二月廿八日叙任　正德二年七月廿一日除族藉　同三年十一月廿九日致仕　同四年二月廿日卒六十八歲　法名瑞光院明曉一圓

女子　實越中守忠正女　忠位室

女子　朝倉孫左衛門某妻離別

某　甚三郎

女子　內藤式部少輔正友室

忠知　牛助　左衛門　正德二年二月十四日卒

女子　柴田七九郎康定妻

某　室賀半次郎　早世

邦守　室賀三五郎
多賀又四郎某養子後歸

某　室賀兵助

女子二人
山名因幡守豊就妻
秋山十右衛門正德妻
許嫁藤枝帶刀某卒

正勝　室賀音之助
主計

屋代

○越中守忠位(初は忠重)は甚三郎忠興か嗣子實は朝倉平七郎日下部一至か子なり寛文三年三月二十五日父か遺領を賜はり(安房國北條一萬石)十二月二十八日叙爵し元祿五年二月二十三日百人組の頭になり六年八月十一日大番の頭にうつり正德元年四月病によりて職をゆり同き二年七月二十一日罪かうふりて所領收公せらるこれは所領の士民とも訴へしによれり六年の秋忠位か家人に川井といふもの所領をうちめくり年貢を過分とりたりけれは領民うけかはすして忠位に訴ふ忠位また川井をしてはからせけれはすこしはゆるくしけれとも猶また訴ふる事やますこゝにおいて川井かはからひとして村の長三人を死刑にをこなふにより領民等いよ〳〵いきとほりて公にうたへたりしに尋問せられしに川井か非法たる事はいふに及はす忠位たとひはしめはその事を詳に知らすとも領民等か訴ふるにおよひて租税をゆるすうへは川井か不法のはからひとはなと玄らさらむさらは他のものをして沙汰すへき事なるになほも僻事せしものにまかせおきことに家の老とも丶一言の異見をたにいひかたきやうになせし事かれといひこれといひ忠位か罪重疊せりとてつゐに所領の地をめしはなち出仕をとゝめられあらたに廩米三千俵をたふ(ことし十月逼塞をゆるさる正德三年の冬致仕し同しき四年三月六十八歳にして卒せしなり)

植村

源泰朝

泰治 左京
依病籠居
延寶五年正月廿六日卒四十八歳

忠朝 帶刀
土佐守從五位下
萬治元年閏十二月廿七日叙任
元祿九年十一月十六日卒六十七歳
法名眞覺院淸岸源澄

某 左兵衛
依病籠居
享保六年十二月朔日卒五十八歳

某 長十郎 早世

正朝 大學
土佐守從五位下
寶永六年三月七日叙任
享保十四年十一月廿七日卒六十歳
法名眞容院實譽通惠玄相

忠元 式部
至孫千吉某家絕

女子四人
米津出羽守政武室
最上刑部義雅妻
井上讃岐守正晴室
一人早世

某 左京 早世

恒朝 小次郎 大學
長門守從五位下
享保十三年十二月廿一日叙任
後改土佐守
寶曆元年十月十二日配流
大和國高取
同三年八月八日赦
同五年七月廿二日死五十一歳
法名眞梁院到譽覺岸蓮遊

女子 早世

某 求馬 早世

某　靭負　早世

尚朝　內藤德次郎
寬延二年四月四日卒廿九歲

某　傳三郎　早世

女子二人
最上左京義隆妻離別
嫁鳥居權之助忠余
小笠原主膳長恒妻離別

某　鋕次郎
元文四年五月五日卒

壽朝　仙三郎
實酒井左衛門尉忠壽二男
今植村五郎八奉邦家

植村

○土佐守源忠朝は帯刀泰朝か二男なり（嫡子左京大夫泰治は病により籠居せり）万治元年閏十二月叙爵し寛文三年十二月九日父か遺領を賜ふ（上總國勝浦五千石○此家寛永二年に泰朝に賜りし御朱印與力給二千石を合て七千石餘としるされ同き十年に加恩の地四千石賜ひけれは一萬石餘を領せしなりしかるに忠朝家を繼し時九千石としるしたれは此時與力給を止られしとみへたり）八年八月二十一日御書院の番頭になり九年二月二十一日大番の頭にうつり天和二年四月二十一日地くはへ賜ふ（廩米二千俵を地に加へ賜り合せて一萬千石）元祿六年五月十二日申こふにより職をゆりおなしき九年十一月十六日としの六十七にして身まかりぬ其子左兵衞某は病によりて籠居し二男長十郎世を早うせしかは三男大學正朝あくる年の二月十日家をつき（一萬石）弟式部忠元に地をわかつ（千石）寶永六年三月七日從五位下土佐守に叙任し享保八年五月四日大番の頭になり十三年大坂の城の定番となりてのほりしかあくる十四年十一月朔日かしこにして卒すその子大學恒朝享保十三年十二月叙爵して長門守になり（後土佐守にあらたむ）父かうせし年の十二月二十七日遺領を賜り寛保三年二月大坂の城の定番となりてかの地にをもむきしか延享四年四月二十六日病によりて職とけたり寶曆元年十月十二日支族千吉某か横死の事によりて罪かうふり所領の地を沒收せられ植村出羽守家道にめしあつけらる恒朝か嗣子仙三郎壽朝に（實は酒井右衞門尉源忠壽か二男なり）あらたに廩米二千俵賜はりわつかに家をつく（植村千吉某ことし八月廿四日朝比奈萬之助かために手おひて死しけるを親族の人々うちよりふかくかくしてたゝ病をゝりしと披露しけれともはや世上かくれなかりしかは公にもそれと聞えて御使を下されて千吉か病をとわせらるゝにもとよりいつはりなれはあらそふへきやうもなくして親族三浦肥後守をはしめおほくの人々罪せらる恒朝宗家の身としてこれに同心し上を欺んとせしその罪これ輕からすとて遠流にも罪せらるへかりしかど此年大喪の御事もおはしませしにより て其罪をなため家道にあつけられたり斯て恒朝家道か所領大和國高取に幽閉せられて三とせをふるの後大赦にあひ養息仙三郎壽朝かもとにかへり寶曆五年七月廿二日五十四歲にしてうせぬ）

金森

源頼業

頼旨　萬助　初頼時
出雲守從五位下
天和三年十二月四日敍任
元文元年五月廿三日卒六十八歳
法名德龍院靜翁觀山

重詰　玄蕃
爲家人

可寬　宮内
長門守從五位下
寶永四年十二月廿二日敍任
享保十三年二月三日卒三十七歳
法名性覺院心玄義廓

可允　主税

可麗　貞丸　早世

女子九人　共早世

某　七之助
酒井隱岐守重遠養子

女子二人　共早世

頼錦　又太郎　兵部　初壹頼　壹通
若狹守從五位下
享保十四年十二月十六日敍任
後改兵部少輔
寶暦八年十二月廿五日（九月六日）
配流陸奥國盛岡
同十三年六月六日死五十七歳
法名覺樹院第山淸盈

女子
許嫁金森左京可英離別

某　駒之助
金森左京氏近養子

女子　早世

頼元　亥之助　初頼門　靱負　出雲
出雲守從五位下
延享二年閏十二月十六日叙任
寶暦八年十二月廿五日改易
明和三年四月廿五日赦
安永九年正月四日卒五十歳
法名弘寛院淇園宗陝

正辰　藏人　初頼眞
井上遠江守正敦養子

女子
許嫁閭部主膳正經史離別
爲金森左京可英養女

頼方　伊織
同頼元改易同赦

可端 千豊 六左衛門 左衛門 初錦好

金森六左衛門慶郷養子

女子

許嫁森川紀伊守俊存離別

爲小出主水有春養女

良忠 初熊藏 成イ 圓救坊 錦豊

寶暦八年同賴元改易

同十二年正月赦爲芝神明

別當金剛院觀空弟子

賴興 武九郎 靭負 初錦文

同賴元改易亦同赦

某 滿吉

同賴元改易寶暦九年十月卒

金森

○出雲守源頼旨（初は頼時）飛彈守頼業か子なり寛文十二年二月五日父の遺領をたまふ（飛驒國高山の城三萬八千石餘）延寳四年四月十一日はしめて見參し天和三年十二月四日從五位下の守に任し元祿二年四月十八日奥詰の衆となり五月十一日御近習の衆となるあくる年の四月十四日其職をゆるされ五年七月二十八日所領飛驒國を轉して出羽國上山の地にうつりおなしき十年六月十一日また美濃國郡上の城にうつる元文元年五月二十三日六十八歳にして卒嫡子長門守可寛さきたちてうせけれはその子又太郎頼錦祖父のよつきとなる頼錦これよりさき享保十四年九月二十八日はしめて見えたてまつり十二月十六日從五位下の若狹守に任し（後兵部少輔）元文九年七月十八日家をつき延享四年五月十五日御奏者の事をうけたまはる頼錦所領の租税をうる事法に過たりけれは土民とも困苦にせまりて愁訴におよひしをさま〱といひさとしけれともおさまらすついには公にきたりうつたへしかは其故を糺明せられしに領民ともを刑にをこなひしやうをはしめいしとしろの社人ともをあまたおひやらひしなとみなひかことにてありしなるに公のいきほひをからんとてその頃美濃の御料の郡代にすへられたる青木といふものをかたらひ又大橋近江守（勘定奉行なり）にもあつらへて青木かもとにいひやらせその丶ち頼錦したしくおくりし狀には宿老本多正珍かわかゆかりなれは此事も內々にあひしれるすちなりいかにも心にまかせてはからひたまはれなとかきし事とも殘りなくあらはれてことし寳暦八年九月六日（十二月二十五日）所領を召はなたれて奥の南部になかされ大膳大夫利雄にあつけられて家たへたり（同き十三年六月六日五十一歳にしてうせぬ）

喜連川　清和源氏　五千石

正二位征夷大將軍源尊氏次男
關東鎌倉公方從三位左兵衛督基氏九代
古河公方

義氏

幼名梅千代王丸　從四位下右兵衛佐　左馬頭　母北條左京大夫氏綱女
天文十丑年生　弘治元夘年十月家督　任左馬頭　京都將軍義輝之請受一字
稱義氏　弘治三年叙爵從四位右兵衛佐　天正十年十二月廿六日於古河城
卒四十二歲　法名香雲院長山善公

國朝

幼名乙若丸　無官右兵衛督　母佐野大炊介政綱女　室義氏女名氏女初義氏卒無嗣子
（嫡子梅千代王丸早世）舊臣等以氏女爲主古河城又移鵠巢後受豐臣關白之命以國朝
娶氏女念義氏之家元和六年正月六日氏女卒古河城法名徳源院慈峯晃公○家譜氏女
チ國朝之上ニ列ス今改テ爰ニ出ス

實小弓御所頼純右兵衛佐義明子尙家の支流長男○元龜三年生推考○天正十八寅年九月追日義氏の家を繼當主氏女を
妻とす古河喜連川兩所に居○文祿丑二年上洛鎮西ニ趣朝鮮陣二月朔日卒於安藝國年廿二

頼氏

幼名龍王丸　無官左馬頭　母佐野大炊介政綱女　室義氏女

實小弓御所頼純二男○天正八辰年生○文祿二巳年家譜ニ三年六月豐臣關白之仰を以家を繼國朝之室氏女を妻
とす○慶長六丑年月日下野國芳賀郡之内高根澤村幷七井村にて高千石被下去年九月關ヶ原御歸陣之節使者差出ス爲御祝儀被下○
寛永七午年六月十二日卒喜連川年五十一

義親　無官　河內守　幼名梅千代王丸母義氏女　室榊原式部大輔忠政養女

賴氏嫡子慶長四亥年生○寬永四卯年七月三日於古河卒廿九歲五イ

尊信　無官　幼名龍千代丸　右兵衞督　母榊原式部大輔忠政養女

實義親嫡子元和五未年生推考○寬永七午年爲嫡孫承祖遺領相續譜○慶安元子年依病隱居○承應元未年左馬頭賴氏姉島女江戶市谷平安寺を再建號月桂院喜連川領野州鹽谷郡大樹村之內百名寄附今之月桂寺是なり譜○承應二巳年三月十七日卒す三十五歲

昭氏　無官　幼名梅千代　左兵衞督　左馬頭　母家女

尊信嫡子寬永十九年生推考○慶安元子年家督幼稚之間依鈞命榊原式部大輔忠次後見譜○四年九月廿一日初て御目見○寬永十一年紺屋役錢之儀大屋五郎右衞門申懸候に付從先規諸役御免之譯家臣御老中方連印にて各役錢御免除之趣奧書を以被仰出譜○寶永五子年武州相州駿州砂降之節高役金被仰付候處先規諸役御免之段申上先規之通御免除被仰出譜○正德二辰年從御老中古書物等寫可差出旨に付東照宮之御書之外舊書寫差出○正德三巳年五月十二日卒七十二歲譜

氏信
幼名藤千代　無官　右衛門督
母家女同昭氏

尊信次男慶安三寅年生推考○寛永八申年依昭氏病氣爲名代初て參府年頭御禮申上譜○九年爲昭氏養子譜○寛文十戌年五月十四日卒二十一歲

十三代 氏春
幼名戌王丸　無官　右兵衛督
母織田上野介信政女

實宮原主膳正義辰次男寛文十四年生推考同年七月二十三日爲養子○天和二戌年七月二十八日初て御目見○正德四年正月十九日遺領相續○正德五年於日光山　東照宮百回御忌日光道中步傳馬先規之通御免除領內より不差出譜○從先規年始御禮之節代々大廣間御中段二疊目にて御禮御太刀目錄御大老酒井雅樂頭披露之其後昭氏病氣に付弟氏信爲名代寛文八申年參府御禮申上候處其節名代之儀に付大廣間御下段中央にて御禮申上御太刀目錄は御奏者番披露其後正德五子年氏春家督後始て御目見之節先規之席にて御目見え申上度旨相願候處中絕之事故難相叶旨被仰出○登城之節從先規狹箱對御玄關前迄爲持參候處享保三戌年可差控旨御沙汰有之其以後中御門之外へ相殘譜○享保六丑年六月二十九日卒五十六歲

十四代 茂氏
幼名梅千代　無官　左兵衛督　致仕後號禿翁
母家女

氏春嫡子元祿十三辰年生推考○享保二酉年正月十五日初て御目見○享保六丑年閏七月二十五日遺領相續○享保十二未年義氏之弓矢御內覽被成度段御沙汰有之茂氏卷藁前之弓矢的前之弓矢肩入弓差出卷藁弓七分 矢束二尺九寸 的弓一寸 矢束二尺一寸 重さ三十一度八分 肩入弓一寸五分 鏃九尺 矢重サ六十目 此節祖父昭氏弓刀且鏃目方等御守に付書目差出昭氏弓力 一寸二釐 鏃目方八十目
享保十九寅年古書物寫可差出旨に付先年正德二辰年差出所々來翰之寫差出○寶曆七丑年十二月二十五日隱居改禿翁○明和四亥年五月十五日卒六十八歲

十五代
氏連
幼名戌王丸 無官 右兵衞督
母家女

茂氏嫡子元文四未年生推考○寶曆五亥年十一月朔日初て御目見○寶曆七丑年十一月二十五日家督○寶曆十一巳年十二月十七日卒二十七歲

十六代
惠氏
幼名金王丸 房之助 無官 在兵衞督 致仕後大藏大輔
母家女

實加藤左近將監泰衡三男○寶曆十一巳年爲養子○寶曆十二午年二月二十三日遺領相續○明和二酉年於日光 東照宮百五十回御忌御法會之節從領內步傳馬先規之通御免除○明和五子年十二月朔日初て御目見○安永五申年日光御社參之節步傳馬先規之通不出譜○寬政元酉年隱居改大藏大輔

十七代
彭氏
幼名龜若丸　無官　右兵衛督　左兵衛督
母家女

惠氏嫡子明和八卯年生推考○天明七未年十二月十五日初て御目見○寛政元酉年十一月十日家督八代前右兵衛督尊信代正保四亥年家來騷動仕慶安元子年御評定所御裁許にて家老一色刑部伊賀金右衛門柴田久右衛門右三人大島へ遠島二階堂主殿助奥州白川榊原家へ御預相木與右衛門攝州尼ヶ崎青山家へ御預一色妻子は泉州岸和田岡部家へ御預伊賀妻子は尼崎青山家へ御預柴田妻子は越後村松家へ御預右兵衛督尊信隱居被仰付嫡子梅千代七歲にて家督幼年に候間親類榊原式部大輔忠政え後見被仰付之由所替被仰付候儀は無御座候由申傳へ候へ共騷動之始末は年久鋪儀に付舊記共蟲食に相成巨細相分不申候

右市ヶ谷月桂寺より問合之節喜連川家來より文書なり月桂寺申傳には尊信亂心せしを家老ともをしかくし通例の病氣のよし申て久しく參勤なく尊信近習の士高某梶原某聊の咎ありて追放しけれは此兩人公儀へ申出けるゆへ御目付を遣はされ亂心をかくせしにより遠流に處せられしといふ

續撰系圖

家臣等不正の事ありて一色刑部伊賀金右衛門柴田久右衛門大島になかされ二階堂主殿助を本多能登守に相木與右衛門を青山大膳亮にめし預けられ尊信も請はさるに致仕を命せられ尊信か狂氣せしを家臣等をしかくして年を經しに追放申されし家士か愁訴せるむねありて御目付花房勘左衛門三宅左兵衛を遣されて見せしめられ事あらはるによつてなり

喜連川（此系圖は原本には義氏の上欄に記せり）

義家 ―― 義國　從五位陸奥守　民部大輔

義國 ―― 義重　新田大炊介　母信濃守有房女

義國 ―― 義康　從五位下陸奥守　母同上

義兼　從四位下左馬頭　母熱田大宮司秀範女　正治元年二月八日卒　法名義稱

義氏　正四位下左馬頭　母北條時政女　法名義正

義兼の子 ―― 義氏

義氏 ―― 泰氏　正五位下宮内少輔　母北條泰時女　文永廿五年十月卒　法名稱阿

泰氏 ―― 家時　從五位下式部大輔　母上杉藏人重房女　法名救國寺義忍

義邦　藏人判官代

泰氏 ―― 賴氏　從五位下左馬介　三河守　法名義念

貞氏　從五位下讃岐守　母北條時茂女　元弘元年九月廿日卒五十歲　法名淨明寺義觀

高義　左馬頭　早世

尊氏　征夷大將軍　母從二位淸子上杉修理亮賴重女

尊氏の子 ―― 竹若丸

尊氏の子 ―― 義詮

尊氏の子 ―― 基氏　從三位佐兵衞督　文和六年四月廿六日卒廿八歲　法名瑞泉寺道明

氏滿　左兵衛督　應永五年二月四日卒四十二歲　法名永安寺

滿兼　左馬頭　左兵衛督　應永廿六年七月十六日卒三十二歲　法名晴光道院道安泰岳

持氏　左兵衛督　應永廿三年十二月依上杉氏憲入道謀反奔駿州大下林山二十三年受將軍義持命討上杉還于鎌倉　永享十年十月隱遁十一年十二月十日爲上杉安房守憲實軍敗於永安寺自害四十二歲　法名長春院道純陽山

義久　賢王丸　永享十一年於報國寺自害

春王丸

安王丸　永享十一年逃到結城七郎光久舘上杉憲實追討之嘉吉元年四月十六日捕二子送京都依將軍義教命於濃州垂井金蓮寺被誅

成氏　永壽王丸　左馬頭從四位下　永享十一年逃信濃上杉家臣長尾左衛門入道昌賢達京都爲鎌倉公方享德三年十二月廿七日於鎌倉西御堂誅上杉右京亮憲忠上杉之族於蜂起成氏入古河明曆七年九月三十日卒六十四歲　法名乾享院道昌久山

政武　左馬頭從四位下　享祿四年七月十八日卒　法名其隣院道長吉山

高基　左馬頭從四位下　法名千光

義明　小弓御所　天文七年二月七日於下總國鴻臺與北條氏綱合戰討死

義賴　義明同時戰死

- 成潤 大御堂
- 尊術 雪下
- 守實
- 頼純 慶長六年五月四日於喜連川卒 法名龍光院道機全山

- 晴氏 左兵衛督従五位下 永祿三年五月廿七日於關宿島卒 法名永仙院道流系山
  - 義氏

宮原家系

（此系圖は原本には氏春の上欄に記せり）

- 高基 従四位下左馬頭 法名千光院
  - 晴直 初名憲廣爲管領居上總國宮原 法名春敲院殿
    - 義勝 僧正 祥雲院
  - 晴氏 従四位下左馬頭 法名永仙院
    - 義照 稱宮原 慶長七年正月卒 法名龍寶院
    - 義久 宮原勘五郎 寛永七年十二月卒
      - 晴克 宮原右京進 初義知 母武田勝頼女

松前　清和源氏　無高　松前蝦夷一圓

新羅三郎義光十八代
若狹守季廣嫡男
信廣（松前始祖）ヨリ五代

慶廣

幼名天才丸　新三郎　從五位下民部大輔　志摩守　伊豆守　法名海翁永泉
母河野彌次郎右衛門越智季通女　室村上三河守季儀女

天文十七申年生○文祿二巳年正月二日於肥前國名護屋改志摩守譜○慶長元年御目見○慶長四（十二イ）亥年十一月七日於大城西丸御目見申時改蠣崎號松前且境地圖及家譜等入上覽譜○慶長五子年三月十五日御暇被下時服御羽織卷物被下譜○同年夏於境内下地勢新築城館同十一年秋舉其功名其地號福山○慶長八卯年參府正（十一イ）月十八日百人扶持被下○慶長九辰年正月二十七日國政之御墨印御傳馬御判被下譜○十一月二（三イ）日御脇差兼光一腰御時服五被下譜○三月十二日御參内之供奉勤○四月十日御鷹御傳馬御判被下○十八日百人扶持被下○五月十九日依家名蒙難有上意○二十八日新叙爵任伊豆守○六月十一日於伏見被命御參内之供奉譜○二十八日御暇○慶長十四酉年冬參府十一月十九日於江府百人扶持被下譜○慶長十五戌年正月十八日於駿府御目見譜○十五日國產鷹四居献上譜○二月十六日於江府　台德院樣御自製之御茶湯之節列座譜○同日御暇被下時服五白銀千兩被下譜○五月歸國後依命海豹皮獻上譜○同年三月朔日花山院忠長卿松前左遷同十九年五月廿八日勅許歸帆赴洛○九月二日隼人正忠廣賜新地千石○元和元卯年三月三日發本藩大坂御陣營着到五月七日捕首一級○八月四日於二條御城賜大宿之直衣二領御羽織○十一月歸國後獵虎皮献上長七尺譜○元和二辰年十月十二日卒六十九歲

六代
盛廣　初守廣　幼名松房丸　甚五郎　從五位下若狹守　法名月浦宗圓
母村上三河季儀女　室家臣下國直季女

慶廣嫡子元龜三未年生○慶長元申年冬初て御目見○慶長二酉年二月二十八日御暇虎皮五枚黄金五拾兩被下○慶長六丑年春參府五月叙爵任若狹守（譜には十三年）○同年御上洛之節供奉勤譜○慶長八卯年同斷○慶長十巳年同斷　台德院様之供奉勤譜○慶長十二申年正月二十二日卒三十（譜ハ八）七歳

七代
公廣　初茂廣　武廣　又茂廣　幼名竹松丸　甚五郎　從五位下若狹守　法名（譜ニハ溪臺）大麟宗憲　母家臣下國直季女　室大炊御門大納言資賢卿女

盛廣嫡子慶長三戌年生○慶長十八丑年十一月九月初而御目見○十五日初而拜謁東照宮○慶長十八（譜には十九年二月廿六日○稱號を松前と改む寛系）年叙爵○元和三巳年冬遺領相續○元和六申年國產の砂金百兩獻上に付右砂金且境內之金山とも被下○元和八戌年五月御直印之御內書被下（譜 依御鷹獻上也）○寛永二丑年秋白雄鷹獻上譜○寛永七午年十一月獻純白之黄鷹譜○寛永九申年三月爲御遺物白銀三千兩被下○寛永十一戌年三月朔日前年献上之黄鷹依大鶴捉而御褒詞譜○七月御上洛之供奉○寛永十四丑年三月二十八日福山居舘炎燒傳來之家譜什器悉燒失○寛永十七辰年六月十三日蒼海水溢溺死者凡七百余人破船一百餘艘○寛永十八巳年七月八日卒四十四歳

八代
氏廣　辨之助　法名直心宗性
母大炊御門大納言資賢卿女　室家臣蠣崎主殿友廣女

公廣嫡子元和八戌年生〇寛永十五寅年三月朔日初而御目見〇寛永十八巳年十二月十五日遺領相續家臣壹人御目見〇寛永十九年春初而御暇〇寛永二十未年春西蝦夷叛逆家臣鎭之譜〇七月十六日家譜一卷差出譜〇正保元申年封國圖差出譜〇正保四年弟八左衞門恭廣廩米千俵〇慶安元子年八月二十五日於江府卒二十七歲譜

（譜〇寛系には十六年十一月十三日）

九代 高廣

幼名千勝　〇法名漢臣利永
母家臣蠣崎主殿友廣女　室家臣蠣崎右衞門利廣女

氏廣嫡子寛永二十未年生〇慶安元丑年六月二十日初而御目見且遺領相續家臣貳人御目見〇九月御暇〇承應二巳年春東部蝦夷叛逆家臣鎭之譜〇寛文五巳年七月五日卒二十三歲譜

十代 矩廣

初吉廣　幼名竹松丸　兵庫　從五位下志摩守　法名機三曹元
母家臣蠣崎右衞門利慶女

高廣嫡子萬治二亥年生〇寛文五巳年十一月十五日初而御目見且遺領相續家臣二人御目見此時黃鷹二連鷲尾二十尻獵虎皮三枚昆布三箱献上〇寛文六午年三月二十八日初而御暇〇秋飢饉發倉賑貧民〇寛文九酉年夏東部蝦夷叛矩廣若年松前八左衞門泰廣奉　台命參松前共に討夷賊平之〇延寶三寅年四月二十五日參府八月二十八日御暇自此年二本道具止〇天和二戌年三月朔日同二十年御傳馬之御判被下譜〇貞享元酉年十二月二十五日叙爵任志摩守〇元祿九子年五月十二日朝鮮國人西蝦夷漂着七月松前に來る官人及海夫廿八人八月賜御傳馬送江府下谷宗次郎賜邸〇元祿十五午年飢饉從秋冬迄爲粥

賑餓者凡及二萬八譜〇享保四亥年正月十五日御朱印被下且萬石以上之格被仰出譜〇享保五子年十二月二十一日卒六十二歳譜

富廣
橘太郎
母家女

矩廣嫡子元祿十丑年生推考〇正德五未年十一月朔日初而御目見譜〇享保元申年正月十三日於江府卒二十一歳

十一代
邦廣
初廣國　幼名傳吉　從五位下志摩守　法名傑巖常英
母杉原四郎兵衛忠長女

實三郎兵衛本廣六男寶永二酉年於江戸生〇享保元申年爲養子〇二月十五日初而御目見依先例父子とも乘輿〇享保六丑年七月十二日遺領相續〇二十八日右御禮家臣二人御目見〇十月十五日叙爵任志摩守〇同日初而御暇〇元文五申年十一月晦日月次御禮萬石以上嫡子之上え罷出嫡子資廣は萬石以上之嫡子之内え可出旨可仰出譜〇寬保元酉年七月十九日河海水溢溺死のもの千四百六十七人家藏破壞の者七百九十一戸破船一千五百二十一艘〇寬保三亥年閏四月八日卒三十九歳

十二代
資廣
初里廣　完廣　幼名榮吉　從五位下若狹守　法名瑞嶽英麟
母家女　室八條前中納言隆英卿女

邦廣嫡子享保十一午年生〇元文五申年十一月十五日初而御目見〇二十一日叙爵任若狹守〇寬保三

亥年八月十六日遺領相續〇九月朔日家臣二人御目見〇十月朔日初而御暇〇延享三寅年八月二十四日大風暴雨海口死者六十八民家破壞者五十戶漂流家二十五戶破船三百六十艘小舟尤數多譜〇寬延元辰年九月三日大風大雨弱死十八破家二十二戶破船三百八十六艘譜〇寶曆五亥年秋飢饉近年不止出倉中之米穀山海之產物救國民譜〇明和二酉年三月十九日卒四十歲譜

十三代
道廣　初章廣幸廣　幼名源助　外記　從五位下志摩守
母八條前中納言隆英卿女

資廣嫡子寶曆四戌年生〇明和二酉年十月五日參府十一遺領相續〇十五日初而御目見家臣二人御目見〇十二月十五日叙爵任志摩守〇同日初而御暇〇天明三卯年秋飢饉施倉粟及河海腊魚救國民〇寬政元酉年五月東部久奈支利蝦夷騷擾遣家臣靜謐〇九月依右靜謐難有御奉書被下之

明治三十八年十二月二十日印刷
明治三十八年十二月廿五日發行

非賣品

編輯兼校訂者　今泉定介
東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地

發行者　吉川半七
東京市京橋區新榮町五丁目三番地

印刷者　本間季男
東京市京橋區新榮町五丁目三番地

印刷所　東京活版株式會社